

四国縦貫自動車道建設に伴う
埋蔵文化財発掘調査報告
26

西原遺跡
第1分冊

2004

徳島県埋蔵文化財研究会

四国縦貫自動車道建設に伴う
埋蔵文化財発掘調査報告 26

西原遺跡
第1分冊

二〇〇四

徳島県埋蔵文化財研究会

四国縦貫自動車道建設に伴う
埋蔵文化財発掘調査報告
26

西原遺跡
第1分冊

2004

徳島県教育委員会
財団法人 徳島県埋蔵文化財センター
日本道路公団



調査地 遠景（北から）



5-A区 竪穴住居群 遠景（南から）



遺構内出土の碧玉製管玉と翡翠製大珠

序 文

本書は四国縦貫自動車道（美馬～井川間）の建設に伴い、平成8年度と平成9年度に調査を実施した三好郡三好町に所在する西原遺跡の発掘調査成果をまとめたものであります。

当遺跡は吉野川中流域北岸、讃岐山脈南麓に位置しており、縄文時代から江戸時代にかけての遺構・遺物が確認され、弥生時代後期後半を主体とする集落遺跡であることが判明しました。今から約20年ほど前の昭和56年度に、吉野川北岸農業水利事業の幹線水路埋設工事に伴い、足代東原遺跡の調査が実施されました。その結果、弥生時代後期後半～庄内式併行（古相）に築かれた集石墓群が確認され、南北の広がりには不明ですが東西約180mの範囲に墓域を形成していたと推定されます。

西原遺跡は、この足代東原遺跡から約500m程離れた南西に所在し、この墓群を形成した集団の集落と考えられます。本書が調査研究の一資料として活用され、埋蔵文化財保護の一助となれば幸いです。

なお、発掘調査の実施および報告書作成に当たり、日本道路公団をはじめとして関係諸機関並びに地元の皆様に多大の御援助、御協力を頂き、また研究者の方からは重要な御教示を賜りました。ここに深く感謝の意を表すと共に、今後とも御支援賜りますようお願い申し上げます。

平成16年9月

財団法人 徳島県埋蔵文化財センター

理事長 松村 通治

例 言

1. 本書は四国縦貫自動車道建設に伴い、平成8年（1996）度から平成9年（1997）度にかけて調査を実施した西原遺跡（三好郡三好町所在）の発掘調査報告書である。

2. 発掘調査は日本道路公団四国支社から徳島県が委託を受け、徳島県からの委託により、財団法人徳島県埋蔵文化財センターが実施した。

3. 発掘調査及び報告書作成についての実施期間は次の通りである。

- | | | | |
|----------|------|-----------------------|--------|
| ・発掘調査期間 | 一次調査 | 平成7年2月20日～平成7年3月17日 | （試掘調査） |
| | 二次調査 | 平成7年7月25日～平成7年8月4日 | （試掘調査） |
| | 三次調査 | 平成8年4月2日～平成9年3月31日 | （本調査） |
| | 四次調査 | 平成9年4月3日～平成9年6月30日 | （本調査） |
| ・報告書作成期間 | | 平成11年11月1日～平成15年3月31日 | |

4. 遺構の表示は徳島県埋蔵文化財センターが定める発掘調査基準による記号を用いた。

<凡例>

SA	掘立柱建物	SB	竪穴住居	SK	土抗	SO	窯
SP	柱穴	SQ	灰原	ST	墓	SX	不明遺構

5. 方位は国土座標第Ⅳ座標系の北、高さは東京湾標準潮位（T.P.）を表す。

6. 本書で用いた土層及び土器の色調は小山正忠・竹原秀雄『新版標準土色帖』1996年度版によった。

7. 遺物番号は全て通し番号とし、本文・挿図・表・図版と一致する。

8. 第3図の地形図は建設省国土地理院発行の1/50,000の地形図「池田」を転載使用したものである。

9. 調査に当たっては、次の機関の指導・協力を得た。

徳島県教育委員会	日本道路公団四国支社	同池田工事事務所	同協工事事務所
徳島県土木部縦貫道推進局	同中央事務所	三好町	

10. 本報告書を作成するにあたり、当センター職員ならびに次の方々に御教示を頂いた。

梅木 謙一	大嶋 和則	久家 隆芳	坂本 憲昭	柴田 昌兎	白石 聡
中村 豊	信里 芳紀	乗松 真也	水口あをい	水本 完兎	森下 英治
山元 敏裕					

（50音順・敬称略）

11. 本報告所の土器実測図で、断面白抜きは縄文土器・弥生土器・土師質土器、網掛けは瓦器、黒塗りは須恵器・陶器・磁器を表す。

12. 土器の掲載サイズは、基本的に1/3である。大型の場合、随時大きさを1/4に変え、土錘などの土製品および鉄器は2/3で掲載している。石器は石鏃・石錐・楔形石器などが2/3、その他の石器は大きさによって1/2～1/8で掲載している。

遺構は基本的に遺物出土状況図は1/20(遺構が大きいものは1/40)、それ以外の土坑は1/20・1/40で、竪穴住居・掘立柱建物は1/60もしくは1/80、溝は1/50で掲載している。

15. 断面図における遺物のドットは、▲は土器を、△は石を表す。

16. 掘立柱建物の計測部位に関しては、次のように行った。

- ・ 相対的に長さの短い方を梁間、長い方を桁行とする。
- ・ 柱間寸法は柱穴掘り方の中心間の距離を計測し、最大値・最小値を表した。
- ・ 主軸方向は、桁行の方向を主軸とする。計測に関しては両端の梁間の柱間寸法をそれぞれ二等分し、その点を通る直線と真北との角度を計測した。

17. 本書の執筆はI・1を菅原康夫が、その他を大北和美が担当し、全体の編集は大北が行った。写真は遺物を山本和弘が、遺構はそれぞれの調査担当者が撮影した。

本文目次

I	調査の経緯	
1	調査に至る経緯	1
2	調査の経過	
(1)	調査の経過	6
(2)	発掘調査の方法	6
(3)	調査日誌抄	8
II	遺跡の立地と環境	
1	地理的環境	10
2	歴史的環境	11
III	調査成果	
1	基本層序	16
2	遺構と遺物	
(1)	縄文時代・弥生時代	20
	掘立柱建物	
	竪穴住居	
	土坑	
	溝	
	柱穴	
	不明遺構	
(2)	鎌倉・室町時代	213
	掘立柱建物	
	土坑	
	炭窯	
	溝	
	柱穴	
	水田状遺構	
	不明遺構	
(3)	江戸時代	230
	土坑	
	柱穴	
(4)	包含層出土遺物	248
IV	まとめ	289

挿 図 目 次

第1図	西原遺跡位置図	5	第37図	SB1005遺構内遺構出土遺物	56
第2図	調査区位置図	7	第38図	SB1006出土遺物(1)	57
第3図	グリッド配置図	8	第39図	SB1006出土遺物(2)	59
第4図	西原遺跡周辺の遺跡	12	第40図	SB1007・1008遺構図(1)	60
第5図	基本土層図(1)	17	第41図	SB1007・1008遺構図(2)	61
第6図	基本土層図(2)	18	第42図	SB1007・1008EP遺構図	62
第7図	基本土層図(3)	19	第43図	SB1007・1008EH遺構図	63
第8図	遺構配置図(1)	21・22	第44図	SB1007EK2遺構図・出土遺物	64
第9図	遺構配置図(2)	23・24	第45図	SB1007出土遺物	66
第10図	遺構配置図(3)	25・26	第46図	SB1008出土遺物(1)	67
第11図	SA1011遺構図	27	第47図	SB1008出土遺物(2)	68
第12図	SA1012遺構図	28	第48図	SB1009遺構図(1)	69
第13図	SA1013遺構図	28	第49図	SB1009遺構図(2)	70
第14図	SB1001遺構図(1)	29	第50図	SB1009遺構内遺構図	71
第15図	SB1001遺構図(2)	30	第51図	SB1009出土遺物(1)	72
第16図	SB1001遺構内遺構図	31	第52図	SB1009出土遺物(2)	73
第17図	SB1001出土遺物	32	第53図	SB1009出土遺物(3)	74
第18図	SB1002遺構図(1)	33	第54図	SB1009出土遺物(4)	75
第19図	SB1002遺構図(2)	34	第55図	SB1010・1012遺構図(1)	77
第20図	SB1002出土遺物	35	第56図	SB1010・1012遺構図(2)	78
第21図	SB1003遺構図	37	第57図	SB1010a遺構内遺構図	79
第22図	SB1003・SB1003EH遺構図	38	第58図	SB1010b・SB1012遺構内遺構図	80
第23図	SB1003出土遺物	40	第59図	SB1010a出土遺物(1)	81
第24図	SB1004遺構図(1)	41	第60図	SB1010a出土遺物(2)	82
第25図	SB1004遺構図(2)	42	第61図	SB1010a出土遺物(3)	83
第26図	SB1004EK2、EH遺構図・出土遺物	43	第62図	SB1010a出土遺物(4)	84
第27図	SB1004出土遺物(1)	45	第63図	SB1010a出土遺物(5)	85
第28図	SB1004出土遺物(2)	46	第64図	SB1010b出土遺物(1)	86
第29図	SB1004出土遺物(3)	47	第65図	SB1010b出土遺物(2)	87
第30図	SB1004出土遺物(4)	48	第66図	SB1012出土遺物	88
第31図	SB1004出土遺物(5)	49	第67図	SB1011遺構図(1)	90
第32図	SB1004出土遺物(6)	50	第68図	SB1011遺構内遺構図	91
第33図	SB1005・1006遺構図(1)	52	第69図	SB1011EH遺構図	92
第34図	SB1005・1006遺構図(2)	53	第70図	SB1011出土遺物	93
第35図	SB1005・1006遺構内遺構図	54	第71図	SB1013遺構図(1)	94
第36図	SB1005出土遺物	55	第72図	SB1013遺構図(2)	95

第73図	SB1013遺構内遺構図	97	第111図	SK1128遺構図・出土遺物	142
第74図	SB1013出土遺物 (1)	98	第112図	SK遺構図・出土遺物 (7)	144
第75図	SB1013出土遺物 (2)	99	第113図	SK遺構図・出土遺物 (8)	145
第76図	SB1013出土遺物 (3)	100	第114図	SK遺構図・出土遺物 (9)	146
第77図	SB1014遺構図	102	第115図	SK遺構図・出土遺物 (10)	148
第78図	SB1014出土遺物 (1)	103	第116図	SK遺構図・出土遺物 (11)	149
第79図	SB1014出土遺物 (2)	104	第117図	SK遺構図・出土遺物 (12)	150
第80図	SB1015遺構図 (1)	106	第118図	SK1210遺構図・出土遺物	152
第81図	SB1015遺構図 (2)	107	第119図	SK1210出土遺物	153
第82図	SB1015遺構内遺構図	108	第120図	SK遺構図・出土遺物 (13)	155
第83図	SB1015出土遺物 (1)	109	第121図	SK遺構図・出土遺物 (14)	156
第84図	SB1015出土遺物 (2)	110	第122図	SK1237出土遺物	157
第85図	SB1015出土遺物 (3)	111	第123図	SK遺構図・出土遺物 (15)	159
第86図	SB1015出土遺物 (4)	112	第124図	SK遺構図・出土遺物 (16)	161
第87図	SB1016遺構図	114	第125図	SK遺構図・出土遺物 (17)	162
第88図	SD1010遺構図	116	第126図	SK遺構図・出土遺物 (18)	163
第89図	SD1013遺構図・出土遺物	117	第127図	SK1253遺構図・出土遺物	165
第90図	SD1014・1015遺構図・出土遺物	118	第128図	SK1253出土遺物	166
第91図	SD1016遺構図 (1)	119・120	第129図	SK遺構図・出土遺物 (19)	167
第92図	SD1016出土遺物状況図 (1)	121	第130図	SK遺構図・出土遺物 (20)	169
第93図	SD1016出土遺物状況図 (2)	122	第131図	SK1265遺構図・出土遺物	170
第94図	SD1016出土遺物 (1)	123	第132図	SK1265出土遺物	171
第95図	SD1016出土遺物 (2)	124	第133図	SK遺構図・出土遺物 (21)	173
第96図	SD1016出土遺物 (3)	125	第134図	SK1274遺構図・出土遺物	174
第97図	SD1016出土遺物 (4)	126	第135図	SK1276遺構図・出土遺物	176
第98図	SD1016出土遺物 (5)	127	第136図	SK1281遺構図・出土遺物	177
第99図	SK遺構図・出土遺物 (1)	129	第137図	SK1283遺構図・出土遺物	178
第100図	SK1101遺構図	130	第138図	SK1286遺構図・出土遺物	179
第101図	SK1101出土遺物 (1)	131	第139図	SK1286出土遺物	180
第102図	SK1101出土遺物 (2)	132	第140図	SP遺構図・出土遺物 (1)	182
第103図	SK1101出土遺物 (3)	133	第141図	SP遺構図・出土遺物 (2)	184
第104図	SK1101出土遺物 (4)	134	第142図	SP遺構図・出土遺物 (3)	186
第105図	SK遺構図・出土遺物 (2)	135	第143図	SP遺構図・出土遺物 (4)	188
第106図	SK遺構図・出土遺物 (3)	136	第144図	SP遺構図・出土遺物 (5)	190
第107図	SK1088遺構図・出土遺物	137	第145図	SP遺構図・出土遺物 (6)	192
第108図	SK遺構図・出土遺物 (4)	138	第146図	SP遺構図・出土遺物 (7)	194
第109図	SK遺構図・出土遺物 (5)	139	第147図	SP遺構図・出土遺物 (8)	195
第110図	SK遺構図・出土遺物 (6)	141	第148図	SX1001遺構図	196

第149図	SX1002遺構図・出土遺物	197	第187図	SO1007遺構図	239
第150図	SX1002出土遺物	198	第188図	SP遺構図・出土遺物(12)	241
第151図	SX1003遺構図	199	第189図	SP1059遺構図・出土遺物	242
第152図	SX1003出土遺物(1)	200	第190図	SX1007遺構図	244・245
第153図	SX1003出土遺物(2)	201	第191図	SX1007出土遺物(1)	246
第154図	SX1003出土遺物(3)	202	第192図	SX1007出土遺物(2)	247
第155図	SX1004遺構図(1)	203	第193図	包含層出土土器(1)	249
第156図	SX1004遺構図(2)	204	第194図	包含層出土土器(2)	250
第157図	SX1004出土遺物(1)	205	第195図	包含層出土土器(3)	251
第158図	SX1004出土遺物(2)	206	第196図	包含層出土土器(4)	252
第159図	SX1004出土遺物(3)	207	第197図	包含層出土土器(5)	253
第160図	SX1004出土遺物(4)	208	第198図	包含層出土土器(6)	254
第161図	SX1005遺構図	209	第199図	包含層出土土器(7)	255
第162図	SX1005出土遺物	210	第200図	包含層出土土器(8)	256
第163図	SX1006遺構図・出土遺物	211	第201図	包含層出土土器(9)	257
第164図	SA1001遺構図・出土遺物	214	第202図	包含層出土土器(10)	258
第165図	SA1002遺構図	214	第203図	包含層出土土器(11)	260
第166図	SA1003遺構図	215	第204図	包含層出土土器(12)	261
第167図	SA1004遺構図	215	第205図	包含層出土土器(13)	262
第168図	SA1005遺構図	216	第206図	包含層出土土器(14)	263
第169図	SA1006遺構図	216	第207図	包含層出土土器(15)	265
第170図	SA1007遺構図	217	第208図	包含層出土土器(16)	266
第171図	SA1009遺構図	218	第209図	側溝・機械掘削出土土器	266
第172図	SA1010遺構図	218	第210図	包含層出土縄文土器	267
第173図	SK遺構図・出土遺物(22)	220	第211図	攪乱出土遺物	267
第174図	SK1218遺構図・出土遺物	221	第212図	包含層出土石器(1)	269
第175図	SP遺構図・出土遺物(9)	222	第213図	包含層出土石器(2)	270
第176図	SP遺構図・出土遺物(10)	224	第214図	包含層出土石器(3)	271
第177図	SP遺構図・出土遺物(11)	226	第215図	包含層出土石器(4)	272
第178図	SU1001遺構図・出土遺物	227	第216図	包含層出土石器(5)	273
第179図	SU1001出土遺物	228	第217図	包含層出土石器(6)	274
第180図	SD1001遺構図	230	第218図	包含層出土石器(7)	275
第181図	SK遺構図・出土遺物(23)	231	第219図	包含層出土石器(8)	276
第182図	SO1001・1002・SQ1001遺構図	233	第220図	包含層出土石器(9)	277
第183図	SO1003遺構図	235	第221図	包含層出土石器(10)	278
第184図	SQ1003~1005遺構図	235	第222図	包含層出土石器(11)	279
第185図	SO1004・SQ1006遺構図	236	第223図	包含層出土石器(12)	280
第186図	SQ1008・1009遺構図	238	第224図	包含層出土石器(13)	281

第225図	包含層出土石器 (14)	282
第226図	包含層出土石器 (15)	283
第227図	包含層出土石器 (16)	284
第228図	包含層出土石器 (17)	285

第229図	包含層出土石器 (18)	286
第230図	包含層出土石器 (19)	287
第231図	包含層出土鉄製品	288
第232図	石器部位模式図	298

表 目 次

第1表	四国縦貫自動車道 (美馬～川之江) 埋蔵文化財調査地一覧表	4
第2表	竪穴住居一覧表	291
第3表	検出遺構一覧表 掘立柱建物	299
第4表	検出遺構一覧表 掘立柱建物柱穴	299
第5表	検出遺構一覧表 竪穴住居	301
第6表	検出遺構一覧表 竪穴住居内土坑・炉	302
第7表	検出遺構一覧表 竪穴住居内柱穴	303
第8表	検出遺構一覧表 溝	311
第9表	検出遺構一覧表 土坑	311
第10表	検出遺構一覧表 窯・灰原	316
第11表	検出遺構一覧表 集石遺構	316
第12表	検出遺構一覧表 柱穴	316
第13表	検出遺構一覧表 不明遺構	350
第14表	検出遺構一覧表 不明遺構内柱穴	350
第15表	検出遺構一覧表 不明遺構内土坑	350
第16表	出土遺物観察表 (竪穴住居)	351
第17表	出土遺物観察表 (竪穴住居以外)	369

第18表	出土遺物観察表 (中近世)	384
第19表	出土遺物観察表 (土器包含層)	386
第20表	出土遺物観察表 (石鏃)	410
第21表	出土遺物観察表 (楔形石器)	413
第22表	出土遺物観察表 (削器)	414
第23表	出土遺物観察表 (石錘・石鋏)	415
第24表	出土遺物観察表 (石核)	415
第25表	出土遺物観察表 (石剣)	415
第26表	出土遺物観察表 (石錐)	416
第27表	出土遺物観察表 (石庖丁)	416
第28表	出土遺物観察表 (剥片)	418
第29表	出土遺物観察表 (石斧)	419
第30表	出土遺物観察表 (砥石)	419
第31表	出土遺物観察表 (敲石)	420
第32表	出土遺物観察表 (台石)	421
第33表	出土遺物観察表 (磨石)	422
第34表	出土遺物観察表 (玉類)	423
第35表	出土遺物観察表 (鉄・銅製品)	423

図 版 目 次

巻頭図版1	(1)調査地遠景 (北より) (2)5-A区 竪穴住居群遠景 (南から)	
巻頭図版2	遺構内出土の碧玉製管玉と翡翠製大珠	
図版1	(1)調査前風景 (2)1区・2区 完掘状況 (東から)	424
図版2	(1)3区 完掘状況 (北から) (2)4-A区 完掘状況 (北から)	425
図版3	(1)4-B区 完掘状況 (北から)	

	(2)5-A区 完掘状況 (西から)	426
図版4	(1)5-B区 遺構検出状況 (北から) (2)6-A区 完掘状況 (北から)	427
図版5	(1)SA1011 完掘状況 (東から) (2)SB1001 完掘状況 (北から)	428
図版6	(1)SB1002 完掘状況 (北から) (2)SB1003 完掘状況 (西から)	429
図版7	(1)SB1004 遺物出土状況 (西から)	

	(2)SB1004 完掘状況(南から) ……430	(2)SB1015 完掘状況(北から) ……453
図版8	(1)SB1003EH 遺物出土状況(東から)	図版21 (1)SD1010 完掘状況(西から)
	(2)SB1004EH 完掘状況(西から)	(2)SD1013 完掘状況(南から)
	(3)SB1004EK 2 完掘状況(北から) ……431	(3)SD1016 遺物出土状況近景
図版9	(1)SB1005・1006 遺物出土状況(北から)	(北から) ……454
	(2)SB1005・1006 遺構内遺構	図版22 (1)SK1005 完掘状況(南から)
	検出状況(西から) ……432	(2)SK1101 遺物出土状況(東から)
図版10	(1)SB1005・1006 完掘状況	(3)SK1101 完掘状況(北から) ……455
	(北から)	図版23 (1)SK1128 遺物出土状況(北から)
	(2)SB1007 遺構内遺構検出状況	(2)SK1145 完掘状況(西から)
	(北から) ……433	(3)SK1155 完掘状況(西から) ……456
図版11	(1)SB1008 遺構内遺構検出状況	図版24 (1)SK1210 遺物出土状況(南から)
	(東から)	(2)SK1210 完掘状況(西から)
	(2)SB1008EK 2 遺物出土状況	(3)SK1212 完掘状況(北から) ……457
	(南から) ……444	図版25 (1)SK1237 遺物出土状況(東から)
図版12	(1)SB1007・1008 完掘状況	(2)SK1253 遺物出土状況(東から)
	(南から)	(3)SK1253 完掘状況(東から) ……458
	(2)SB1009 検出状況(南から) ……445	図版26 (1)SK1259 完掘状況(西から)
図版13	(1)SB1009 遺物出土状況(南から)	(2)SK1265 完掘状況(東から)
	(2)SB1009 遺構内遺構検出状況	(3)SK1276 完掘状況(西から) ……459
	(南から) ……446	図版27 (1)SK1286 遺物出土状況(北から)
図版14	(1)SB1009 完掘状況(北から)	(2)SX1001 完掘状況(北から)
	(2)SB1010・1012 遺構内遺構	(3)SX1002 完掘状況(南から) ……460
	検出状況(西から) ……447	図版28 (1)SX1003 遺物出土状況(北から)
図版15	(1)SB1010a 遺物出土状況(西から)	(2)SX1003 遺物出土状況近景
	(2)SB1010a・1010b 完掘状況	(東から)
	(南から) ……448	(3)SX1003 完掘状況(北から) ……461
図版16	(1)SB1012 完掘状況(南から)	図版29 (1)SX1004 完掘状況(西から)
	(2)SB1011 完掘状況(南から) ……449	(2)SX1005 完掘状況(西から)
図版17	(1)SB1013 検出状況(西から)	(3)SP1059 遺物出土状況(南から) ……462
	(2)SB1013 完掘状況(南から) ……450	図版30 (1)SU1001 検出状況(南から)
図版18	(1)SB1014・1015 検出状況	(2)SU1001 集石出土状況(東から) ……463
	(西から)	図版31 (1)1区 SO・SQ群 完掘状況
	(2)SB1014 遺物出土状況(西から) ……451	(東から)
図版19	(1)SB1014 完掘状況(南から)	(2)SO1003 完掘状況(北から)
	(2)SB1015 遺物出土状況(南から) ……452	(3)SO1007 完掘状況(北から) ……464
図版20	(1)SB1015 遺構内遺構検出状況	図版32 SB1001~1003 出土遺物 ……465
	(南から)	図版33 SB1004 出土遺物(1) ……466

図版34	SB1004 出土遺物 (2)……………	467	図版50	SK 出土遺物 (4)……………	483
図版35	SB1005・1006 出土遺物……………	468	図版51	SK 出土遺物 (5)……………	484
図版36	SB1006・1007・1008 出土遺物……………	469	図版52	SP 出土遺物……………	485
図版37	SB1008・1009 出土遺物……………	470	図版53	SX1002・1003 出土遺物……………	486
図版38	SB1009 出土遺物……………	471	図版54	SX1004 出土遺物……………	487
図版39	SB1010a 出土遺物……………	472	図版55	SX (弥生)、SK・SP・SU (中世) 出土遺物……………	488
図版40	SB1010b・1011・1012・1013 出土遺物……………	473	図版56	SK・SP・SX (近世) 出土遺物……………	489
図版41	SB1013・1014 出土遺物……………	474	図版57	包含層出土土器 (1)……………	490
図版42	SB1015 出土遺物……………	475	図版58	包含層出土土器 (2)……………	491
図版43	SB1015・SD1014・SD1016 出土遺物……………	476	図版59	包含層出土土器 (3)……………	492
図版44	SD1016 出土遺物……………	477	図版60	包含層出土土器 (4)……………	493
図版45	SD1016・SK 出土遺物……………	478	図版61	包含層出土土器 (5)……………	494
図版46	SK1101 出土遺物……………	479	図版62	包含層出土土器 (6)、石器 (1)……………	495
図版47	SK 出土遺物 (1)……………	480	図版63	包含層出土石器 (2)……………	496
図版48	SK 出土遺物 (2)……………	481	図版64	包含層出土石器 (3)……………	497
図版49	SK 出土遺物 (3)……………	482	図版65	包含層出土石器 (4)・鉄器……………	498

写 真 目 次

写真1	作業風景……………	8
写真2	現地説明会 風景……………	9

I 調査の経緯

1 調査にいたる経緯

四国縦貫自動車第10次区間（脇～美馬）の路線延長は11.7kmで、昭和63年5月18日施工命令が出され、昭和63年6月17日に路線発表された。当該区間については県教育委員会文化課（現文化財課、以下県教育委員会と呼ぶ）が昭和62・63年度に分布調査を実施し、15遺跡106,000m²を調査対象として、平成4年4月23日付けで日本道路公団高松建設局（現四国支社、以下JHと呼ぶ）と埋蔵文化財の取り扱いに関する協議（文化庁協議）を終えた。平成4年度は第7次区間（徳島～脇）の調査最終年度と重なったが、用地交渉が開始され、当年度末より一部地点において試掘調査に着手し、6年度より本調査を開始した。

第11次区間（美馬～川之江）の路線延長は42.3kmで、平成2年11月19日施工命令が出され、平成3年1月21日に路線発表された。当該区間は県教育委員会が平成4年度に分布調査を実施し、39遺跡323,195m²を調査対象として、平成5年9月24日付けで文化庁協議を終えた。平成6年度試掘調査に着手し、7年度より本調査を開始した。

この区間は平成9年度に第10次区間、10年度に第11次区間のうち美馬～井川池田の供用目標が設定された。県教育委員会は6年度に第7次区間の調査実施（調査班数16.5班、調査対象68遺跡360,000m²に対して実調査面積133,464m²遺跡、実掘率37%）を勘案して、当該区間に必要な調査班数を12班（1班構成、研究員2・調査補助員2）と算出した。4・5年度は用地取得状況にも顕著な進捗はなく、そのため第10次区間の一部において本調査が実施されたにすぎない。

6年度は全区間で用地取得が進み、10次区間の5カ所で本調査が実施したのをはじめ、両区間の21ヶ所で試掘調査を展開した。県教育委員会はセンターから提出された6年度の試掘調査結果や用地取得状況を基に、7年度を10次区間3班、11次区間6班の計9班集体で調査することを決定した。しかしこれは、10年度中の供用時期を前提としたJHの調査人員配置要望（10次区間必要班数11班・11次区間必要班数16班、7年度要望班数15班）とは大きな懸隔を生じた。

さらに人員確定後に試掘調査が行われた美馬町薬師遺跡・坊僧遺跡では調査対象区域外に遺跡が拡がる見込みとなり、約22,000m²の追加調査の必要性が生じた。併せて第11次区間の用地取得が進捗した。そのため10次区間の調査を優先させると、11次区間は試掘調査を実施するにとどまり、本調査に着手できない状況が懸念された。このためJHから県教育委員会に対して度重なる増班要請がなされた。

7年度は県立埋蔵文化財総合センター開設に伴い、調査関係は一課二係制が二課四係制に改正され、調査第二課調査第一係がJH事業を担当することになった。県教育委員会は年度早々に必要班数を見直して26.5班と修正し、第二課内の事業の調整にとどまらず第一課事業も割愛し、調査班の捻出に向けての調整をセンターに要請した。その結果、7年度を当面12班で対応することとなった。

7年度は第10次区間の調査を概成させ、第11次区間については試掘調査を先行させる方針により、調査班の配置を変更したため、全体の実掘面積は当初計画よりも減少したものの、調査計画が大幅に変動した。また11次区間で本調査を実施した三野町丸山遺跡では約8,500m²の追加調査が必要となったのをはじめ、一部の調査において大幅な遅延を生じたため、さらに事業調整を行い休日まで研究員を投入する事態となったが、さほどの効果を上げるまでには至らなかった。

加えて試掘調査の結果、美馬町荒川遺跡、吉水遺跡、三好町土井遺跡、大柿遺跡などでは、当初見込みを上回る調査面積が確実になったため、県教育委員会は工事工程上、調整可能な調査箇所を平成8年度に先送りすることを決めた。こうしたことから、必然的に平成8年度が事業ピークを迎える見込みになった。JHと次年度体制について協議を進めていた県教育委員会は、年末までに8年度を35班体制で臨むことを決定し、不足人員を若干の専門職員採用と30数名の教員派遣で対応することを決定した。

この大量の教員派遣計画に対して、平成8年2月10日付文化財保存全国協議委員会から徳島県知事・徳島県教育長宛「四国縦貫自動車道建設に伴う埋蔵文化財発掘調査及び文化財保護行政の適正化を求める要望書」、同年3月6日付考古学研究会から「四国縦貫自動車道建設に伴う埋蔵文化財発掘調査の調査体制に関する質問書」、同年3月28日付日本考古学協会埋蔵文化財保護対策委員会から「四国縦貫自動車道建設に伴う文化財保護行政ならびに埋蔵文化財発掘調査に関する要望書」が提出された。

これに対し県教育委員会は県教育長名で考古学研究会に同年3月22日付、日本考古学協会埋蔵文化財保護対策委員会には同年4月15日付で回答している。

8年度は調査体制が一新された。県教育委員会に埋蔵文化財担当参事(センター常務理事兼事務局長)を設置し、文化財課の埋蔵文化財担当係の強化を図ると共に、前年度に続いてセンターの組織改正が行われた。調査関係では7年度の事務分掌が全面的に改正され、三好町に埋蔵文化財センター西部事務所が設置された。調査第二課調査第一係は西部事務所勤務となり、8年度は新設の所長(センター常務理事兼次長)以下143名、9年度は95名体制、8年度最大稼働時35班(通年28.5班)、9年度最大稼働時24班(通年20.5班)、計49班で事業に対応することとなった。

第1表に年次ごとの進捗状況を示した。8年度は、第11次区間美馬～井川池田間の調査に目途をたてることを最大の主眼とした。8年度前半に10次区間及び前年度からの継続調査の完了、用地の取得がまとまった11次区間の中規模遺跡の概成、後半での大規模遺跡への効果的稼働を目指した。

西原遺跡は分布調査の結果に基づき、35,150m²を調査対象地とすることが決定していたが、6年度調査対象地域の試掘調査の結果を受けて、7年度に調査対象範囲全域のうち未調査部分を含む10,080m²が本調査面積として確定した。

家屋残存により、調査対象地は分割調査を実施せざるを得ない状況となり、8年度8,153m²、9年度1,927m²、試掘面積を含む総面積は10,853m²になった。

調査組織及び整理体制は以下である。

総括

所長	筒井 豊祐 (平成7～9年度)	寒川 光明 (平成10～12年度)
	本浄 敏之 (平成13～15年度)	
事務局長	柴田 広 (平成6・7年度)	庄野 徳保 (平成8・9年度)
	細川 靖夫 (平成10・11年度)	伊丹 康裕 (平成12・13年度)
	西村 和博 (平成14・15年度)	
総務課長	小林 敬治 (平成6・7年度)	長江 仁 (平成8・9年度)
	井後 伸一 (平成10・11年度)	高野 明 (平成12・13年度)

	山本 高史 (平成14・15年度)	
総務係長	福本紀美子 (平成12～14年度)	坂尾 俊一 (平成15年度)
主事	三木 和文 (平成6・7年度)	西木 未香 (平成7～9年度)
	集堂 正士 (平成8～11年度)	佐藤 真紀 (平成10・11年度)
	田所 政儀 (平成12・13年度)	布川 純子 (平成14・15年度)
	鈴木 智栄 (平成14・15年度)	
技師	青木 雅和 (平成7～9年度)	笠井 達雄 (平成8年度)
調査課長	紀伊 司郎 (平成6年度)	
調査第二課長	島巡 賢二 (平成7年度) (第一係長兼務)	
主査兼調整係長	島巡 賢二 (平成6年度)	

西部事務所

所長 (常務理事兼事務局次長兼務)	谷 一郎 (平成8・9年度)
次長 (調査第二課長兼務)	菅原 康夫 (平成8・9年度)
縦貫担当係長 (調査第二課第一係長兼務)	南 信義 (平成8年度)
	松永 雅行 (平成9年度)

調査担当

・試掘調査担当

研究員	九十九 肇 (平成6年度)	谷 恒二 (平成7年度)
-----	---------------	--------------

・発掘調査担当

研究員	谷 恒二 (平成8・9年度)	中川 幸典 (平成8年度)
-----	----------------	---------------

	大橋 育順 (平成9年度)
--	---------------

研究補助員	大橋 育順 (平成8年度)
-------	---------------

調査報告書作成業務

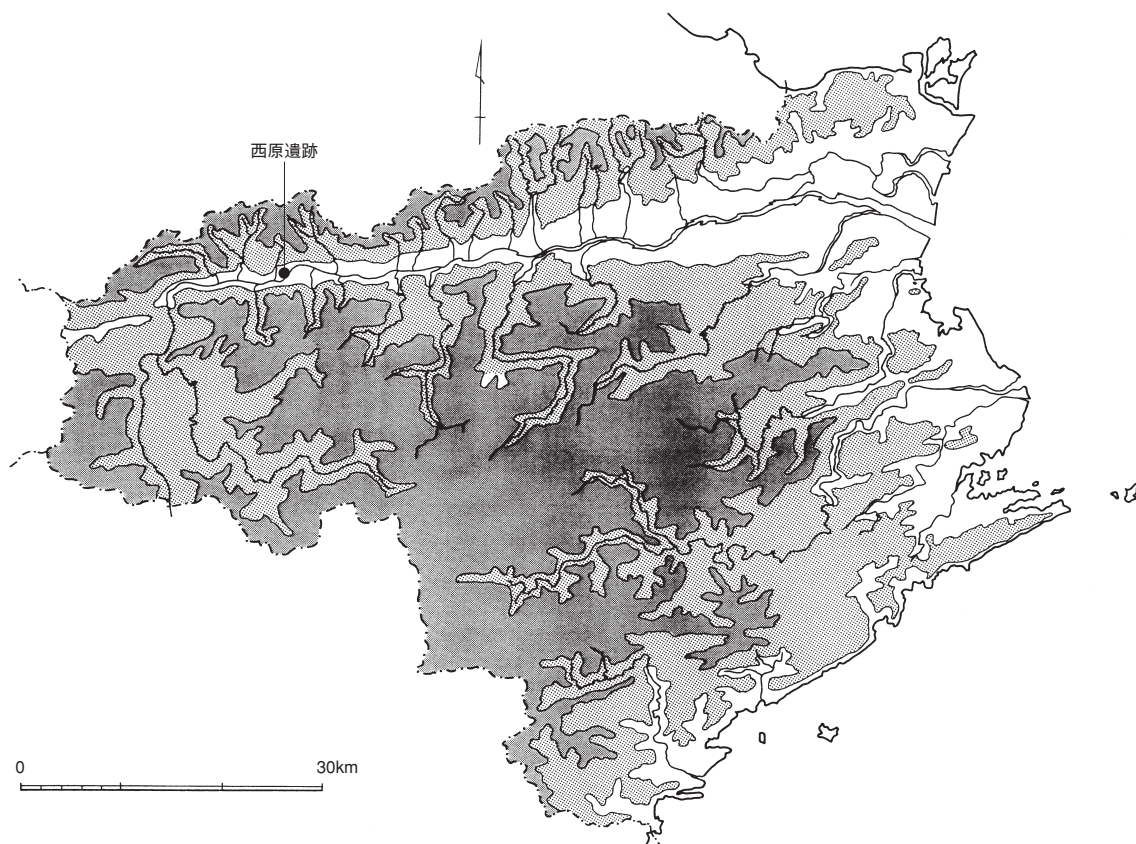
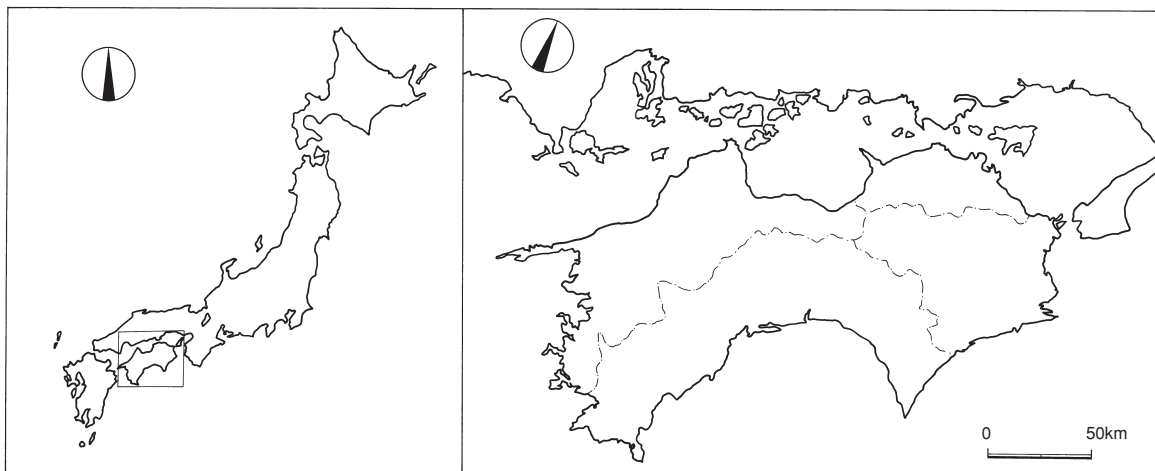
整理普及課長	島巡 賢二 (平成11～15年度)	
整理係長	西谷 泰幸 (平成11・12年度)	貞野 保仁 (平成13・14年度)
	貞野 雅巳 (平成15年度)	

調査報告書作成担当

研究員	下窪 光俊 (平成11年度)	大北 和美 (平成12～15年度)
-----	----------------	-------------------

第1表 四国縦貫自動車道（脇～美馬・美馬～川之江）埋蔵文化財調査地一覧表

番号	遺跡名	所在地	表面積 (m ²)								備考	
			実掘面積	4年度	5年度	6年度	7年度	8年度	9年度	10年度		
1	原(Ⅰ)	美馬郡脇町北庄	380		380							報告書第41集所収
2	原(Ⅱ)	美馬郡脇町北庄	1,560		1,560							報告書第41集所収
3	鶴謝	美馬郡脇町北庄	1,544		240	1,304						報告書第41集所収
4	佐城(Ⅰ)	美馬郡脇町脇町	565	165	400							報告書第41集所収
5	佐城(Ⅱ)	美馬郡脇町脇町	779	89	70	620						報告書第41集所収
6	佐城(Ⅲ)	美馬郡脇町脇町	146	146								報告書第41集所収
7	田上(Ⅰ)	美馬郡脇町田上	891			873	18					報告書第27集所収
8	田上(Ⅱ)	美馬郡脇町西田上	9,258			4,610	4,478	170				報告書第27集所収
9	田上(Ⅲ)	美馬郡脇町西田上	6,062		150	1,822	4,090					報告書第27集所収
10	井口	美馬郡脇町井口	150		150							報告書第41集所収
11	薬師(薬師)	美馬郡美馬町芝坂	9,335			330	9,005					報告書第34集所収
12	薬師(芝坂)	美馬郡美馬町芝坂	6,937			41	4,613	2,283				報告書第34集所収
13	坊僧(坊僧)	美馬郡美馬町坊僧	12,455		750	56	11,649					報告書第34集所収
14	坊僧(中黒)	美馬郡美馬町坊僧	229			154	75					報告書第34集所収
15	坊僧(東段)	美馬郡美馬町坊僧	5,850			116	5,734					報告書第34集所収
16	坊僧(西段)	美馬郡美馬町坊僧	63			63						報告書第34集所収
17	池ノ浦	美馬郡美馬町池ノ浦	26			26						報告書第41集所収
18	滝ノ宮	美馬郡美馬町滝ノ宮	2,563	350	500		1,713					報告書第41集所収
19	下突出	美馬郡美馬町中横尾	2,600				2,600					報告書第41集所収
	脇～美馬		61,393	750	4,200	10,015	43,975	2,453				
20	荒川	美馬郡美馬町荒川	17,782				202	15,530	2,050			
21	吉水	美馬郡美馬町吉水	3,820				120	3,700				報告書第39集所収
22	西屋敷	美馬郡美馬町中西	288				288					
23	中山	美馬郡美馬町中山	172				172					
24	西大佐古	美馬郡美馬町突落	153				108	45				
25	清水	三好郡三野町清水	10,692			692		10,000				
26	塩塚	三好郡三野町清水	2,332			310	72	1,950				
27	加茂野宮(Ⅱ)	三好郡三野町加茂野宮	300			300						
28	加茂野宮(Ⅰ)	三好郡三野町加茂野宮	340			340						
29	大谷尻	三好郡三野町北原	4,595			95	4,500					
30	丸山	三好郡三野町勢力	14,760				11,110	3,650				報告書第45集所収
31	花園	三好郡三野町太刀野	3,456				356	3,100				報告書第42集所収
32	太刀野山(Ⅱ)	三好郡三野町アミダ堂	157			103	54					報告書第42集所収
33	太刀野山(Ⅰ)	三好郡三野町アミダ堂	450			450						報告書第42集所収
34	台	三好郡三好町足代	1,203					1,203				報告書第42集所収
35	宮ノ岡(Ⅱ)	三好郡三好町足代	345					345				報告書第42集所収
36	宮ノ岡(Ⅰ)	三好郡三好町足代	898					898				報告書第42集所収
37	東原	三好郡三好町足代	16,365			217	323	15,825				報告書第50集所収
38	西原	三好郡三好町足代	10,853			157	616	8,153	1,927			本報告所収
39	円通寺	三好郡三好町足代	42,453				808	30,375	11,270			報告書第28集所収
40	土井	三好郡三好町昼間	35,630			140	378	19,520	15,592			報告書第38集所収
41	大柿	三好郡三好町昼間	53,012				1,562	22,960	28,490			報告書第37集所収
42	八幡	三好郡井川町八幡	1,250				20	1,230				報告書第29集所収
43	井内	三好郡井川町西井川	277					277				報告書第29集所収
44	井出上	三好郡井川町西井川	6,336				30	6,306				報告書第52集所収
45	相知	三好郡井川町西井川	15,500				120	15,380				
46	坊	三好郡井川町西井川	420					120	300			報告書第29集所収
47	須賀	三好郡井川町西井川	3,869					689	3,180			報告書第29集所収
48	末	三好郡井川町西井川	240					240				報告書第29集所収
49	お塚	三好郡池田町トウゲ	5,314			354	1,238	3,722				
50	供養地	三好郡池田町クヤウジ	1,811			111	1,700					
51	山田(Ⅱ)	三好郡池田町ヤマダ	1,515			285	1,230					
52	山田(Ⅰ)	三好郡池田町ヤマダ	703			53		650				
53	馬路	三好郡池田町馬路	970						320	650		
54	源氏岡	三好郡池田町源氏岡	175								175	
55	林	三好郡池田町佐野	130							130		
56	和田	三好郡池田町佐野	1,220					1,220				
57	森常	三好郡池田町初草	90							90		
58	高毛	三好郡池田町高毛	25							25		
	美馬～川之江		259,901			3,607	25,007	167,088	63,374	825		
	計		321,294	750	4,200	13,622	68,982	169,541	63,374	825		



第1図 西原遺跡位置図

2 調査の経過

(1) 調査の経緯

西原遺跡は分布調査により、35,150m²が調査対象地とされた。調査対象地の用地取得状況等から試掘調査は2回に分けて行われることになり、第一次調査は平成7年2月20日～3月17日に、第二次調査は平成7年7月25日～8月4日に実施した。重機掘削によるトレンチ掘りで第一次調査では対象面積11,300m²につき157m²を、第二次調査では22,500m²につき616m²の調査を行った。

第一次調査では主に調査対象地の西側を中心に試掘を行い、東側の一部で弥生時代の包含層および遺構面と考えられる自然堆積層を確認した。西側では磨滅した弥生土器数点が出土したものの遺構面の確認には至らず、調査対象地の中央部にある水田においては、瓦焼きに粘土を採掘しているため包含層および遺構面の確認は出来なかった。第二次調査では主に調査対象地の東部を中心に試掘を行い、第一次調査で確認された弥生時代の遺構面の拡がりを把握するのに務めた。また中央部の一部で炭焼き窯と考えられる遺構を確認したことから、調査対象地35,150m²の内、未調査箇所が残存するものの東部を中心とする10,080m²を本調査対象地として絞り込み、1班で調査にあたることとなった。

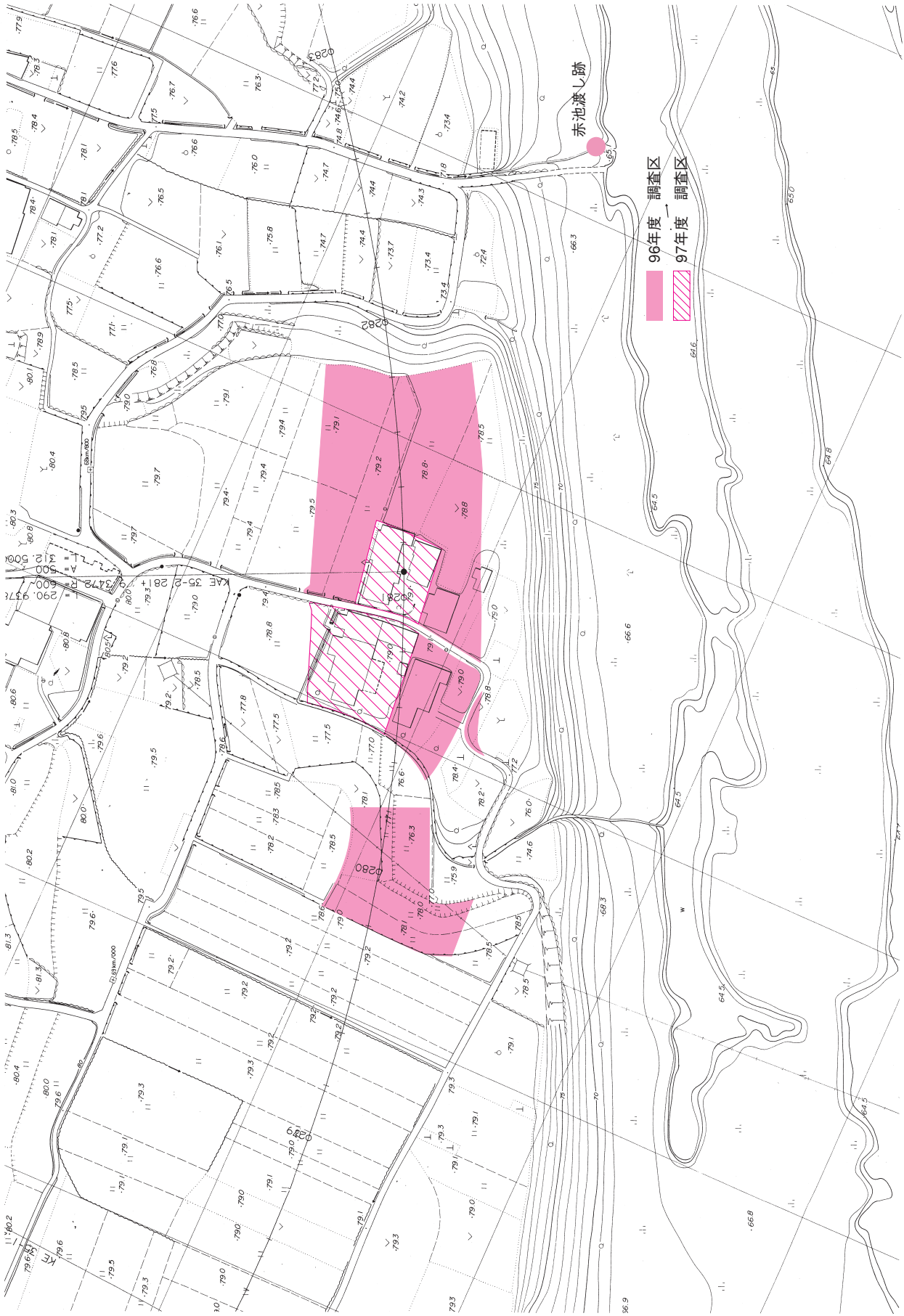
第三次調査は平成8年4月2日から始まり、平成9年3月31日に終了した。調査対象面積10,080m²のうち、宅地を除く8,153m²が調査範囲である。第四次調査は平成9年4月3日に開始し、平成9年6月30日に終了した。調査面積は1,927m²である。第三次・四次調査における本調査期間は1年3ヶ月にわたり、発掘調査総面積は10,080m²となる(第2図)。また1997年3月2日には、検出した竪穴住居跡を中心に現地説明会を開催した。県内外から約180名の参加者が集まり盛会となった。

(2) 発掘調査の方法

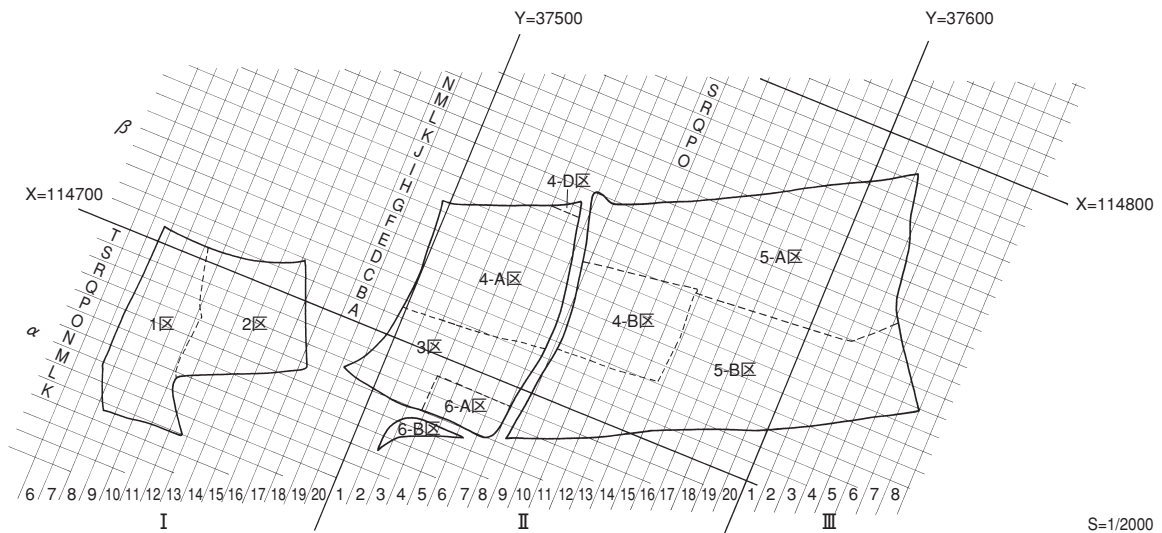
調査を始めるにあたり、グリッドの配置を発掘調査統一基準にならい次のように設定した。第IV系国土座標を基準とし、5mメッシュを1グリッドとして調査対象地を包み込み、南西隅を基準として北にA、B、C・・・、東に1、2、3・・・の順に記号・番号を振り、その組み合わせで各グリッドを表すこととした。

調査対象地が広範囲にわたるため、調査区の設定はその間を横切る道路や用水路などの保守の必要性があるもの、および地形を考慮した上で、便宜上田畑・宅地などの現地割りのまとまりごとに西から東へ第1調査区から第6調査区とした。

遺構記号・番号は検出時に決定し、掘削後に遺構の確実性が乏しいと判断されたものは欠番とした。これは遺構記号・番号の変更による混乱を避ける目的であり、変更は必要最低限にとどめた。なお同時進行で調査が行われていたために、各調査区ごとにそれぞれ遺構番号が付与されており、同一の遺構番号をもつものが各調査区で重複することになった。そこで整理の段階で、すべての遺構に対して遺構番号を新たに振り直すことにした。



第2図 調査区位置図



第3図 グリッド配置図

(3) 調査日誌抄

96年度調査

- 5月1日 1区機械掘削による調査を開始。
- 5月9日 2区機械掘削開始。
- 5月14日 6区機械掘削。1区人力掘削開始。
- 5月17日 5-B区機械掘削。6区人力掘削始。
- 5月23日 5-B区機械掘削。1区人力掘削。
- 6月3日 1区・2区人力掘削。
- 6月7日 1区遺構検出。
- 6月17日 1区・2区遺構掘削。
- 7月1日 5-B区人力掘削。
- 7月2日 1区空中写真撮影。
- 8月29日 6-A区人力掘削。
- 9月2日 6-A区遺構検出。
- 9月3日 5-B区遺構検出。6-A区遺構完掘。
- 9月11日 5-B区遺構掘削。
- 9月19日 5-A区機械掘削。5-B区遺構掘削。
- 10月23日 5-B区空中写真撮影。
- 10月24日 5-B区遺構掘削(SB1001~1005)。
- 11月1日 5-A区人力掘削。
- 11月5日 5-A区人力掘削・遺構検出。

11月6日 5-B区調査終了。

12月11日 5-A区遺構掘削開始。



写真1 作業風景

1997年

- 1月13日 3区人力掘削開始。
- 1月15日 3区遺構検出。
- 1月16日 3区遺構掘削。
- 1月28日 5-A区空中写真撮影。
- 1月29日 5-A区遺構掘削。
- 2月6日 3区遺構掘削開始。
- 3月2日 現地説明会。
- 3月8日 5-A区空中写真撮影。
- 3月10日 再確認調査。

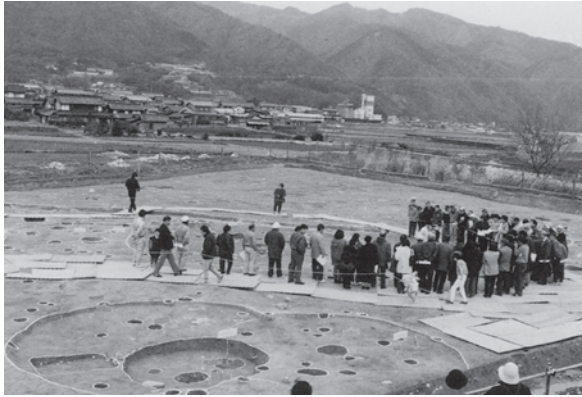


写真2 現地説明会風景

- 3月13日 空中写真撮影。
- 3月14日 再確認調査。
- 3月21日 現場撤収。調査終了。

97年度調査

1997年

- 4月3日 4-A区人力掘削開始。
- 4月7日 4-A区人力掘削・遺構検出。
- 4月11日 4-A区遺構掘削開始。
- 4月29日 4-C区人力掘削・遺構検出。
- 4月30日 4-B区機械掘削開始。
- 5月1日 4-A区・4-C区空中写真撮影。
- 5月2日 4-B区人力掘削開始。
- 5月6日 4-A区調査終了。
- 5月16日 4-B区人力掘削・遺構検出。
- 5月21日 4-B区遺構掘削開始。
- 6月16日 4-D区遺構検出・遺構掘削。
- 6月18日 4-B区空中写真撮影。
- 6月27日 現場撤収。調査終了。

Ⅱ 遺跡の立地と環境

1 地理的環境

徳島県（旧阿波国）は四国島の東部に位置し、北側では香川県（旧讃岐国）、西側では愛媛県（旧伊予国）、南側では高知県（旧土佐国）と接し、紀伊水道を挟んだ東側では和歌山県（旧紀伊国）と面する。徳島県の総面積は4,144m²であり、四国島の約1／4を占有する。吉野川を代表とする河川流域に平野部が展開するが、総面積の8割を山地が占めるために人々の生活区域は河岸段丘、扇状地を含めても2割ほどにすぎない。

徳島県の地質構造は、県内を東西に走る3つの大きな構造線—鳴門市里浦から愛媛県佐多岬北側に向けて東西に横断する日本有数の断層帯である中央構造線、その南側に分布する御荷鉾構造線、仏像構造線—に大きく影響を受ける。この中央構造線を境として北側の「内帯」、南側の「外帯」とに分けられ、徳島県のほぼ2／3以上を外帯が占める。外帯には三波川帯、御荷鉾台、秩父帯、四万十帯と呼ばれる地層が北から南へ、内帯には領家帯（和泉層群）が分布する。

河川もこれらの地質構造に影響され、中央構造線に沿って吉野川が、御荷鉾構造線に沿って鮎喰川・勝浦川が、仏像構造線に沿って那賀川が東流し、東方向に開けた形となる。四国最大の河川である吉野川は、愛媛県と高知県との境にある瓶ヶ森山（1,897m）に源を発する。急峻な四国山地を北流し、池田町で90度向きを変え中央構造線に沿いほぼ一直線に東流し、紀伊水道に注ぐ。地形の特徴から総長194kmのうち水源から池田町までの約116kmが上流部、池田から阿波町岩津までの約38kmが中流部、岩津から河口までの約40kmが下流部とされる^①。

西原遺跡は、徳島県北西部にある三好郡三好町に所在する。三好町はこの吉野川中流部の北岸、讃岐山脈南麓に位置し、東を三野町、西を池田町、吉野川を挟んだ対岸では井川町、北では香川県仲多度郡仲南町、三豊郡財田町にそれぞれ接している。三好町は町面積の8割を山地が占め、残り2割の平野部に人々の生活区域が展開される。三好町の平野は地質的に二つに分けることができ、一つは小河川や吉野川の運搬・堆積作用により形成された沖積層、もう一つは北側の讃岐山脈から運搬された砂礫を多く含む段丘礫層で、町内の平地の大部分がこの段丘礫層である。中央構造線は三好町内も走っており、その位置はほぼ讃岐山脈の麓となる。中央構造線を境にして北には砂岩、泥岩、粘板岩、凝灰岩から構成される和泉層群が、南側には俗に青石と呼ばれる緑色片岩や石英片岩、チャートなどから構成される三波川帯が広がる。

遺跡は、標高75～80mの黒川原谷川により形成された扇状地の扇端部に位置する。調査区全体は小河川によって部分的に谷状地形が形成される箇所があるものの、南に流れる吉野川に向かって緩傾斜する平地である。地理学的には複合扇状地の中央南部に位置し、吉野川の側方浸食により形成された標高75～80mの河岸段丘の一段目（洪積台地）にあたる。その北側には、標高100m前後を測る河岸段丘の第二段目がある。調査区の東南側から吉野川が蛇行し始め、北東方向に向かって流れる。調査区の南側では比高差約13m、東側では比高差約5mを測り、調査区が一段高くなる。現況は宅地も含まれるが、概ね田畑である。

2 歴史的環境

現在、三好郡内においてその存在が知られている遺跡は250ヶ所以上を数え、四国山地北麓および讃岐山脈南麓の吉野川や吉野川の支流によって形成された河岸段丘上および沖積平野上に占地する。

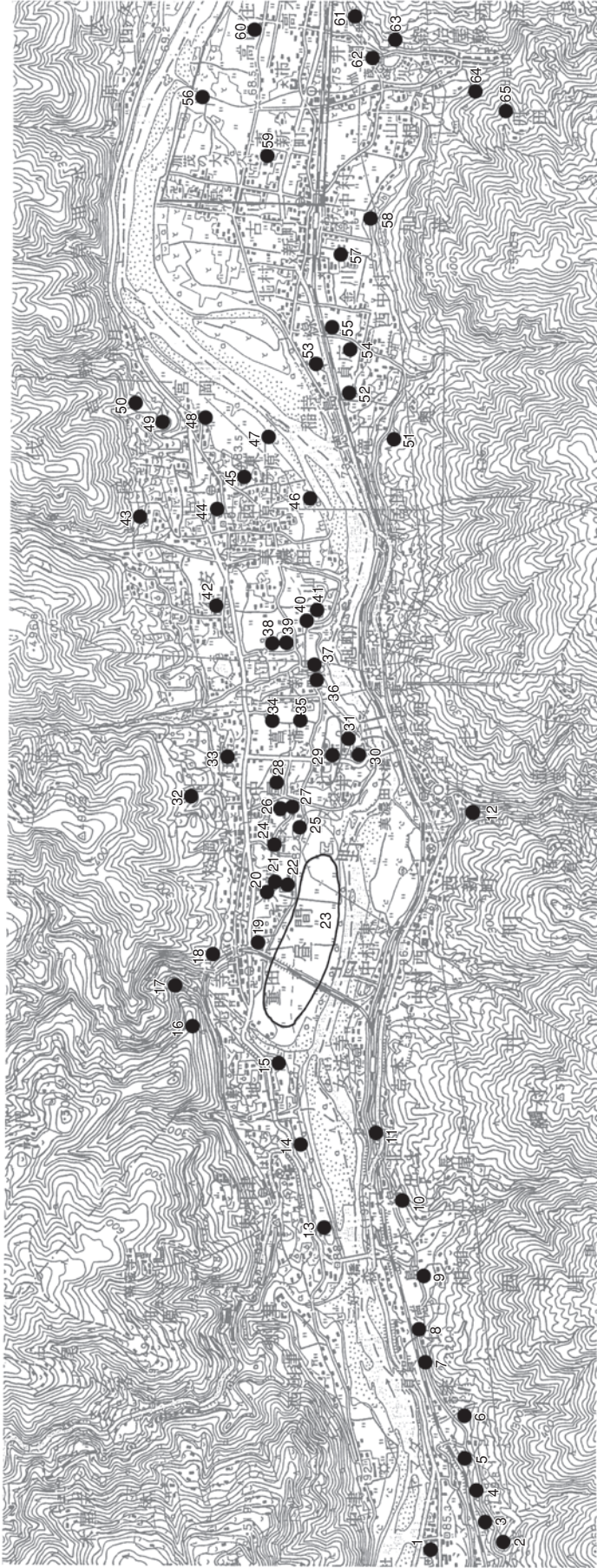
旧石器時代の遺跡は主に吉野川北岸の段丘上に分布し、池田町井ノ久保A遺跡・白地峰遺跡・新山A遺跡・洞草遺跡、三好町土取遺跡、三野町東上野遺跡、井川町猿渡遺跡、三加茂町丹田遺跡があげられる⁽²⁾。これらの遺跡からは、サヌカイト製ナイフ形石器、スクレイパー、翼状剥片等が出土している。そのうち土取遺跡では宮田山形ナイフ形石器が、丹田遺跡では国府形ナイフ形石器が出土した。

縄文時代の遺跡も段丘上に占地する遺跡が主体だが、沖積地にも分布する。これまでに池田町山田遺跡（I）・ウエノ遺跡、三好町大柿遺跡・土井遺跡、三加茂町加茂谷岩陰遺跡・稲持遺跡・毛田遺跡が確認された。山田遺跡（I）は岩陰遺跡で、縄文土器片、サヌカイト製石鏃・盤状剥片、結晶片岩製叩石等が出土した。出土遺物から、前期に属する可能性がある。大柿遺跡では微高地を中心に河川・柱穴・土抗・たき火跡等が確認された。また晩期の結晶片岩製打製石鏃が大量に出土したことから、この時代に植物の栽培が行われていた可能性が指摘される。加茂谷岩陰遺跡は山田遺跡（I）と同様に岩陰遺跡で、早期の複合山形文土器・楕円形押型文土器、前期の爪形文土器および中期から後期にかけての土器が出土した。あわせて貝類や獣骨の出土も認められ、季節的なベースキャンプ地として利用されていたと推測できる。稲持遺跡は晩期前半の集落遺跡で、蛇文岩およびサヌカイト等を用いた石器および石核が住居内から出土しており石器製作集落跡と考えられる。

弥生時代の遺跡は段丘上および沖積地に分布するが、時期によって占地する場所が異なる。弥生時代前期～中期初頭に属する遺跡は、三好町大柿遺跡・土井遺跡をあげることができる。これらの遺跡は低位段丘および沖積地上に占地する。

弥生時代中期中葉～後期初頭に属する遺跡として、三好町土取遺跡、三野町大谷尻遺跡・丸山遺跡があげられる。この時期の遺跡は、沖積地より低位もしくは中位の段丘上に占地する傾向がうかがえる。土取遺跡は標高約149mを測る丘陵末端部に位置し、南下の水田面との比高差は65mを測る。石器の散布地として知られていたが、調査の結果、直径7.0m程の円形を呈する竪穴住居が確認され、中期中葉を主体とする壺・甕・鉢、サヌカイト製石鏃、緑泥片岩製環状石斧、管玉、鉄器等の遺物が出土した。高地性集落としての位置付けがなされている。大谷尻遺跡は平地との比高差50mを測る段丘上に位置し、環濠集落であることが確認された。環濠の内側から竪穴住居跡12軒、石器製作工房1軒、祭祀遺構等が検出され、中期末から後期初頭の土器と共に武器である打製石鏃や石庖丁等の農耕具、稲・マメ等の炭化種子類が出土した。小谷をはさんで西側の段丘上に立地する丸山遺跡は、出土遺物から中期中葉に属する。調査区内では環濠は確認されておらず、また石器出土総数のうち農工具が高い割合を占める事が指摘されている。

弥生時代後期～終末期に属する遺跡として、池田町東州津遺跡・西州津遺跡・ウエノ遺跡・マチ遺跡、井川町相知遺跡・井出上遺跡・須賀遺跡、三好町土取遺跡・足代小原遺跡・昼間荒神前遺跡・昼間天神前遺跡・昼間西貝川遺跡・昼間正力遺跡・昼間京伝遺跡・足代東原遺跡・大柿遺跡、三野町加茂野宮遺跡、三加茂町稲持遺跡等をあげることができる。東州津遺跡は、低位河岸段丘に位置する後期前半の遺跡である。確認された方形周溝墓の周溝内から、多量の完形土器が出土している。ウエノ遺跡では住居跡が確認され、中央部に炬を伴う住居内からは壺・甕・高杯・サヌカイト製石鏃の他、讃岐からの



- | | | | | | | | | | |
|----|-----------|----|---------|----|--------------|----|-------------|----|----------|
| 1 | お塚古墳 | 23 | 大柿遺跡 | 34 | 新町遺跡 | 45 | 足代東原遺跡 | 56 | 加茂桑里 |
| 2 | 山田遺跡 (I) | 24 | 天神前遺跡 | 35 | 菖蒲遺跡 | 46 | 西原遺跡 | 57 | 大塚古墳 |
| 3 | 山田遺跡 (II) | 25 | 妙見七夕塚古墳 | 36 | 西貝川遺跡 | 47 | 東原遺跡 | 58 | 中村経塚 |
| 4 | 供養地遺跡 | 26 | 正力遺跡 | 37 | 小山遺跡 | 48 | 宮の岡遺跡 | 59 | 福塚古墳 |
| 5 | お塚古墳 | 27 | 荒神前遺跡 | 38 | 円通寺跡 | 49 | 足路城址 | 60 | 七人塚古墳 |
| 6 | お塚古墳 | 28 | 羽根田遺跡 | 39 | 円通寺塚穴古墳 | 50 | 台遺跡・中峰経塚 | 61 | お塚さん古墳他 |
| 7 | 須賀遺跡 | 29 | 土井遺跡 | 40 | 円通寺遺跡 | 51 | 鴨埜跡 | 62 | 銅鏡出土伝世地 |
| 8 | 坊遺跡 | 30 | 東屋間城跡 | 41 | 円通寺遺跡 (小山地区) | 52 | 稲持塚古墳 | 63 | 岡田林塚1号墳他 |
| 9 | 相知遺跡 | 31 | 西成行古墳 | 42 | 行安遺跡 | 53 | 稲持遺跡 | 64 | 加茂神社古墳群 |
| 10 | 井出上遺跡 | 32 | 土器之丸城跡 | 43 | 上の段遺跡 | 54 | 貞広古墳群 | 65 | 丹田古墳 |
| 11 | 八幡遺跡 | 33 | 行常遺跡 | 44 | 中の段遺跡 | 55 | 天神塚古墳・天神前遺跡 | | |

第4図 西原遺跡周辺の遺跡

搬入品と思われる壺形土器片も出土し、上野台地における弥生時代の集落の成立・変遷を考える上で貴重な遺跡といえる。井出上遺跡では竪穴住居跡を13軒検出し、そのうちの1軒から翡翠の勾玉1点とともに石鏃と大量のサヌカイト片が出土した。昼間遺跡京伝地区は、標高85m前後の洪積台地の先端に位置する。調査の結果、古代から中世を主体とする遺跡であることが判明したが、後期に属する土器も若干出土している。昼間遺跡荒神前地区は、標高85m前後の扇状地の先端部と吉野川の氾濫原が接する箇所位置する。調査の結果、直径10m程の円形を呈する竪穴住居が確認され、それに伴う土器と鉄器が出土した。時期は後期である。昼間遺跡西貝川地区は、標高84m前後を測る段丘の緩やかな傾斜面に位置する。出土土器がローリングを受けているために詳細な時期は不明だが、弥生時代の円形周溝墓が確認され、サヌカイト製石鏃や石槍、結晶片岩製石斧等が出土した。昼間遺跡天神前地区は、標高84m前後の扇状地の扇端部に位置する。自然流路から弥生土器が出土しているが、詳細な時期は不明である。足代遺跡円通寺地区は、標高85m前後の河岸段丘上に位置する。調査の結果、直径4.0mほどの円形の竪穴住居や土坑等が確認された。足代東原遺跡は標高83m前後の扇状地上に位置し、同時期の西原遺跡の北東約500mの所に所在する。前方後円形をした積石墓と36基以上の円形の積石墓が検出され、弥生時代後期～庄内式併行段階の集団墓地であることが確認された。前方後円形状の積石墓は墓群のほぼ中央に位置し、鳴門市大麻町所在の萩原1号墳と同様に突出部が未発達な形態を示す。埋葬施設は調査が行われていないものの緑泥片岩板石が残存することから、組合式箱式石棺の可能性が考えられる。また葬送儀礼に関与したと考えられる土器溜まりのうちの一つから、猪型土製品と猿型土製品が出土した。稲持遺跡から蛇文岩製勾玉とその未製品、原石、筋砥石、叩石、台石が出土しており、蛇文岩製勾玉の製作遺跡として捉えられる。

古墳時代の遺跡は調査事例が少なく様相が不明瞭なものが多いが、井川町須賀古墳、三好町足代東原遺跡・妙見七夕塚古墳・伊月古墳・西成行古墳・大柿遺跡・土井遺跡、三加茂町丹田古墳・天神塚古墳等が知られている。丹田古墳は現在県西部で唯一確認されている古墳時代前期の前方後円墳で、全長35mを測る。合掌型竪穴式石室をもち、石室から獣形鏡・鉄剣・袋状鉄斧・刀子等が出土した。大柿遺跡では竪穴住居280余軒・掘立柱建物40余棟・鍛冶工房等が良好な状態で検出され、古墳時代後期の大規模な集落跡であることが判明した。これまで県内では当該期の集落は確認されておらず、集落構造を検討する上で重要な資料である。

古代の遺跡は調査事例が少ないものの、井川町相知遺跡・井出上遺跡、三好町大柿遺跡、三野町加茂宮遺跡、三加茂町末石遺跡・中庄東遺跡をあげることができる。相知遺跡では奈良～平安時代の掘立柱建物が確認され、石帯の出土および遺跡の立地条件から官衙的性格を持つ遺跡として捉えられる。井出上遺跡でも平安末～鎌倉時代の掘立柱建物が確認された。大柿遺跡では平安時代の土師器焼成土坑・掘立柱建物・水田等が検出された。また掘立柱建物を構成する柱穴から完形の白磁四耳壺・瓦質四耳壺等が確認され、建物廃絶にともなう何らかの祭祀行為と考えられる。加茂野宮遺跡では「吉」字銅印や菊花楓双鳥文鏡が出土し、官衙的性格を持つ可能性がある。中庄東遺跡は、条里遺構と推定される範囲の東側に位置する。奈良・平安～室町時代にかけての遺跡であり、8世紀代の土器とともに帯金具や和同開珩が出土し、近隣に官衙的な施設が存在が推定される。また条里遺構が検出され、吉野川下流域の国衙周辺で認められるN-10°-Wとは異なる方向をとることが確認された。

中世の遺跡は、段丘および沖積地上に分布する。池田町山田遺跡(Ⅱ)・お塚古墳・供養地遺跡・和田遺跡・馬路遺跡、井川町八幡遺跡・坊遺跡、三好町大柿遺跡・土井遺跡・円通寺遺跡・東原遺跡、三

野町花園遺跡、三加茂町中庄東遺跡等があげられる。文献によると⁽³⁾三好郡内には中世城郭が多く存在し、山城町には田尾城、池田町には馬路城・大西城・大利城・川崎城・佐野城・漆川城・州凶城・中西城・白地城、井川町には野津後城、三好町には足代城・田ノ岡城・東山城・東昼間城、三野町には屋形山城・清水城・加茂野宮城・芝生城、三加茂町には金丸城・鴨城が所在する。また三好郡内には荘園・郷・保が存在し、主なものとして寛治四（1090）年に成立した京都賀茂別雷社領の福田庄、元京都蓮華王院（三十三間堂）領で鎌倉中期には山城醍醐寺領となった金丸庄（現三加茂町）、西園寺領であり現在の池田町から三好町昼間付近を庄域とする田井庄、文治元（1185）年に源頼朝によって山城石清水八幡宮に寄進された三野田保（現三好町）、南北朝期に祖山一族の兵糧料所として預け置かれていた井川庄（現井川町）・稲用保（現三加茂町）、三好郷などがあげられる。また金丸庄にかかわって金丸東庄・金丸西庄（現三加茂町）も存在した。

主な集落遺跡として大柿遺跡・土井遺跡・東原遺跡・中庄東遺跡、居館跡として円通寺遺跡、集石墓が確認された山田遺跡（Ⅱ）・お塚古墳・供養地遺跡・馬路遺跡をあげることができる。

円通寺遺跡では方形区画溝に囲まれた屋敷地とその外側に堀と土塁の一部、および多数の炭窯を確認した。屋敷地内では、四面庇を持つ二×五間の建物と15棟以上の掘立柱建物、屋敷地の東北隅において火葬墓等を検出した。この屋敷地は13世紀半ばから形成され、15世紀後半～16世紀前半には堀・土塁を構築するなどの大規模な拡張工事を行い、城館の呼称にふさわしい外観となる。古文書等から調査地が三野田保の比定地であり、三野田保の荘官あるいは地頭クラスの居館であった可能性がある。また炭窯は、黒川原谷川流域の開発に伴い木炭生産が行われた可能性がある。花園遺跡では調査対象地内において窯跡の確認はできなかったものの、遺跡の近隣に主として香川県十甕山窯製品に類似した須恵器壺などを生産した花園窯が所在する。

近世の三好郡は、讃岐・伊予・土佐のそれぞれの国に接する交通の要衝であった。吉野川北岸を撫養街道、南岸を伊予街道が通り、大西町（現池田町）で両街道は合流する。讃岐へ向かう主要な峠路として箸蔵越え（猪ノ鼻峠）があった。他にも主な峠として、二軒茶屋、東（男山）峠、檜の休場、真鈴峠があげられる。土佐へは二つの道があり、伊予街道から分岐して山城谷を経由する道と井内谷（現井川町）を経由する祖谷街道と呼ばれる道がある。これらの通行人を取り締まるために、現在の池田町には池田陣屋・白地船渡番所・佐野口番所・佐野口御分一所が置かれていた。また三好郡内の産業として、煙草・漆・葛粉・炭・紙等が有名である。

（注）

(1) 奥村清他 『自然の歴史シリーズ④徳島「自然の歴史」』 コロナ社 1998年

(2) 早淵隆人 「旧石器遺跡の立地についての一視点—吉野川北岸域を中心として—」 徳島県埋蔵文化財センター研究紀要『真朱』創刊号 1992年

(3) 湯浅良幸他 『日本城郭大系 第15巻 香川・徳島・高知』 新人物往来社 1979年

参考文献

- 『土取遺跡調査報告』 徳島県教育委員会 三好郡三好町教育委員会 1973年
- 『昼間遺跡発掘調査概報—吉野川北岸農業水利事業に伴う緊急発掘調査— 京伝地区 荒神前地区』
徳島県教育委員会 三好町教育委員会 吉野川北岸農業水利事務所 1976年
- 『吉野川北岸農業水利事業に伴う埋蔵文化財発掘調査 昼間遺跡（天神前地区）』 1977年
- 『徳島県文化財調査概報』 徳島県教育委員会 1977年
- 『徳島県文化財調査概報 昭和53年度』 徳島県教育委員会 1978年
- 矢田公洋 『加茂野宮遺跡—四国電力株式会社三野変電所新設工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書—』 徳島県三好郡三野町埋蔵文化財発掘調査報告書 三野町教育委員会 1997年
- 石尾和仁 『ウエノ遺跡—池田警察庁舎建て替え工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書—』 徳島県埋蔵文化財センター調査報告書第22集 (財)徳島県埋蔵文化財センター 1998年
- 森浩一・松藤和人 『徳島県三好郡三加茂町所在 加茂谷岩陰遺跡群』 同志社大学文学部考古学調査報告書第10冊 同志社大学文学部文化学科 1999年
- 天羽利夫・岡山真知子 『徳島の歴史散歩』 徳島市民双書・19 徳島市立図書館 1985年
- 菅原康夫 『日本の古代遺跡37 徳島』 保育社 1988年
- 三好町史編集委員会 『三好町史 地域誌民俗編』 徳島県三好郡三好町 1996年
- 三好町史編集委員会 『三好町史 歴史編』 徳島県三好郡三好町 1997年
- 「三好郡」『徳島県の地名』 日本歴史地名体系37 平凡社 2000年
- 『徳島県埋蔵文化財センター年報 Vol.7 1995年度』 (財)徳島県埋蔵文化財センター 1996年
- 『徳島県埋蔵文化財センター年報 Vol.8 1996年度』 (財)徳島県埋蔵文化財センター 1997年
- 『徳島県埋蔵文化財センター年報 Vol.9 1997年度』 (財)徳島県埋蔵文化財センター 1998年
- 『徳島県埋蔵文化財センター年報 Vol.10 1998年度』 (財)徳島県埋蔵文化財センター 1999年
- 菅原康夫 「41 徳島県足代東原遺跡」『日本考古学年報 35』 1982年度版 日本考古学協会

Ⅲ 調査成果

1 基本層序

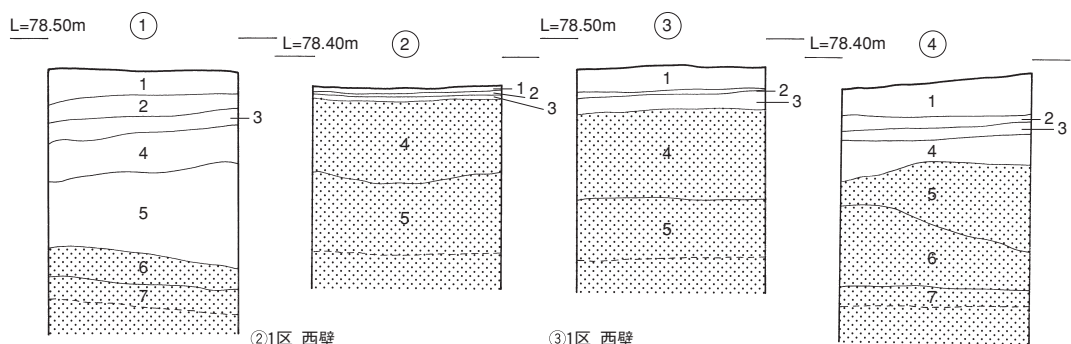
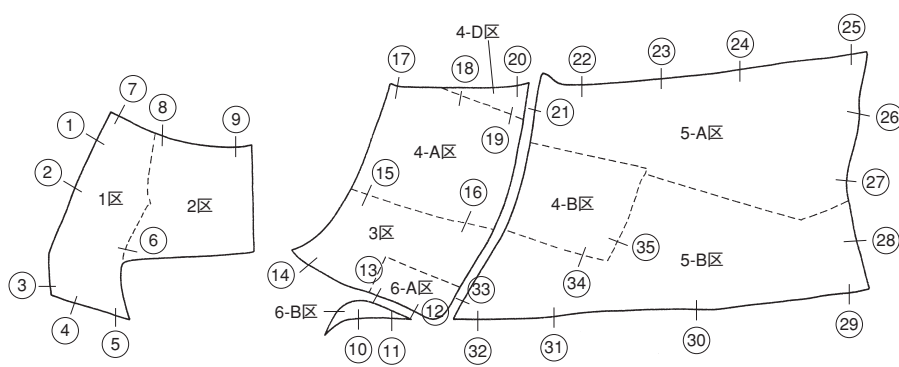
本遺跡は前述の通り、標高75～80mの黒川原谷川により形成された扇状地の扇端部に位置する。また吉野川によって形成された、河岸段丘の第一段目にあたる。調査区全体は小河川によって部分的に谷状地形が形成される箇所があるものの、南に流れる吉野川に向かって緩傾斜する平地である。

扇状地を東西に横断するような形で調査区が設定され、東端の5区から西端の1区まで総延長距離は約200mに及ぶ。調査区は、現在の三好町大字足代字昼間の集落の中心部からはずれた南側の水田地帯に位置し、調査前は宅地および田畑である。平地とはいえわずかな起伏があり、微高地上には宅地が、やや低いところは田畑として土地利用が為されている。これに伴い削平もしくは盛土などの土地改変が行われており、各調査区ごとに包含層や遺構の残存状況は異なる。また調査範囲が広範囲にわたるために調査地点が異なれば土層堆積に相違が認められ、黒川原谷川の押し出し層と微高地上に大きく大別することができる。

本遺跡の土層堆積の観察は、基本的に各調査区の四壁について行った。しかし各調査区によって土層断面の記録方法は異なり、全面記録もしくは東西または南北の任意の壁での記録にとどめている調査区もある。報告にあたっては、これらの記録から各調査区での平均的な土層堆積をもとに柱状模式図を作成し、各調査区ごとの基本層序について述べる（第5～7図）。

調査対象地の西側に位置する1区と2区は、現況は田畑である。両調査区の間は小さな谷状地形となり、低地部分と旧地形の残る小高い丘を削平し田畑にした平坦部分からなる。低地部分には水分を含んだ粘質土や砂礫層が互層に堆積し、流水および押し出しの影響を伺うことができる。1区の基本土層は、低地部以外では田畑による削平および粘土採掘に伴う攪乱が著しいものの、耕作土・盛土の直下は灰黄褐色粘性砂質土や褐色砂層の自然堆積層である。土地改変を受けていない自然堆積層上で、遺存状態の非常に悪い炭窯7基とそれに伴うと思われる焼土・灰を検出した。2区も1区と同じように、表土直下に自然堆積層が堆積する。遺構は確認できなかったものの、須恵器・瓦器等の遺物を若干採取することができた。

調査対象地の東側に位置する3区～6区は、現況は宅地および田畑である。3区は宅地跡のために攪乱が著しく、土坑および柱穴が若干確認されたにすぎない。調査区の南側は削平が著しく、表土直下に砂礫層の堆積が認められる。遺構は、縄文時代と中世の土坑を確認した。4区の現況は、宅地および田畑である。4-A区は3区の北隣に位置し、攪乱を部分的に受ける。表土および盛土の直下は、暗灰黄色粘性砂質土もしくは褐色粘性砂質土の自然堆積層である。4-B区は、調査区の中でも宅地による攪乱を著しく受ける。表土・盛土の直下は、褐色粘性砂質土および黒褐色粘性砂質土の自然堆積層である。4区では弥生時代の遺構も確認できたが、中近世の遺構が主体となる。5区の現況は田畑で、各調査区の中で遺構の残存状況は良好である。弥生時代後期～終末期の遺構が特に多く検出された。他の調査区と同じように表土直下自然堆積層の層序となる個所もあるが、灰黄褐色粘性砂質土の包含層の拡がりか認められる。6区の現況は、田畑である。6-A区、6-B区ともに、表土および盛土の直下は自然堆積層である。削平により遺構密度は低いが、近世の遺構を確認した。

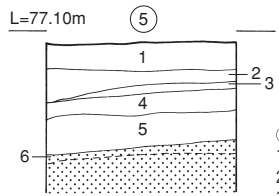


- ①1区 西壁
- 1 暗オリーブ褐色(2.5Y 3/3) 粘性砂質土
 - 2 黄褐色(2.5Y 5/4) 粘性砂質土
 - 3 暗灰黄色(2.5Y 5/2) 粘性砂質土
 - 4 黄褐色(2.5Y 5/4) 粘質土
 - 5 オリーブ褐色(2.5Y 4/4) 粘性砂質土
 - 6 褐色(10YR 4/4) 砂層
 - 7 暗灰色(10YR 3/3) 砂層

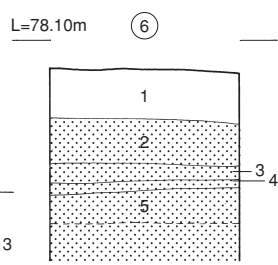
- ②1区 西壁
- 1 暗オリーブ褐色(2.5Y 3/3) 粘性砂質土
 - 2 黄褐色(2.5Y 5/4) 粘性砂質土
 - 3 暗灰黄色(2.5Y 5/2) 粘性砂質土
 - 4 灰黄褐色(10YR 4/2) 粘性砂質土
 - 5 褐色(10YR 4/4) 砂層

- ③1区 西壁
- 1 暗オリーブ褐色(2.5Y 3/3) 粘性砂質土
 - 2 黄褐色(2.5Y 5/4) 粘性砂質土
 - 3 にぶい黄色(2.5Y 6/3) 砂質土
 - 4 灰黄色(10YR 4/2) 粘性砂質土
 - 5 褐色(10YR 4/4) 砂層

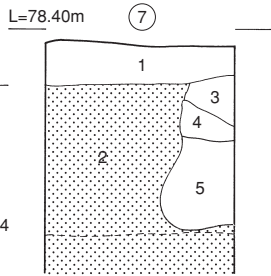
- ④1区 南壁
- 1 暗オリーブ褐色(2.5Y 3/3) 粘性砂質土
 - 2 黄褐色(2.5Y 5/4) 粘性砂質土
 - 3 暗灰褐色(2.5Y 5/2) 粘性砂質土
 - 4 暗灰黄色(2.5Y 5/2) 粘性砂質土
 - 5 オリーブ褐色(2.5Y 4/4) 粘性砂質土
 - 6 褐色(10YR 4/4) 砂層
 - 7 暗灰色(10YR 3/3) 砂層



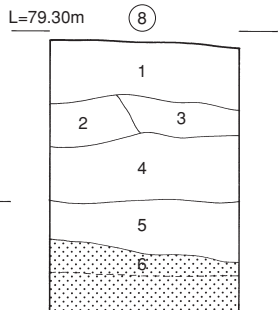
- ⑤1区 南壁
- 1 暗オリーブ褐色(2.5Y 3/3) 粘性砂質土
 - 2 黄褐色(2.5Y 5/4) 粘性砂質土
 - 3 暗灰黄色(2.5Y 5/2) 粘性砂質土
 - 4 黄褐色(2.5Y 5/3) 粘性砂質土
 - 5 暗灰黄色(2.5Y 5/2) 粘性砂質土
 - 6 暗灰黄色(2.5Y 4/2) 粘性砂質土



- ⑥2区 西壁
- 1 オリーブ褐色(2.5Y 4/3) 粘性砂質土
 - 2 灰黄褐色(10YR 4/2) 粘性砂質土
 - 3 灰黄褐色(10YR 4/2) 砂質土
 - 4 オリーブ褐色(2.5Y 4/4) 砂層
 - 5 褐色(10YR 4/4) 砂層

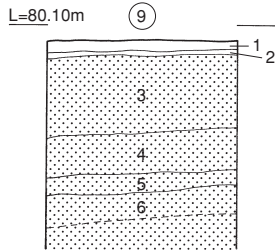


- ⑦1区 北壁
- 1 暗オリーブ褐色(2.5Y 3/3) 粘性砂質土
 - 2 灰黄褐色(10YR 4/2) 粘性砂質土
 - 3 黄褐色(2.5Y 3/3) 砂層
 - 4 にぶい黄色(2.5Y 6/3) 粘質土
 - 5 暗灰黄色(2.5Y 5/2) 粘質土



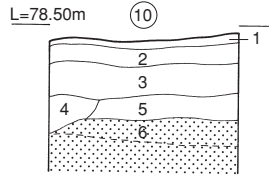
- ⑧2区 北壁
- 1 暗褐色(10YR 3/4) 粘質土
 - 2 にぶい黄褐色(10YR 4/3) 粘質土
 - 3 暗褐色(10YR 3/3) 砂質土
 - 4 褐色(10YR 4/4) 粘性砂質土
 - 5 褐色(10YR 4/4) 粘性砂質土
 - 6 褐色(10YR 4/4) 砂層

第5図 基本土層図(1)



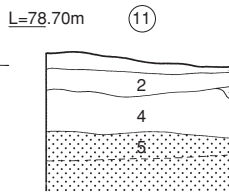
⑨2区 北壁

- 1 オリーブ褐色(2.5Y 4/3) 粘性砂質土
- 2 暗灰黄色(2.5Y 5/4) 粘性砂質土
- 3 灰黄褐色(10YR 4/2) 粘性砂質土
- 4 灰黄褐色(10YR 4/2) 砂質土
- 5 オリーブ褐色(2.5Y 4/4) 砂層
- 6 褐色(10YR 4/4) 砂層



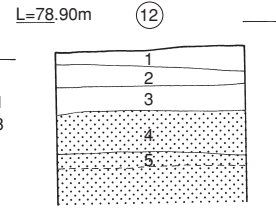
⑩6-B区 南壁

- 1 暗オリーブ褐色(2.5Y 3/3) 砂質土
- 2 褐色(10YR 4/4) 粘性砂質土
- 3 にぶい黄褐色(10YR 4/3) 粘性砂質土
- 4 黄褐色(2.5Y 5/6) 粘性砂質土
- 5 オリーブ褐色(2.5Y 4/3) 粘性砂質土
- 6 オリーブ褐色(2.5Y 4/3) 砂礫層



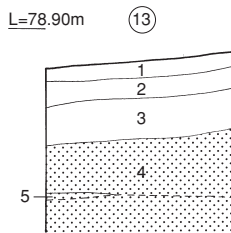
⑪6-B区 南壁

- 1 暗オリーブ褐色(2.5Y 3/3) 砂質土
- 2 にぶい黄褐色(10YR 4/3) 粘性砂質土
- 3 オリーブ褐色(2.5Y 4/3) 粘性砂質土
- 4 にぶい黄褐色(10YR 4/3) 粘性砂質土
- 5 オリーブ褐色(2.5Y 4/3) 粘性砂質土



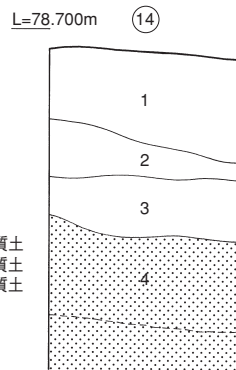
⑫6-A区 南壁

- 1 にぶい黄褐色(10YR 4/3) 粘性砂質土
- 2 褐色(10YR 4/4) 粘性砂質土
- 3 褐色(10YR 4/4) 粘性砂質土
- 4 暗オリーブ褐色(2.5Y 3/3) 砂礫層
- 5 にぶい黄褐色(10YR 4/3) 砂層



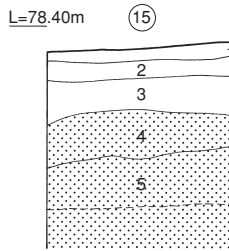
⑬6-A区 南壁

- 1 にぶい黄褐色(10YR 4/3) 粘性砂質土
- 2 褐色(10YR 4/4) 粘性砂質土
- 3 褐色(10YR 4/4) 粘性砂質土
- 4 暗オリーブ褐色(2.5Y 3/3) 砂礫層
- 5 にぶい黄褐色(10YR 4/3) 砂礫層



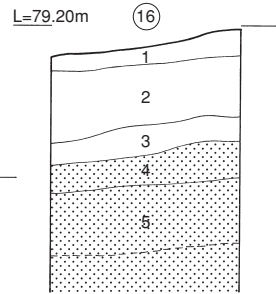
⑭3区 南壁

- 1 暗褐色(10YR 3/4) 粘質土
- 2 暗褐色(10YR 3/4) 粘質土
- 3 にぶい黄褐色(10YR 4/3) 粘質土
- 4 にぶい黄褐色(10YR 4/3) 砂礫層



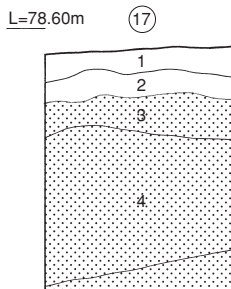
⑮3区 北壁

- 1 暗褐色(10YR 3/4) 粘質土
- 2 暗オリーブ褐色(2.5Y 3/3) 粘質土
- 3 にぶい黄褐色(10YR 4/3) 粘質土
- 4 褐色(10YR 4/4) 粘性砂質土
- 5 褐色(10YR 4/4) 粘質土



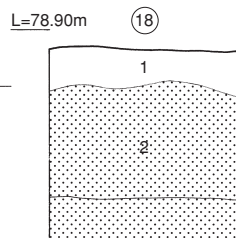
⑯3区 北壁

- 1 暗褐色(10YR 3/4) 粘質土
- 2 にぶい黄褐色(10YR 4/3) 粘質土
- 3 褐色(10YR 4/4) 粘性砂質土
- 4 褐色(10YR 4/4) 粘性砂質土
- 5 褐色(10YR 4/4) 砂層



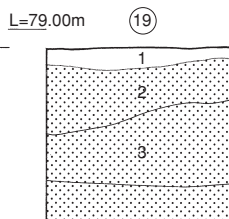
⑰4-A区 北壁

- 1 攪乱
- 2 にぶい黄褐色(10YR 6/3) 粘性砂質土
- 3 褐色(10YR 4/4) 粘性砂質土
- 4 にぶい黄褐色(10YR 4/3) 砂質土



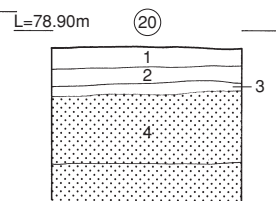
⑱4-A区 北壁

- 1 盛土
- 2 暗灰黄色(2.5Y 5/2) 粘性砂質土



⑲4-A区 北壁

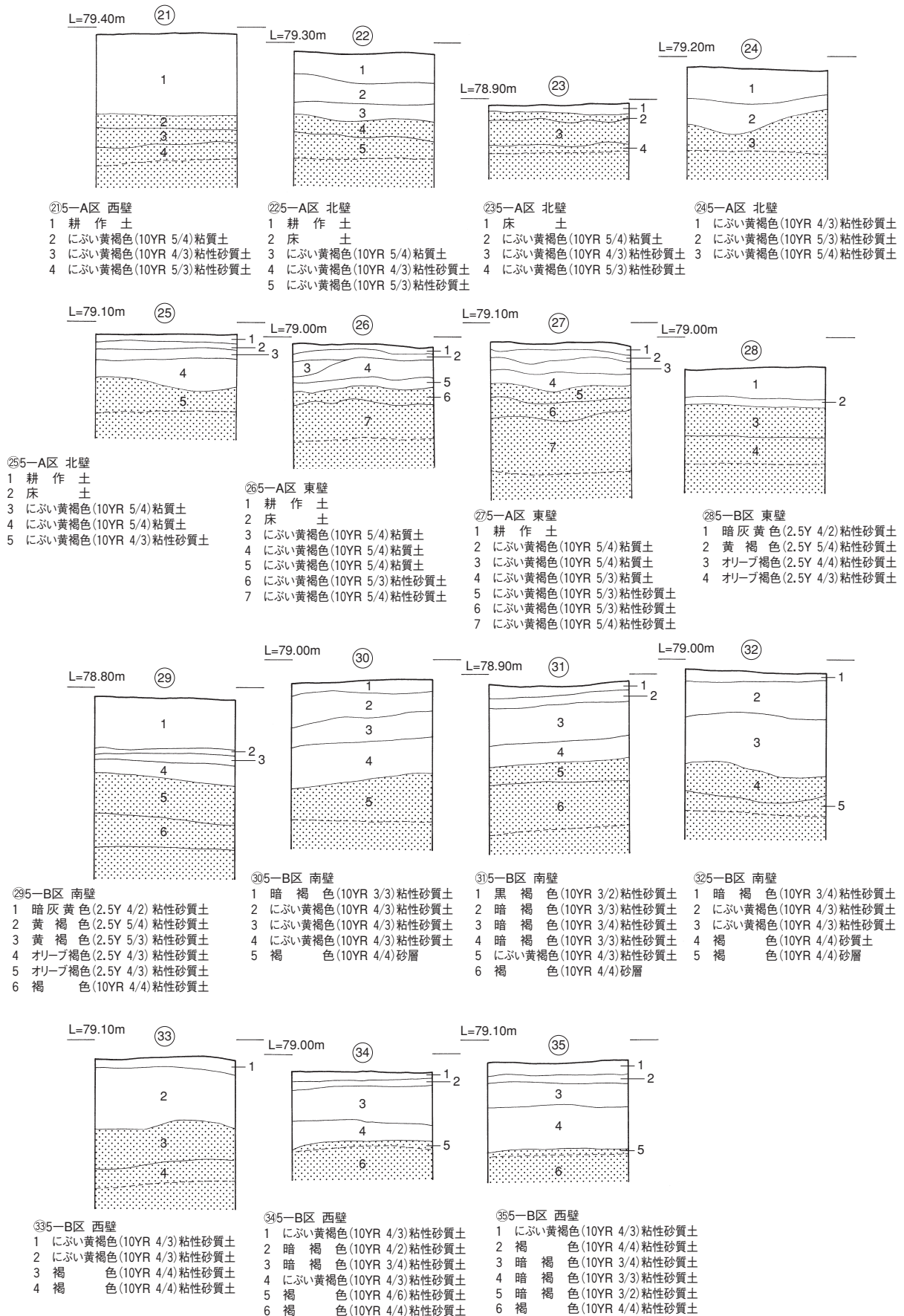
- 1 盛土
- 2 黄褐色(10YR 4/3) 粘性砂質土
- 3 にぶい黄褐色(10YR 4/3) 砂質土



⑳4-D区 北壁

- 1 黒褐色(10YR 3/2) 耕作土
- 2 灰黄褐色(10YR 4/2) 粘性砂質土
- 3 にぶい黄褐色(10YR 5/4) 粘性砂質土
- 4 褐色(10YR 4/4) 粘性砂質土

第6図 基本土層図(2)



第7図 基本土層図(3)

2. 遺構と遺物

平成8（1996）年度、平成9（1997）年度の調査で確認した遺構の配置については、第8～10図に示すとおりである。調査区は平坦部に拡がり、遺構・遺物を確認できたのは主に3～6区である。1・2区では田畑ならびに粘土採掘による土地改変が著しく、部分的に旧地形が残存する地点で炭窯とそれに伴うと推測される焼土および炭化物を確認した。削平を受けてはいるものの調査対象地の中で2区と4区-Dの標高が高く、本遺跡が立地する扇状地の東側および南側を流れる吉野川に向かって緩やかに傾斜する。1区では、時期不明の炭窯7基とそれに伴うと推測される炭溜まり等を確認した。出土遺物は近現代が主体であり、ごくわずかに中世遺物が認められる。3～5区は宅地跡も含まれるため攪乱が著しい箇所もあるが、部分的に包含層が残存する。今回の調査で確認された遺構・遺物の所属時期は縄文・弥生・古墳・中世・近世と時代幅が広く、そのため記述に際しては各時代ごとに項目立てることにした。縄文時代に関しては遺構数が少ないために、弥生時代と併せて報告する。

(1) 縄文時代・弥生時代

縄文時代の遺構は、3区で土坑を1基確認したにとどまる（第9・99図）。またSB1013から翡翠製の明珠が、包含層から縄文時代後期の土器片を2点確認した。吉野川を挟んだ対岸の三加茂町に稲持遺跡が所在し、縄文時代晩期の土坑や土器等が確認されている。出土した土器の時期は稲持遺跡と異なるものの、西原遺跡の北側に拡がる平坦面に縄文時代の遺跡の存在が予想できる。

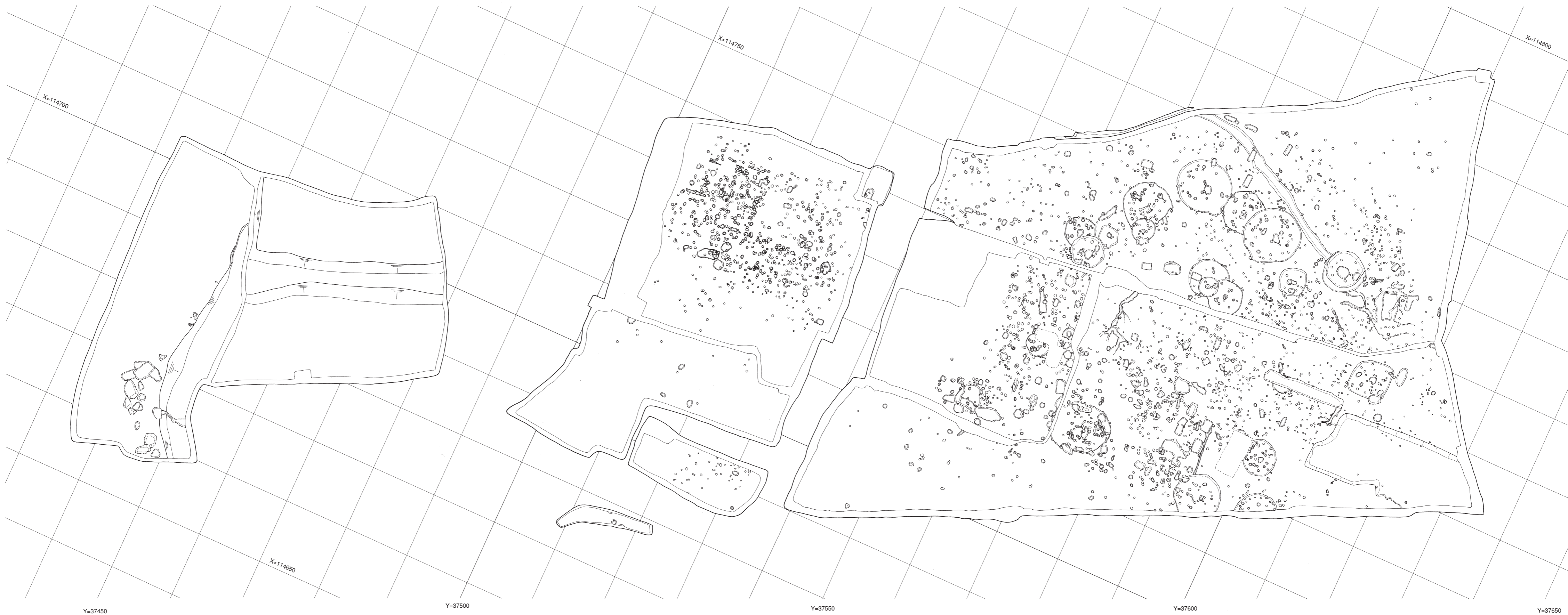
弥生時代の遺構は、主に5-A・5-B区を中心とした調査対象地の東側で確認した（第9図）。遺構総数は掘立柱建物跡3棟、竪穴住居跡16軒、土坑141基、溝8条、柱穴541基、不明遺構6基で、時期は弥生時代後期～終末期を主体とする。調査対象地の西側にある1区・2区では削平が著しく、同時期の遺構は1区で柱穴1基を検出したにすぎない。

掘立柱建物

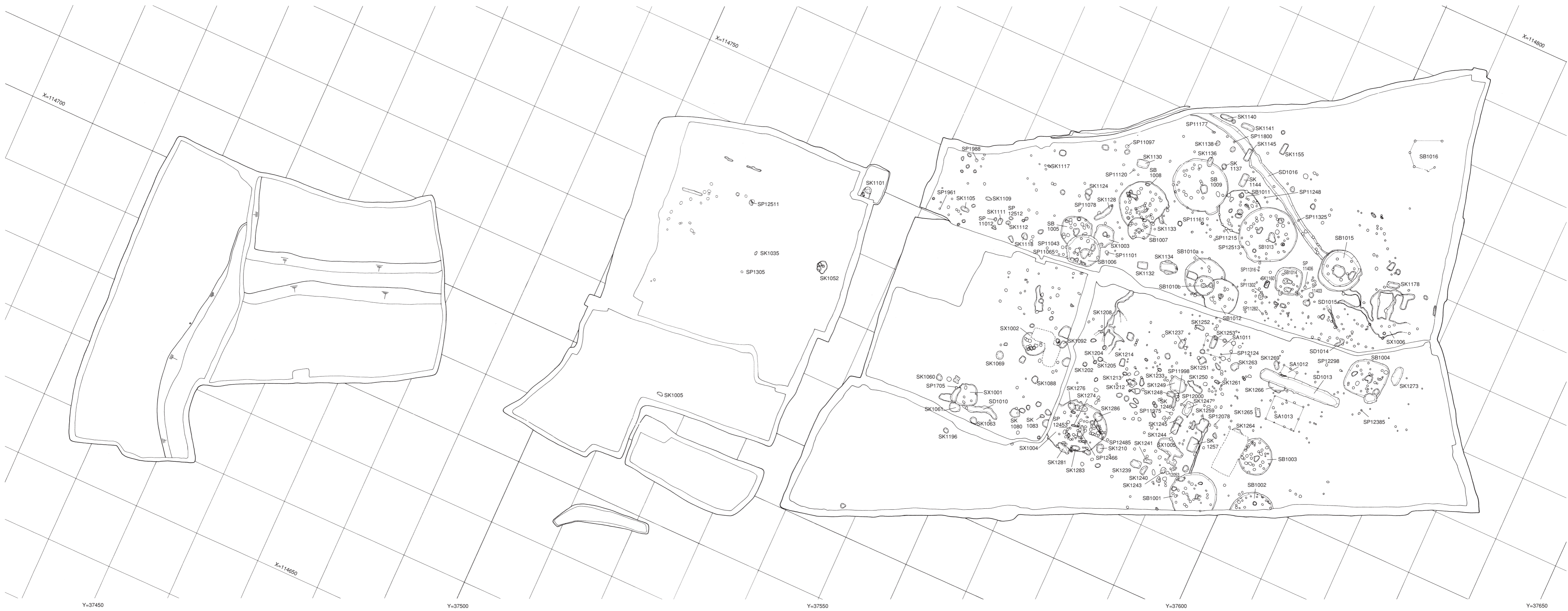
掘立柱建物11号（SA1011）（第11図）

5-B区 β-II H・1-18・19で確認された10基の柱穴で構成される掘立柱建物。前後関係は不明だが、EP2はSK1253と切り合い関係にある。

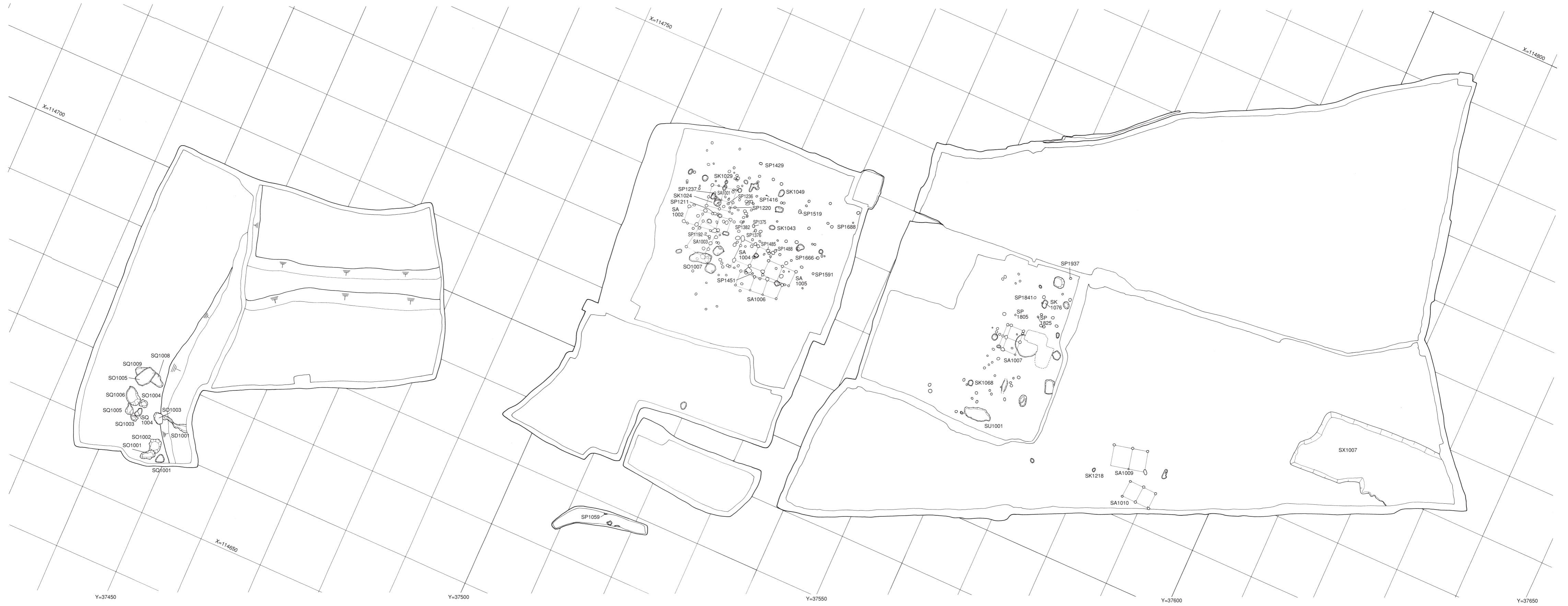
建物の規模は梁間2間（2.64m）、桁行3間（4.23m）、床面積11.21m²を測り、平面形態は長方形を呈する。柱間寸法は梁間1.00～1.64m、桁行1.34～1.48mで、棟方向はN-9°-Wに向く。柱穴掘り方は不整な円形もしくは楕円形を呈し、径は18～66cm、深度10～43cmを測る。埋土は褐色砂質土で、柱痕はEP3で確認できた。小片のために図化出来なかったものの、EP1・2・5～9の柱穴掘り方内部から弥生土器片が、EP3から壺形土器が出土した。本遺構の所属時期は、出土遺物から弥生時代と推測される。



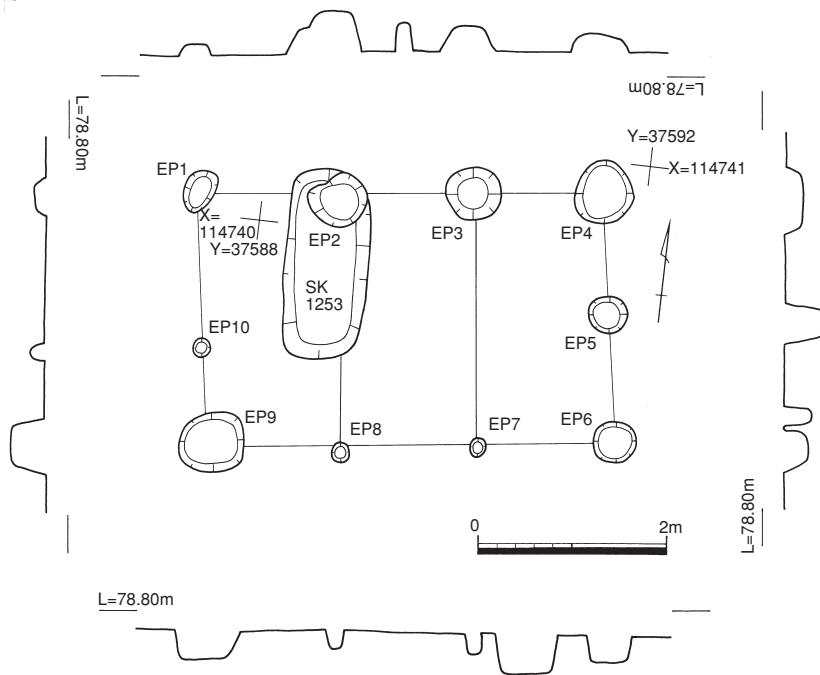
第8図 遺構配置図(1)



第9図 遺構配置図(縄文・弥生)



第10図 遺構配置図(中世・近世)



第11図 SA1011遺構図

埋土は褐色砂質土で、柱痕は確認できなかったものの、EP 4 で直径20cm前後の石が出土した。小片のために図化出来なかったものの、EP 1・4・5 の柱穴掘り方内部から弥生土器片が出土した。本遺構の所属時期は、出土遺物から弥生時代と推測される。

掘立柱建物13号 (SA1013) (第13図)

5-B区 β-Ⅲ G・H-1・2で確認された7基の柱穴で構成される掘立柱建物。この掘立柱建物は、当遺跡で確認された建物の中で一番東端に位置する。

建物の規模は梁間2間(3.87m)、桁行3間(4.66m)、床面積17.88m²を測り、平面形態はいびつな方形を呈する。柱間寸法は梁間3.68~3.98m、桁行1.34~1.88mで、棟方向はN-2.5°-Wに向く。柱穴掘り方は不整な円形もしくは楕円形を呈し、径は18~34cm、深度14~28cmを測る。埋土は褐色砂質土で、柱痕はEP 2・4で確認できた。小片のために図化出来なかったものの、EP 5・7の柱穴掘り方内部から弥生土器片が出土した。本遺構の所属時期は、出土遺物から弥生時代と推測される。

竪穴住居

調査時において、竪穴住居として検出した数は20軒である。しかし、住居内で検出された土坑の中に炉と判断できないものもあり、検討の結果、それらの遺構に関しては不明遺構として報告することにした。よってこの竪穴住居の項目で報告できる住居数は、新たに住居として加えたものを含めて17軒である。

竪穴住居1号 (SB1001) (第14~17図)

位置・構造

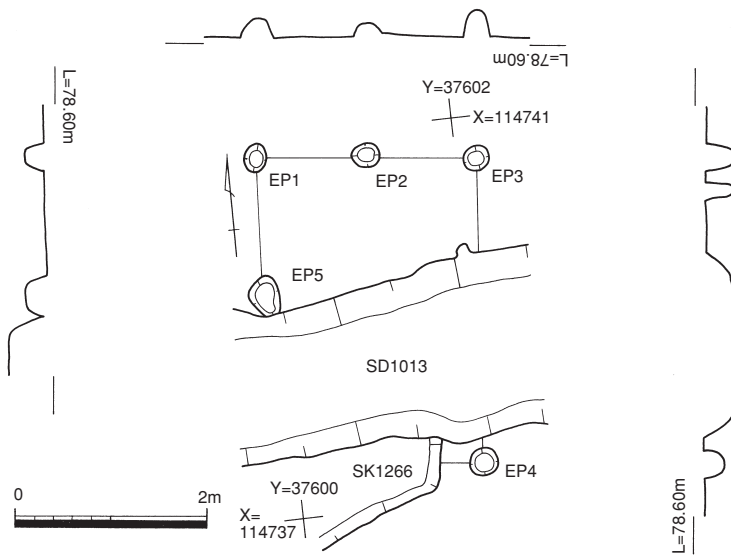
5-B区 β-Ⅱ C~E-19・20で確認された竪穴住居。調査区の南側側溝に切られるものの、遺構

掘立柱建物12号

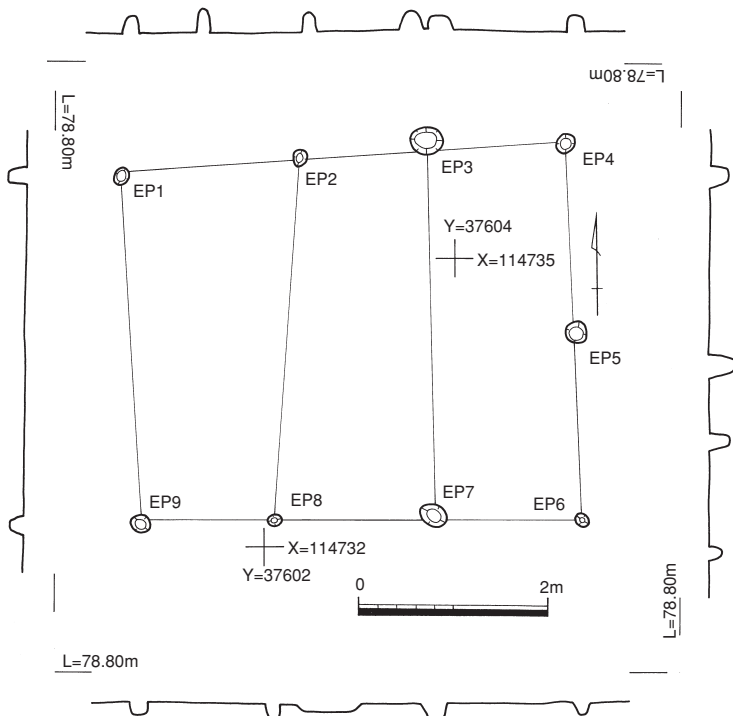
(SA1012) (第12図)

5-B区 β-Ⅱ・Ⅲ H・I-20・1で確認された5基の柱穴で構成される掘立柱建物。本来は6基の柱穴で構成されたと考えられるが、建物の中央をSD1013とSK1266によって切られる。

建物の規模は梁間2間(約3.22m)、桁行1間(約2.32m)と推定される。平面形態は長方形を呈すると思われる、柱穴掘り方は不整な円形もしくは楕円形を呈し、径は28~30cm、深度13~23cmを測る。



第12図 SA1012遺構図



第13図 SA1013遺構図

の約1/3は調査区外に拡がる。検出した範囲から、この住居の平面形態・底面形態はやや不整な円形、断面形態は逆台形と推定できる。長軸7.38m、最大深度0.28m、検出部分の床面積35.83m²を測る。

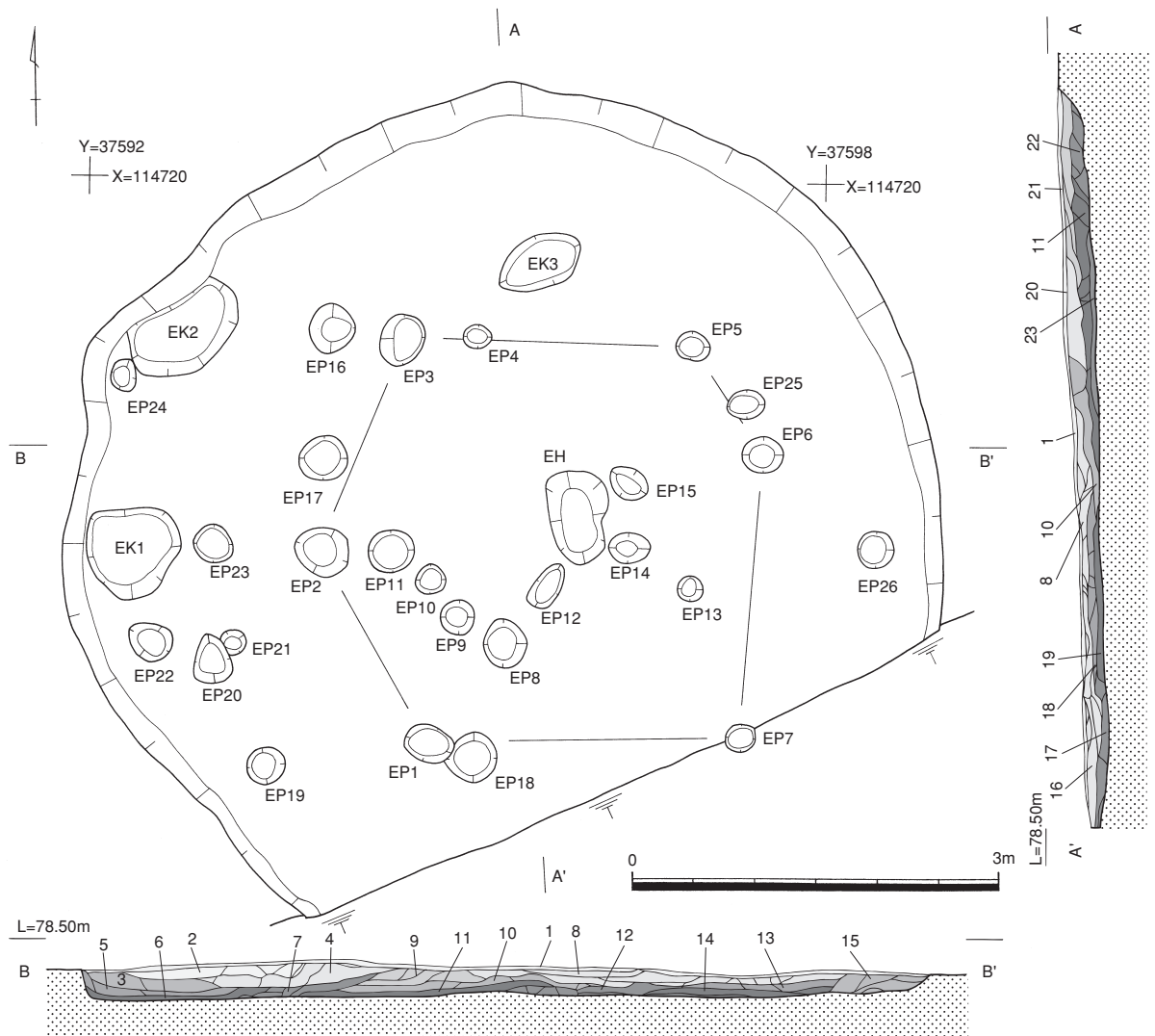
覆土除去後、床面に柱穴26基、土坑3基、炉1基を検出した。主柱穴はEP1～3・5～7の計6基で、住居内において周壁溝や貼床など他の施設は確認できなかった。遺物は、散在した状態で出土した。

柱穴・土坑 (第15・16図)

柱穴は全部で26基検出され、そのうちのEP1～3・EP5～7の計6基を主柱穴として捉えた。しかしEP1～3・5・7の5本柱構造の可能性もある。主柱穴は直径0.27～0.42mの円形、最大深度0.26～0.41mを測る。柱穴間距離の最大は2.58m (EP1・7間)、最小は1.06m (EP5・6間)である。土質および含有物から各柱穴の覆土はそれぞれ分層できるものの、概ね暗褐色およびにぶい黄褐色を主体とする。主柱穴6基のうち、EP1・3・5・7の計4基で柱痕を確認し

た。主柱穴以外の柱穴20基は、直径0.16～0.42mの円形で最大深度0.08～0.33mを測る。またEP12・25で、柱痕を確認した。

柱穴内からの出土遺物は、EP1から凸基式のサヌカイト製石鏃(18)が、EP18・EP21から鉢形土器(16・14)が出土した。14は、焼成後に口縁部の一部が故意に打ち欠かれている。EP2・6・12～15・24・25からそれぞれ弥生土器片数点が、EP3から東阿波型土器と思われる甕形土器の底部が出土した。主柱穴以外の柱穴を多数検出しているものの、EP18・21を除く柱穴では同時性を検証することはできなかった。

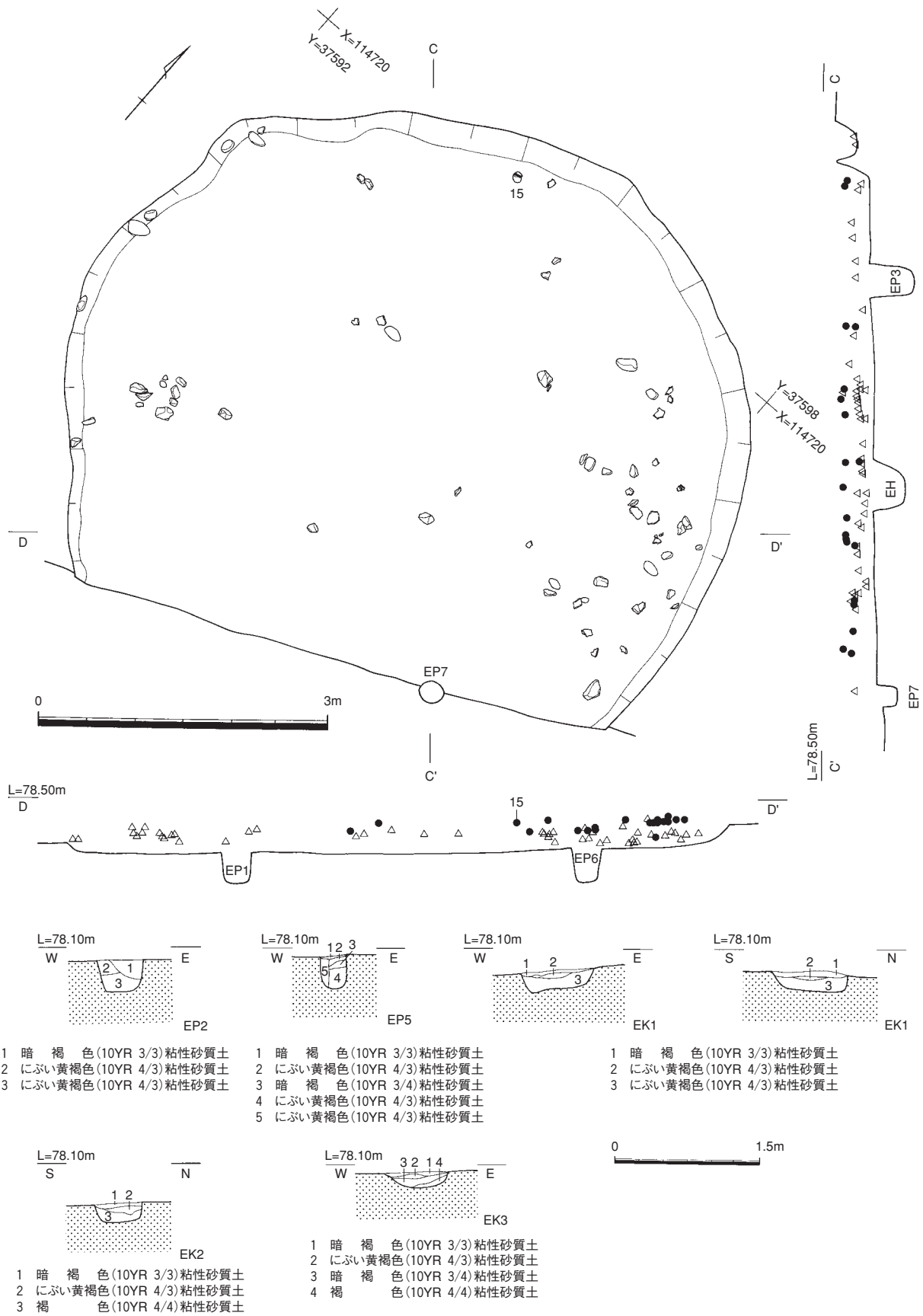


- | | | | |
|-------------------------|--------------------------|------------------------|------------------------|
| 1 にぶい黄褐色(10YR 4/3)粘性砂質土 | 7 にぶい黄褐色(10YR 4/3)粘性砂質土 | 13 にぶい黄褐色(10YR 4/3)砂質土 | 19 暗褐色(10YR 3/3)粘性砂質土 |
| 2 にぶい黄褐色(10YR 4/3)粘性砂質土 | 8 暗褐色(10YR 3/4)粘性砂質土 | 14 暗褐色(10YR 3/4)粘性砂質土 | 20 暗褐色(10YR 3/4)粘性砂質土 |
| 3 にぶい黄褐色(10YR 4/3)粘性砂質土 | 9 暗褐色(10YR 3/4)粘性砂質土 | 15 褐色(10YR 4/4)砂質土 | 21 にぶい黄褐色(10YR 4/3)砂質土 |
| 4 暗褐色(10YR 3/4)粘性砂質土 | 10 にぶい黄褐色(10YR 4/3)粘性砂質土 | 16 にぶい黄褐色(10YR 4/3)砂質土 | 22 暗褐色(10YR 3/4)粘性砂質土 |
| 5 褐色(10YR 4/4)粘性砂質土 | 11 暗褐色(10YR 3/3)砂質土 | 17 褐色(10YR 4/2)砂質土 | 23 褐色(10YR 4/4)砂質土 |
| 6 暗褐色(10YR 3/4)砂質土 | 12 暗褐色(10YR 3/4)粘性砂質土 | 18 暗褐色(10YR 3/3)粘性砂質土 | |

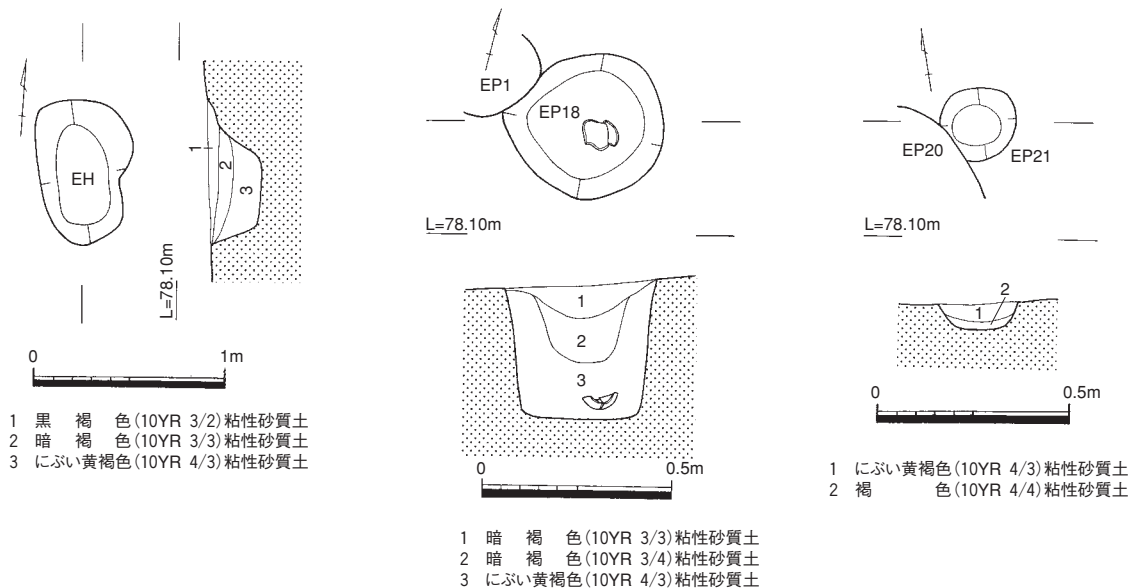
第14図 SB1001遺構図(1)

土坑は、3基検出できた。EK1は平面形態・底面形態ともに不整な楕円形、断面形態は逆台形を呈し、長軸0.78m、短軸0.76m、最大深度0.27mを測る。覆土は土質および含有物から3層に分層できるものの、大きく2層に分けることができる。上層(1層)は暗褐色粘性砂質土、下層(2・3層)はにぶい黄褐色粘性砂質土で、3層が砂質が強い。EK2は平面形態・底面形態ともに楕円形、断面形態は逆台形を呈し、長軸1.00m、短軸0.49m、最大深度0.29mを測る。覆土は、1層-暗褐色粘性砂質土、2層-にぶい黄褐色粘性砂質土、3層-褐色粘性砂質土の3層に分層できる。EK3は平面形態・底面形態ともに楕円形、断面形態は舟底形を呈し、長軸0.73m、短軸0.44m、最大深度0.17mを測る。覆土は土質から、1層-暗褐色粘性砂質土、2層-にぶい黄褐色粘性砂質土、3層-暗褐色粘性砂質土、4層-褐色粘性砂質土の4層に分層できる。

各土坑から弥生土器片がそれぞれ数点出土したが、小片のために図化できるものはなかった。



第15図 SB1001遺構図(2)



第16図 SB1001遺構内遺構図

土層 (第14図)

SB1001の土層堆積は、調査時の所見で55層以上に分層されている。これは層中に含まれるブロック土を一つの層として捉えたために、このように細分化したと考えられる。色調および含有物などから堆積状況を検討した結果、覆土は大きく24層に分けることができる。色調は概ね暗褐色を呈し、しまりがやや弱く砂質が強い。それぞれの層で混入率は異なるものの、にぶい黄褐色土ブロック・褐色土ブロックを混入する。2・7・10・21層では、炭化物と黒褐色土ブロックを混入する。構築面としての床面は、一部砂礫層が認められるものの概ね砂層である。貼床の可能性を考えたものの明瞭に区分できず、貼床と考えられる層の確認には至らなかった。

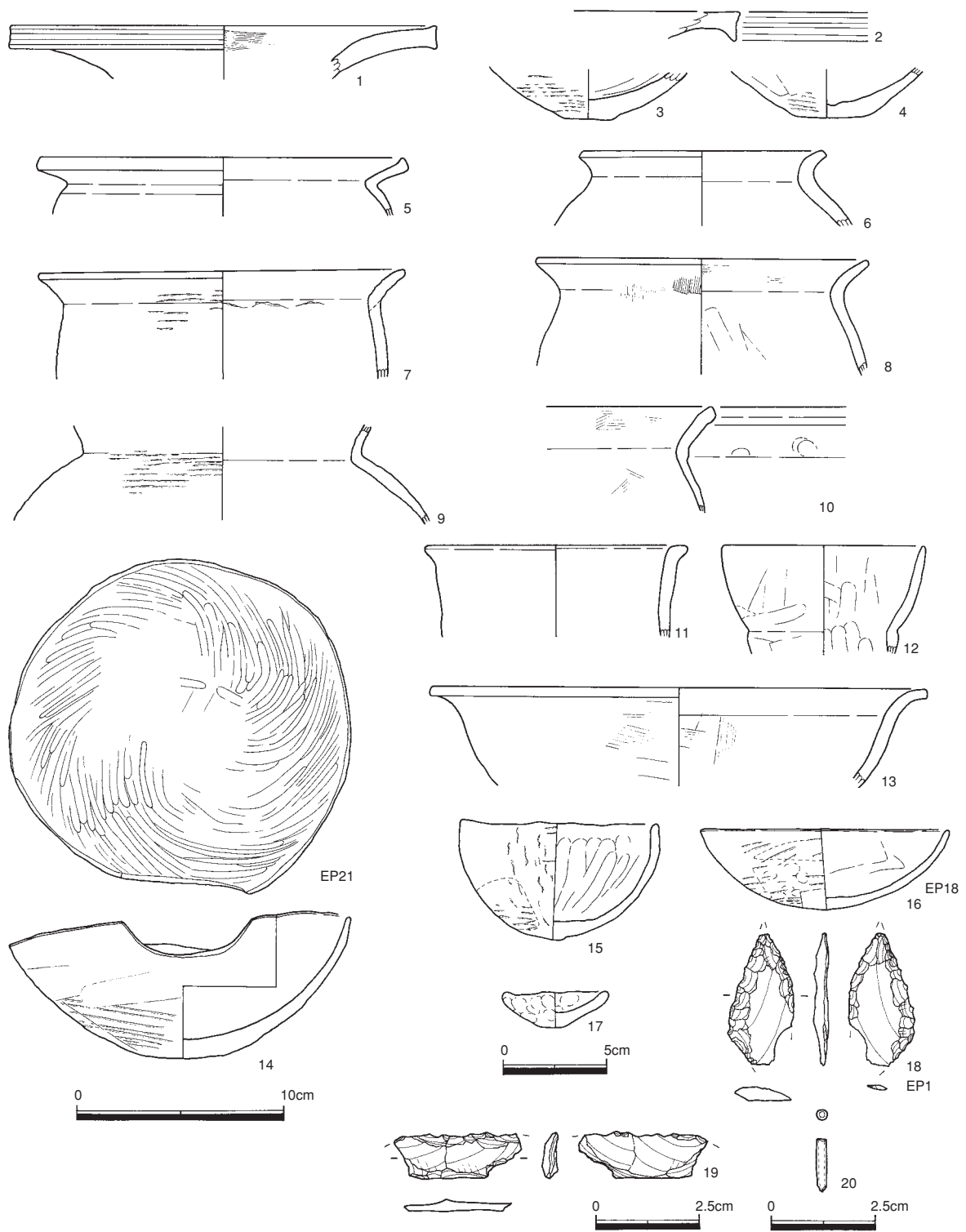
炉 (第16図)

平面形態は不整な楕円形、底面形態は楕円形、断面形態は不整な逆台形を呈し、長軸0.76m、短軸0.4m、最大深度0.27mを測る。底面はほぼ平坦である。炉は、住居中央部よりやや東側、支柱穴間のほぼ中央にあたる部分に作り付けられている。

覆土は炭化物を多く含み、1層-黒褐色粘性砂質土、2層-暗褐色粘性砂質土、3層-にぶい黄褐色粘性砂質土の3層に分層できる。3層では、自然堆積層との境に薄い炭化物の堆積層と被熱面が認められた。炉跡からの出土遺物は、認められなかった。

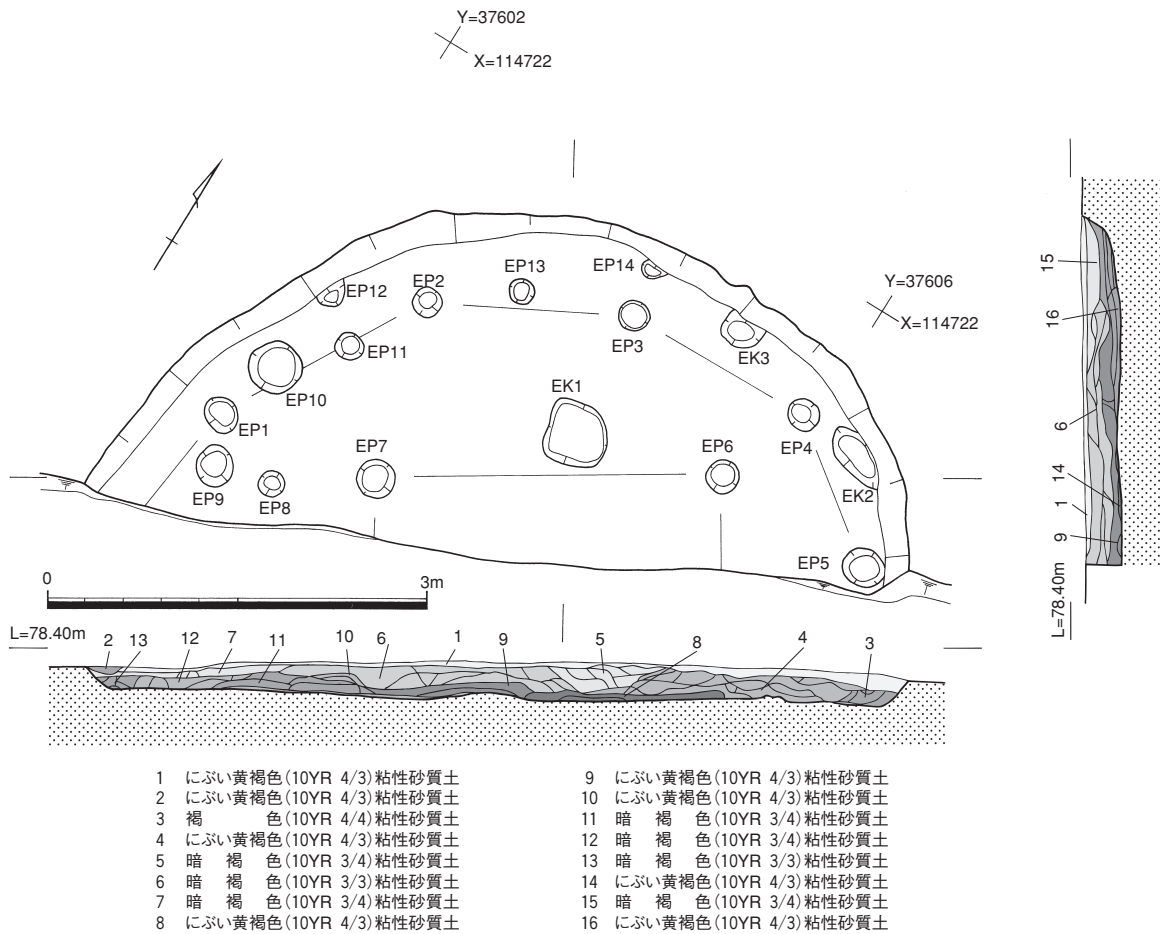
出土遺物 (第17図)

壺形土器55点、甕形土器48点、鉢形土器10点、高坏形土器4点、手捏ね皿1点、体部片666点、サヌカイト製石鏃1点・剥片18点、結晶片岩製敲石2点、砂岩2点、碧玉製管玉1点を含む総数808点が出



第17図 SB1001出土遺物

土した。図化可能な遺物は、壺（1～4・11）、甕（5～10）、鉢（12～16）、手捏ね皿（17）、凸基式石鏃（18）・サヌカイト剥片（19）、管玉（20）の20点である。遺物の出土状況は散在した状態といえるが、遺構の南東側にやや多く認められる。出土遺物のほとんどが、床面から浮いた状態での出土である。



第18図 SB1002遺構図(1)

壺は広口壺が主体で、口縁部端面に明瞭な凹線が施される(1・2)。また底部は丸底のものは認められず、平底が主体である。甕は、壺とは反対に口縁部端面に凹線が施されているものは認められない。鉢はEP18から出土した16は丸底だが、15とEP21から出土した鉢(14)は平底を呈する。13は口径24cmを測るやや大型の鉢で、角閃石・金雲母を含む精良な胎土を持つ。讃岐からの搬入品である。17は手捏ね皿で、出土は1点のみである。20は欠損しているものの、両側から穿孔している。

時期

出土した壺の口縁部端面に凹線が認められるものの、それ以外の器種では凹線は認められない。また鉢では、16は丸底なもの14・15は丸みを帯びた平底である。

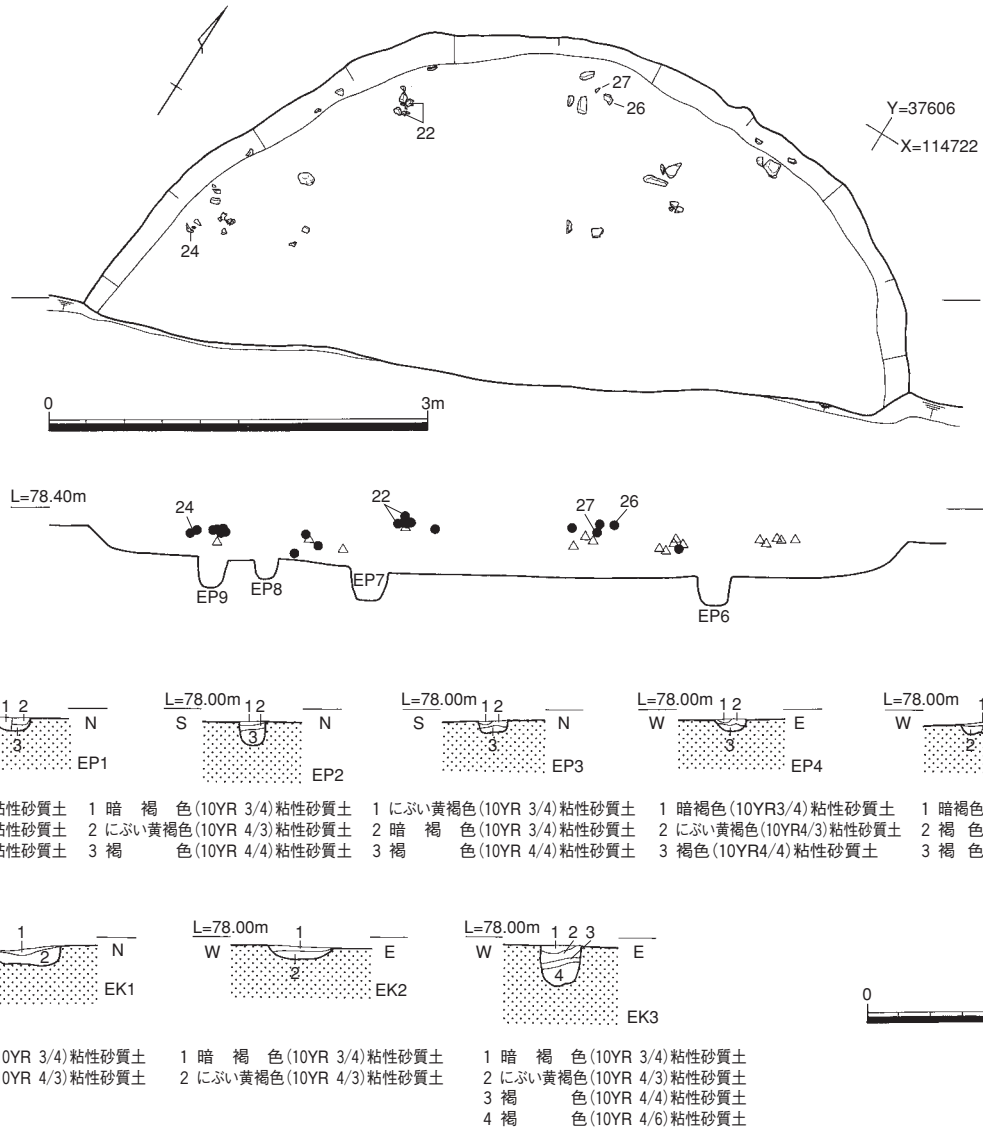
出土遺物から弥生時代後期後葉～終末期の年代が与えられるが、小型丸底鉢・手捏ね皿の出土から、この住居の主体は終末期後半の可能性が考えられる。

2号竪穴住居 (SB1002) (第18～20図)

位置・構造

5-B区 β-Ⅲ D・E-1・2で確認された竪穴住居。遺構の南側約2/3は、調査区外に延びる。

Y=37602
X=114722



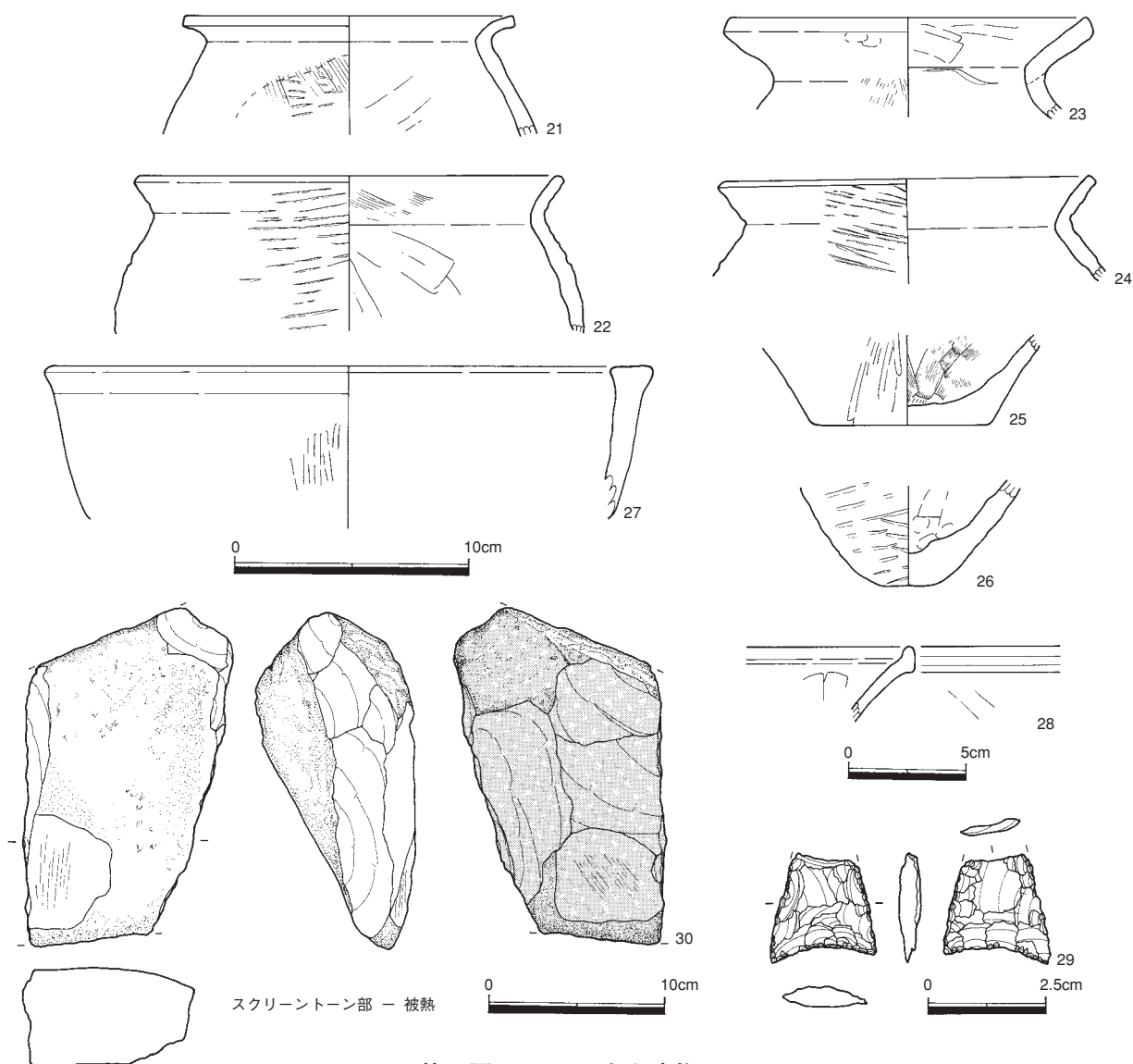
第19図 SB1002遺構図(2)

調査区内での最大長6.57m、最大深度0.32m、検出部分の床面積13.34m²を測る。検出状況から、この住居の平面形態は直径6.5m前後の円形、断面形態は逆台形と推測できる。

覆土除去後、床面に柱穴14基、土坑3基を検出した。検出状況から、主柱穴と思われる柱穴は7基である。また調査区内において、炉および周壁溝は確認出来なかった。

柱穴・土坑

柱穴は全部で14基検出できたが、そのうち主柱穴と思われる7基は直径0.22~0.33mの円形、最大深



第20図 SB1002出土遺物

度0.09~0.22mを測る。検出した範囲内での支柱穴間距離の最大は2.77m (EP 6・7間)、最小は1.33m (EP 4・5間)を測る。土質および含有物から各柱穴の覆土はそれぞれ分層できるものの、暗褐色ないしは褐色を主体とする。支柱穴7基のうち、EP 1・3・5・7の計4基で柱痕を確認した。支柱穴以外の柱穴7基は、直径0.19~0.41mの円形で最大深度0.06~0.24mを測る。またEP12で、柱痕を確認した。出土遺物は、EP12・13から弥生土器片が出土したのみである。

土坑は、調査区内で3基検出できた。EK 1は平面形態・底面形態ともにやや不整な方形、断面形態は逆台形を呈し、一辺0.51m前後、最大深度0.15mを測る。覆土は土色から2層に分層でき、両層ともににぶい黄褐色土ブロックを混入する。EK 2は平面形態・底面形態ともにやや不整な楕円形、断面形態は逆台形を呈し、長軸0.55m、短軸0.24m、最大深度0.10mを測る。覆土はEK 1と同じく土色から2層に分層でき、にぶい黄褐色土ブロックを混入する。EK 3は平面形態・底面形態ともにやや不整な

楕円形ないしは円形、断面形態は逆台形を呈し、長軸0.32m、最大深度0.32mを測る。覆土は土質および含有物から4層に分層できるものの、概ね3層に分けることが出来る。上層（1層）は暗褐色粘性砂質土、中層（2層）はにぶい黄褐色粘性砂質土、下層（3・4層）は褐色粘性砂質土で4層のほうが粒子が細かく砂質が強い。

各土坑ともに、出土遺物は認められなかった。

土層（第18図）

SB1002の土層堆積は、調査時の所見で約60層に分層されている。これは層中に含まれるブロック土を一つの層として捉え、このように細分化したと考えられる。堆積状況を検討した結果、大きく16層に分けることができ、本報告においてはこの検討結果に基づき述べていく。

覆土は概ねにぶい黄褐色ないし暗褐色を呈し、色調・土質の違いにより16層に分けることが出来る。特に含有物の違いから、大きくⅠ層（1・2層）、Ⅱ層（3・4層）、Ⅲ層（5～7層）、Ⅳ層（8～10層）、Ⅴ層（11～13層）の5つに分けることが可能である。Ⅱ層のうち3層は褐色粘性砂質土で、にぶい黄褐色土ブロックを大量に混入する。4層はにぶい黄褐色粘性砂質土で、暗褐色土ブロックを混入する。Ⅲ層は暗褐色粘性砂質土で、にぶい黄褐色土ブロックを混入する。5層で多く認められる。Ⅴ層は暗褐色粘性砂質土で、にぶい黄褐色土をブロック状に混入する。

構築面としての床面は砂層で、貼床と考えられる層は確認できなかった。

出土遺物（第20図）

壺形土器3点、甕形土器13点、鉢形土器3点、高坏形土器2点、サヌカイト剥片3点、砂岩製砥石1点を含む総点数324点出土した。そのうち図化可能な遺物は、10点である。21～26は甕、27・28は鉢、30は欠損した砂岩製砥石、29は先端部が欠損した凹基式のサヌカイト製石鏃である。30は表裏に砥面が認められ、裏面が被熱する。

時期

出土遺物から、弥生時代後期後葉～終末期前半の年代が与えられるが、終末期前半が主体と思われる。

3号竪穴住居（SB1003）（第21～23図）

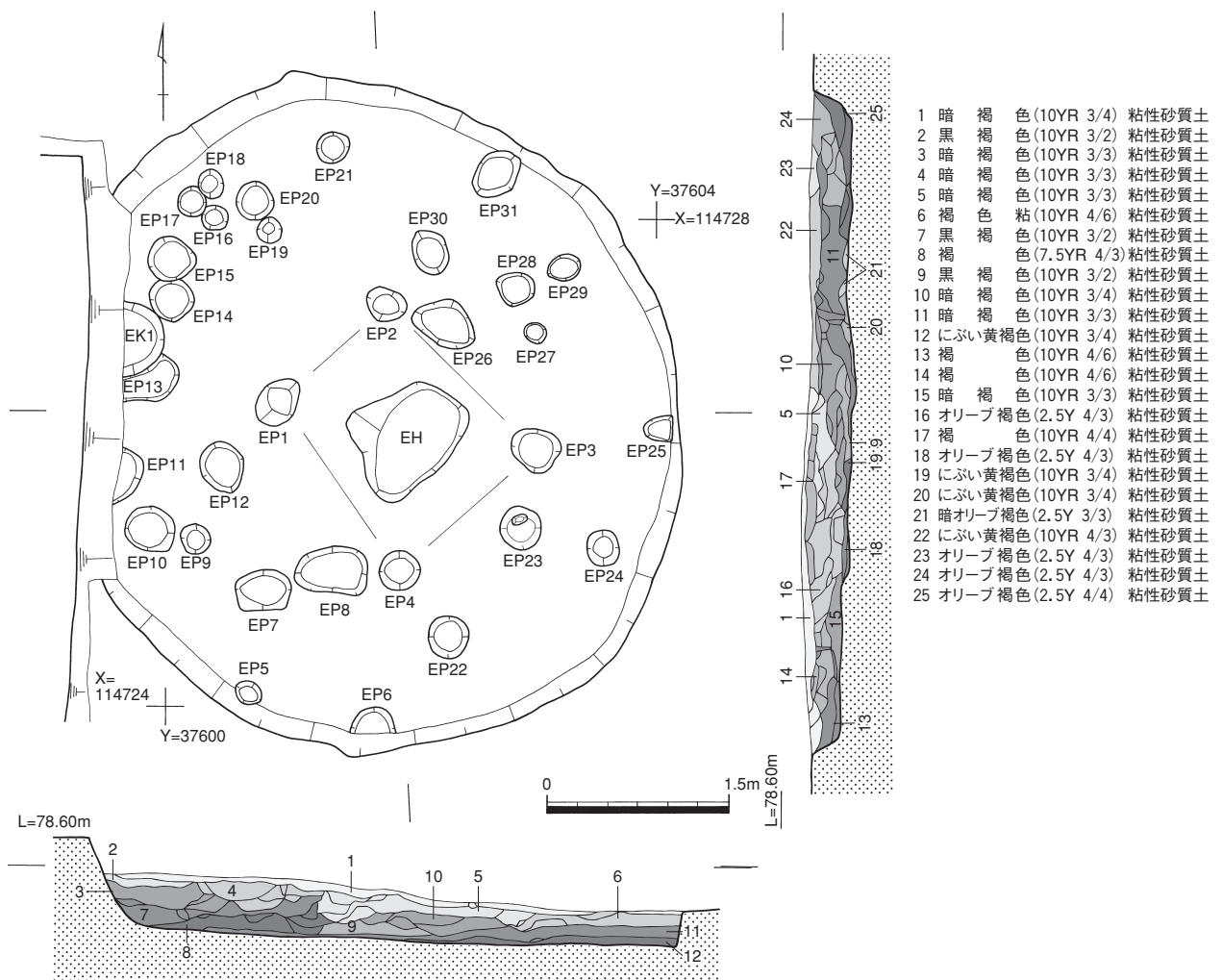
位置・構造（第21・22図）

5-B区 β-II・III E・F-20・1で確認された竪穴住居。遺構の一部は、上物残存のため未調査である。長軸5.57m、最大深度0.48m、検出部分の床面積21.13m²を測り、住居の平面形態・底面形態ともにやや不整な円形、断面形態は逆台形を呈する。

覆土除去後、床面に柱穴31基、土坑1基、炉1基を検出した。検出状況から主柱穴は4基と思われる。また周壁溝ならびにその他の施設は、確認出来なかった。

遺物の出土量はそれほど多くなく、散在した状況での出土である。

柱穴・土坑（第22図）

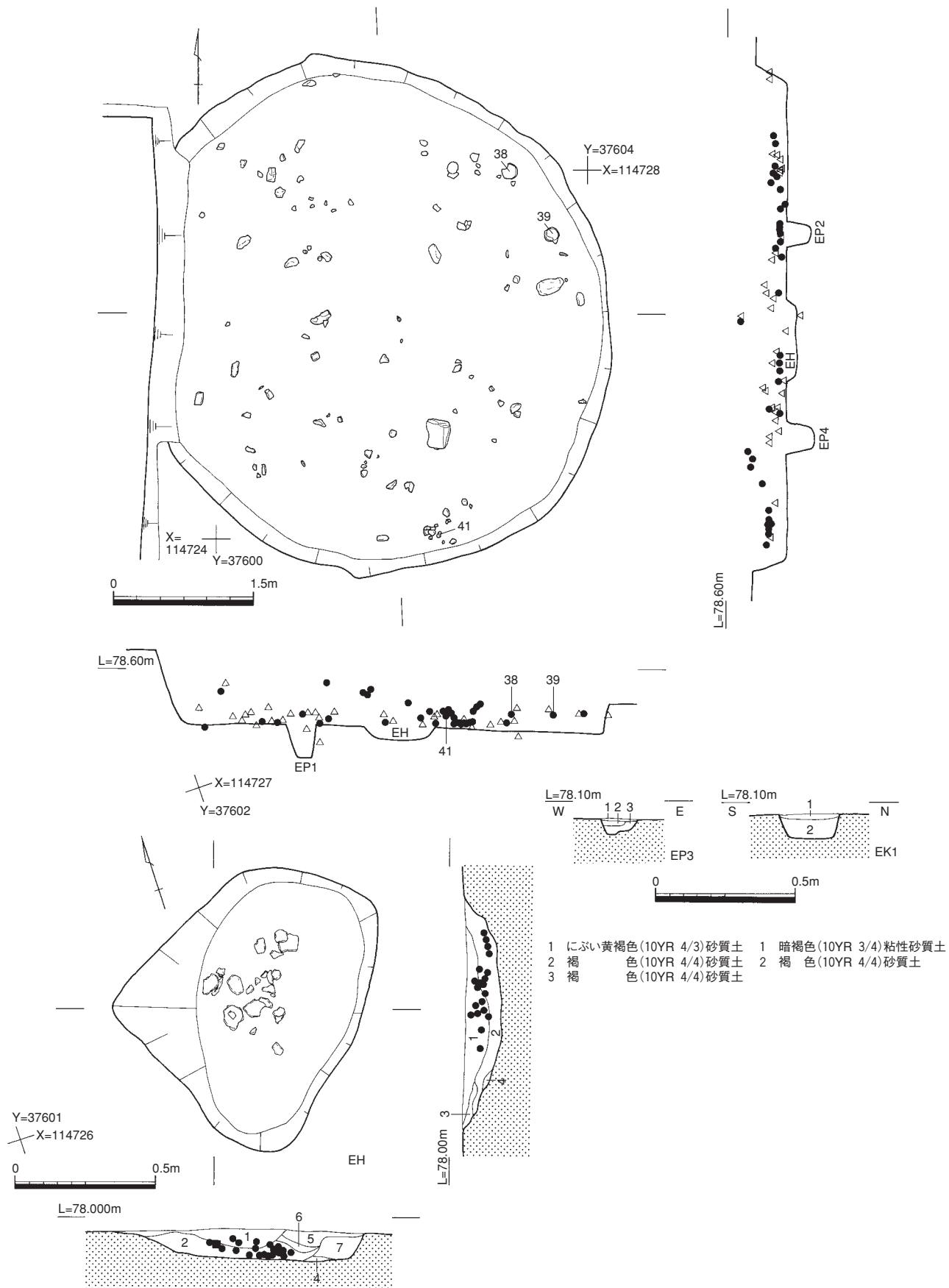


第21図 SB1003遺構図

柱穴は全部で31基検出され、そのうちEP 1～4の計4基が主柱穴と考えられる。主柱穴は長軸・直径0.32～0.48mの円形および楕円形、最大深度0.18～0.35mを測る。柱穴間距離の最大は1.71m (EP 2・3間)、最小は1.18m (EP 1・2間)である。土質および含有物から各主柱穴の覆土はそれぞれ分層できるものの、概ね褐色を主体とする。また主柱穴のなかでは、柱痕は確認されなかった。主柱穴以外の柱穴27基のうち20基は直径0.17～0.39mの円形で、最大深度0.05～0.2mを測る。残り7基は長軸0.36～0.61m、短軸0.21～0.38m、深さ0.04～0.2mの楕円形を呈する。土質および含有物から各柱穴の覆土はそれぞれ分層できるものの、褐色ないしはにぶい黄褐色を主体とする。27基の内、柱痕を確認したのはEP19のみである。

柱穴からの出土遺物は、EP15から広口壺形土器が、EP20から甕形土器が、EP 2・4・9・11～17・19・21から弥生土器片が出土したが、小片のために図化できなかった。

土坑は1基検出したが、未調査部分に半分以上かかっているため詳細は不明である。検出部分から、平面形態・底面形態は円形ないし楕円形、断面形態は逆台形を呈し、最大幅0.64m、最大深度0.26mを



第22図 SB1003・SB1003EH遺構図

測る。覆土は、土色から2層に分層できる。土坑内から、遺物の出土は認められない。

土層（第21図）

調査時の所見では層中に含まれるブロック土を一つの層とし、細分化して捉えている。堆積状況を検討した結果、SB1003の土層堆積は大きく25層に分けることができ、本報告においてはこの検討結果に基づき述べていく。

覆土は暗褐色を主体とするものの、色調・土質の違いにより25層に分層できる。層中に含まれる含有物を見ると、2・7・9層は、土器片・炭化物・焼土塊を含む。3・4・5・14・17・25層はにぶい黄褐色土ブロックを混入し、14層はその比率が大きい。6層は、焼土ブロックを若干含む。8層は焼土を多く含み、土器片を混入する。10層は褐色土ブロックを混入し、土器片・炭化物・焼土塊を含む。13層は、焼土およびにぶい黄褐色土ブロックを多く混入する。15層はにぶい黄褐色土・褐色土ブロックを多く混入し、土器片・炭化物・焼土を含む。16・22層は、土器片・炭化物を若干含む。18層は、褐色土ブロックをやや多く混入する。19層は、砂質が強い。20・24層は暗褐色土ブロックを混入し、24層はその比率が大きい。21層は、土器片を含む。

構築面としての床面は、一部砂礫層が認められるものの概ね砂層である。貼床の可能性を考えたものの明瞭に区分できず、貼床と考えられる層の確認には至らなかった。

炉（第22図）

平面形態は不整な楕円形、底面形態は楕円形、断面形態は緩やかな舟底形を呈し、長軸1.02m、短軸0.9m、最大深度0.13mを測る。住居中央部よりやや東側、支柱穴間のほぼ中央にあたる部分に作り付けられている。覆土は、土質および含有物から7層に分層できる。1層は暗褐色粘性砂質土で炭化物・土器片を含み、焼土および褐色土ブロックを若干混入する。2層は黒色粘性砂質土で、炭化物が大半を占める。また1層との境に、部分的に土器片を多く含む個所がある。3・4層は暗褐色粘性砂質土、5層は黒褐色粘性砂質土で焼土ブロックを混入する。6層は暗褐色粘性砂質土で、焼土ブロックを混入する。7層は暗褐色粘性砂質土である。

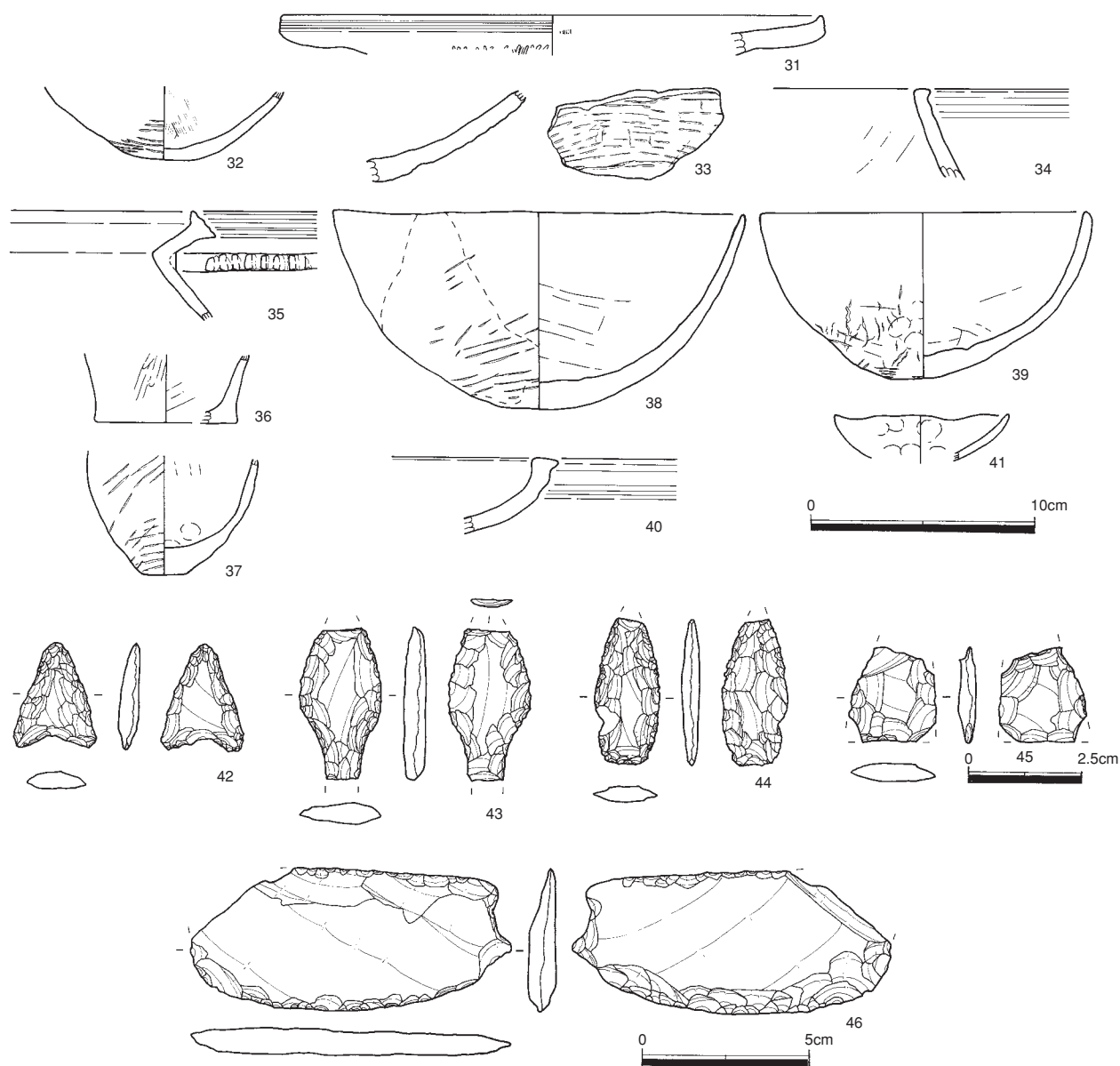
出土遺物は、炉のほぼ中央部の床面からやや浮いた状態で出土した。壺形土器底部3点、甕形土器口縁部2点・底部1点、鉢形土器口縁部2点、体部片85点、焼土塊1点が出土したが、小片のために図化できるものはなかった。

出土遺物（第23図）

壺形土器56点、甕形土器50点、鉢形土器10点、高坏形土器5点、手捏ね皿1点、サヌカイト剥片18点、結晶片岩製敲石1点、砂岩4点、管玉1点が出土した。図化可能な遺物はそのうち16点である。広口壺(31)・無頸壺(34)、底部(32・33)、甕(35・36)、鉢(37~39)、高坏(40)、手捏ね皿(41)、サヌカイト製石鏃(42~45)、砂質片岩を用いた石庖丁(46)である。石鏃は凹基式(42)・有茎式(43・44)・平基三角(45)が出土した。46は一部欠損するが、平刃・複刃を持つ。

時期

出土遺物の中に弥生時代中期後葉の土器も含まれるが、主体は終末期前半と思われる。



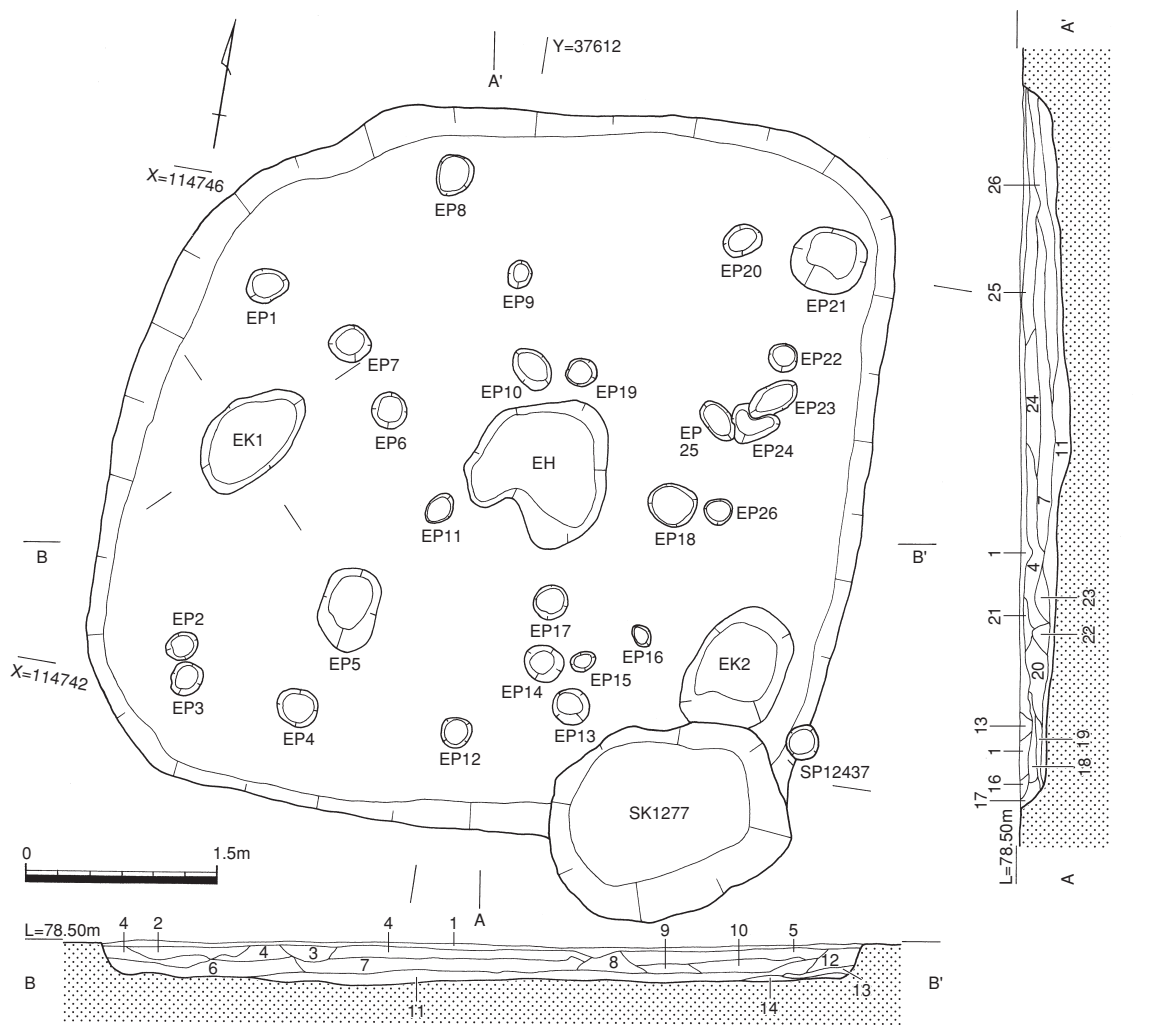
第23図 SB1003出土遺物

竪穴住居 4号 (SB1004) (第24~32図)

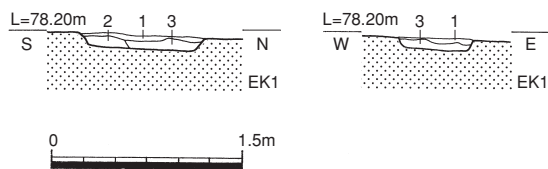
位置・構造

5-B区 β-Ⅲ H・I-2・3でSK1277とSP12437に切られた状態で確認された竪穴住居。この住居の平面形態・底面形態ともにやや不整な隅丸方形、断面形態は逆台形を呈する。長軸7.34m、短軸5.74m、最大深度0.41m、床面積29.73m²を測る。

覆土除去後、床面に柱穴26基、土坑2基、炉1基を検出した。また周壁溝などの他の施設を確認する



- | | | | |
|-------------------------|--------------------------|--------------------------|--------------------------|
| 1 にぶい黄褐色(10YR 4/3)粘性砂質土 | 8 にぶい黄褐色(10YR 4/3)粘性砂質土 | 15 にぶい黄褐色(10YR 4/3)粘性砂質土 | 22 暗灰黄色(2.5Y 4/2)粘性砂質土 |
| 2 褐色(10YR 4/6)粘性砂質土 | 9 暗灰黄色(2.5Y 4/2)粘性砂質土 | 16 褐色(10YR 4/6)粘性砂質土 | 23 にぶい黄褐色(10YR 4/3)粘性砂質土 |
| 3 褐色(10YR 4/6)粘性砂質土 | 10 暗灰黄色(2.5Y 4/2)粘性砂質土 | 17 暗灰黄色(2.5Y 4/2)粘性砂質土 | 24 にぶい黄褐色(10YR 4/3)粘性砂質土 |
| 4 暗灰黄色(2.5Y 4/2)粘性砂質土 | 11 黄灰色(2.5Y 4/1)粘性砂質土 | 18 褐色(10YR 4/4)粘性砂質土 | 25 暗灰黄色(2.5Y 4/2)粘性砂質土 |
| 5 褐色(10YR 4/4)粘性砂質土 | 12 暗灰黄色(2.5Y 4/2)粘性砂質土 | 19 暗灰黄色(2.5Y 4/2)粘性砂質土 | 26 にぶい黄褐色(10YR 4/3)粘性砂質土 |
| 6 にぶい黄褐色(10YR 4/3)粘性砂質土 | 13 にぶい黄褐色(10YR 4/3)粘性砂質土 | 20 暗灰黄色(2.5Y 4/2)粘性砂質土 | |
| 7 にぶい黄褐色(10YR 4/3)粘性砂質土 | 14 褐色(10YR 4/6)粘性砂質土 | 21 にぶい黄褐色(10YR 4/3)粘性砂質土 | |

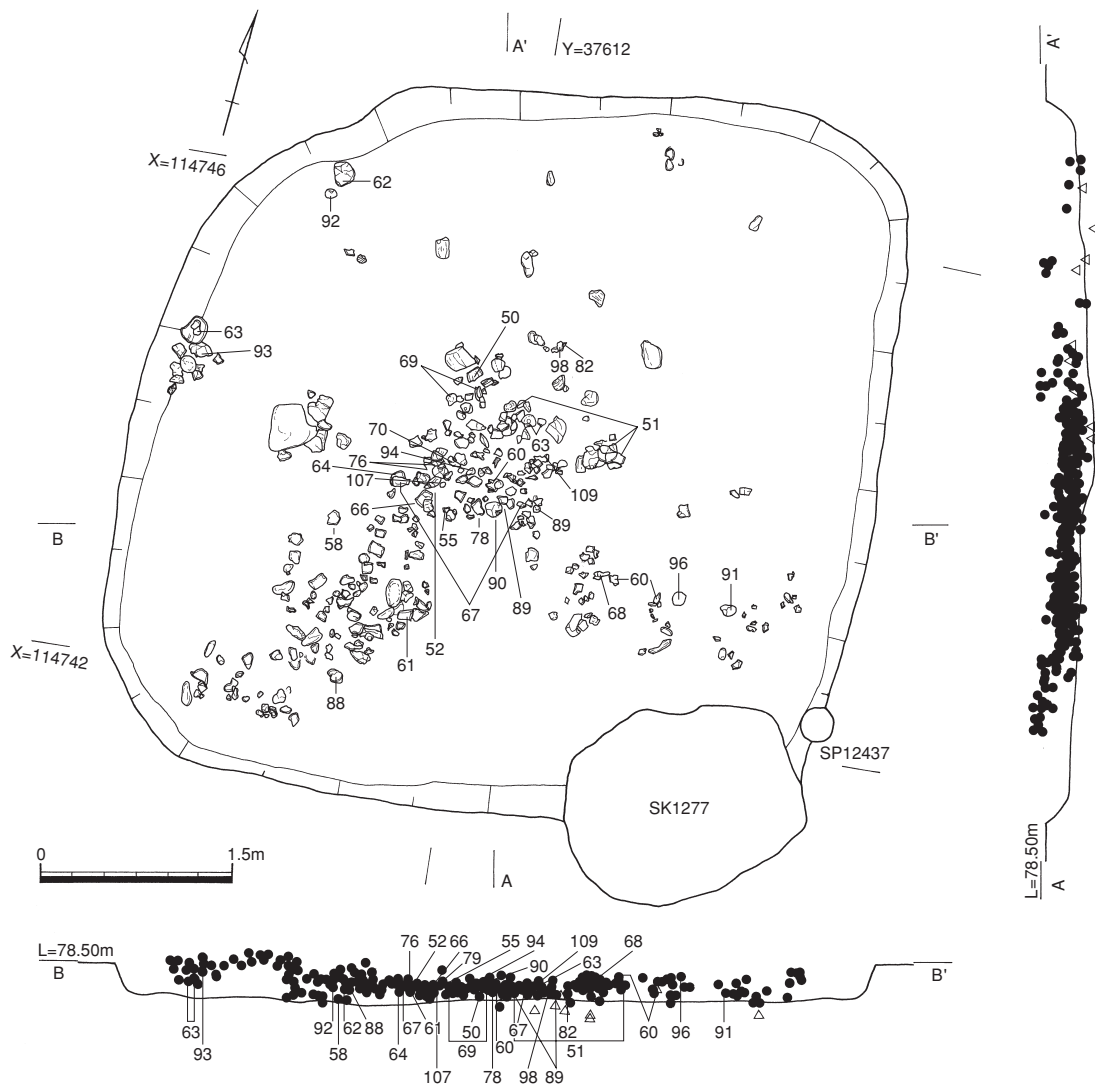


- | |
|-------------------------|
| 1 にぶい黄褐色(10YR 4/3)粘性砂質土 |
| 2 褐色(10YR 4/4)粘性砂質土 |
| 3 褐色(10YR 4/4)粘性砂質土 |

第24図 SB1004遺構図(1)

ことはできなかった。

遺物の出土量は、検出した竪穴住居跡16軒のうち最多の出土量を誇るSB1009に次ぐ多さである。遺

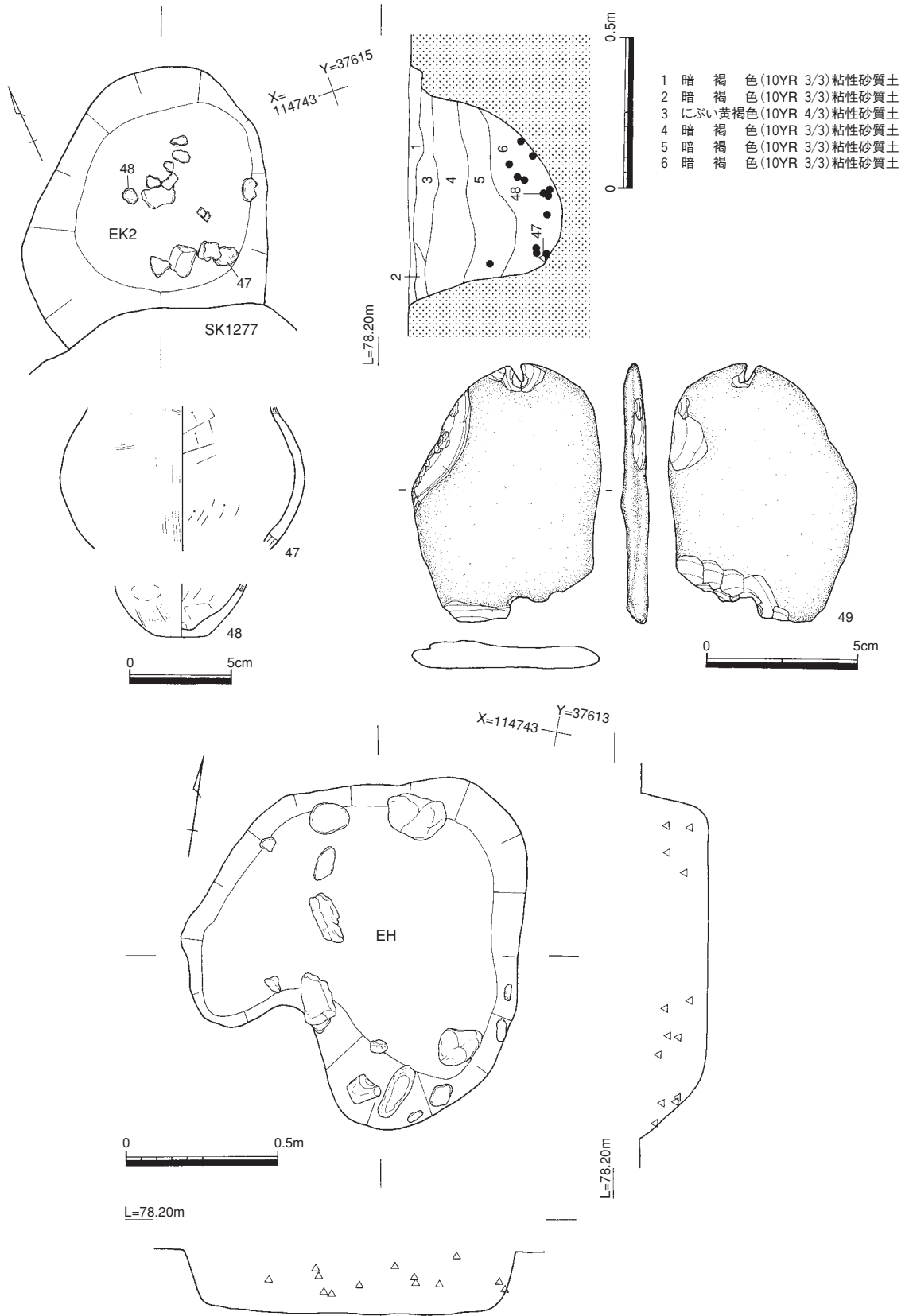


第25図 SB1004遺構図(2)

物は、遺構の中央から南西隅にかけてやや密集した状態で出土している。

柱穴・土坑（第26図）

柱穴は、全部で26基検出された。住居の平面形態から4本柱構造と考えられるものの、支柱穴と考えられる柱穴を抽出することはできなかった。柱穴26基のうち平面形態が円形を呈する柱穴は23基で、直径0.19～0.39m、最大深度0.04～0.38mを測る。平面形態が楕円形を呈する柱穴は3基で、長軸0.35～0.66m、短軸0.2～0.45m、最大深度0.03～0.45mを測る。土質および含有物から各支柱穴の覆土はそれぞれ分層できるものの、概ね褐色を主体とする。EP4・11・13・14・21の計5基から柱痕を確認した。柱穴からの出土遺物は、EP5・7・10・11・15・16・21で弥生土器片が、EP6・8から弥生土器片・サヌカイト剥片が、EP20から鉢形土器・高坏形土器が、EP24から甕形土器が出土し、図化できたのはEP20から出土した高坏（105）のみである。



第26図 SB1004 EK2、EH遺構図・出土遺物

土坑は、住居内で2基検出できた。EK1は平面形態・底面形態ともに楕円形、断面形態は逆台形を呈し、長軸0.97m、短軸0.58m、最大深度0.11mを測る。覆土は土質および含有物から3層に分層できるものの、上層(1層)、下層(2・3層)の2層に分けることが出来る。出土遺物は、認められない。EK2はSK1277に切られているものの、平面形態・底面形態ともに楕円形、断面形態は不整形な舟底形を呈していたと思われる。最大長0.96m、短軸0.73m、最大深度0.52mを測る。覆土は概ね暗褐色を呈し、土質および含有物から6層に分層できる。また2・5・6層は、粘性が非常に強い。これらの層は上層(1～3層)、下層(4～6層)の2層に大きく分けることができ、上層は土器片・炭化物を若干含む。6層は、黒褐色土ブロックを混入する。出土遺物は壺形土器3点、甕形土器2点、体部片34点、結晶片岩製石錘1点の計40点が下層の6層を中心に認められ、そのうち図化できたのは壺(47)、甕(48)、緑泥片岩を用いた石錘(49)である。

土層(第24図)

土質および含有物から、覆土は概ね26層に分層できる。全般的に各層とも含有物は少ない。1層では、マンガン粒の沈着が層全体に多く認められる。2・3層では暗灰黄色土ブロックを、11層では褐色土ブロックをそれぞれ混入する。各層ともに遺物の出土が認められるが、7層からの出土量が最多である。

構築面としての床面は、概ね砂層である。貼床の可能性を考えたものの明瞭に区分できず、貼床と認められる層の確認には至らなかった。

炉(第26図)

平面形態・底面形態ともに不整形、断面形態が逆台形を呈し、規模は長軸1.14m、最大幅1.11m、最大深度0.21mを測る。炉は、住居のほぼ中央部に作り付けられる。その平面形態から2基の土坑の切り合い関係を想定したものの、土層堆積状況からそれを確認することはできなかった。

遺物は弥生土器片7点、焼土塊9点、直径5～20m大の砂岩・結晶片岩が出土したが、図化できるものはなかった。

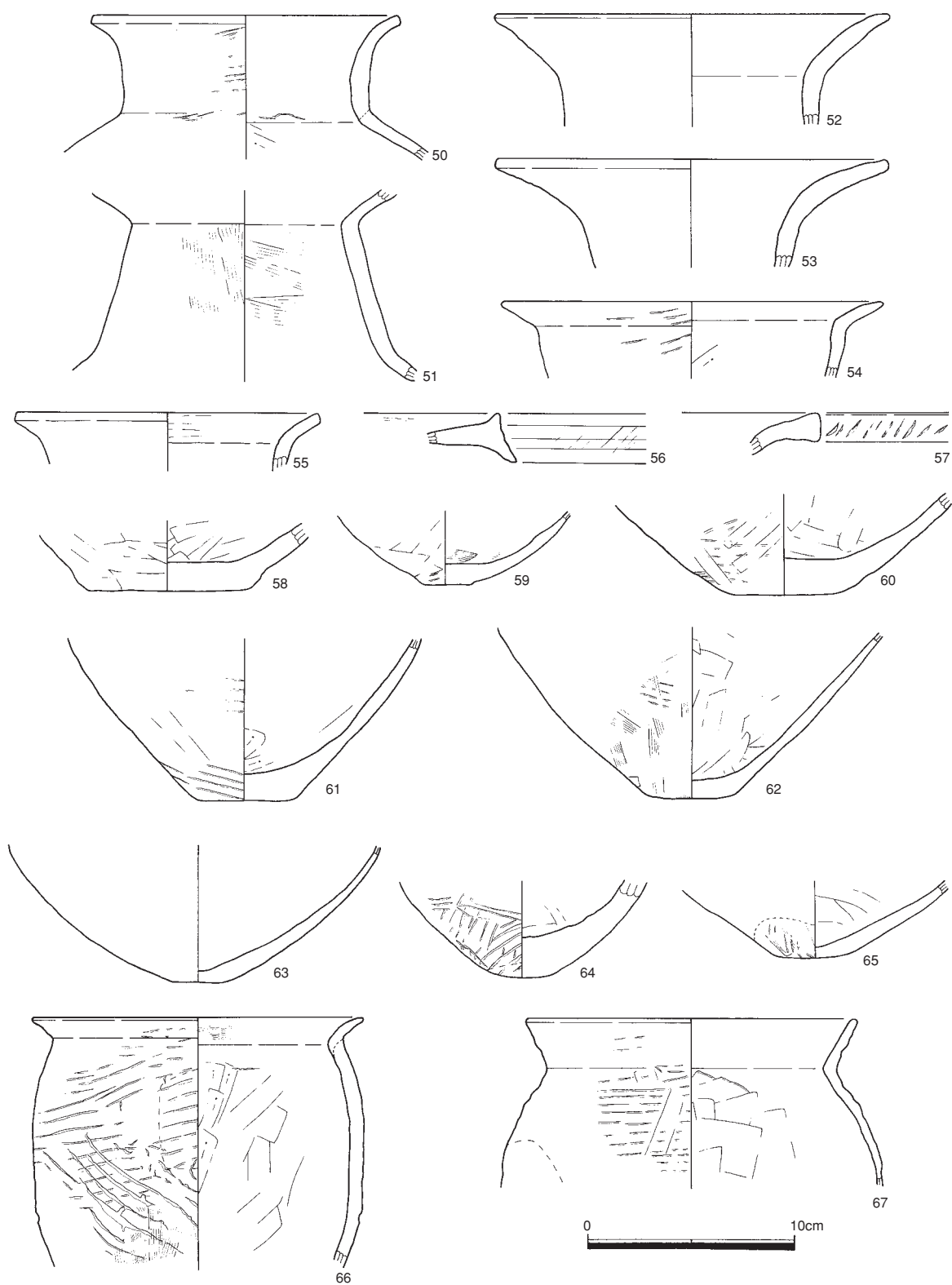
出土遺物(第27～32図)

壺形土器54点、甕形土器181点、鉢形土器19点、高坏形土器5点、体部片1752点、サヌカイト製石鏃・楔形石器各1点・剥片11点、結晶片岩製打製石庖丁4点・敲石2点・石鏃1点・石核1点・剥片6点、砂岩製およびハンレイ岩製砥石2点が出土した。図化可能な遺物は、そのうちの75点である。

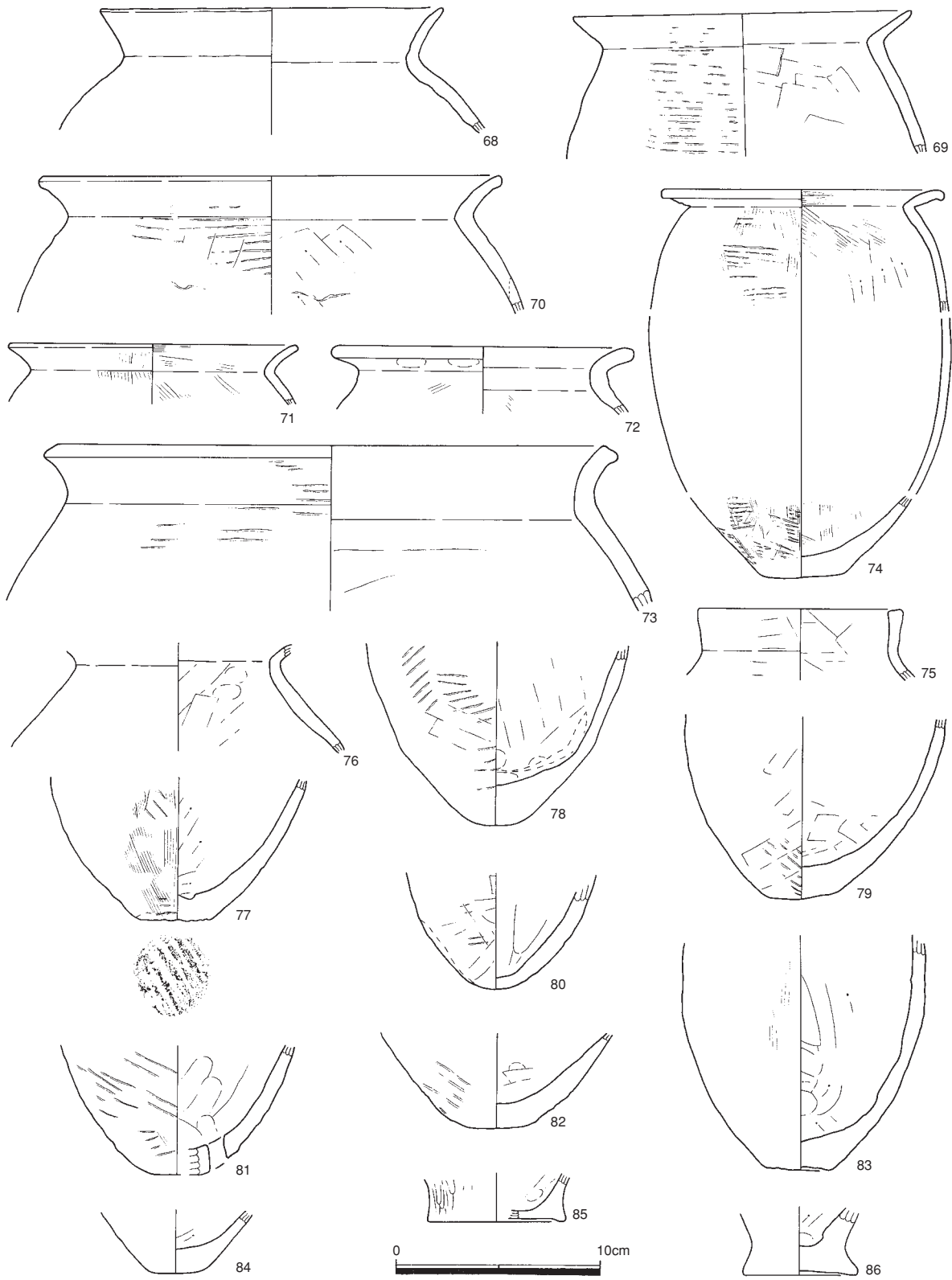
壺(50～53・55～58・60～65・75)のうち、50～57は広口壺・75は短頸直口壺である。56は遺存状態が悪いものの、口縁部端面に鋸歯文を施す。底部(58・60～65)は、平底である。

甕(66～80・82～86・99)は、いわゆるタタキ甕が主体となる。遺存状態の悪いものも多いが、外面の調整ではタタキの後に体部下半にハケメ(66・77)や、板ナデ(78～80)を施すものがある。体部上半部においては、タタキを施した後に調整を加えないもの(69)や、口縁部付近までハケメを施すもの(71)、板ナデを施すもの(70)がある。内面では、頸部付近までケズリを施したままのもの(70)や、その後ハケメを加えるものがある(74)。また体部下半では、ケズリの後にユビナデが認められるもの(83)もある。70・74は胎土に角閃石・金雲母を含むことから、讃岐からの搬入品である。

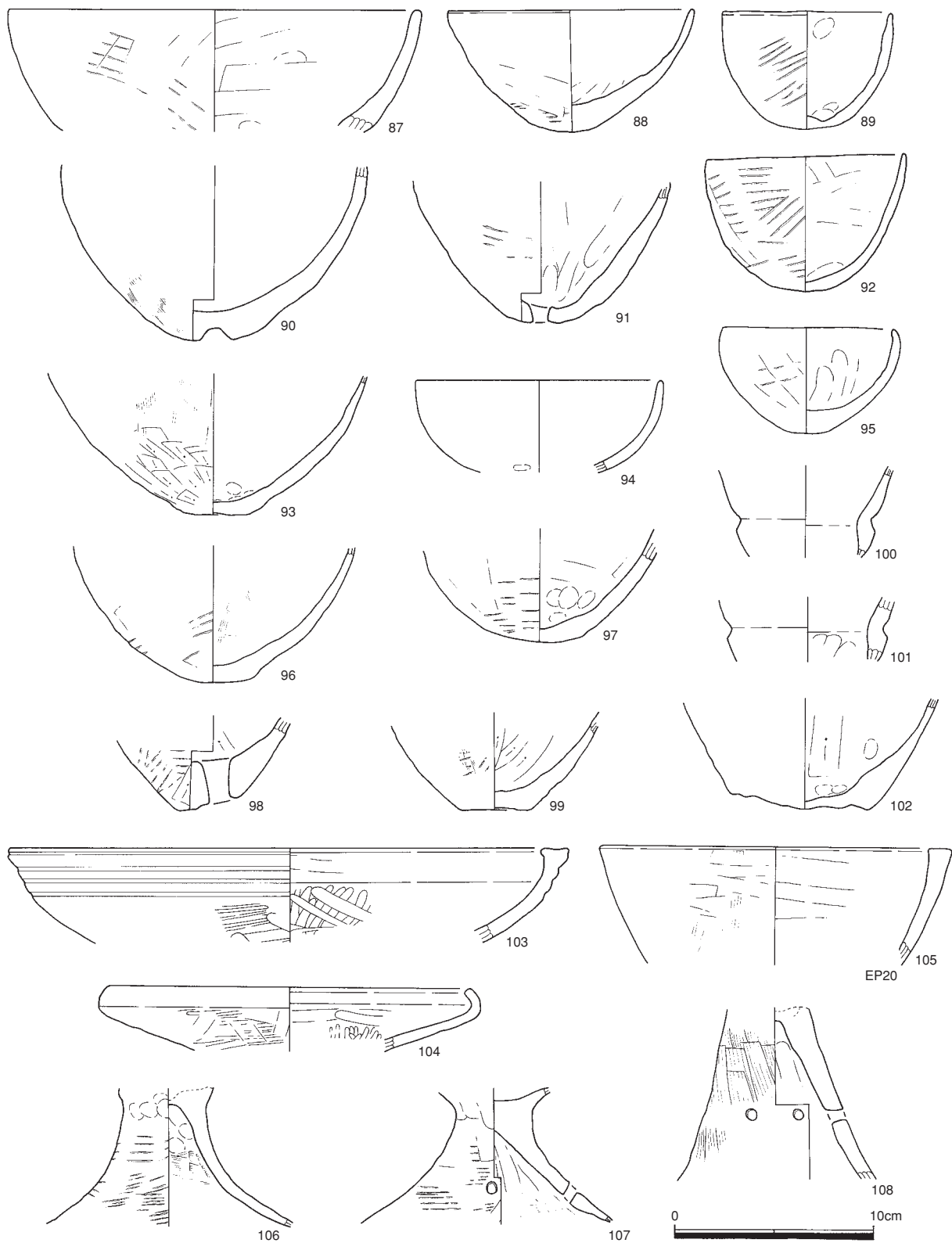
鉢(54・59・81・87～98・100・101)は、口縁部がくの字に折れ曲がるタイプのもの(54)やボウル



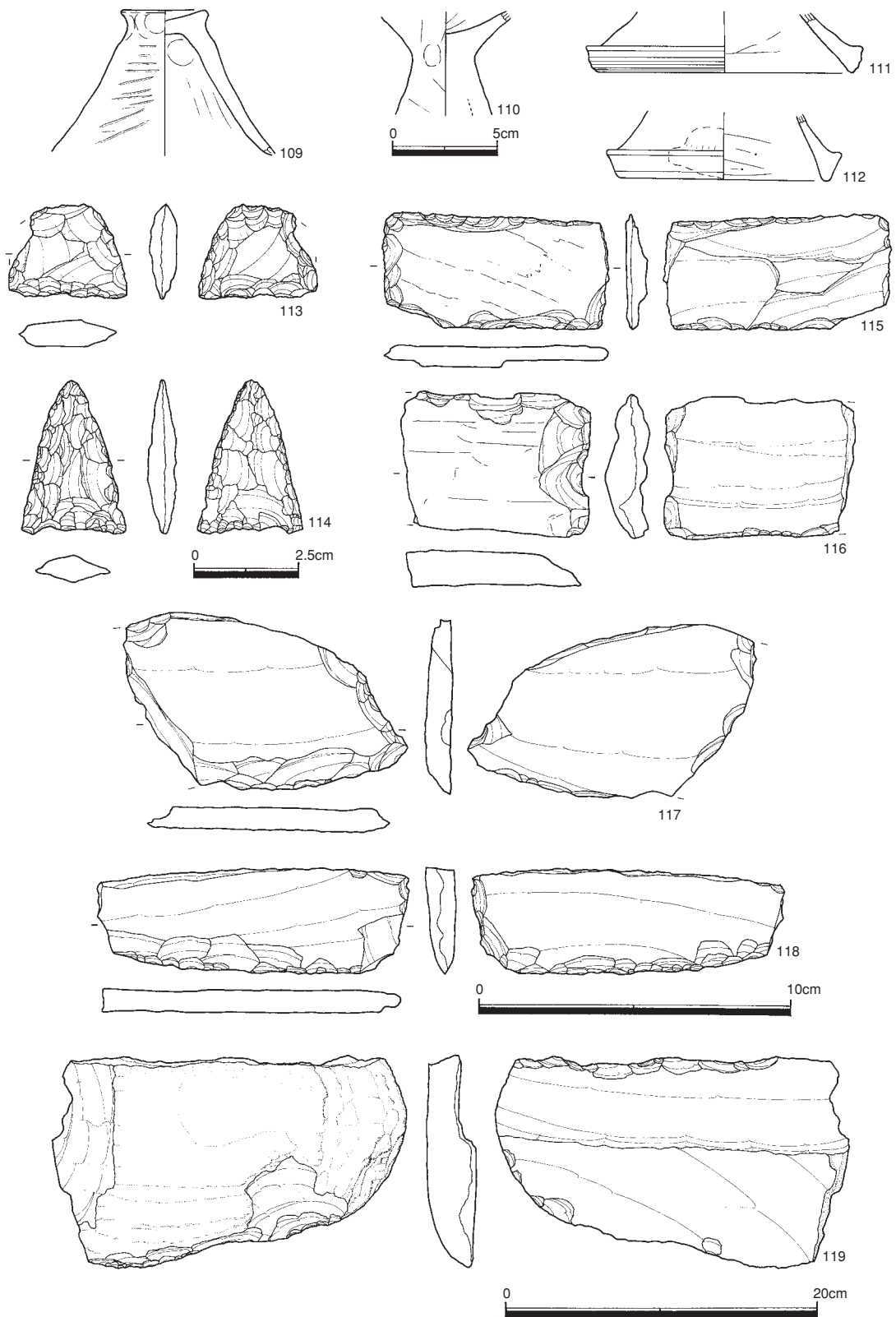
第27図 SB1004出土遺物(1)



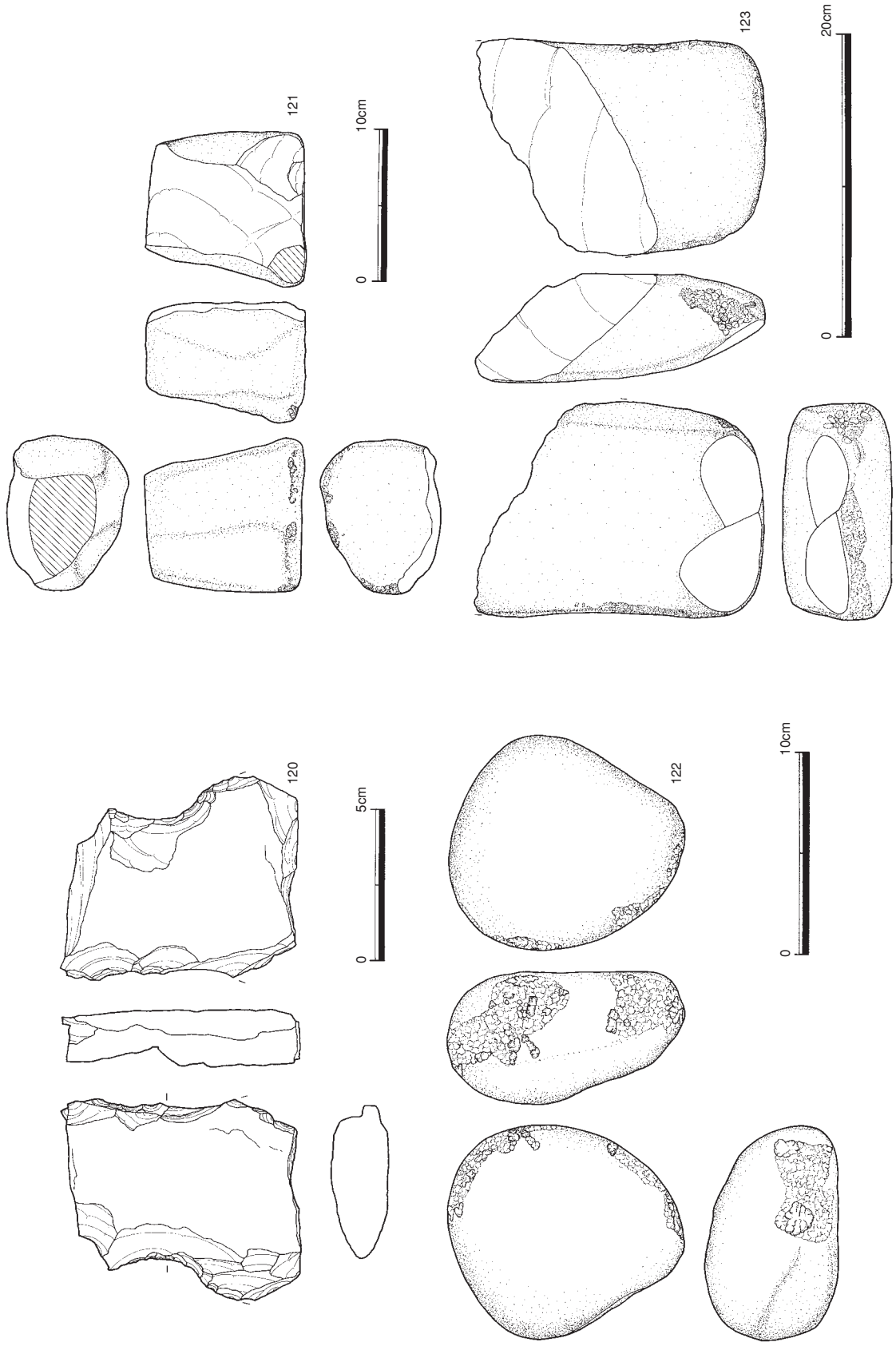
第28図 SB1004出土遺物(2)



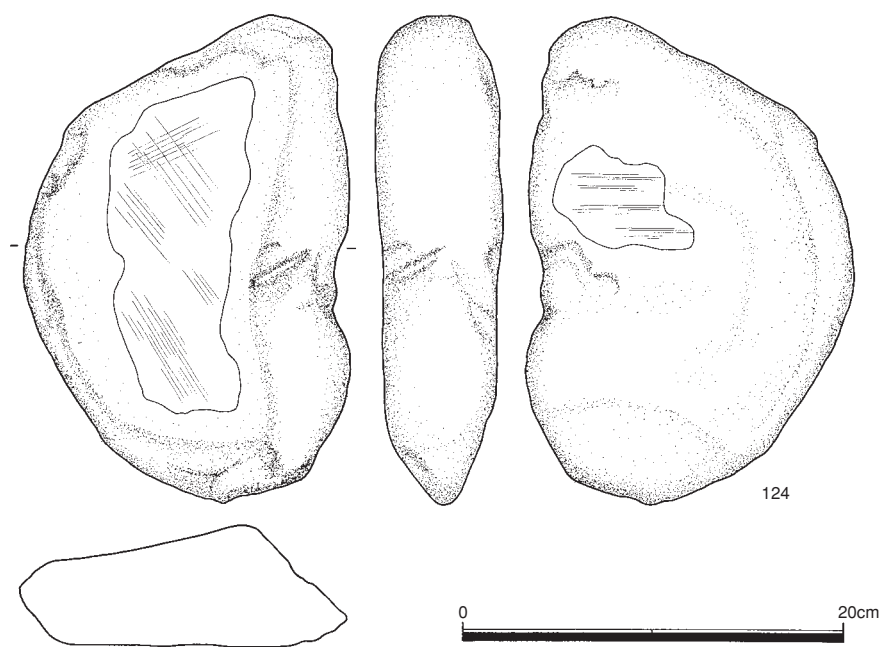
第29图 SB1004出土遺物(3)



第30図 SB1004出土遺物(4)



第31図 SB1004出土遺物(5)



第32図 SB1004出土遺物(5)

型（87～95）があり、そのうち底部に穿孔が認められる有孔鉢（81・91・98）がある。90は、未穿孔である。94は他のボール型の鉢と比較して、やや器高が低く扁平気味である。外面の調整は、タタキの後に何も調整を加えないもの（89）、板ナデ（87・88・92・95～97）を加えるものがある。また93のように体部下半にケズリ、上半部にハケメを施すものも存在する。内面の調整では、板ナデ・ユビナデ・ハケメが認められる。100・101は、小型丸底鉢の体部である。

高坏（102～112）は体部が外上方に緩やかに立ち上がり口縁端部を肥厚させるもの（103）、内部に口縁部を折り曲げるもの（104）がある。タタキの痕跡は認められない。102は、高坏の体部か。脚部は6個体実測できたが、そのうちの106・107・109にタタキが認められる。107は対角線上に4ヶ所、108は2穴1組で3ヶ所に穿孔が認められる。109は、蓋の可能性が考えられる。

114は、平基三角のサヌカイト製石鏃である。113は楔形石器で、左側縁部の一部を欠損する。115～118は単刃かつ平刃の石庖丁で、118の石材のみ紅簾片岩で他は砂質片岩を用いる。119は長さ20cm前後を測る砂質片岩の石核で、自然面が残る。120は砂質片岩を用いた石鏃である。121・122は砂岩製の敲石で、敲打痕が122は下部と右側縁部にそれぞれ1ヶ所、121は3ヶ所認められた。123・124は砥石で、123はハンレイ岩、124は砂岩を用いる。123は表面に砥面が2ヶ所、下・右・左の三ヶ所で敲打痕が認められた。124は表裏の2面で、砥面が認められる。

時期

小型丸底鉢、およびやや扁平なボール型の鉢の出土から、弥生時代後期後葉～終末期の年代が与えられる。しかし、底部が各器種ともに平底を主体とすることから、主体は終末期前半と思われる。

竪穴住居 5 号 (SB1005) (第33～37図)

位置・構造

5-A区 β-II I・J-13でSB1006・SP11077に切られた状態で確認された竪穴住居。この住居の平面形態・底面形態ともにほぼ円形、断面形態は緩やかな舟底形を呈する。長軸4.49m、最大深度0.11m、検出部分の床面積13.81m²を測り、深度が浅い。

覆土除去後、床面に柱穴12基、土坑2基、炉1基を検出した。検出状況から主柱穴は4基であり、そのうち1基はSB1006内で検出された。また住居内において、周壁溝ならびに他の施設は確認出来なかった。

柱穴・土坑 (第34～37図)

柱穴は全部で12基検出されているが、そのうちEP1～4の計4基が主柱穴と考えられる。主柱穴は直径0.31～0.42mの円形2基と、長軸0.51～0.53m、短軸0.43～0.44mの楕円形2基から成り、最大深度0.29～0.43mを測る。柱穴間距離の最大は2.15m (EP3・4間)、最小は1.92m (EP2・3間)である。各柱穴とも土質および含有物から覆土を分層しているものの、主要土色は暗褐色を呈する。どの主柱穴からも柱痕が確認された。主柱穴以外の柱穴8基のうち7基は、直径0.28～0.43mの円形で最大深度0.09～0.27mを測る。残り1基は長軸0.69m、短軸0.29m、深さ0.39mの楕円形を呈する。土色は、主柱穴と同じく暗褐色を主要土色とする。

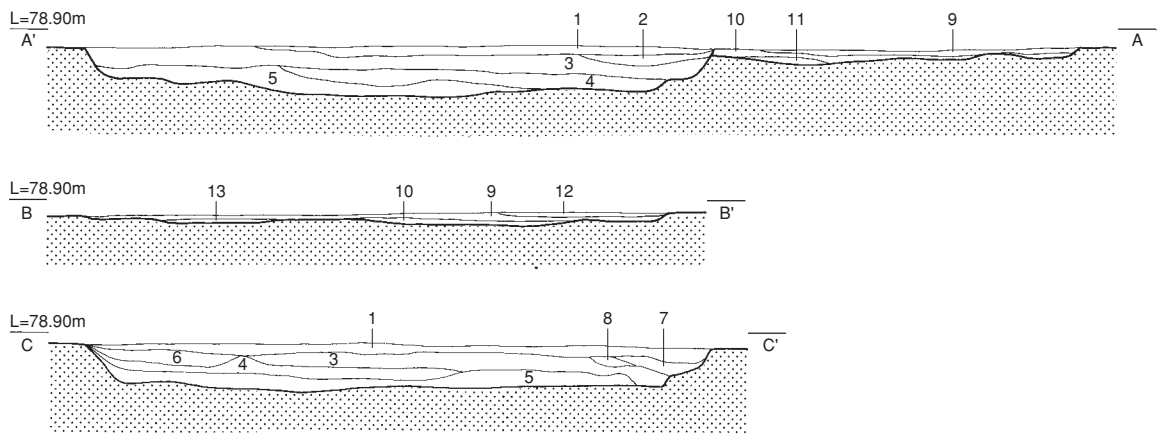
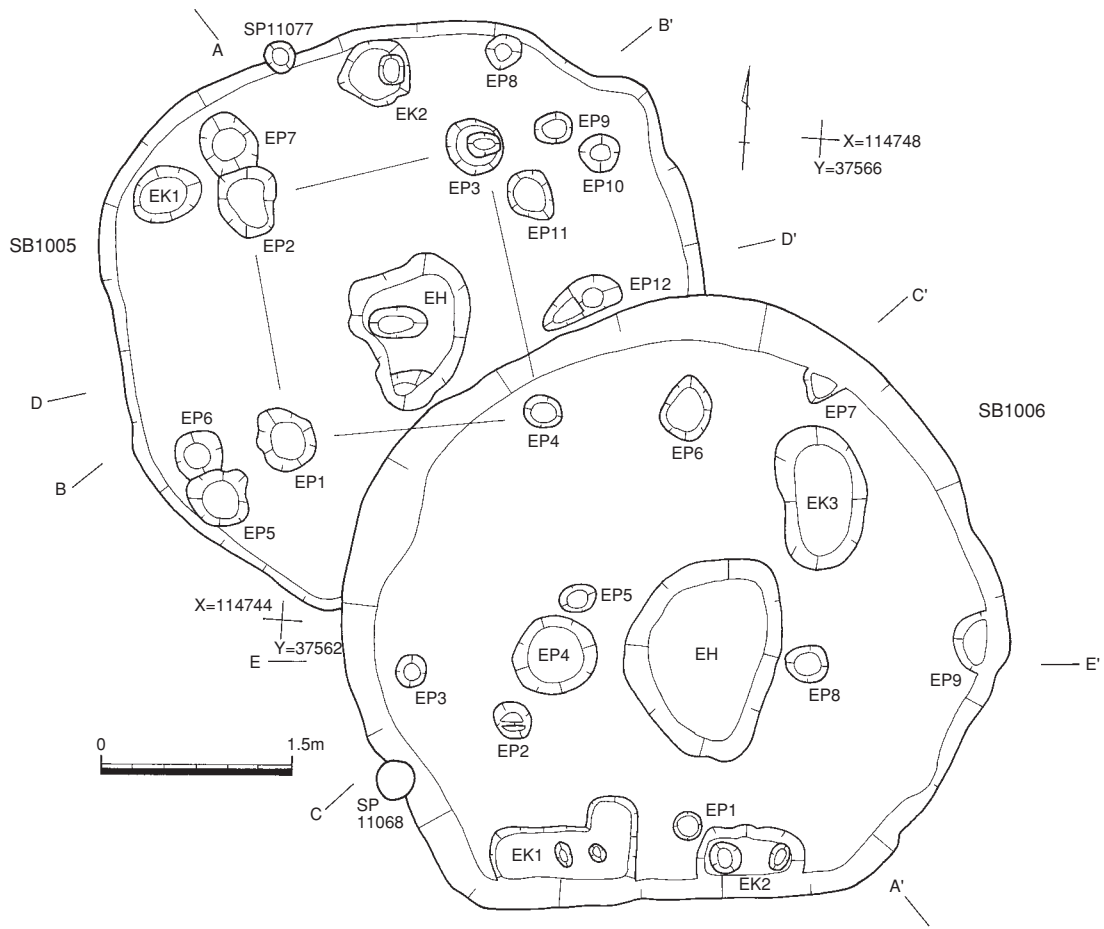
柱穴からの出土遺物は、EP1・3・6から弥生土器片が数点、EP2から弥生土器片3点と凹基式のサヌカイト製石鏃1点(136)、EP4から弥生土器片2点・結晶片岩剥片1点、EP7から甕形土器口縁部1点(137)と体部片2点、EP11から弥生土器片、打製石庖丁(135)が出土した。137は、内外面に炭化物が多量に付着する。135は砂質片岩を用いた石庖丁で、平刃・複刃を持ち、部分的に自然面が残る。

土坑は、住居内で2基検出できた。EK1は平面形態・底面形態ともに楕円形、断面形態は逆台形を呈し、長軸0.56m、短軸0.44m、深度0.10mを測る。覆土は暗褐色粘性砂質土で、土質および含有物から2層に分層できる。遺物は、壺形土器口縁部・体部片各1点、サヌカイト製石鏃1点である。図化できたのは、直口壺(138)と未製品の石鏃(139)である。EK2は平面形態・底面形態ともにやや不整な円形、断面形態は不整な舟底形を呈し、直径0.58m前後、最大深度0.16mを測る。覆土は暗褐色粘性砂質土で、土質および含有物から5層に分層できる。4・5層で褐色土ブロック混入する。遺物は弥生土器片4点、サヌカイト剥片1点が出土したが、小片のために図化できなかった。

遺構内遺構から出土した遺物は、住居内から出土したものと比較して時期差はほとんどない。

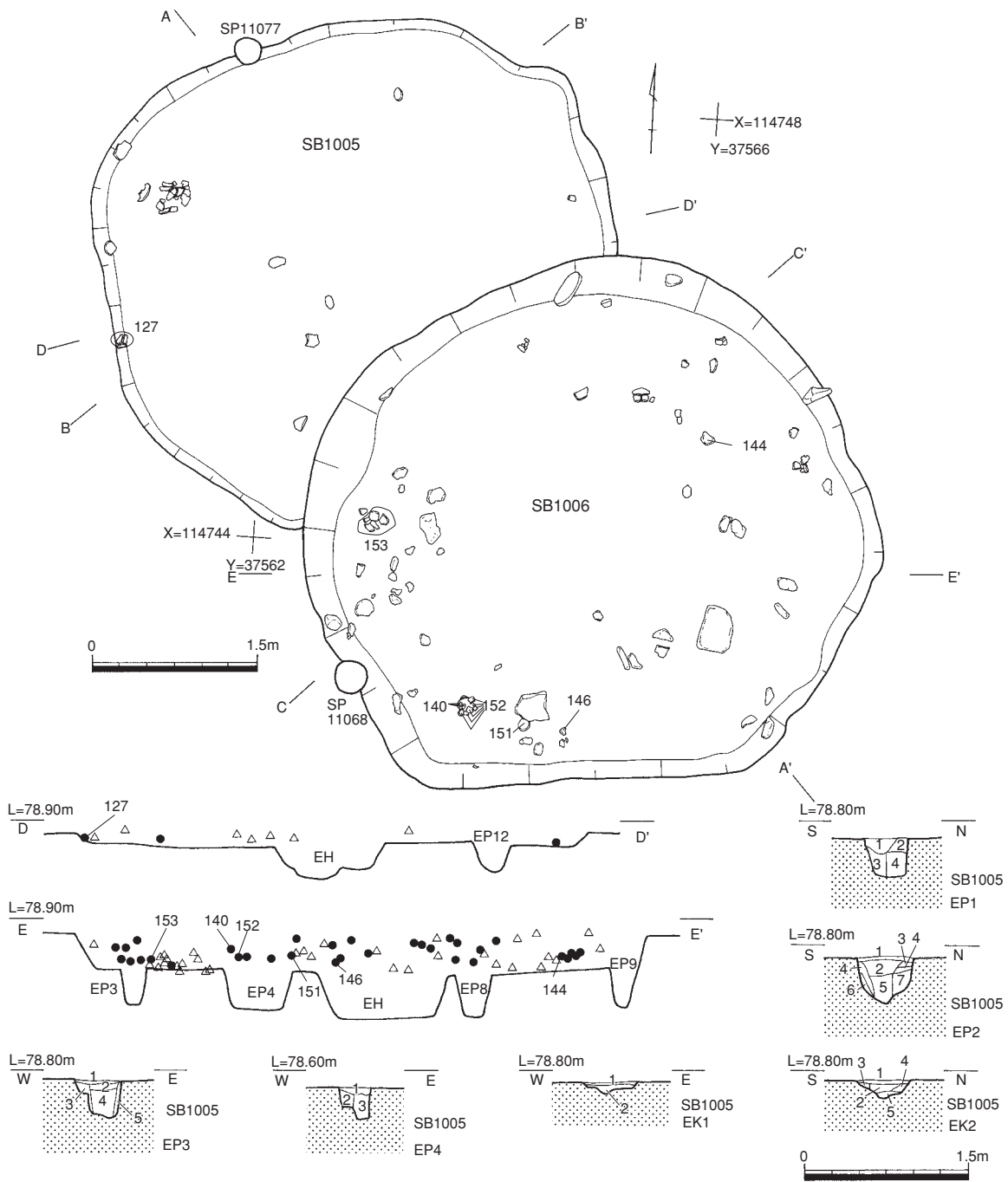
土層 (第33図)

覆土は暗褐色を呈し、土色および含有物から2層に分層できるが、部分的に3層になる個所もある。9・12層で、マンガン粒の沈着が若干認められる。遺物の出土量は非常に少なく、住居床面直上の西側を中心に散在した状況で確認した。



- | | |
|----------------------|-----------------------|
| 1 暗褐色(10YR 3/4)粘性砂質土 | 8 暗褐色(10YR 3/3)粘性砂質土 |
| 2 暗褐色(10YR 3/4)粘性砂質土 | 9 暗褐色(10YR 3/4)粘性砂質土 |
| 3 暗褐色(10YR 3/3)粘性砂質土 | 10 暗褐色(10YR 3/4)粘性砂質土 |
| 4 暗褐色(10YR 3/3)粘性砂質土 | 11 暗褐色(10YR 3/3)粘性砂質土 |
| 5 暗褐色(10YR 3/4)粘性砂質土 | 12 暗褐色(10YR 3/4)粘性砂質土 |
| 6 暗褐色(10YR 3/4)粘性砂質土 | 13 暗褐色(10YR 3/4)粘性砂質土 |
| 7 暗褐色(10YR 3/4)粘性砂質土 | |

第33図 SB1005・1006遺構図(1)



EP1-1 暗褐色(10YR 2/3)粘性砂質土
 2 暗褐色(10YR 3/4)粘性砂質土
 3 暗褐色(10YR 3/4)粘性砂質土
 4 暗褐色(10YR 3/4)粘性砂質土

EP3-1 暗褐色(10YR 3/3)粘性砂質土
 2 暗褐色(10YR 4/3)粘性砂質土
 3 褐色(10YR 4/4)粘性砂質土
 4 暗褐色(10YR 3/4)粘性砂質土
 5 暗褐色(10YR 3/4)粘性砂質土

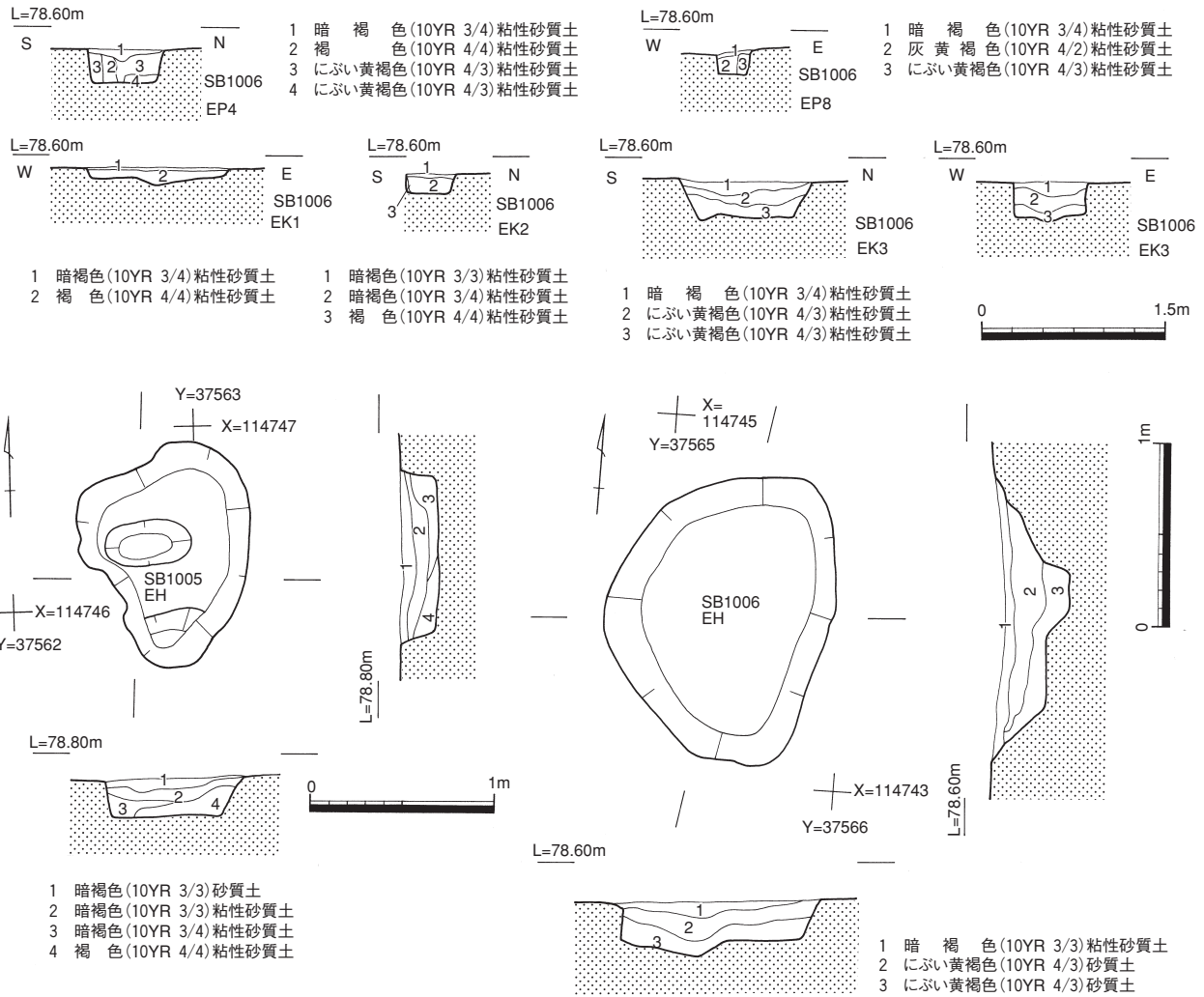
EK1-1 暗褐色(10YR 3/3)粘性砂質土
 2 暗褐色(10YR 3/4)粘性砂質土

EP2-1 暗褐色(10YR 3/3)粘性砂質土
 2 暗褐色(10YR 3/4)粘性砂質土
 3 褐色(10YR 4/4)粘性砂質土
 4 暗褐色(10YR 3/4)粘性砂質土
 5 暗褐色(10YR 3/4)粘性砂質土
 6 褐色(10YR 4/4)粘性砂質土
 7 にぶい黄褐色(10YR 4/3)粘性砂質土

EP4-1 にぶい黄褐色(10YR 4/3)粘性砂質土
 2 暗褐色(10YR 3/4)粘性砂質土
 3 灰黄褐色(10YR 4/2)粘性砂質土

EK2-1 暗褐色(10YR 3/3)粘性砂質土
 2 暗褐色(10YR 3/4)粘性砂質土
 3 暗褐色(10YR 3/4)粘性砂質土
 4 暗褐色(10YR 3/4)粘性砂質土
 5 暗褐色(10YR 3/4)粘性砂質土

第34図 SB1005・1006遺構図(2)



第35図 SB1005・1006遺構内遺構図

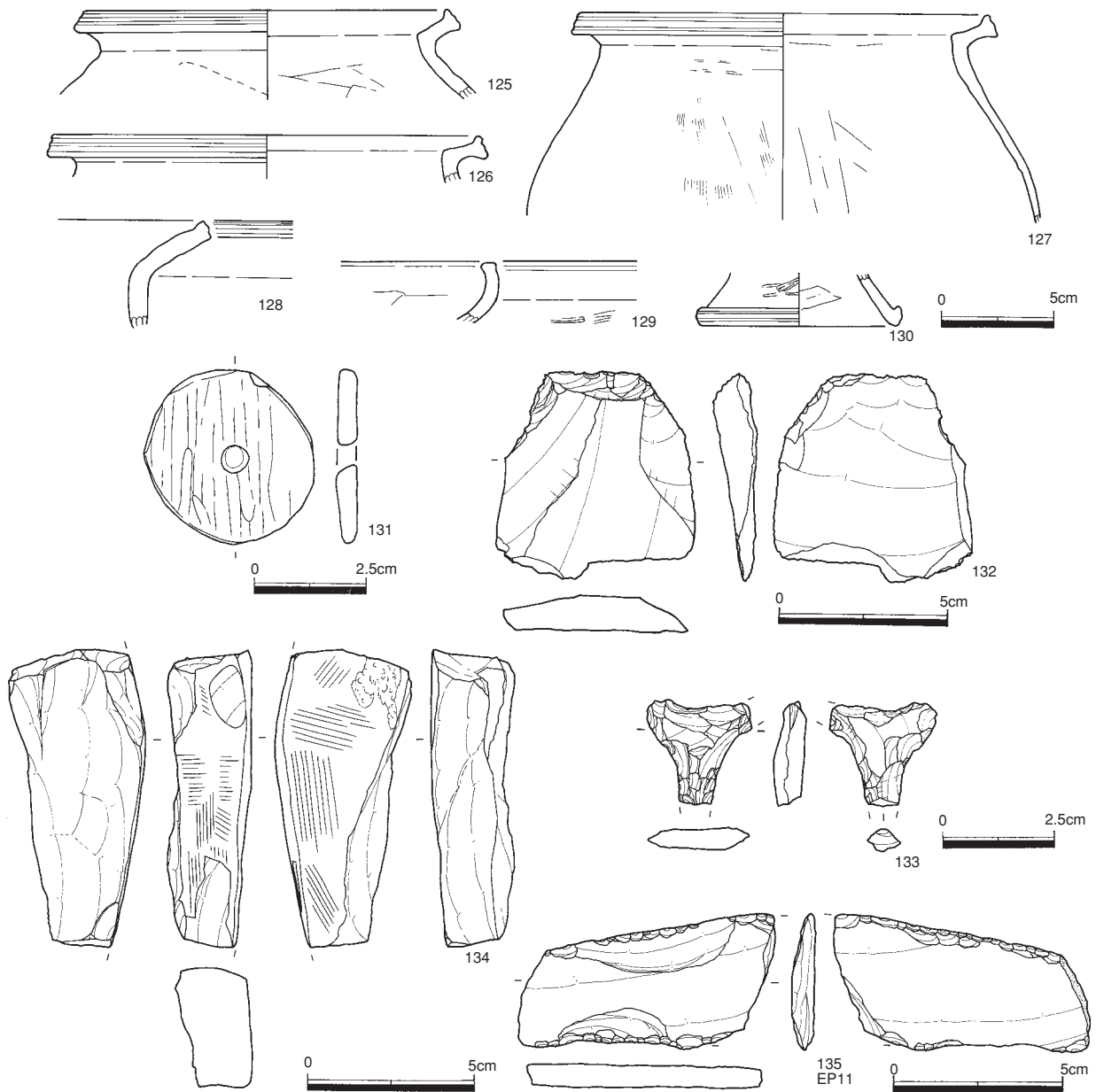
炉 (第35図)

平面形態・底面形態ともに不整な楕円形、断面形態は逆台形を呈し、長軸1.25m、短軸0.92m、最大深度0.21mを測る。平面形態から、別遺構と切りあいの可能性が考えられたが、土層堆積からそれを確認することはできなかった。覆土は概ね暗褐色を呈し、土質および含有物から4層に分層できるものの、大きく上層(1・2層)、下層(3・4層)の2層に分けることができる。上層は炭化物を含み、1層が含む率が高い。4層は、暗褐色土ブロックを混入する。

出土遺物は、甕形土器口縁部1点・体部片7点、サヌカイト剥片2点が出土したが、小片のために図化できるものはなかった。

出土遺物 (第36図)

壺形土器6点、甕形土器17点、鉢形土器1点、高坏形土器2点、体部片191点、土製紡錘車1点、サヌカイト製石錐1点・剥片19点、結晶片岩製柱状片刃石斧1点が出土した。図化可能な遺物は、そのうちの11点である。



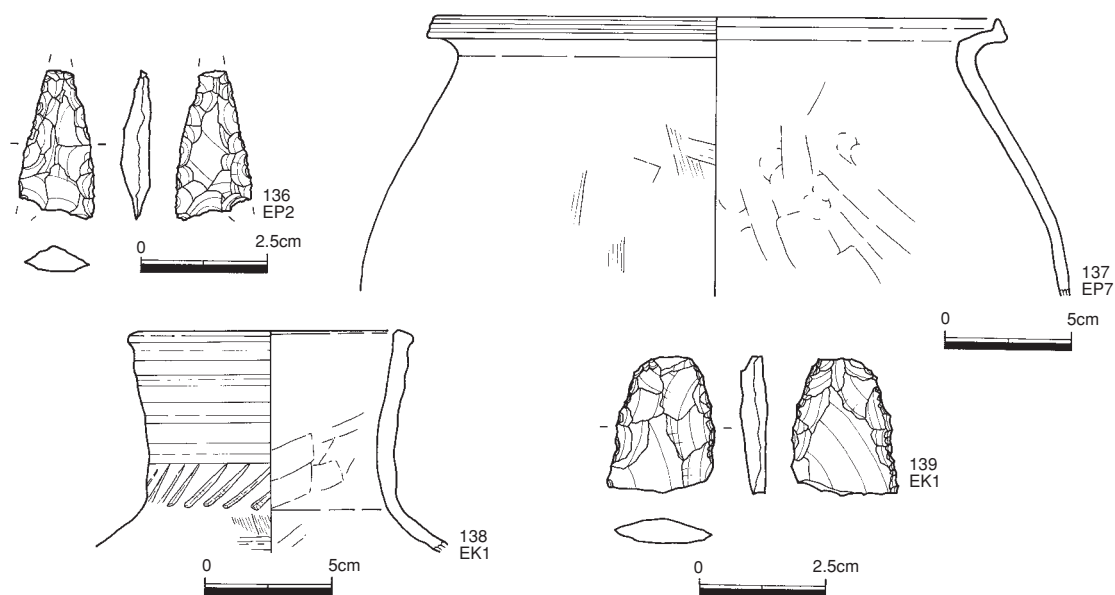
第36図 SB1005出土遺物

甕（125～127）は、口縁部端面に凹線が明瞭に施される。125・127の内面口縁部では、板状工具を用いてヨコナデを施す。127は遺存状態が悪いものの内面上位までヘラケズリが認められ、遺存部に炭化物が多く付着する。鉢（128）は口縁部をくの字に折り曲げるタイプで、口縁部端面に凹線が認められる。129・130は、高坏である。131は、胎土が精良な土器片を紡錘車に転用している。

132は、サヌカイト剥片である。133は先端部を欠損したサヌカイト製石錐で、摘みを有する。134は、砂質片岩を用いた柱状片刃石斧である。部分的に敲打痕が認められ、ほとんどが欠損した状態である。135はEP11から出土した打製石庖丁で、砂質片岩を用いる。平刃・複刃をもつ。

時期

出土した土器にそれぞれ凹線が認められること、および口縁部が屈曲する鉢が出土していることか



第37図 SB1005遺構内遺構出土遺物

ら、弥生時代中期後葉～後期初頭と思われる。

竪穴住居 6号 (SB1006) (第33～35・38・39図)

位置・構造

5-A区 β-II I・J-13・14でSP11068に切られた状態で確認された竪穴住居。また、住居南側の一部を調査区の側溝によって切られる。SB1005との切り合い関係では、本遺構が後出する。この住居の平面形態・底面形態ともにほぼ円形、断面形態は逆台形を呈する。長軸5.29m、短軸4.76m、最大深度0.4m、床面積20.17m²を測る。

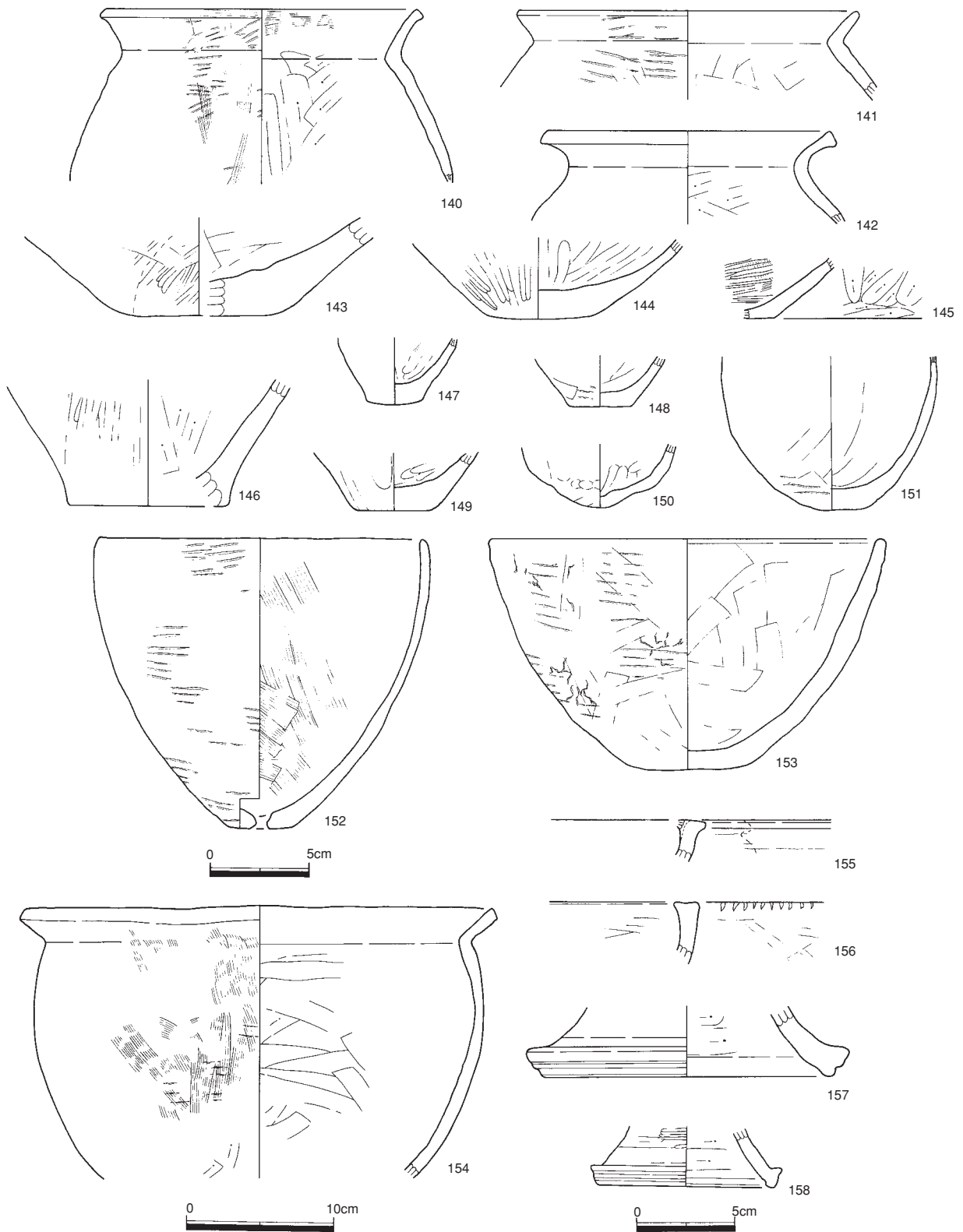
覆土除去後、床面に柱穴9基、土坑3基、炉1基を検出した。主柱穴はEP4とEP8の2基と考えられ、2本柱構造の可能性がある。また住居内において、周壁溝ならびに他の施設の確認は出来なかった。

柱穴・土坑 (第35図)

柱穴は全部で9基検出されているが、そのうちEP4・8の計2基が主柱穴の可能性がある。主柱穴は直径0.32～0.56mの円形で、最大深度0.2～0.26mを測る。柱穴間は2.02mを測る。覆土は土質および含有物からそれぞれ分層でき、主要土色はにぶい黄褐色を呈する。2基ともに柱痕を確認した。

主柱穴以外の柱穴7基は、直径0.22～0.51mの円形で、最大深度0.13～0.28mを測る。主要土色は、にぶい黄褐色を呈する。EP3・6・9で柱痕を確認した。また、EP5・9で弥生土器片がそれぞれ数点出土したが、小片のために図化できるものはなかった。

土坑は、住居内で3基検出できた。EK1・2ともに調査区側溝によって一部切られてはいるものの、EK1は平面形態・底面形態ともに楕円形、断面形態は不整形を呈し、長軸1.16m、短軸0.41m、最大深度0.14mを測る。覆土は、1層-暗褐色粘性砂質土、2層-褐色粘性砂質土の2層に分層できる。平



第38図 SB1006出土遺物(1)

面形態から遺構の切り合い関係を想定したが、土層堆積で確認することはできなかった。EK 2 は平面形態・底面形態ともに楕円形、断面形態は逆台形を呈し、長軸0.86m、短軸0.4m、深度0.16mを測る。覆土は3層に分層できるものの、概ね暗褐色を呈する。1層は、炭化物・土器片を若干含む。遺物は小片のために図化できなかったものの、弥生土器片、サヌカイト剥片が出土した。EK 3 は平面形態・底面形態ともにやや不整な楕円形、断面形態は逆台形を呈し、長軸1.13m、短軸0.64m、最大深度0.32mを測る。覆土は土色および含有物から3層に分層できるものの、大きく上層（1層）-暗褐色粘性砂質土、下層（2・3層）-にぶい黄褐色粘性砂質土の2層に分けることができる。下層のうち2層では、暗褐色土をブロック状に混入する。遺物は小片のために図化できなかったが、弥生土器片が出土した。

土層（第33図）

覆土は暗褐色を呈し、土色および含有物で大きく4層に分層できる。3・5層では、灰黄褐色土をブロック状に混入する。全般的に土器片を若干含む、遺物は炉の周囲に散在した状況で出土している。

炉（第35図）

平面形態・底面形態ともに楕円形、断面形態は不整な逆台形を呈し、長軸1.6m、短軸1.21m、最大深度0.35mを測る。底面は、部分的に段差が認められる。覆土は土質および含有物から3層に分層できるものの、上層（1層）-暗褐色粘性砂質土、下層（2・3層）-にぶい黄褐色粘性砂質土の2層に分けることができる。下層のうち2層は、暗褐色土ブロックを混入する。遺物は弥生土器片数点のみの出土で、小片のために図化できなかった。

出土遺物（第38・39図）

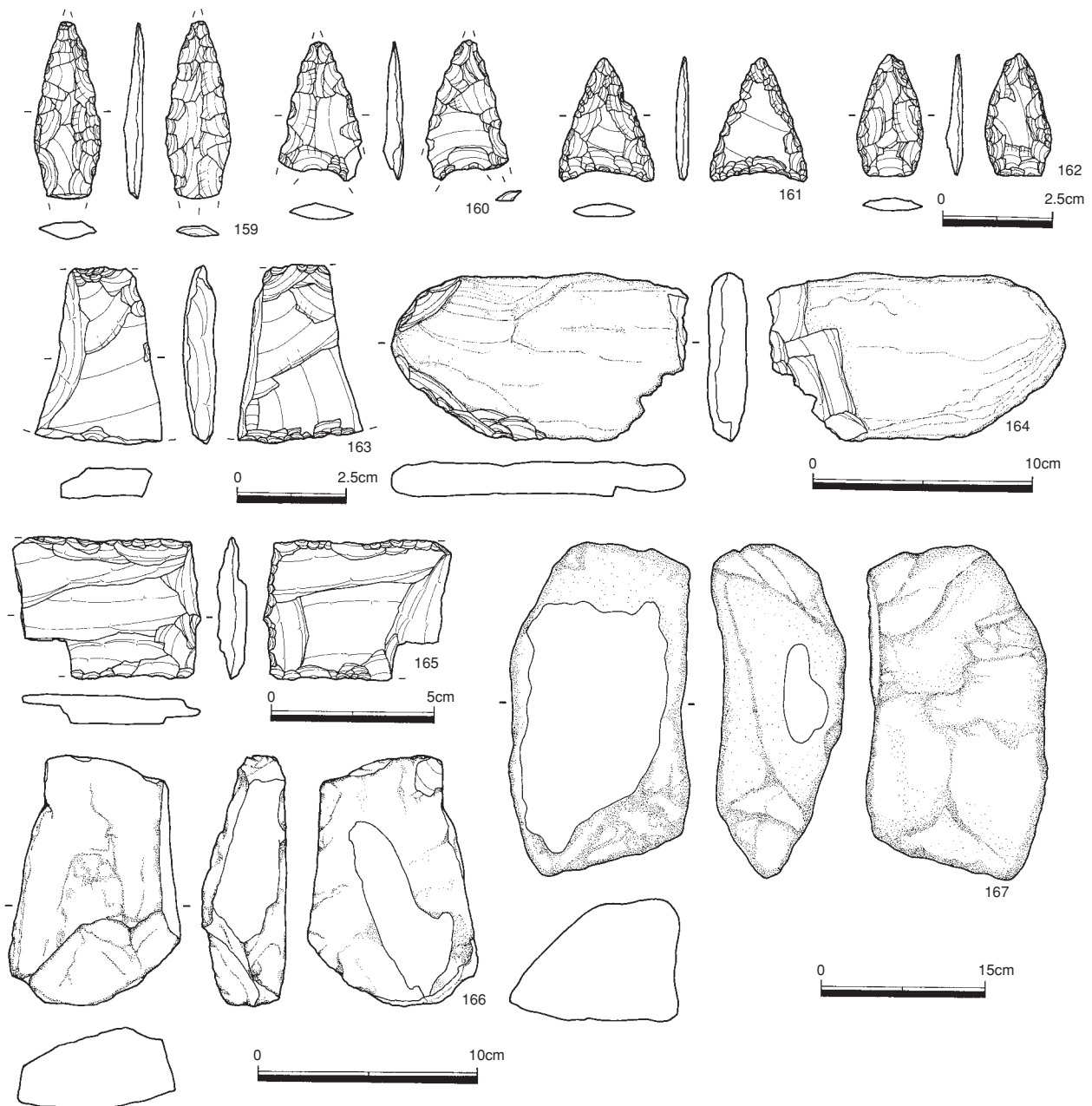
壺形土器18点、甕形土器32点、鉢形土器8点、高坏形土器1点、体部片596点、サヌカイト製石鏃4点・楔形石器1点・剥片23点、打製石庖丁1点・未製品4点、砂岩製砥石・敲石各1点が出土した。図化可能な遺物は、そのうちの28点である。

壺（143～145・149）は、図化可能な遺物が底部のみである。甕（140～142・146～148・151）は、タタキ甕が半数近くを占める。外面はタタキの後にハケメないしは板ナデを施し、内面では上位までケズリを施す。底部は、平底が主体である。鉢（150・152～154）はボール型（152・153）と口縁部をくの字に折り曲げる型（154）が出土した。152は有孔鉢で底部に内面からの穿孔が認められ、外面に多量の炭化物が付着する。153の器表面には、乾燥時に伴うひび割れが認められる。154は口縁部端面から体部中位にかけて炭化物がやや多く付着し、体部下位において二次被熱の痕跡が認められる。高坏（155～158）の脚部端面には、凹線が認められる。

159～162は、サヌカイト製石鏃である。159は有茎式、160・161は凹基式、162は平基五角である。163は、左右の側縁部を欠損した楔形石器である。164は砂質片岩を用いた削器で、凸刃・単刃をもつ。165は砂質片岩を用いた打製石庖丁で、平刃・単刃を持つ。166は凝灰岩を、167は砂岩を用いた砥石である。166は裏面と右側縁部に、167は表面と右側縁部に砥面が認められる。

時期

出土遺物から、弥生時代後期後葉～終末期前半と思われる。

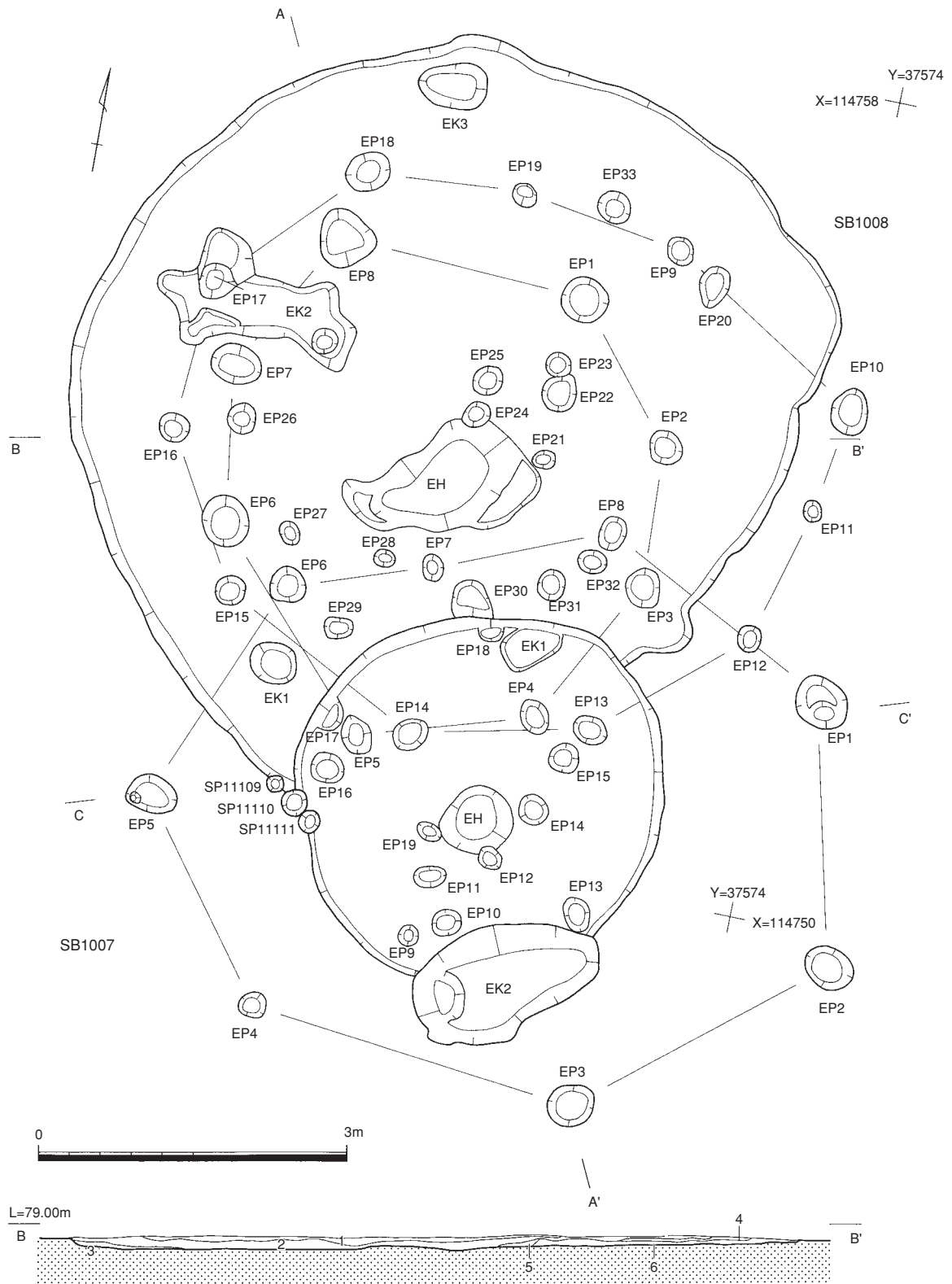


第39図 SB1006出土遺物(2)

竪穴住居 7号 (SB1007) (第40~45図)

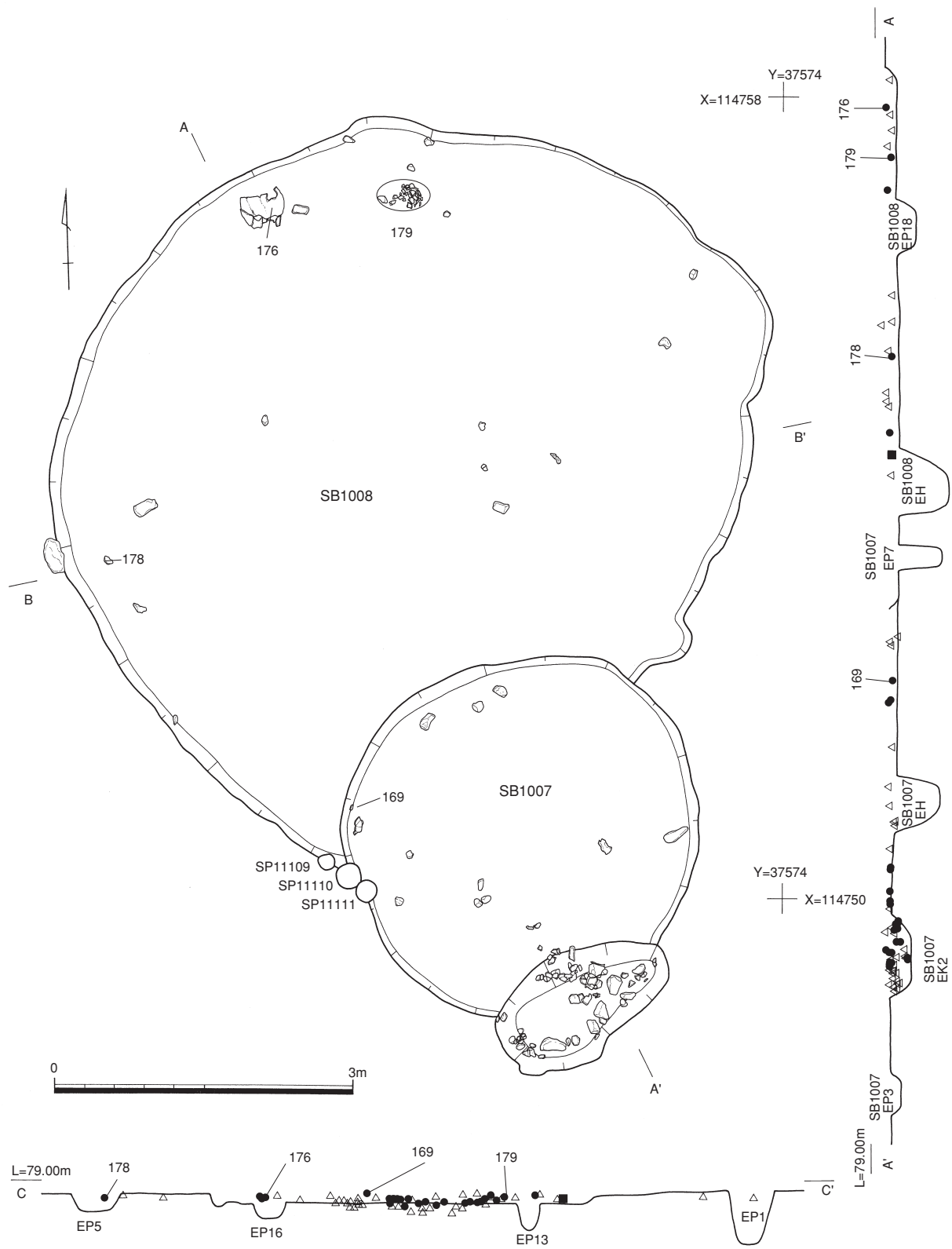
位置・構造

5-A区 β-II J・K-14・15でSP11110・11111に切られた状態で確認された竪穴住居。調査時の所見では、SB1008を切る直径4m弱、最大深度0.12mを測る円形の竪穴住居として捉えていた。しかしSB1008とともに遺構深度が浅いため再検討を行い、第40図のような主柱穴7基を持ち、炬を中心とした半径2mの範囲の床面が若干低い推定直径8~9mの円形住居を復元した。調査時では本遺構が後出

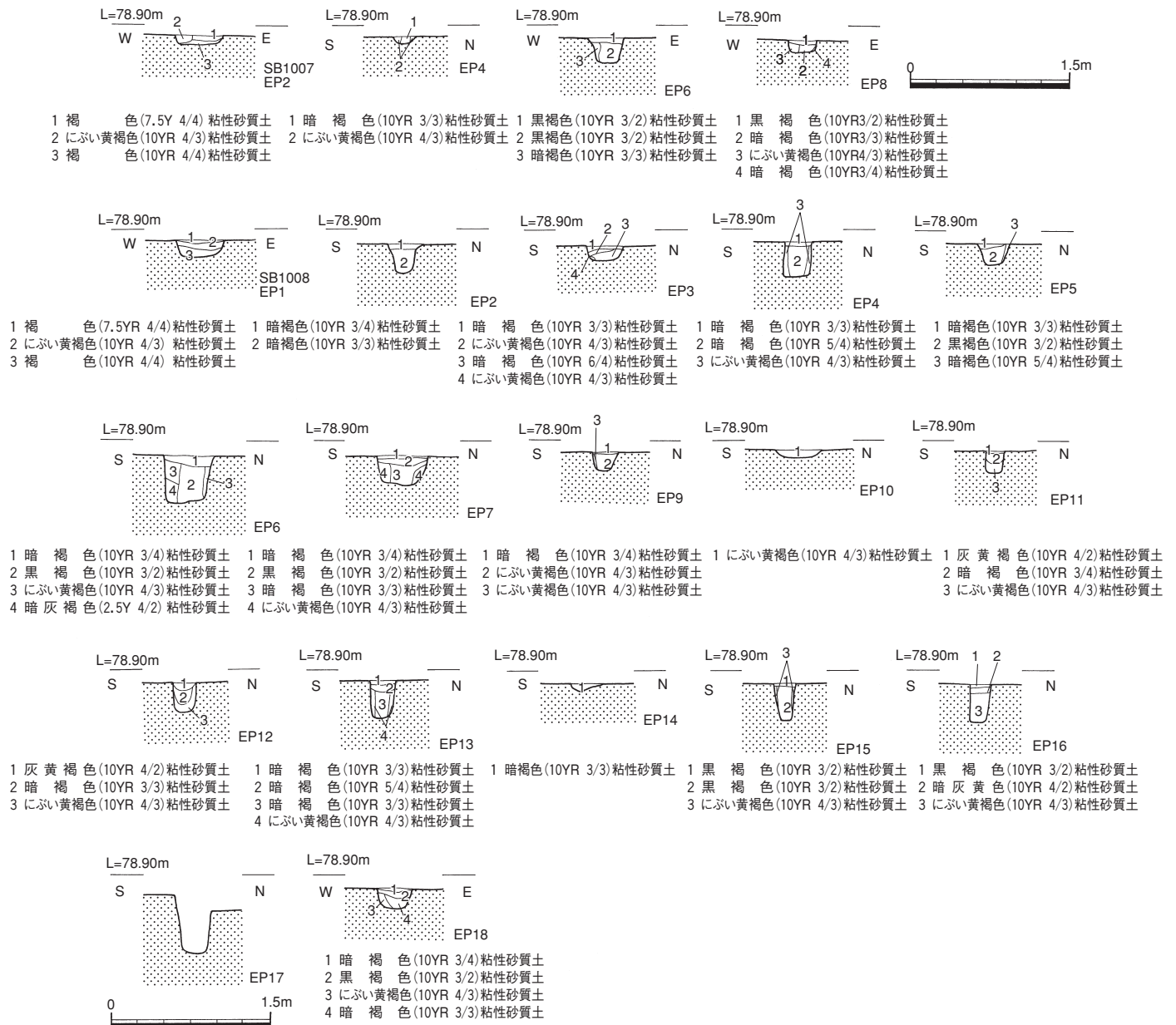


- | | |
|-------------------------|----------------------|
| 1 灰黄褐色(10YR 4/2)粘性砂質土 | 4 暗褐色(10YR 3/4)粘性砂質土 |
| 2 暗褐色(10YR 3/3)粘性砂質土 | 5 暗褐色(10YR 3/3)粘性砂質土 |
| 3 にぶい黄褐色(10YR 4/3)粘性砂質土 | 6 暗褐色(10YR 3/4)粘性砂質土 |

第40図 SB1007・1008遺構図(1)



第41図 SB1007・1008遺構図(2)



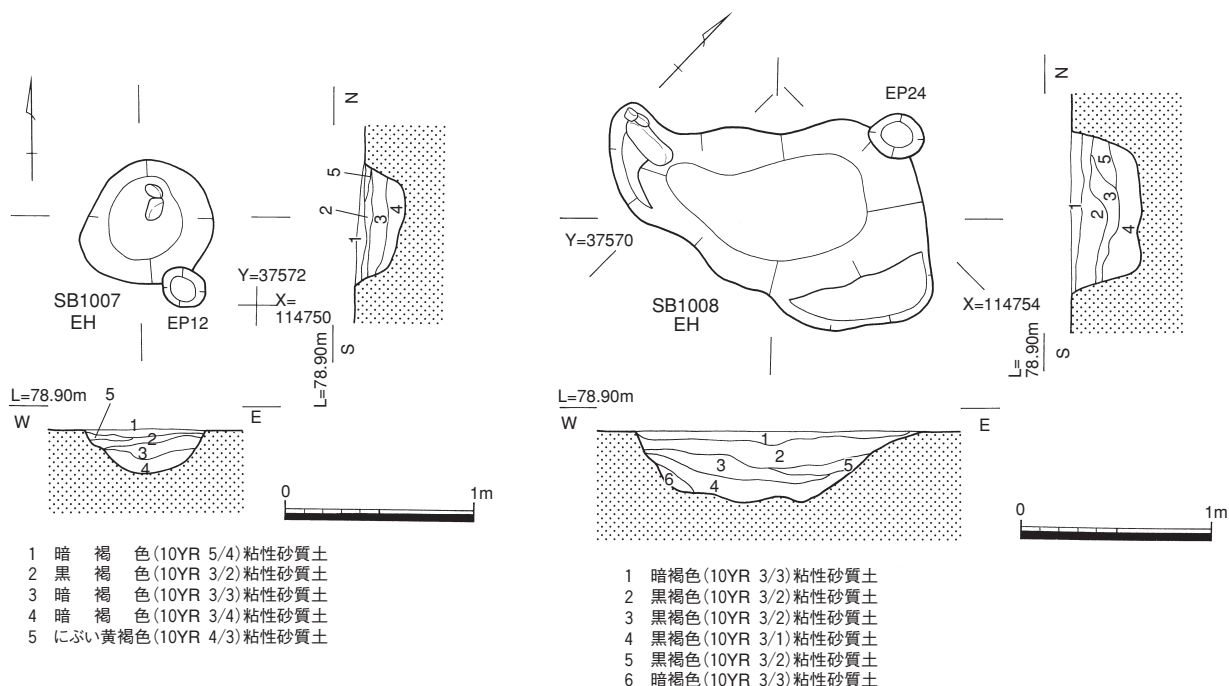
第42図 SB1007・1008EP遺構図

するような形で検出されたが、出土遺物から時期差はあまり認められず、SB1008が後出する可能性が高い。

直径4m前後の円形遺構の覆土除去後、その床面に柱穴11基、土坑2基、炉1基を検出した。主柱穴は、第40図のようなEP1～8の可能性がある。EP6～8は、SB1010内で確認された。また住居内において、周壁溝ならびに他の施設は確認出来なかった。

柱穴・土坑（第42・44図）

柱穴は全部で19基検出されているが、そのうちEP1～8の計8基が主柱穴と考えられる。主柱穴は直径0.26～0.56mの円形、最大深度0.06～0.24mを測る。柱穴間距離の最大は3.26m（EP3・4間）、最小は1.42m（EP6・7間）である。覆土は土質および含有物からそれぞれ分層でき、主要土色は概



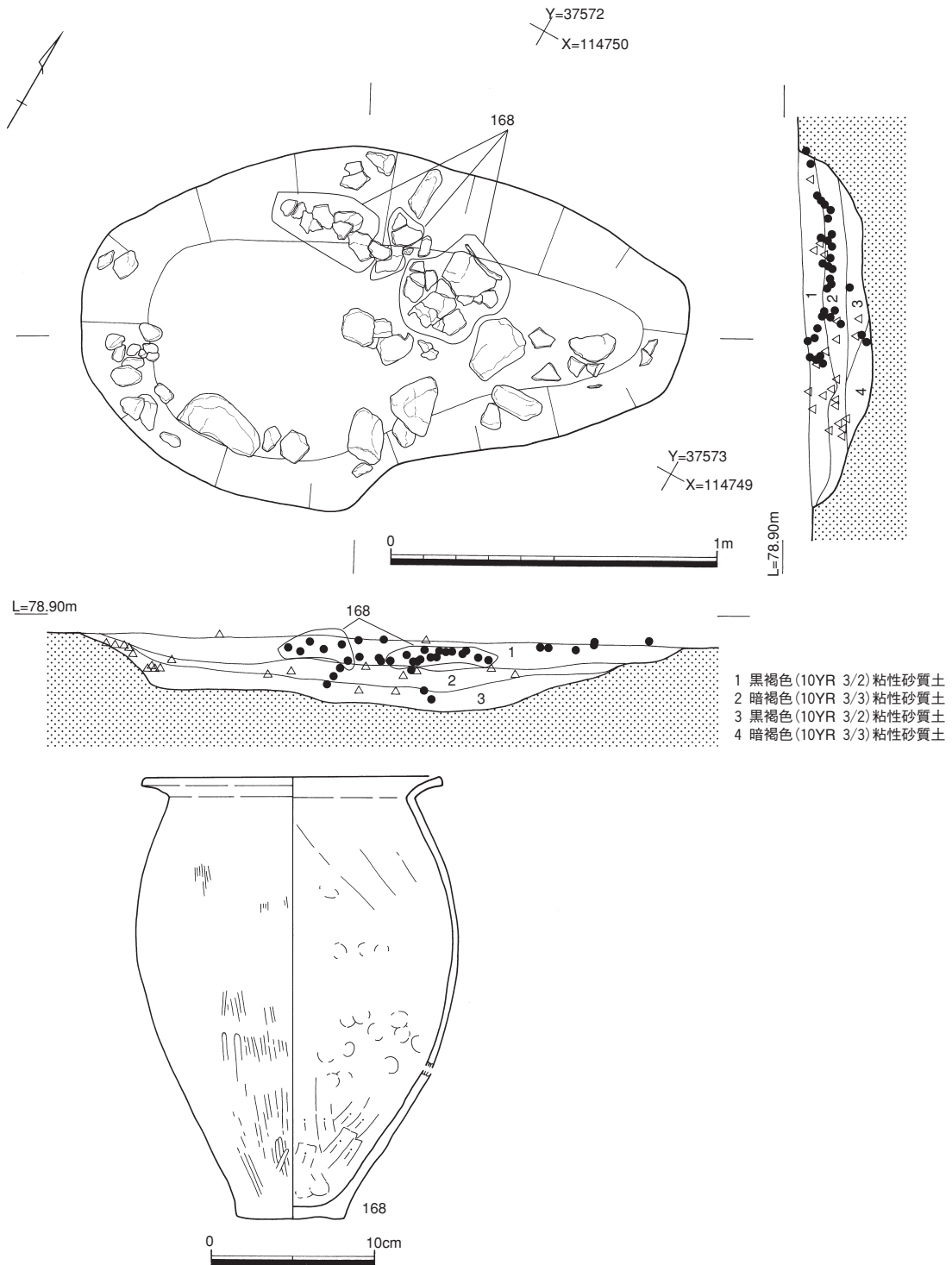
第43図 SB1007・1008EH遺構図

ね黒褐色・暗褐色を呈する。主柱穴のうちEP1・4・6～8から柱痕を確認した。主柱穴以外の柱穴11基は、直径0.22～0.35mの円形で最大深度0.07～0.24mを測る。柱穴からの出土遺物は、EP7・8・12・15・16のそれぞれから数点の弥生土器片が、EP6からサヌカイト製石錐(186)が、EP18からサヌカイト剥片(174)が出土し、図化できたのはEP6・18から出土した石錐と剥片のみである。

土坑は、2基検出した。EK1は平面形態・底面形態ともにやや不整な楕円形、断面形態は逆台形を呈し、最大幅0.61m、最大深度0.39mを測る。出土遺物は、弥生土器片が数点出土している。EK2は、平面形態・底面形態ともにやや不整な楕円形、断面形態はやや不整な舟底形を呈し、長軸1.85m、短軸0.93m、最大深度0.2mを測る。SB1007の遺構内遺構とはしたものの、伴わない可能性もある。土層は概ね黒褐色・暗褐色を呈し、土色および含有物から4層に分層できる。遺物は1・2層を中心に出土し、ほぼ甕形土器1個体分(168)とそれとは別個体の土器片数点、サヌカイト剥片2点、直径5～25cm大の砂岩および結晶片岩が確認された。

炉(第43図)

主柱穴間中央の若干西寄り、円形状の落ち込みのほぼ中央に位置する。EP12に切られてはいるものの、平面形態・底面形態ともにやや不整な円形、断面形態はやや不整な舟底形を呈し、直径0.73m前後、最大深度0.28mを測る。覆土は土色および含有物から5層に分層でき、上層(1・2・5層)、下層(3・4層)に分けることができる。上層は暗褐色土・にぶい黄褐色土・黒褐色土ブロックをそれぞれ混入し、その混入率によって土色が異なる。下層は暗褐色粘性砂質土で、3層は部分的に黒褐色土を混入する。また4層と自然堆積層との境に、炭化物の堆積がレンズ状に認められる。1・3層で土器片を含む。



第44図 SB1007EK 2 遺構図・出土遺物

遺物は甕形土器 1 点・体部片 17 点、サヌカイト製石鏃 1 点・剥片 3 点が出土し、そのうち甕形土器の底部（170）と凹基式の石鏃（171）が図化できた。

出土遺物（第45図）

甕形土器 8 点、鉢形土器・高坏形土器（169）各 1 点、体部片 134 点、サヌカイト製石鏃（172・173）

2点・剥片17点、結晶片岩剥片1点、砂岩製砥石(175)1点が出土した。そのうち、図化可能な遺物は4点である。

169は、外面に炭化物がやや多く付着する。172・173は、ともに先端部を欠損した凹基式の石鏃である。175は表面に1ヶ所砥面があり、表面の約半分と右側縁の一部に被熱痕跡が認められる。

時期

出土遺物から、弥生時代中期中葉か。

竪穴住居 8号 (SB1008) (第40～43・46・47図)

位置・構造

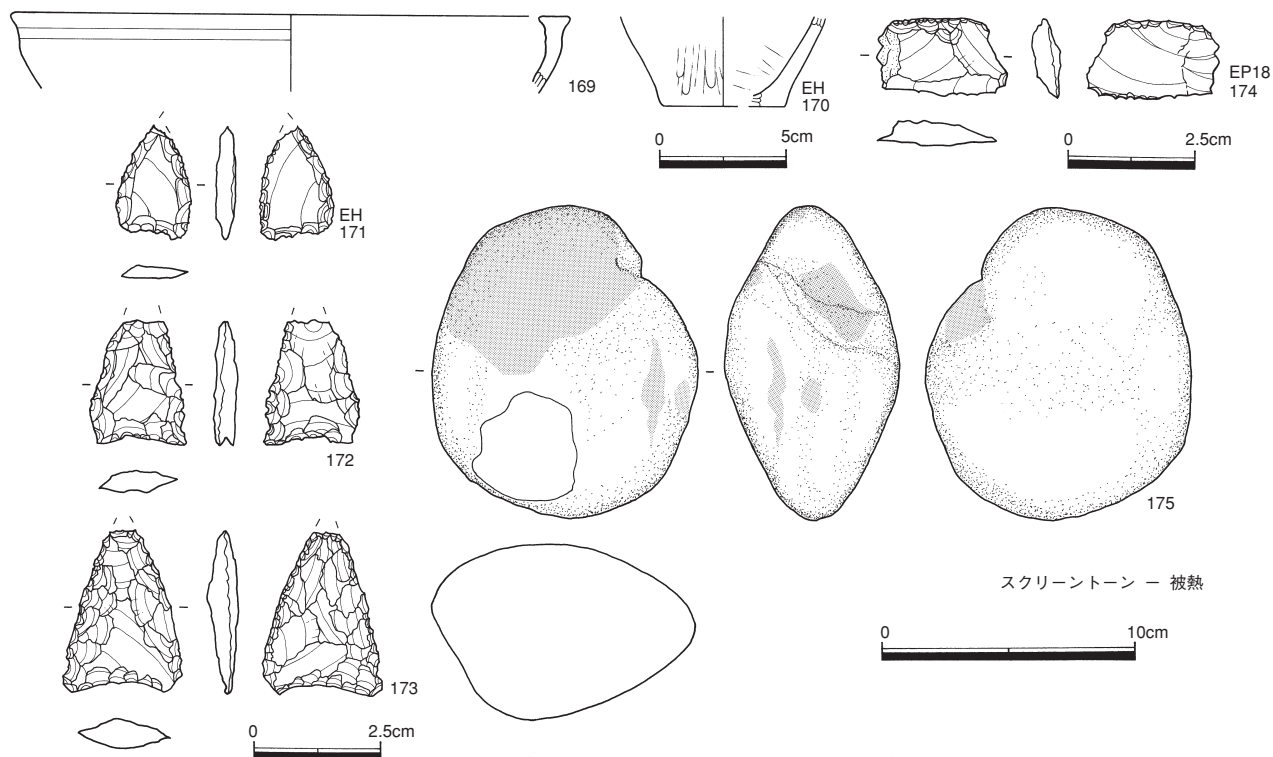
5-A区 β-II K・L-14・15でSB1007・SP11109に切られた状態で確認した竪穴住居。この住居の平面形態・底面形態はややいびつな円形、断面形態は緩やかな舟底形で、長軸7.6m、短軸6.66m、最大深度0.13m、床面積36.66m²を測る。調査時の所見ではSB1007が後出すると思われたが、出土遺物から本遺構が後出する可能性が高い。

覆土除去後、床面に柱穴32基、土坑3基、炉1基を検出した。主柱穴はEP1～8、もしくはEP9～19の可能性がある。主柱穴がEP9～19の場合、直径8m前後の規模になるものと思われる。EP4・5・13・14の4基は、SB1007内で検出された。また住居内において、周壁溝ならびに他の施設は確認出来なかった。出土遺物は少なく、壁際に2個体がまとまった状態で出土しているが、散在した状況である。

柱穴・土坑 (第42・47図)

柱穴は全部で32基検出されているが、そのうちEP1～8の計8基、ないしはEP9～19の計11基が主柱穴と考えられる。主柱穴は直径0.19～0.55mの円形、最大深度0.08～0.54mを測る。柱穴間距離の最大は2.24m (EP1・7間)、最小は1.06m (EP5・6間)である。土色および含有物から各柱穴の覆土は分層されるものの、概ね暗褐色および黒褐色を主体する。主柱穴のなかでEP4～7、EP9・13・15の計6基から柱痕を確認した。主柱穴以外の柱穴21基は直径0.21～0.4mの円形で、最大深度0.08～0.51mを測る。覆土は、主柱穴と同じく暗褐色および黒褐色を呈する。柱穴からの出土遺物は、EP2から甕形土器口縁部・体部片、サヌカイト剥片が、EP15から広口壺形土器、サヌカイト剥片が、EP3・6・7・22・23から弥生土器片とサヌカイト剥片が、EP4・10・13・14・16・19・30・33から弥生土器片が、EP1・8・11からサヌカイト剥片が出土した。

土坑は3基検出され、EK1は平面形態・底面形態ともにやや不整形な円形、断面形態は逆台形を呈し、直径0.49m前後、最大深度0.12mを測る。覆土は土色および含有物から3層に分層できるものの、大きく上層(1・2層)、下層(3層)に分けることができる。上層は暗褐色粘性砂質土で、1層は灰黄褐色土ブロック・焼土を若干混入する。下層はにぶい黄褐色粘性砂質土である。遺物は弥生土器片とサヌカイト製楔形石器(191)が出土した。EK2は平面形態・底面形態ともに不整形、断面形態は逆台形を呈し、長軸1.99m、短軸0.5m、最大深度0.09mを測る。平面形態から、何基かの遺構の切り合い関係を想定したが、土層堆積状況から立証できなかった。覆土は土色および含有物から3層に分層でき、大きく上層(1・2層)、下層(3層)に分けることができる。上層は暗褐色粘性砂質土で、両層とも



第45図 SB1007出土遺物

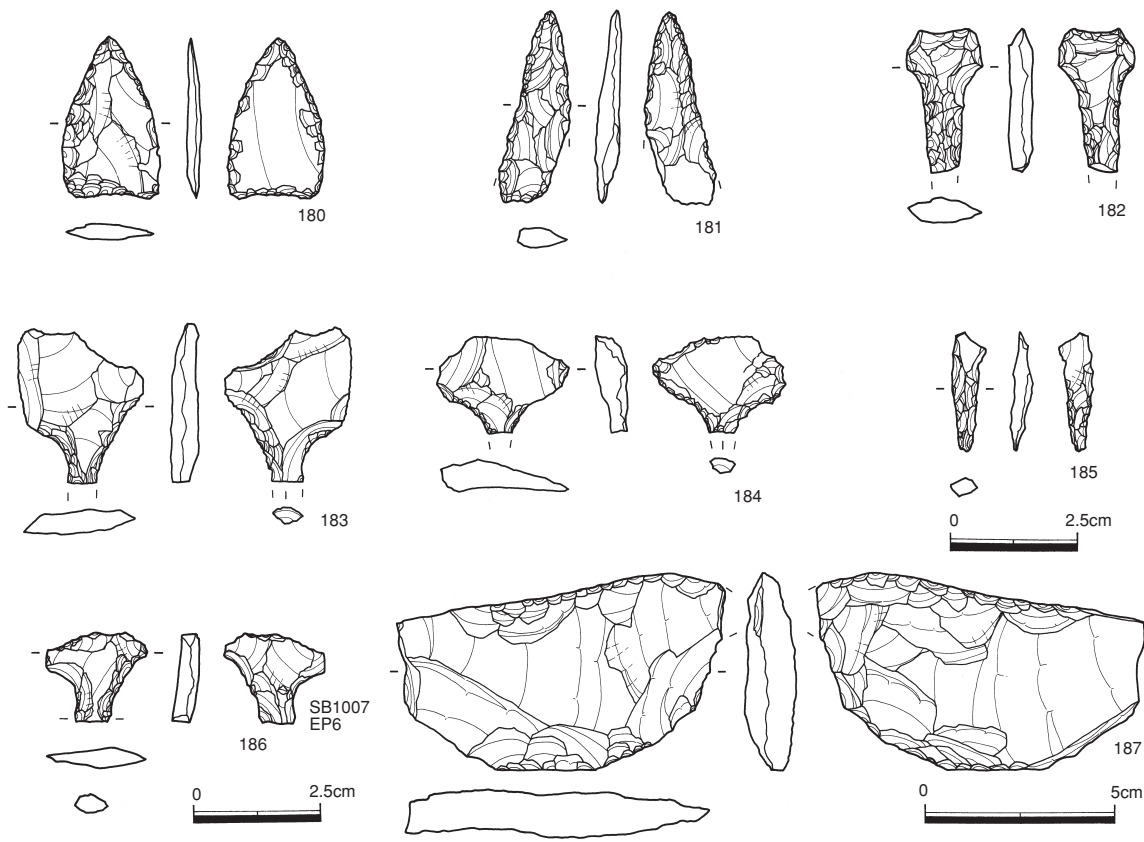
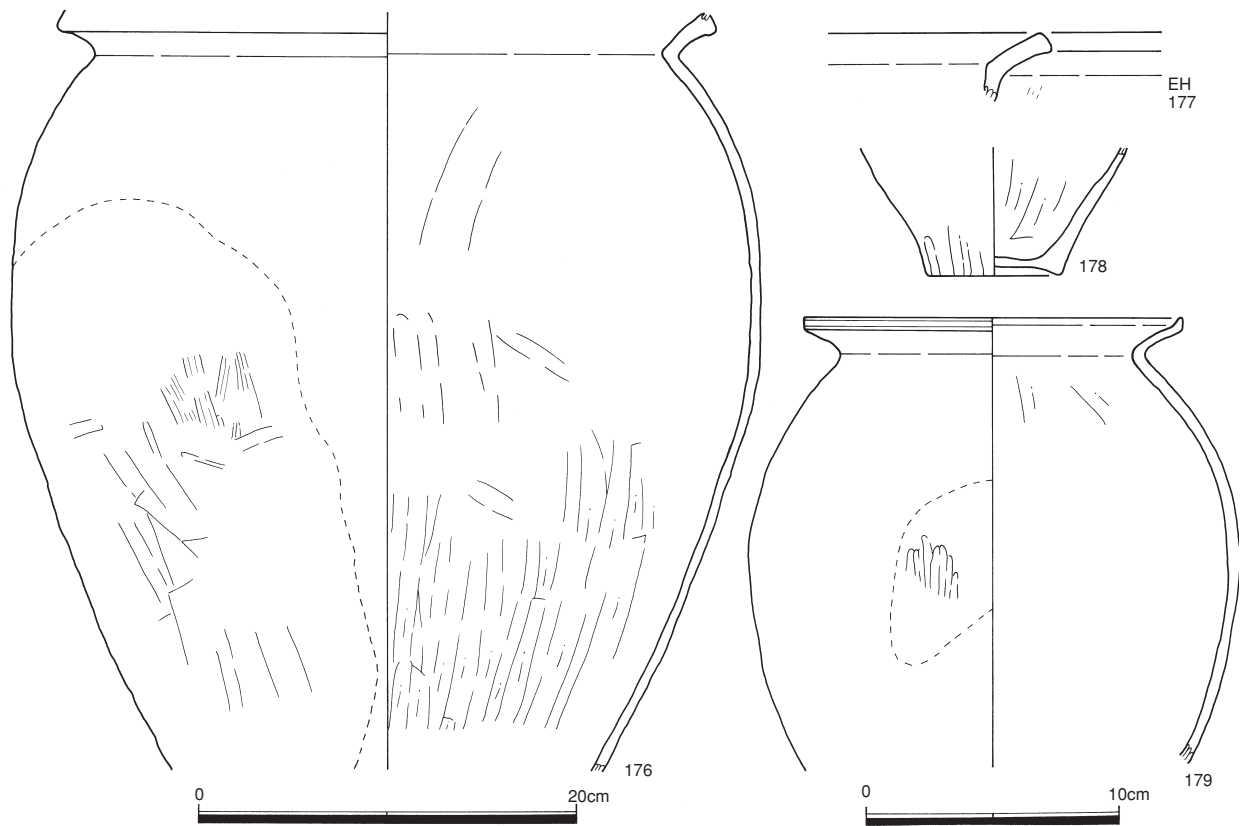
に焼土を含む。また1層では、層全体に炭化物を含む。下層は、暗褐色粘性砂質土である。遺物は弥生土器片と凹基式のサヌカイト製石鏃（188）と石錐（190）が出土した。EK 3は平面形態・底面形態ともに楕円形、断面形態は舟底形を呈し、長軸0.77m、短軸0.43m、最大深度0.08mを測る。覆土は2層に分層でき、1層は灰黄褐色粘性砂質土、2層はにぶい黄褐色粘性砂質土である。出土遺物は、認められない。

土層（第40図）

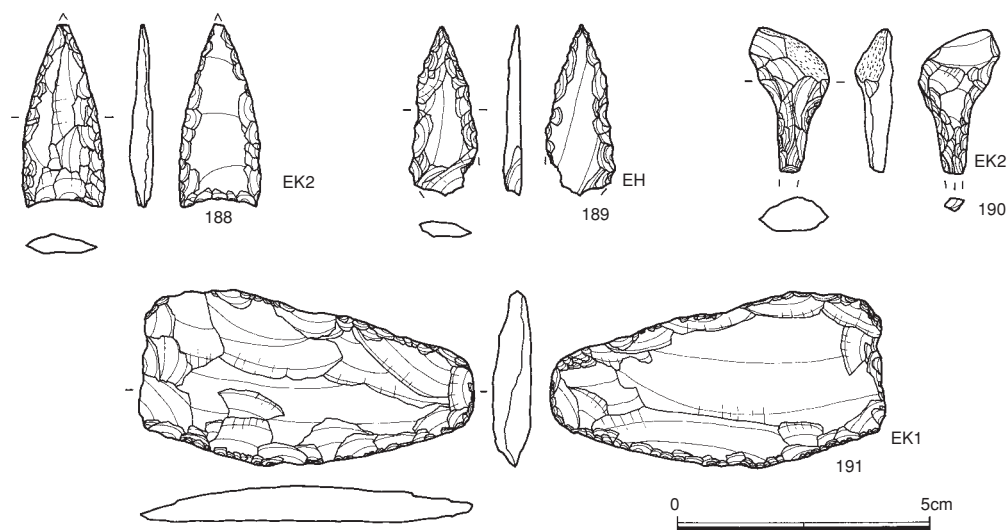
覆土は土色および含有物から6層に分層できるものの、大きく上層（1層）、下層（2～6層）に分けることができる。各層とも比率の違いはあるものの、炭化物をそれぞれ含む。上層は灰黄褐色粘性砂質土で、焼土を若干含む。下層は概ね暗褐色粘性砂質土で、そのうちの2・4層では焼土および炭化物を大量に含む。また6層では、炭化物を大量に含む。

炉（第43図）

住居中央部から南西寄りに位置し、平面形態・底面形態ともに不整形、断面形態やや不整な舟底形を呈し、長軸1.79m、短軸0.84m、最大深度0.38mを測る。EP 1～8が主柱穴の場合、炉はほぼ中央に作り付けられていることになる。EP 9～19の場合だと、西寄りに作り付けられる。覆土は土色および含有物から6層に分層できるものの、大きく上層（1・2層）・下層（3～6層）の2層に分けることができる。上層はそれぞれ暗褐色土・黒褐色土ブロックを混入する。また2層では、焼土および炭化物をブロック状に混入する。下層は概ね黒褐色粘性砂質土で、3層は炭化物を6層中一番多く含む。また4層では、炭化物の堆積層が認められる。



第46図 SB1008出土遺物(1)



第47図 SB1008出土遺物(2)

遺物は、壺形土器(177)、甕形土器、鉢形土器、有茎式のサヌカイト製石鏃(189)・剥片が出土した。

出土遺物 (第46・47図)

壺形土器 8 点、甕形土器 9 点、鉢形土器 2 点、体部片107点、サヌカイト製石鏃 6 点・石錐・剥片18点、結晶片岩剥片 5 点、焼土塊38点が出土した。図化可能な遺物はそのうち11点で、壺は遺存状態が悪く図化できるものはなかったが、口縁部端面に斜格子文が施される個体が認められた。

甕 (176・178・179) のうち、176は口径35cm弱を測る大型甕で、体部内面上位に炭化物が多量に付着する。また179では外面体部上位に炭化物が多く付着し、内面体部上位までケズリが施される。出土した石鏃のうち、180は平基五角形、181は欠損のため不明である。182～185は、摘みを有する石錐である。187は砂質片岩を用いた打製石庖丁で、平刃・複刃を持つ。

時期

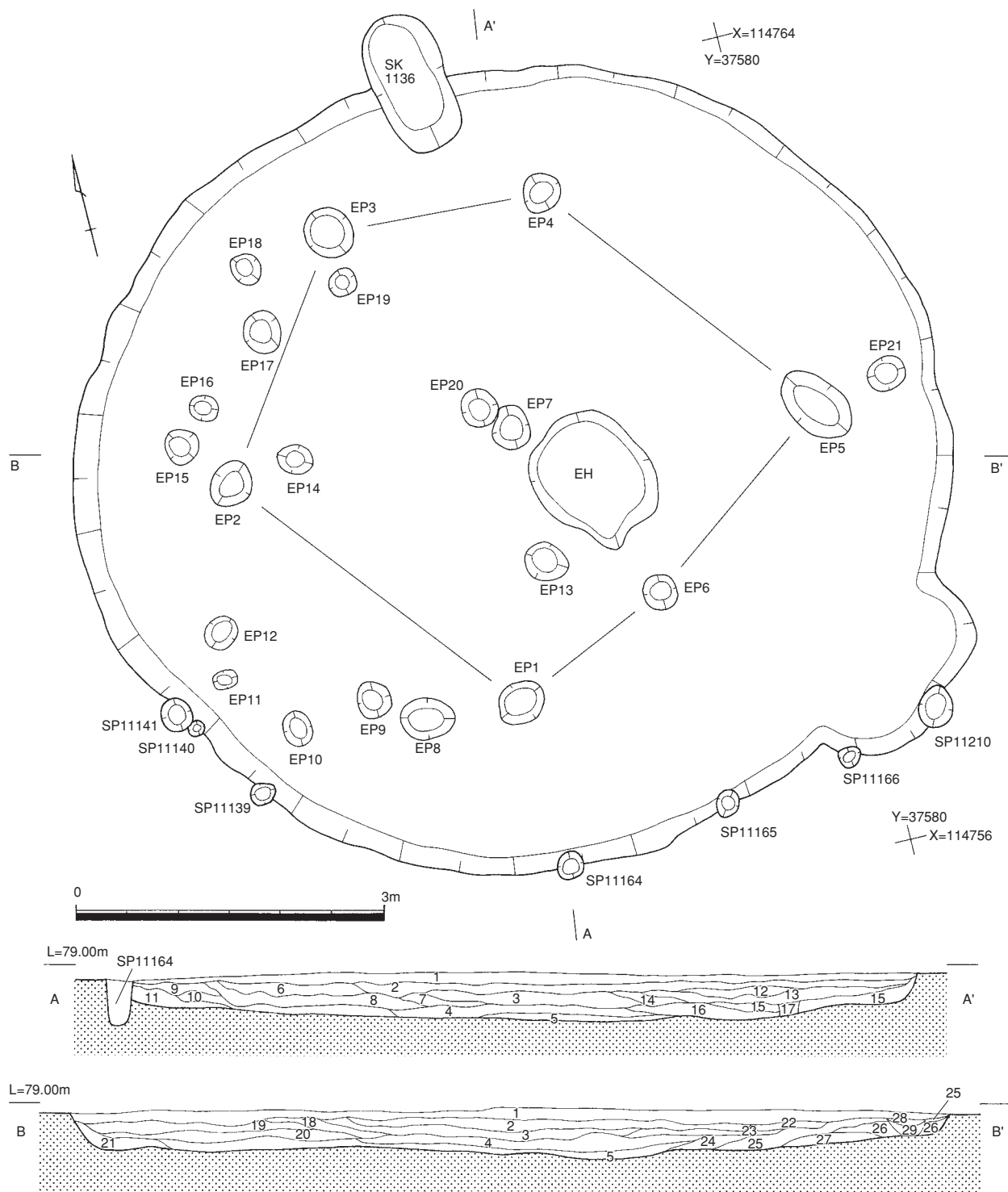
出土遺物から、弥生時代後期前葉が主体か。

竪穴住居 9 号 (SB1009) (第48～54図)

位置・構造

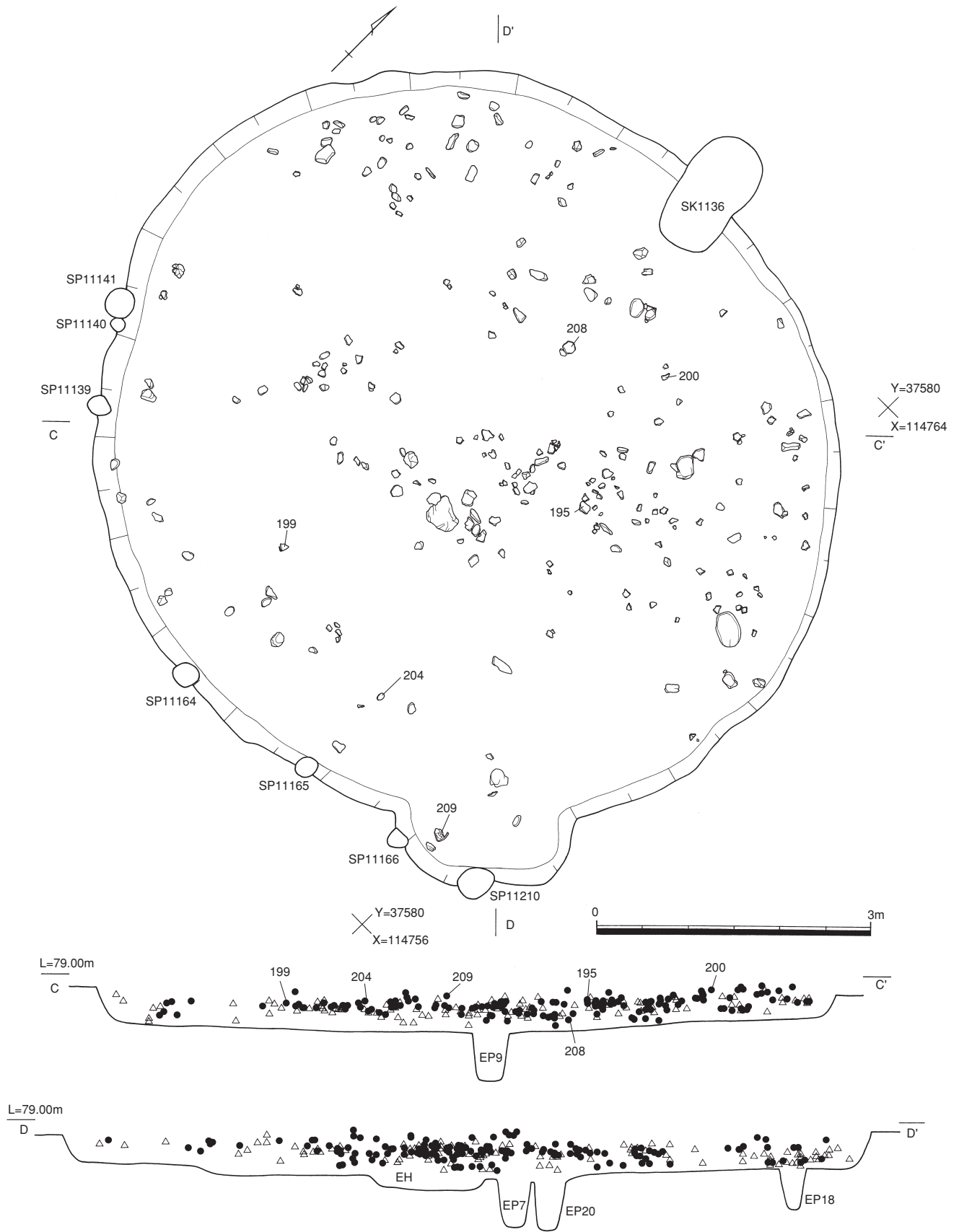
5-A区 β-II L・M-15～17でSK1136、SP 7 基に切られた状態で確認された竪穴住居。この住居の平面形態・底面形態はともに円形、断面形態は逆台形を呈する。住居南東部に 1ヶ所、幅2.02m、奥行き0.72mの張り出し部が構築される。長軸はこの張り出し部を含めて8.93m、長軸に直交する形で短軸8.15m、最大深度0.49m、床面積55.92m²を測る。床面積は、SB1013に次ぐ広さである。南東部の張り出し部はその形状からみて、入り口の可能性が考えられる。

覆土除去後、床面に柱穴21基、炉 1 基を検出した。主柱穴はEP 1～6、もしくはEP 1～5の可能性

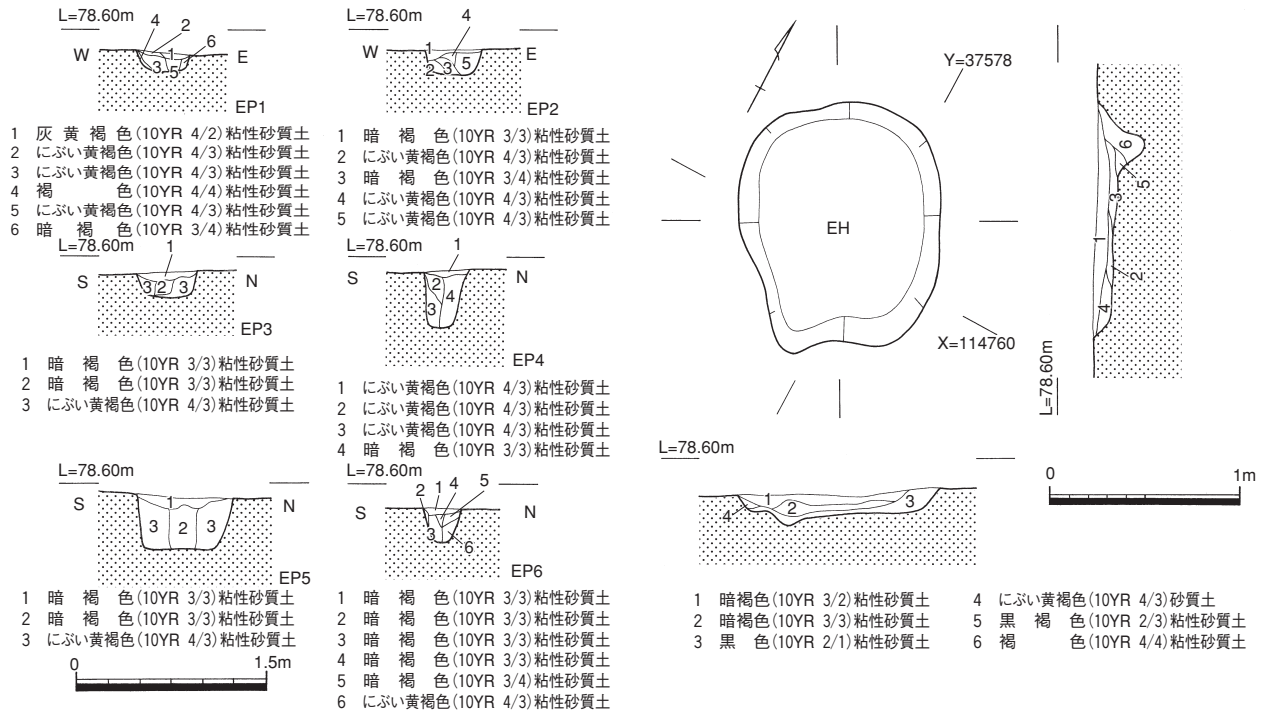


- | | |
|--------------------------|--------------------------|
| 1 にぶい黄褐色(10YR 4/3)粘性砂質土 | 16 暗褐色(10YR 3/4)粘性砂質土 |
| 2 灰黄褐色(10YR 4/2)粘性砂質土 | 17 暗褐色(10YR 3/4)粘性砂質土 |
| 3 暗褐色(10YR 3/4)粘性砂質土 | 18 灰黄褐色(10YR 4/2)粘性砂質土 |
| 4 暗褐色(10YR 3/3)粘性砂質土 | 19 にぶい黄褐色(10YR 4/3)粘性砂質土 |
| 5 暗褐色(10YR 3/4)粘性砂質土 | 20 灰黄褐色(10YR 4/2)粘性砂質土 |
| 6 にぶい黄褐色(10YR 4/3)粘性砂質土 | 21 褐色(10YR 4/4)砂層 |
| 7 灰黄褐色(10YR 4/2)粘性砂質土 | 22 にぶい黄褐色(10YR 4/3)粘性砂質土 |
| 8 灰黄褐色(10YR 4/2)粘性砂質土 | 23 にぶい黄褐色(10YR 4/3)粘性砂質土 |
| 9 暗褐色(10YR 3/4)粘性砂質土 | 24 灰黄褐色(10YR 4/2)粘性砂質土 |
| 10 にぶい黄褐色(10YR 4/3)粘性砂質土 | 25 黒褐色(10YR 3/3)粘性砂質土 |
| 11 にぶい黄褐色(10YR 4/3)粘性砂質土 | 26 にぶい黄褐色(10YR 4/3)粘性砂質土 |
| 12 灰黄褐色(10YR 4/2)粘性砂質土 | 27 灰黄褐色(10YR 4/2)粘性砂質土 |
| 13 にぶい黄褐色(10YR 4/3)粘性砂質土 | 28 にぶい黄褐色(10YR 4/3)粘性砂質土 |
| 14 灰黄褐色(10YR 4/2)粘性砂質土 | 29 褐色(10YR 4/4)粘性砂質土 |
| 15 褐色(10YR 4/4)粘性砂質土 | |

第48図 SB1009遺構図(1)



第49図 SB1009遺構図(2)



第50図 SB1009遺構内遺構図

があり、5本ないしは6本柱構造である。また住居内において、周壁溝など他の施設は確認出来なかった。遺物は床面から浮き、散在した状態での出土である。

柱穴・土坑（第50図）

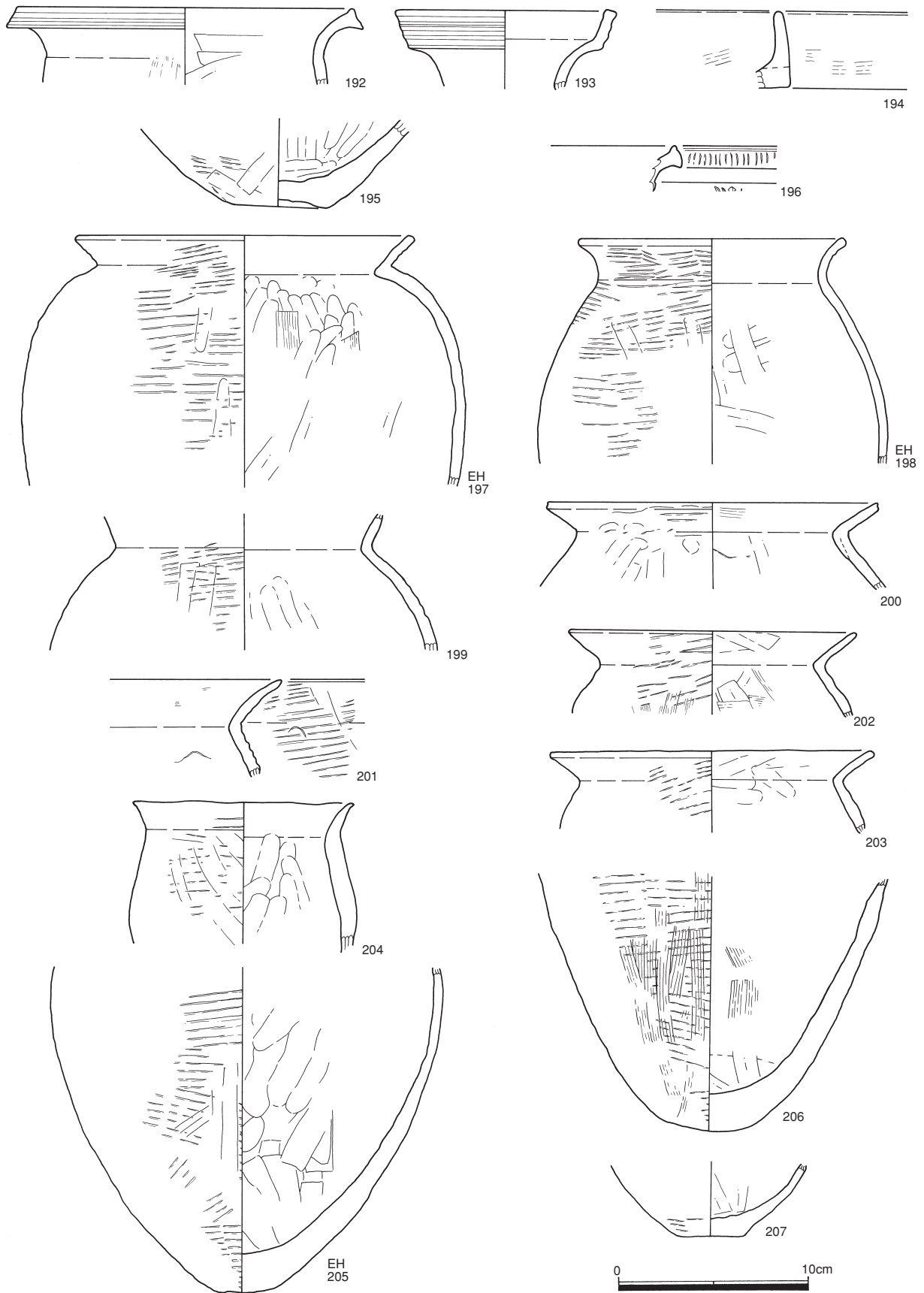
柱穴は全部で21基検出されたが、そのうちEP 1～6の計6基を主柱穴として捉えた。しかしEP 1～5の5本柱構造の可能性も考えられる。主柱穴は直径0.32～0.79mの円形、最大深度0.16～0.44mを測る。柱穴間距離の最大は3.54m（EP 1・2間）、最小は1.77m（EP 6・1間）である。土質および含有物から各柱穴の覆土はそれぞれ分層されるものの、概ね暗褐色を主体する。また主柱穴すべてに、柱痕を確認した。

主柱穴以外の柱穴15基は、直径0.24～0.53mの円形で、最大深度0.13～0.31mを測る。覆土は土色および含有物からそれぞれ分層でき、暗褐色ないしはにぶい黄褐色を主体とする。またEP 7・13・17・21で、柱痕を確認した。遺物は、EP 1・8から鉢形土器が、EP 4・6・9～11・16～19からそれぞれ弥生土器片が、EP 2から甕形土器が、EP 7から弥生土器片・焼土塊が、EP 21から広口壺形土器が出土したが、小片のために図化できなかった。

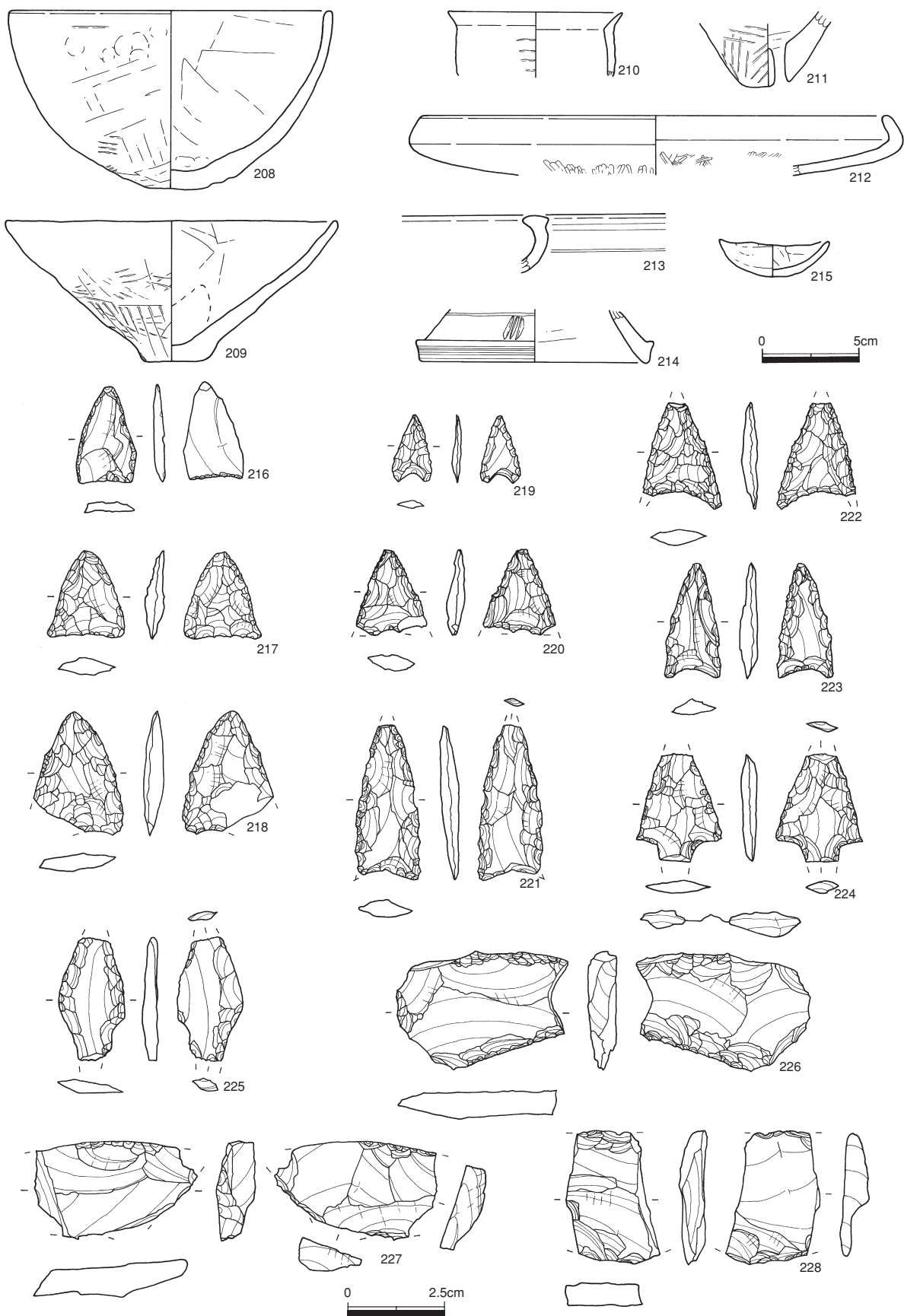
住居内において、土坑として捉えうる遺構は確認できなかった。

土層（第48図）

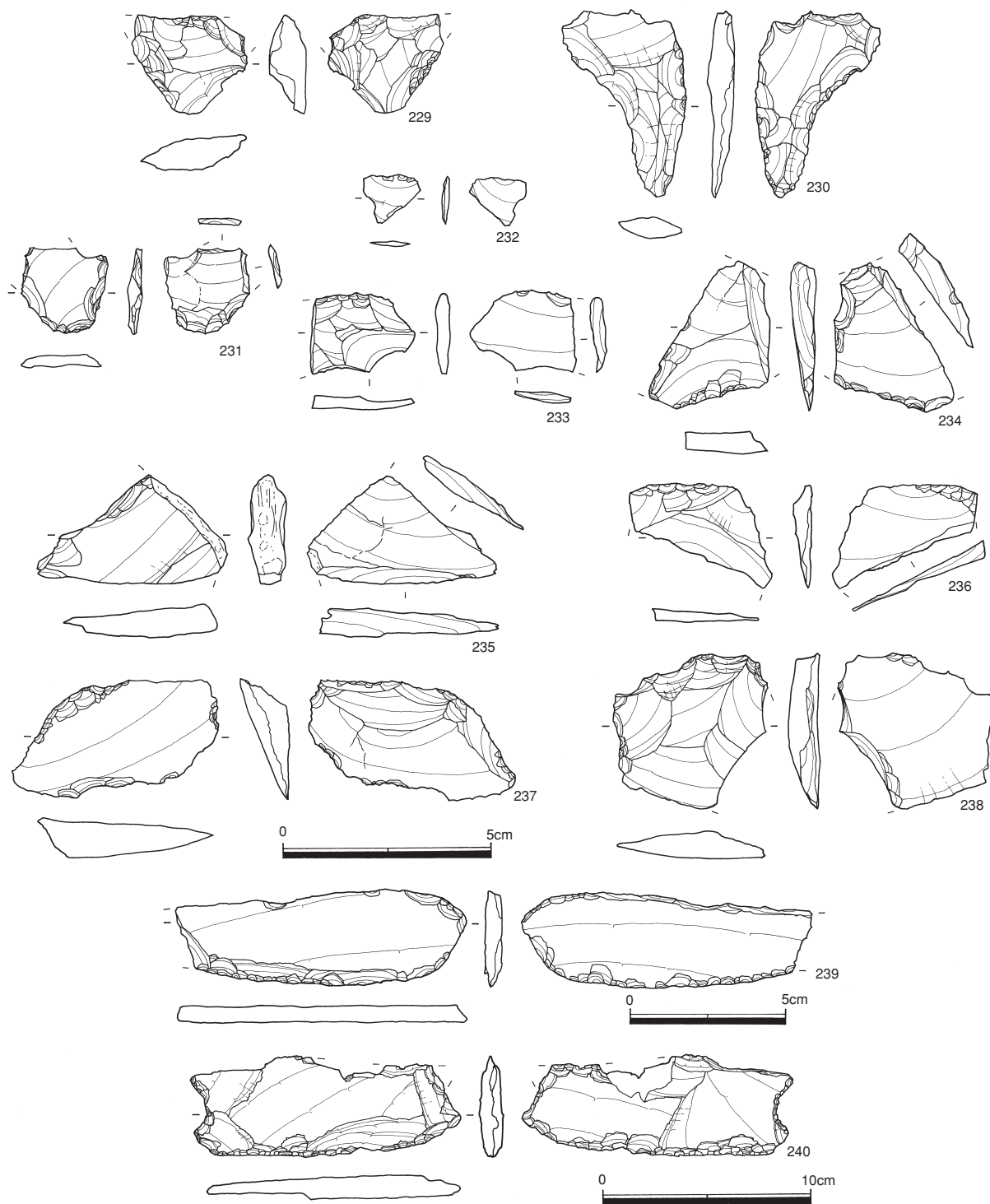
覆土は、土色および含有物から29層に分層できる。1・2層は炭化物を比較的多く含む。土器片を含む層は3・4・15・18・19層で、中でも3層と18層が大量に含む。また3層は、直径5～30cm大の礫も多く含む。10・11・15層は地山ブロックを混入し、11・15層はその比率が高い。21層は、自然堆積層である。これらの土層堆積状況と遺物の出土状況から、遺物は住居の埋没過程で遺棄された可能性が考



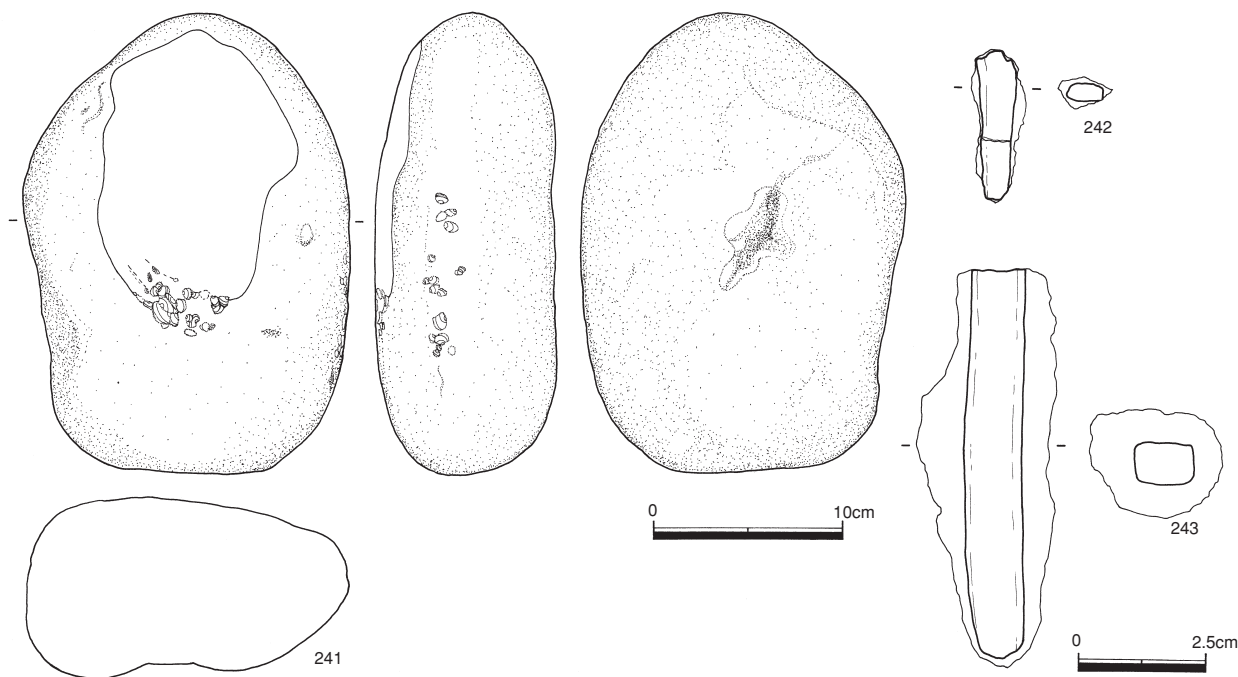
第51图 SB1009出土遺物(1)



第52図 SB1009出土遺物(2)



第53図 SB1009出土遺物(3)



第54図 SB1009出土遺物(4)

えられる。

炉 (第50・51図)

住居の中央部からやや東よりに、支柱穴間ではEP 6 に近接した状態で作り付けられている。平面形態・底面形態ともにやや不整な楕円形、断面形態はやや不整な逆台形を呈し、長軸1.39m、短軸1.08m、最大深度0.37mを測る。

覆土は概ね黒褐色を呈するものの、土色および含有物から6層に分層できる。1層は黒褐色粘性砂質土で、部分的に暗褐色土ブロックを混入する。2層は暗褐色粘性砂質土、3層は黒色粘性砂質土で、炭化物を大量に含む。4層はにぶい黄褐色砂質土、5層は黒褐色粘性砂質土で、3層と同じく炭化物を大量に含む。6層は褐色粘性砂質土で、にぶい黄褐色土ブロックを混入する。土器片の出土は、4・6層を除く層でわずかに認められた。

遺物は甕形土器口縁部2点、底部1点、体部片65点、サヌカイト剥片1点が出土した。図化できたのは、口縁部(197・198)と底部(205)の3点である。197・198の外縁部は口縁端部付近までタタキが施され、体部に部分的にユビナデが施される。205はタタキの後に板ナデが施される。内面の調整はケズリの後にユビナデを施す。198は、上位までケズリがおよぶ。また198は外面体部下位に、205は内外面に炭化物が多く付着する。

出土遺物 (第51～54図)

壺形土器20点、甕形土器311点、鉢形土器10点、高坏形土器4点、手捏ね皿1点、体部片1807点、サヌカイト製石鏃10点・楔形石器4点・石錐1点・剥片137点、結晶片岩製打製石庖丁3点・剥片16点、砂岩製砥石3点、鉄片2点が出土した。図化可能な遺物はそのうちの52点である。

壺（192～196）のうち193・194は二重口縁壺で、193は他の土器と比較して胎土が精良であり、その形態から東阿波型土器の模倣品の可能性がある。甕（197～207）のうち、197・198・205の3点は炉出土である。出土した甕はすべてタタキ甕で、外面は口縁端部までタタキがおよび、その後体部を中心にハケメ・ユビナデ・板ナデを施す。内面は、頸部付近までケズリを施したあとハケメを施したり（202）、ユビナデを施す（199・203・204）。206は、外面に煤状の炭化物が付着する。鉢（208～211）のうち、208は口縁部～体部中位までが調整不明瞭なものの、タタキの後にケズリを施す。底部～体部下位では顕著にそれが見てとれる。209はタタキに2種類の施工原体を用い、平行タタキの後に体部下位を中心に縦方向のタタキを施す。211は、内面から穿孔する。高坏は4点出土のうち、3点（212～214）図化できた。215は、手捏ね皿である。

サヌカイト製石鏃（216～225）のうち216～218は平基三角、219～223は凹基式、224は凸基式、225は有茎式である。226～229はサヌカイト製楔型石器、230はサヌカイト製石錐、231～238はサヌカイト剥片である。剥片の打面構成は237は複剥離、235は自然面、後は線剥離である。239・240は、砂質片岩を用いた打製石庖丁である。241は砂岩製砥石で、表面に砥面と敲打痕が、右側縁部に敲打痕がそれぞれ認められる。242・243は鉄製棒状工具で、242は断面楕円形、243は断面方形を呈する。住居内から出土したものの、混入物の可能性もある。

時期

弥生時代後期初頭～終末期の遺物が出土し、底部に平底が認められることから主体は終末期前半と思われる。

竪穴住居10a・10b号（SB1010a・1010b）（第55～57・59～64図）

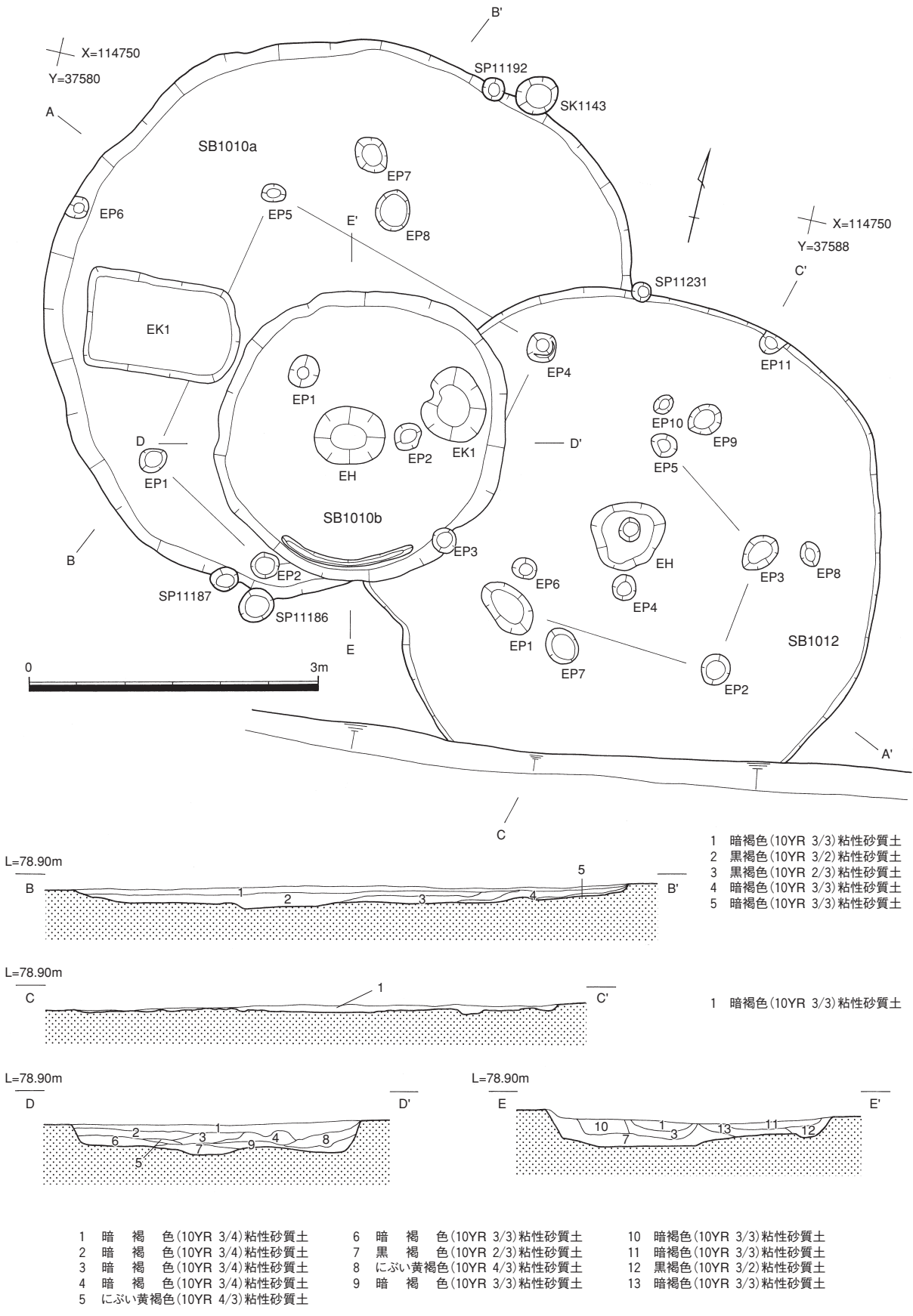
位置・構造

5-A区 β-II J・K-17・18でSB1012・SK1143・SP11192・11186・11187に切られた状態で確認された竪穴住居。この住居の平面形態・底面形態は円形、断面形態はやや不整形な舟底形で、長軸6.21m、最大深度0.22m、検出部分の床面積17.96m²を測る。

覆土除去後、床面に柱穴8基、土坑1基、直径3m弱を測る円形遺構（SB1010b）を検出した。この円形遺構をさらに掘り下げると、床面において柱穴2基、土坑2基を確認した。土層堆積状況から、この土坑2基のうち円形遺構の中央に位置する1基が、炉と考えられる。調査時の所見では円形遺構を別の住居として捉えていたが、SB1010として検出した範囲内に炉跡が確認できず、また主柱穴と考えられるEPの配置が円形遺構を囲むように配置されていることから、同一遺構の可能性が考えられる。よってこの報告では、SB1010a、SB1010bとして報告する。

柱穴・土坑（第57図）

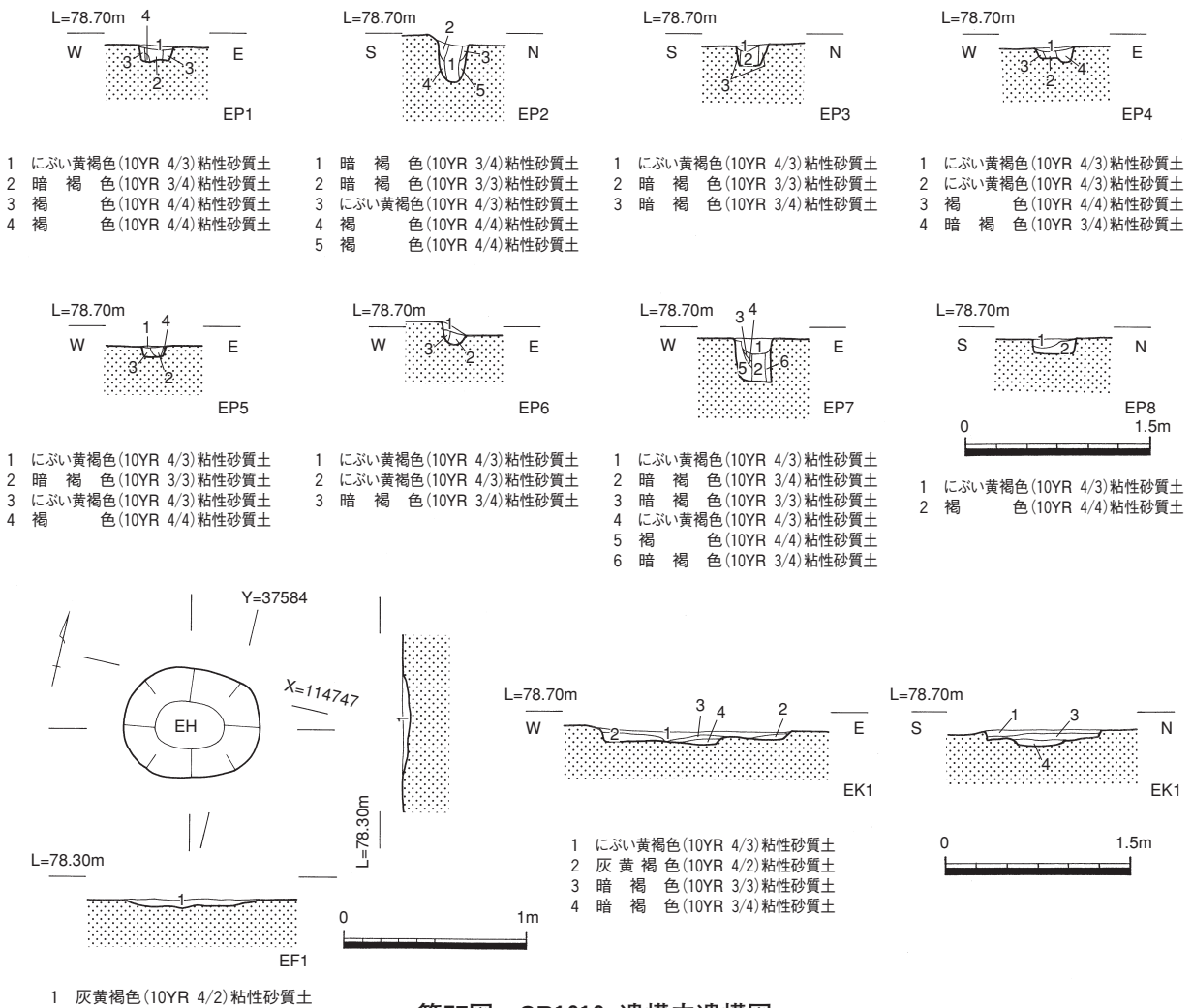
SB1010aの柱穴は全部で8基検出され、そのうちEP1～5の計5基が主柱穴と考えられる。主柱穴は直径・長軸0.25～0.3mの円形および楕円形、最大深度0.1～0.3mを測る。柱穴間距離の最大は3.25m（EP4・5間）、最小は1.6m（EP1・2間）である。土色および含有物から覆土はそれぞれ分層できるものの、暗褐色を主体とする。また、主柱穴すべてに柱痕を確認した。



第55図 SB1010・1012遺構図(1)



第56図 SB1010・1012遺構図(2)

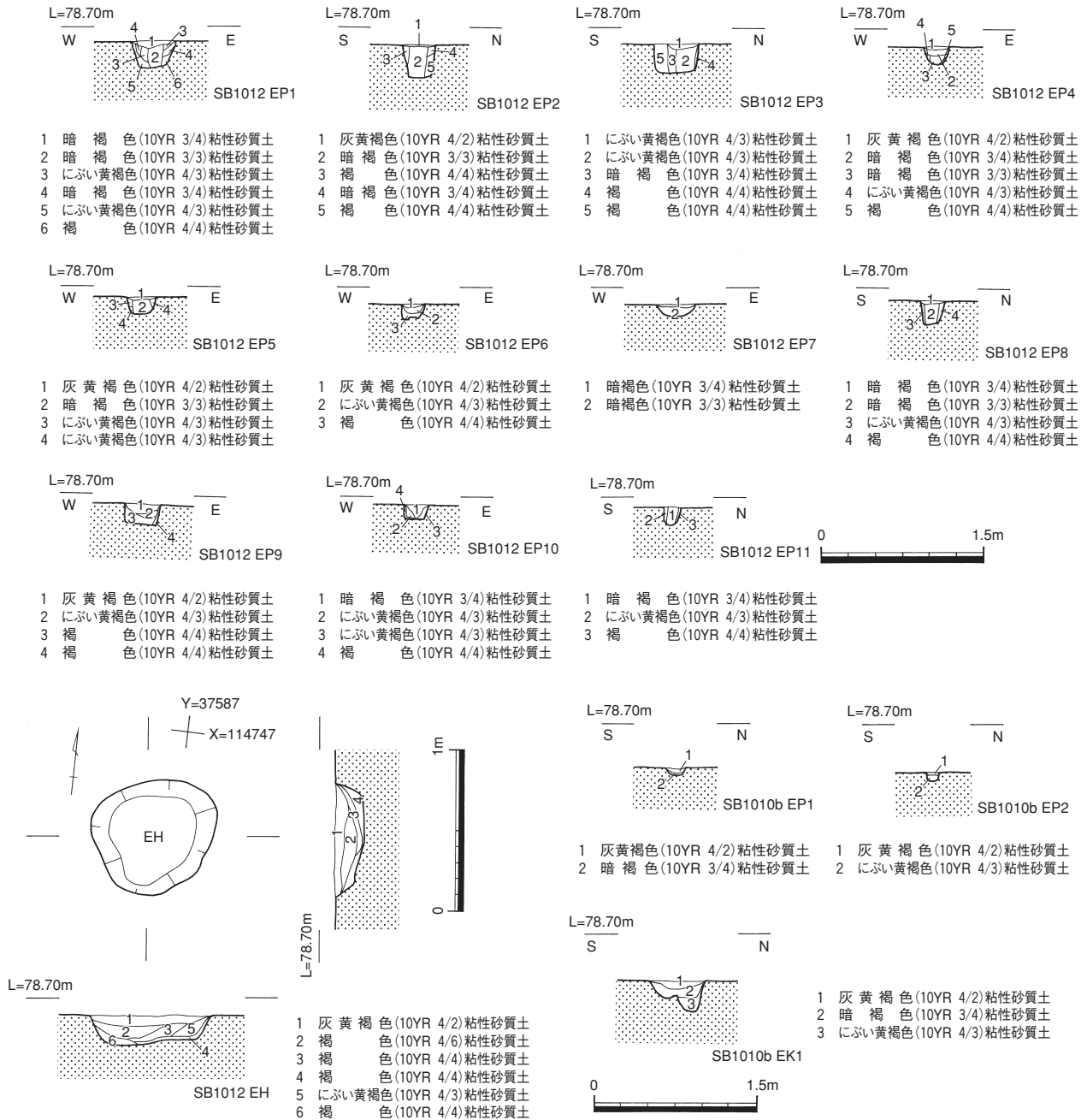


第57図 SB1010a遺構内遺構図

主柱穴以外の柱穴3基は直径0.21~0.42mの円形で、最大深度0.13~0.36mを測る。覆土は、主柱穴と同じく暗褐色を主体とする。EP6・7で、柱痕を確認した。柱穴からの出土遺物は、EP2から貼付突帯をめぐらす短頸広口壺1点・体部片23点が、EP3から弥生土器片14点、サヌカイト製石鏃・剥片各1点が、EP4から広口壺口縁部1点・体部片6点、サヌカイト剥片2点が、EP1・6・7からそれぞれ弥生土器数点が出土した。図化できたのは、EP3から出土した凹基式の石鏃(290)のみである。

住居内において土坑を1基検出したが、その形態から住居に伴わない可能性が高い。EK1の平面形態・底面形態ともにやや長方形、断面形態は不整な逆台形を呈し、長軸1.62m、短軸1.01m、最大深度0.13mを測る。覆土は、土色および含有物から4層に分層できる。3層以外はブロック土を混入し、1層は灰黄褐色土・暗褐色土、2層は暗褐色土、4層はにぶい黄褐色土ブロックをそれぞれ混入する。遺物は、広口壺形土器1点、甕形土器底部1点、体部片70点、サヌカイト剥片1点、打製石庖丁3点・未製品1点が出土し、図化できたのは砂質片岩を用いた打製石庖丁(304)のみである。

SB1010b内において検出された柱穴は、2基である。直径0.31~0.34mの円形、最大深度0.06~0.08mを測る。柱痕および遺物の出土は、2基ともに認められない。土坑は1基検出でき、平面形態・底面形態ともにやや不整な楕円形、断面形態は逆台形を呈し、長軸0.77m、短軸0.52m、最大深度0.29mを

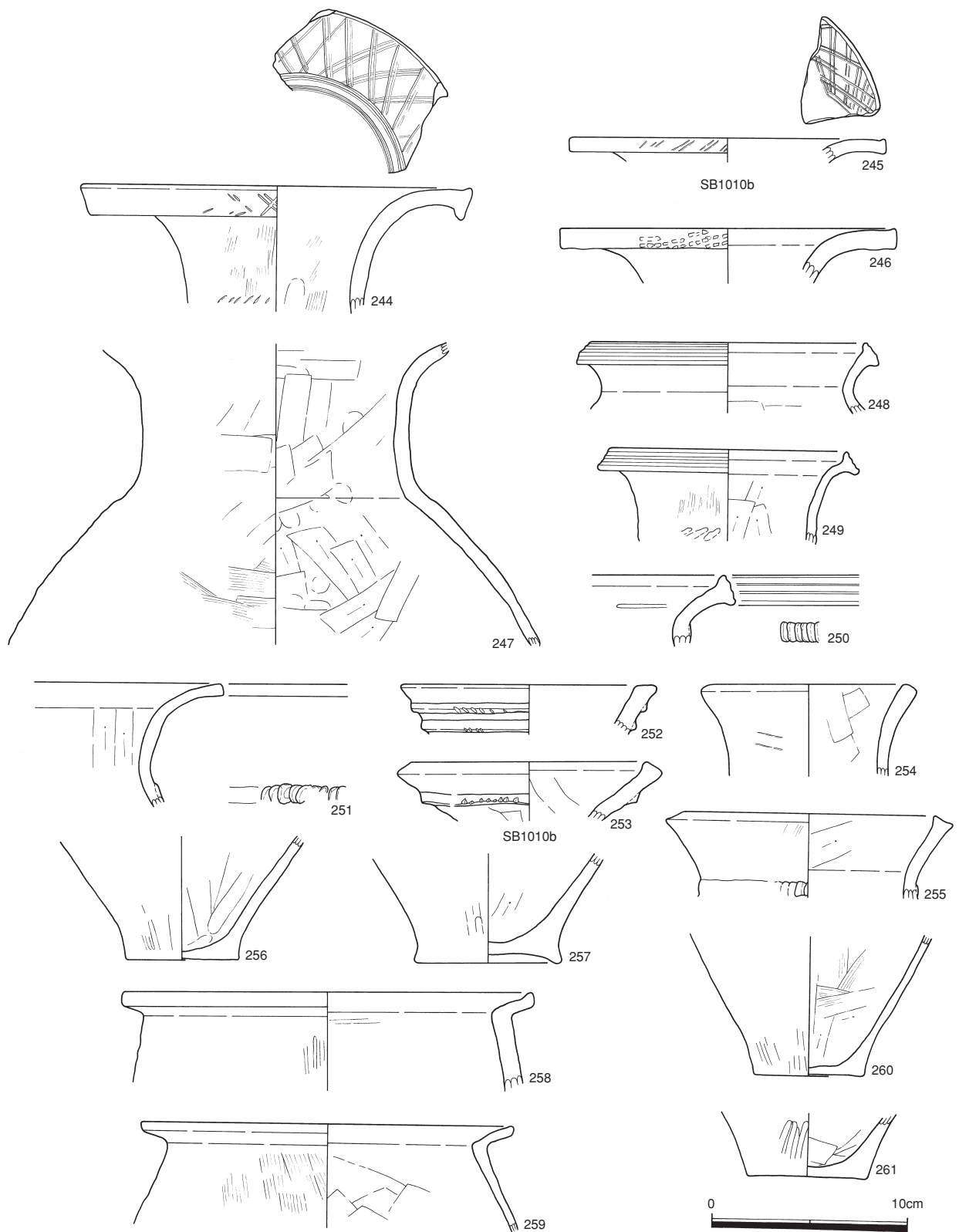


第58図 SB1010b・SB1012遺構内遺構図

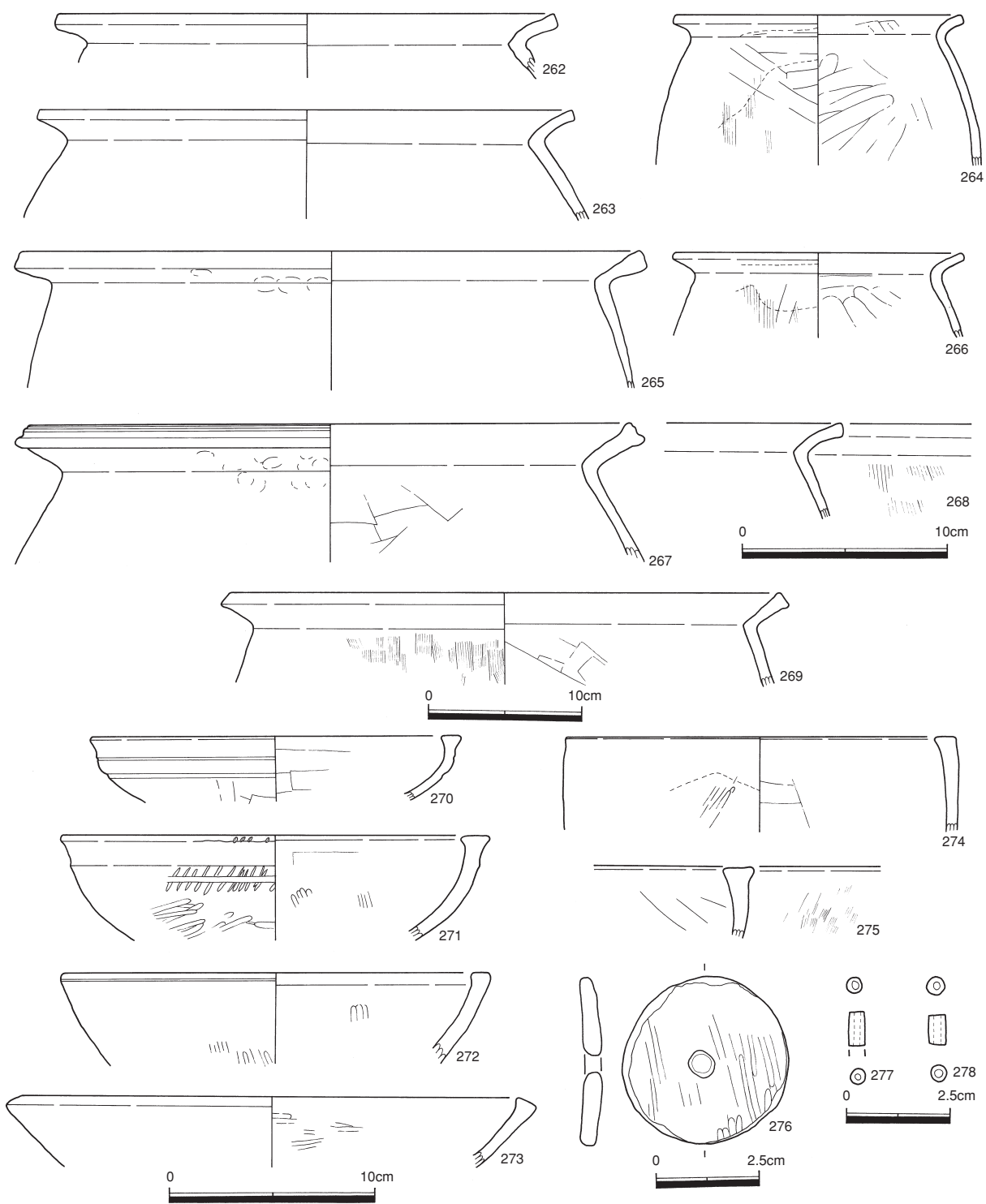
測る。覆土は2層に分層でき、1層は灰黄褐色粘性砂質土で暗褐色土・にぶい黄褐色土ブロックをそれぞれ混入する。2層は、暗褐色粘性砂質土である。出土遺物は弥生土器片2点、サヌカイト剥片1点が出土したが、小片のために図化できなかった。

土層 (第55図)

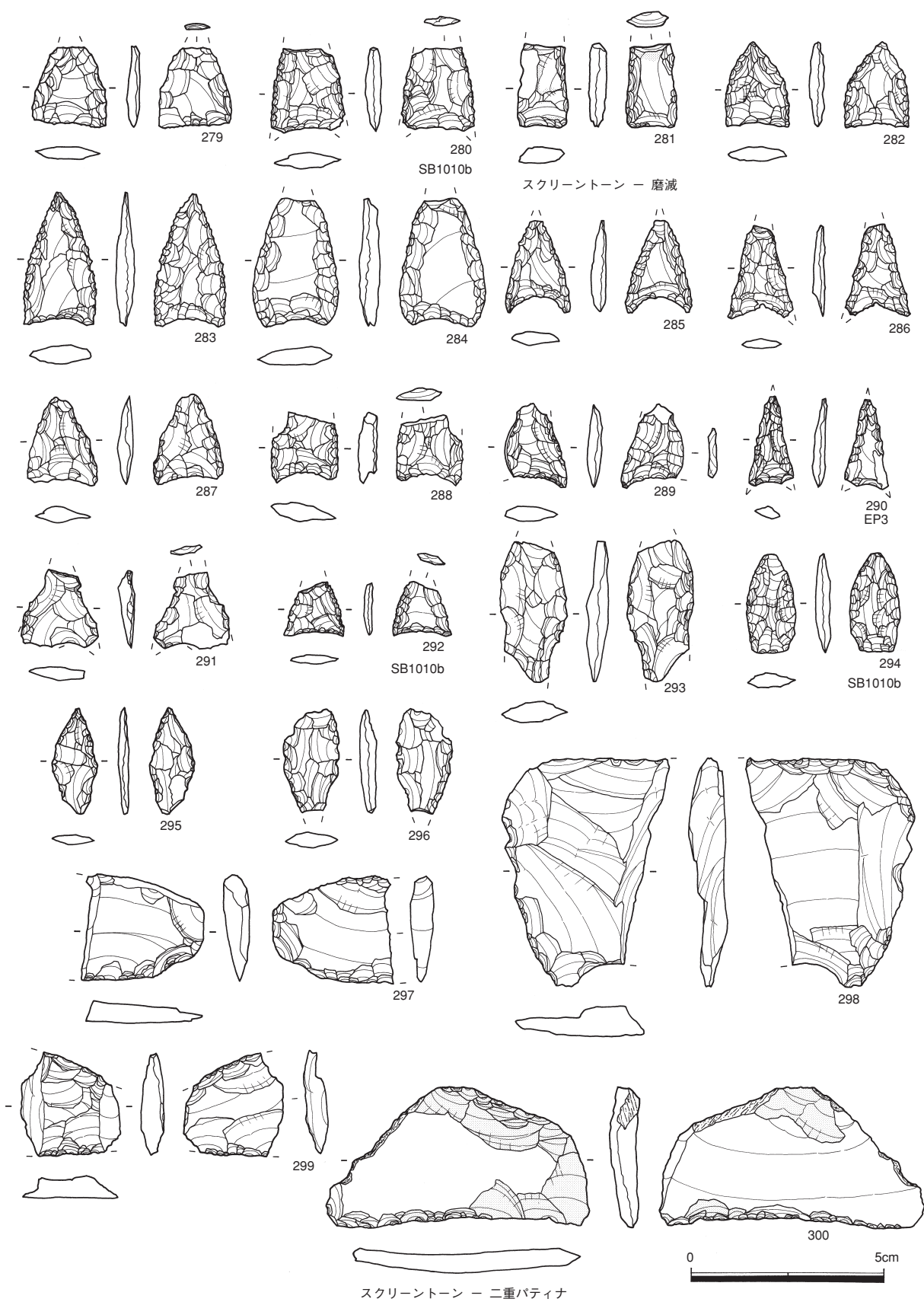
SB1010aの覆土は、土色および含有物から5層に分層でき、概ね黒褐色を呈する。2・5層では、地山ブロックを混入する。層中に土器片・炭化物が全般的に含まれ、散在した状態で遺物の出土が認められるが、北側にやや多い。



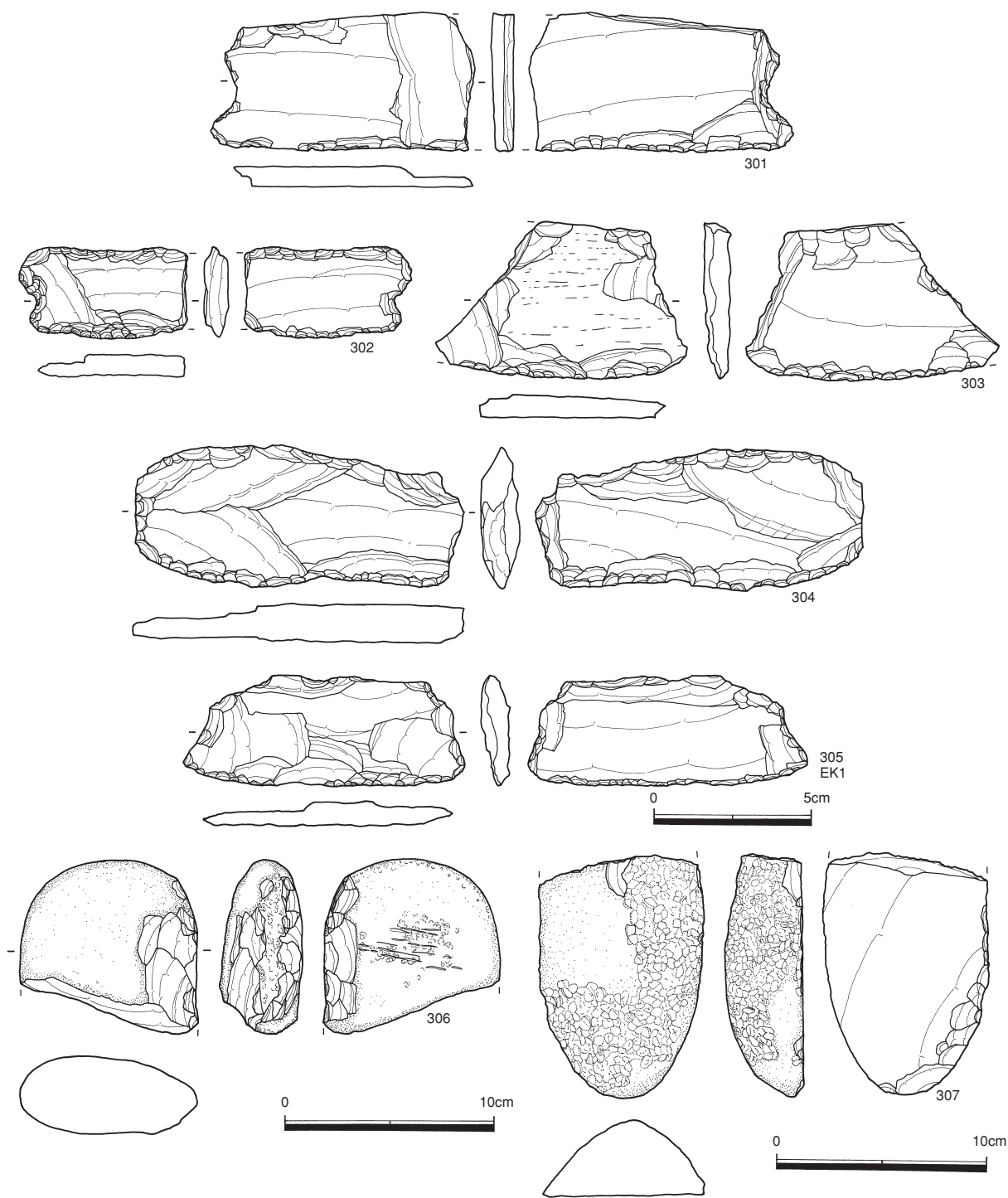
第59図 SB1010a出土遺物(1)



第60図 SB1010a出土遺物(2)

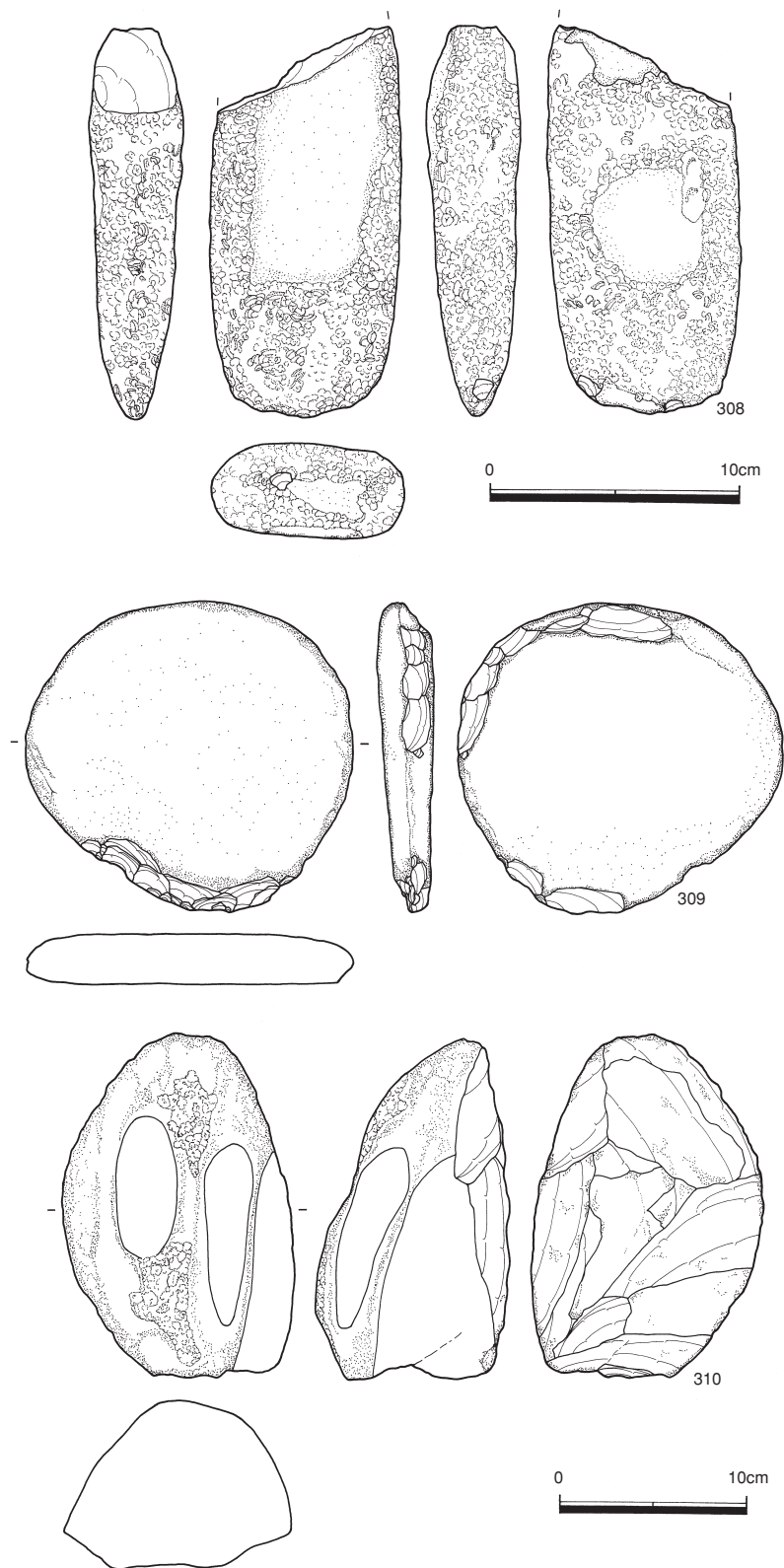


第61図 SB1010a出土遺物(3)

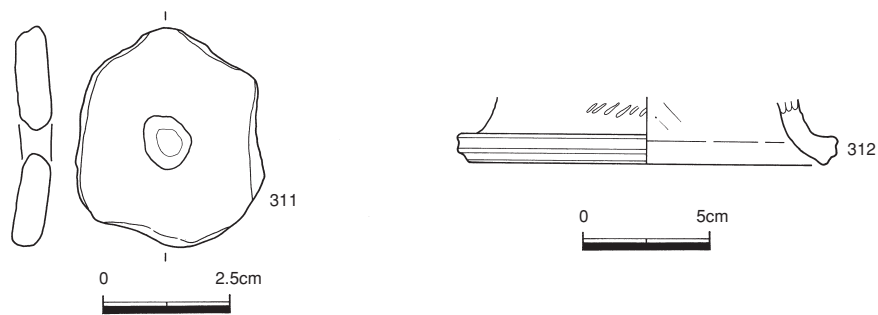


第62図 SB1010a出土遺物(4)

SB1010bの覆土は概ね暗褐色を呈するが、土色および含有物から13層に分層できる。1層はにぶい黄褐色土ブロックを、2～4層では褐色土ブロックを、12層では暗褐色土ブロックをそれぞれ混入する。10層は、13層に接する部分で焼土ブロックを含む。また13層では焼土が全体的に含まれており、炭化物を多く含む。遺物は散在した状態で2～4・10～13層から出土し、SB1010aとほぼよく似た高さでの出土である。床面直上の遺物は、認められなかった。



第63図 SB1010a出土遺物(5)



第64図 SB1010b出土遺物(1)

炉 (第57・65図)

平面形態・底面形態ともに楕円形、底面形態は緩やかな舟底形を呈し、長軸0.74m、短軸0.59m、最大深度0.04mを測る。覆土は灰黄褐色粘性砂質土1層で、部分的に炭の集積が認められる。炉は、SB1010bのほぼ中央部に造り付けられている。

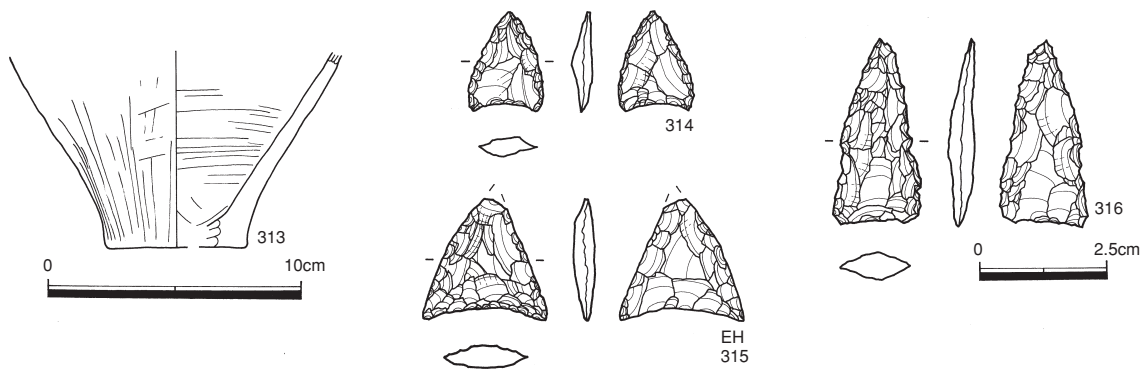
遺物は弥生土器片7点、サヌカイト製石鏃1点・剥片2点が出土し、図化できたのは凹基式の石鏃(315)のみである。

出土遺物 (第59～64図)

壺形土器59点、甕形土器148点、鉢形土器19点、高坏形土器4点、体部片842点、土製紡錘車2点、サヌカイト製石鏃14点・楔形石器3点・削器1点・剥片151点、結晶片岩製打製石庖丁5点・石斧3点・削器1点、砂岩製砥石1点、碧玉製管玉2点が出土した。図化可能な遺物は、そのうちの69点である。

出土した壺(244～257)のうち、広口壺(244～247・251)・短頸広口壺(248～250・255)・細頸広口壺(252・253)・長頸広口壺(254)があり、口縁部端面に斜格子文・刺突文・凹線を施す。頸部には刺突文・指頭圧痕貼付突帯をめぐらす。底部は平底である(256・257)。甕(258～269)は、口縁部をくの字に折り曲げるタイプが主体を占める。口縁端部を上方のみに拡張させるもの(258・262)、上下方向に拡張させるもの(267・269)、そのまま方形に収めるもの(259・263～266・268)がある。口径が30cmを越える甕(267・269)も出土している。外面の調整は、調整不明瞭なものもあるがほぼハケメを主体とする。内面は体部下半にはケズリが認められるものの、上半部においてはケズリはなく、かわりにユビナデ・板ナデを施す。259は角閃石・金雲母を胎土に含むことから、讃岐からの搬入品である。264では頸部を中心に、266では外面口縁端部に炭化物が多く付着する。270～273・275は、高坏である。271は、外面に炭化物が多く付着する。274は、鉢か。276は土器片を転用した紡錘車である。277・278は碧玉製管玉で、277は一部欠損する。278は片側穿孔、277は両側穿孔か。

石鏃(279～296)のうち、279～282は平基三角、283～292は凹基式、293～296は有茎式である。281は部分的に磨滅痕跡が残る。297～299は楔形石器、300は平刃・単刃を持つサヌカイト製削器で再加工の痕跡が認められる。打製石庖丁(301～305)のうち、302は泥質片岩を用い、他の石庖丁は砂質片岩を用いる。302・304は複刃である。306～308は未製品の石斧である。石材は、3点共に閃緑岩を用いる。307は、表面に敲打痕が1ヶ所認められる。309は砂質片岩の礫を用いた削器で、凸刃で複刃を持つ。310は砂岩製の砥石で、上・右側縁部に磨面と敲打痕がそれぞれ二ヶ所認められる。



第65図 SB1010b出土遺物 (2)

SB1010bから壺形土器11点、甕形土器16点、鉢1点、高坏脚部1点、土製紡錘車1点、サヌカイト製石鏃5点・剥片25点、結晶片岩剥片4点が出土した。図化できたのは紡錘車(311)、高坏(312)、甕(313)、サヌカイト製石鏃(280・292・294・314・316)である。図化できなかったものの、壺は広口壺および短頸広口壺が出土した。313は内外面にミガキが施される。280・292・314は凹基式、294は有茎式、316は平基三角である。294では、使用痕が認められる。

時期

弥生時代中期中葉～後葉の年代が与えられるが、主体は中期中葉と思われる。

竪穴住居12号 (SB1012) (第55・56・58・66図)

位置・構造 (第55・56図)

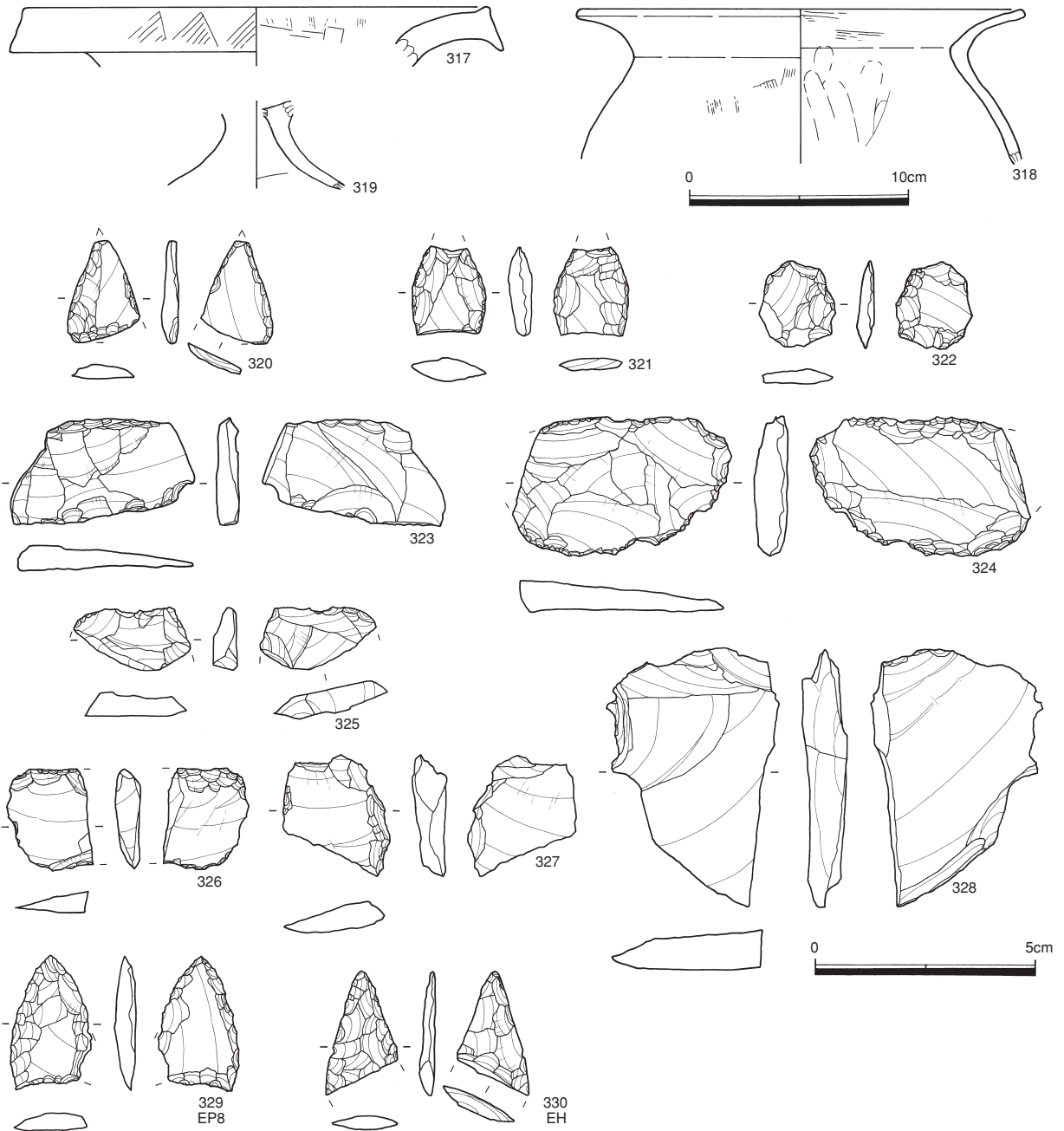
5-A区 β-II J・K-17・18でSP11231に切られた状態で確認された竪穴住居。住居の南側は調査区側溝によって部分的に切られているが、この住居の平面形態・底面形態ともにやや不整な円形、断面形態は緩やかな舟底形、規模は長軸5.55m、最大深度0.10m、検出部分の床面積19.71m²を測る。

覆土除去後、床面に柱穴11基、炉1基を検出した。主柱穴は検出した中ではEP1～3・EP5と考えられ、5本柱以上の可能性も考えられる。また住居内において、周壁溝ならびに他の施設は確認出来なかった。出土遺物は少なく、壁際と住居内の一部分に若干まとまった状態で出土しているのみである。

柱穴・土坑 (第58図)

柱穴は全部で11基検出され、そのうちEP1～3・5の計4基が主柱穴と考えられる。検出状況から5本柱構造と考えられるが、SB1010bの存在により未検出である。主柱穴は直径・長軸0.29～0.65mの円形および楕円形、最大深度0.16～0.30mを測る。柱穴間距離の最大は2.25m (EP1・2間)、最小は1.32m (EP2・3間)である。土色および含有物から各柱穴の覆土はそれぞれ分層されるものの、概ね暗褐色を主体する。また主柱穴すべてに、柱痕を確認した。

主柱穴以外の柱穴7基は、直径0.22～0.38mの円形で、深さ0.11～0.22mを測る。またEP8・11で、柱痕を確認した。遺物は、EP1から壺形土器・サヌカイト剥片が、EP3・5・10からそれぞれ弥生土



第66図 SB1012出土遺物

器片が、EP 4・7から弥生土器片・サヌカイト剥片が、EP 8から弥生土器片・サヌカイト製石鎌が出土した。図化できたのは、EP 8から出土した凹基式の石鎌（329）のみである。

土層（第55図）

覆土は、暗褐色粘性砂質土1層である。遺物の出土量は少ない。

炉（第58図）

平面形態・底面形態ともに不整な楕円形、断面形態は不整な逆台形を呈し、長軸0.77m、短軸0.68m、

最大深度0.18mを測る。覆土は土質および含有物から6層に分層できるものの、大きく2層に分けることができる。上層(1層)は灰黄褐色粘性砂質土で、にぶい黄褐色土ブロックを若干混入する。下層(2～6層)は概ね褐色を呈し、2～4層はにぶい黄褐色土ブロックをそれぞれ混入する。また最下層の4層から、炭化物が多く出土した。炉は、住居内のほぼ中央に造り付けられている。

遺物は高坏形土器1点・体部片12点、サヌカイト製石鏃・剥片各1点が出土し、図化できたのは平基三角の可能性のある石鏃(330)のみである。

出土遺物(第66図)

壺形土器25点、甕形土器11点、鉢形土器1点、高坏形土器7点、弥生土器片180点、サヌカイト製石鏃4点・楔形石器3点・剥片86点、結晶片岩剥片4点、瓦3点が出土した。瓦は、混入物と考えられる。図化可能な遺物は、そのうちの14点である。

317は口縁部端面に鋸歯文を施す広口壺である。これ以外に、頸部に貼付突帯をめぐらす短頸広口壺等が出土している。318は口縁部をくの字に折り曲げる甕で、頸部から口縁端部に向かって大きく開く。遺存状態は悪いものの、外面にハケメ、内面にユビナデ・ハケメを施す。図化できなかった土器に、明瞭なタタキを持つものもある。319は、精良な胎土を持つ高坏脚部である。

出土した石鏃(320～322・329)は、平基三角の可能性のある320と平基五角の321、322は不明である。329は凹基式で、EP8からの出土である。323～325は楔形石器、326～328はサヌカイト剥片である。326の上側縁部では、つぶれ痕が認められる。

時期

弥生時代終末期と思われる。

竪穴住居11号(SB1011)(第67～70図)

位置・構造

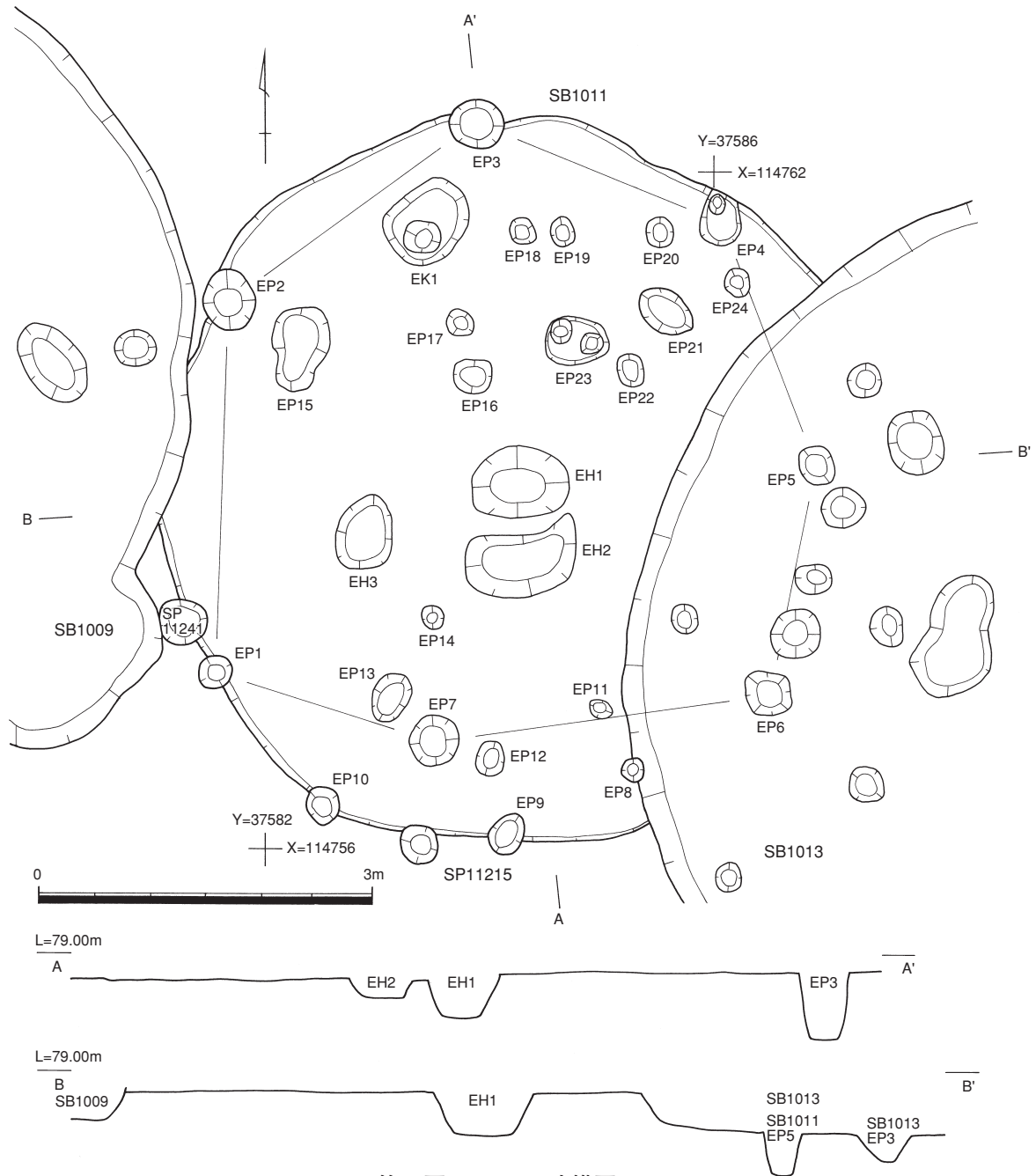
5-A区 β-II L・M-17・18でSB1009・1013・SP11215・11241に切られた状態で確認された竪穴住居。この住居の平面形態・底面形態は円形、断面形態は深度が非常に浅いために不明瞭なもの逆台形と思われる。長軸6.53m、最大深度0.03m、検出部分の床面積27.3m²を測る。

覆土除去後、床面に柱穴24基、土坑1基、炉3基を検出した。主柱穴はEP1～7の計7基である。また住居内において、周壁溝ならびに他の施設は確認出来なかった。出土遺物は、少量である。

柱穴・土坑(第68図)

柱穴は全部で24基検出され、そのうちEP1～7の計7基が主柱穴と考えられる。主柱穴は直径・長軸0.29～0.55mの円形もしくは楕円形、最大深度0.13～0.41mを測る。柱穴間距離の最大は3.34m(EP1・2間)、最小は2.05m(EP1・7間)である。土色および含有物から各柱穴の覆土は分層できるが、概ね暗褐色を主体とする。柱痕は、主柱穴ではEP2を除いたすべての柱穴に認められる。

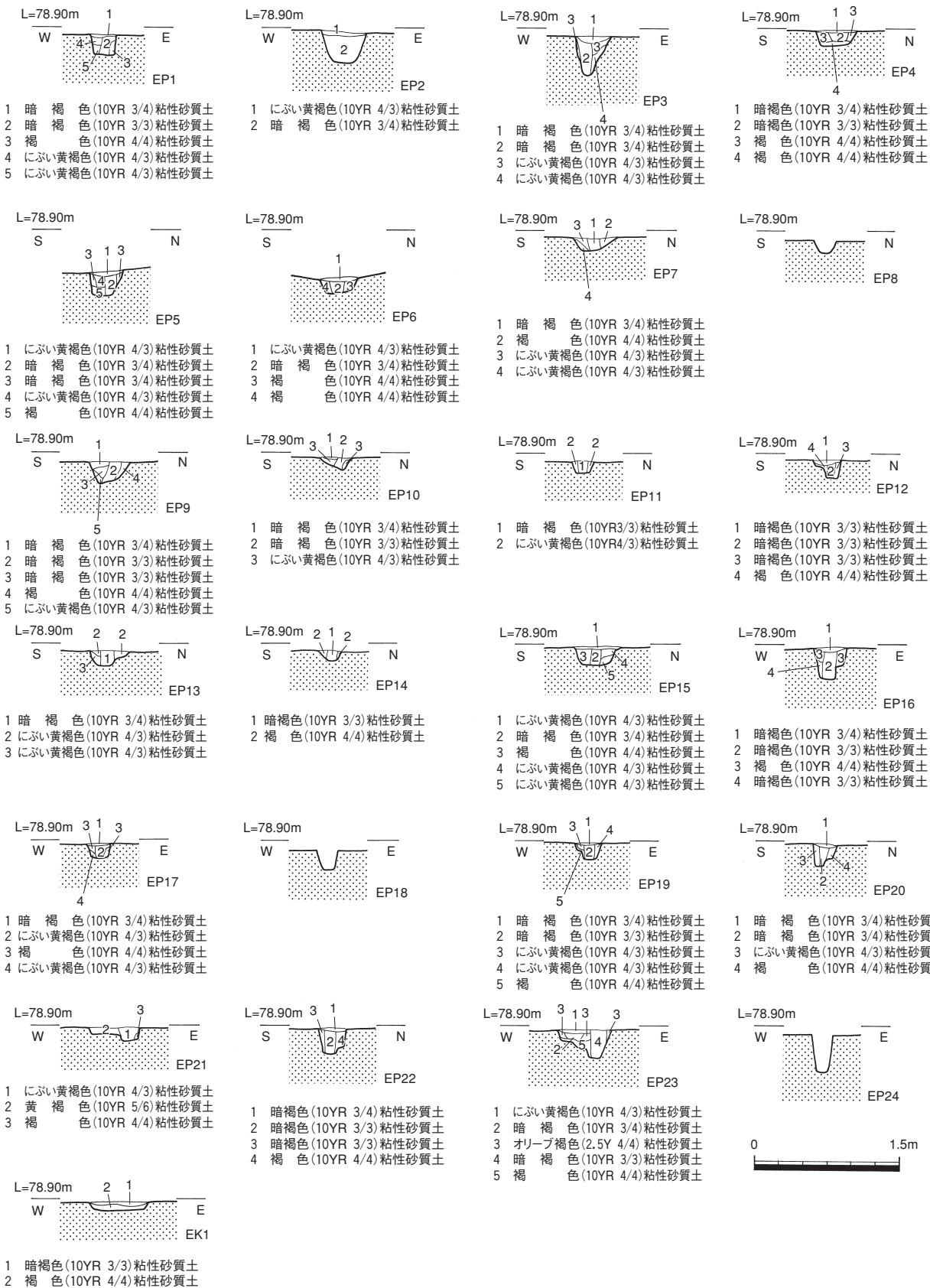
主柱穴以外の柱穴17基のうち13基は直径0.21～0.4mの円形で、最大深度0.11～0.39mを測る。残り4基は長軸0.47～0.74m、短軸0.32～0.49m、最大深度0.14～0.29mの楕円形を呈する。EP21がにぶい



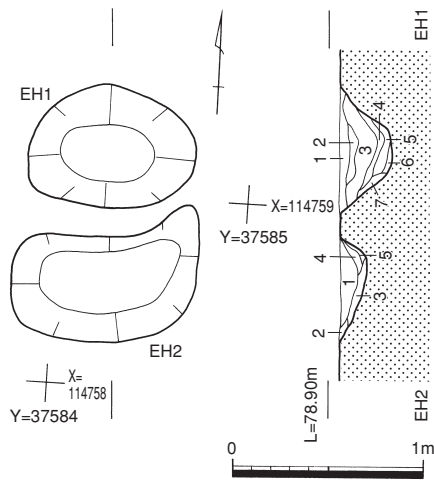
第67図 SB1011遺構図

黄褐色粘性砂質土を主要覆土にするのに対し、他の柱穴は暗褐色粘性砂質土を主要覆土とする。各柱穴では、EP 2・5・7・9・12・13・16・19・23から弥生土器片・サヌカイト剥片がそれぞれ数点ずつ、EP 3から壺形土器・サヌカイト剥片が、EP 4からサヌカイト剥片 2点、EP15から弥生土器片 2点・サヌカイト製石鏃 1点・剥片 5点が、EP 6・20・21から弥生土器片がそれぞれ数点ずつ、EP22から甕形土器 1点が出土した。図化できたのは、EP15から出土した平基三角の石鏃 (338) とEP18から出土したサヌカイト剥片 (339) の 2点である。

EK 1 は平面形態・底面形態ともにやや不整な楕円形、断面形態は逆台形を呈し、長軸0.8m、短軸0.65m、最大深度0.09mを測る。覆土は 2層に分層でき、1層は暗褐色粘性砂質土、2層は褐色粘性砂質土

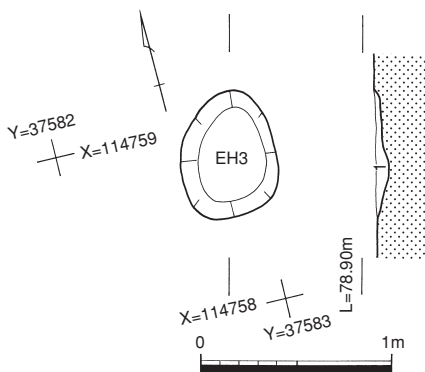


第68図 SB1011遺構内遺構図



- EH1
- 1 にぶい黄褐色(10YR 4/3)粘性砂質土
 - 2 暗褐色(10YR 3/3)粘性砂質土
 - 3 にぶい黄褐色(10YR 4/3)粘性砂質土
 - 4 暗褐色(10YR 3/4)粘性砂質土
 - 5 黒褐色(10YR 3/2)粘性砂質土
 - 6 黒褐色(10YR 2/1)粘性砂質土
 - 7 黒褐色(10YR 2/3)粘性砂質土

- EH2
- 1 にぶい黄褐色(10YR 4/3)粘性砂質土
 - 2 黒褐色(10YR 2/1)粘性砂質土
 - 3 黒褐色(10YR 3/2)粘性砂質土
 - 4 暗褐色(10YR 3/3)粘性砂質土
 - 5 にぶい黄褐色(10YR 5/3)粘性砂質土



- EH3
- 1 にぶい黄褐色(5YR4/4)粘性砂質土

第69図 SB1011EH遺構図

EH3は、EF1・2の0.7mほど西側に離れた場所に位置する。平面形態・底面形態ともに楕円形、断面形態は不整な舟底形を呈し、長軸0.65m、短軸0.5m、最大深度0.06mを測る。覆土はにぶい赤褐色粘性砂質土1層で、被熱面と考えられる。出土遺物は小片のために図化できなかったものの、サヌカイト剥片3点が出土した。

出土遺物 (第70図)

壺形土器1点、甕形土器2点、体部片8点、サヌカイト製石鎌3点(333~335)・剥片122点、結晶

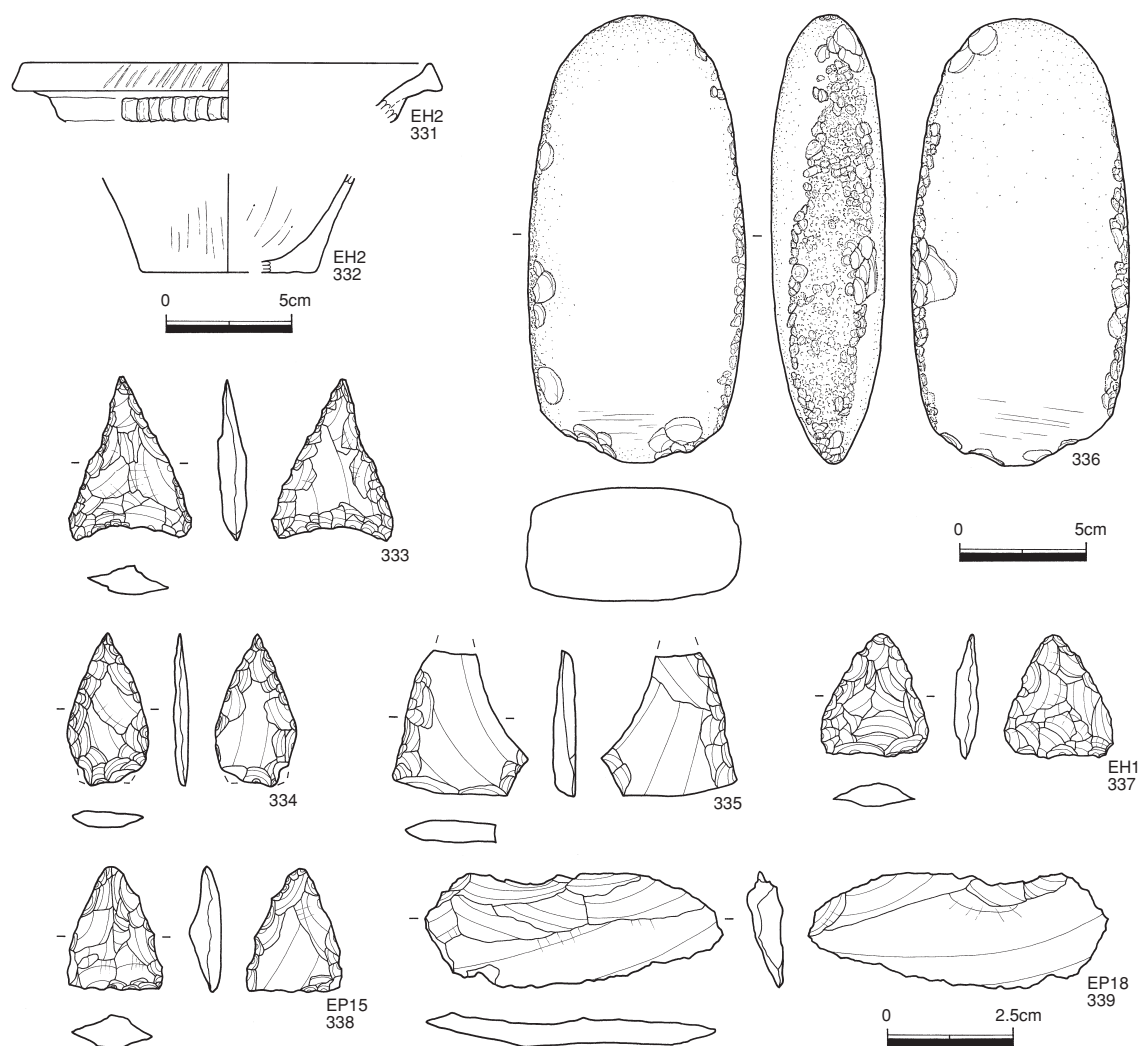
である。遺物は、焼土塊1点のみの出土である。

炉 (第69図)

SB1011内では、土層堆積状況から炉と考えられる土坑を3基確認した。調査区内で確認された竪穴住居のなかで複数の炉が確認された例は、このSB1011を除いて認められない。またSB1011の位置する場所は柱穴が多く検出され、未検出の住居が存在する可能性も考えられる。

EH1は、主柱穴とした柱穴間のほぼ中央に位置する。平面形態・底面形態ともに楕円形、断面形態は逆台形を呈し、長軸0.89m、短軸0.65m、最大深度0.28mを測る。覆土は土質および含有物から7層に分層できるものの、大きく2層に分けることができる。上層(1~3層)は概ねにぶい黄褐色を呈し、3層は灰黄褐色土ブロックを若干混入する。下層(4~7層)は概ね黒褐色を呈し、各層とも炭化物が大半を占める。6層が下層の中で炭化物の含有率が高い。遺物は、弥生土器片4点、平基三角のサヌカイト製石鎌(337)1点・剥片7点が出土した。

EH2は、EH1の約10cmほど離れた南側に位置する。主柱穴間で見ると若干南寄りである。平面形態・底面形態ともに不整な楕円形、断面形態は舟底形を呈し、長軸0.99m、短軸0.56m、最大深度0.14mを測る。覆土は土質および含有物から5層に分層できるものの、大きく2層に分けることができる。上層(1・4・5層)は概ねにぶい黄褐色、下層(2・3層)は黒褐色を呈する。上層のうち、4層は炭化物をやや多く含み、5層は褐色土ブロックを多く混入する。下層は、炭化物が大半を占める。遺物は、壺形土器口縁部(331)・底部(332)各1点・体部片2点、サヌカイト剥片10点が出土した。331は、頸部に指頭圧痕文突帯をめぐらせる。



第70図 SB1011出土遺物

片岩製石斧1点(336)が出土した。図化可能な遺物は、そのうちの4点である。土器は図化できなかったが、貼付突帯をめぐらす短頸広口壺が出土した。石鏃のうち333は凹基式、334は有茎式、335は未製品である。336は石材にハンレイ岩を用いた太形蛤刃石斧で、未製品である。表裏面に磨った個所がそれぞれ1個所認められる。

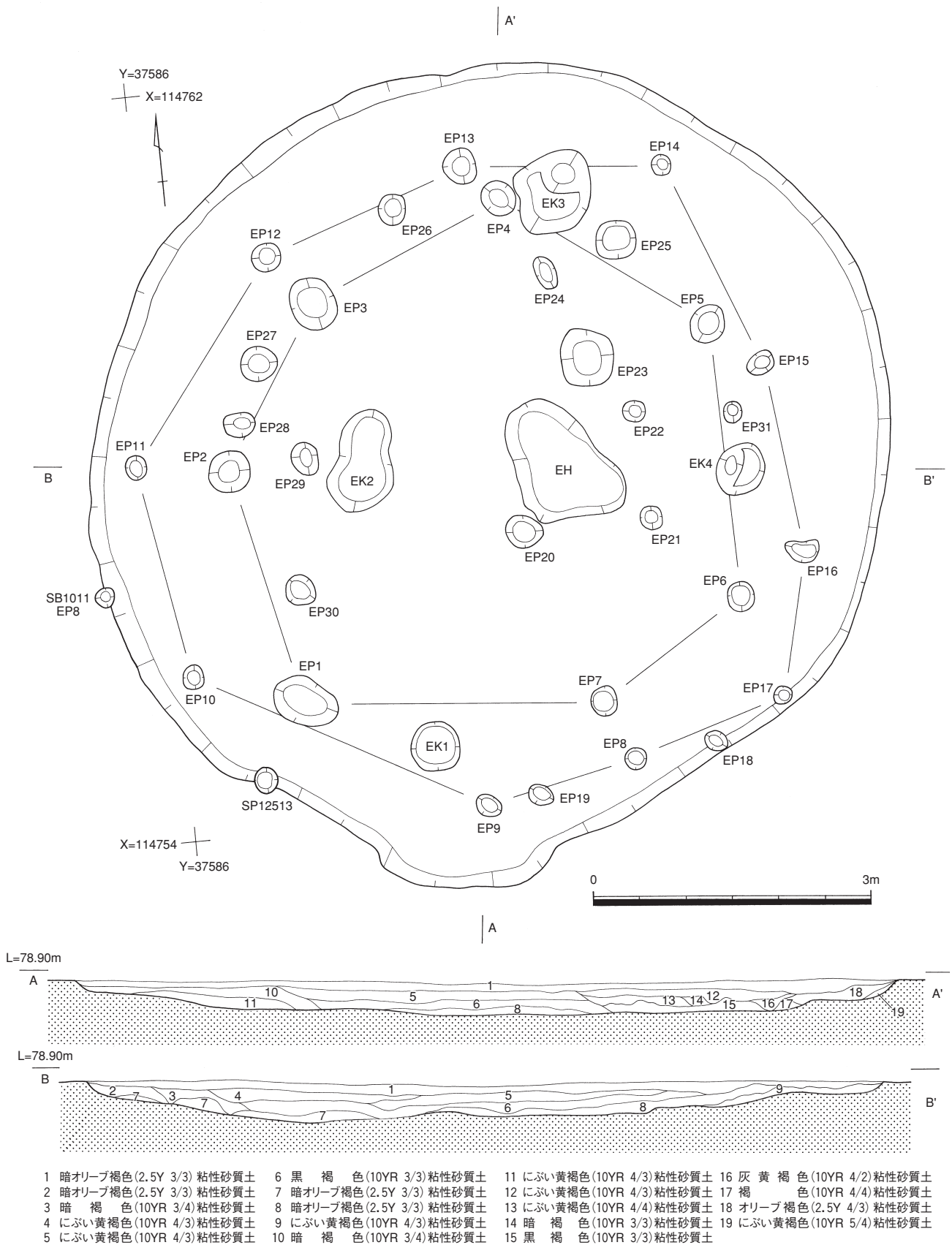
時期

弥生時代中期中葉である。

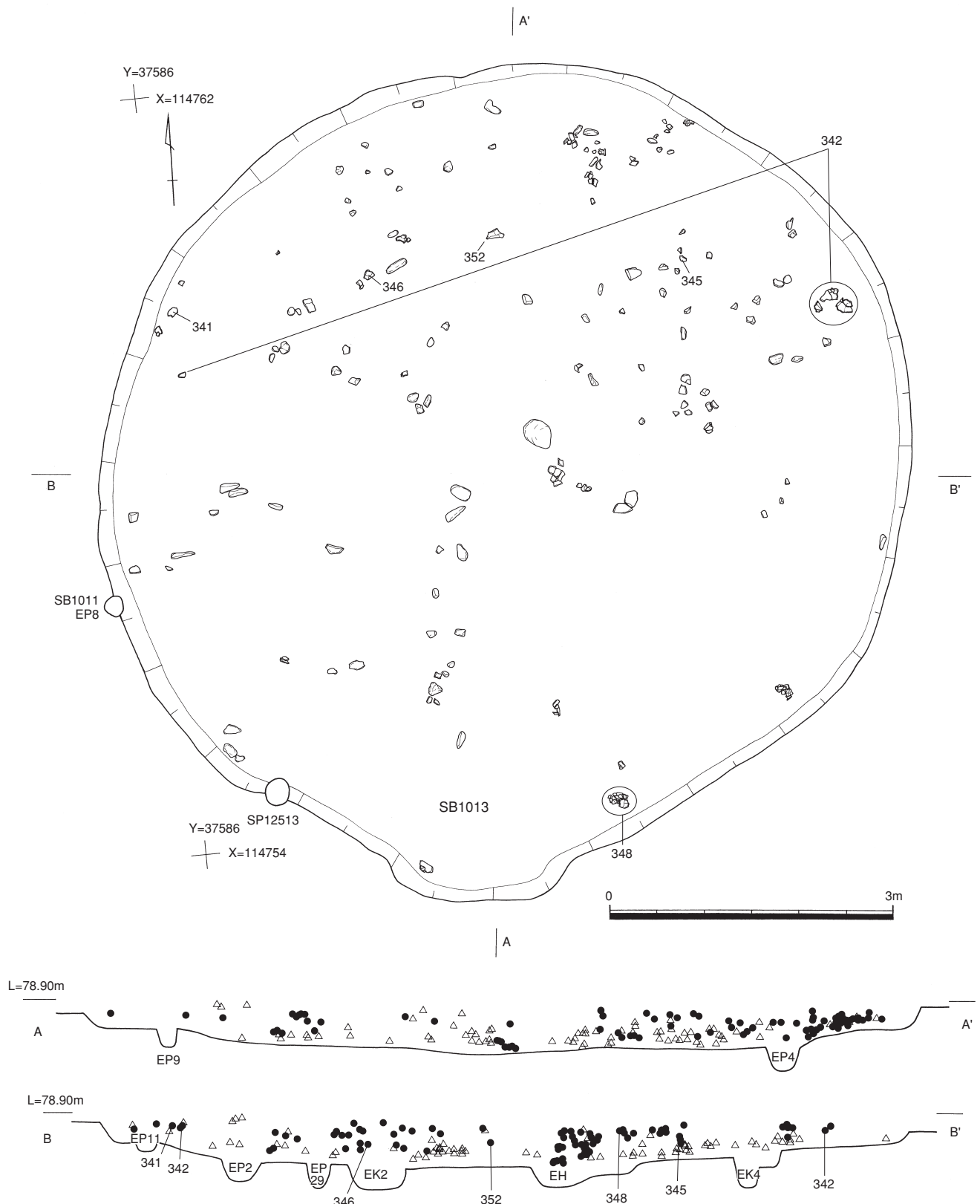
竪穴住居13号 (SB1013) (第71~76図)

位置・構造

5-A区 β-II K~M-18・19でSP12513に切られた状態で確認された竪穴住居。SB1011と切り合い関係にあり、SB1011より後出する。この住居の平面形態・底面形態はほぼ円形、断面形態はやや不整な舟底形を呈する。住居南側に1ヶ所、幅1.84m、奥行き0.4mの張り出し部が構築される。長軸は



第71図 SB1013遺構図(1)



第72図 SB1013遺構図(2)

この張り出し部を含めて8.94m、長軸に直交するような形で短軸8.66m、最大深度0.43m、床面積58.86 m²を測る。南側の張り出し部はその形状からみて、入り口の可能性が考えられる。

覆土除去後、床面に柱穴31基、土坑4基、炉1基を検出した。主柱穴はEP1～7、およびEP8～17の計17基である。また住居内において、周壁溝ならびに他の施設は確認出来ず、遺物は散在した状態で出土した。

柱穴・土坑（第73図）

柱穴は全部で31基検出され、そのうちEP1～7、EP8～17の計17基が主柱穴と考えられる。主柱穴17基のうち8基は、直径0.20～0.42mの円形で最大深度0.14～0.31mを測る。残りの9基は長軸0.26～0.72m、短軸0.22～0.48m、最大深度0.10～0.36mを測る楕円形である。柱穴間距離の最大は3.49m（EP1・7間）、最小は1.58m（EP6・7間）である。土質および含有物から各柱穴の覆土はそれぞれ分層されるものの、概ね暗褐色を主体する。柱痕は、主柱穴ではEP5・11・13を除いたすべての柱穴に認められる。

主柱穴以外の柱穴14基のうち10基は直径0.23～0.66mの円形で、最大深度0.09～0.27cmを測る。残り4基は長軸0.3～0.4m、短軸0.21～0.34mを測る楕円形で、最大深度0.1～0.36mを測る。覆土は、主柱穴と同じ暗褐色を主体とする。またEP18・22・25・29の4基で、柱痕が認められた。

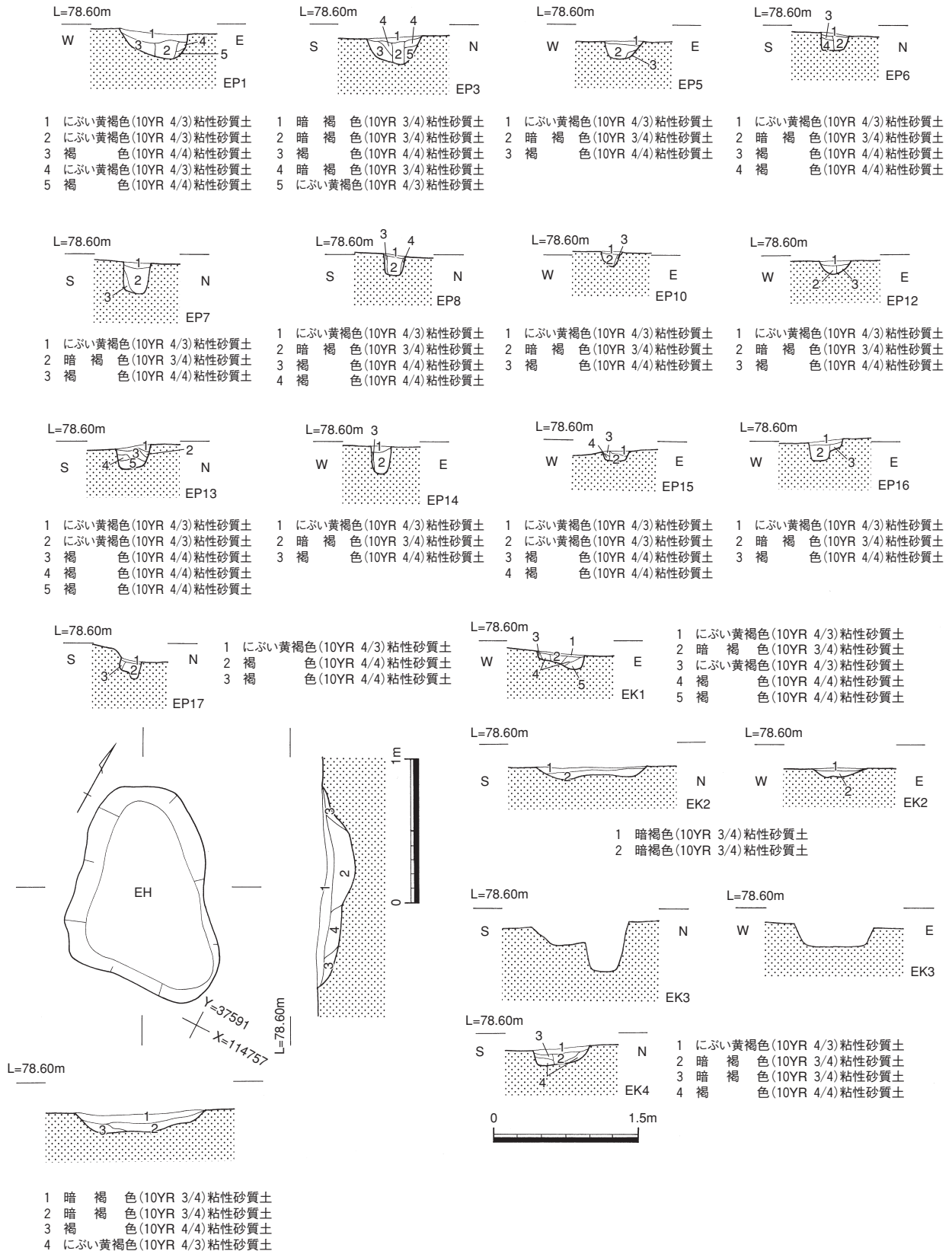
柱穴からの出土遺物は、EP28から甕形土器底部1点、サヌカイト剥片1点が、EP2・4からそれぞれ弥生土器片・サヌカイト剥片数点が、EP23からサヌカイトおよび結晶片岩の剥片各1点が、EP5～7・9・10・20・21・23・26・27・31から弥生土器数点が、EP8から口縁部端面に凹線が施される甕形土器1点と体部6点が出土した。しかし小片のために図化できる遺物はなかった。

土坑は、4基検出できた。EK1は平面形態・底面形態ともにやや円形、断面形態はやや不整な逆台形を呈し、直径0.52m、最大深度0.15mを測る。覆土は4層に分層でき、主要土色は暗褐色を呈する。EK2は平面形態・底面形態ともに不整形、断面形態は逆台形を呈し、長軸1.14m、短軸0.51m、最大深度0.12mを測る。平面形態から柱穴2基の切り合い関係を想定したが、土層堆積からそれを確認することはできなかった。覆土は暗褐色粘性砂質土で、含有物（2層は暗灰黄色土ブロックを混入する）から2層に分層できる。EK3は平面形態・底面形態ともにやや不整な楕円形、断面形態はやや不整な逆台形を呈し、長軸1.01m、短軸0.85m、最大深度0.5mを測る。断面形態から、遺構2基の切り合いの可能性はある。EK4は平面形態・底面形態ともにやや不整な円形、断面形態は逆台形を呈し、長軸0.6m、短軸0.5m、最大深度0.17mを測る。覆土は4層に分層でき、主要土色は暗褐色を呈する。

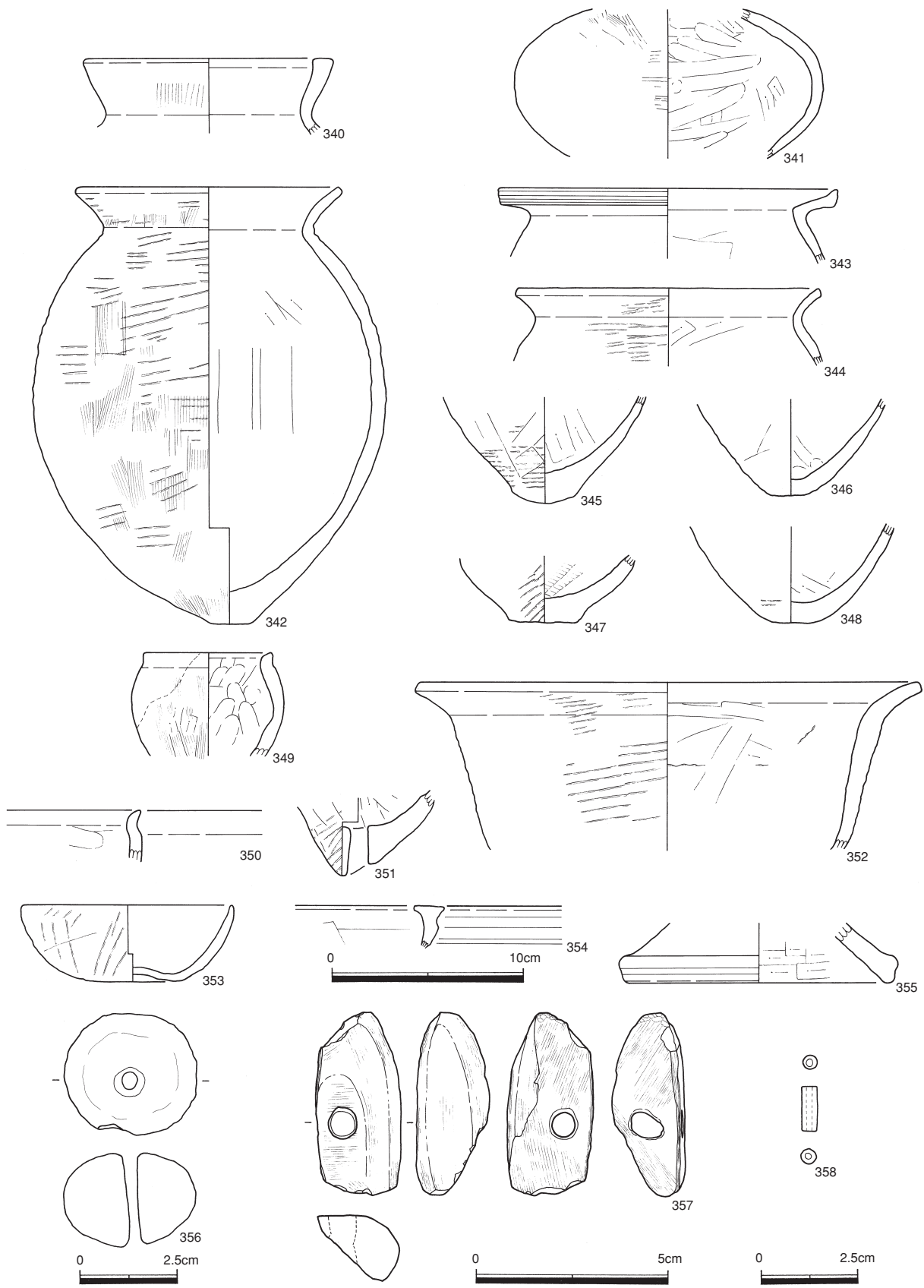
遺物は、EK3から甕形土器底部・体部片各1点、EK4から弥生土器片が出土したものの、図化できるものはなかった。

土層（第71図）

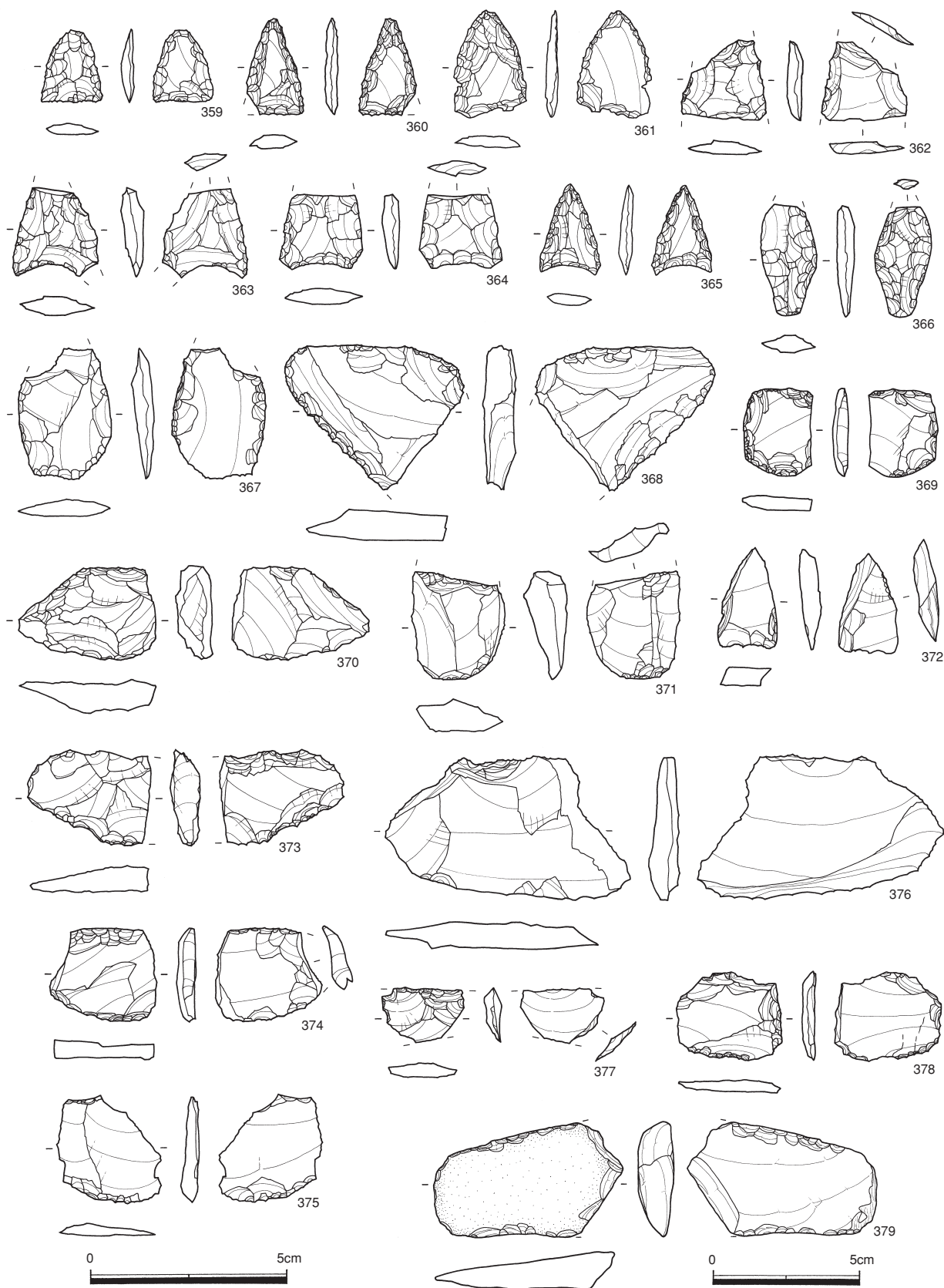
覆土は土色および含有物から19層に分層できるが、大きく上層（1層）、中層（2～6層・10・12～16層）、下層（7～9・11・17～19層）の3層に分けることができる。上層・下層ともにオリブ褐色を、中層はにぶい黄褐色を主体とする。土器片は1・5～8・11・15・16層から出土し、層によってその出土量は異なるもののほぼ全般的に認められる。遺物の出土量は中層の5・6層が特に多く、5層は19層中最多の出土量で、直径5cm前後の多量の礫と共に土器片が出土した。また炭化物の含有量は、



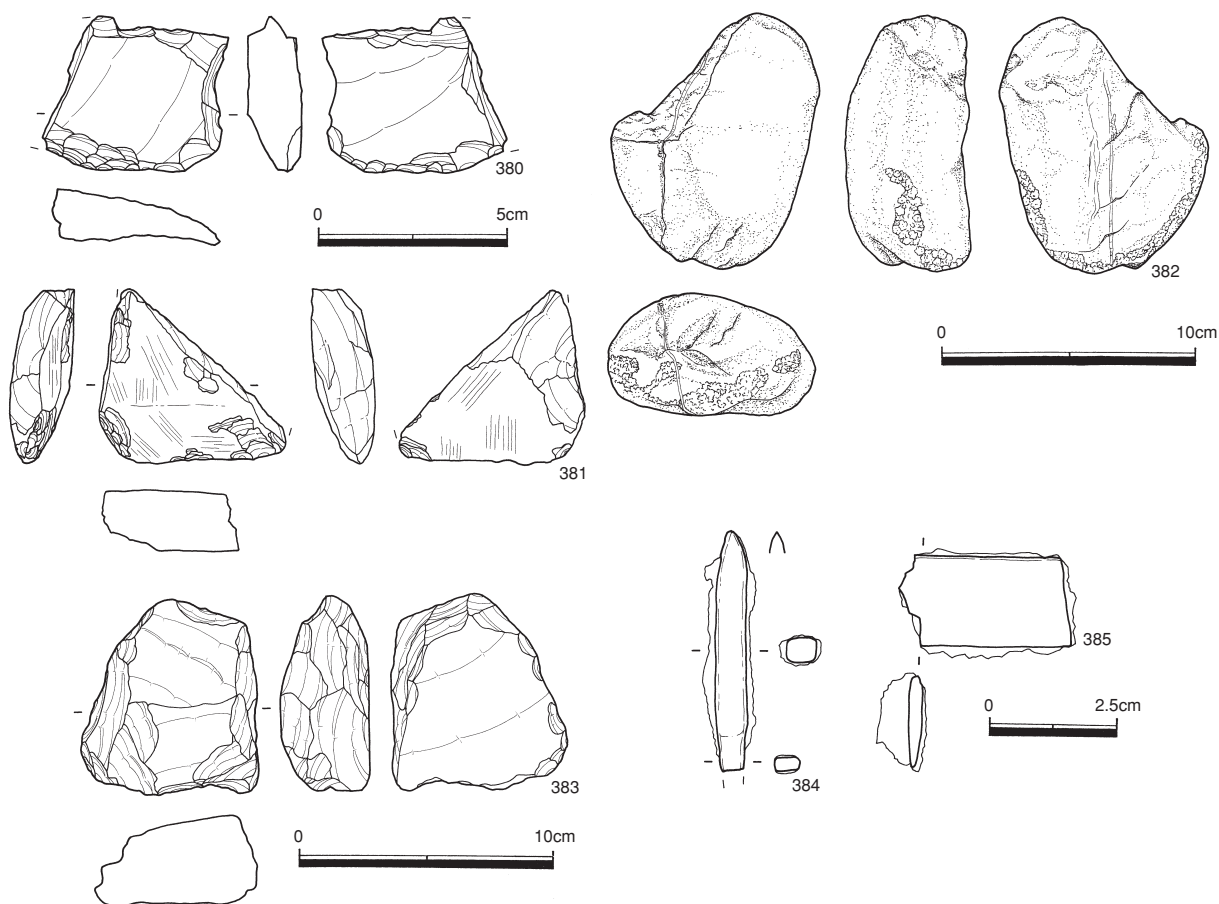
第73図 SB1013遺構内遺構図



第74図 SB1013出土遺物(1)



第75図 SB1013出土遺物(2)



第76図 SB1013出土遺物(3)

全般的に少ない。遺物は、やや散在した状態で確認した。

炉 (第73図)

平面形態・底面形態ともに不整な楕円形、断面形態は緩やかな舟底形を呈し、長軸1.55m、短軸0.87m、最大深度0.2mを測る。覆土は4層に分層でき、1・2層は暗褐色粘性砂質土で、2層は暗灰黄色土ブロックを混入する。3層は褐色粘性砂質土で、にぶい黄褐色土ブロックを混入する。4層はにぶい黄褐色粘性砂質土である。炉は、住居中央部より若干東よりに造り付けられる。

遺物は弥生土器片が出土したが、小片のために図化できなかった。

出土遺物 (第74～76図)

壺形土器54点、甕形土器102点、鉢形土器10点、高坏形土器3点、体部片1258点、焼土塊70点、土玉1点、翡翠製大珠1点、碧玉製管玉1点、サヌカイト製石鏃9点・楔形石器8点・剥片133点、結晶片岩製削器・打製石庖丁・偏平片刃石斧32点、砂岩製敲石2点、蛇紋岩製石核1点、鉄製品2点が出土した。図化可能な遺物はそのうち46点である。

図化できた壺は少なく、2点のみである。340は短頸広口壺の口縁部、341は細頸壺の体部である。甕(342～348)のうち、343・346以外はタタキ甕である。342は二次被熱を受け、体部を中心に炭化物が

多く付着する。347は、内面の調整から鉢の可能性はある。鉢（349～353）のうち、353は器高がやや低く、鉢というより椀に近い。また歪みにより、楕円形を呈していたと思われる。349・350は小型丸底鉢で、内面のユビナデが顕著である。高坏（354・355）のうち、355は脚部端面に凹線が認められる。356は算盤玉状の土玉、357は破損したヒスイ製大珠、358は碧玉製管玉である。357は摂理面で破損し、破損面に磨きを加えて再利用をしている。復元形は全長7～8cmのかつお節形である。358の穿孔方向は、両側穿孔である。

石鏃（359～367）のうち、361は石材に赤色珪質岩（赤チャート）を使用するが、他の石鏃はサヌカイトを用いる。359～361は平基三角、362～365は凹基式、366は有茎式、367は未製品である。他に楔形石器（368～375）、サヌカイト剥片（376～378）が出土した。削器（379）は砂質片岩を石材として用い、平刃・単刃を持つ。打製石庖丁（380）も削器と同じく砂質片岩を用い、平刃・単刃を持つ。扁平片刃石斧（381）は大部分が欠損し、石材には泥質片岩を用いる。敲石（382）は閃緑岩を用い、右・下側縁部の2ヶ所で敲打痕が認められる。蛇紋岩の石核（384）は、風化により白色化している。

鉄製品（384・385）のうち、384は一部欠損しているものの、ノミ状工具と思われる。385はその断面形状から、穂積具の可能性が考えられる。

時期

出土遺物から、弥生時代後期後葉～終末期の年代が与えられる。甕の底部に平底が認められることから、終末期前半が主体か。

竪穴住居14号 (SB1014) (第77～79図)

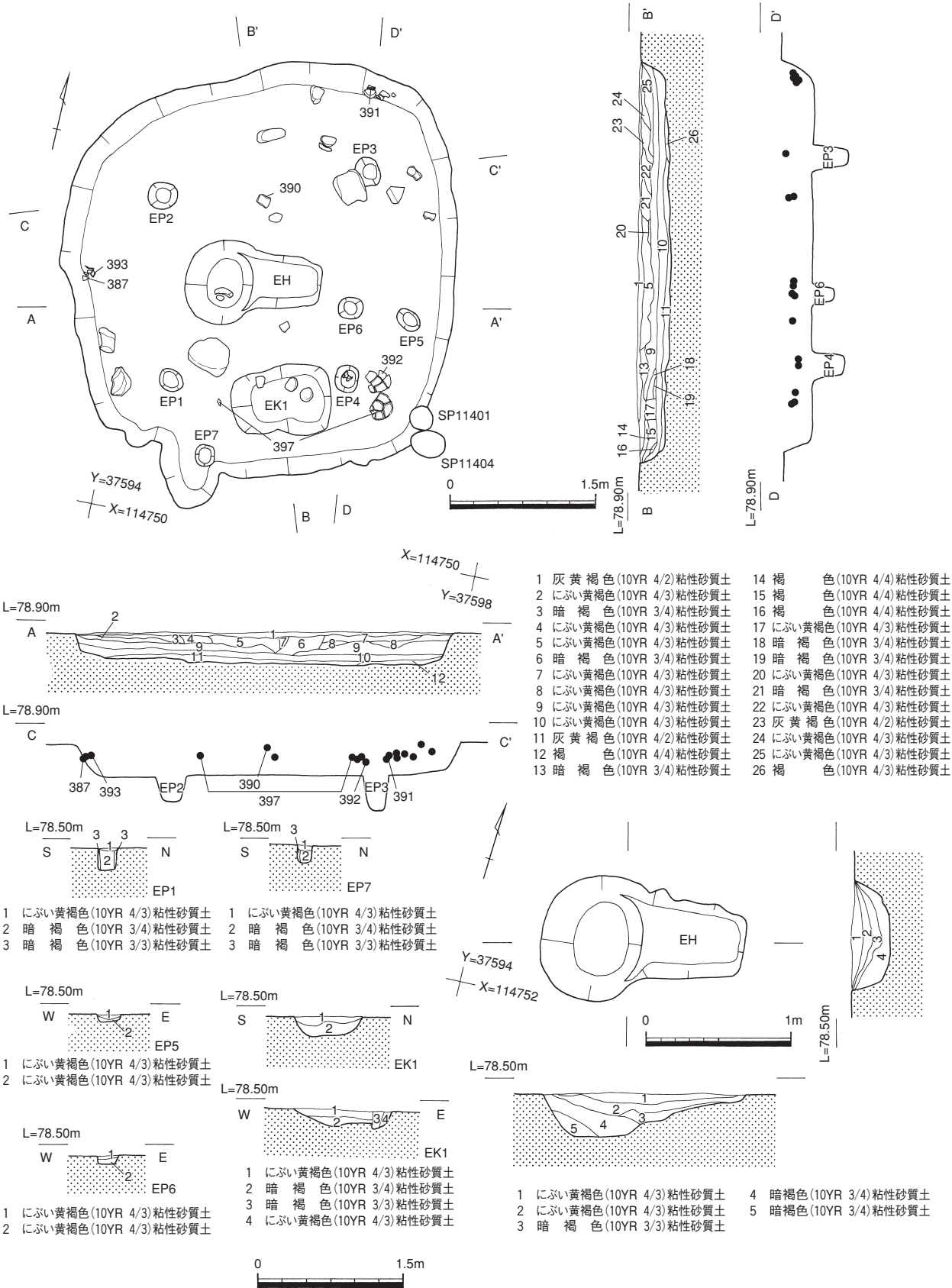
位置・構造

5-A区 β-II K-19・20でSP11401・11404に切られた状態で確認された竪穴住居。この住居の平面形態・底面形態はやや不整な隅丸方形、断面形態は逆台形を呈し、長軸4.87m、短軸3.97m、最大深度0.34m、床面積15.06m²を測る。

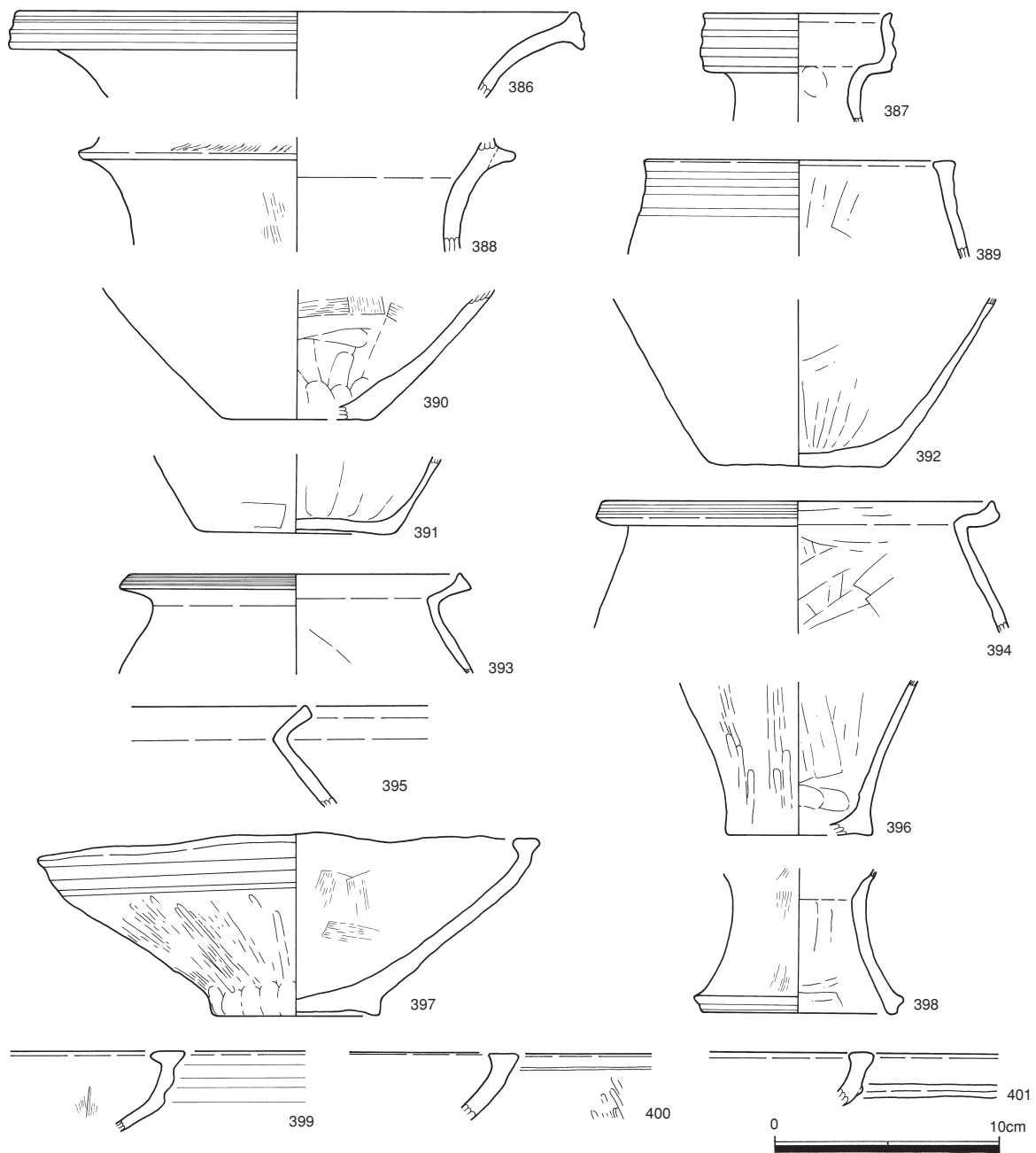
覆土除去後、床面に柱穴7基、土坑1基、炉1基を検出した。主柱穴はEP1～4の計4基で、四本柱構造である。また住居内において周壁溝などの他の施設は確認出来なかったものの、土層堆積状況および遺物の出土状況から、10・11層が貼床の可能性も考えられる。遺物の出土量は少なく散在した状態での出土だが、甕形土器（392）・鉢形土器（397）の二個体がEK1の約40cm離れた東側のところで並んで出土した。392は上半部を欠損した形で、397は完形での出土である。

柱穴・土坑（第77図）

柱穴は全部で7基検出されているが、そのうちEP1～4のが計4基が主柱穴と考えられる。主柱穴はEP1以外は長軸0.28～0.3mの円形で、最大深度0.18～0.42mを測る。EP1は長軸0.28m、短軸0.21m、最大深度0.23mを測る楕円形である。柱穴間距離の最大は2.17m（EP3・4間）、最小は1.86m（EP1・4間）である。EP3・4間とほぼ同じ距離をEP2・3間も有する。土色および含有物から各柱穴の覆土はそれぞれ分層されるものの、概ね暗褐色を主体とする。主柱穴すべてに、柱痕が認められる。主柱穴以外の柱穴3基は直径0.23～0.28mの円形で、最大深度0.08～0.18cmを測る。EP7のみ柱痕を



第77図 SB1014遺構図



第78図 SB1014出土遺物(1)

確認した。柱穴からの出土遺物は、EP 3 で壺形土器が、EP 4 で壺形土器・甕形土器が、EP 6 から甕形土器が、EP 2・7 から弥生土器片が出土した。しかし小片のために図化できるものはなかった。

土坑は、1基のみの検出である。EK 1 は平面形態・底面形態ともにやや不整な長方形、断面形態はやや不整な逆台形を呈し、長軸1.03m、短軸0.63m、最大深度0.22mを測る。覆土は土色および含有物から4層に分層できるが、土層堆積状況から検出できなかった柱穴に切られていることが判明した。土坑本来の覆土は、1・2層の2層である。小片のために図化できなかったものの、甕形土器底部1点、体部片14点が出土した。



第79图 SB1014出土遺物(2)

土層（第77図）

覆土は、土色および含有物から26層に分層できるが、Ⅰ層（1層）、Ⅱ層（2～8・12・13・20～26層）、Ⅲ層（9・14～19層）、Ⅳ層（10・11層）の4層に、大きく分けることができる。Ⅳ層の10・11層は、貼り床の可能性が考えられる。

Ⅱ層ではブロック土が多く認められ、4層・20層は灰黄褐色土ブロックを、7・25層は灰黄褐色土ブロックを若干、9・26層は褐色土ブロックを、12層は地山ブロックを、23層はにぶい黄褐色土ブロックを、24層は部分的に褐色土・灰黄褐色土ブロックを混入する。Ⅲ層では、18層はにぶい黄褐色土ブロックを混入する。Ⅳ層の11層では、にぶい黄褐色粘性砂質土ブロックを混入する。

遺物はⅢ層からの出土が多く、中でも9層からの出土量が多い。11・23層では、層中に多量の炭化物を含む。

炉（第77図）

平面形態・底面形態ともに不整形である。断面形態も不整形で、遺構の西側は逆台形を呈するような壁の立ち上がりを見せるが、東側では緩やかにあがる。長軸1.52m、短軸0.55m、最大深度0.2mを測る。覆土は土色および含有物から5層に分層できるものの、大きく2層に分けることができる。上層（1・2層）はにぶい黄褐色を呈し、1層は灰黄褐色土・暗褐色土ブロックを混入する。下層（3・4・5層）は暗褐色を呈し、3層は炭化物を多量に含む。5層は灰黄褐色土ブロックを若干混入する。炉は、住居および支柱穴間のほぼ中央に造り付けられている。

遺物は壺形土器・甕形土器底部各1点、体部片17点、サヌカイト製楔形石器1点が出土し、図化できたのは楔形石器（412）のみである。

出土遺物（第78・79図）

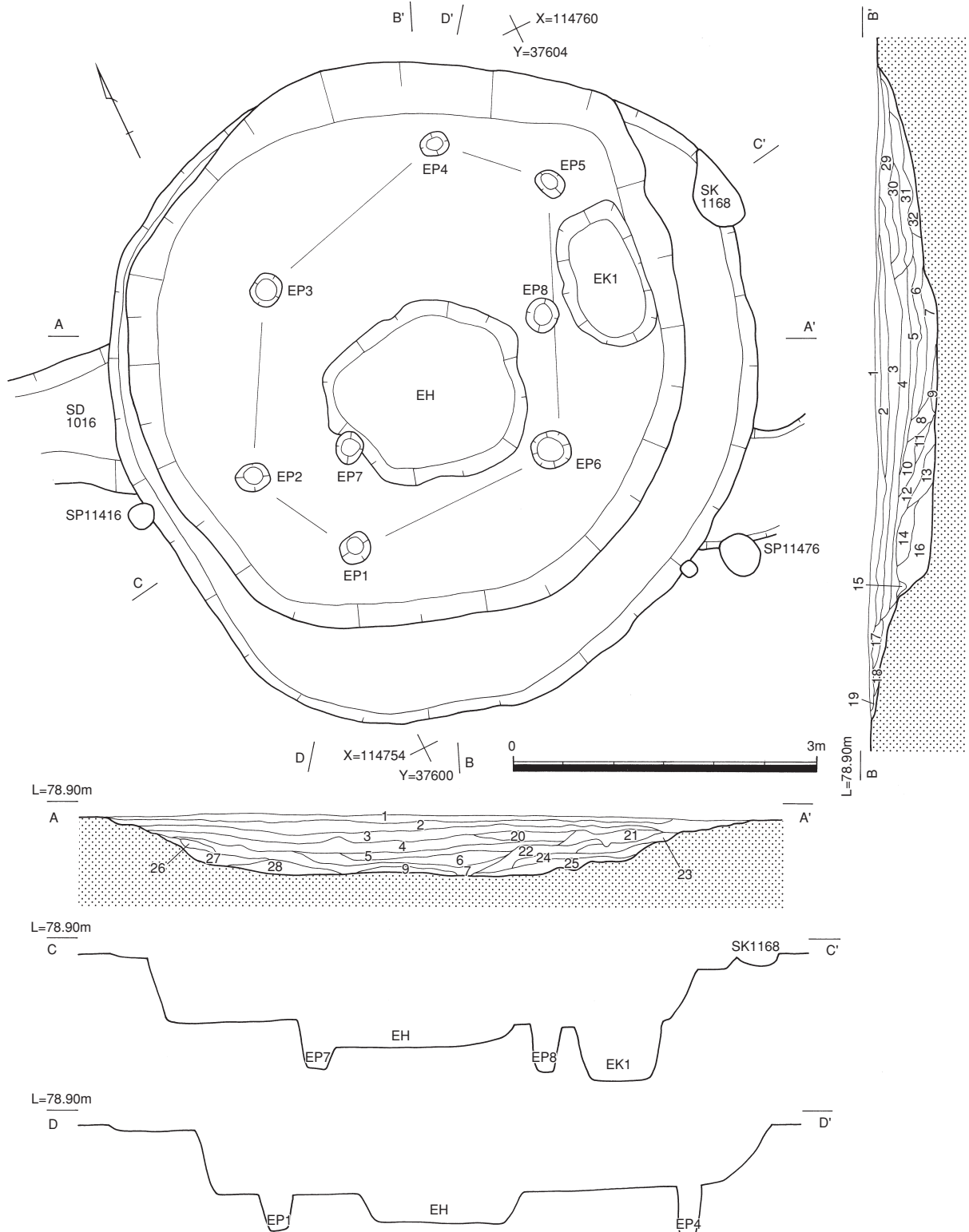
壺形土器42点、甕形土器40点、鉢形土器5点、高坏形土器4点、体部片231点、サヌカイト製石鏃5点・楔形石器3点・石錐1点・石庖丁1点・剥片30点、結晶片岩製打製石庖丁8点が出土した。図化可能な遺物は、そのうちの30点である。

壺（386～391）のうち、386は広口壺、387・388は二重口縁壺、389は無頸壺である。底部は、平底が主体である。甕（393～396）はくの字口縁が主体であり、口縁端部に凹線が施される。393は口縁部端面から頸部にかけて、炭化物が付着する。出土した鉢のうち図化できたのは、397のみである。高坏（398～401）は、小片での出土である。

石鏃（402～406）のうち、402は平基三角、403～405は凹基式、406は未製品である。407・408は楔形石器で、407は右側縁部が欠損しているものの、上側縁部につぶれ痕が認められる。409は、摘みを有する石錐である。410・411は剥片である。413～415は、打製石庖丁である。使用石材として、413はサヌカイトを、414は砂質片岩、415は紅簾片岩を用いる。413は素材として縦長剥片を用い、平刃・単刃である。414は平刃・単刃、415は平刃・複刃である。

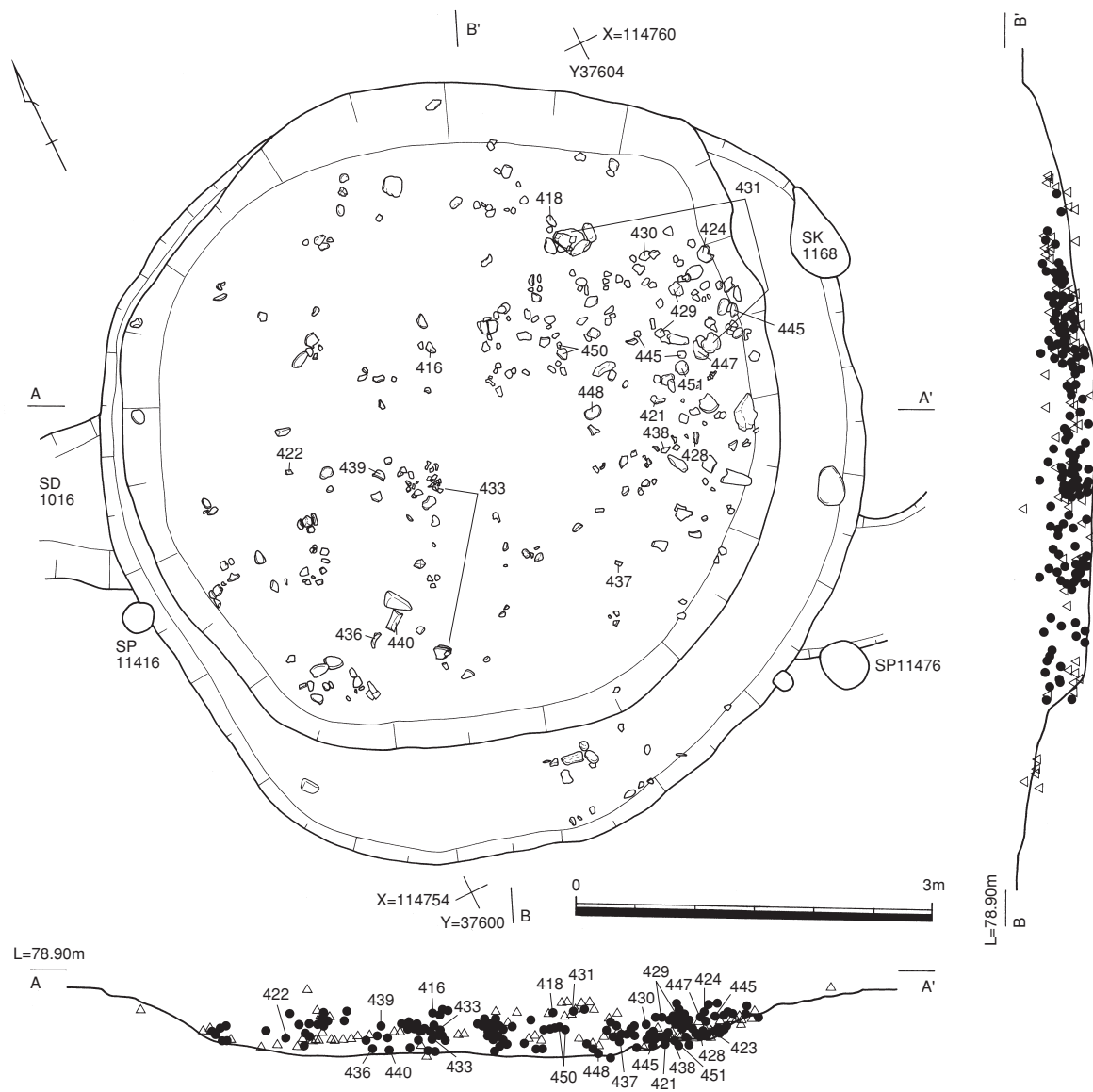
時期

出土遺物から、弥生時代後期初頭～前葉の年代が与えられる。



- | | | | |
|-------------------------|--------------------------|---------------------------|---------------------------|
| 1 にぶい黄褐色(10YR 4/3)粘性砂質土 | 9 暗褐色(10YR 3/3)粘性砂質土 | 17 オリーブ褐色(2.5Y 4/3)粘性砂質土 | 25 暗オリーブ褐色(2.5Y 3/3)粘性砂質土 |
| 2 にぶい黄褐色(10YR 4/3)粘性砂質土 | 10 にぶい黄褐色(10YR 4/3)粘性砂質土 | 18 オリーブ褐色(2.5Y 4/4)粘性砂質土 | 26 暗褐色(10YR 3/4)粘性砂質土 |
| 3 にぶい黄褐色(10YR 4/3)粘性砂質土 | 11 にぶい黄褐色(10YR 4/3)粘性砂質土 | 19 オリーブ褐色(2.5Y 4/3)粘性砂質土 | 27 褐色(10YR 4/4)粘性砂質土 |
| 4 暗褐色(10YR 3/3)粘性砂質土 | 12 暗褐色(10YR 3/3)粘性砂質土 | 20 灰褐色(10YR 4/2)粘性砂質土 | 28 にぶい黄褐色(10YR 4/3)粘性砂質土 |
| 5 灰黄褐色(10YR 4/2)粘性砂質土 | 13 暗褐色(10YR 3/3)粘性砂質土 | 21 暗黄灰色(2.5Y 4/2)粘性砂質土 | 29 にぶい黄褐色(10YR 4/3)粘性砂質土 |
| 6 オリーブ褐色(2.5Y 3/3)粘性砂質土 | 14 オリーブ褐色(2.5Y 4/3)粘性砂質土 | 22 にぶい黄褐色(10YR 4/3)粘性砂質土 | 30 にぶい黄褐色(10YR 4/3)粘性砂質土 |
| 7 黒褐色(10YR 2/3)粘性砂質土 | 15 にぶい黄褐色(10YR 4/3)粘性砂質土 | 23 にぶい黄褐色(10YR 4/3)粘性砂質土 | 31 灰黄褐色(10YR 4/2)粘性砂質土 |
| 8 暗褐色(10YR 3/4)粘性砂質土 | 16 暗褐色(10YR 3/3)粘性砂質土 | 24 暗オリーブ褐色(2.5Y 3/3)粘性砂質土 | 32 暗褐色(10YR 3/4)粘性砂質土 |

第80図 SB1015遺構図(1)



第81図 SB1015遺構図(2)

竪穴住居15号 (SB1015) (第80～86図)

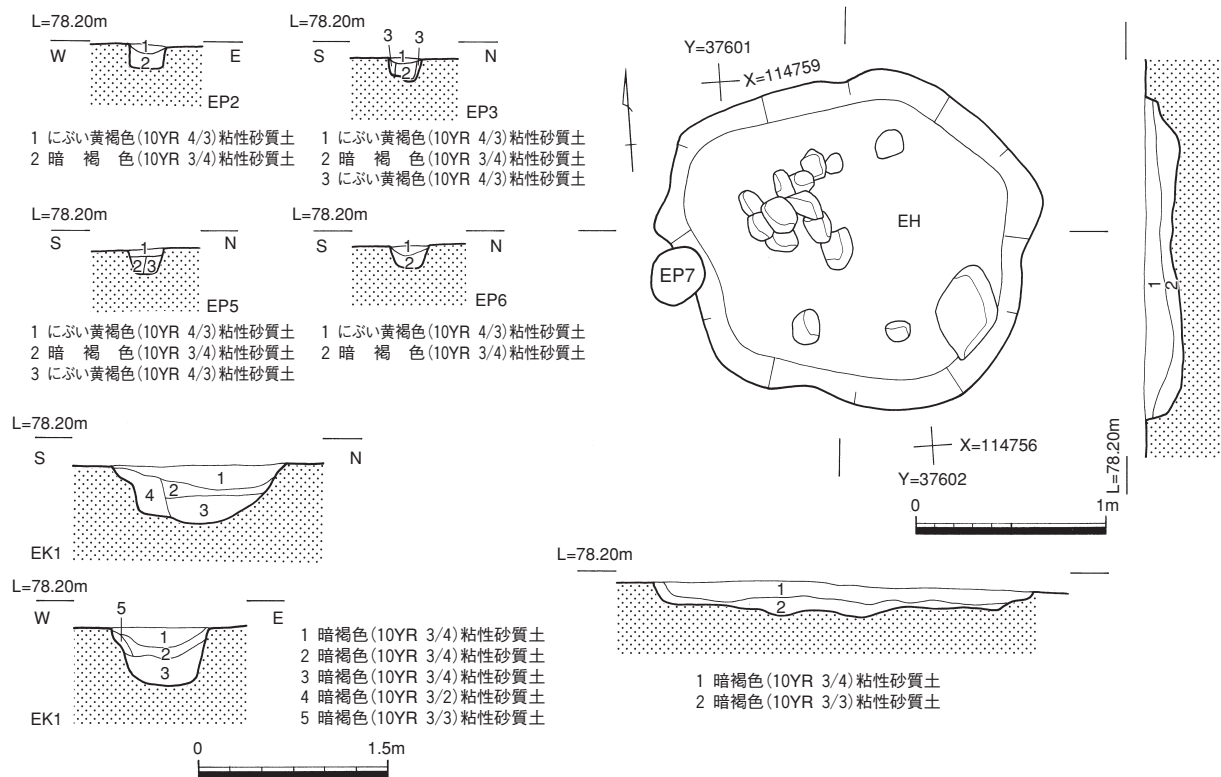
位置・構造

5-A区 β-II・III K～M-20・1でSD1016を切るような形で確認された竪穴住居。検出当初は直径6.5m前後の円形住居と思われたが、掘削後、直径5.6m前後の規模と判明した。この住居の平面形態・底面形態は円形、断面形態は不整な逆台形を呈し、長軸5.72m、短軸5.54m、最大深度0.61m、床面積33.04m²を測る。

覆土除去後、床面に柱穴8基、土坑1基、炉1基を検出した。主柱穴はEP1～6の計6基で、住居内において周壁溝や貼床など他の施設は確認出来なかった。遺物は、散在した状態で多量に出土した。

柱穴・土坑 (第82図)

柱穴は全部で8基検出されているが、そのうちEP1～6の計6基が主柱穴と考えられる。主柱穴は



第82図 SB1015遺構内遺構図

直径0.28~0.38cmの円形、深さ0.09~0.21cmを測る。柱穴間距離の最大は2.68m (EP 5・6間)、最小は1.19cm (EP 4・5間)である。土質および含有物から各柱穴の覆土は分層されるものの、概ね暗褐色を主体する。柱痕は、8基のうちEP 1・3・5の3基で認められた。支柱穴以外の柱穴2基は直径0.33mの円形で、深さ0.13~0.15mを測る。柱穴からの出土遺物は、EP 3から広口壺形土器 (423)が出土したのみである。

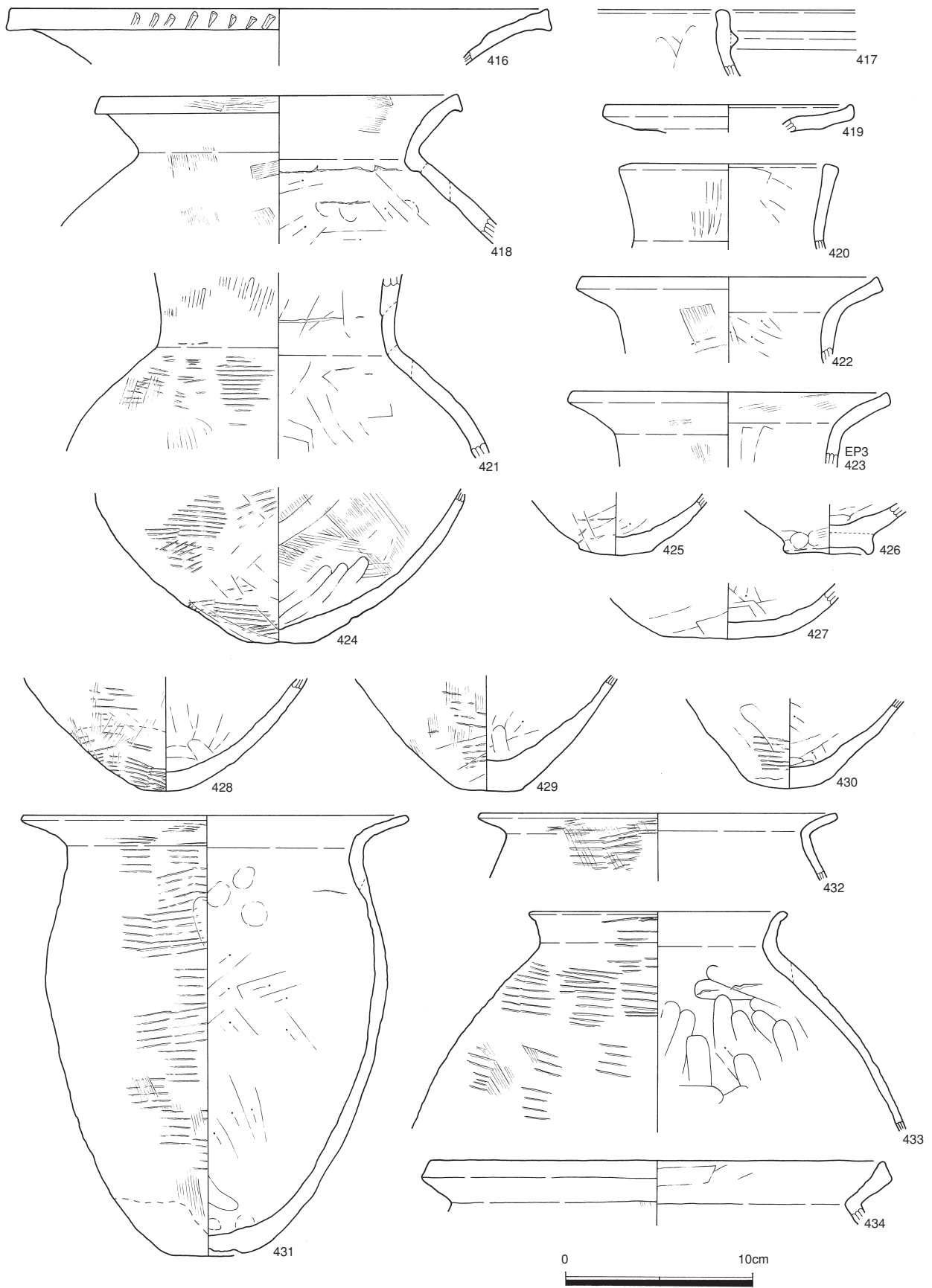
土坑は、1基のみの検出である。EK 1は平面形態・底面形態ともに楕円形、断面形態はやや不整な逆台形を呈し、長軸2.06m、短軸1.73m、最大深度0.21mを測る。覆土は暗褐色粘性砂質土で、土質および含有物から5層に分層できる。1層はにぶい黄褐色土ブロックを混入し、4層は炭化物をやや多く含む。小片のために図化できなかったものの、甕形土器底部2点、体部片11点が出土した。

土層 (第80図)

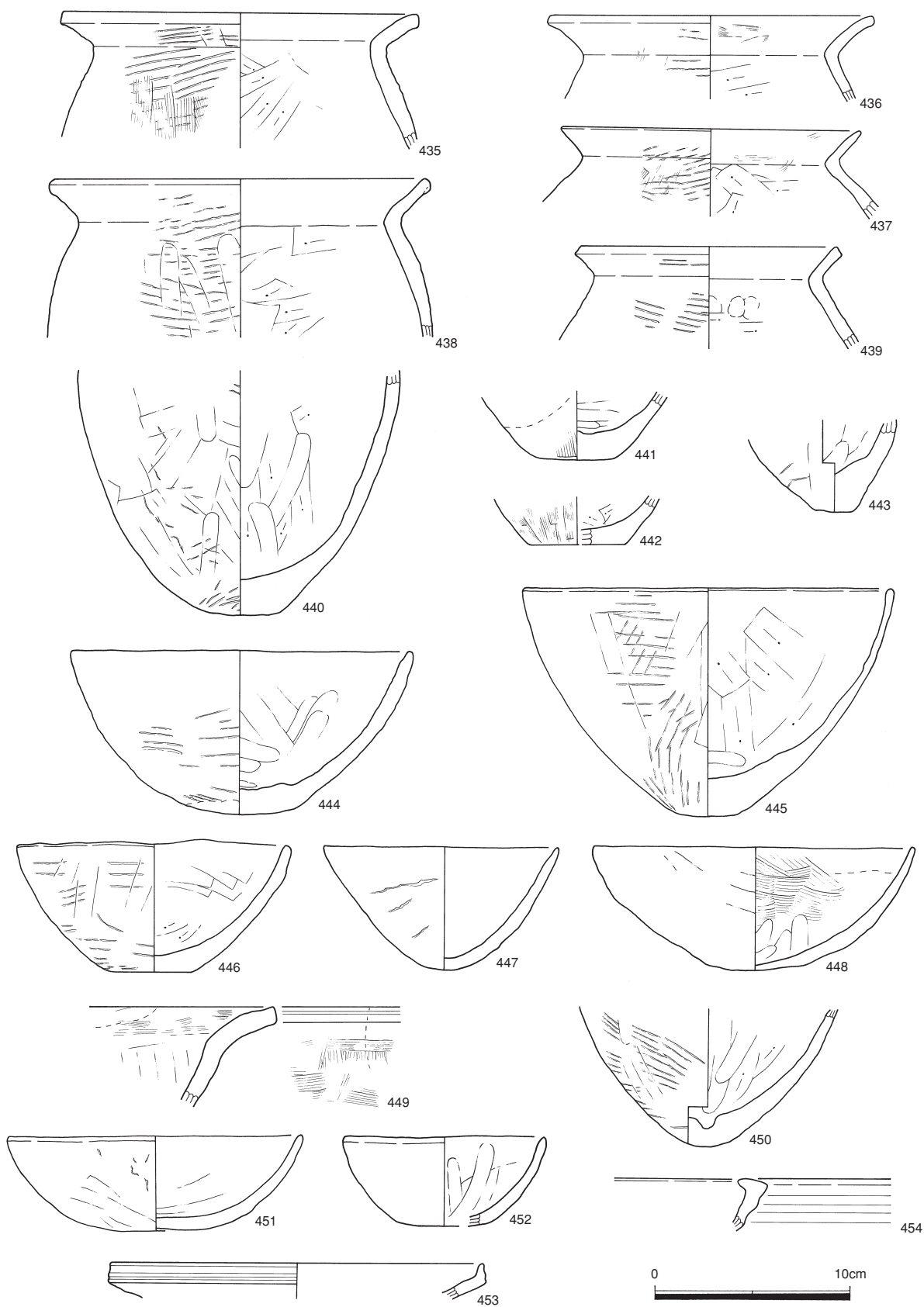
覆土は、土質および含有物から32層に分層でき、大きく上層 (1~3層)・中層 (4・5・21・22・31・32層)・下層 (6~20・23~30層)に分けることができる。10・12層は、炭化物を比較的多く含む。3・16・31・32層は直径5mm前後の礫を多く含む。土器片は6・25層で多量に、4・14・20・26~28層では少量の出土が認められた。遺物の出土状況は散在した感があるものの、土坑と炉の間の床面直上、および炉を中心にやや集中した出土を見せる。堆積状況から、住居は徐々に埋没したと考えられる。

炉 (第82図)

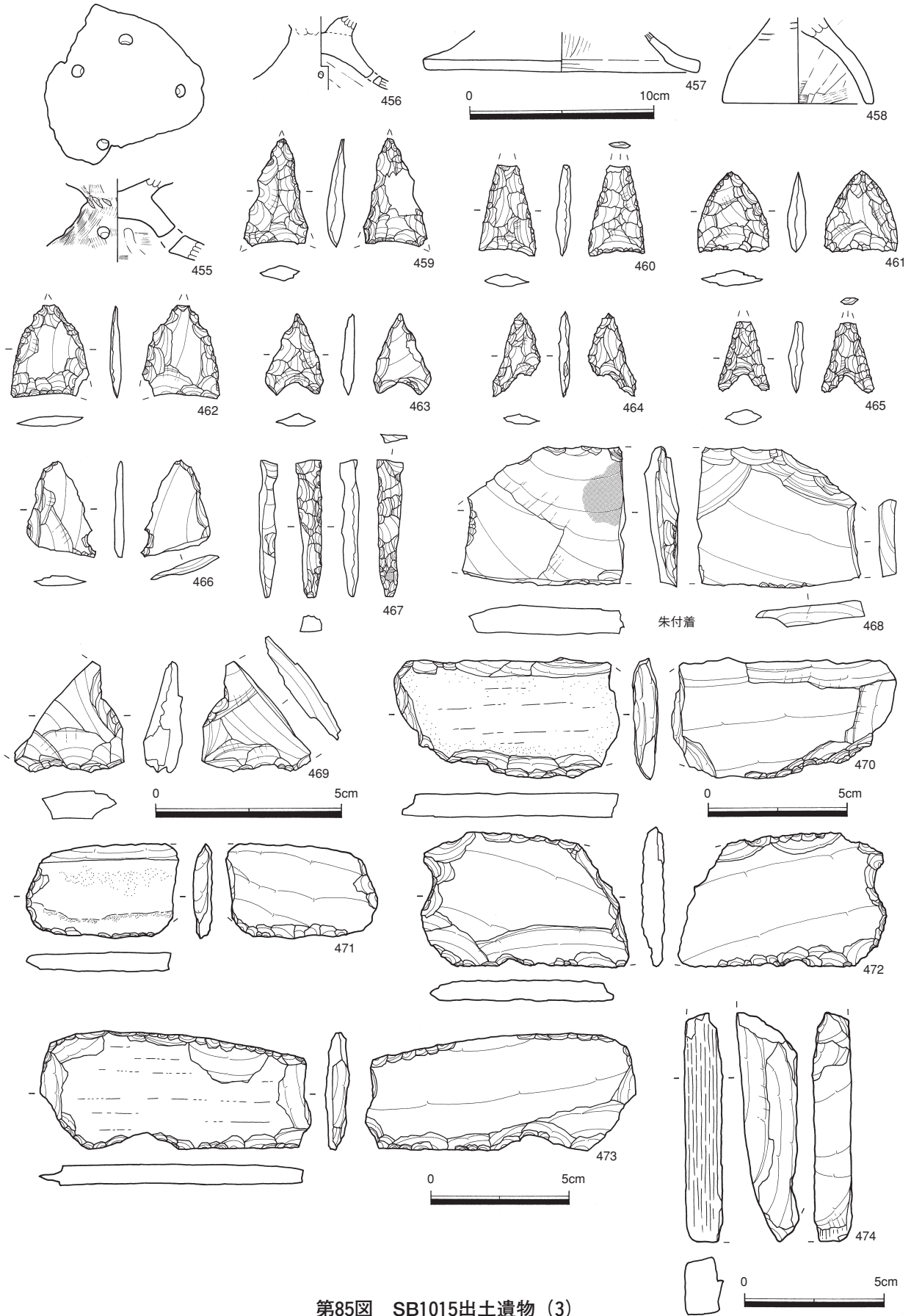
平面形態・底面形態ともに不整形、断面形態は緩やかな舟底形を呈し、長軸2.06m、短軸1.73m、最大深度0.21mを測る。覆土は暗褐色粘性砂質土で、土質および含有物から2層に分層できる。1層はに



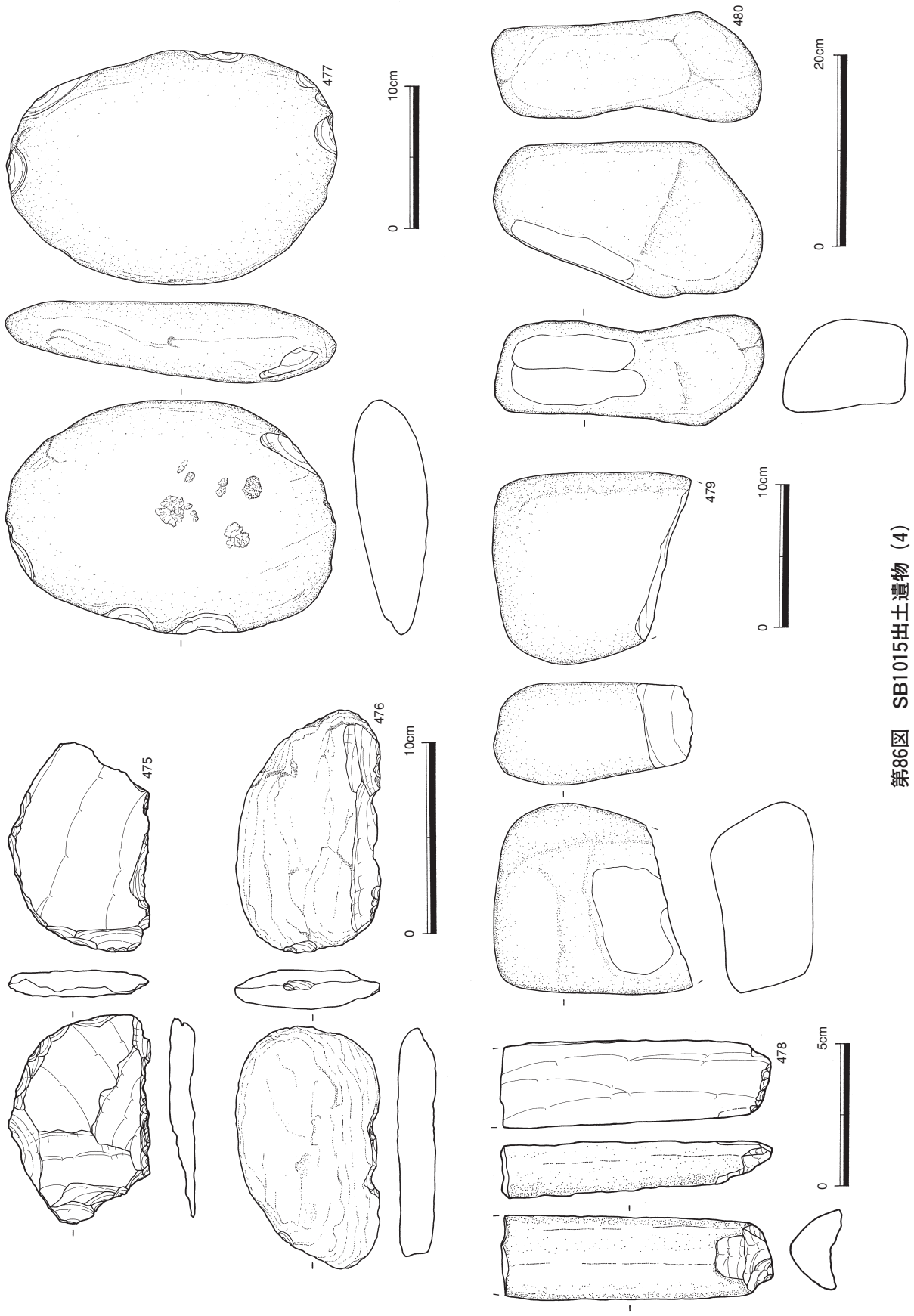
第83図 SB1015出土遺物 (1)



第84図 SB1015出土遺物 (2)



第85図 SB1015出土遺物 (3)



第86図 SB1015出土遺物 (4)

ぶい黄褐色土ブロックを混入し、炭化物を若干含む。2層は炭化物を大量に含む。炉は、住居および主柱穴間の南寄りに造り付けられる。

遺物は甕形土器底部1点、体部片18点、結晶片岩製砥石1点が出土したが、小片のために図化できなかった。

出土遺物（第83～86図）

壺形土器49点、甕形土器145点、鉢形土器9点、高坏形土器5点、体部片1398点、サヌカイト製石鏃8点・楔型石器2点・石錐1点・剥片16点、結晶片岩製石庖丁4点・削器2点・石斧1点・敲石1点・剥片6点、砂岩製台石1点・砥石2点が出土した。図化可能な遺物はそのうちの64点である。

壺（416～430）のうち、416・419・421～423は広口壺、418は広口短頸壺、417・420は直口壺か。424～430は底部で、全般的に平底だが、427・428・430は丸みを帯びる。また424は調整から、鉢の可能性もある。419は胎土に金雲母をもつことから、讃岐からの搬入品と思われる。また図化できなかった遺物の中に、口縁端部に鋸歯文を施す広口壺や、貼付突帯をめぐらす細頸広口壺などが出土した。

甕（431～443）は、いわゆるタタキ甕が主体である。431は外面体部中位を中心に、煤状の炭化物が多く付着する。438は、外面頸部から体部にかけて炭化物がやや多く付着する。また口縁部の成形が粗く、口縁部を折り曲げてナデを施した後、端部の余った土をそのまま下にナデつけている。

鉢（444～452）は、449のような口縁部を折り曲げるタイプの出土は少なく、ボール型が大半を占める。また448・451のように、ボール型の中でも器高が低く椀状に近いものも存在する。445は体部下位に煤状の炭化物が多く付着し、二次被熱による色調の変化が認められる。

高坏（453～458）のうち、455は、内外面にやや多くの炭化物が付着する。456は外面に炭化物がやや多く付着し、欠損により確定できないものの3ないし4個の穿孔が認められる。

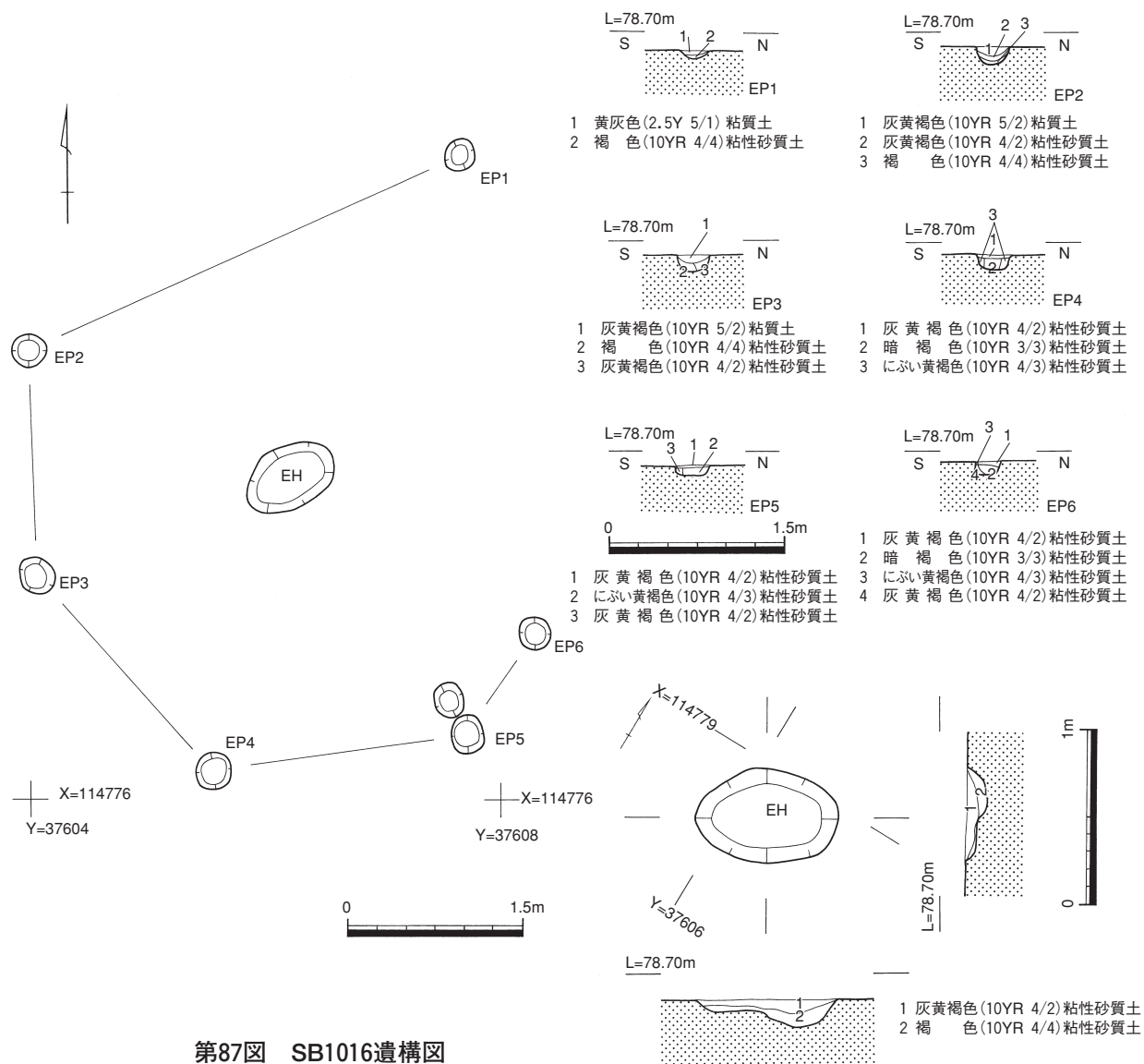
石鏃（459～466）は、460～462は平基三角、459・463～465は凹基式、466は未製品である。467は、基部を欠損した石錐である。468・469は楔形石器で、468の表面に朱の付着が認められる。

打製石庖丁（470～473）のうち、470・473は石材に砂質片岩を、471・472は紅簾片岩を用いる。470のみ凸刃で、後の3点は平刃である。また刃部数は、473のみ複刃である。474は、欠損した柱状片刃石斧である。石材に砂質片岩を用いる。475・476は、砂質片岩を用いた平刃・単刃の削器である。477は、砂岩製台石である。478は、砂質片岩を用いた敲石である。表面に敲打痕が一個所認められる。479・480は、砂岩製砥石である。479は表面に一個所、480は二個所に砥面が認められる。

遺物は、床面直上の層（25層）と床面から約10cm離れた層（6層）を中心に大量に出土した。土層堆積状況から住居は徐々に埋没したと考えられ、埋没過程の途中で6層に含まれる遺物は、廃棄されたと考えられる。床面直上から出土した土器（436・440）は、住居に伴う可能性が高い。

時期

出土遺物から弥生時代後期中葉～終末期の年代が与えられ、終末期前半が主体と思われる。



第87図 SB1016遺構図

竪穴住居16号 (SB1016) (第87図)

位置・構造

5-A区 β-Ⅲ P・Q-1・2で確認された竪穴住居。機械掘削時に掘り下げ深度の誤認により、掘り方がとばされた状態で検出された住居。よって遺構の規模ならびに形態は不明だが、検出できた支柱穴から直径6m以上ある住居と推定できる。

柱穴・土坑

柱穴は全部で6基検出され、支柱穴と考えられる。支柱穴は直径0.25~0.34mの円形、最大深度0.08~0.16mを測る。柱穴間距離の最大は4.08m (EP1・2間)、最小は1.06m (EP5・6間)である。土色および含有物から各柱穴の覆土は分層され、暗褐色および灰黄褐色を主体する。EP4・5で、柱痕を確認した。出土遺物は、EP3~5からそれぞれサヌカイト剥片が出土したのみである。

炉 (第87図)

平面形態・底面形態ともに楕円形、断面形態は不整な逆台形を呈し、長軸0.82m、短軸0.54m、最大深度0.16mを測る。覆土は2層に分層でき、1層は灰黄褐色粘性砂質土で、暗褐色土ブロックを混入し炭化物を含む。2層は褐色粘性砂質土で、やや砂質が強い。主柱穴間のほぼ中央に造り付けられている。出土遺物は、認められなかった。

時期

不明である。

溝

溝10号 (SD1010) (第88図)

4-B区 β-II C・D-11~13でSU1001、SX1002、SK1064、SP1699に切られた状態で確認された溝状遺構。調査区内で全長約9.81m、最大幅1.26m、最大深度0.40mを測り、断面形態はやや不整な舟底形を呈する。

遺物は覆土から口縁部端面に凹線を施す甕形土器口縁部1点・体部片39点や底部1点、サヌカイト剥片2点が出土したが、小片のために図化できなかった。

溝13号 (SD1013) (第89図)

5-B区 β-II・III H-20~2でSA1012、SK1092・1099、SP12285を切った状態で確認された溝状遺構。調査区内で全長12.84m、最大幅1.72m、最大深度0.36mを測り、断面形態はやや不整な舟底形を呈する。覆土は概ねにぶい黄褐色を呈し、断面の測定間で堆積状況は異なるが、土色および含有物から7~12層に分層できる。土層観察では明確な帯水および流水痕跡は認められなかった。遺物は、覆土から高坏形土器脚部(481)1点のみが出土した。所属時期は、弥生時代後期以降である。

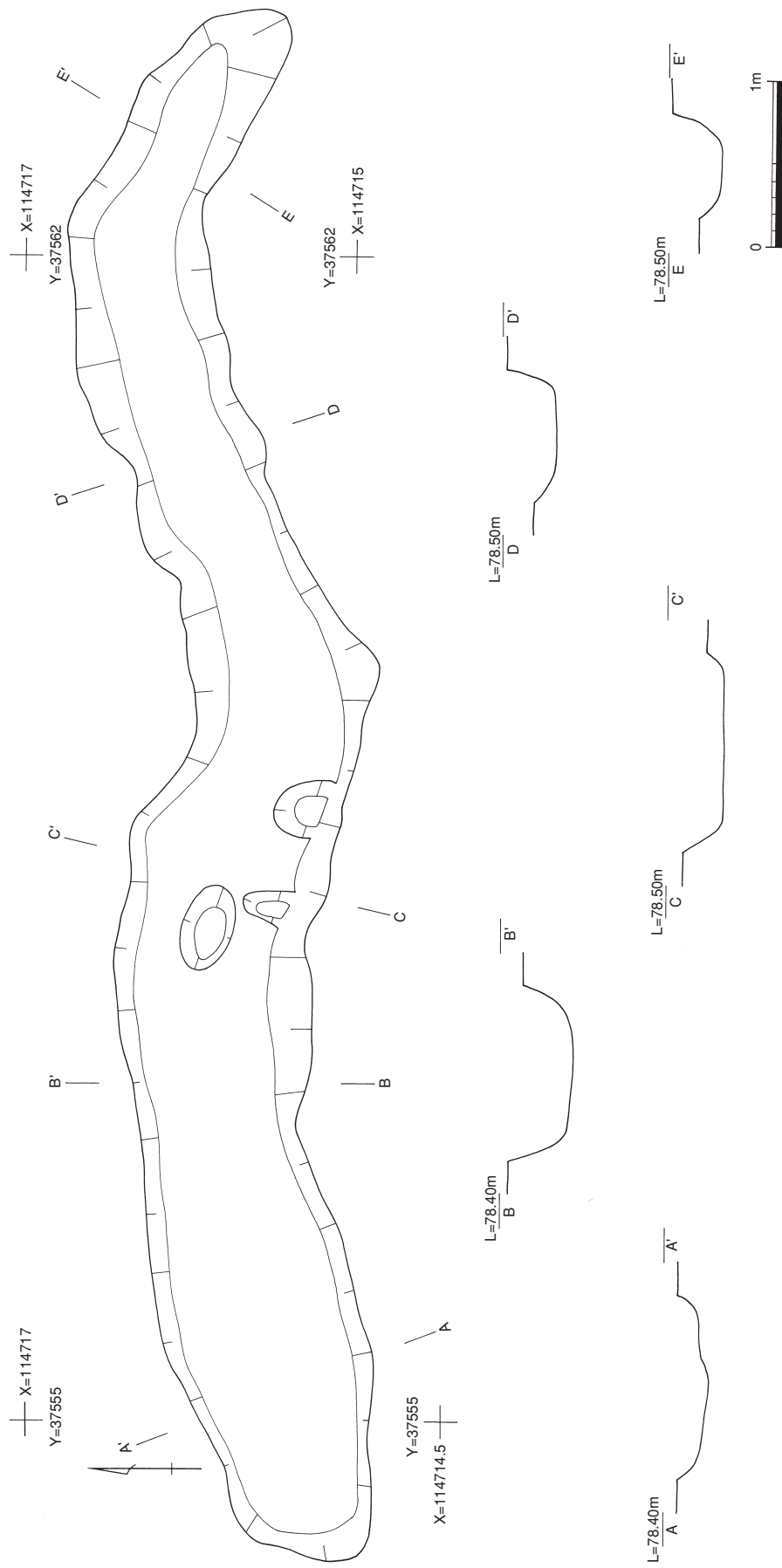
溝14号 (SD1014) (第90図)

5-A区 β-III J-2でSP11536に切られた状態で確認された溝状遺構。また溝は、南側の5-B区に延びると思われたが調査区内での確認には至らず、遺存状態は悪い。遺構の平面形態ならびに配置状況からこの溝はL字形に曲がる可能性があり、北西約1.5m離れた所に所在するSD1015と同一遺構の可能性はある。調査区内で全長約2.12m、最大幅0.24m、最大深度0.21mを測り、断面形態は逆台形を呈する。

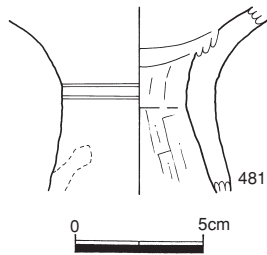
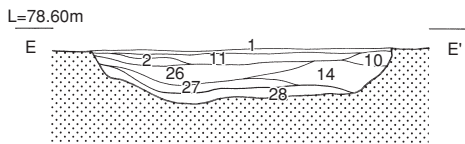
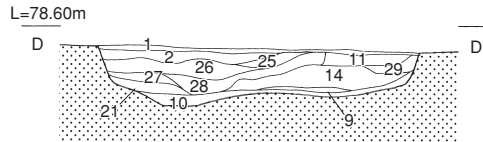
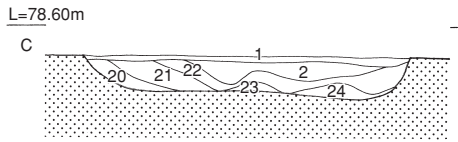
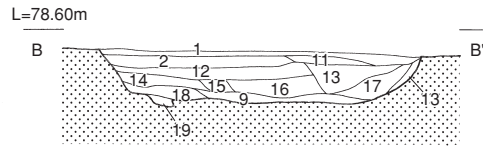
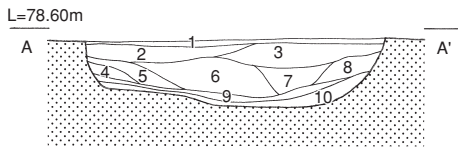
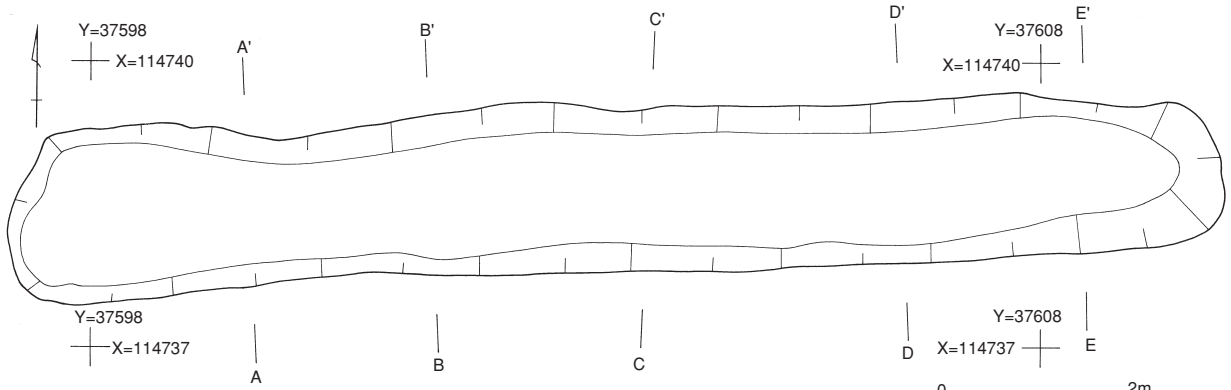
遺物は覆土から甕形土器口縁部1点・体部片5点、サヌカイト剥片1点、結晶片岩製削器1点が出土し、石材に紅簾片岩を用いた削器(482)のみ図化できた。

溝15号 (SD1015) (第90図)

5-A区 β-III J・K-1でSP11462に切られた状態で確認された溝状遺構。また溝は、南側の5-B区に延びると思われたが調査区内での確認には至らず、遺構の配置状況から、南東約1.5m離れた所に所在するSD1014と同一遺構の可能性はある。



第88图 SD1010遺構図



- A-A'
- 1 にぶい黄褐色(10YR 4/3)粘性砂質土
 - 2 暗褐色(10YR 3/4)粘性砂質土
 - 3 にぶい黄褐色(10YR 4/3)砂層
 - 4 黒褐色(10YR 2/3)粘性砂質土
 - 5 褐色(10YR 4/4)粘性砂質土
 - 6 暗褐色(10YR 3/4)粘性砂質土
 - 7 にぶい黄褐色(10YR 4/3)粘性砂質土
 - 8 褐色(10YR 4/4)粘性砂質土
 - 9 にぶい黄褐色(10YR 4/3)砂層
 - 10 黒褐色(10YR 2/3)粘性砂質土

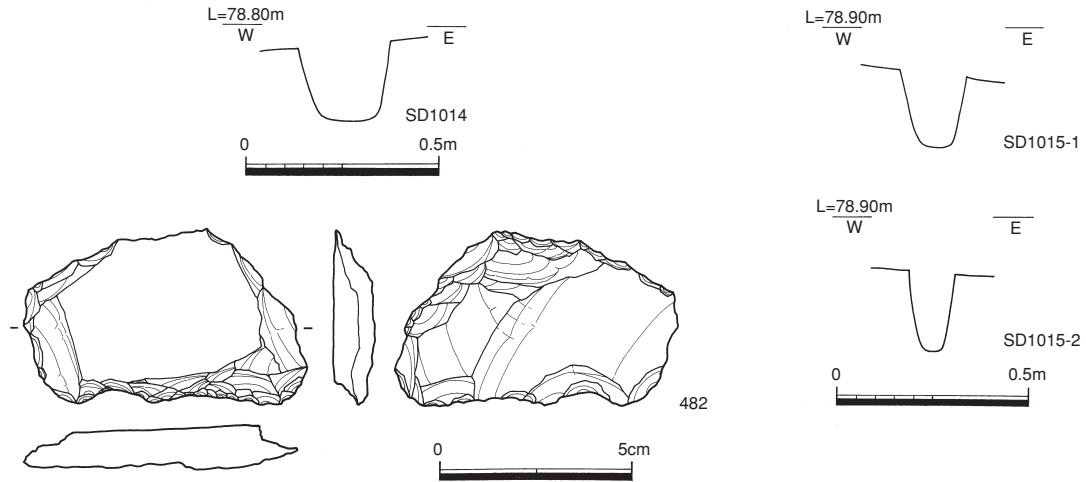
- B-B'
- 1 にぶい黄褐色(10YR 4/3)粘性砂質土
 - 2 暗褐色(10YR 3/4)粘性砂質土
 - 9 にぶい黄褐色(10YR 4/3)砂層
 - 11 にぶい黄褐色(10YR 5/4)砂層
 - 12 にぶい黄褐色(10YR 4/3)砂層
 - 13 にぶい黄褐色(10YR 4/3)粘性砂質土
 - 14 にぶい黄褐色(10YR 4/3)粘性砂質土
 - 15 褐色(10YR 4/4)砂層
 - 16 褐色(10YR 4/4)粘性砂質土
 - 17 にぶい黄褐色(10YR 5/4)砂層
 - 18 にぶい黄褐色(10YR 4/3)砂層
 - 19 黒褐色(10YR 2/3)粘性砂質土

- C-C'
- 1 にぶい黄褐色(10YR 4/3)粘性砂質土
 - 2 暗褐色(10YR 3/4)粘性砂質土
 - 20 にぶい黄褐色(10YR 4/3)砂層
 - 21 にぶい黄褐色(10YR 4/3)粘性砂質土
 - 22 褐色(10YR 4/4)粘性砂質土
 - 23 にぶい黄褐色(10YR 4/3)粘性砂質土
 - 24 褐色(10YR 4/4)砂層

- D-D'
- 1 にぶい黄褐色(10YR 4/3)粘性砂質土
 - 2 暗褐色(10YR 3/4)粘性砂質土
 - 9 にぶい黄褐色(10YR 4/3)砂層
 - 10 黒褐色(10YR 2/3)粘性砂質土
 - 11 にぶい黄褐色(10YR 5/4)砂層
 - 14 にぶい黄褐色(10YR 4/3)粘性砂質土
 - 21 にぶい黄褐色(10YR 4/3)粘性砂質土
 - 25 にぶい黄褐色(10YR 5/4)砂層
 - 26 褐色(10YR 4/4)粘性砂質土
 - 27 にぶい黄褐色(10YR 5/4)砂層
 - 28 にぶい黄褐色(10YR 4/3)砂層
 - 29 にぶい黄褐色(10YR 4/3)砂層

- E-E'
- 1 にぶい黄褐色(10YR 4/3)粘性砂質土
 - 2 暗褐色(10YR 3/4)粘性砂質土
 - 10 黒褐色(10YR 2/3)粘性砂質土
 - 11 にぶい黄褐色(10YR 5/4)砂層
 - 14 にぶい黄褐色(10YR 4/3)粘性砂質土
 - 26 褐色(10YR 4/4)粘性砂質土
 - 27 にぶい黄褐色(10YR 5/4)砂層
 - 28 にぶい黄褐色(10YR 4/3)砂層

第89図 SD1013遺構図・出土遺物



第90図 SD1014・1015遺構図・出土遺物

規模は、調査区内で全長約3.22m、最大幅0.17m、最大深度0.21mを測り、断面形態は逆台形を呈する。遺物は埋土からサヌカイト剥片1点が出土したものの、小片のために図化できなかった。

溝16号 (SD1016) (第91～98図)

5-A区 β-II L~N-15~20でSB1015・SK1145・SP16基に切られた状態で確認された溝。溝の平面形態に認められる不整形な箇所は、検出できなかった遺構との切り合い関係によるものと思われる。溝は調査区内ではSB1015に切られて終わるものの、調査区外の北西方向にさらに延びる。またSB1015の南側にはSR1002が検出され、SD1016の続きかと思われたが、深度ならびに平面形態から関連性はないと考えられる。溝は調査区内で全長約29.0m、最大幅1.56m、最大深度0.38mを測り、断面形態はやや不整な舟底形を呈する。

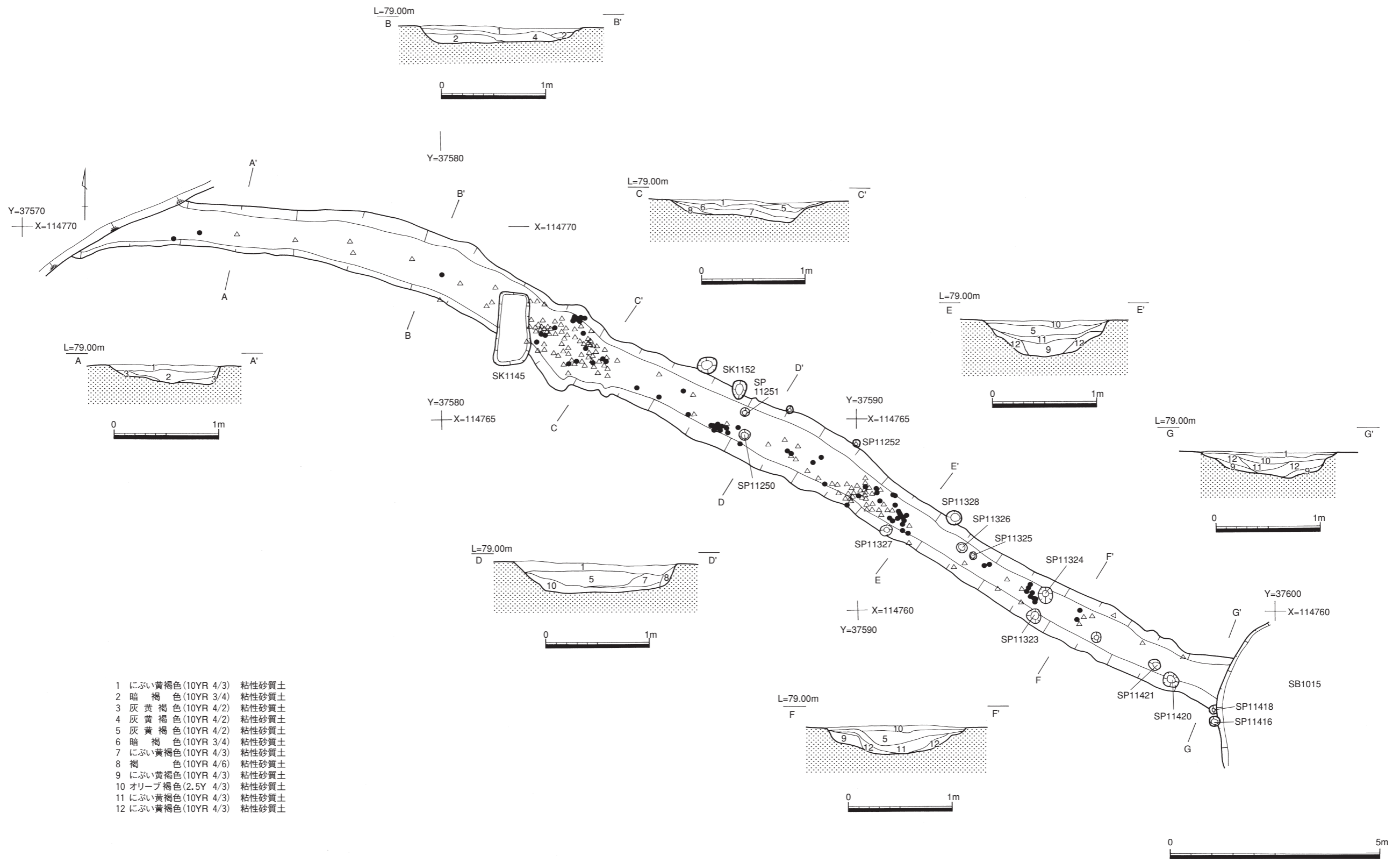
覆土は概ねにぶい黄褐色を呈し、地点によって土層堆積は異なるが、土色および含有物から3~5層に分層できる。これらの層は大きく2層に分けることができ、上層は暗灰黄色土ブロックを混入する1層と5・10層が、下層には2~4・6~9・11・12層が相当する。土層観察では明確な流水痕跡は認められなかったものの、下層の9・11・12層では他層と比較して粘性が非常に強く、E~Fの地点では帯水の可能性も考えられる。

また溝内の遺物出土状況は、C地点(第92図)・E地点(第93図)付近で集中する傾向を見せるもののほぼ散在した状態である。C地点の遺物は、溝の平面形態が不整形を呈することから別遺構の遺物が混入している可能性が高いものの(493・526・527)、明瞭な時期差は認められない。

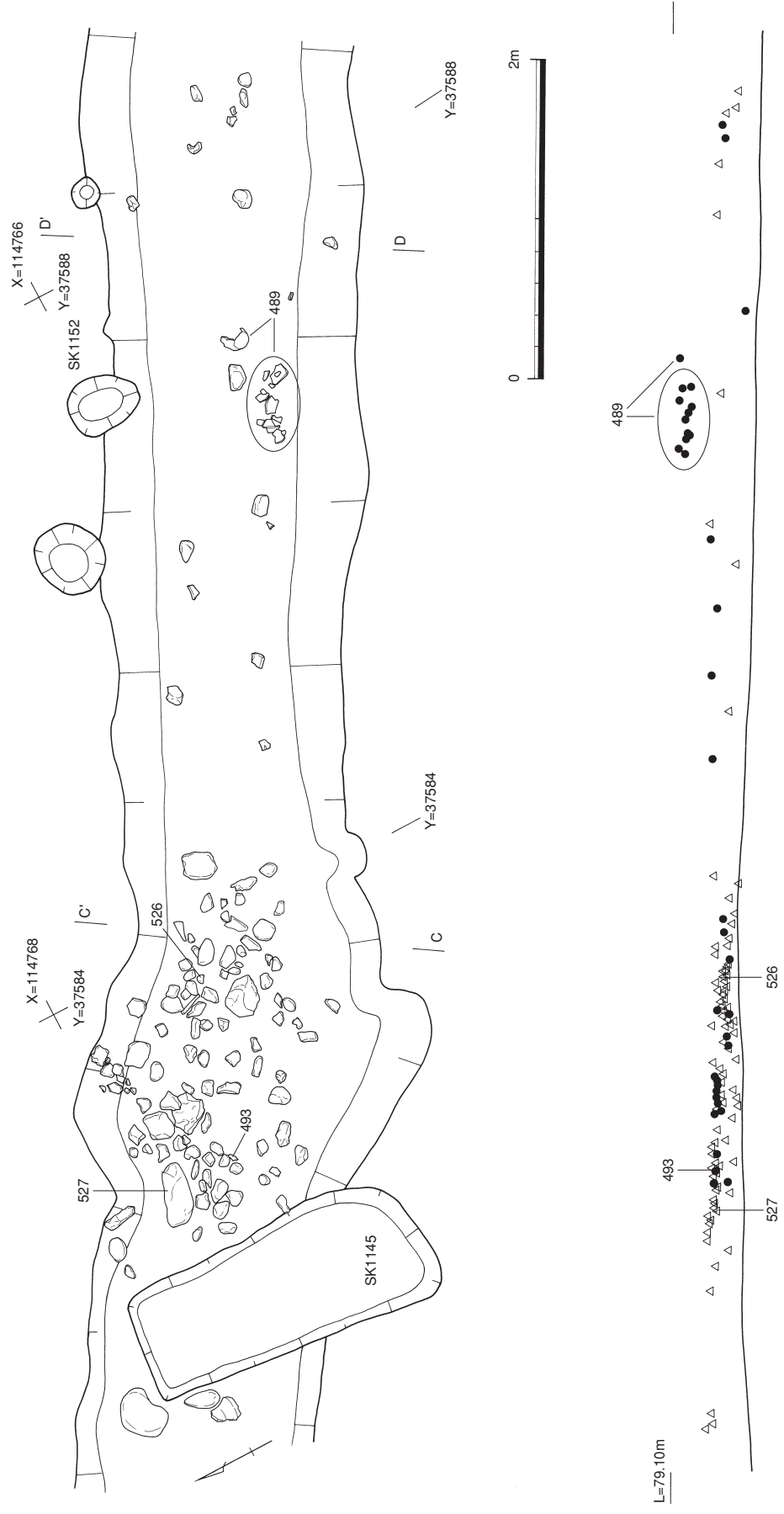
出土遺物 (第94～98図)

遺物は主に上層を中心として出土し、全般的に遺存状態は悪い。広口壺や直口壺などの壺形土器12点、甕形土器59点、鉢形土器8点、高坏形土器5点、体部片788点、サヌカイト製石鏃1点・楔形石器2点・削器1点・剥片8点、結晶片岩製打製石庖丁14点・敲石5点・砥石3点・台石3点、被熱した砂岩、焼土塊3点が溝内から出土した。出土した土器の中で、483・489のみほぼ完形での出土である。

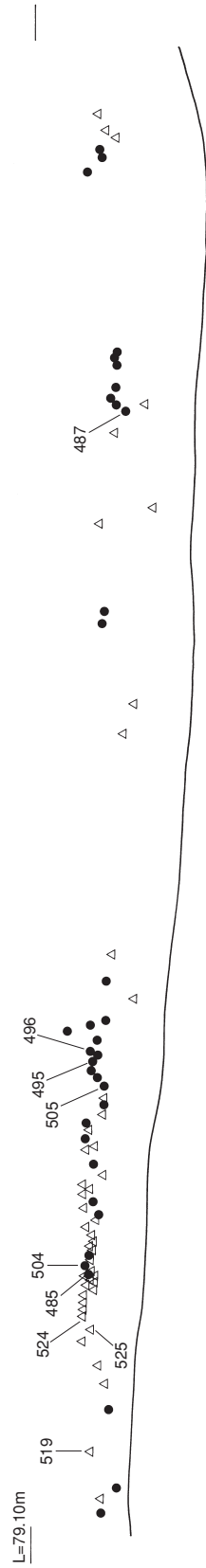
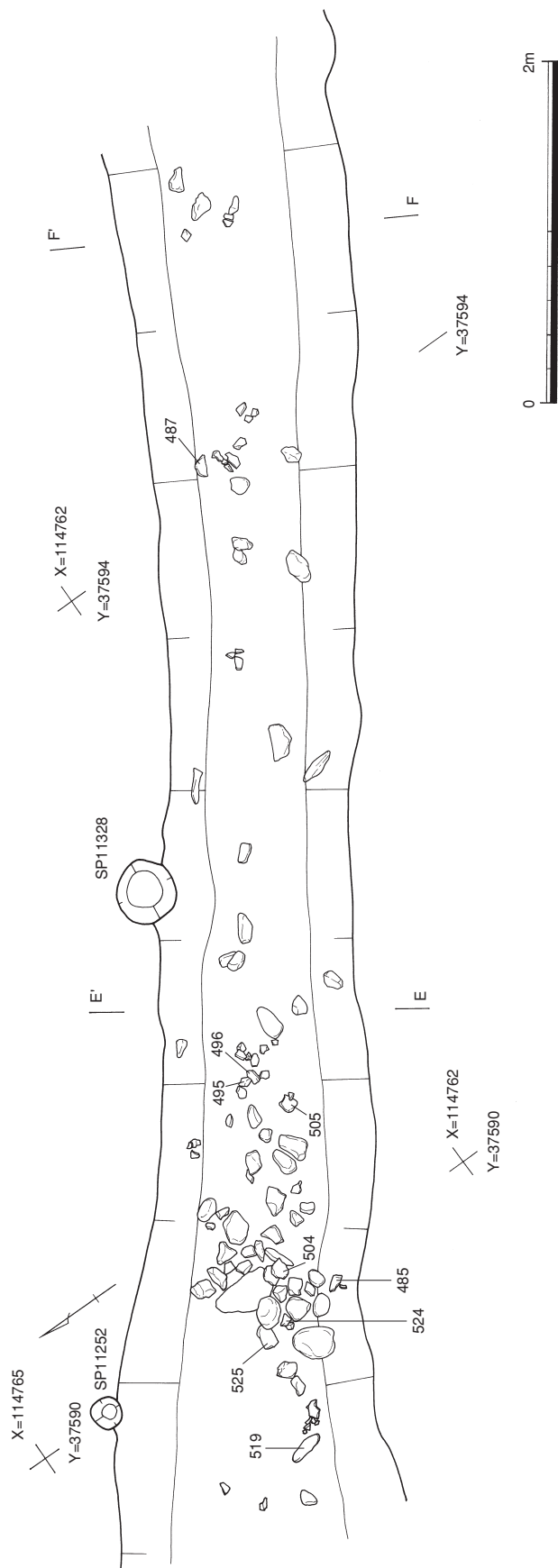
壺(483~488)は、細頸広口壺(483)、口縁部内面に斜格子文を施す広口壺(484~486)が出土し、底部(487・488)は平底である。広口壺のなかで、図化できなかった6点のうち3個体が484と同様に



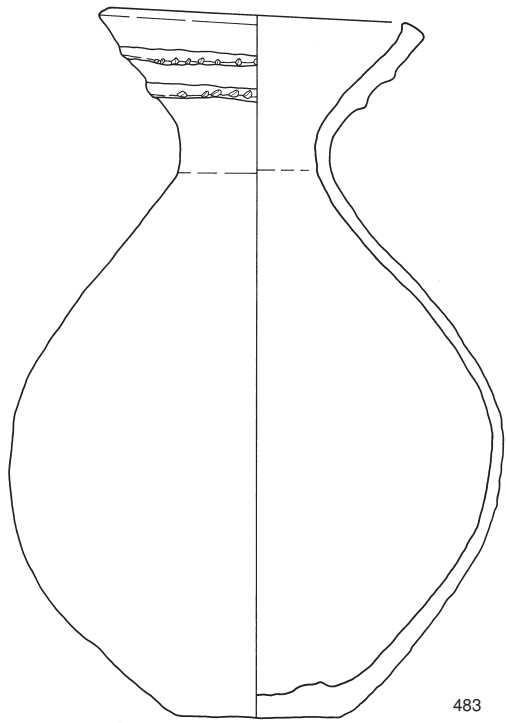
第91図 SD1016 遺構図



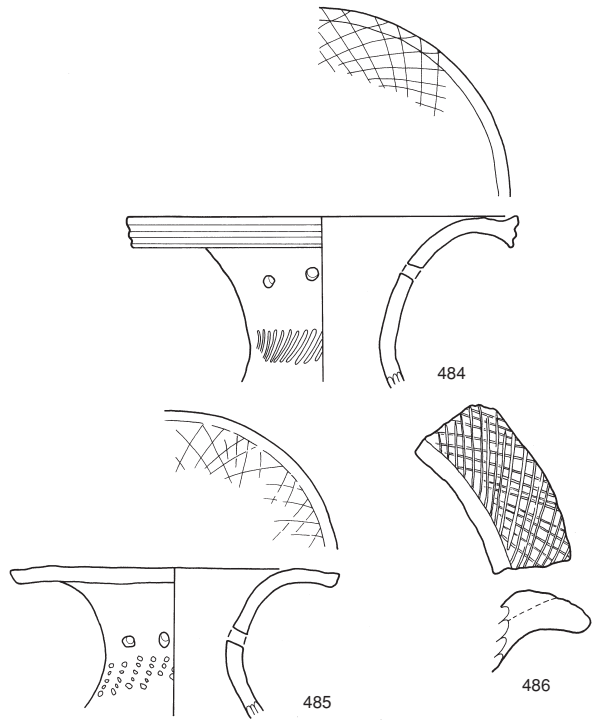
第92图 SD1016出土遗物状况图(1)



第93图 SD1016出土遗物状况图(2)



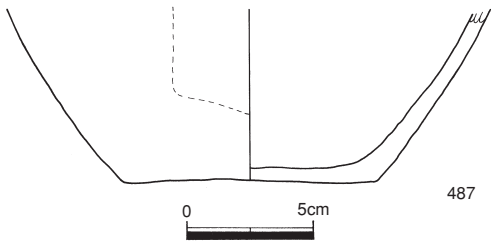
483



484

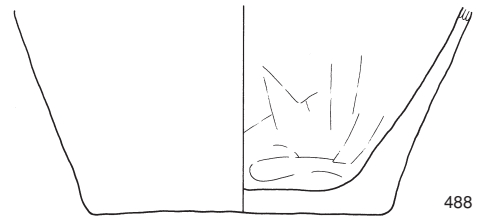
485

486

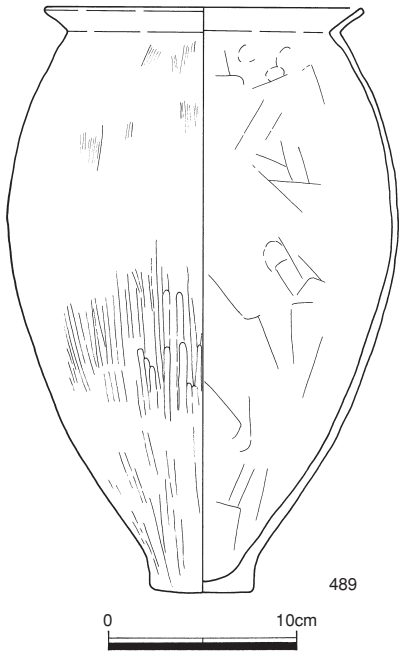


487

0 5cm

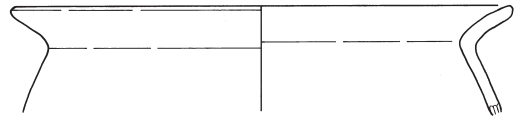


488

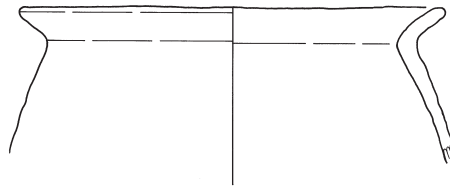


489

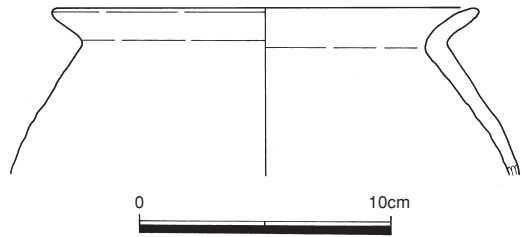
0 10cm



490



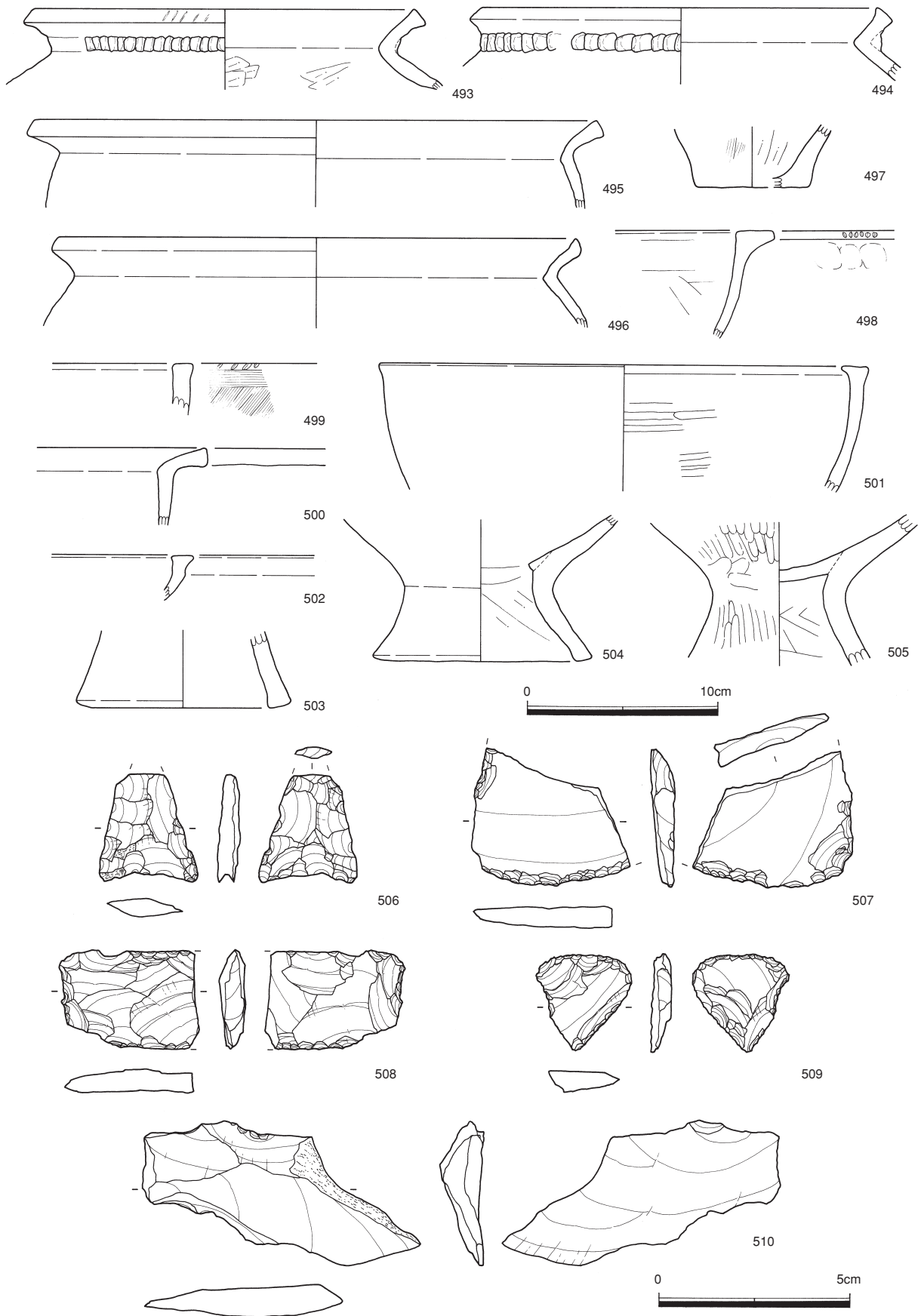
491



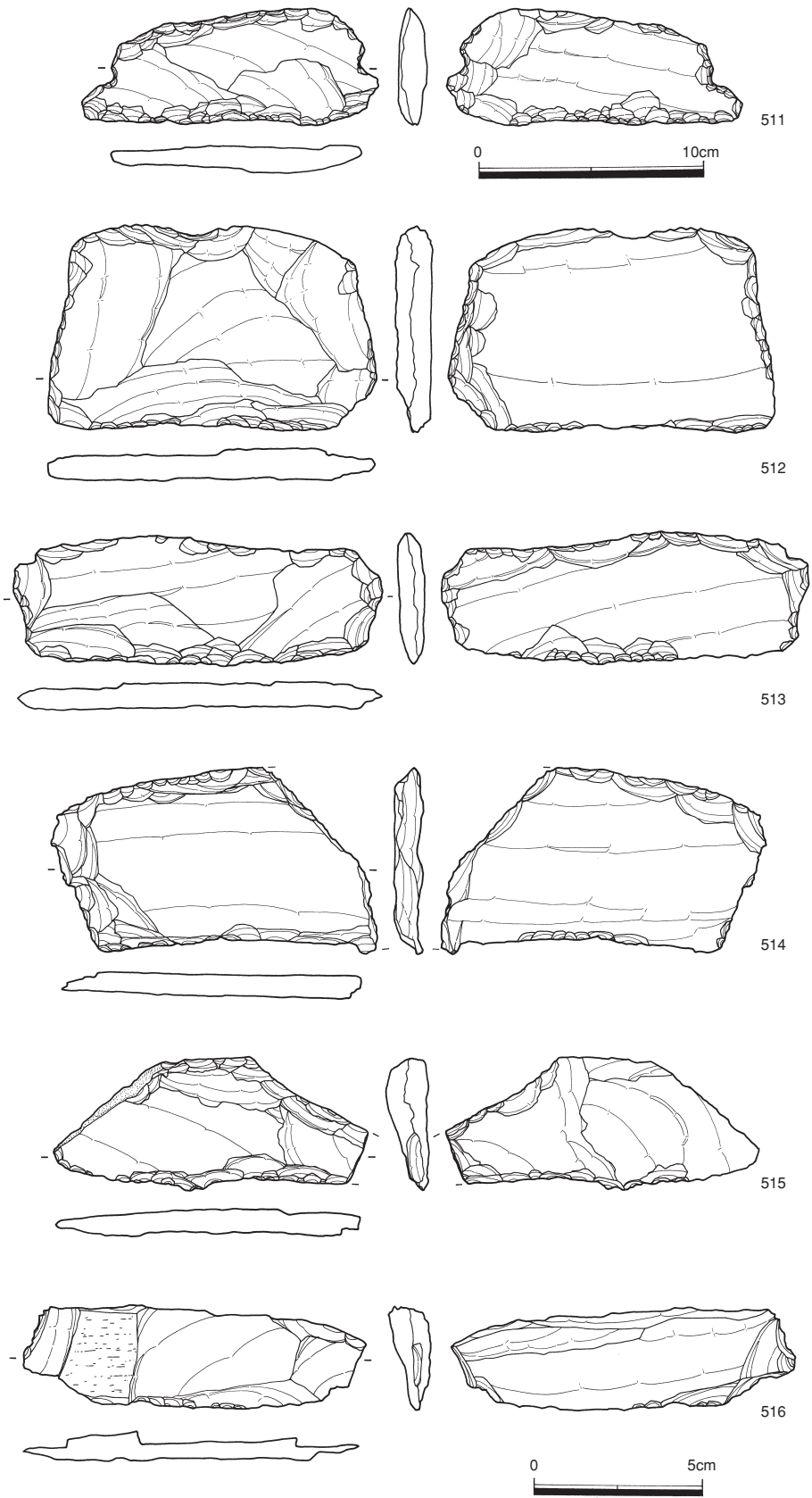
492

0 10cm

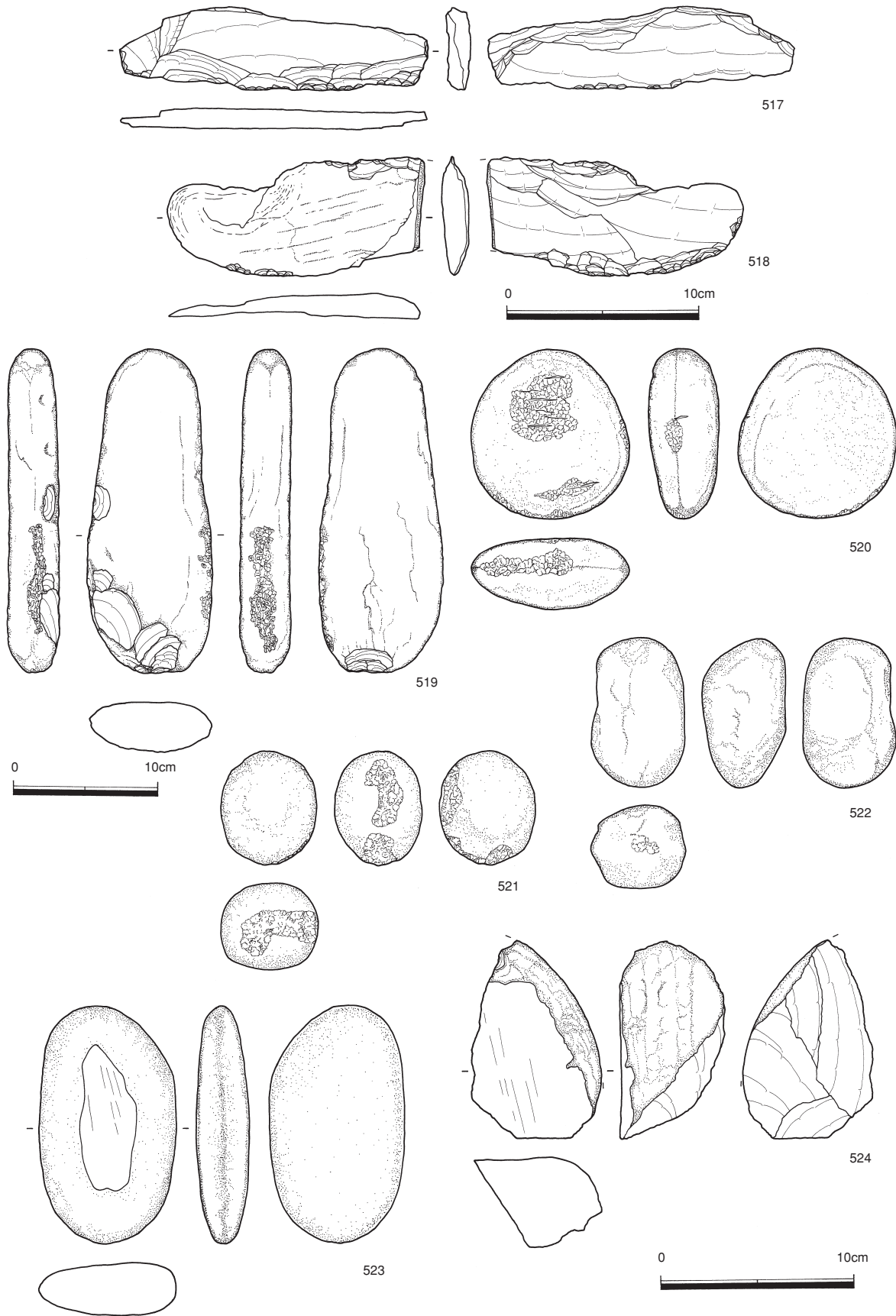
第94図 SD1016出土遺物(1)



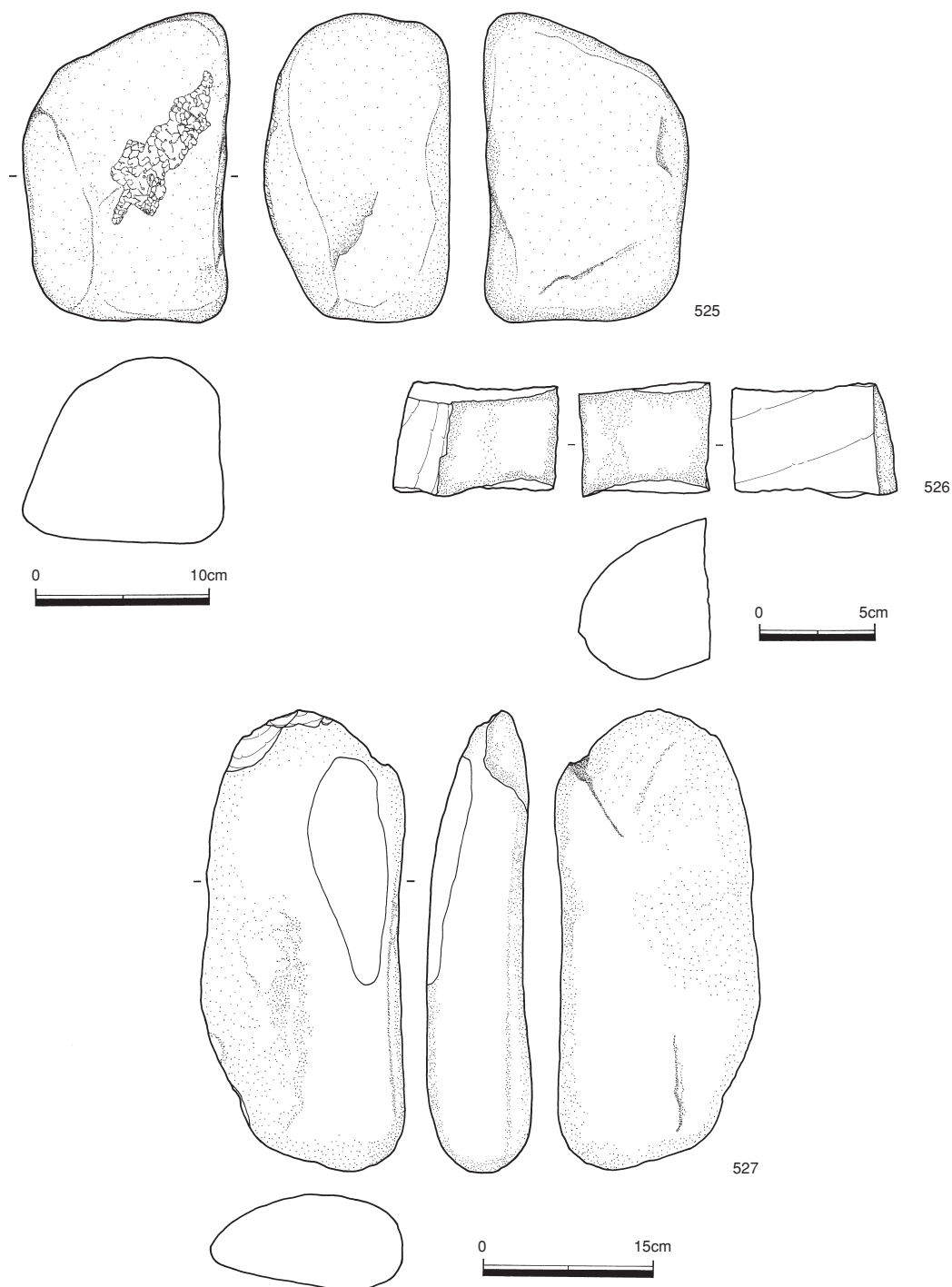
第95图 SD1016出土遺物(2)



第96図 SD1016出土遺物(3)



第97図 SD1016出土遺物(4)



第98図 SD1016出土遺物(5)

口縁部端面に凹線を施す。

甕 (489~497) はくの字口縁をもち、頸部に指頭圧痕文突帯を施すもの (493・494) が認められる。口縁端部は丸く収めるもの (490~492)、方形に収めるもの (489)、方形に収めさらに肥厚させたり (493・495)、上方につまみ上げたりするもの (494・496) がある。また489は外面体部中位に煤状の炭化物を多く付着する。図化できなかった甕のなかには、口縁部がL字形を呈するⅡ様式のものも含まれる。鉢 (498~501)、高坏 (502~505) は、ともに出土量が少なく破片での出土である。

図化できた石器は凹基式の石鏃 (506)・削器 (507)・楔形石器 (508・509)・サヌカイト剥片 (510)、

打製石庖丁（511～518）・敲石（519～522）・砥石（523・524）・台石（525～527）である。507は凸刃を持ち、上側縁部と右側縁部が欠損するが単刃と思われる。508・509ともに左側縁部が欠損するものの、508は打面が上・下側縁の二方向に、509は上・右側縁部に認められ、四方向の可能性がある。出土した石庖丁は、518が泥質片岩を、他の個体は砂質片岩を石材として用いる。511のみ複刃で、両端に挟りが認められる。また518のみ凸刃である。敲石・砥石・台石の使用石材として、519・527は砂質片岩、520・526は閃緑岩、521・524・525は砂岩、522は石英、523は緑泥変岩を石材として用いる。

凹線文を施す個体が少ないこと、および上層からの出土量が多いことから、この溝は弥生時代中期中葉にほぼ埋没したと推測できる。SK1145からの出土遺物は認められないものの、SB1015の出土遺物は弥生時代後期中葉～終末期の年代が与えられることから、遺構の切り合い関係に矛盾はない。土層堆積状況では明確な流水および帯水痕跡を確認できず、溝の性格として区画を目的とした可能性が考えられる。

土坑

土坑5号 (SK1005) (第99図)

3区 α-Ⅱ L-14で確認された土坑。平面形態・底面形態ともにやや不整な楕円形、断面形態は逆台形を呈し、長軸0.95m、短軸0.61m、最大深度0.40mを測る。覆土は土色および含有物から3層に分層でき、全般的にしまりが弱い。遺物は縄文土器深鉢口縁部1点、体部片8点が出土し、接合しなかったものの同一個体片と考えられる。深鉢（528）は口縁端部にD字刻みを持つもので、縄文時代晩期に属する。

土坑35号 (SK1035) (第99図)

4-A区 β-Ⅱ E-4でSP1336に切られた状態で確認された土坑。SP1336は土師質土器片が出土し、中世に属する。土坑は平面形態・底面形態ともに楕円形、断面形態は不整な舟底形を呈する。長軸0.57m、短軸0.35m、最大深度0.26mを測る。覆土は、暗褐色粘性砂質土・黒褐色粘性砂質土の2層に分層できる。遺物はサヌカイト剥片（529）1点のみである。

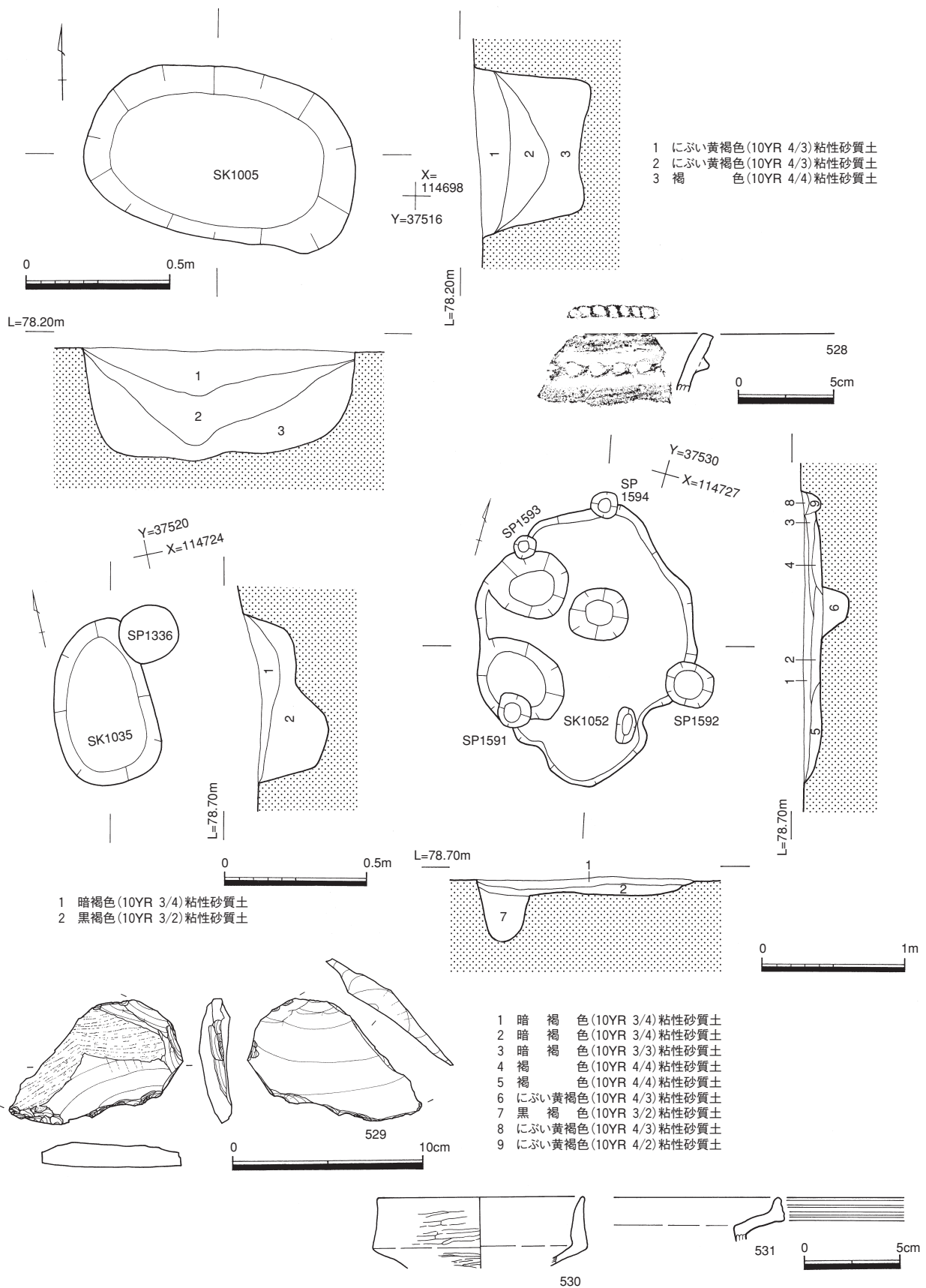
土坑52号 (SK1052) (第99図)

4-A区 β-Ⅱ E・F-6・7で柱穴4基に切られた状態で確認された土坑。平面形態・底面形態ともに不整な楕円形、断面形態は舟底形を呈する。長軸2.0m、短軸1.52m、最大深度0.14mを測る。完掘後、床面に柱穴4基が認められ、堆積状況から別遺構と思われる。覆土は5層に分層でき、大きく2層に分かれるものと思われる。上層（1・3層）は暗褐色粘性砂質土で、3層はにぶい黄褐色土ブロックを混入する。下層（2・4・5層）は暗褐色もしくは褐色を呈し、2・5層はにぶい黄褐色土ブロックを若干混入する。6・7層は、完掘後に検出した別遺構の柱穴である。

遺物は、高坏形土器（530）1点、甕形土器口縁部（531）1点・体部片15点が出土した。

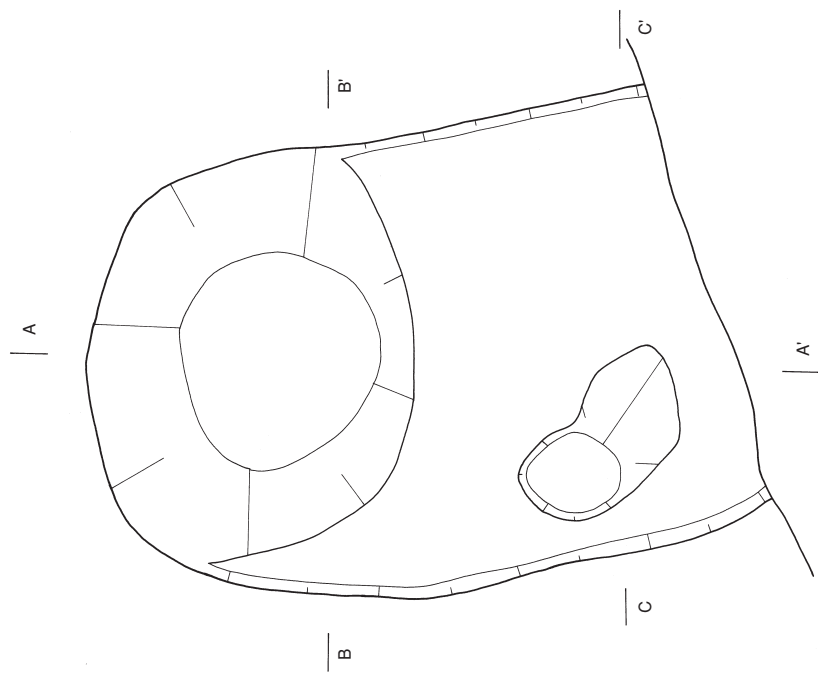
土坑101号 (SK1101) (第100～104図)

4-D区 β-Ⅱ H-7で調査区南側溝に切られた状態で確認された土坑。調査時は土坑2基の切り合いとして検出していたが、両土坑から出土した遺物の接合状況と遺構の完掘状況から同一遺構と判断

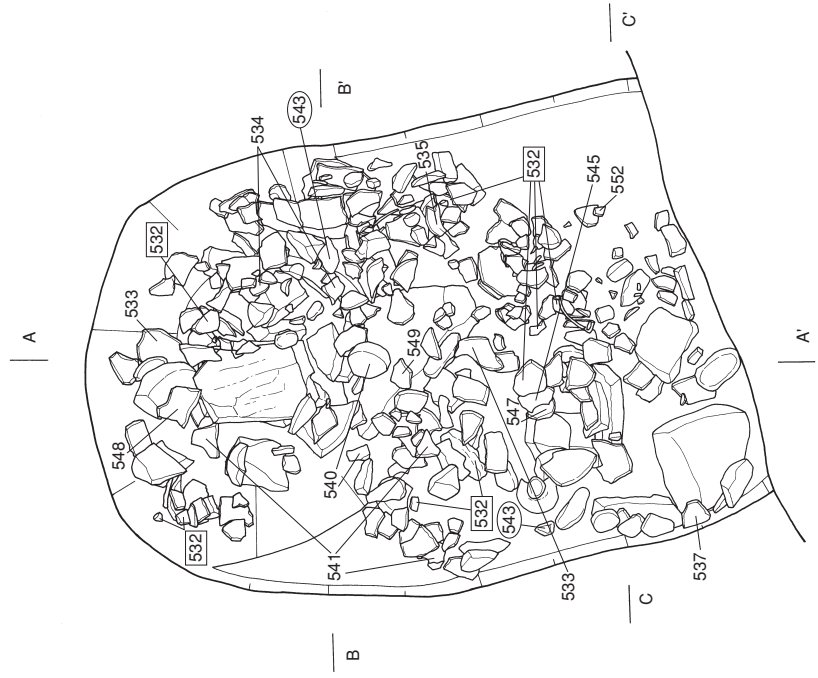


第99図 SK遺構図・出土遺物(1)

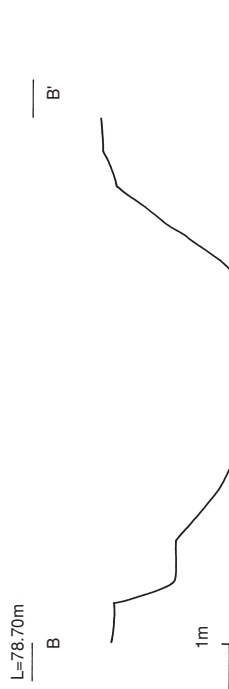
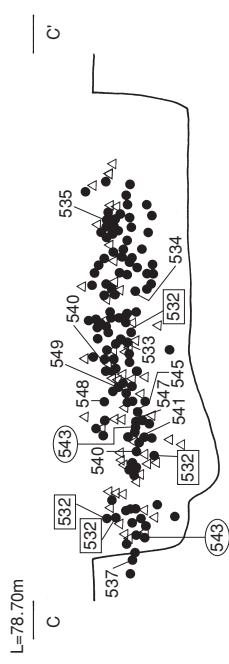
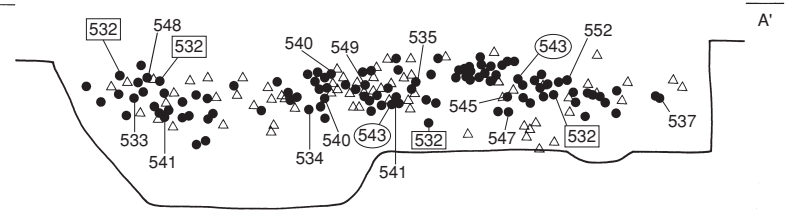
X=114740
Y=37532



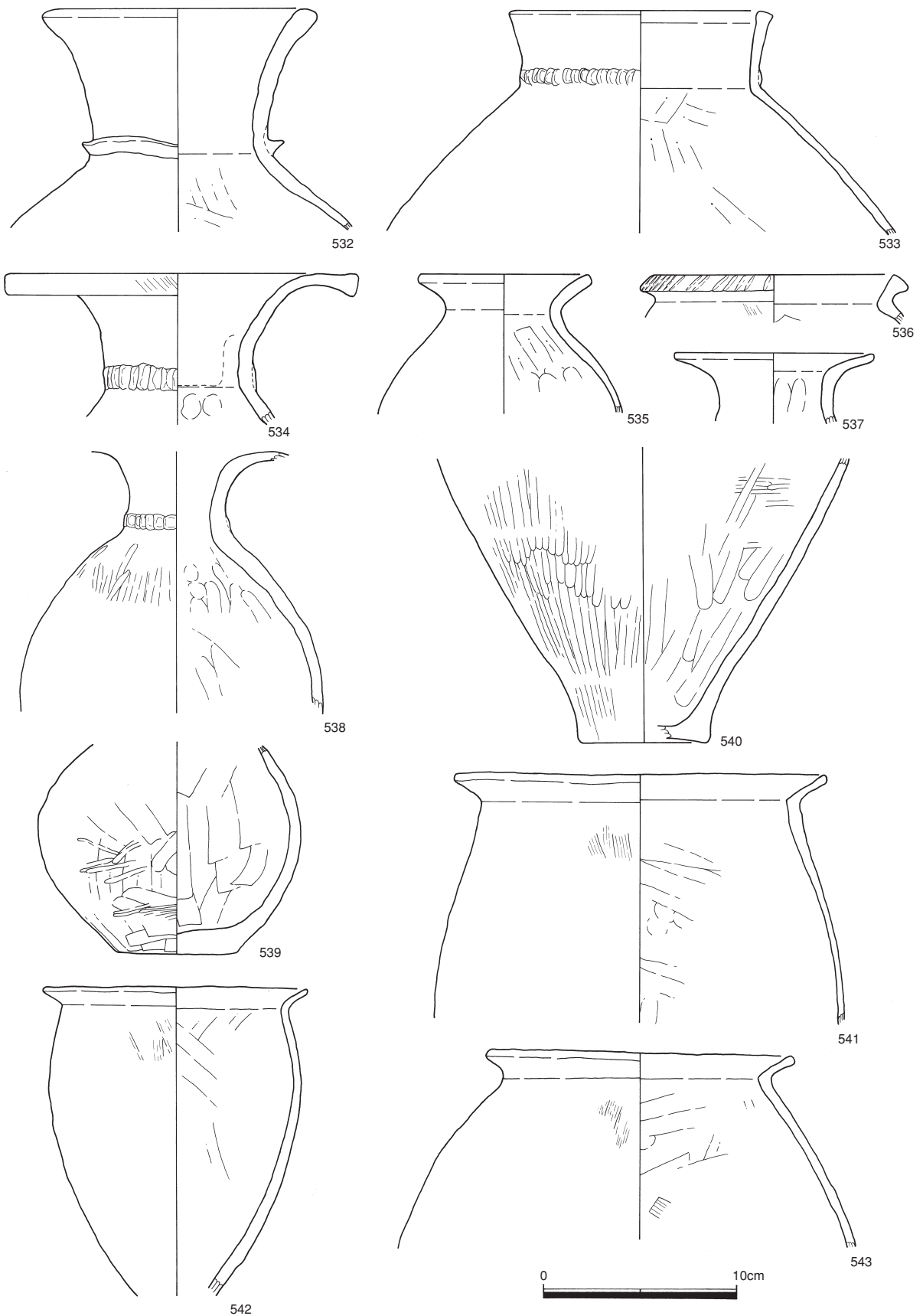
X=114740
Y=37532



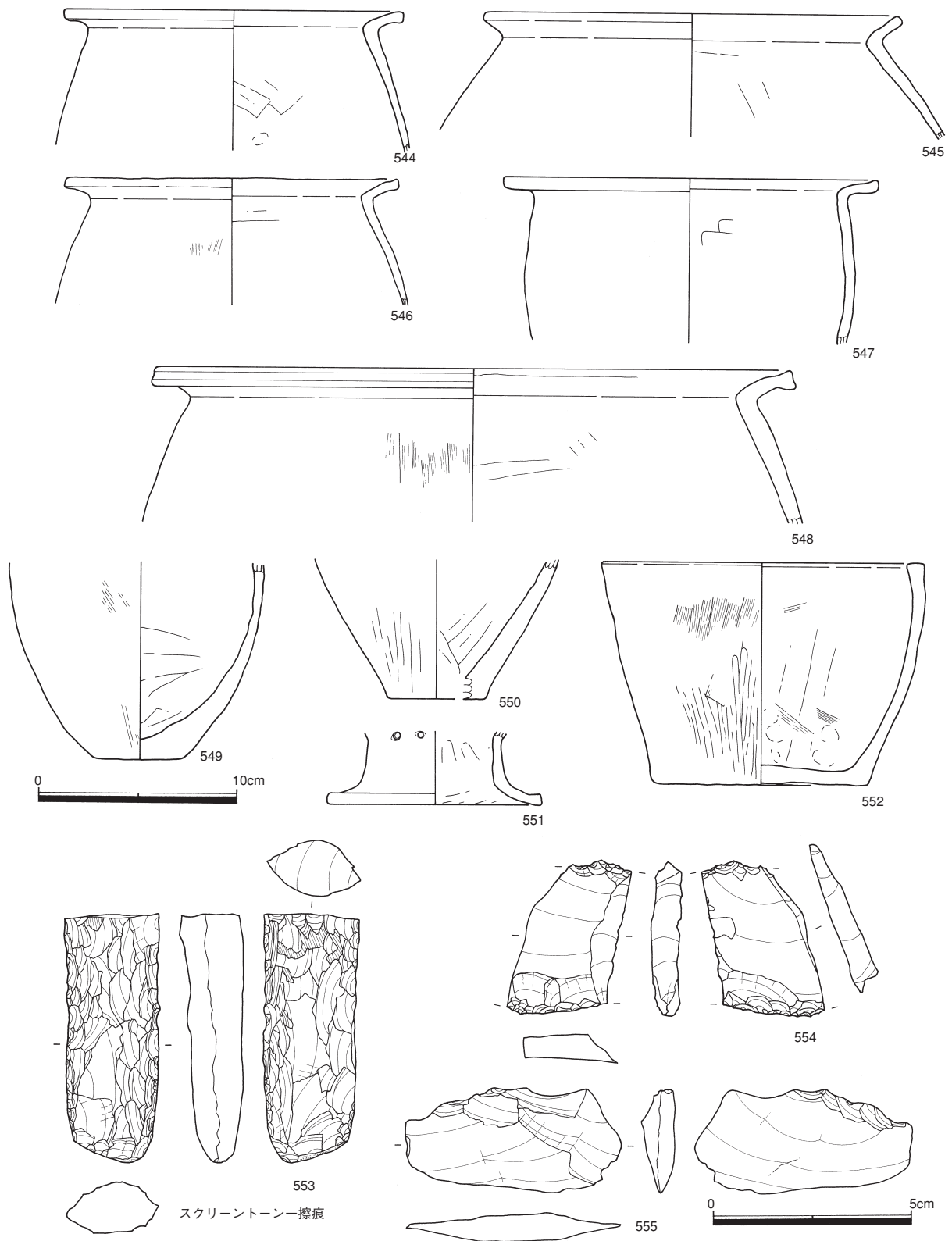
L=78.70m



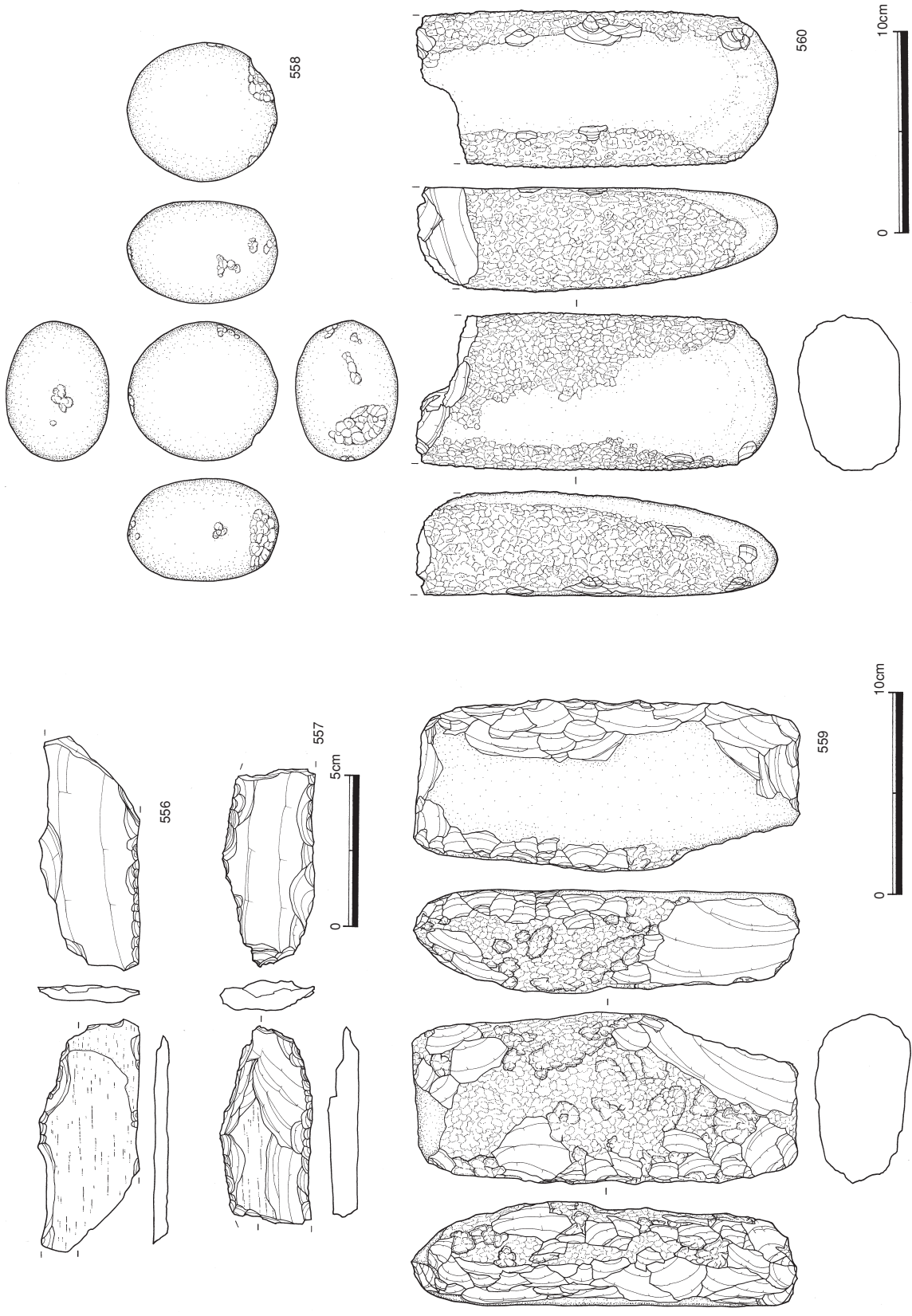
第100図 SK1101遺構図



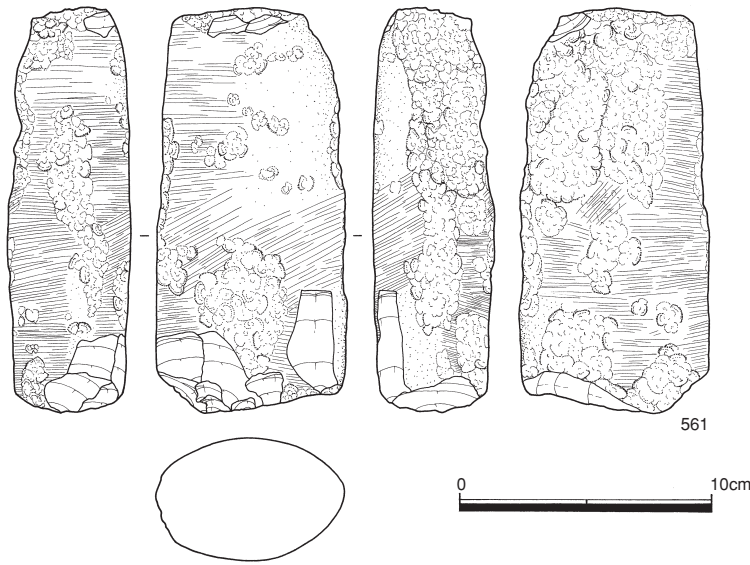
第101図 SK1101出土遺物(1)



第102図 SK1101出土遺物(2)



第103図 SK1101出土遺物(3)



第104図 SK1101出土遺物(4)

壺 (532~540) のうち、断面三角形の貼付突帯を施した長頸壺 (532)、頸部に指頭圧痕突帯をめぐらした短頸壺・広口壺 (533・534・538) が認められる。

甕 (541~550) は、口縁部がくの字形を呈し、口径15~20cm前後のものが主体となる。そのなかで体部上位に煤状に炭化物を多く付着する548は、口径30cmを越えるやや大型の甕である。544は金雲母を含む胎土から、讃岐からの搬入品と考えられる。

鉢・高坏ともに出土量は少なく、鉢は2点出土したものの小片のために図化できなかった。高坏脚部 (551) は、遺存部で2孔一対の穿孔部が一個所認められる。552はバケツ形土器である。

出土した石器のうち図化できたのは、石剣 (553) ・楔形石器 (554) ・剥片 (555) 各1点、打製石庖丁2点 (556・557)、敲石1点 (558)、石斧3点 (559~561) である。石剣 (553) は遺存部の左側縁部1/2につぶれ痕が、また表裏面に擦痕が部分的に認められる。打製石庖丁 (556・557) 2点ともに使用石材が砂質片岩で、556は縦長剥片、557は横長剥片を用いる。また556は片面が自然面で、その部分を磨いている。敲石 (558) は、砂岩を用いる。石斧3点共に未製品であり、560は閃緑岩、559・561はハンレイ岩を用いる。559は表面・左右側面に敲打痕が、560は左右側面を中心に敲打痕が、561はほぼ全面に擦痕が認められる。

遺構の所属時期は、出土遺物から弥生時代中期中葉と考えられる。

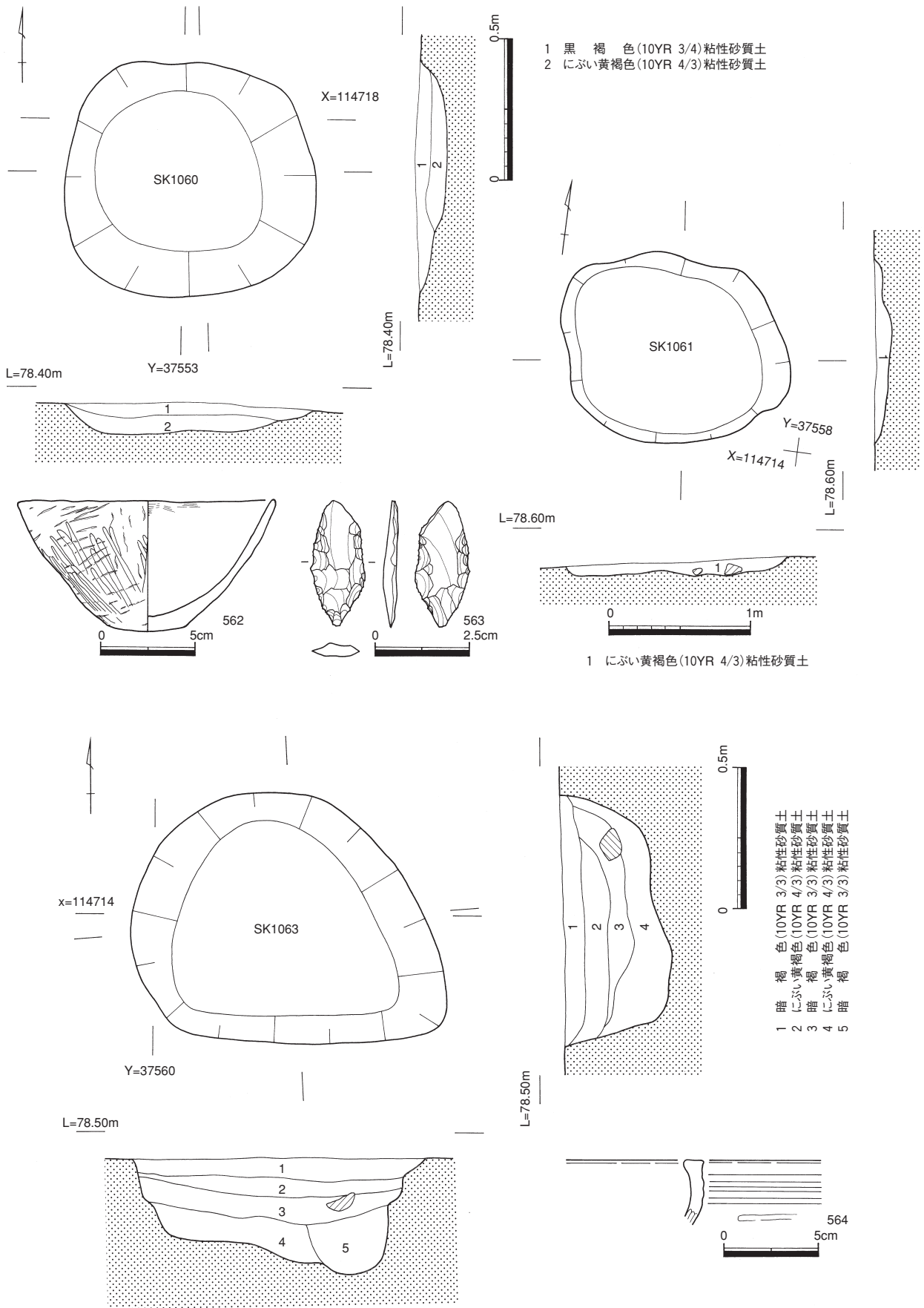
土坑60号 (SK1060) (第105図)

4-B区 β-II D-11で確認された土坑。平面形態は不整な方形、底面形態はやや不整な円形、段面形態は舟底形を呈し、長軸0.89m、短軸0.83m、最大深度0.11mを測る。覆土は2層に分層でき、1層は黒褐色粘性砂質土、2層はにぶい黄褐色粘性砂質土である。

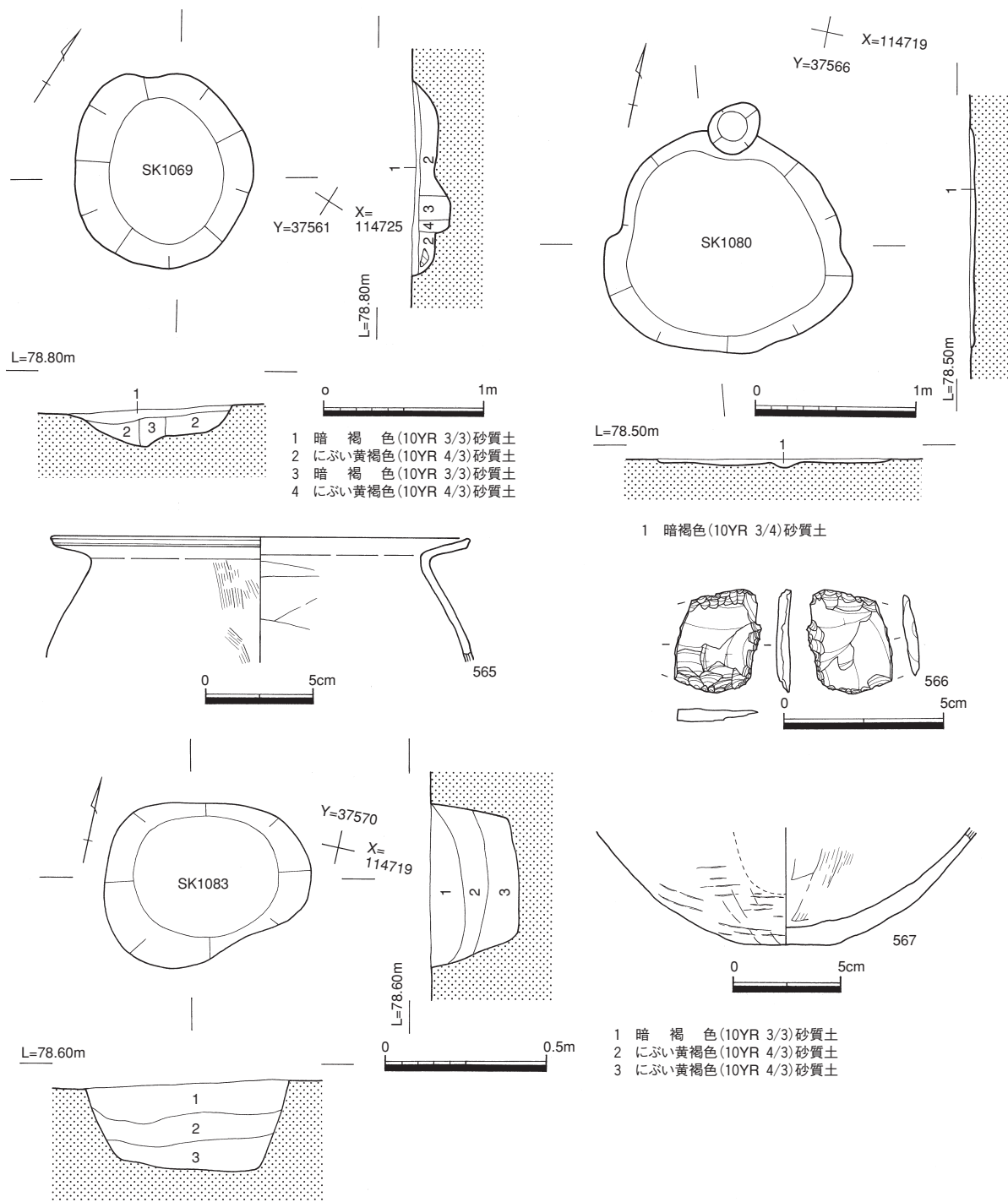
遺物は鉢形土器1点・体部片14点、サヌカイト製石鏃1点が出土した。図化できたのはほぼ完形の鉢 (562)、サヌカイト製石鏃 (563) である。562は磨滅により調整の遺存状態が悪いものの、粗いタタキを施した後ミガキを施す。また乾燥に伴うひび割れも顕著に認められる。563は、先端部が欠損した有

した。南側が側溝に切られてはいるものの、平面形態・底面形態ともに楕円形、断面形態はやや不整な逆台形を呈し、最大長1.74m、短軸1.20m、最大深度0.40mを測る。

遺物は壺形土器30点、甕形土器30点、鉢形土器2点、高坏形土器1点、体部片425点、バケツ形土器1点、サヌカイト製楔形石器1点・石剣1点・剥片3点、結晶片岩製石庖丁5点・敲石3点・石斧3点、砂岩製砥石6点、被熱痕跡の認められる砂岩、土師質土器小皿、焼土塊が出土した。これらの出土遺物のうち、図化できたのは30点を数える。



第105図 SK遺構図・出土遺物(2)



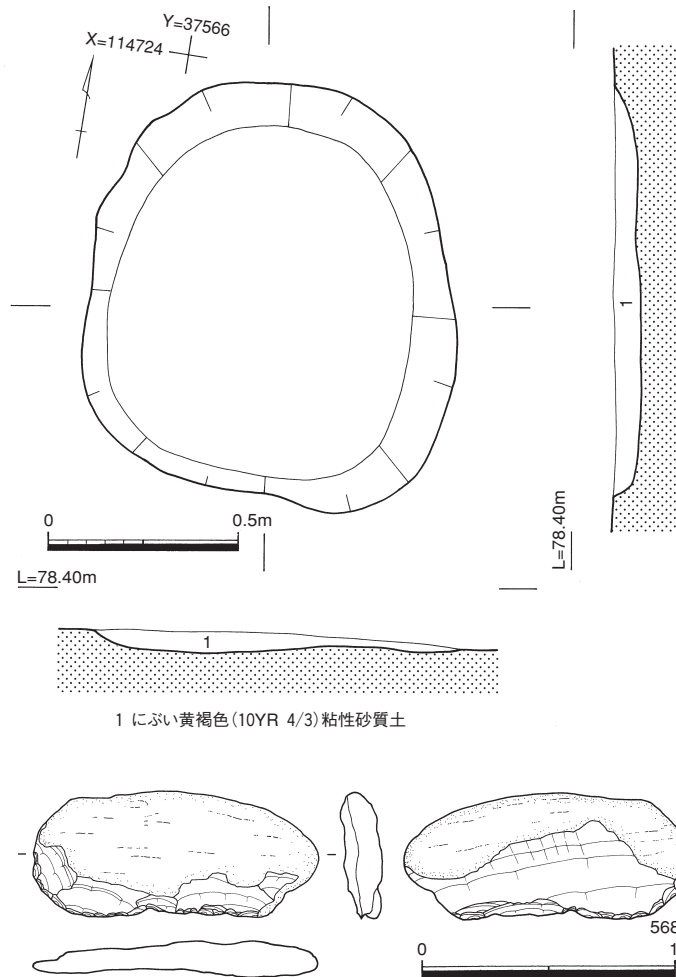
第106図 SK遺構図・出土遺物(3)

茎式石鏃である。

この遺構の所属時期は弥生時代後期後葉～終末期前半と思われる。

土坑61号 (SK1061) (第105図)

4-B区 β-II C-12で確認された土坑。平面形態・底面形態ともにやや不整な楕円形、断面形態は緩やかな舟底形を呈する。長軸1.74m、短軸1.34m、最大深度0.12mを測る。覆土は褐色砂質土1層で、しまりが強い。遺物は弥生土器片24点、サヌカイト剥片1点出土したものの、図化できるものはな



第107図 SK1088遺構図・出土遺物

度0.24mを測る。覆土は4層に分層でき、土層堆積状況から3・4層は柱穴の可能性が考えられる。1層は暗褐色粘性砂質土、2層はにぶい黄褐色粘性砂質土で両層ともに炭化物を含む。

遺物は甕形土器口縁部・底部各1点、体部片8点、サヌカイト剥片2点、打製石庖丁1点が出土し、図化できたのは甕口縁部(565)のみである。出土遺物から、遺構の所属時期は弥生時代後期前葉～中葉と考えられる。

土坑80号 (SK1080) (第106図)

4-B区 β-II D-14で確認された土坑。平面形態・底面形態ともにやや不整な円形、断面形態は緩やかな舟底形を呈し、長軸1.48m、短軸1.38m、最大深度0.05mを測る。

覆土は暗褐色粘性砂質土1層である。遺物は弥生土器片15点、サヌカイト製楔形石器1点が出土した。図化できたのは、楔形石器(566)のみである。

土坑83号 (SK1083) (第106図)

4-B区 β-II D-14で確認された土坑。平面形態はやや不整な楕円形、底面形態は楕円形、断面形態は逆台形を呈し、長軸0.64m、短軸0.51m、最大深度0.28mを測る。底面は平坦である。覆土は3

かった。

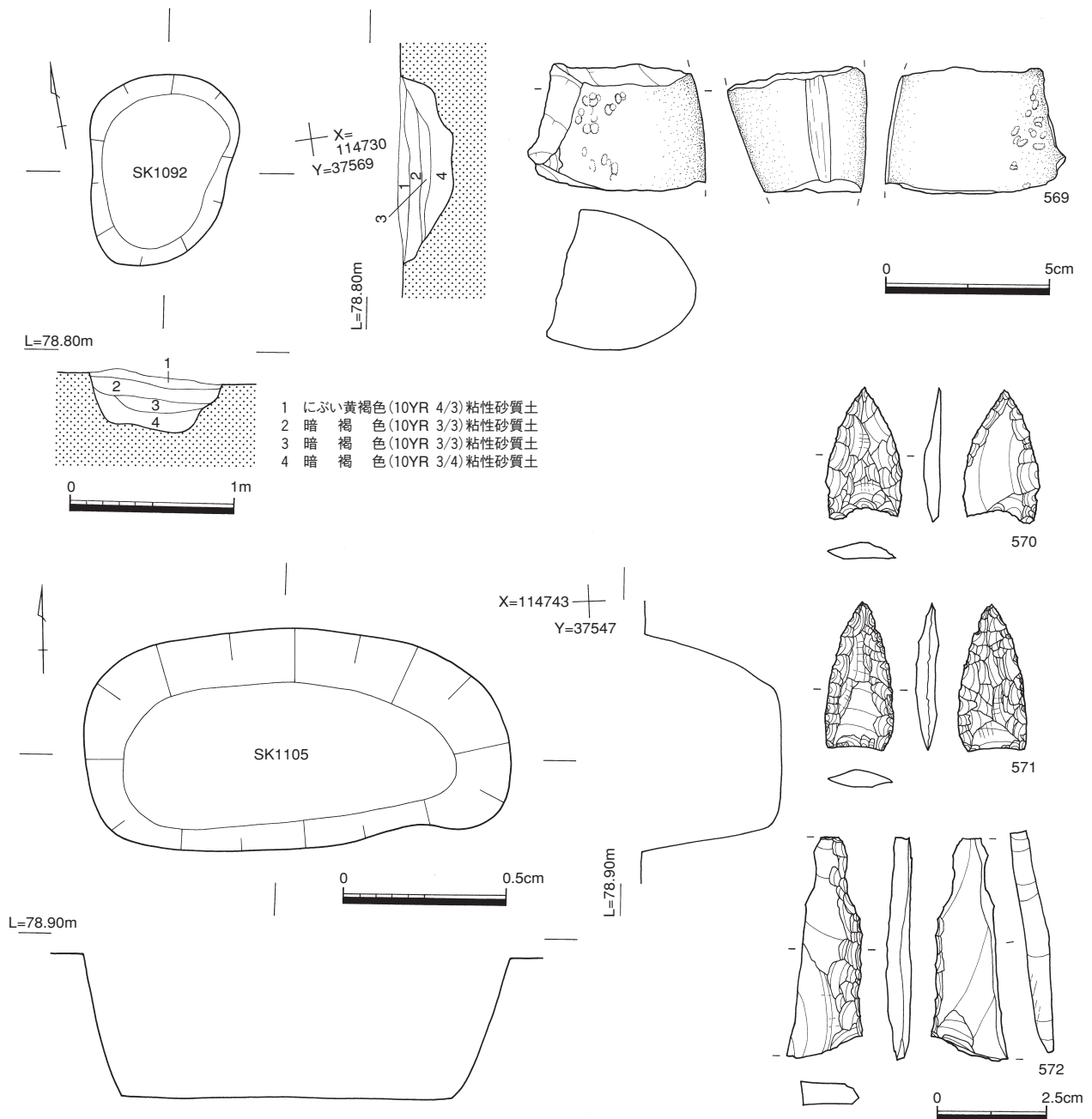
土坑63号 (SK1063) (第105図)

4-B区 β-II C-13で確認された土坑。平面形態・底面形態ともに不整な楕円形、断面形態は不整な逆台形を呈し、長軸1.19m、短軸0.96m、最大深度0.41mを測る。覆土は3層に分層でき、各層ともに炭化物を含む。1層は暗褐色粘性砂質土、2層はにぶい黄褐色粘性砂質土、3層は暗褐色粘性砂質土で、3層は他の2層と比較して砂質がやや強くしまりが弱い。

遺物は広口壺形土器1点、甕形土器底部1点、高坏形土器口縁部・脚部各1点、体部片20点が出土し、図化できたのは高坏(564)1点のみである。出土遺物から、所属時期は弥生時代後期前半と考えられる。

土坑69号 (SK1069) (第106図)

4-B区 β-II E-12・13で確認された土坑。平面形態はやや不整な楕円形、底面形態は楕円形、断面形態は不整な舟底形を呈し、長軸1.22m、短軸1.1m、最大深



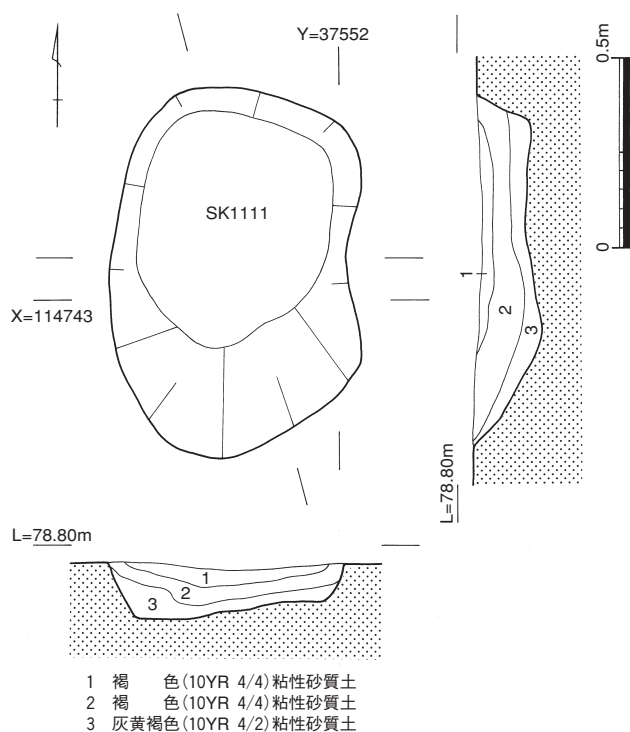
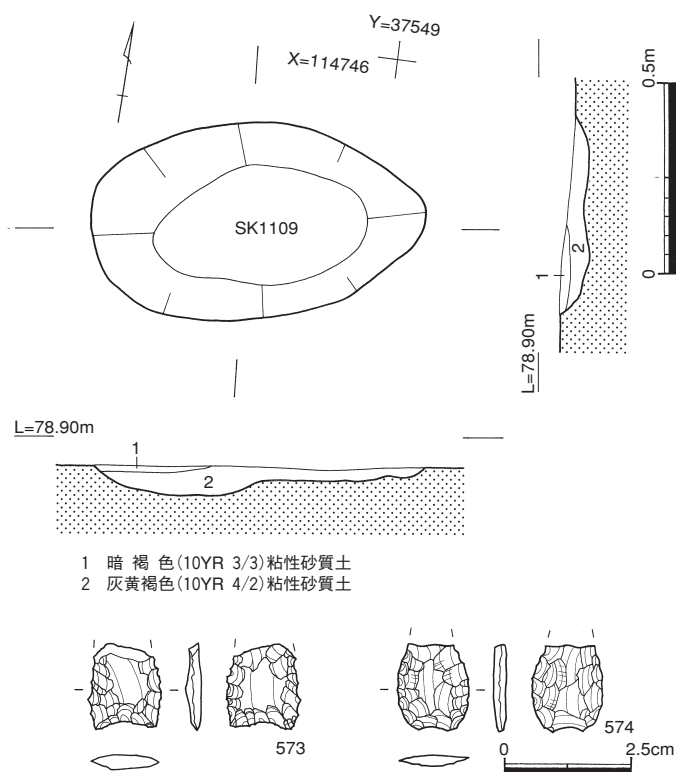
第108図 SK遺構図・出土遺物(4)

層に分層でき、大きく2層に分けることができる。上層(1層)は暗褐色粘性砂質土で土器片・炭化物を若干含む。下層(2・3層)はにぶい黄褐色粘性砂質土で、3層はやや砂質が強い。

遺物は甕形土器口縁部1点、壺形土器底部1点、体部片7点出土し、総点数9点を数える。その中で図化できたのは、壺(567)のみである。出土遺物から、所属時期は弥生時代と考えられる。

土坑88号 (SK1088) (第107図)

4-B区 β-II E-14で確認された土坑。平面形態・底面形態ともにやや不整な楕円形、断面形態は緩やかな舟底形を呈し、長軸1.09m、短軸0.97m、最大深度0.07mを測る。覆土はにぶい黄褐色粘性砂質土1層であり、しまりが弱く炭化物を若干含む。



第109図 SK遺構図・出土遺物(5)

遺物は弥生土器片2点と砂質片岩の礫を用いた打製石庖丁1点が出土し、図化できたのは平刃・単刃を持つ石庖丁(568)のみである。

土坑92号 (SK1092) (第108図)

4-B区 β-II F-14で確認された土坑。平面形態・底面形態ともにやや不整な楕円形、断面形態は不整な逆台形を呈し、長軸1.16m、短軸0.82m、最大深度0.34mを測る。覆土は土質および含有物から4層に分層でき、大きく2層に分けることができる。上層(1層)はにぶい黄褐色粘性砂質土で、暗褐色土ブロックを混入する。また炭化物を多く含み、層状となる。下層(2~4層)は暗褐色粘性砂質土で、2層は炭化物・土器片を含み、3層は粘性がやや強い。4層はにぶい黄褐色土ブロックを若干混入する。

遺物は底部回転ヘラ切りを施す土師質土器杯3点・体部片10点、弥生土器体部片8点、サヌカイト剥片2点、結晶片岩製石庖丁1点・台石1点が出土した。そのうち図化できたのは、台石(569)のみである。台石の石材は閃緑岩で、遺存部の表裏に敲打痕が、右側面に磨面がそれぞれ1箇所認められる。中世の遺物が出土しているものの、胎土色から検出および掘削段階で確認できなかった中世に属する柱穴と切り合い関係にあったものと思われる。

土坑105号 (SK1105) (第108図)

5-A区 β-II I-10で確認された土坑。平面形態はやや不整な楕円形、底面形態は楕円形、断面形態は逆台形を呈し、長軸1.31m、短軸0.68m、最大深度0.43mを測る。底面は平坦である。

遺物は甕形土器口縁部1点・体部片7

点、サヌカイト製石鏃2点・楔形石器1点、結晶片岩を用いた打製石庖丁1点が出土し、図化できたのは凹基式(570)と平基三角(571)の石鏃2点と楔形石器(572)のみである。

土坑109号 (SK1109) (第109図)

5-A区 β-II J-10で確認された土坑。平面形態・底面形態ともにやや不整な楕円形、底面形態は楕円形、断面形態はやや不整な舟底形を呈し、長軸0.88m、短軸0.53m、最大深度0.07mを測る。覆土は2層に分層でき、1層は暗褐色粘性砂質土、2層は灰黄褐色粘性砂質土にぶい黄褐色土をブロック状に混入する。

遺物は弥生土器片3点、サヌカイト製石鏃2点・剥片12点出土し、図化できたのは凹基式(573)と平基三角(574)の石鏃2点のみである。

土坑111号 (SK1111) (第109図)

5-A区 β-II I-11で確認された土坑。平面形態・底面形態ともにやや不整な楕円形、断面形態は逆台形を呈し、長軸0.94m、短軸0.62m、最大深度0.17mを測る。覆土は土色および含有物から3層に分層でき、大きく2層に分けることできる。上層(1・2層)は褐色粘性砂質土にぶい黄褐色土ブロックを混入する。2層と比較して1層の方がしまりが強い。下層(3層)は灰黄褐色粘性砂質土にぶい黄褐色土ブロックを含む。

遺物は壺形土器口縁部1点、甕形土器口縁部・底部各1点、体部片26点、サヌカイト剥片2点出土した。図化できたのは、貼付突帯を施す細頸広口壺(757)と甕(576)のみである。出土遺物から、所属時期は弥生時代中期中葉～後葉と考えられる。

土坑112号 (SK1112) (第110図)

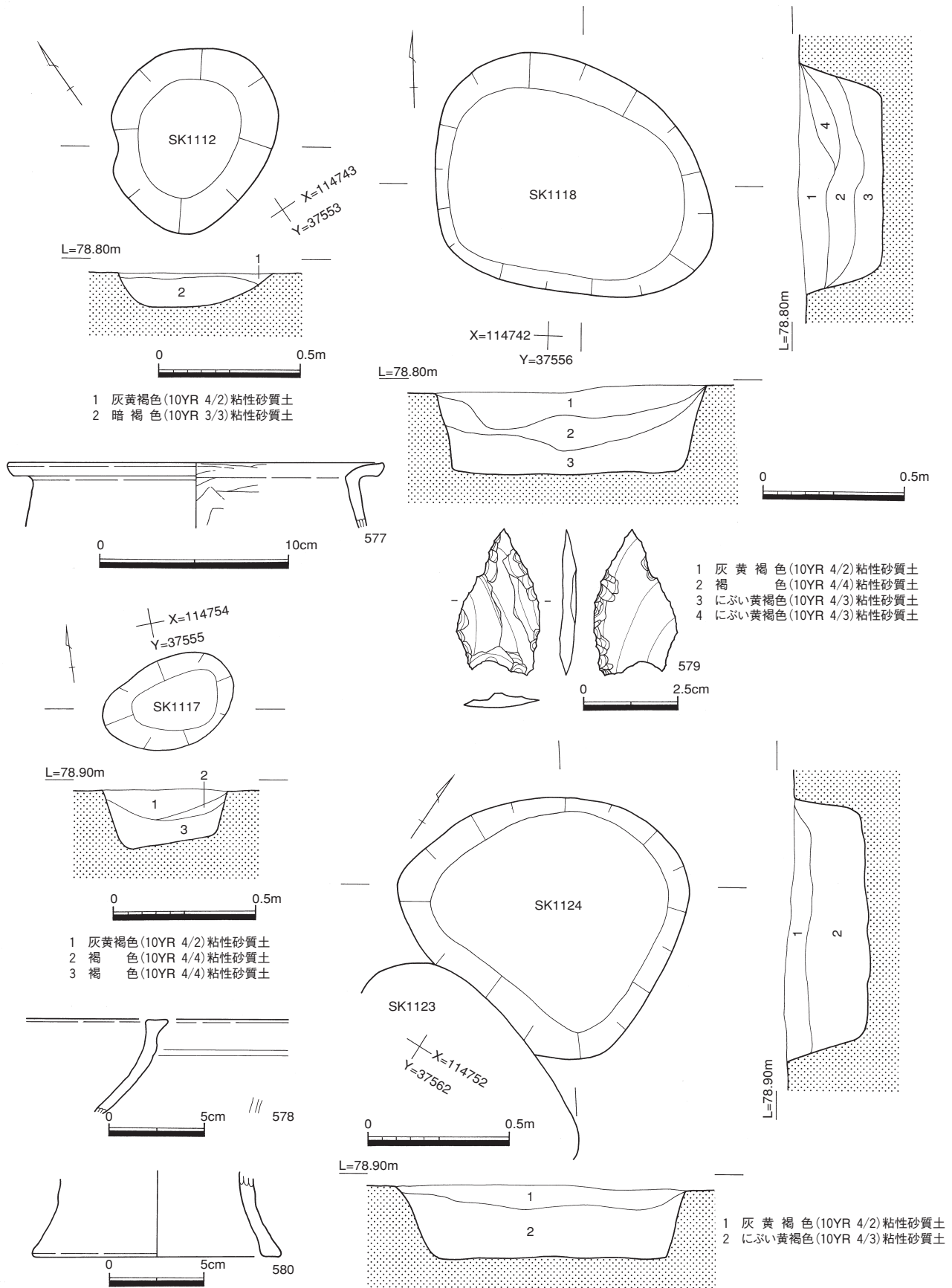
5-A区 β-II I-11で確認された土坑。平面形態はやや不整な楕円形、底面形態は楕円形、断面形態はやや不整な舟底形を呈し、長軸0.66m、短軸0.55m、最大深度0.12mを測る。覆土は2層に分層でき、1層は灰黄褐色粘性砂質土で暗褐色土やにぶい黄褐色土をブロック状に混入し、しまりが強い。2層は暗褐色粘性砂質土でしまり弱い。

遺物は甕形土器口縁部1点、体部片7点出土し、総点数8点を数える。図化できたのは、口縁部(577)のみである。出土遺物から、所属時期は弥生時代後期前葉～中葉と考えられる。

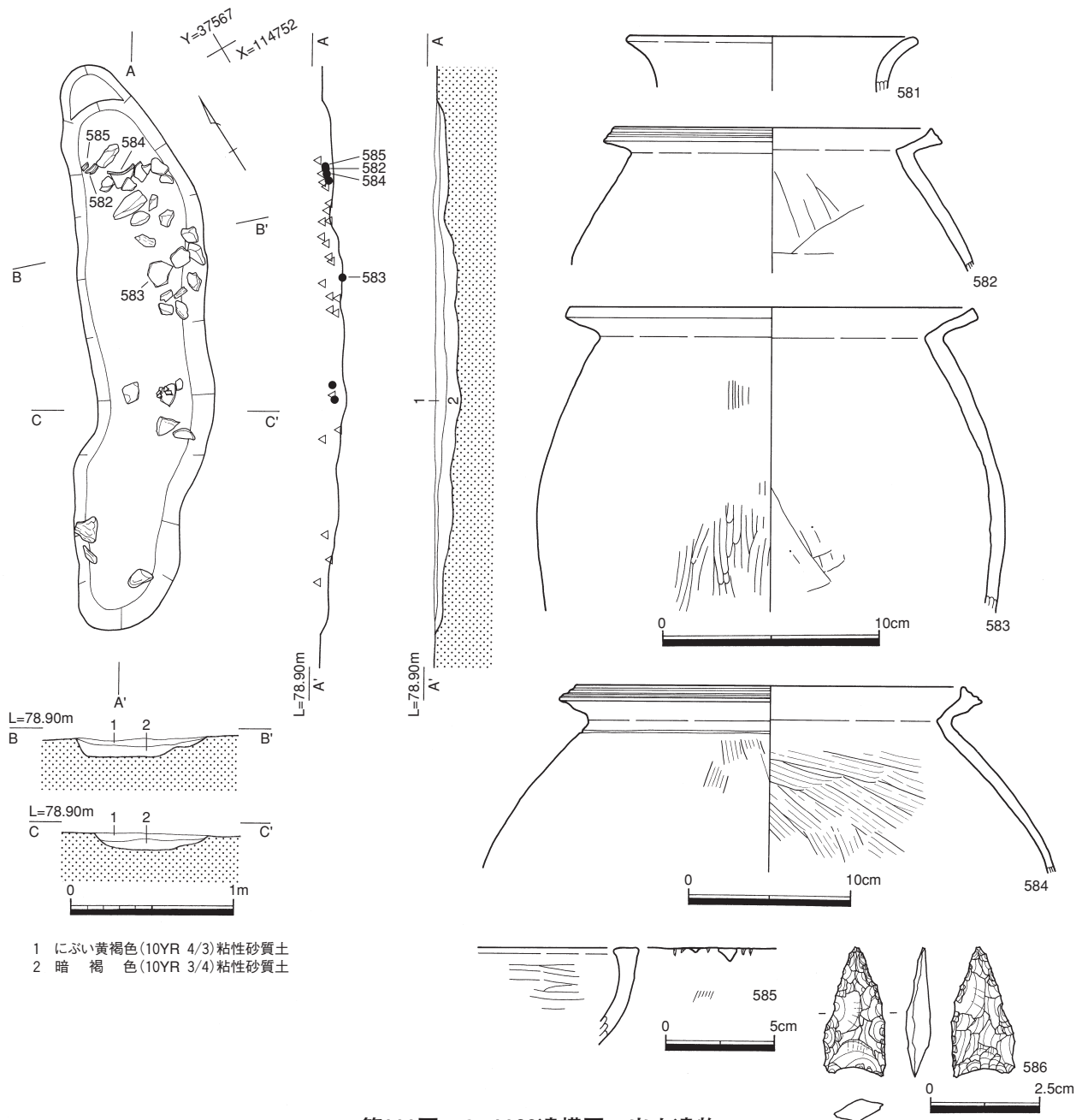
土坑117号 (SK1117) (第110図)

5-A区 β-II K-11・12で確認された土坑。平面形態・底面形態ともにやや不整な楕円形、断面形態は逆台形を呈し、長軸0.48m、短軸0.32m、最大深度0.21mを測る。覆土は3層に分層でき、大きく2層に分けることができる。上層(1層)は灰黄褐色粘性砂質土にぶい黄褐色土をブロック状に混入し、しまりが強い。下層(2・3層)は褐色粘性砂質土で、2層はしまりが弱くにぶい黄褐色土ブロックを若干混入する。3層は2層と比較してしまりが強い。

遺物は高坏形土器口縁部・脚部各1点、体部片4点、焼土塊11点が出土し、図化できたのは、胎土から同一個体と考えられる高坏口縁部(579)・脚部(580)である。出土遺物から、所属時期は弥生時代後期前半と考えられる。



第110図 SK遺構図・出土遺物(6)



第111図 SK1128遺構図・出土遺物

土坑118号 (SK1118) (第110図)

5-A区 β-II I-12で確認された土坑。平面形態・底面形態ともにやや不整な楕円形、断面形態は逆台形を呈し、長軸1.08m、短軸0.82m、最大深度0.31mを測る。底面は平坦である。覆土は土質および含有物から4層に分層でき、大きく2層に分けることができる。上層(1・2層)のうち1層は、灰黄褐色粘性砂質土で褐色土・にぶい黄褐色土をブロック状に混入する。2層と比較してしまりが強い。下層(3・4層)はにぶい黄褐色粘性砂質土で、3層は褐色土をブロック状に混入し、4層と比較してしまりが強い。

遺物は壺形土器底部1点、体部片20点、サヌカイト製石鎌・剥片各1点が出土し、図化できたのは未製品である石鎌(579)1点のみである。出土遺物から、所属時期は弥生時代後期以降と考えられる。

土坑124号 (SK1124) (第110図)

5-A区 β-II K-13でSK1123に切られた状態で確認された土坑。平面形態・底面形態ともにやや不整な円形、断面形態は逆台形を呈し、長軸1.04m、短軸0.94m、最大深度0.30mを測る。底面は平坦である。覆土は2層に分層でき、1層は灰黄褐色粘性砂質土でにぶい黄褐色土をブロック状に混入する。2層はにぶい黄褐色粘性砂質土で、炭化物を若干含む。

遺物は高坏形土器脚部1点、体部片4点、サヌカイト剥片2点が出土し、脚部(580)のみ図化できた。出土遺物から、所属時期は弥生時代後期と考えられる。

土坑128号 (SK1128) (第111図)

5-A区 β-II J・K-13・14で確認された土坑。平面形態・底面形態ともに溝状、断面形態は不整な舟底形を呈し、長軸3.32m、短軸0.66m、最大深度0.16mを測る。覆土は2層に分層でき、1層はにぶい黄褐色粘性砂質土、2層は暗褐色粘性砂質土でにぶい黄褐色土をブロック状に若干混入し、炭化物をわずかに含む。

遺物は壺形土器1点、甕形土器3点、体部片23点、高坏形土器1点、サヌカイト製石鏃1点・剥片2点、結晶片岩剥片2点が出土し、その中で図化できたのは広口壺(581)、明瞭な凹線が口縁端部に認められる個体を含む甕3点(582~584)、高坏(585)、凹基式の石鏃(586)である。583は、外面体部中位を中心に煤状の炭化物がやや多く付着し、二次被熱の痕跡が認められる。出土遺物から、所属時期は弥生時代中期後葉~後期初頭と考えられる。

土坑130号 (SK1130) (第112図)

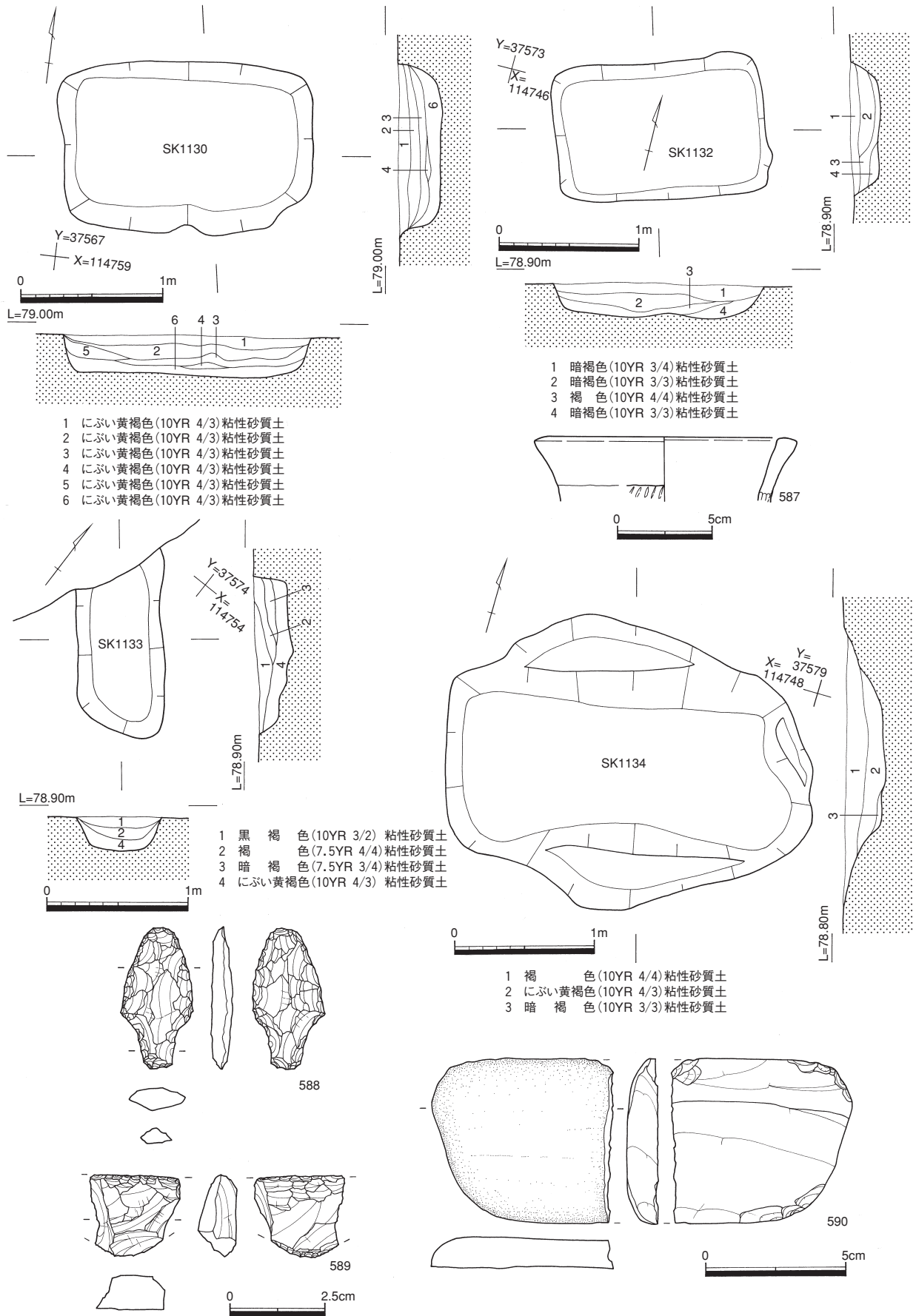
5-A区 β-II L・M-14で確認された土坑。平面形態はやや不整な長方形、底面形態は長方形、断面形態は逆台形を呈し、長軸1.78m、短軸1.24m、最大深度0.30mを測る。底面は平坦である。覆土はにぶい黄褐色を呈し、土質および含有物から6層に分層できるものの大きく3層に分けることができる。上層(1層)は粘性がやや弱く、中層(2~5層)はそれぞれ灰黄褐色土や暗褐色土を混入する。下層(6層)は、他の層と比較してやや砂質が強い。

遺物は広口壺形土器1点、甕形土器2点、体部片86点、鉢形土器1点、サヌカイト・結晶片岩剥片各1点出土し、総点数92点を数える。しかし図化できるものはなく、出土遺物からこの遺構の所属時期は弥生時代後期と考えられる。

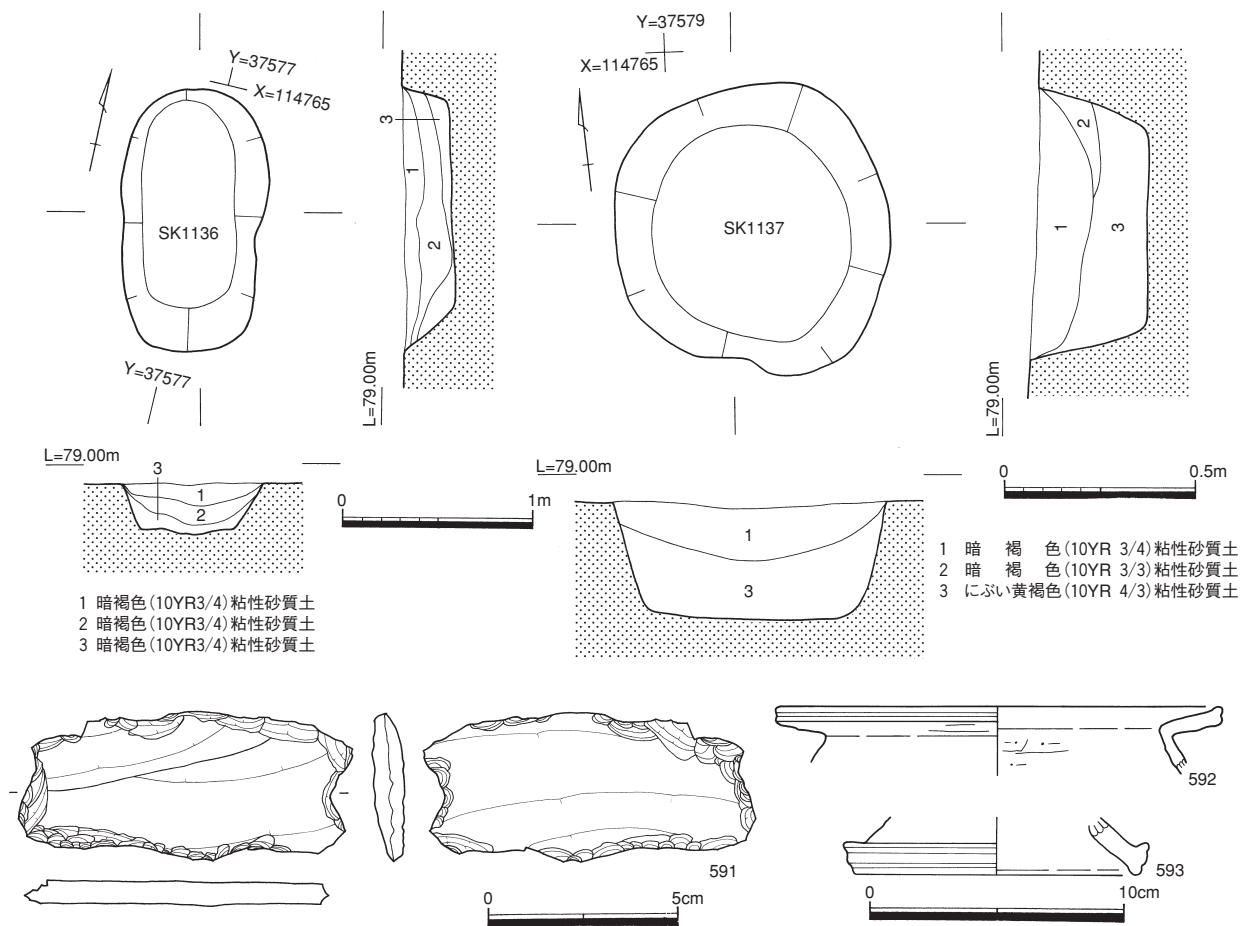
土坑132号 (SK1132) (第112図)

5-A区 β-II J-15で確認された土坑。平面形態・底面形態ともに長方形、断面形態は逆台形を呈し、長軸1.50m、短軸0.98m、最大深度0.24mを測る。覆土は土質および含有物から4層に分層できるものの、大きく3層に分けることができる。上層(1・2層)は暗褐色粘性砂質土で、1層は灰黄褐色土をブロック状に混入する。中層(3層)は褐色粘性砂質土で、にぶい黄褐色土ブロックを大量に混入する。また焼土塊と炭化物を若干含む。下層(4層)は暗褐色粘性砂質土で、炭化物を含む。

遺物は壺形土器1点、甕形土器1点、高坏形土器脚部1点、体部片73点、サヌカイト剥片2点が出土した。そのうち図化できたものは、頸部に貼付突帯刻目を施す短頸広口壺(587)のみである。出土遺



第112図 SK遺構図・出土遺物(7)



第113図 SK遺構図・出土遺物(8)

物から、所属時期は弥生時代中期後葉と考えられる。

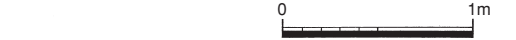
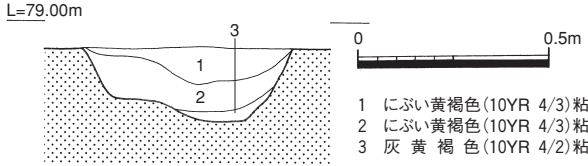
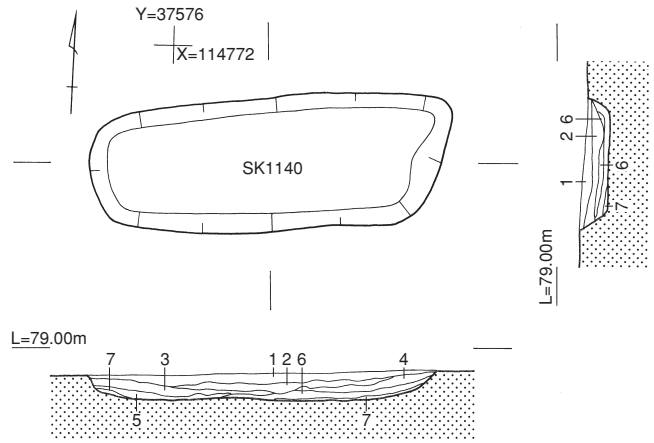
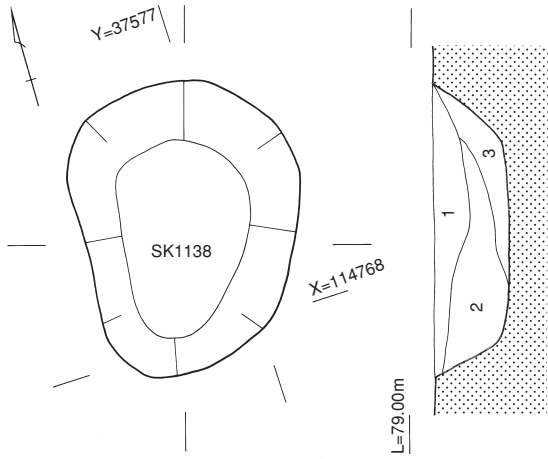
土坑133号 (SK1133) (第112図)

5-A区 β-II K-15でSB1008に切られた状態で確認された土坑。平面形態・底面形態ともに不整な楕円形、断面形態は逆台形を呈し、遺存長1.12m、短軸0.60m、最大深度0.26mを測る。覆土は土質および含有物から4層に分層できるものの、大きく3層に分けることができる。上層(1層)は黒褐色粘性砂質土で、炭化物を若干含む。中層(2・3層)は褐色粘性砂質土、暗褐色粘性砂質土で、それぞれをブロック状に混入する。また2層では焼土塊を若干含む。下層(4層)はにぶい黄褐色粘性砂質土で、地山ブロックを多く混入する。

遺物は弥生土器片6点が出土したものの、図化できるものはなかった。遺構の切り合い関係から、本遺構の所属時期は弥生時代後期初頭以前となる。

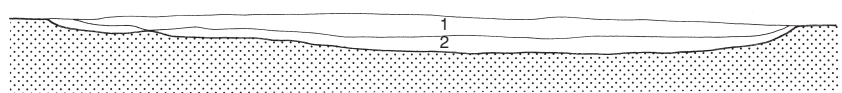
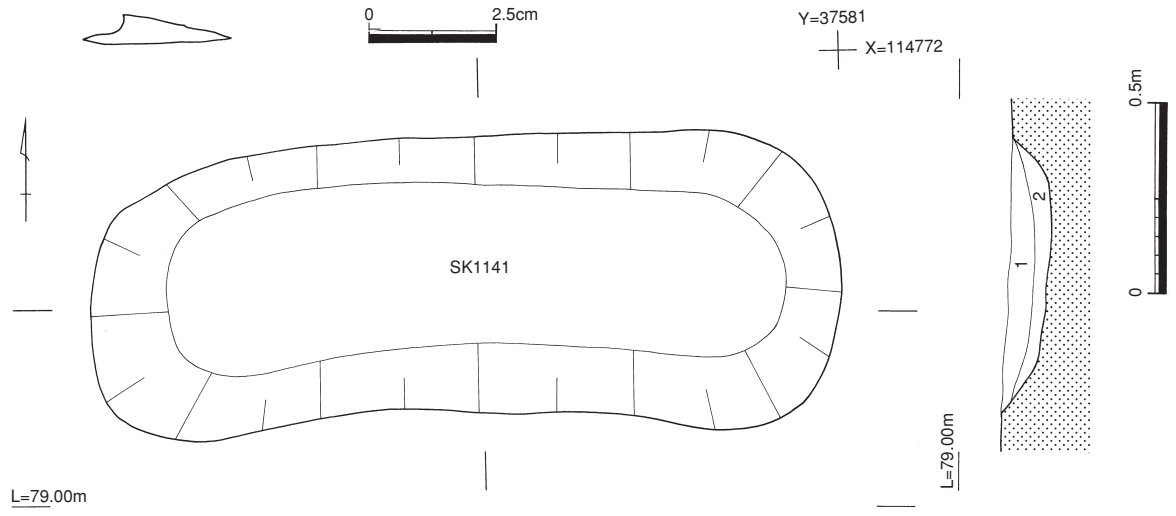
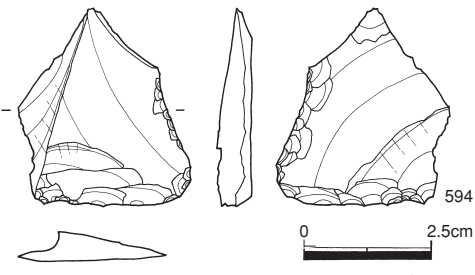
土坑134号 (SK1134) (第112図)

5-A区 β-II J-16で確認された土坑。調査時では切り合い関係を持つ土坑2基として捉えていたが、土層堆積および完掘状況から近代の攪乱を受けた1基の土坑として判断した。本来は平面形態・

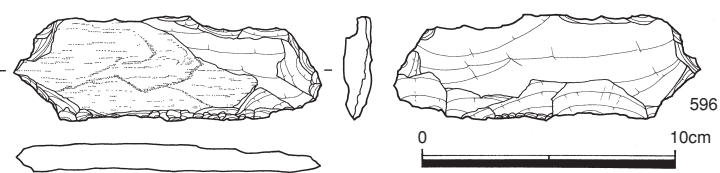
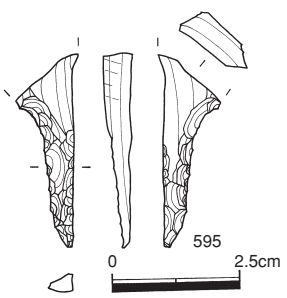


- 1 にぶい黄褐色(10YR 4/3)粘性砂質土
- 2 にぶい黄褐色(10YR 4/3)粘性砂質土
- 3 灰黄褐色(10YR 4/2)粘性砂質土

- 1 にぶい黄褐色(10YR 4/3)粘性砂質土
- 2 にぶい黄褐色(10YR 4/3)粘性砂質土
- 3 にぶい黄褐色(10YR 4/3)粘性砂質土
- 4 にぶい黄褐色(10YR 4/3)粘性砂質土
- 5 にぶい黄褐色(10YR 4/3)粘性砂質土
- 6 灰黄褐色(10YR 4/2)粘性砂質土
- 7 褐色(10YR 4/4)粘性砂質土



- 1 灰黄褐色(10YR 4/2)粘性砂質土
- 2 灰黄褐色(10YR 4/2)粘性砂質土



第114図 SK遺構図・出土遺物(9)

底面形態ともに長方形、断面形態は逆台形を呈していたと思われる。現況の規模は長軸2.60m、短軸1.40m、最大深度0.28mを測る。覆土は3層に分層できるものの1層は瓦片を含む攪乱土であり、本来の覆土は2・3層である。2層はにぶい黄褐色粘性砂質土、3層は暗褐色粘性砂質土で炭化物をやや多く含む。

遺物は広口壺形土器口縁部・底部各1点、甕形土器2点、体部片120点、サヌカイト製石鏃1点・楔形石器1点・剥片4点、結晶片岩製石庖丁1点・剥片1点が出土した。そのうち図化できたものは、凸基式の石鏃(588)、上側縁部につぶれ痕が認められる楔形石器(589)、砂質片岩を用いた剥片(590)である。出土遺物から、所属時期は弥生時代後期と考えられる。

土坑136号 (SK1136) (第113図)

5-A区 β-II M-16でSB1011を切った状態で確認された土坑。平面形態・底面形態ともにやや不整な楕円形、断面形態は逆台形を呈し、長軸1.40m、短軸0.74m、最大深度0.26mを測る。底面はやや平坦である。覆土は暗褐色を呈し、土質および含有物から3層に分層できる。1層は灰黄褐色土をブロック状に若干混入し、2層は炭化物を若干含む。

遺物は弥生土器片10点、打製石庖丁1点が出土し、図化できたのは左右側縁部に抉りをもつ石庖丁(591)1点のみである。石材に紅簾片岩を用いる。

土坑137号 (SK1137) (第113図)

5-A区 β-II M-16でSP11168を切った状態で確認された土坑。平面形態・底面形態ともにやや不整な円形、断面形態は逆台形を呈し、長軸0.76m、短軸0.72m、最大深度0.30mを測る。底面は平坦である。覆土は土質および含有物の違いから3層に分層できるものの、大きく2層に分けることができる。上層(1・2層)は暗褐色粘性砂質土で、1層は灰黄褐色土をブロック状に若干混入する。下層(3層)はにぶい黄褐色粘性砂質土で、上層と比較して粘性がやや強い。

遺物は甕形土器3点、体部片18点、高環形土器脚部1点が出土し、そのうち図化できたものは甕(592)と高環脚部(593)である。出土遺物から、所属時期は弥生時代後期初頭～中葉と考えられる。

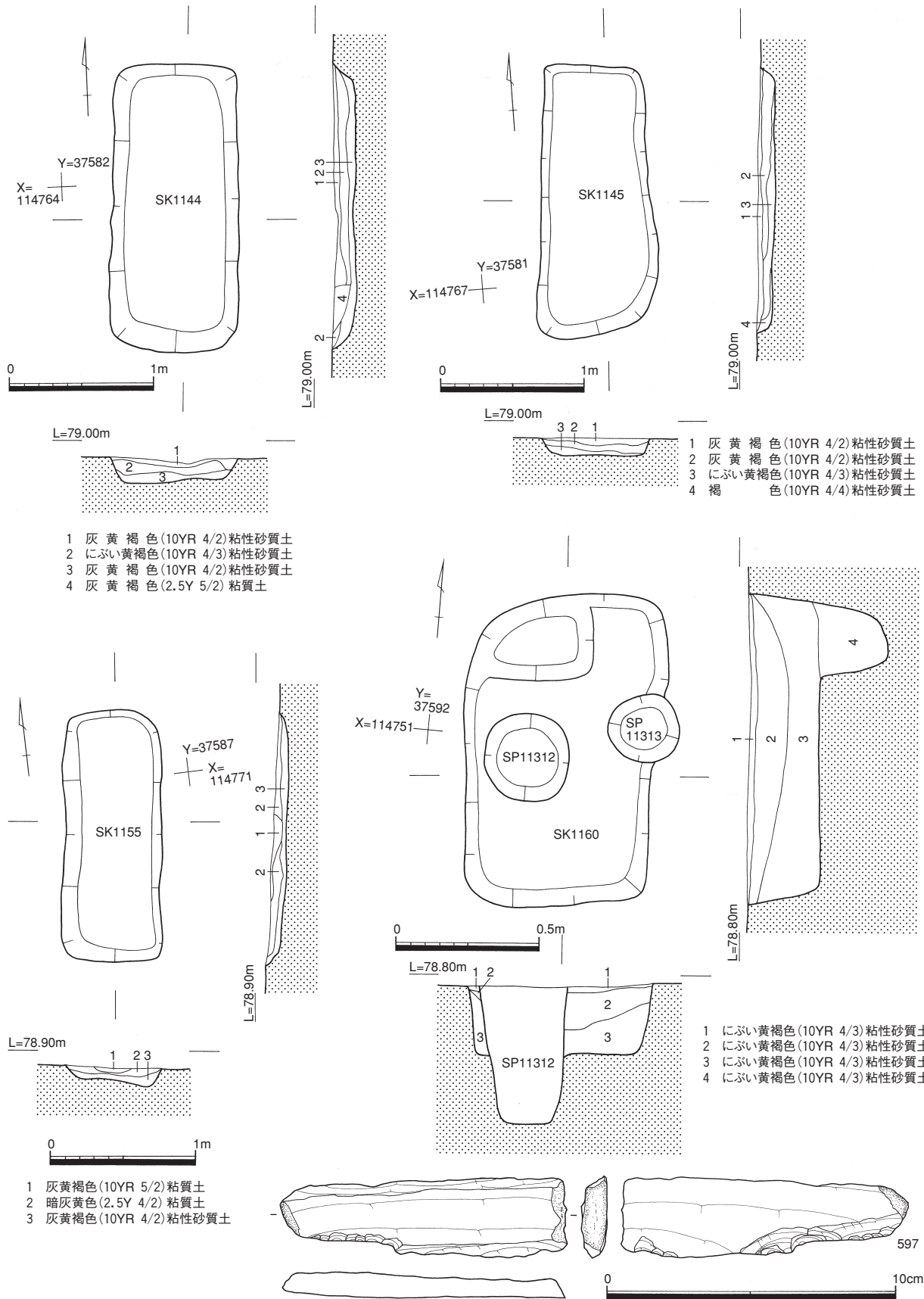
土坑138号 (SK1138) (第114図)

5-A区 β-II N-16で確認された土坑。平面形態・底面形態ともにやや不整な楕円形、断面形態は逆台形を呈し、長軸0.78m、短軸0.55m、最大深度0.20mを測る。覆土は土質および含有物から3層に分層できるものの、大きく2層に分けることができる。上層(1・2層)はにぶい黄褐色粘性砂質土で、1層は炭化物を含む。下層(3層)は灰黄褐色粘性砂質土で、にぶい黄褐色土をブロック状に混入する。

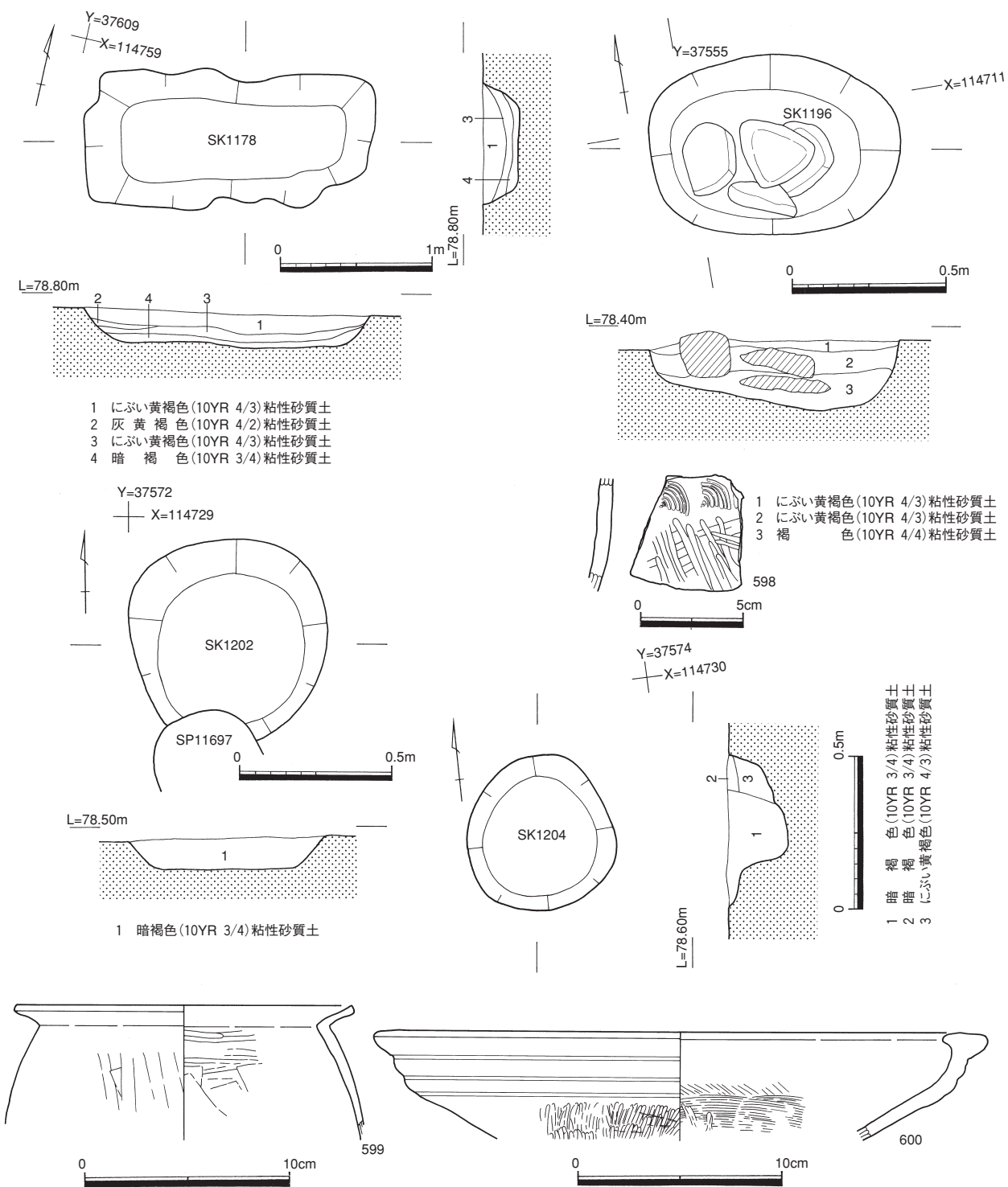
遺物は弥生土器片1点、サヌカイト製楔形石器1点が出土し、図化できたものは楔形石器(594)のみである。

土坑140号 (SK1140) (第114図)

5-A区 β-II O-16で確認された土坑。平面形態・底面形態ともにやや不整な長方形、断面形態は逆台形を呈し、長軸1.86m、短軸0.70m、最大深度0.14mを測る。底面は平坦である。覆土は概ねにぶい黄褐色を呈し、土質および含有物から7層に分層できる。1・2層は他の層と比較して粘性が弱く、



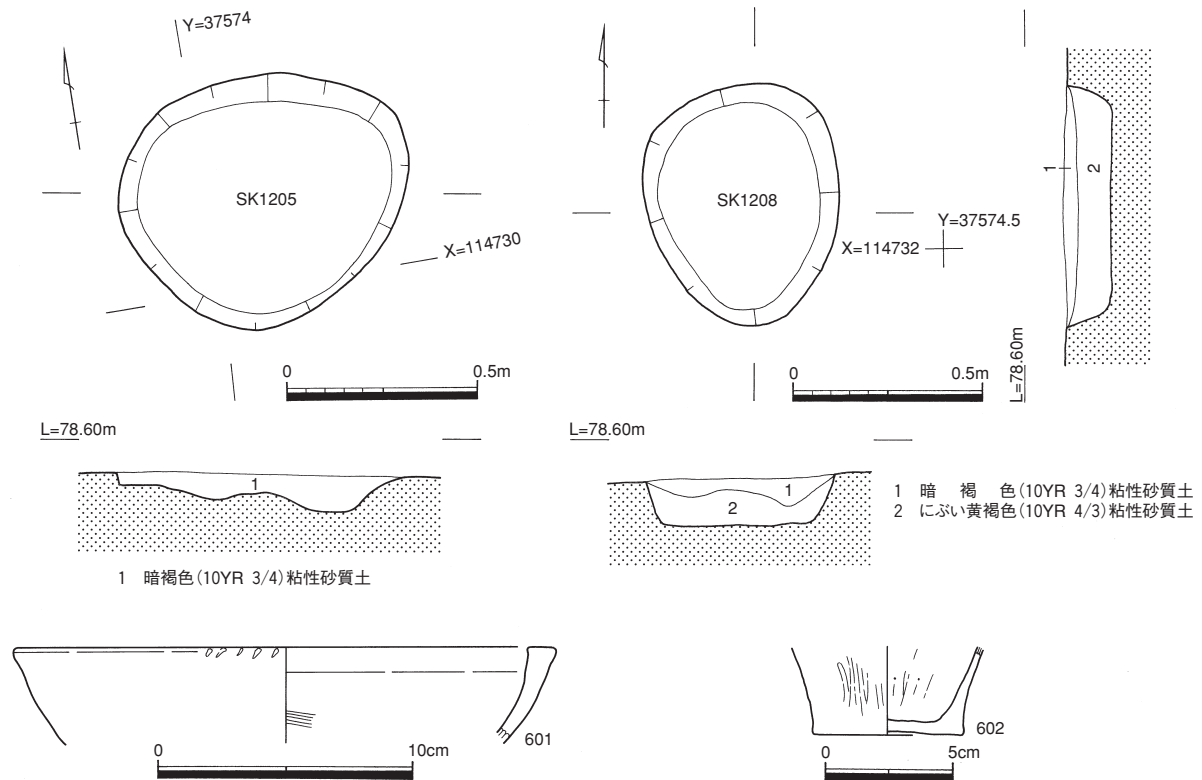
第115図 SK遺構図・出土遺物(10)



第116図 SK遺構図・出土遺物(11)

1層は炭化物を若干含む。3・4層は色調がやや暗い。5層は、褐色土ブロックを若干混入する。6層は灰黄褐色粘性砂質土で、他の層と比較して粒子が細かい。7層は褐色粘性砂質土で、にぶい黄褐色土ブロックを若干混入する。

遺物は弥生土器片が60点余出土したものの、図化できるものはなかった。



第117図 SK遺構図・出土遺物(12)

土坑141号 (SK1141) (第114図)

5-A区 β-II O-16・17で確認された土坑。平面形態・底面形態ともにやや不整な長方形、断面形態は舟底形を呈し、長軸1.98m、短軸0.74m、最大深度0.11mを測る。覆土は灰黄褐色を呈し、土質および含有物から2層に分層できる。1層は2層と比較して粘性が強く、炭化物を若干含む。

遺物は弥生土器片96点、サヌカイト製石錐(595)1点、砂質片岩を用いた打製石庖丁(596)1点が出土したものの、土器片は小片のために図化できなかった。

土坑144号 (SK1144) (第115図)

5-A区 β-II M-17で確認された土坑。平面形態・底面形態ともに長方形、断面形態は逆台形を呈し、長軸2.02m、短軸0.90m、最大深度0.18mを測る。底面はほぼ平坦である。覆土は、土質および含有物から4層に分層できる。4層は土層堆積状況から、検出段階で確認できなかった柱穴の可能性がある。1層は灰黄褐色粘性砂質土で、炭化物を若干含む。2層はにぶい黄褐色粘性砂質土で、他層と比較して粘性がやや強い。3層は褐色土をブロック状に若干混入する。

遺物は甕形土器1点、体部片72点、サヌカイト剥片6点が出土したものの、図化できるものはなかった。出土遺物から、所属時期は弥生時代後期以降と考えられる。

土坑145号 (SK1145) (第115図)

5-A区 β-II N-17でSD1016を切った状態で確認された土坑。平面形態・底面形態ともにやや不

整な長方形、断面形態は逆台形を呈し、長軸1.86m、短軸0.76m、最大深度0.12mを測る。底面は平坦である。覆土は土質および含有物から4層に分層できるものの、大きく2層に分けることができる。上層（1・2層）は灰黄褐色粘性砂質土で、2層は褐色土をブロック状に若干混入する。下層（3層）はにぶい黄褐色粘性砂質土で、褐色土をブロック状に混入する。

遺物は弥生土器片114点、サヌカイト剥片1点が出土したものの、図化できるものはなかった。出土遺物ならびにSD1016との切り合い関係から、所属時期は弥生時代中期後葉以降と考えられる。

土坑155号 (SK1155) (第115図)

5-A区 β-II N・O-18で確認された土坑。平面形態・底面形態ともにやや不整な長方形、断面形態はやや不整な逆台形を呈し、長軸1.78m、短軸0.67m、最大深度0.12mを測る。覆土は3層に分層でき、1層は灰黄褐色粘性砂質土で粘性が強い。2層は暗灰黄色粘性砂質土で粘性が強く、黄褐色土ブロックを混入する。3層は灰黄褐色粘性砂質土で、しまりが強い。

遺物は弥生土器片4点、サヌカイト剥片2点が出土したものの、図化できるものはなかった。

土坑160号 (SK1160) (第115図)

5-A区 β-II K-19でSP11312・11313に切られた状態で確認された土坑。平面形態・底面形態ともにやや不整な長方形、断面形態は逆台形を呈し、長軸1.09m、短軸0.64m、最大深度0.25mを測る。底面は平坦である。覆土はにぶい黄褐色を呈するものの、土質および含有物から4層に分層できる。4層は、土層堆積状況から本土坑に切られた柱穴と考えられる。1・2層は炭化物を若干含み、2層の方が粘性がやや強い。

遺物は弥生土器片11点、打製石庖丁1点、焼土塊1点が出土し、砂質片岩を石材として用いた打製石庖丁(597)のみ図化できた。597は、平刃・単刃を持つ。

土坑178号 (SK1178) (第116図)

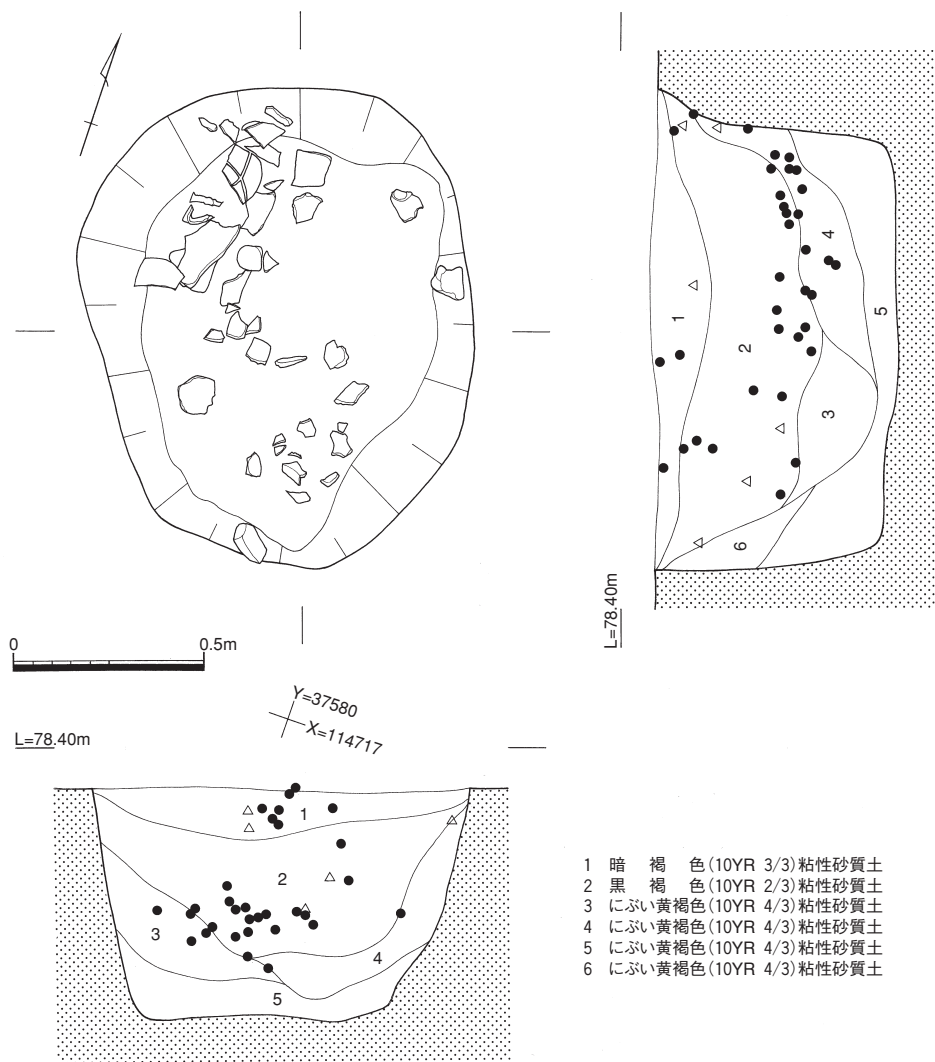
5-A区 β-III L-2・3で確認された土坑。平面形態・底面形態ともにやや不整な長方形、断面形態は逆台形を呈し、長軸1.88m、短軸0.79m、最大深度0.24mを測る。底面は平坦である。覆土は土質および含有物から4層に分層できるものの、大きく2層に分けることができる。上層（1～3層）はにぶい黄褐色粘性砂質土で、1層は灰黄褐色土をブロック状に混入する。2層は灰黄褐色粘性砂質土で、部分的に褐色土を混入する。下層（4層）は暗褐色粘性砂質土で、灰黄褐色土をブロック状に混入する。

遺物は壺形土器底部1点、体部片120点、サヌカイト剥片3点、打製石庖丁3点が出土したものの、図化できるものはなかった。

土坑1196号 (SK1196) (第116図)

5-B区 β-II C-12で確認された土坑。平面形態・底面形態ともに楕円形、断面形態はやや不整形な舟底形を呈し、長軸0.82m、短軸0.59m、最大深度0.22mを測る。覆土は土質および含有物から、3層に分層できる。1・2層はにぶい黄褐色を呈し、1層は2層と比較して粘性が強い。また直径20～30cm前後の礫が、2・3層を中心に認められる。

遺物は扇状文が認められる弥生土器片(598)1点のみである。出土遺物から、所属時期は弥生時代



第118図 SK1210遺構図・出土遺物

中期中葉以降と考えられる。

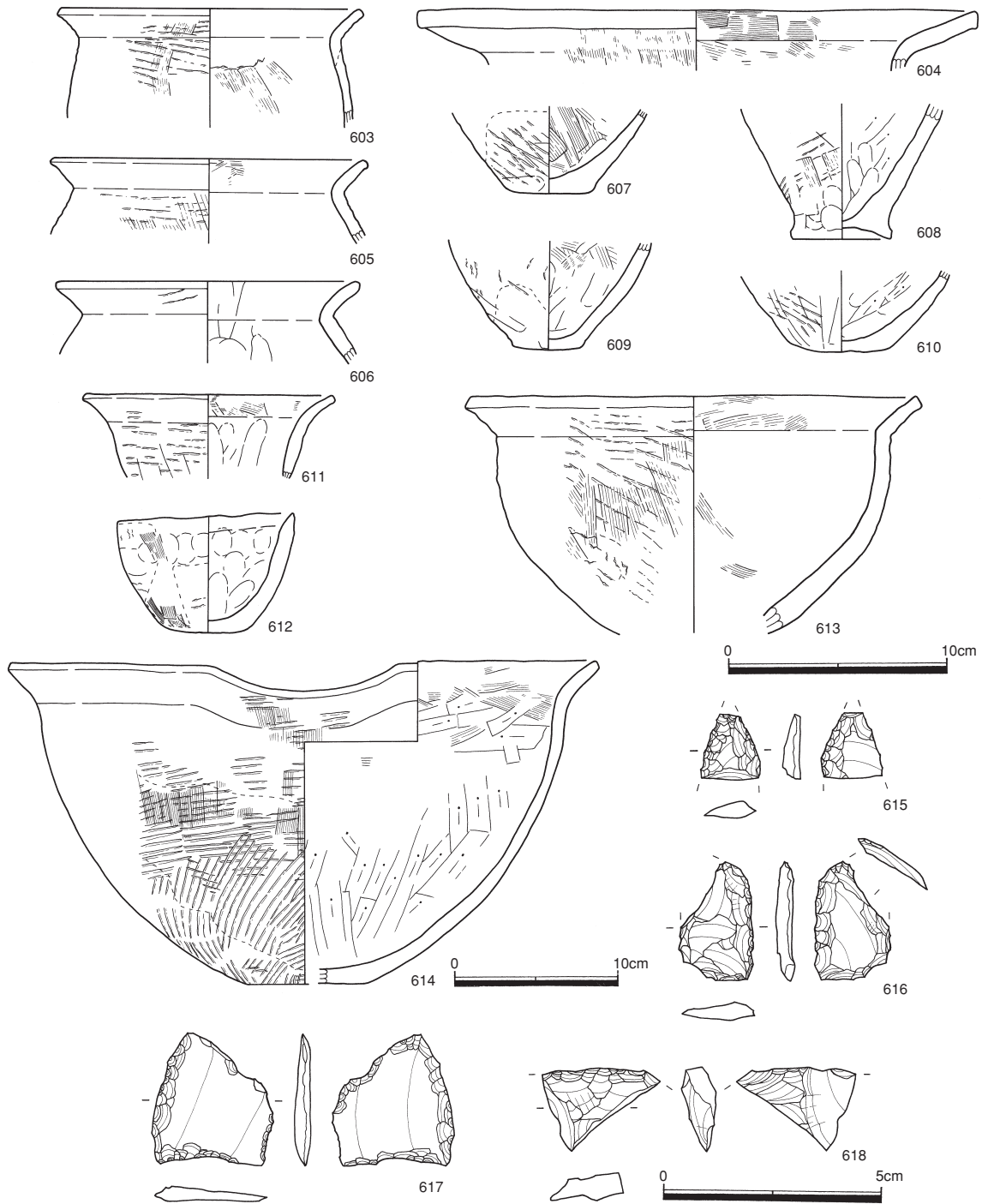
土坑202号 (SK1202) (第116図)

5-B区 β-II F-15でSP11697に切られた状態で確認された土坑。平面形態・底面形態ともやや不整な円形、断面形態は逆台形を呈し、直径0.60m前後、最大深度0.10mを測る。底面は平坦である。覆土は暗褐色粘性砂質土1層で、しまりが弱い。

遺物は甕形土器(599)1点のみである。出土遺物から、所属時期は弥生時代中期中葉と考えられる。

土坑204号 (SK1204) (第116図)

5-B区 β-II F-15で確認された土坑。平面形態・底面形態ともやや不整な円形、断面形態は不整形を呈し、直径0.50m前後、最大深度0.20mを測る。覆土は土質および含有物から、3層に分層できる。1・2層は暗褐色粘性砂質土で、2層がしまりが強い。3層はにぶい黄褐色粘性砂質土である。



第119図 SK1210出土遺物

遺物は高坏形土器1点、体部片2点、打製石庖丁1点が出土し、図化できたものは高坏（600）1点のみである。高坏の外表面は体部上位に凹線3条、下位にタタキの後にミガキが施される。内面は遺存状態が悪いものの内面中央にハケメのちにミガキが施されているのが確認できる。出土遺物から、所属時期は弥生時代中期後葉～後期初頭と考えられる。

土坑205号 (SK1205) (第117図)

5-B区 β-II G-15で確認された土坑。平面形態・底面形態ともに不整な楕円形、断面形態は不整形を呈し、長軸0.75m、短軸0.64m、最大深度0.09mを測る。覆土は暗褐色粘性砂質土1層である。

遺物は高坏形土器1点、体部片1点が出土し、口縁端部に刻目を持つ高坏(601)が図化できた。出土遺物から、所属時期は弥生時代中期中葉～後葉か。

土坑208号 (SK1208) (第117図)

5-B区 β-II G-15で確認された土坑。平面形態・底面形態ともに楕円形、断面形態は逆台形を呈し、長軸0.64m、短軸0.50m、最大深度0.12mを測る。底面は平坦である。覆土は2層に分層でき、1層は暗褐色粘性砂質土、2層はにぶい黄褐色粘性砂質土である。1層はしまりが弱い。

遺物は甕形土器底部1点、体部片11点が出土し、図化できたのは甕底部(602)のみである。出土遺物から、所属時期は弥生時代中期中葉以降と考えられる。

土坑210号 (SK1210) (第118図)

5-B区 β-II D-16でSX1004を切る状態で確認された土坑。平面形態・底面形態ともにやや不整な楕円形、断面形態は逆台形を呈し、長軸1.27m、短軸1.00m、最大深度0.65mを測る。覆土は土質および含有物から6層に分層できるものの、大きく3層に分層できる。上層(1層)は暗褐色粘性砂質土で、にぶい黄褐色土をブロック状に若干混入する。炭化物も若干含む。中層(2層)は黒褐色粘性砂質土で、この層からの遺物の出土量が多い。下層(3～6層)はにぶい黄褐色粘性砂質土で、3・4・6層は暗褐色土および黒褐色土をブロック状に混入し、5層は他の層と比較して砂質が強い。

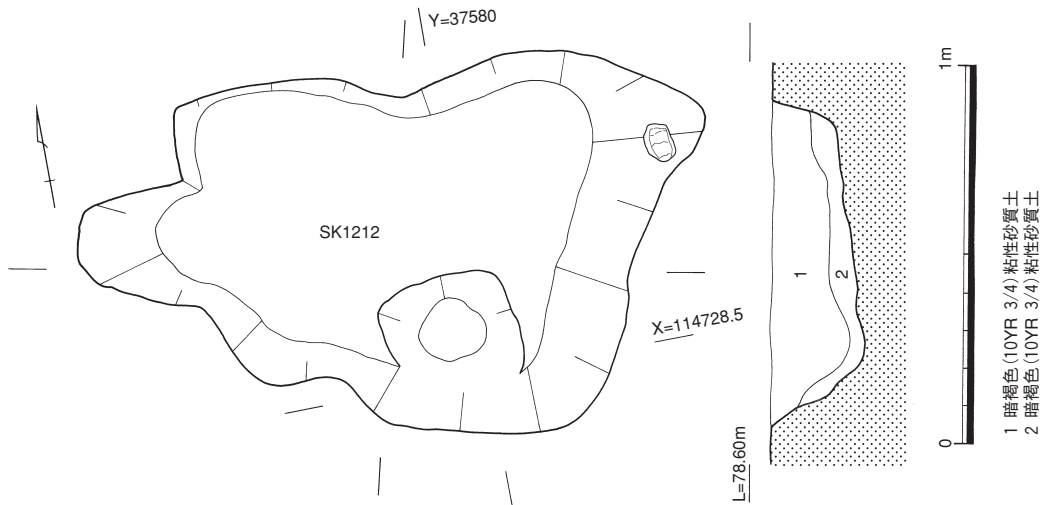
遺物は口縁部端面に鋸歯文や円形浮文を施された個体を含む壺形土器8点・底部4点、甕形土器口縁部10点・底部9点、体部片273点、鉢形土器4点、サヌカイト製石鏃3点・剥片19点、砂質片岩を用いた打製石庖丁1点・未製品4点が出土した。図化できたのは広口壺(604)、甕(603・605～610)、鉢(611～614)、サヌカイト製石鏃(615～617)・楔形石器(618)である。土器は、タタキ成形のものが大半を占める。石鏃のうち615・616は欠損しているものの平基三角と推定され、617は未製品である。

底部は平底主体であることから、所属時期は弥生時代後期後葉～終末期前半と考えられる。

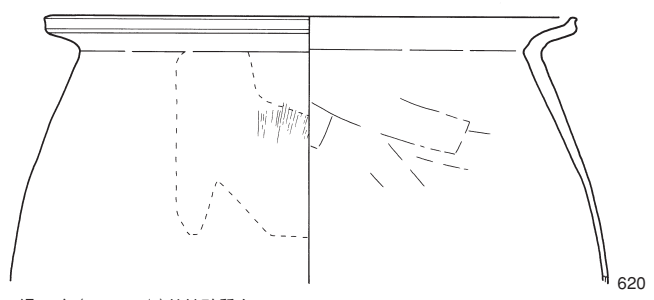
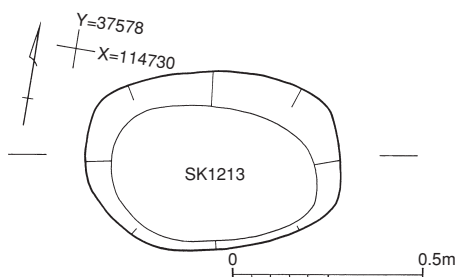
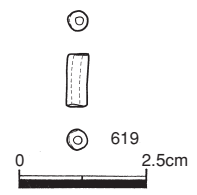
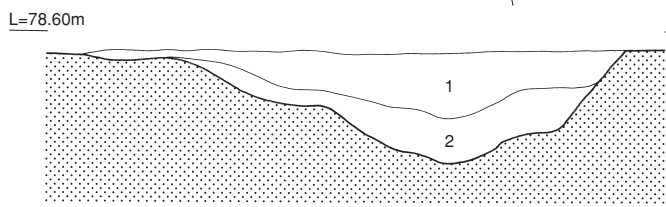
土坑212号 (SK1212) (第120図)

5-B区 β-II F-16・17で確認された土坑。平面形態・底面形態ともに不整形、断面形態は不整な舟底形を呈し、長軸1.44m、短軸0.85m、最大深度0.30mを測る。平面形態から複数の土坑による切り合い関係を想定したが、土層堆積状況からそれを確認することはできなかった。覆土は暗褐色を呈すものの、土質および含有物から2層に分層できる。1層は、2層と比較してしまりが弱く粒子がやや粗い。

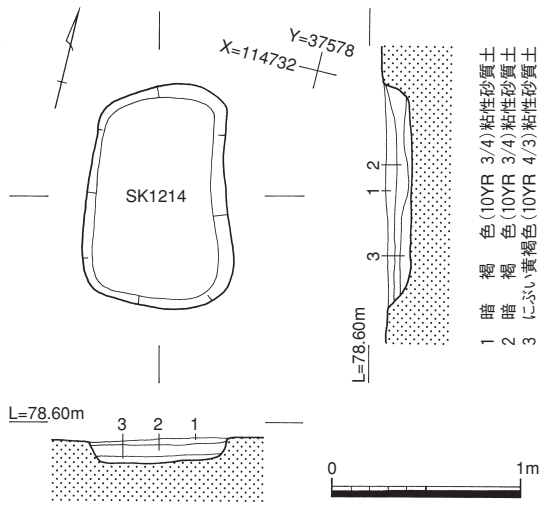
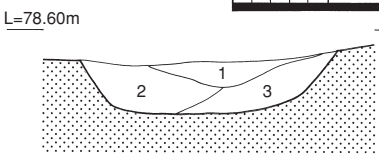
遺物は壺形土器・甕形土器底部各1点、体部片18点、サヌカイト剥片13点、結晶片岩製砥石1点、碧玉製管玉1点が出土し、図化できたものは両側穿孔の管玉(619)のみである。出土遺物から、所属時期は弥生時代後期以降と考えられる。



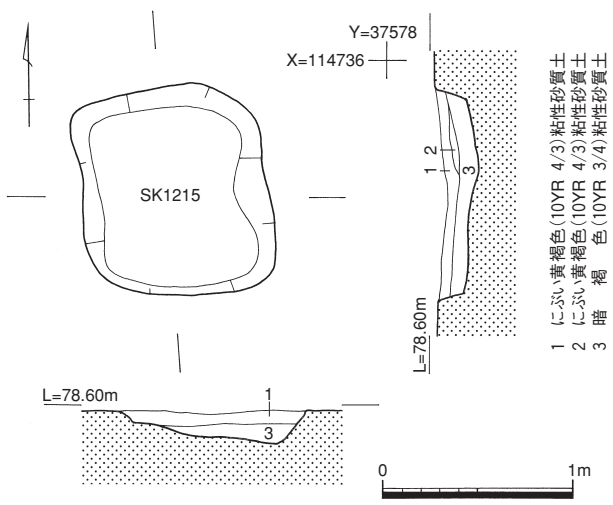
- 1 暗褐色(10YR 3/4)粘性砂質土
- 2 暗褐色(10YR 3/4)粘性砂質土



- 1 暗褐色(10YR 3/4)粘性砂質土
- 2 にぶい黄褐色(10YR 4/3)粘性砂質土
- 3 にぶい黄褐色(10YR 4/3)粘性砂質土

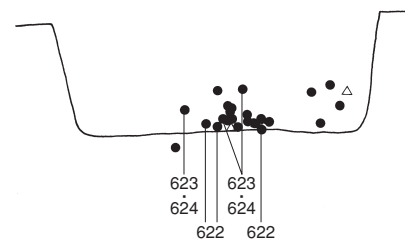
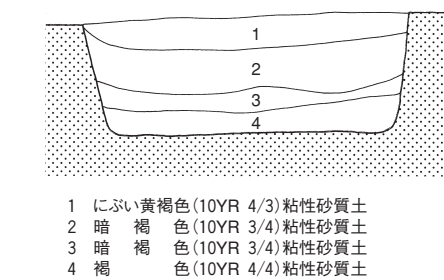
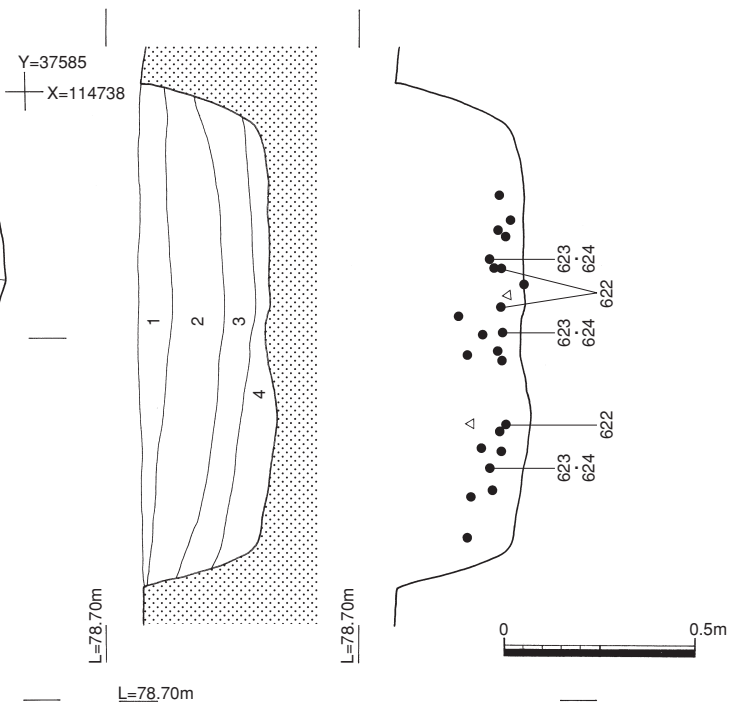
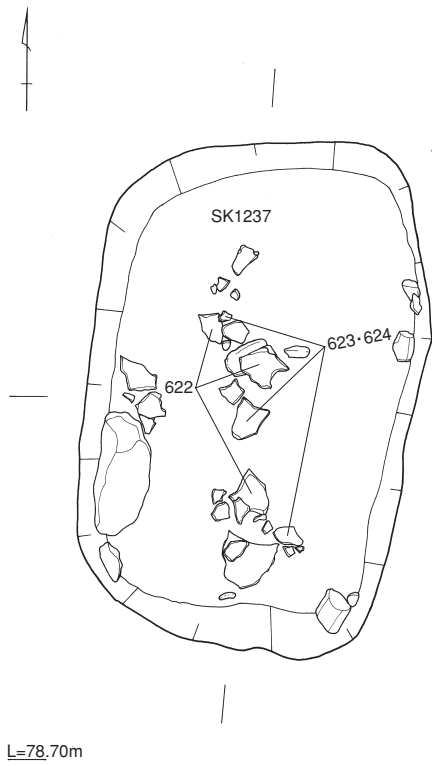
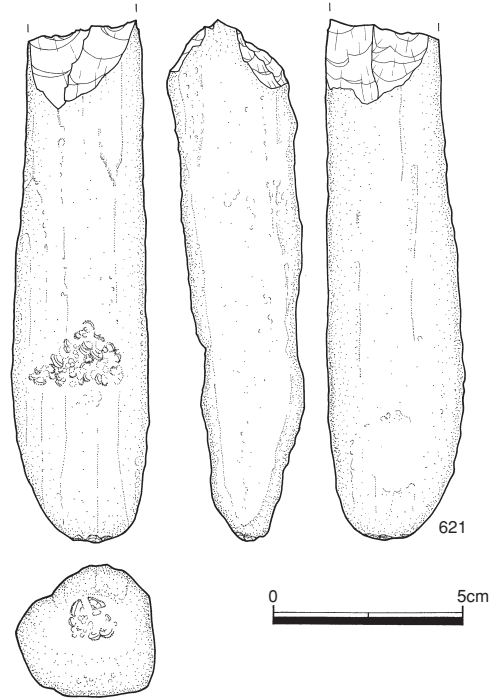
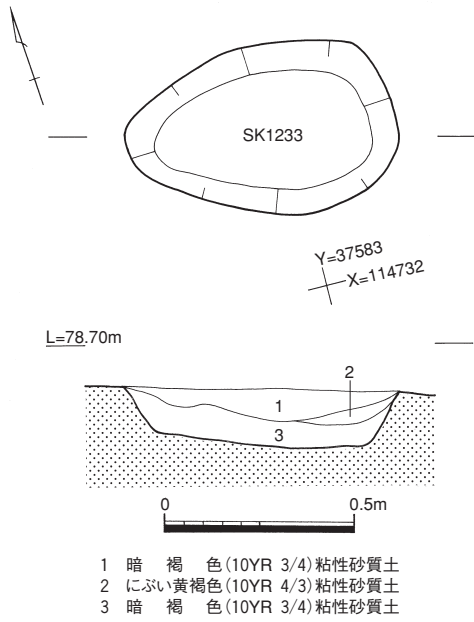


- 1 暗褐色(10YR 3/4)粘性砂質土
- 2 暗褐色(10YR 3/4)粘性砂質土
- 3 にぶい黄褐色(10YR 4/3)粘性砂質土

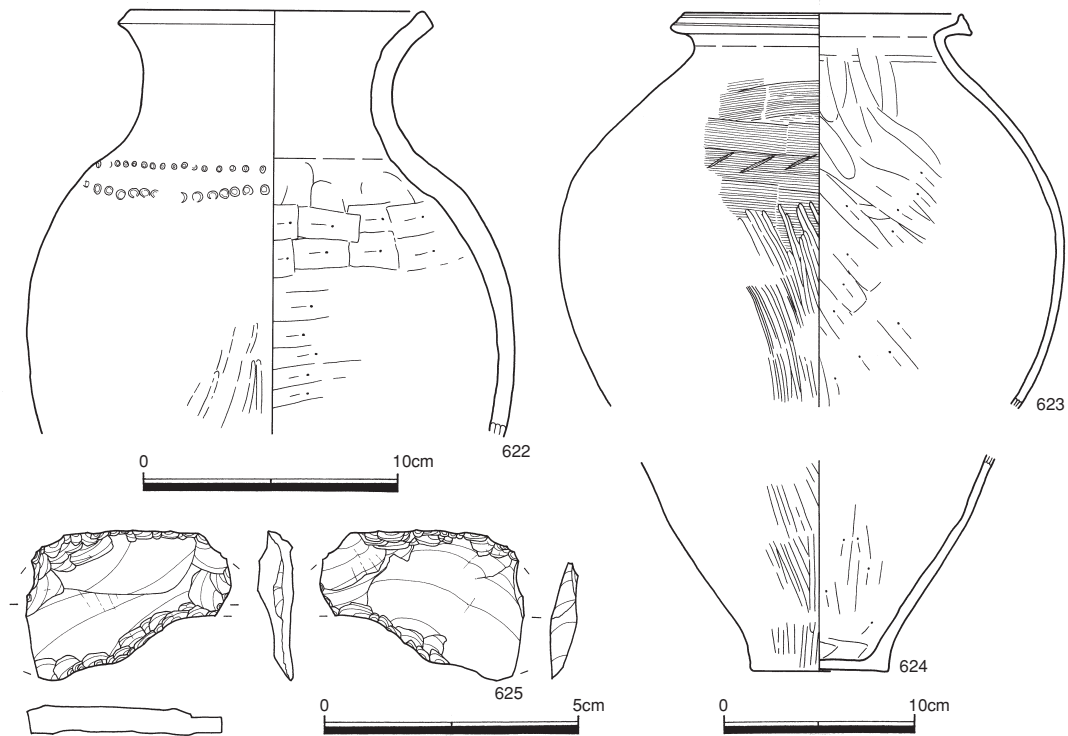


- 1 にぶい黄褐色(10YR 4/3)粘性砂質土
- 2 にぶい黄褐色(10YR 4/3)粘性砂質土
- 3 暗褐色(10YR 3/4)粘性砂質土

第120図 SK遺構図・出土遺物(13)



第121図SK遺構図・出土遺物(14)



第122図 SK1237出土遺物

土坑213号 (SK1213) (第120図)

5-B区 β-II F-16で確認された土坑。平面形態・底面形態ともにやや不整な楕円形、断面形態は逆台形を呈し、長軸0.67m、短軸0.47m、最大深度0.14mを測る。底面は平坦である。覆土は3層に分層できるものの、大きく2層に分けることができる。上層(1層)は暗褐色粘性砂質土で、しまりが弱い。下層(2・3層)はにぶい黄褐色粘性砂質土で、3層が2層と比較してしまりが弱い。

遺物は甕形土器口縁部(620)が1点出土したのみである。出土遺物から、所属時期は弥生時代後期前葉～中葉と考えられる。

土坑214号 (SK1214) (第120図)

5-B区 β-II G-16で確認された土坑。平面形態・底面形態ともにやや不整な長方形、断面形態は逆台形を呈し、長軸1.18m、短軸0.74m、最大深度0.14mを測る。底面は平坦である。覆土は3層に分層できるものの、大きく2層に分けることができる。上層(1・2層)は暗褐色粘性砂質土で、1層は2層と比較してしまりが弱い。下層(3層)はにぶい黄褐色粘性砂質土である。遺物は甕形土器口縁部1点・体部片18点出土したものの、図化できるものはなかった。

土坑215号 (SK1215) (第120図)

5-B区 β-II G・H-16で確認された土坑。平面形態・底面形態ともにやや不整な長方形、断面形態は逆台形を呈し、長軸1.10m、短軸1.00m、最大深度0.28mを測る。覆土は土質および含有物から3層に分層できるものの、大きく2層に分けることができる。上層(1・2層)はにぶい黄褐色を呈し、

1層は粘性が強く暗灰黄色土をブロック状に混入する。2層はしまりがやや弱い。下層（3層）は暗褐色粘性砂質土で、しまりがやや弱い。

出土遺物は認められないが、覆土等から所属時期を弥生時代として捉えた。

土坑233号 (SK1233) (第121図)

5-B区 β-II G-17で確認された土坑。平面形態・底面形態ともにやや不整な楕円形、断面形態は逆台形を呈し、長軸0.73m、短軸0.45m、最大深度0.15mを測る。底面は平坦である。覆土はほぼ暗褐色を呈するものの、土質および含有物から3層に分層できる。1層は3層と比較してしまりが弱い。

遺物は壺形土器底部1点・体部片8点、結晶片岩製敲石1点が出土し、図化できたのは砂質片岩を用いた敲石(621)のみで、表面と下面にそれぞれ一箇所敲打痕が認められる。

土坑237号 (SK1237) (第121・122図)

5-B区 β-II H-17でSP11829・11830を切った状態で確認された土坑。平面形態・底面形態ともにやや不整な長方形、断面形態は逆台形を呈し、長軸1.34m、短軸0.88m、最大深度0.36mを測る。底面はほぼ平坦である。覆土は土質および含有物から4層に分層できるものの、大きく3層に分けることができる。上層(1層)はにぶい黄褐色粘性砂質土で、4層の中でしまりが一番強い。中層(2・3層)は暗褐色粘性砂質土で、3層は2層と比較してしまりが強い。下層(4層)は褐色粘性砂質土で、4層の中で一番粘性が強い。遺物は中・下層、特に3・4層から多く出土している。

遺物は壺形土器1点(622)、甕形土器1点(623・624)、サヌカイト製楔形石器(625)・剥片6点、被熱した砂岩1点が出土した。623・624は同一個体であり、外面体部中位から底部にかけて煤状に炭化物が多量に付着する。また内面でも外面と同じような位置に、炭化物が多量に付着する。これらの出土遺物から、所属時期は弥生時代中期後葉～後期前葉と考えられる。

土坑239号 (SK1239) (第123図)

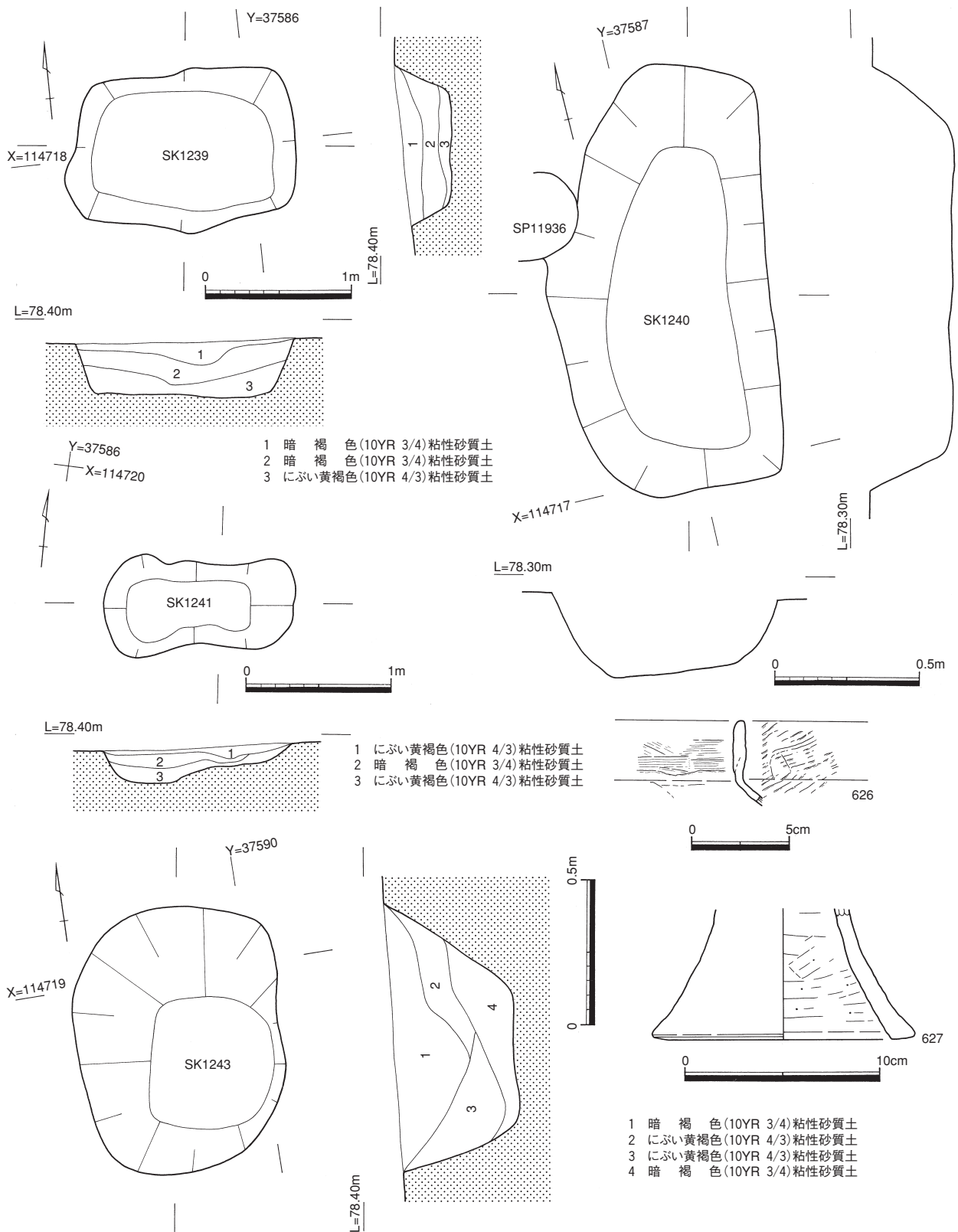
5-B区 β-II D-17・18で確認された土坑。平面形態・底面形態ともにやや不整な長方形、断面形態は逆台形を呈し、長軸1.52m、短軸1.10m、最大深度0.34mを測る。遺構内での底面は、ほぼ平坦である。覆土は土質および含有物から3層に分層でき、1層は暗褐色粘性砂質土でしまりがやや弱い。2層は暗褐色粘性砂質土で1層と比較してしまりが強い。3層はにぶい黄褐色粘性砂質土で、粒子がやや粗い。

遺物は口縁部逆L字状を呈する甕形土器1点、体部片13点が出土した。図化できる遺物はなかったものの、出土遺物から所属時期は弥生時代中期以降と考えられる。

土坑240号 (SK1240) (第123図)

5-B区 β-II D-18でSP11936に切られた状態で確認された土坑。平面形態・底面形態ともにやや不整な長方形、断面形態は逆台形を呈し、長軸1.48m、短軸0.77m、最大深度0.30mを測る。底面はほぼ平坦である。

遺物は直口壺と思われる壺形土器口縁部1点(626)・体部片12点が出土した。出土遺物から、所属時期は弥生時代終末期前半か。



第123図 SK遺構図・出土遺物(15)

土坑241号 (SK1241) (第123図)

5-B区 β-II D-18で確認された土坑。平面形態・底面形態ともにやや不整な長方形、断面形態は不整な舟底形を呈し、長軸1.30m、短軸0.56m、最大深度0.22mを測る。覆土は土質および含有物から3層に分層でき、1層はにぶい黄褐色粘性砂質土でしまりが一番強い。2層は暗褐色粘性砂質土で、しまりが弱い。3層はにぶい黄褐色粘性砂質土で、粒子がやや粗い。

出土遺物は認められないものの、覆土から所属時期を弥生時代として捉えた。

土坑243号 (SK1243) (第123図)

5-B区 β-II D-18・19で確認された土坑。平面形態はやや不整な長方形、底面形態はやや不整な方形、断面形態はやや不整な逆台形を呈し、長軸0.93m、短軸0.70m、最大深度0.42mを測る。底面はほぼ平坦である。覆土は土質および含有物から4層に分層できるものの、大きく3層に分けることができる。上層(1層)は暗褐色粘性砂質土で、しまりが弱い。中層(2・3層)はにぶい黄褐色粘性砂質土で、2層の方がしまりが強い。下層(4層)は暗褐色粘性砂質土である。

遺物は高坏形土器脚部(627)1点・体部片13点が出土した。出土遺物から、所属時期は弥生時代後期以降と考えられる。

土坑244号 (SK1244) (第124図)

5-B区 β-II E・F-18で部分的に現代の攪乱によって切られた状態で確認された土坑。遺構検出時においては3基の土坑の切り合いとして捉えていたが、土層堆積状況からSK1245を切る1基の土坑とした。平面形態・底面形態ともにやや不整な長方形、断面形態は逆台形を呈し、長軸1.69m、短軸1.10m、最大深度0.34mを測る。底面はほぼ平坦である。覆土は土質および含有物から5層に分層できるものの、大きく3層に分けることができる。上層(1層)はにぶい黄褐色粘性砂質土で、しまりが一番強い。中層(2～4層)は2・4層が暗褐色粘性砂質土で、しまりが弱い。下層(5層)は暗褐色粘性砂質土で、粘性がやや強い。

遺物は壺形土器口縁部1点・体部片90点、サヌカイト剥片3点、砂質片岩を使用した打製石庖丁1点、砂岩製砥石1点が出土したものの、図化できるものはなかった。所属時期は弥生時代後期以降と考えられる。

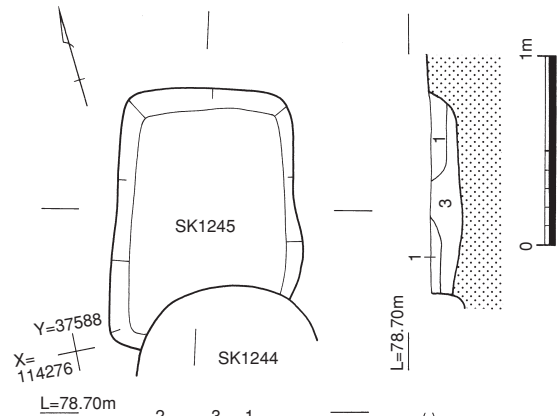
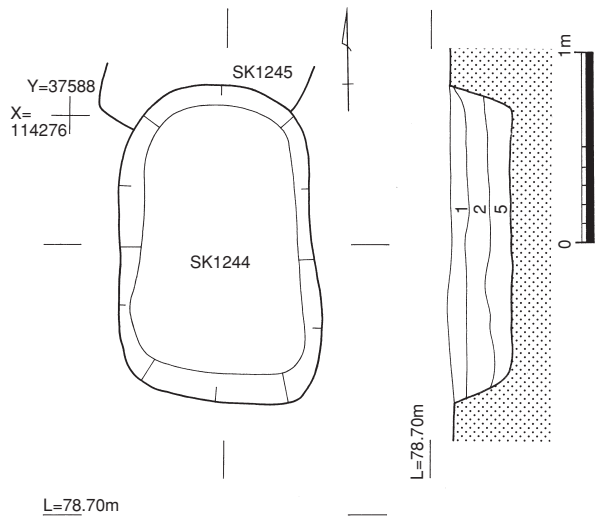
土坑245号 (SK1245) (第124図)

5-B区 β-II F-18でSK1244に切られた状態で確認された土坑。平面形態・底面形態ともに長方形、断面形態は逆台形を呈し、最大長1.08m、短軸0.94m、最大深度0.36mを測る。覆土は暗褐色粘性砂質土で、土質および含有物から3層に分層できる。1・2層は、3層と比較してしまりが弱い。

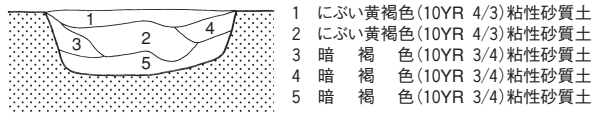
遺物は甕形土器・鉢形土器各1点、体部片68点、サヌカイト製石鏃1点・剥片5点が出土し、図化できたのは先端部が欠損した凹基式石鏃(628)のみである。出土遺物から、所属時期は弥生時代後期以降と考えられる。

土坑246号 (SK1246) (第124図)

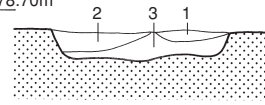
5-B区 β-II F-18で確認された土坑。平面形態・底面形態ともに溝状を呈した不整形、断面形



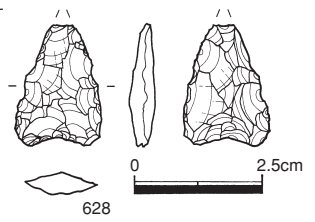
L=78.70m



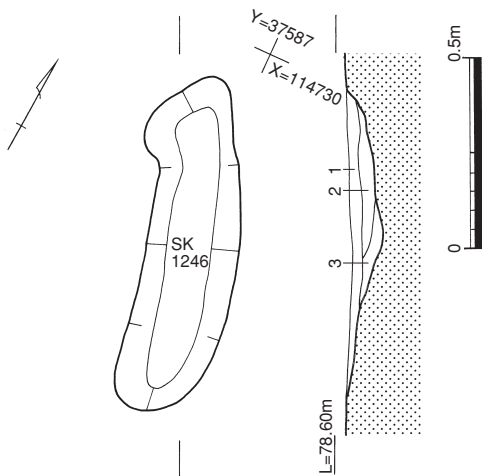
- 1 にぶい黄褐色(10YR 4/3)粘性砂質土
- 2 にぶい黄褐色(10YR 4/3)粘性砂質土
- 3 暗褐色(10YR 3/4)粘性砂質土
- 4 暗褐色(10YR 3/4)粘性砂質土
- 5 暗褐色(10YR 3/4)粘性砂質土



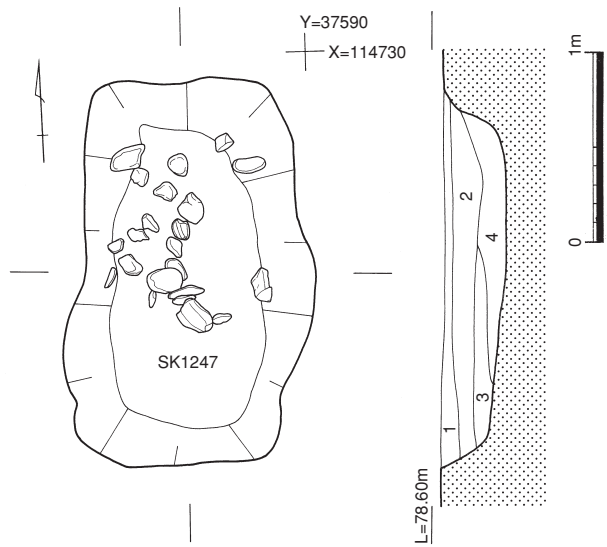
- 1 暗褐色(10YR 3/4)粘性砂質土
- 2 暗褐色(10YR 3/4)粘性砂質土
- 3 暗褐色(10YR 3/4)粘性砂質土



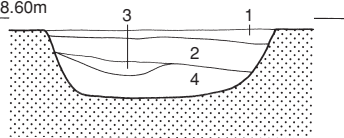
628



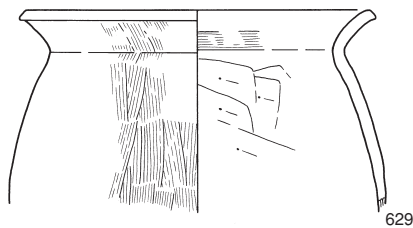
- 1 にぶい黄褐色(10YR 4/3)粘性砂質土
- 2 にぶい黄褐色(10YR 4/3)粘性砂質土
- 3 暗褐色(10YR 3/4)粘性砂質土



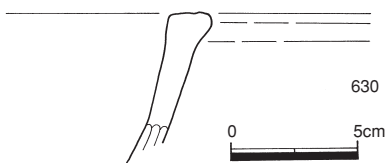
L=78.60m



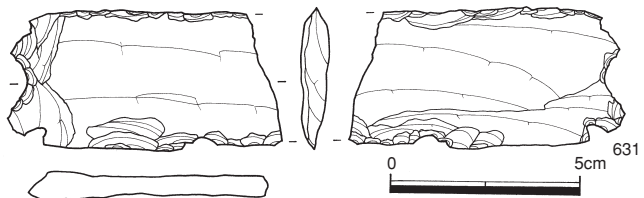
- 1 暗褐色(10YR 3/4)粘性砂質土
- 2 暗褐色(10YR 3/4)粘性砂質土
- 3 にぶい黄褐色(10YR 4/3)粘性砂質土
- 4 暗褐色(10YR 3/4)粘性砂質土



629

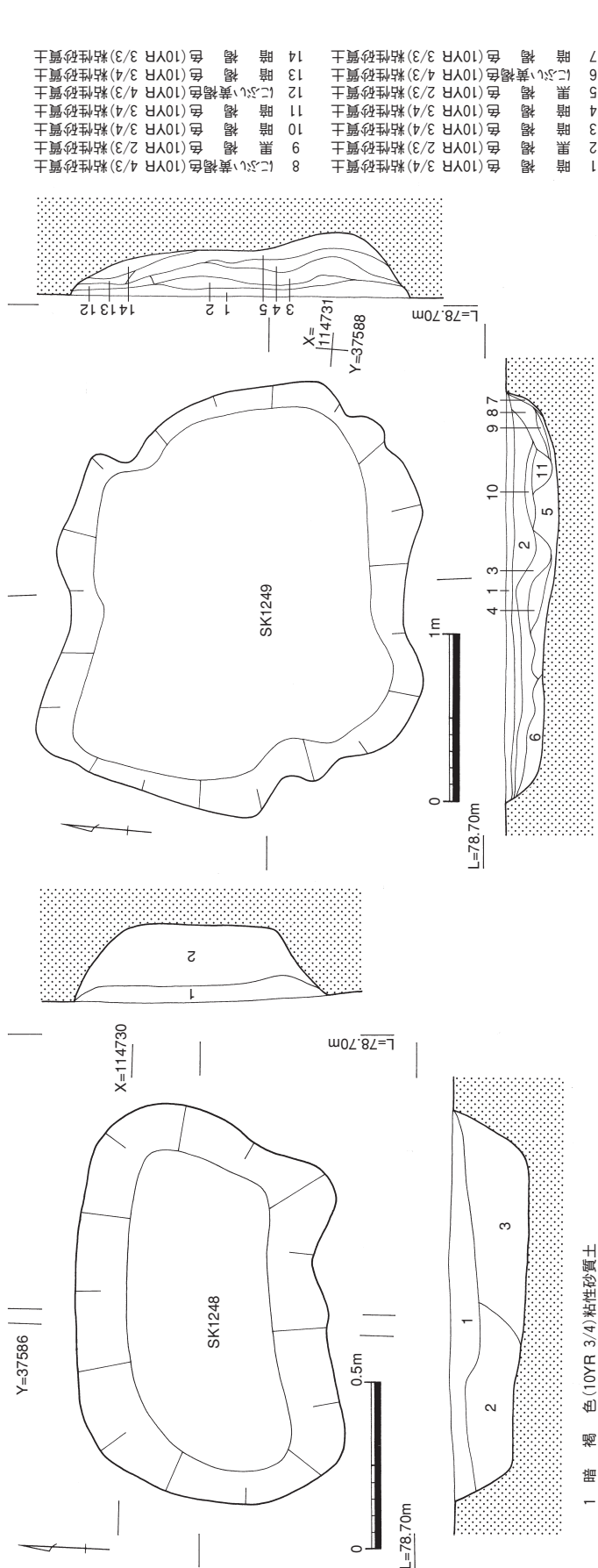


630

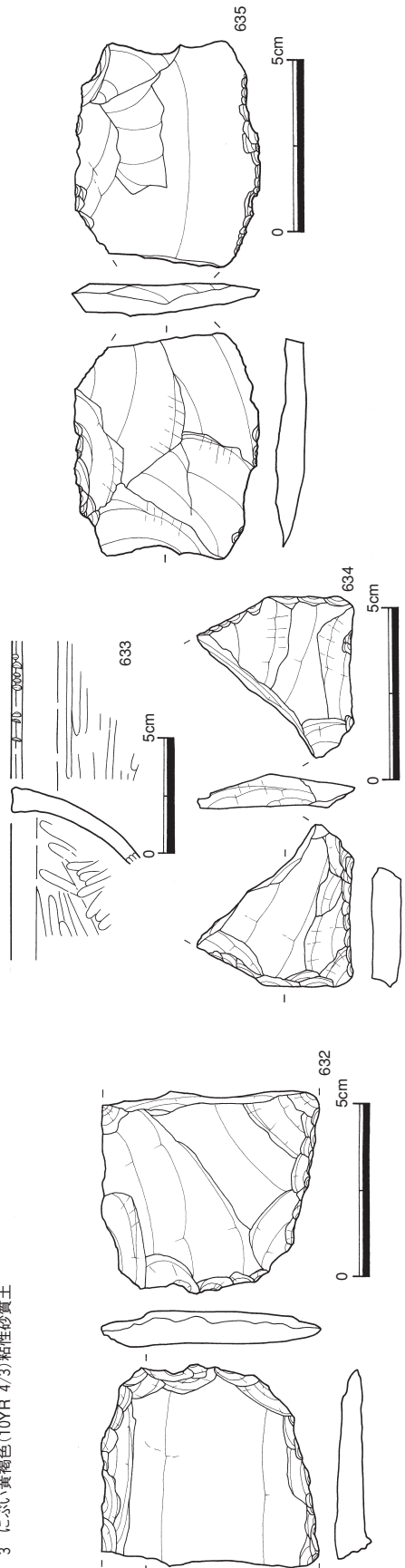


631

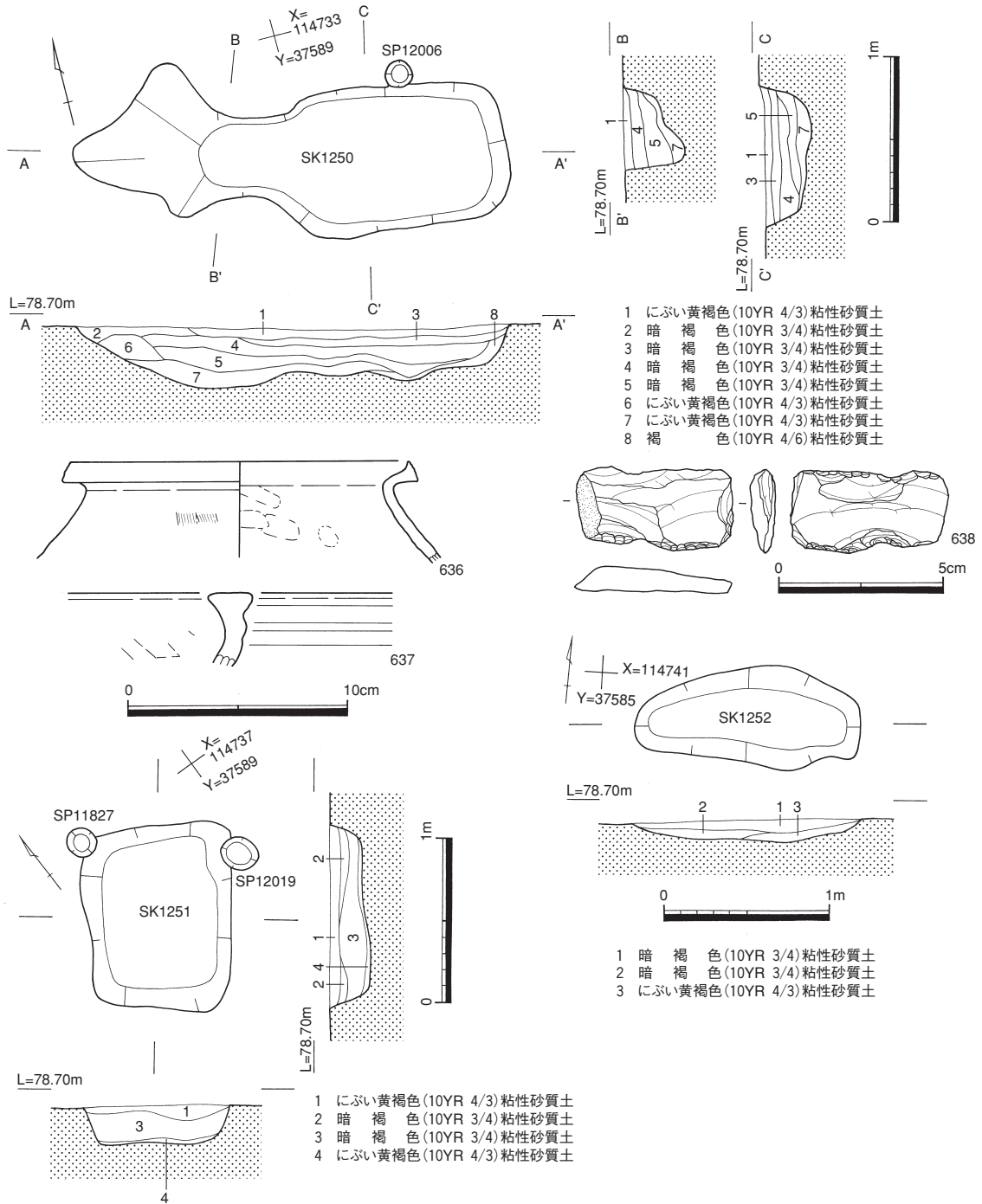
第124図 SK遺構図・出土遺物(16)



- 1 暗褐色 (10YR 3/4) 粘性砂質土
- 2 暗褐色 (10YR 3/4) 粘性砂質土
- 3 灰褐色 (10YR 4/3) 粘性砂質土



第125図 SK遺構図・出土遺物(17)



第126図 SK遺構図・出土遺物(18)

態は不整な舟底形を呈し、長軸1.64m、短軸0.48m、最大深度0.18mを測る。覆土は土色および含有物から3層に分層でき、1・2層はにぶい黄褐色粘性砂質土で、1層がしまりが一番強い。3層は暗褐色粘性砂質土である。

遺物は甕形土器2点、鉢形土器1点、体部片40点、サヌカイト剥片1点が出土した。そのうち図化できたのは甕(629)と鉢(630)のみである。出土遺物から、所属時期は弥生時代後期後葉と考えられる。

土坑247号 (SK1247) (第124図)

5-B区 β-II F-18で確認された土坑。平面形態・底面形態ともにやや不整な長方形、断面形態は逆台形を呈し、長軸2.02m、短軸1.22m、最大深度0.36mを測る。底面はほぼ平坦である。覆土は暗褐色粘性砂質土が主体であり、土質および含有物から4層に分層できるものの大きく3層に分けることができる。上層(1層)は、4層の中でしまりが一番弱い。中層(2層)は暗褐色粘性砂質土で、下層(3・4層)のうち3層はにぶい黄褐色粘性砂質土で、粘性がやや強い。直径10~20cm大の砂岩・結晶片岩約20点ほど出土しているが、出土地点は不明である

遺物は甕形土器1点・体部片63点、サヌカイト剥片4点、打製石庖丁1点が出土した。そのうち図化できたのは、抉を持ち石材に砂質片岩を用いた石庖丁(631)のみである。出土遺物から、所属時期は弥生時代後期と考えられる。

土坑248号 (SK1248) (第125図)

5-B区 β-II F-18で確認された土坑。平面形態・底面形態ともにやや不整な長方形、断面形態は逆台形を呈し、長軸1.18m、短軸0.76m、最大深度0.24mを測る。底面はほぼ平坦である。覆土は暗褐色粘性砂質土が主で土質および含有物から3層に分層できるものの、大きく2層に分けることができる。上層(1層)はしまりが弱い。下層(2・3層)のうち2層はしまりがやや強く、3層はにぶい黄褐色粘性砂質土でブロック土の可能性はある。

遺物は壺形土器底部2点、甕形土器口縁部・底部各1点、体部片30点、打製石庖丁1点が出土した。そのうち図化できたのは石材に砂質片岩を用いた石庖丁(632)のみである。出土遺物から、所属時期は弥生時代後期と考えられる。

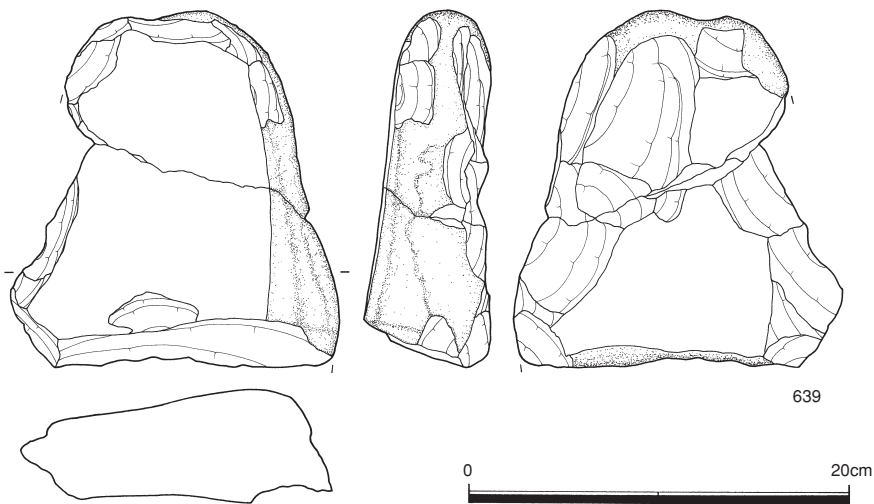
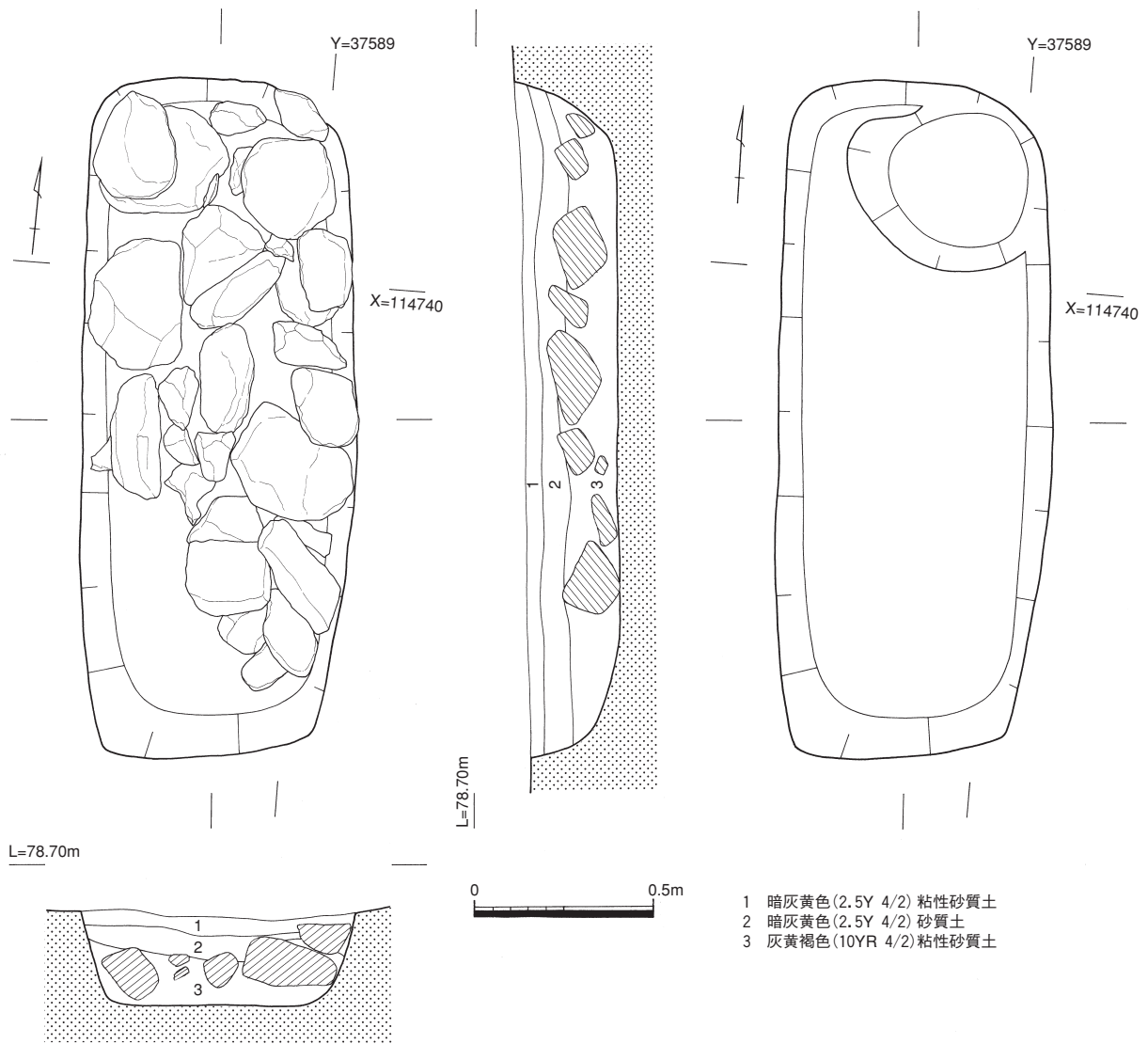
土坑249号 (SK1249) (第125図)

5-B区 β-II G-18でSP12002・12003を切った状態で確認された土坑。平面形態・底面形態ともに不整形、断面形態はやや不整な逆台形を呈し、長軸2.50m、短軸2.01m、最大深度0.40mを測る。覆土は土質および含有物から14層に分層できるものの、大きく5層に分けることができる。1層(1層)は暗褐色粘性砂質土で、しまりが弱い。2層(2層)は黒褐色粘性砂質土で、しまりもよく炭化物を若干含む。3層(3・4・10・11層)は暗褐色粘性砂質土で、4・11層がやや粒子が粗い。4層(5・9層)は黒褐色粘性砂質土で炭化物を含み、鉄分の沈着が若干認められる。5層(13・14層)は暗褐色粘性砂質土で、土器片を若干含む。6・7・8・12層はにぶい黄褐色粘性砂質土で、3層ないしは4層のブロック土の可能性が考えられる。

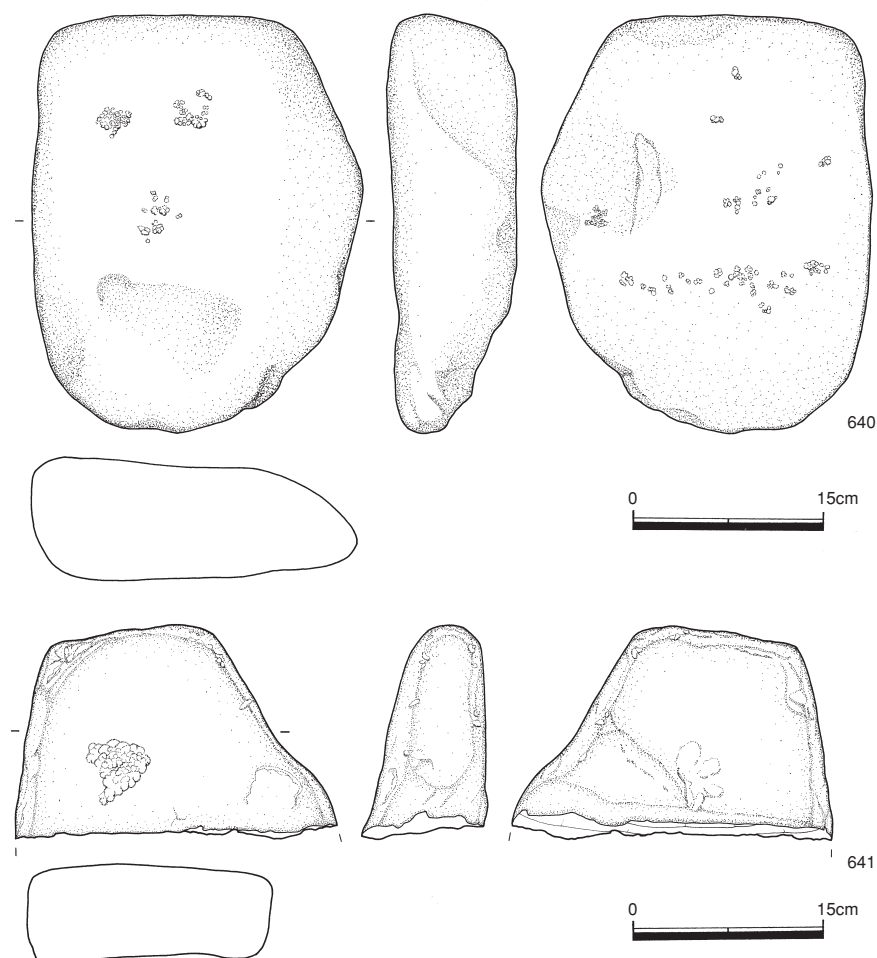
遺物は広口壺形土器1点、甕形土器口縁部3点、体部片50点、高坏形土器2点、結晶片岩製打製石庖丁・削器各1点、被熱した砂岩1点が出土した。そのうち図化できたのは高坏(633)、砂質片岩を用いた石庖丁(634)・削器(635)である。出土遺物から、所属時期は弥生時代中期中葉~後葉と考えられる。

土坑250号 (SK1250) (第126図)

5-B区 β-II G-18でSP12006に切られた状態で確認された土坑。平面形態・底面形態ともに不整形、断面形態は不整な逆台形を呈し、長軸2.66m、最大幅0.92m、最大深度0.36mを測る。平面形態



第127図 SK1253遺構図・出土遺物



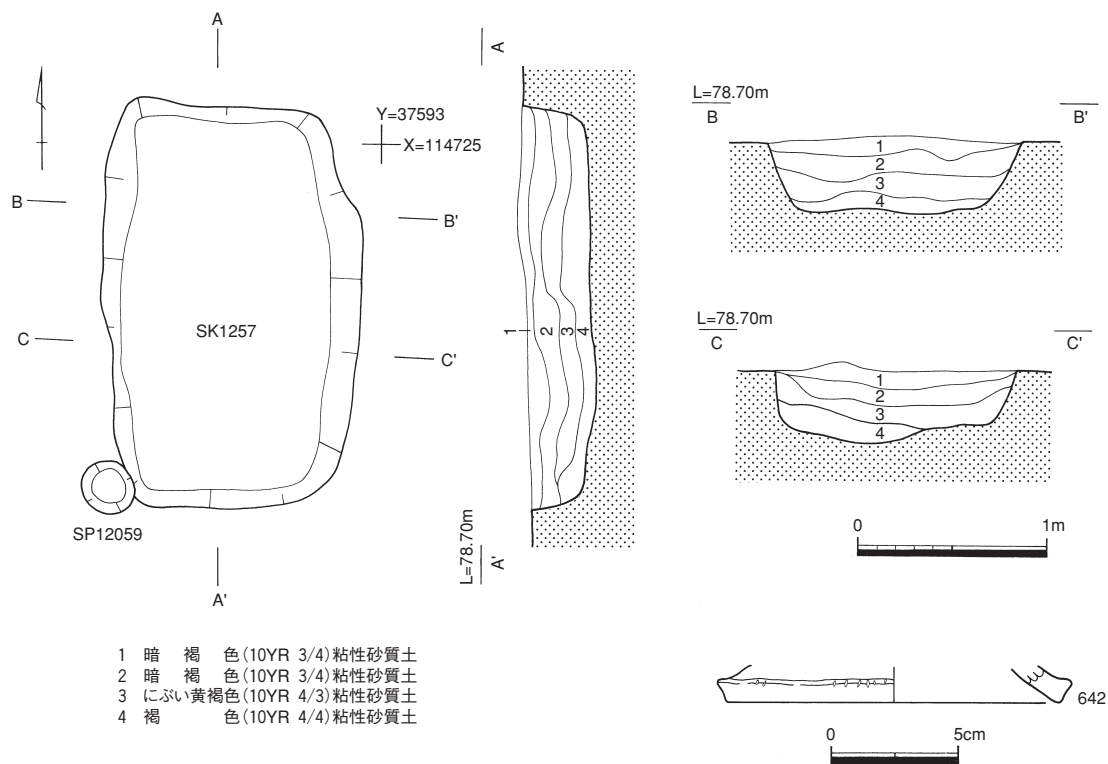
第128図 SK1253出土遺物

から複数の遺構の切り合いを想定したが、土層堆積状況からそれを確認することはできなかった。覆土は土色および含有物から8層に分層できるものの、大きく3層にわけることができる。上層(1・2層)は、1層がにぶい黄褐色粘性砂質土で8層の中でしまりが一番強い。2層は暗褐色粘性砂質土でしまりが1層と比較して弱い。中層(3～6層)は暗褐色粘性砂質土で、6層のみがにぶい黄褐色粘性砂質土である。堆積状況から、6層はブロック土の可能性が考えられる。3層はしまりが弱く、5層は粘性がやや強い。下層(7・8層)は7層がにぶい黄褐色粘性砂質土、8層が褐色粘性砂質土で、7層は粒子が粗く、8層はしまりが弱い。

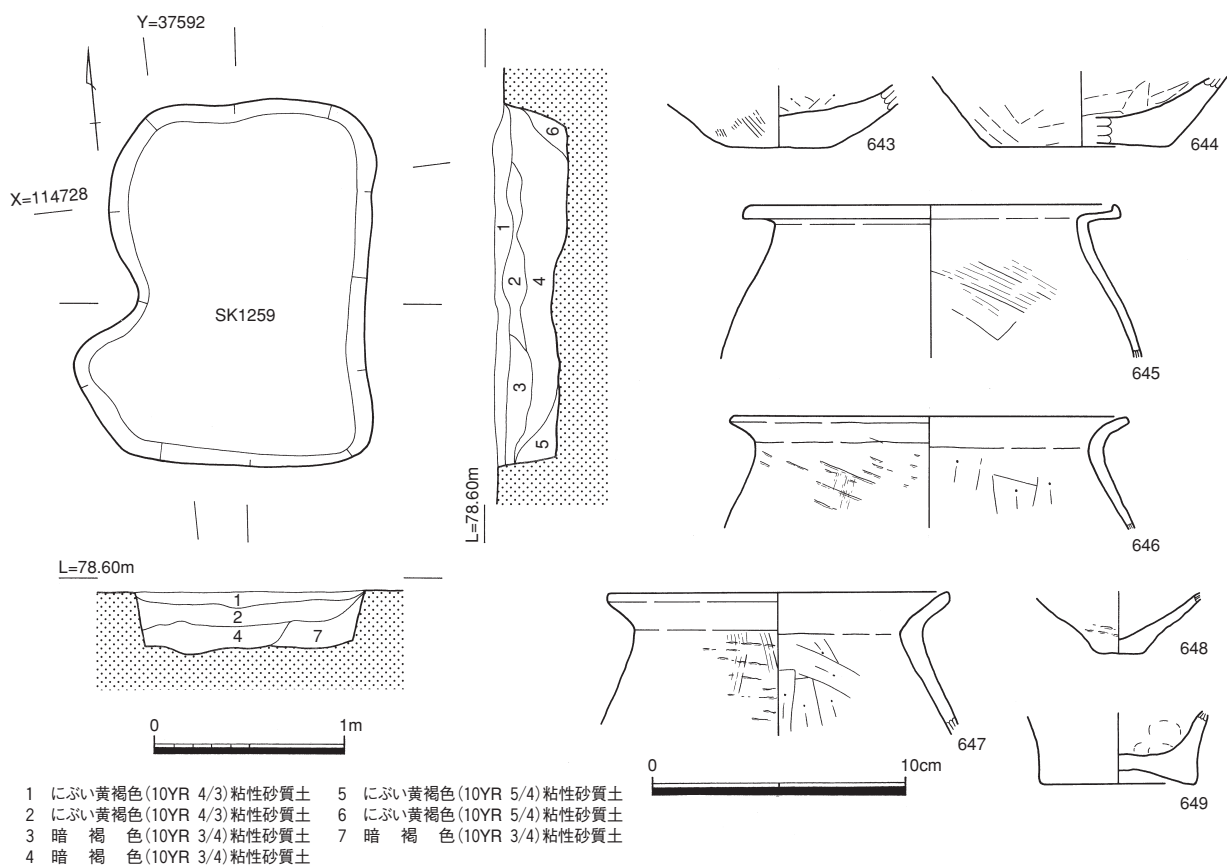
遺物は壺形土器1点、甕形土器口縁部3点・底部1点、体部片73点、高坏形土器1点、鉢形土器2点、サヌカイト剥片2点、打製石庖丁1点が出土し、図化できたものは甕(636)と高坏(637)、緑泥片岩を使用した石庖丁(638)の3点である。出土遺物から、所属時期は弥生時代中期後葉～後期前葉と考えられる。

土坑251号 (SK1251) (第126図)

5-B区 β-II H-18でSP11827・12019に切られた状態で確認された土坑。平面形態・底面形態と



- 1 暗 褐 色 (10YR 3/4) 粘性砂質土
- 2 暗 褐 色 (10YR 3/4) 粘性砂質土
- 3 にぶい黄褐色 (10YR 4/3) 粘性砂質土
- 4 褐 色 (10YR 4/4) 粘性砂質土



- 1 にぶい黄褐色 (10YR 4/3) 粘性砂質土
- 2 にぶい黄褐色 (10YR 4/3) 粘性砂質土
- 3 暗 褐 色 (10YR 3/4) 粘性砂質土
- 4 暗 褐 色 (10YR 3/4) 粘性砂質土
- 5 にぶい黄褐色 (10YR 5/4) 粘性砂質土
- 6 にぶい黄褐色 (10YR 5/4) 粘性砂質土
- 7 暗 褐 色 (10YR 3/4) 粘性砂質土

第129図 SK遺構図・出土遺物(19)

もに長方形、断面形態は逆台形を呈し、長軸1.12m、短軸0.88m、最大深度0.44mを測る。底面は平坦である。覆土は土質および含有物から4層に分層できるものの、大きく3層に分けることができる。上層（1層）はにぶい黄褐色粘性砂質土で、しまりが強い。中層（2・3層）は暗褐色粘性砂質土で、2層と比較して3層の方がしまりが強い。下層（4層）はにぶい黄褐色粘性砂質土で、粒子がやや粗い。

遺物は口縁部端面に凹線を巡らす壺形土器2点、体部片58点、甕形土器底部1点、サヌカイト剥片1点、砂岩製砥石1点が出土したものの、図化できたものはなかった。出土遺物から、所属時期は弥生時代後期と考えられる。

土坑252号 (SK1252) (第126図)

5-B区 β-II K-19でSP12026を切った状態で確認された土坑。平面形態・底面形態ともにやや不整な楕円形、断面形態は緩やかな舟底形を呈し、長軸1.38m、短軸0.58m、最大深度0.14mを測る。覆土は、土質および含有物から3層に分層できる。1・2層は暗褐色粘性砂質土で、1層はしまりがやや弱い。3層は、にぶい黄褐色粘性砂質土である。

遺構内での出土遺物は確認できず、またSP12026から弥生土器片1点が出土しているものの、覆土から弥生時代の遺構と判断した。

土坑253号 (SK1253) (第127・128図)

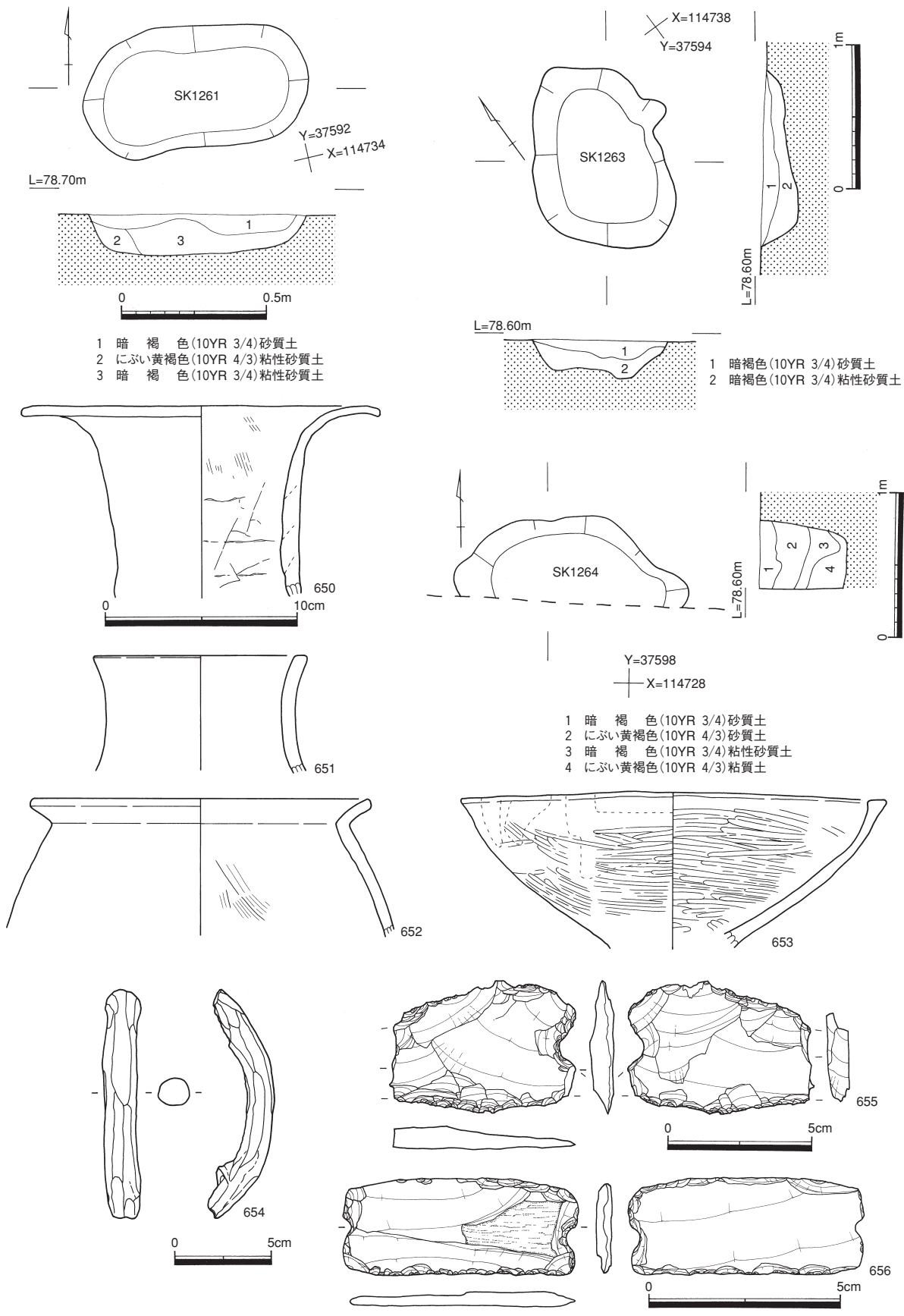
5-B区 β-II J-10・11で確認された土坑。平面形態・底面形態ともに長方形、断面形態は逆台形を呈し、長軸1.91m、短軸0.77m、最大深度0.27mを測る。底面は平坦である。覆土は土質および含有物から3層に分層できるものの、大きく2層に分けることができる。上層（1・2層）は暗灰黄色を呈し、1層は粘性砂質土、2層は粘質土である。双方ともにマンガン粒・鉄分の沈着が認められる。下層（3層）は灰黄褐色粘性砂質土で、粒子が細かく直径10~40cm前後の砂岩および結晶片岩を含む。石の並びに規則性は認められず、また完掘後、土坑の底面に直径50cm前後、深度15cm前後を測る柱穴を確認した。柱穴の並びから、SA1011に伴うものと考えられる。

遺物は須恵質土器こね鉢1点、高坏形土器1点、砂岩製および結晶片岩製の台石各2点(640・641)、砂岩製磨石1点(639)が出土した。弥生時代の遺物が出土しているものの、所属時期は中世の可能性が高い。

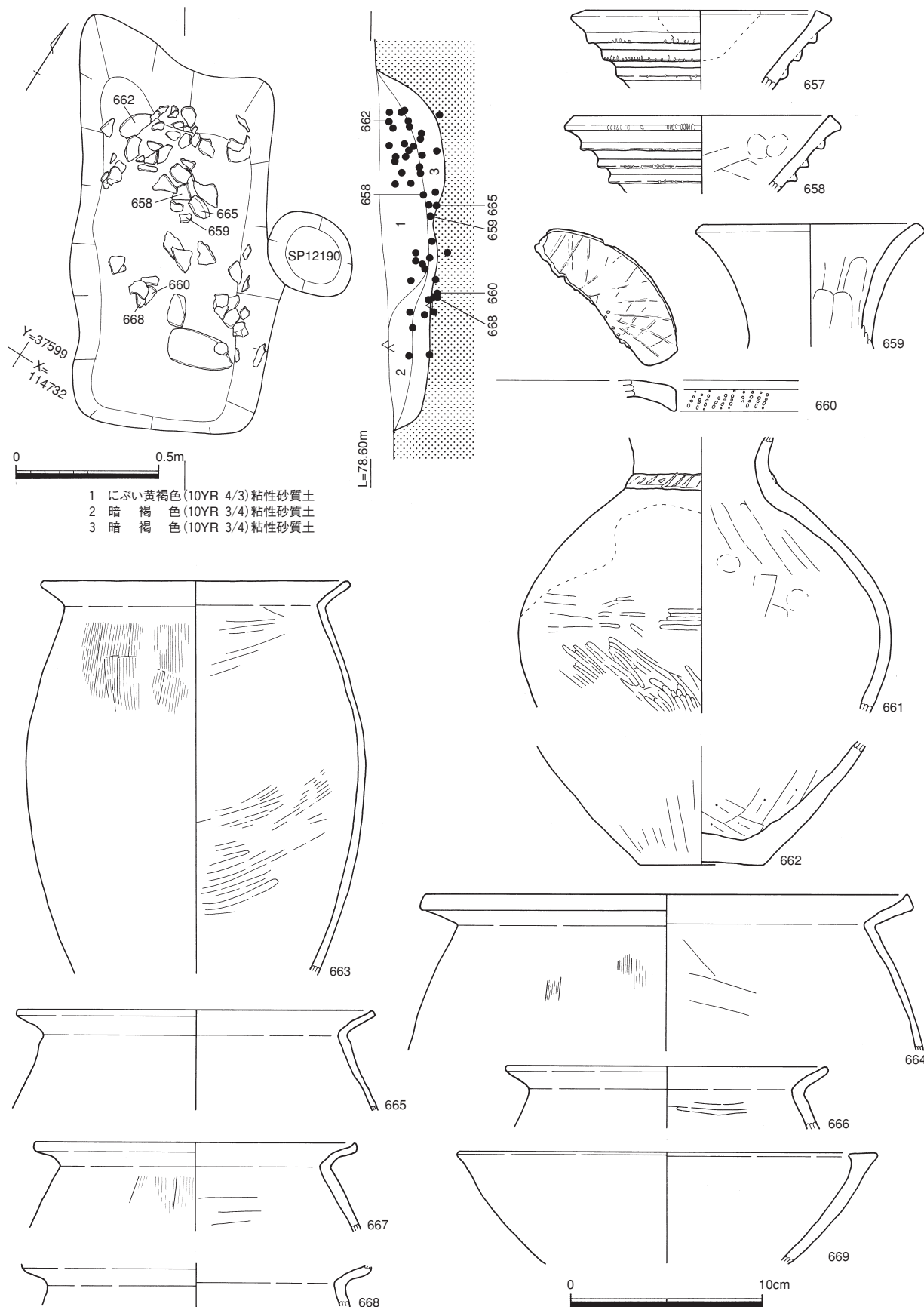
土坑257号 (SK1257) (第129図)

5-B区 β-II E-19で部分的に攪乱とSP12059に切られた状態で確認された土坑。遺構検出時は土坑2基の切り合い関係として検出していたものの、土層堆積状況から長方形を呈した1基の土坑として捉え直した。平面形態・底面形態ともにやや不整な長方形、断面形態は逆台形を呈し、長軸2.14m、短軸1.28m、最大深度0.40mを測る。底面はやや平坦である。覆土は土質および含有物から4層に分層できるものの、大きく3層に分けることができる。上層（1・2層）は暗褐色粘性砂質土で、1層はしまりが弱い。中層（3層）はにぶい黄褐色粘性砂質土でやや粒子が粗く、下層（4層）は褐色粘性砂質土で、4層の中で粒子が一番粗い。

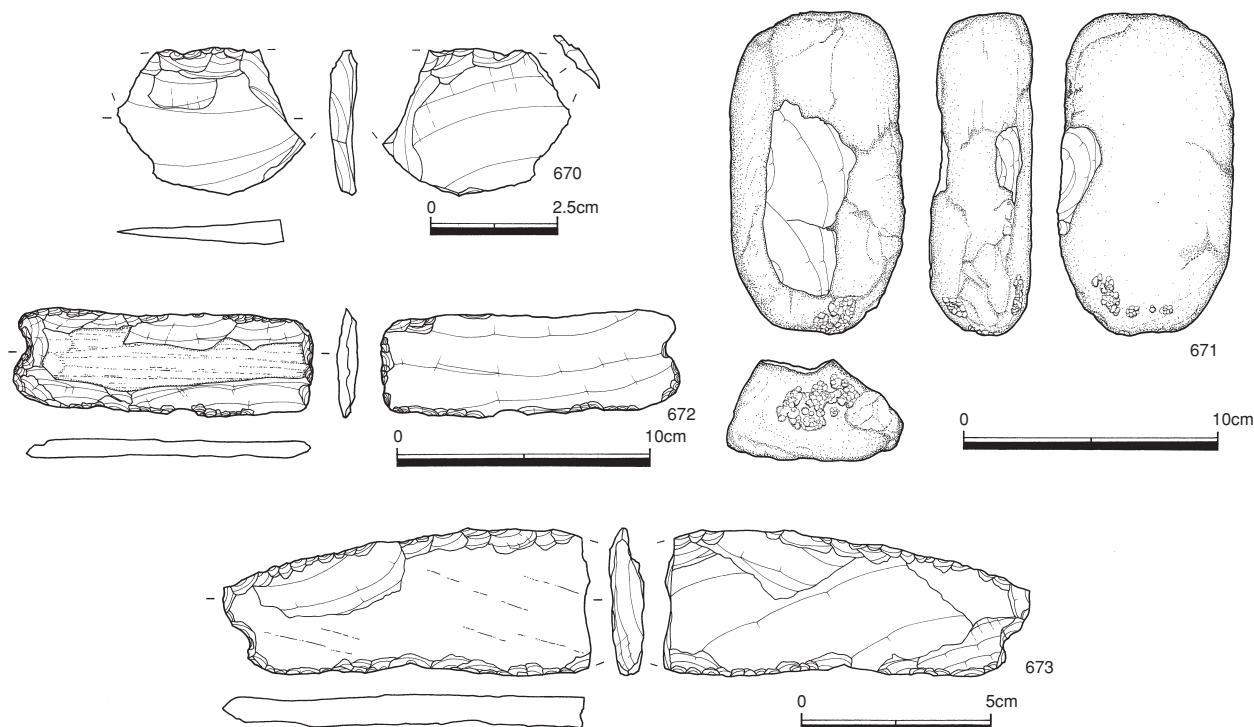
遺物は甕形土器口縁部1点、体部片30点、高坏形土器脚部1点が出土し、そのうち図化できたのは高坏脚部(642)のみである。出土遺物から、所属時期は弥生時代中期中葉以降と考えられる。



第130図 SK遺構図・出土遺物(20)



第131図 SK1265遺構図・出土遺物



第132図 SK1265出土遺物

土坑259号 (SK1259) (第129図)

5-B区 β-II F-19でSD1011を切った状態で確認された土坑。平面形態・底面形態ともにやや不整な長方形、断面形態は逆台形を呈し、長軸1.93m、短軸1.25m、最大深度0.42mを測る。底面はほぼ平坦である。覆土は土質および含有物から7層に分層できるものの、大きく3層に分けることができる。上層(1~3層)は1・2層がにぶい黄褐色粘性砂質土、3層が暗褐色粘性砂質土で、1層は2層と比較してしまりが強い。3層はしまりがほとんどない。中層(4・7層)は暗褐色粘性砂質土で、7層がしまり弱い。下層(5・6層)はにぶい黄褐色粘性砂質土で、他層と比較して砂質が強い。

遺物は口縁部端面に凹線文や円形浮文が施された壺形土器口縁部4点・底部6点、甕形土器口縁部6点・底部10点、鉢形土器1点、体部片103点、サヌカイト剥片2点が出土し、そのうち図化できたものは壺底部(643・644)、甕口縁部(645~647)・底部(649)、鉢(648)である。甕のうち647は体部内面に煤状の炭化物が、また648でも体部外面に炭化物が多量に付着する。本土坑から二時期の遺物が出土しており、遺構の切り合い関係から所属時期は弥生時代後期中葉と考えられる。

土坑261号 (SK1261) (第130図)

5-B区 β-II G-19で確認された土坑。平面形態・底面形態ともにやや不整な楕円形、断面形態は舟底形を呈し、長軸0.77m、短軸0.42m、最大深度0.15mを測る。覆土はほぼ暗褐色を呈し、土質および含有物から3層に分層できる。2層はにぶい黄褐色粘性砂質土で、しまりが弱い。1層は3層と比較して、ややしまりが弱い。

遺物は壺形土器1点・体部片22点、混入品と考えられる土師質土器羽釜脚部1点が出土した。そのうち図化できたのは、内面に粘土紐輪積み痕跡が明瞭に残る広口壺(650)のみである。出土遺物から、

所属時期は弥生時代終末期か。

土坑263号 (SK1263) (第130図)

5-B区 β-II H-19で確認された土坑。平面形態・底面形態ともに不整な楕円形、断面形態はやや不整な逆台形を呈し、長軸1.24m、短軸0.92m、最大深度0.26mを測る。平面形態から、遺構検出時に確認できなかったものの柱穴1基と切り合い関係にあったものと推定できる。覆土は暗褐色を呈し、土質および含有物から2層に分層できる。1層は2層と比較して、しまりが弱い。

出土遺物は認められなかったものの、覆土から弥生時代の遺構と捉えた。

土坑264号 (SK1264) (第130図)

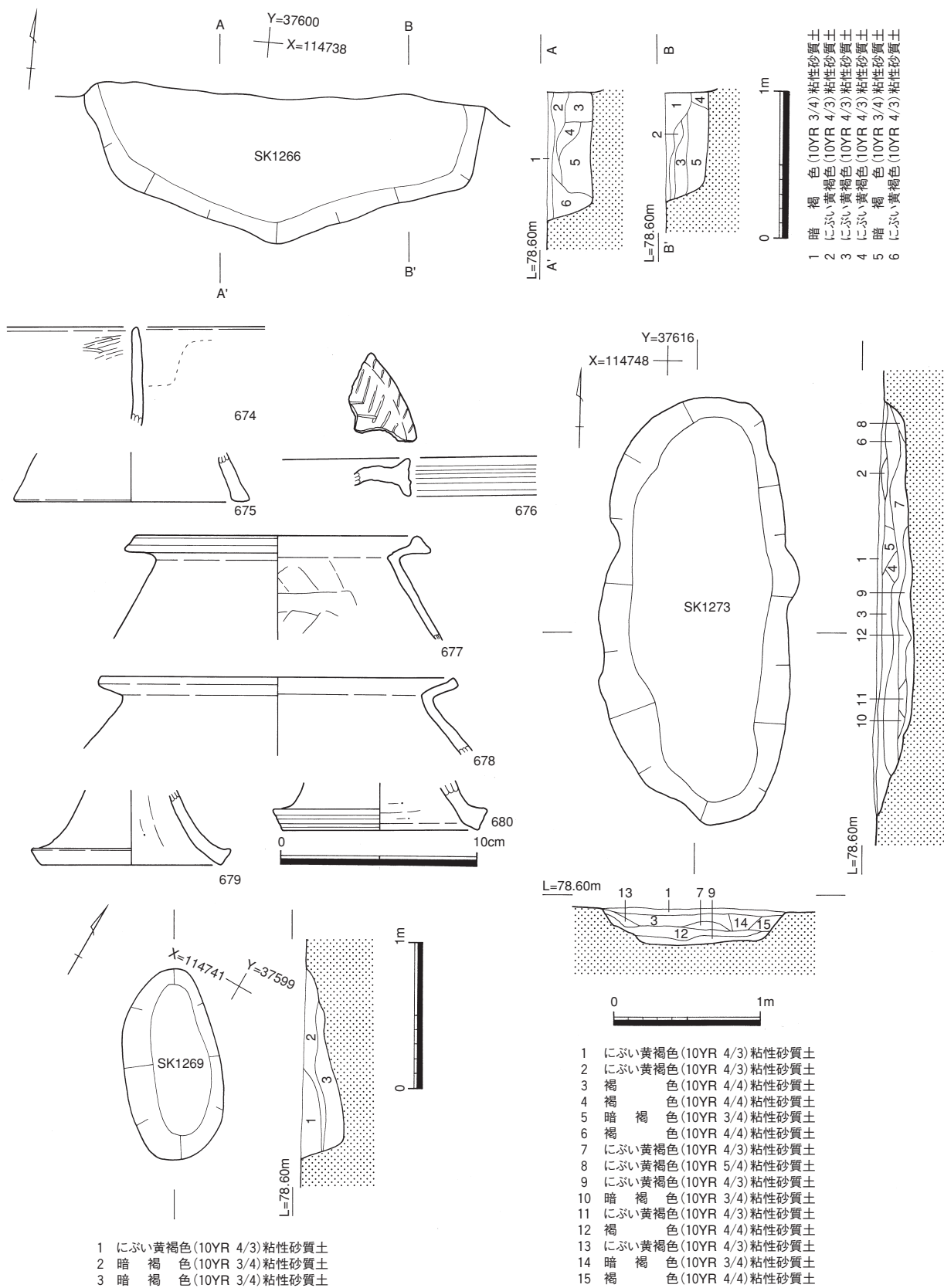
5-B区 β-II F-20で確認された土坑。遺構の南半分が調査対象区域外にあり全容は不明だが、平面形態・底面形態ともにやや不整な楕円形、断面形態は逆台形を呈するものと思われる。長軸1.64m、最大幅0.62m、最大深度0.55mを測る。底面は平坦と思われる。覆土は土質および含有物から4層に分層できるものの、大きく2層に分けることができる。上層(1層)は暗褐色粘性砂質土で、下層(2～4層)はにぶい黄褐色を呈する。2・3層は粘性砂質土で2層はしまりがやや弱く、3層は砂質がやや強い。4層は粘質土で、しまりも強い。

遺物は壺形土器口縁部(広口壺・長頸壺)2点・底部1点、甕形土器口縁部1点、体部片25点、高坏形土器1点、把手1点、サヌカイト剥片2点、打製石庖丁2点が出土した。図化できたものは、壺(651)、甕(652)、高坏(653)、把手(654)、石庖丁(655・656)のみである。甕(652)の胎土色は褐色を呈し、また角閃石・金雲母を含むことから讃岐からの搬入品と考えられる。図化できた石庖丁のうち655はサヌカイト製で、欠損しているものの刃部形態が凸刃、複刃である。656は砂質片岩を用い、一部自然面が残る。遺構の所属時期は、混入物があるものの弥生時代後期中葉と考えられる。

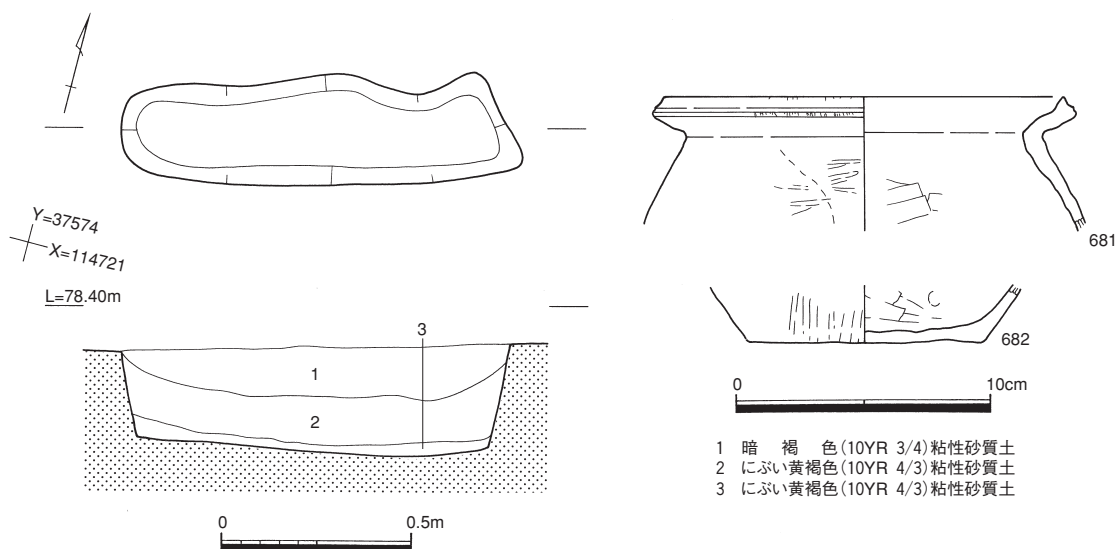
土坑265号 (SK1265) (第131・132図)

5-B区 β-II G-20でSP12190に切られた状態で確認された土坑。平面形態・底面形態ともに不整な長方形、断面形態は舟底形を呈し、長軸1.29m、短軸0.68m、最大深度0.23mを測る。覆土はほぼ暗褐色を呈し、土質および含有物から3層に分層できるものの大きく2層に分けることができる。上層(1・2層)のうち1層は、にぶい黄褐色土を多量に混入する。下層(3層)は上層と比較してしまりが強い。出土遺物は、1・3層に多く認められる。

遺物は壺形土器口縁部11点・底部2点、甕形土器口縁部9点・底部4点、高坏形土器・鉢形土器各1点、体部片438点、サヌカイト製楔形石器1点・剥片2点、打製石庖丁2点、砂岩製敲石1点が出土した。そのうち図化できたものは壺(657～662)、甕(663～666)、高坏(669)、楔形石器(670)、敲石(671)、石庖丁(672・673)である。壺は細頸広口壺(657・658)や口縁部内面に斜格子文を施す広口壺(660)があり、657は金雲母を含む胎土から讃岐からの搬入品と考えられる。甕のうち、667は外面口縁部から頸部にかけて多量の炭化物を付着し、内面でも煤状の炭化物の付着が若干認められる。663・664においても同じような炭化物の付着が認められる。また663は、器表面の状態から二次被熱の可能性はある。図化できた石器のうち、671は砂岩を用い裏面と下側面の二箇所敲打痕が認められる。石材は、672・673ともに砂質片岩を用いる。出土遺物から、遺構の所属時期は弥生時代中期中葉と考えられる。



第133図SK遺構図・出土遺物(21)



第134図 SK1274遺構図・出土遺物

土坑266号 (SK1266) (第133図)

5-B区 β-II・III H-20・1で遺構の約半分をSD1013に切られた状態で確認された土坑。また本土坑はSK1271・SP12280と切り合い関係にあり、この二つの遺構を切った状態で検出されている。平面形態・底面形態ともに不整な楕円形、断面形態は逆台形を呈するものと推定できる。最大長2.74m、最大幅1.00m、最大深度0.30mを測る。底面は平坦と思われる。覆土は土質および含有物から6層に分層できるものの、大きく3層に分けることもできる。上層(1層)はしまりが弱い。中層(2~4層)はにぶい黄褐色を呈し、2層は灰黄褐色土をブロック状に混入する。4層はしまりが弱い。下層(5・6層)のうち、5層は暗褐色粘性砂質土でしまりがやや強い。

遺物は壺形土器6点、甕形土器5点、高坏形土器3点、体部片96点、サヌカイト製石鏃2点・石錐1点・剥片14点が出土した。そのうち図化できたのは、直口壺(674)・広口壺(676)、甕(677・678)、高坏脚部(675・679・680)である。出土遺物は弥生時代中期中葉~後期前葉に属し、主体は中期後葉か。

土坑269号 (SK1269) (第133図)

5-B区 β-II H・I-20でSP12211を切った状態で確認された土坑。平面形態・底面形態ともにやや不整な楕円形、断面形態は不整形を呈し、長軸1.32m、短軸0.66m、最大深度0.29mを測る。覆土は土質および含有物から3層に分層できるものの、大きく2層に分けることができる。上層(1層)はにぶい黄褐色粘性砂質土、下層(2・3層)は暗褐色粘性砂質土を呈する。

遺物は甕形土器口縁部・体部片が各1点出土したが、図化できるものはなかった。

土坑273号 (SK1273) (第133図)

5-B区 β-III J-4で確認された土坑。平面形態・底面形態ともに不整な楕円形、断面形態はやや不整な舟底形を呈し、長軸2.90m、短軸1.29m、最大深度0.26mを測る。覆土は土質および含有物から16層に分層できるものの、大きく3層に分けることができる。上層(1層)はにぶい黄褐色粘性砂質

土で、しまりが強い。中層（2～12・14～16層）は概ね褐色を呈し、互層あるいはブロックでにぶい黄褐色土を含む。下層（13層）はにぶい黄褐色粘性砂質土で、粘性が強くしまりがやや弱い。

出土遺物は確認できなかったものの、覆土からこの遺構の所属時期を弥生時代として捉えた。

土坑274号 (SK1274) (第134図)

5-B区 β-II D・E-15・16で検出されたSX1004内において確認された土坑。検出時のSX1004との切り合い関係は不明である。平面形態・底面形態ともに不整な楕円形、断面形態は逆台形を呈し、長軸1.03m、短軸0.30m、最大深度0.29mを測る。覆土は土質および含有物から3層に分層できるものの、大きく2層に分けることができる。上層（1層）は暗褐色粘性砂質土で、炭化物を若干含む。下層（2・3層）はにぶい黄褐色粘性砂質土で、暗褐色土をブロック状に若干混入する。3層は2層と比較して、砂質がやや強い。

遺物は、甕形土器口縁部・底部各1点、体部片30点が出土した。そのうち図化できたものは甕口縁部（681）と底部（682）である。出土遺物から、遺構の所属時期は弥生時代中期中葉と考えられる。

土坑276号 (SK1276) (第135図)

5-B区 β-II D・E-15・16で検出されたSX1004内において確認された土坑。平面形態・底面形態ともに不整な楕円形、断面形態は逆台形を呈し、長軸1.27m、短軸1.05m、最大深度0.25mを測る。覆土は土質および含有物から2層に分層でき、上層は黒褐色粘性砂質土でしまりが強い。下層は暗褐色粘性砂質土で、にぶい黄褐色土ブロックをやや多く混入する。直径10～30cm大の結晶片岩・砂岩ならびに土器は、覆土の中位に多く認められる。

遺物は甕形土器底部2点、結晶片岩製台石2点が出土した。そのうち図化できたものは甕（683）、台石（684・685）のみである。出土遺物から、遺構の所属時期は弥生時代中期中葉と考えられる。

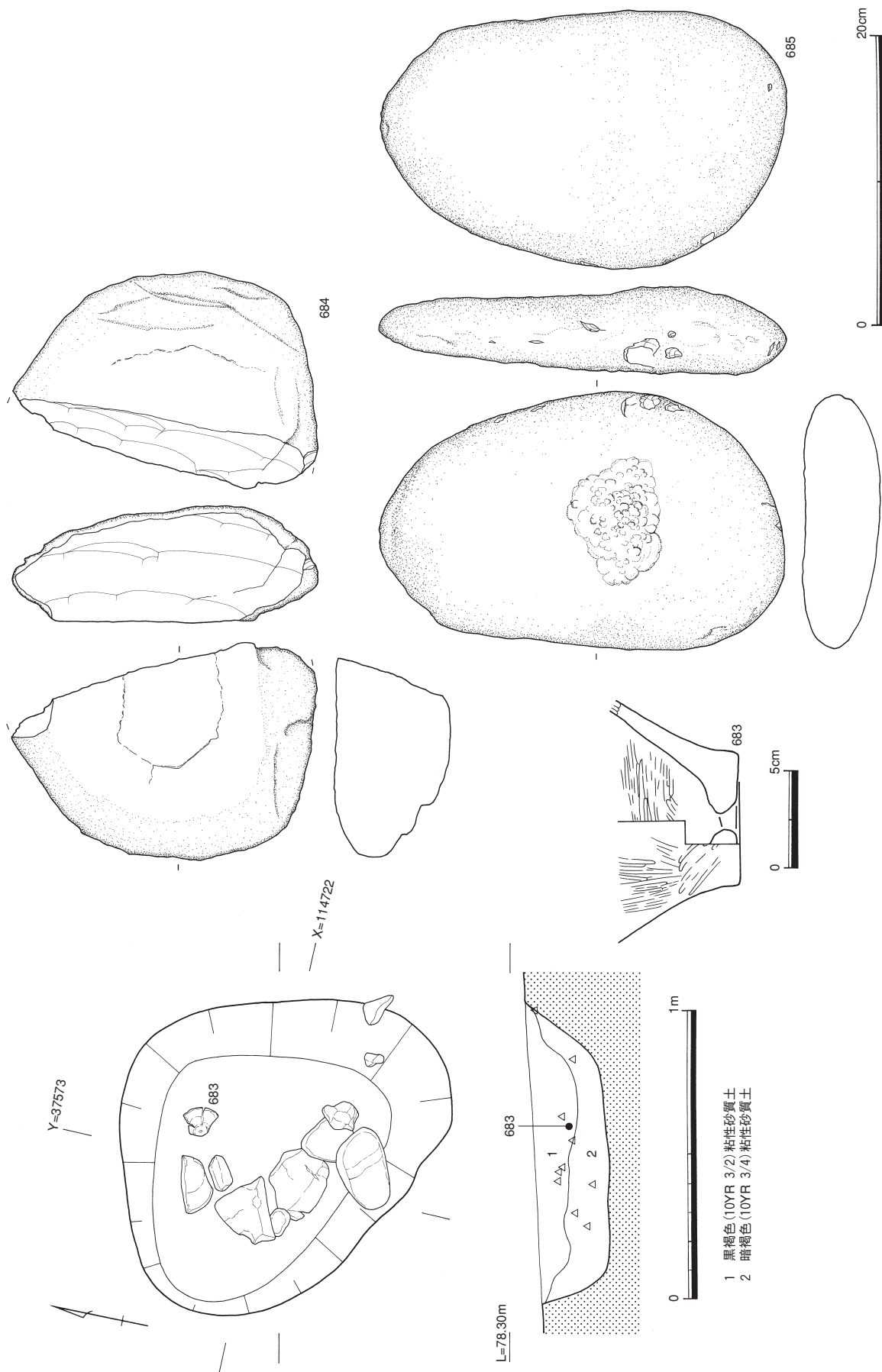
土坑281号 (SK1281) (第136図)

5-B区 β-II D-15・16でSX1004を切った状態で検出された土坑。平面形態・底面形態ともに不整な楕円形、断面形態は逆台形を呈し、長軸2.22m、短軸1.00m、最大深度0.56mを測る。不整な平面形態を呈する事から別遺構との切り合い関係を想定したが、土層堆積からそれを確認することはできなかった。覆土は概ね黒褐色を呈し、土質および含有物から5層に分層できる。1・2層は粘性がほとんどなく、1層はしまりが弱い。3層はしまりが強く、炭化物・土器片を含む。4層は、暗褐色土をブロック状に若干混入する。

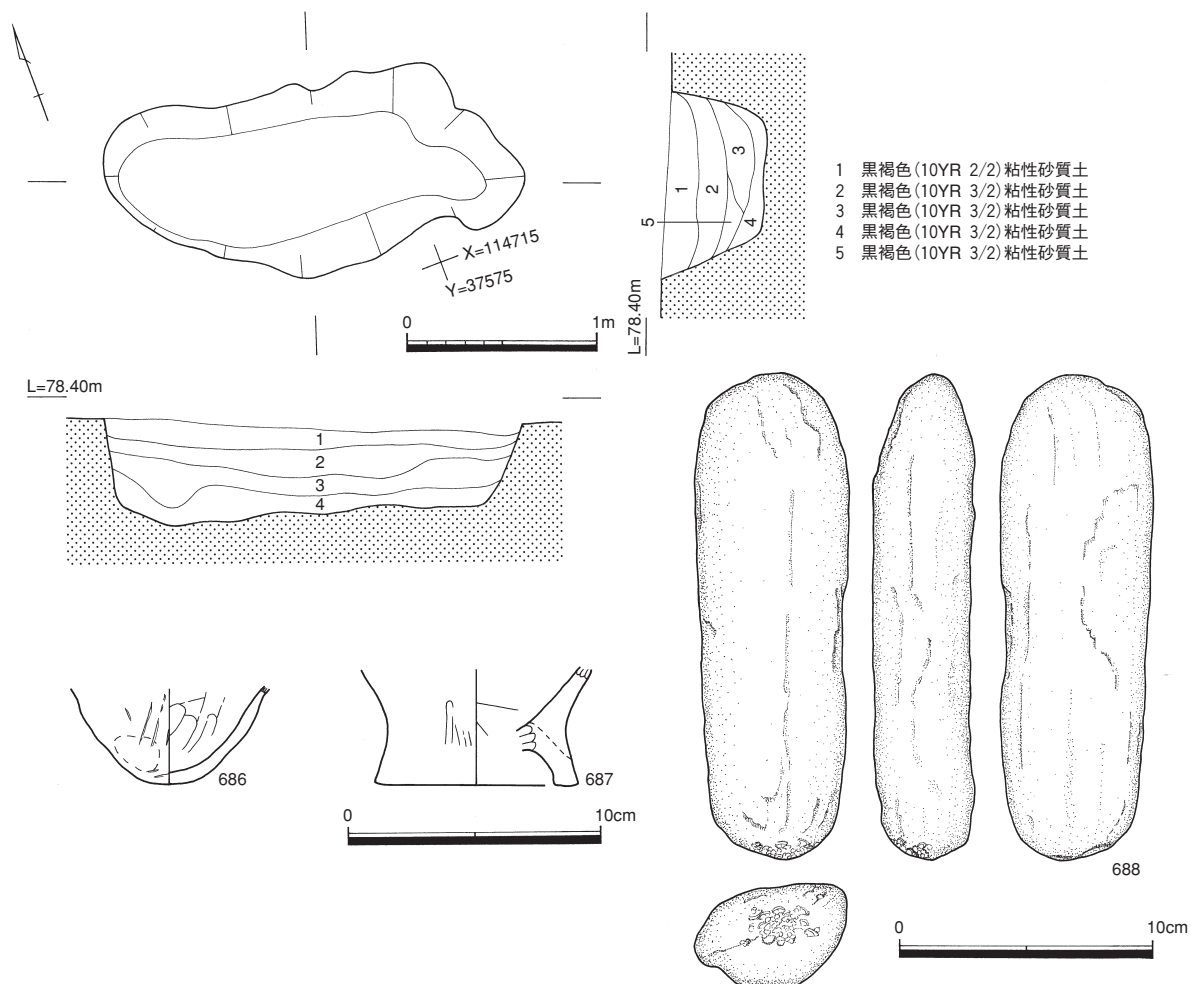
遺物は甕形土器口縁部1点・底部2点、鉢形土器1点、高坏形土器脚部1点、体部片13点、結晶片岩製敲石1点が出土した。その中で図化できたものは、甕（687）・鉢（686）・敲石（688）のみである。688は石材に砂質片岩を用い、下側面に敲打痕が認められる。出土遺物から、遺構の所属時期は弥生時代終末期か。

土坑283号 (SK1283) (第137図)

5-B区 β-II D・E-15・16で検出されたSX1004内において確認された土坑。SP12471・SK1282と切り合い関係にあり、両遺構に切られた状態で検出された。平面形態・底面形態ともにやや不整な楕



第135図 SK1276遺構図・出土遺物



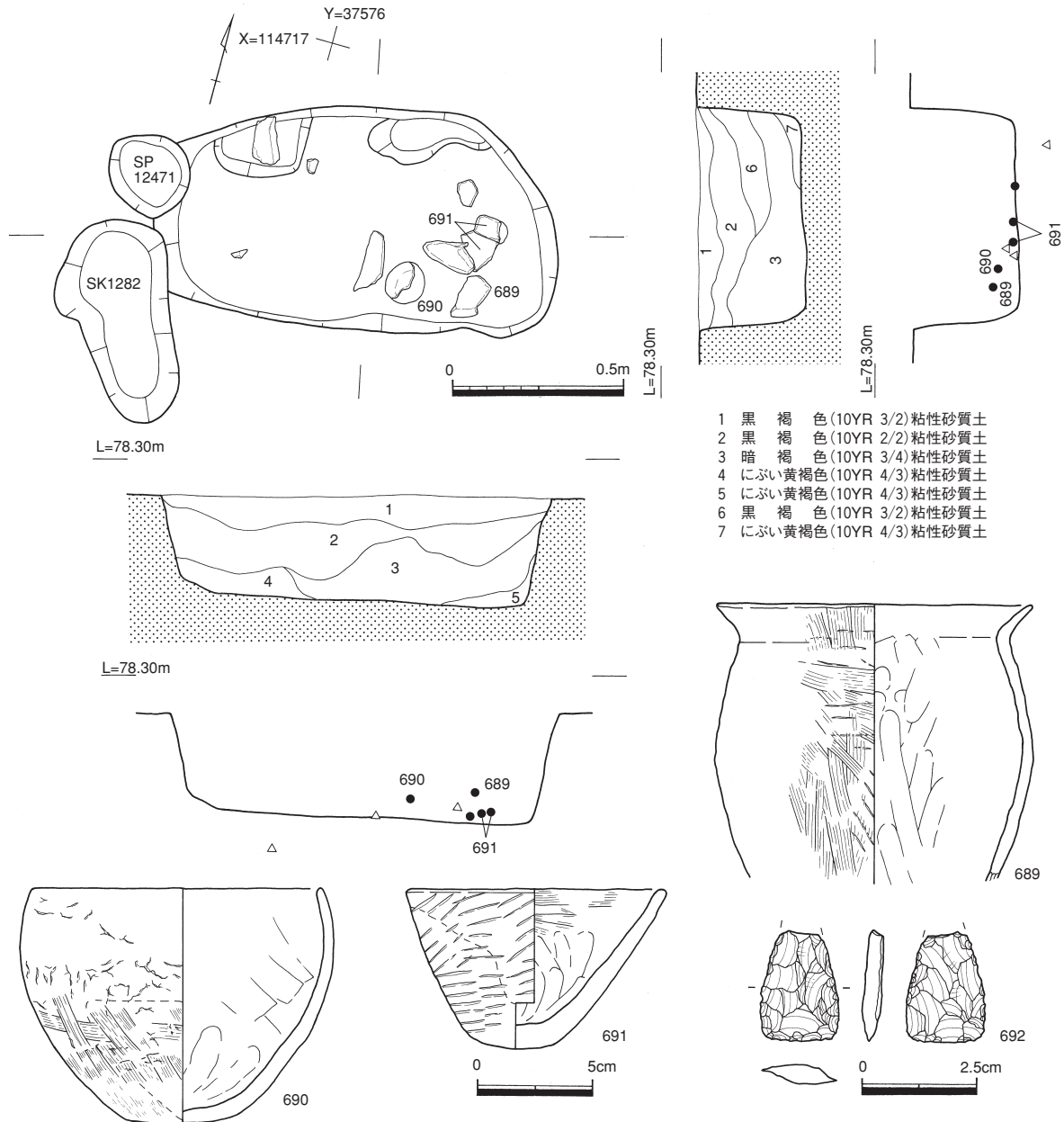
第136図 SK1281遺構図・出土遺物

円形、断面形態は逆台形を呈し、長軸1.20m、短軸0.66m、最大深度0.33mを測る。覆土は土質および含有物から7層に分層できるものの、大きく3層に分けることができる。上層(1・2層)・中層(3・6層)は概ね黒褐色を呈し、上層は中層と比較してしまりが弱い。また3層は暗褐色土ブロックを混入し、炭化物を含む。遺物はこの3層から出土している。下層(4・5・7層)はにぶい黄褐色粘性砂質土で、砂質が強い。

遺物は、甕形土器1点(689)、鉢形土器2点(690・691)、平基三角のサヌカイト製石鏃(692)が出土した。689の内面の調整はユビナデで、非常に粗雑な仕上げである。690は、乾燥時に伴う器表面のひび割れが体部上位に多く認められる。また内面に炭化物がやや多く付着する。図化できた遺物のうち、691のみ床面直上からの出土である。出土遺物から、遺構の所属時期は弥生時代後期後葉～終末期前半と考えられる。

土坑286号 (SK1286) (第138～139図)

5-B区 β-II D・E-15・16で検出されたSX1004内において確認された土坑。SK1285を切るような形で検出された。平面形態・底面形態ともに不整な楕円形、断面形態は逆台形を呈し、長軸1.40m、短軸1.08m、最大深度0.59mを測る。覆土は概ね黒褐色を呈し、土質および含有物から9層に分層でき

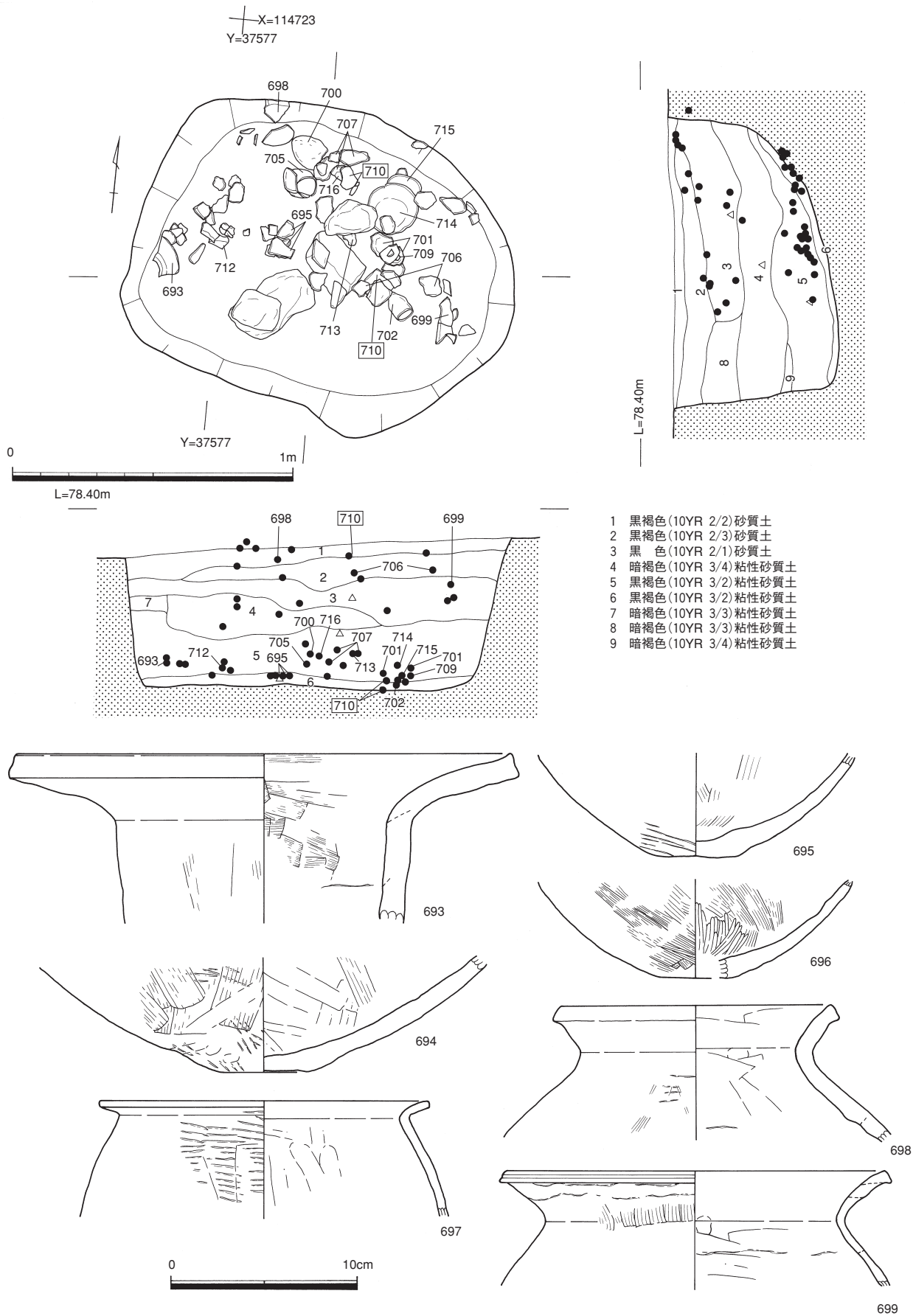


第137図 SK1283遺構図・出土遺物

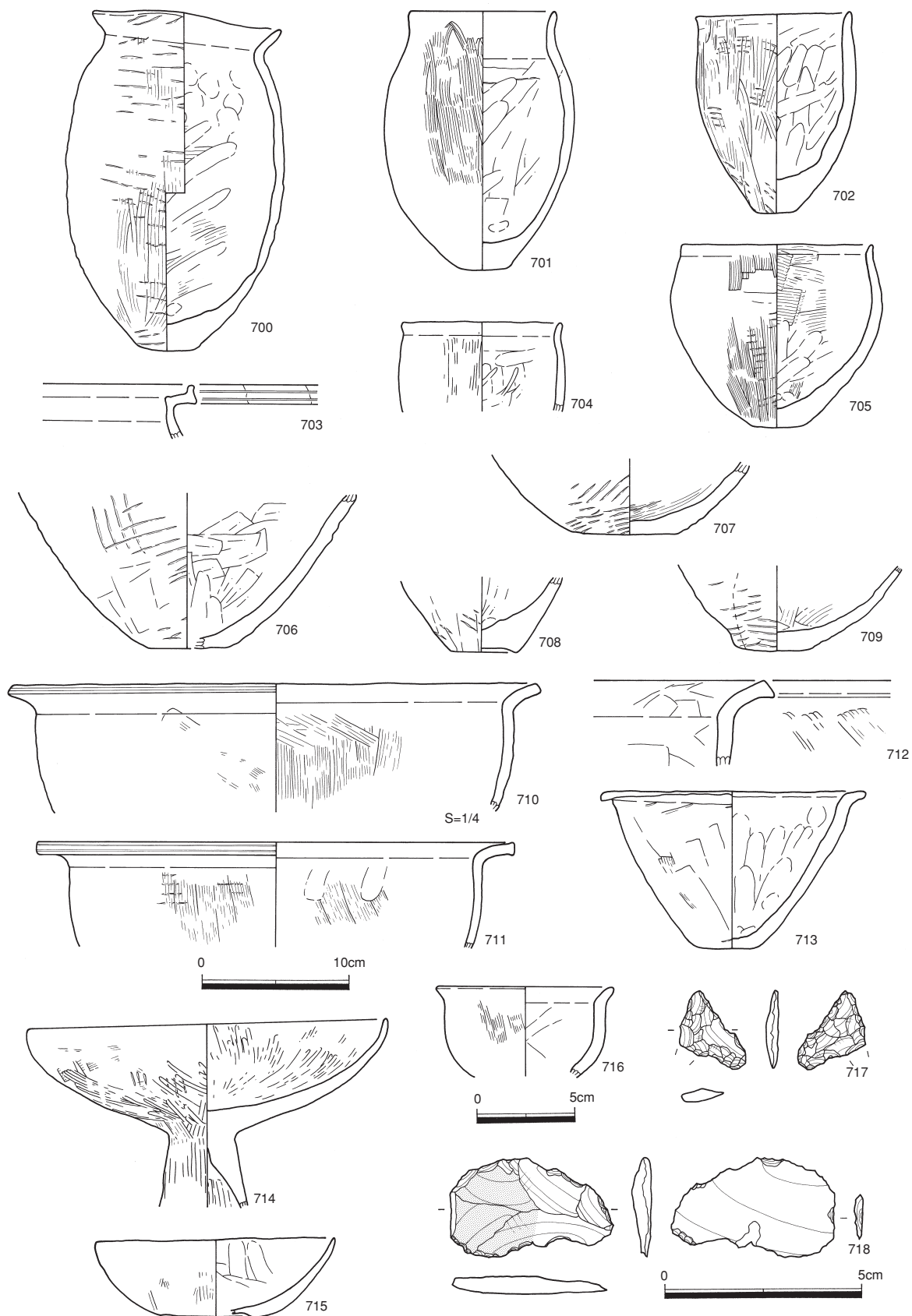
る。1・2層は黒褐色砂質土、3層は黒色砂質土でしまりがほとんどない。4層は暗褐色粘性砂質土で、しまりが強い。5・6層は黒褐色粘性砂質土で、共に炭化物・土器片を含む。6層の方がしまりが強い。7・8層は暗褐色粘性砂質土、9層は暗褐色粘性砂質土で共にしまりが強く、炭化物を若干含む。遺物はどの層からも出土しているが、下層の5・6層に多く認められる。

出土遺物のうち、壺形土器口縁部2点(693・698)・底部2点(694・695)、甕形土器口縁部8点(697・699～705)・底部3点(706～708)、鉢形土器6点(696・709～713・716)、高坏形土器2点(714・715)、サヌカイト製石鏃(717)・剥片(718)各1点が図化できた。

693は、東阿波型土器である。697では外面に煤状の炭化物が、長胴甕の700は体部下位に炭化物が多く付着する。鉢は、折り曲げ口縁が主体となる。壺・甕・鉢ともに平底が主体である。704は、胎土に



第138図 SK1286遺構図・出土遺物



※スクリーントーン - 摩滅部分

第139図 SK1286出土遺物

チャートが認められる。705は胎土に金雲母・角閃石を含むことから讃岐からの、また714は胎土の精緻さから吉野川下流域からの搬入品と考えられる。717は、欠損しているものの凹基式の石鏃である。718は、部分的に磨滅している。出土遺物から、遺構の所属時期は弥生時代後期後葉～終末期前半と考えられる。

柱穴内出土遺物

ここでは、掘立柱建物を構成するに至らなかった柱穴の内、遺物の出土状況および出土遺物が資料化可能なものについて述べることにする。

柱穴

柱穴305号 (SP1305) (第140図)

4-A区 β-II D-4で確認された柱穴。平面形態・底面形態ともにやや不整な円形、断面形態は逆台形を呈し、直径0.30m、最大深度0.28mを測る。覆土は2層に分層でき、上層はにぶい黄褐色粘性砂質土で暗オリーブ褐色土をブロック状に混入する。2層は褐色粘性砂質土でしまりが弱い。出土遺物はサヌカイト製石鏃(719)1点のみで、2層からの出土である。

柱穴2511号 (SP12511) (第140図)

4-A区 β-II F・G-4でSP1400に切られた状態で確認された柱穴。平面形態・底面形態ともに不整形、断面形態は東側が部分的に段を形成するものの、不整な逆台形を呈する。調査時の所見では規模から土坑としていたが、土層堆積状況で柱痕が認められることから柱穴と判断した。長軸0.32m、短軸0.25m、最大深度0.25mを測る。覆土は土質および含有物の違いから4層に分層でき、1層は灰黄褐色粘性砂質土でにぶい黄褐色土ブロックを混入する。2層はにぶい黄褐色粘性砂質土で、炭化物をやや多く含む。3層は灰黄褐色粘性砂質土で、部分的ににぶい黄褐色土を混入する。4層は灰黄褐色粘性砂質土で、褐色土ブロックを若干混入する。

遺物は凹基式と思われるサヌカイト製石鏃1点と土師質土器片3点が出土し、図化できたのは石鏃(720)のみである。土師質土器片はSP1400に伴う。

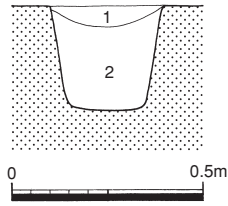
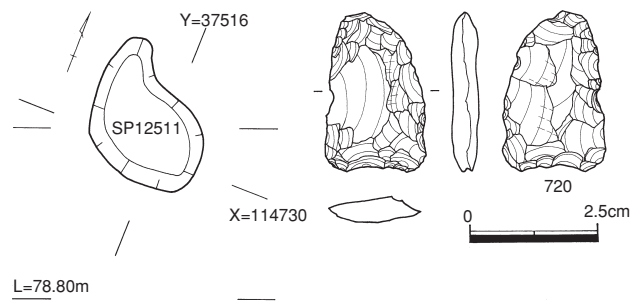
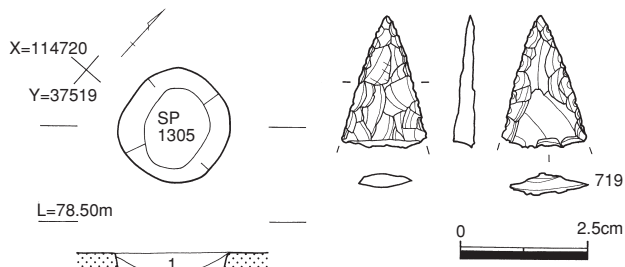
柱穴705号 (SP1705) (第140図)

4-B区 β-II D-12でSK1064を切った状態で確認された柱穴。平面形態・底面形態ともに円形、断面形態は逆台形を呈し、直径約0.33m、最大深度0.17mを測る。覆土は暗褐色を呈し、土質および含有物から2層に分層できる。1層はしまりが強く、2層は粘性が強い。

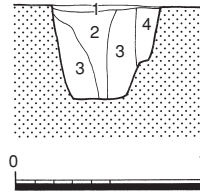
出土遺物は、甕形土器(721)のみである。所属時期は、弥生時代中期中葉と考えられる。

柱穴961号 (SP1961) (第140図)

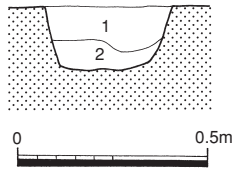
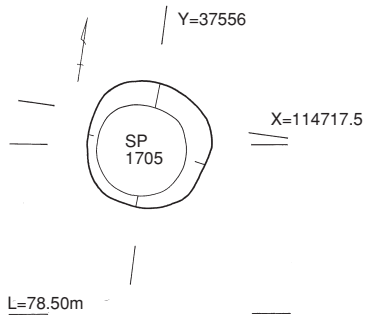
5-A区 β-II I-9で確認された柱穴。平面形態・底面形態ともにやや不整な円形、断面形態は逆台形を呈し、直径約0.23m前後、最大深度0.14mを測る。覆土は2層に分層でき、1層は灰黄褐色粘



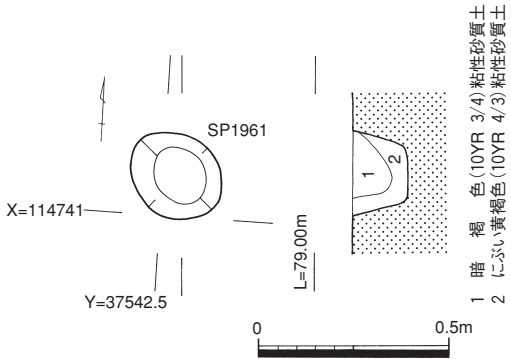
1 にぶい黄褐色(10YR 4/3)粘性砂質土
2 褐色(10YR 4/4)粘性砂質土



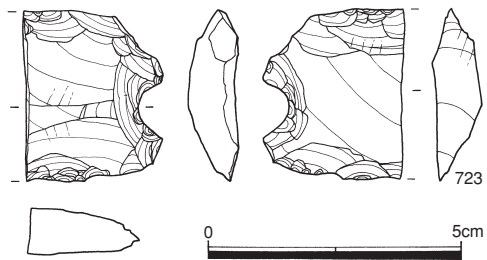
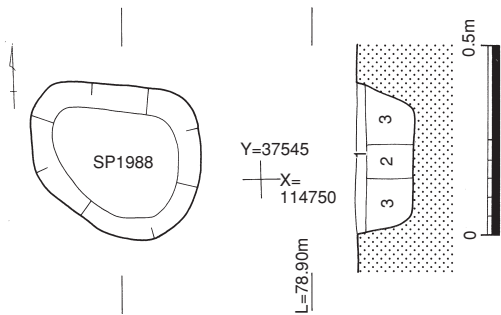
1 灰黄褐色(10YR 4/2)粘性砂質土
2 にぶい黄褐色(10YR 4/3)粘性砂質土
3 灰黄褐色(10YR 4/2)粘性砂質土
4 灰黄褐色(10YR 4/2)粘性砂質土



1 暗褐色(10YR 3/3)粘性砂質土
2 暗褐色(10YR 3/3)粘性砂質土



1 暗褐色(10YR 3/4)粘性砂質土
2 にぶい黄褐色(10YR 4/3)粘性砂質土



1 暗褐色(10YR 3/4)粘性砂質土
2 にぶい黄褐色(10YR 4/3)粘性砂質土
3 灰黄褐色(10YR 4/2)粘性砂質土

第140図 SP遺構図・出土遺物(1)

性砂質土でしまりが強く、2層はにぶい黄褐色粘性砂質土で暗褐色土をブロック状に混入する。出土遺物は、櫛描直線文・波状文が施された壺形土器（722）のみである。遺構の所属時期は、弥生時代中期中葉と考えられる。

柱穴988号 (SP1988) (第140図)

5-A区 β-II J・K-9で確認された柱穴。平面形態・底面形態ともに不整な楕円形、断面形態は逆台形を呈し、直径0.4m、最大深度0.15mを測る。覆土は3層に分層でき、中央に柱痕を明瞭にとどめる。1層は、暗褐色粘性砂質土でしまりが強い。柱痕部にあたる2層は、灰黄褐色粘性砂質土で3層の中で粘性が一番強い。3層はにぶい黄褐色粘性砂質土で、しまりがやや弱い。遺物は弥生土器片・サヌカイト製削器が出土し、図化できたのは平刃・複刃の削器（723）のみである。

柱穴1012号 (SP11012) (第141図)

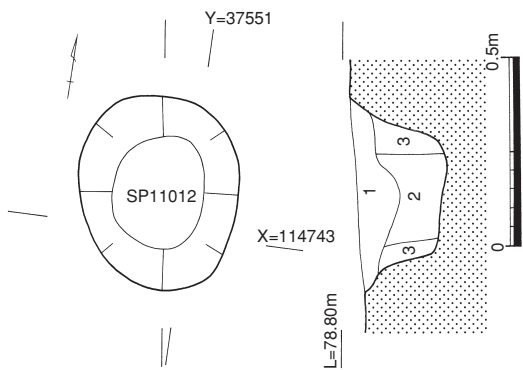
5-A区 β-II I-11で確認された柱穴。平面形態・底面形態ともに楕円形、断面形態はやや不整な逆台形を呈し、長軸0.52m、短軸0.42m、最大深度0.24mを測る。調査時の所見では規模から土坑としていたが、土層堆積状況で柱痕が認められることから柱穴と判断した。覆土は3層に分層でき、中央に柱痕を明瞭にとどめる。1層は灰黄褐色粘性砂質土で、にぶい黄褐色土ブロックをわずかに混入する。柱痕部にあたる2層はにぶい黄褐色粘性砂質土、3層は灰黄褐色粘性砂質土でしまりが強い。遺物は貼付突帯が施される細頸広口壺形土器1点、甕形土器1点、体部片5点が出土した。そのうち図化できたのは、甕（724）のみである。出土遺物から、遺構の所属時期は弥生時代中期中葉である。

柱穴2512号 (SP12512) (第141図)

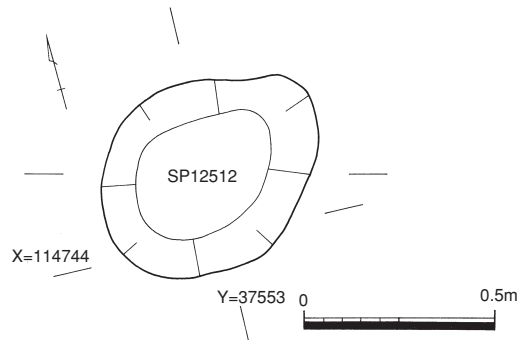
5-A区 β-II I-11で確認された柱穴。平面形態・底面形態ともにやや不整な楕円形、断面形態は緩やかな舟底形を呈し、長軸0.65m、短軸0.51m、最大深度0.08mを測る。調査時の所見では規模から土坑としていたが、土層堆積状況で柱痕と考えられる層が認められたことから柱穴と判断した。覆土は3層に分層でき、1層は灰黄褐色粘性砂質土で、しまりがやや強い。柱痕部にあたる2層は、暗褐色粘性砂質土でしまりがやや弱い。3層は褐色粘性砂質土で、しまりが弱い。遺物は貼付突帯が施される壺形土器1点、甕形土器1点、体部片18点、紅簾片岩の石核1点が出土した。そのうち図化できたのは、石核（725）のみである。

柱穴1043号 (SP11043) (第141図)

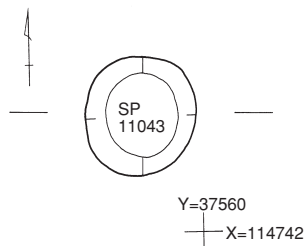
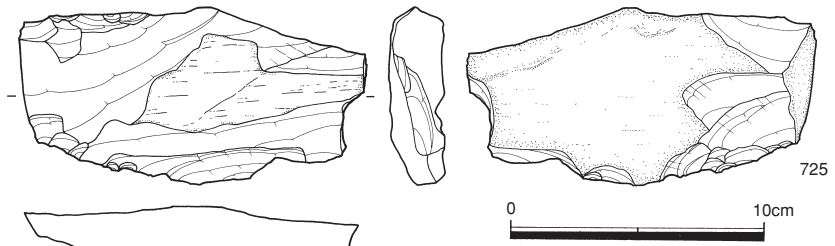
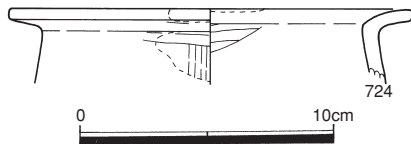
5-A区 β-II I-12で確認された柱穴。平面形態・底面形態ともにやや不整な円形、断面形態は逆台形を呈し、直径0.32m前後、最大深度0.18mを測る。覆土は4層に分層でき、柱痕を明瞭にとどめる。1層は、灰黄褐色粘性砂質土でしまりが強い。2層は暗褐色粘性砂質土で柱痕部にあたり、ややしまりが弱い。3層はにぶい黄褐色粘性砂質土で、暗褐色土をブロック状に若干混入する。4層は褐色粘性砂質土で、にぶい黄褐色土をブロック状に若干混入する。遺物は、甕形土器（726）が出土したのみである。726は外面口縁部から頸部、および体部上位にかけて炭化物の付着がやや多く認められる。遺構の所属時期は、弥生時代中期中葉である。



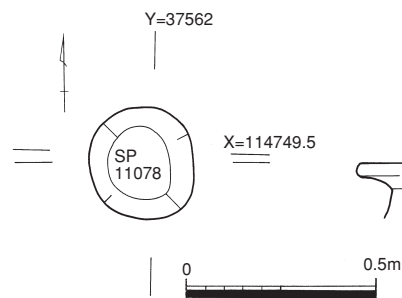
- 1 灰黄褐色(10YR 4/2)粘性砂質土
- 2 にぶい黄褐色(10YR 4/3)粘性砂質土
- 3 灰黄褐色(10YR 4/2)粘性砂質土



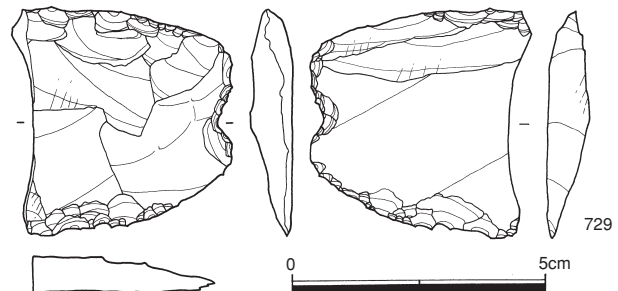
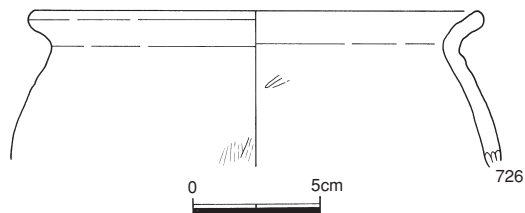
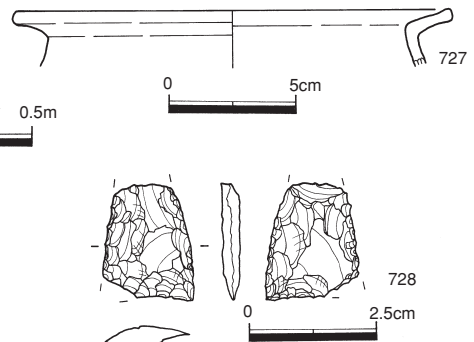
- 1 灰黄褐色(10YR 4/2)粘性砂質土
- 2 暗褐色(10YR 3/4)粘性砂質土
- 3 褐色(10YR 4/4)粘性砂質土



- 1 灰黄褐色(10YR 4/2)粘性砂質土
- 2 暗褐色(10YR 3/3)粘性砂質土
- 3 にぶい黄褐色(10YR 4/3)粘性砂質土
- 4 褐色(10YR 4/4)粘性砂質土



- 1 暗褐色(10YR 3/3)粘性砂質土
- 2 にぶい黄褐色(10YR 4/3)粘性砂質土
- 3 にぶい黄褐色(10YR 4/3)粘性砂質土



第141図 SP遺構図・出土遺物(2)

柱穴1078号 (SP11078) (第141図)

5-A区 β-II J-13で確認された柱穴。平面形態・底面形態ともにやや不整な円形、断面形態はやや不整な逆台形を呈し、直径0.30m前後、最大深度0.10mを測る。覆土は土質および含有物から3層に分層でき、大きく2層に分けることができる。上層(1層)は暗褐色粘性砂質土で、しまりが強い。下層(2・3層)はにぶい黄褐色粘性砂質土で、2層は暗褐色土をブロック状に若干混入する。遺物は甕形土器口縁部1点・体部片5点、サヌカイト製石鎌・削器が出土し、図化できたのは甕(727)、凹基式と思われる石鎌(728)、凸刃・複刃を持つ削器(729)のみである。所属時期は、弥生時代中期中葉と考えられる。

柱穴1097号 (SP11097) (第142図)

5-A区 β-II M-13で確認された柱穴。平面形態・底面形態ともに楕円形、断面形態は逆台形を呈し、長軸0.54m、短軸0.41m、最大深度0.15mを測る。覆土はにぶい黄褐色を呈し、土質および含有物から3層に分層できる。2層は、1・3層と比較して炭化物を多く含む。遺物は弥生土器片4点、サヌカイト製石鎌1点出土し、図化できたのは凹基式の石鎌(730)のみである。

柱穴1065号 (SP11065) (第142図)

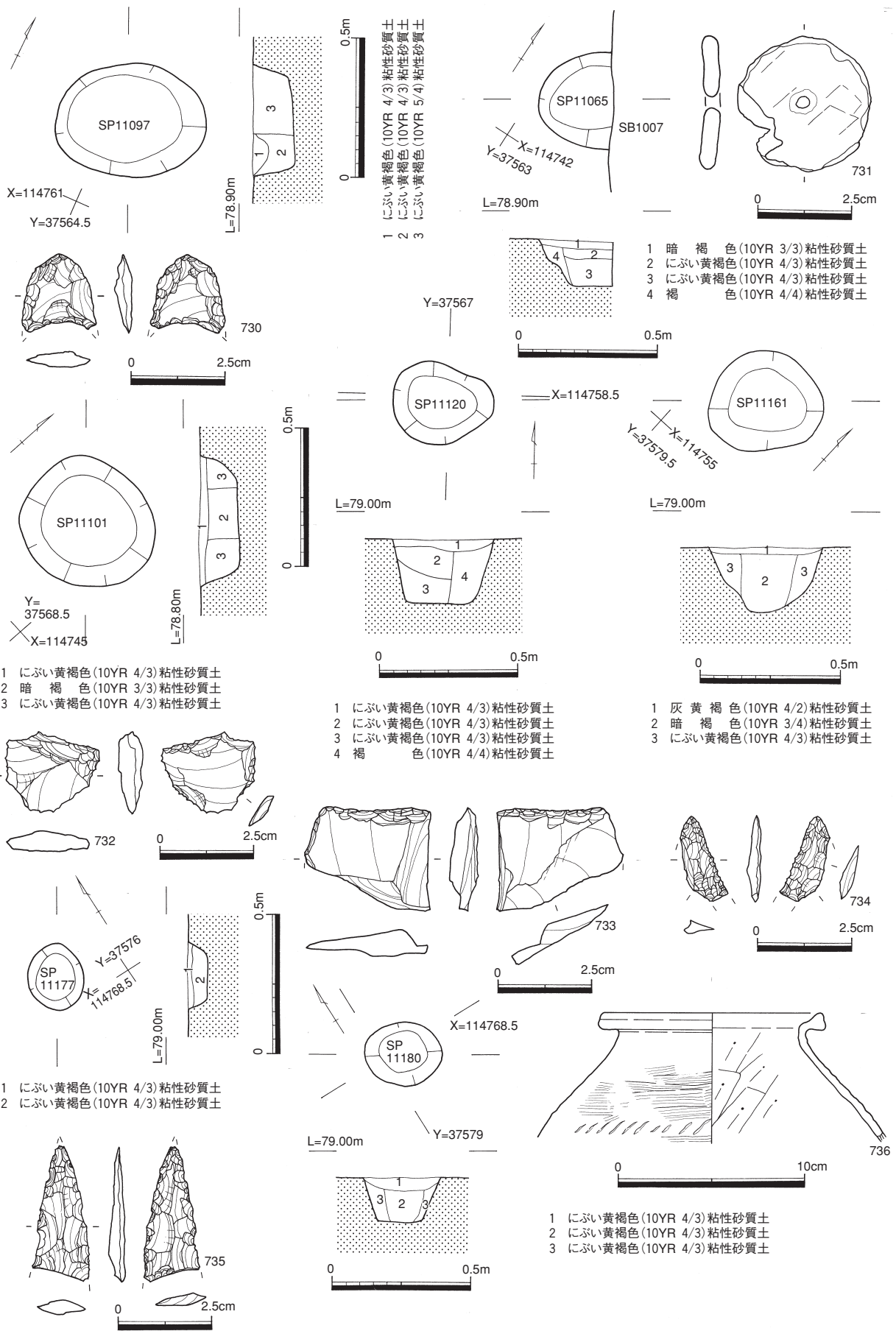
5-A区 β-II I-13で遺構の半分近くをSB1007に切られた状態で確認された柱穴。形態および規模は不明瞭ながらも、遺存部から平面形態・底面形態ともに不整な円形、断面形態は逆台形と推定される。直径0.35m前後、最大深度0.16mを測る。覆土は土質および含有物の違いから4層に分層でき、1層は暗褐色粘性砂質土でしまりが弱い。2・3層はにぶい黄褐色粘性砂質土で、3層に褐色土ブロックが若干認められる。柱痕部の可能性が考えられる。4層は褐色粘性砂質土で、にぶい黄褐色土ブロックを若干混入する。出土遺物は、弥生土器片を転用した土製紡錘車(731)1点のみである。

柱穴1101号 (SP11101) (第142図)

5-A区 β-II J-14で確認された柱穴。平面形態・底面形態ともに円形、断面形態は逆台形を呈し、直径0.47m前後、最大深度0.15mを測る。覆土は土質および含有物の違いから3層に分層でき、柱痕を明瞭にとどめる。1層はにぶい黄褐色粘性砂質土、2層は暗褐色粘性砂質土で柱痕部にあたり、炭化物を多く含む。3層はにぶい黄褐色粘性砂質土で、しまりがやや強い。遺物は弥生土器片1点、サヌカイト製楔形石器1点出土し、図化できたのは楔形石器(732)のみである。

柱穴1120号 (SP11120) (第142図)

5-A区 β-II L-14で確認された柱穴。平面形態・底面形態ともにやや不整な楕円形、断面形態は逆台形を呈し、長軸0.36m、短軸0.28m、最大深度0.23mを測る。覆土は土質および含有物の違いから4層に分層でき、柱痕を明瞭にとどめる。1～3層はにぶい黄褐色粘性砂質土で、1層は暗灰黄色土および灰黄褐色土をブロック状に若干混入する。2層は、暗褐色土ブロックを若干混入する。3層はしまりが強く、炭化物を若干含む。4層は褐色粘性砂質土で、柱痕部にあたる。遺物は弥生土器片1点、サヌカイト製楔形石器1点出土し、図化できたのは楔形石器(733)のみである。



第142図 SP遺構図・出土遺物(3)

柱穴1161号 (SP11161) (第142図)

5-A区 β-II L-16で確認された柱穴。平面形態・底面形態ともにやや不整な楕円形、断面形態はやや不整な舟底形を呈し、長軸0.40m、短軸0.35m、最大深度0.24mを測る。覆土は土質および含有物の違いから3層に分層でき、柱痕を明瞭にとどめる。1層は灰黄褐色粘性砂質土で、しまりがやや強い。2層は暗褐色粘性砂質土で柱痕部にあたり、炭化物を含む。3層はにぶい黄褐色粘性砂質土で、しまりがやや強い。遺物は弥生土器片3点、サヌカイト製石鏃1点が出土し、図化できたのは凹基式の石鏃(734)のみである。

柱穴1177号 (SP11177) (第142図)

5-A区 β-II N-16で確認された柱穴。平面形態・底面形態ともにやや不整な円形、断面形態は逆台形を呈し、直径0.24m前後、最大深度0.07mを測る。覆土はにぶい黄褐色を呈し、土質および含有物の違いから2層に分層できる。1層は、炭化物を若干含む。出土遺物は、平基三角と思われるサヌカイト製石鏃(735)1点のみである。

柱穴1180号 (SP11180) (第142図)

5-A区 β-II N-16で確認された柱穴。平面形態・底面形態ともに円形、断面形態は逆台形を呈し、直径0.28m前後、最大深度0.16mを測る。覆土は概ねにぶい黄褐色を呈する。土質および含有物の違いから3層に分層でき、柱痕を明瞭にとどめる。1層は灰黄褐色土を、3層は褐色土をブロック状に若干混入する。遺物は、甕形土器口縁部(736)・体部片が各1点ずつ出土した。所属時期は、弥生時代後期初頭か。

柱穴1215号 (SP11215) (第143図)

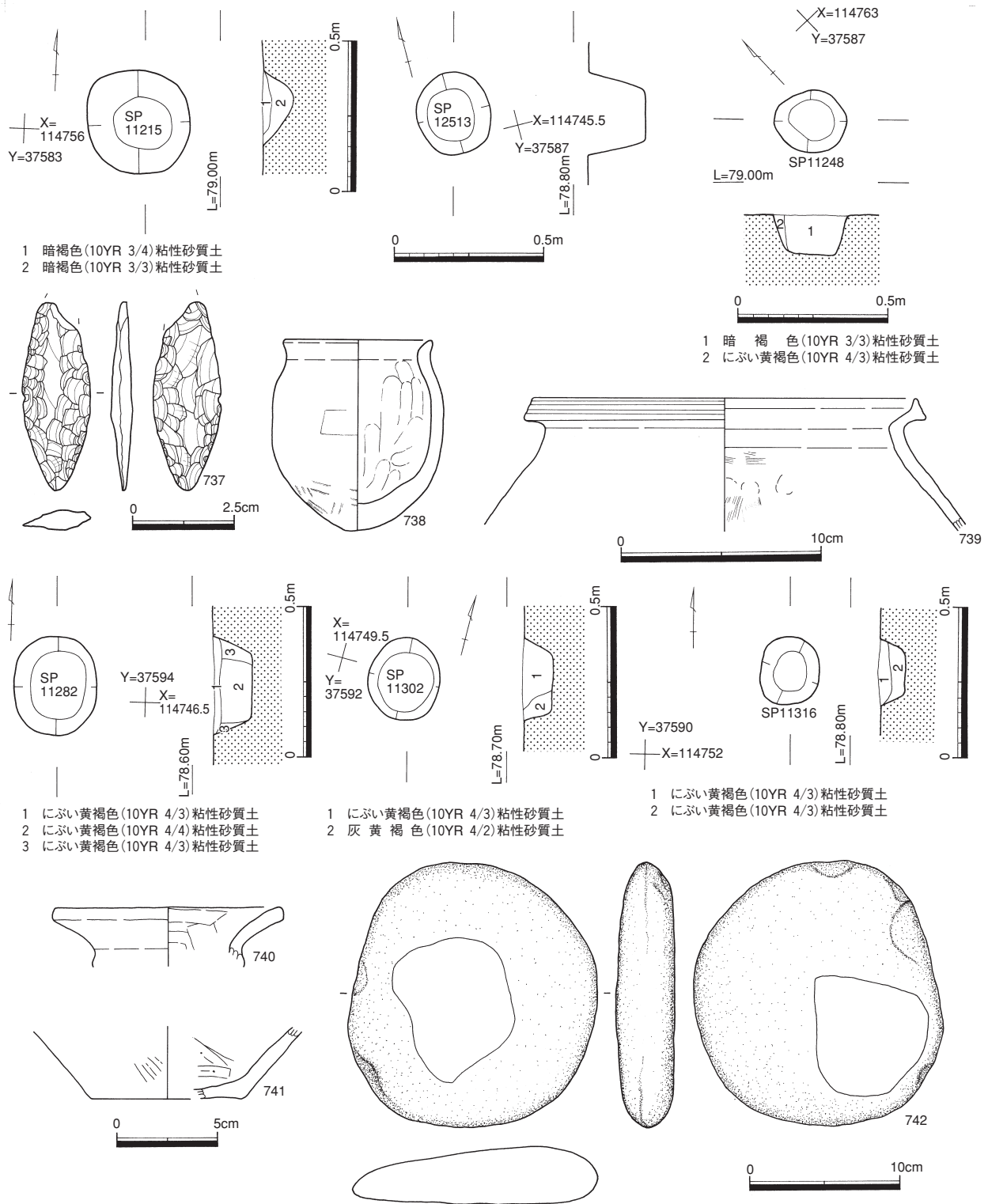
5-A区 β-II L-17でSB1011を切る状態で確認された柱穴。平面形態・底面形態ともに円形、断面形態は不整な舟底形を呈し、直径0.34m前後、最大深度0.10mを測る。覆土は暗褐色を呈し、土質および含有物の違いから2層に分層できる。2層は1層と比較して粘性が強く、炭化物を多く含む。出土遺物は、有茎式のサヌカイト製石鏃1点(737)のみである。

柱穴2513号 (SP12513) (第143図)

5-A区 β-II K-18でSB1013を切った状態で確認された柱穴。平面形態・底面形態ともに円形、断面形態は逆台形を呈し、直径0.28m前後、最大深度0.19mを測る。遺物は、体部外面に炭化物が若干付着する小型丸底鏃(738)が完形で出土したのみである。所属時期は、弥生時代終末期前半か。

柱穴1248号 (SP11248) (第143図)

5-A区 β-II J-14で確認された柱穴。平面形態・底面形態ともに円形、断面形態は逆台形を呈し、直径0.47m前後、最大深度0.15mを測る。覆土は2層に分層でき、柱痕を明瞭にとどめる。1層は暗褐色粘性砂質土で柱痕部にあたり、土器片・炭化物を含む。2層はにぶい黄褐色粘性砂質土で、しまりが強い。出土遺物は、口縁部端面に凹線2条を施す甕形土器(739)1点のみである。所属時期は、弥生時代中期後葉か。



第143図 SP遺構図・出土遺物(4)

柱穴1282号 (SP11282) (第143図)

5-A区 β-II J-19で確認された柱穴。平面形態・底面形態ともに楕円形、断面形態は逆台形を呈し、長軸0.33m、短軸0.28m、深さ0.13mを測る。覆土は土質および含有物から3層に分層でき、柱痕を明瞭にとどめる。1層はにぶい黄褐色粘性砂質土で、炭化物をわずかに含む。2層は褐色粘性砂質

土で、柱痕部にあたる。3層はにぶい黄褐色粘性砂質土で、しまりが強い。出土遺物は、壺形土器1点(740)・体部片2点のみである。所属時期は、弥生時代後期後葉以降か。

柱穴1302号 (SP11302) (第143図)

5-A区 β-II J-19でSK1158をわずかに切った形で確認された柱穴。平面形態・底面形態ともにやや不整な円形、断面形態は逆台形を呈し、直径0.28m前後、最大深度0.10mを測る。覆土は、土質および含有物から2層に分層できる。1層はにぶい黄褐色粘性砂質土で、炭化物を若干含む。2層は灰黄褐色粘性砂質土で、しまりがやや強い。遺物は壺形土器底部1点・体部片2点が出土した。図化できたのは底部(741)のみで、内外面に煤状の炭化物がやや多く付着する。特に内面に多い。所属時期は、弥生時代後期初頭以降か。

柱穴1316号 (SP11316) (第143図)

5-A区 β-II K-19で確認された柱穴。平面形態・底面形態ともに円形、断面形態は逆台形を呈し、直径0.23m前後、最大深度0.09mを測る。覆土は概ねにぶい黄褐色を呈し、土質および含有物から2層に分層できる。1層は、炭化物を若干含む。出土遺物は泥岩を用いた磨石(742)1点のみで、表裏面にそれぞれ一個所磨面が認められる。

柱穴1325号 (SP11325) (第144図)

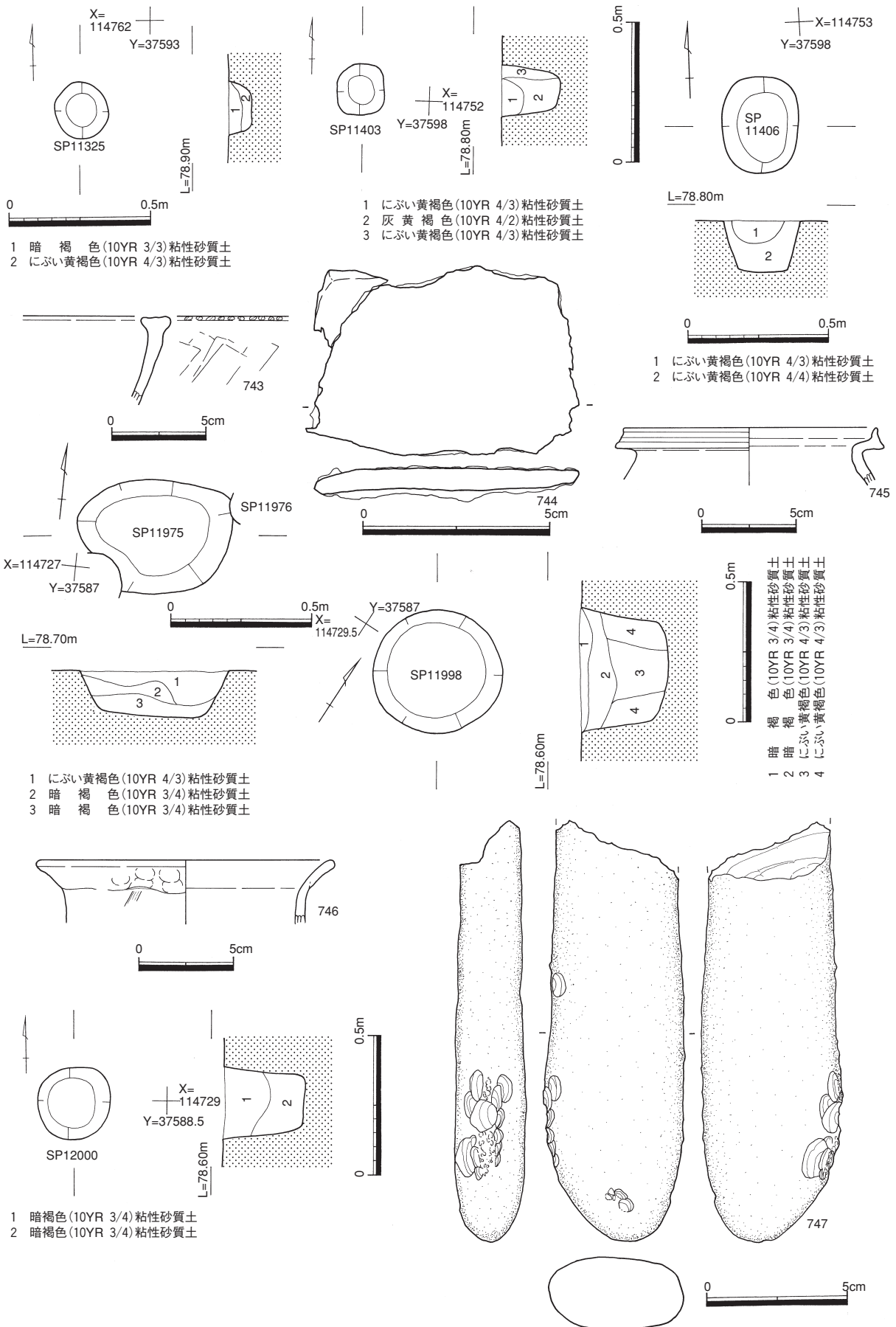
5-A区 β-II M-19でSD1016を切った状態で確認された柱穴。平面形態・底面形態ともに円形、断面形態は逆台形を呈し、直径0.20m前後、最大深度0.08mを測る。覆土は2層に分層でき、1層は暗褐色粘性砂質土で炭化物を多く含む。2層はにぶい黄褐色粘性砂質土で、粘性が強い。遺物は、口縁部に刻目が認められる高坏形土器(743)1点のみである。所属時期は、弥生時代中期中葉か。

柱穴1403号 (SP11403) (第144図)

5-A区 β-II K-20で確認された柱穴。平面形態はやや不整な円形、底面形態は円形、断面形態はやや不整なU字形を呈し、直径0.18m前後、最大深度0.21mを測る。覆土は3層に分層でき、柱痕を明瞭にとどめる。1層はにぶい黄褐色粘性砂質土で、炭化物を若干含む。2層は暗褐色粘性砂質土で、柱痕部にあたる。粘性がやや強く、炭化物を若干含む。3層はにぶい黄褐色粘性砂質土でしまりが強い。遺物は、性格不明の板状鉄片(744)1点のみである。時期が下る可能性がある。

柱穴1406号 (SP11406) (第144図)

5-A区 β-II K-20でSP11405を切った状態で確認された柱穴。平面形態・底面形態ともに楕円形、断面形態は逆台形を呈し、長軸0.35m、短軸0.27m、最大深度0.18mを測る。覆土はにぶい黄褐色を呈し、土質および含有物から2層に分層できる。1層は炭化物を含み、2層は1層と比較して粘性が強い。遺物は、甕形土器(745)1点のみである。胎土に金雲母を多く含むことから、讃岐からの搬入品と考えられる。所属時期は、弥生時代後期初頭～前葉か。



第144図 SP遺構図・出土遺物(5)

柱穴1975号 (SP11975) (第144図)

5-B区 β-II F-18でSP11974・11976に切られた状態で確認された柱穴。平面形態・底面形態ともに不整な楕円形、断面形態は逆台形を呈し、長軸0.55m、短軸0.41m、最大深度0.17mを測る。覆土は土質および含有物から3層に分層できるものの、大きく2層に分けることができる。上層(1層)はにぶい黄褐色粘性砂質土で、しまりが強い。下層(2・3層)は暗褐色粘性砂質土で、2層がしまりが弱い。3層から遺物の出土が認められた。遺物は、壺形土器口縁部1点、体部片10点が出土した。口縁部は浅黄橙色、体部は橙色を中心とし、その胎土色からこの口縁部に伴う体部片は無いと考えられる。壺(746)は、口縁部に粘土帯を貼り付けて肥厚させている。その成形技法および胎土色の違いから、土佐からの搬入品の可能性が考えられる。所属時期は、弥生時代中期後葉～後期初頭か。

柱穴1998号 (SP11998) (第144図)

5-B区 β-II F-18で確認された柱穴。平面形態・底面形態ともに円形、断面形態は逆台形を呈し、直径0.45m前後、最大深度0.31mを測る。覆土は土質および含有物から4層に分層できるものの、大きく2層に分けることができる。また柱痕を明瞭にとどめる。上層(1・2層)は暗褐色粘性砂質土で、1層がしまりが弱い。下層(3・4層)はにぶい黄褐色を呈し、3層は柱痕部にあたる。遺物は、弥生土器片4点、砂質片岩を用いた敲石1点が出土した。敲石(747)は、表面と左側面部の2箇所敲打痕が認められる。

柱穴2000号 (SP12000) (第144・145図)

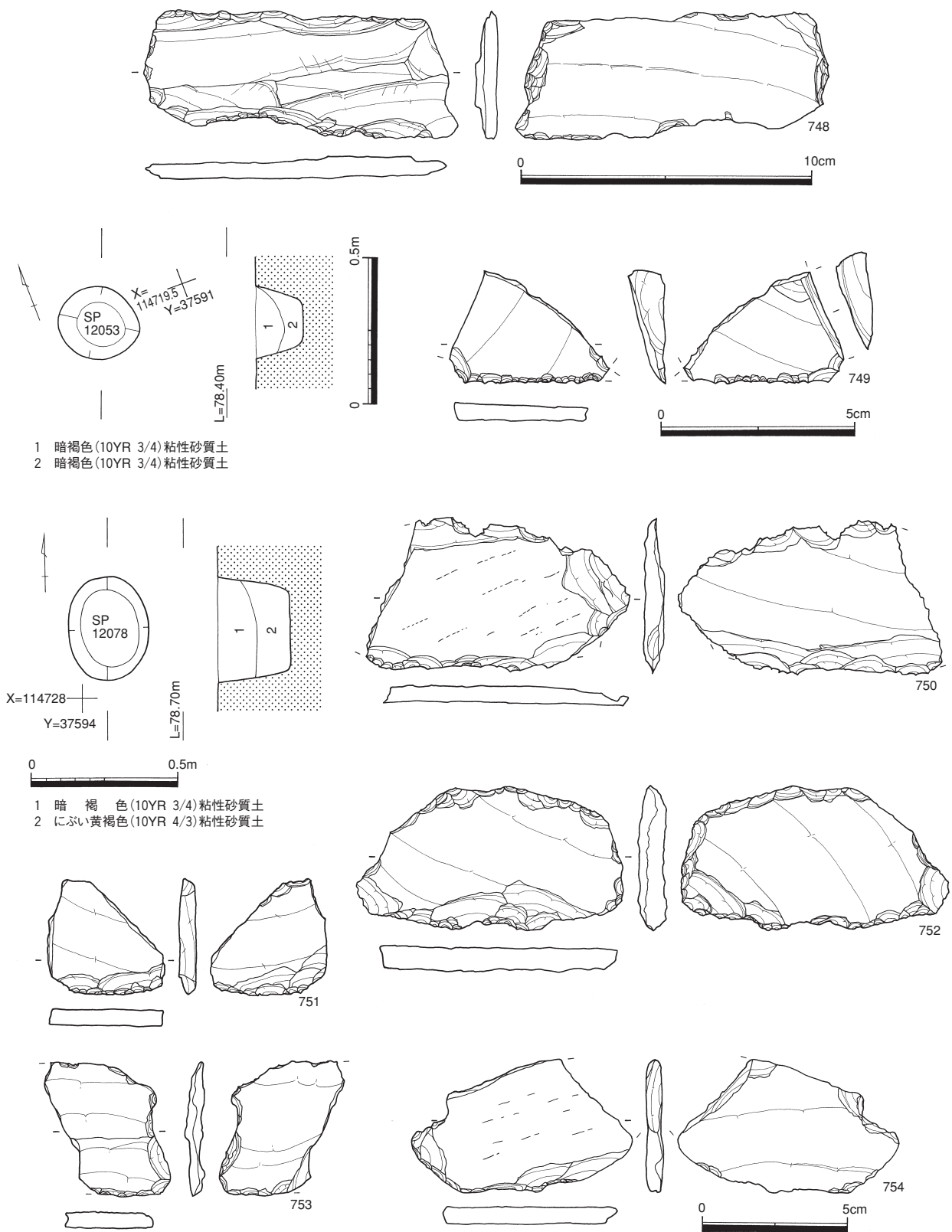
5-B区 β-II F-18で確認された柱穴。平面形態・底面形態ともに円形、断面形態は逆台形を呈し、直径0.26m前後、最大深度0.28mを測る。覆土は暗褐色を呈し、土質および含有物から2層に分層できる。1層は、2層と比較してしまりが弱い。出土遺物は、打製石庖丁(748)1点のみである。石材に砂質片岩を用い、平刃・複刃を持つ。

柱穴2053号 (SP12053) (第145図)

5-B区 β-II D-19で確認された柱穴。平面形態・底面形態ともにやや不整な円形、断面形態は逆台形を呈し、直径0.25m前後、最大深度0.16mを測る。覆土は暗褐色を呈し、土質および含有物から2層に分層できる。1層は、2層と比較してしまりが弱い。遺物は弥生土器片1点、サヌカイト製削器1点が出土し、図化できたのは平刃・単刃を持つ削器(749)のみである。

柱穴2078号 (SP12078) (第145図)

5-B区 β-II F-19で確認された柱穴。平面形態・底面形態ともに楕円形、断面形態は逆台形を呈し、直径0.36m、短軸0.28m、最大深度0.25mを測る。覆土は2層に分層でき、1層は暗褐色粘性砂質土でしまりが弱い。2層はにぶい黄褐色粘性砂質土で、しまりが強い。遺物は弥生土器片3点、打製石庖丁5点が出土した。図化できたのは石庖丁5点(750～754)で、752以外の4点は欠損し、かつ平刃・単刃である。石材に751・754は紅簾片岩を、他の3点は砂質片岩を用いる。



第145図 SP遺構図・出土遺物(6)

柱穴2124号 (SP12124) (第146図)

5-B区 β-II H-19で確認された柱穴。平面形態・底面形態ともにやや不整な円形、断面形態は逆台形を呈し、直径0.18m前後、最大深度0.18mを測る。覆土は暗褐色を呈し、土質および含有物から2層に分層できる。1層は、2層と比較してしまりが弱い。遺物は甕形土器底部1点、体部片2点が出土し、上げ底の底部(755)が図化できた。

柱穴2298号 (SP12298) (第146図)

5-B区 β-III I-2で確認された柱穴。平面形態・底面形態ともにやや不整な円形、断面形態は逆台形を呈し、直径0.33m前後、最大深度0.15mを測る。覆土は3層に分層でき、1層は暗褐色粘性砂質土、2層は灰黄褐色粘性砂質土でしまりが強い。3層はにぶい黄褐色粘性砂質土で、粘性が強くしまりが弱い。遺物は高坏形土器1点、手捏ね皿1点、体部片17点が出土し、そのうち図化できたのは高坏(756)と手捏ね皿(757)のみである。遺構の所属時期は、弥生時代後期後葉か。

柱穴2385号 (SP12385) (第146図)

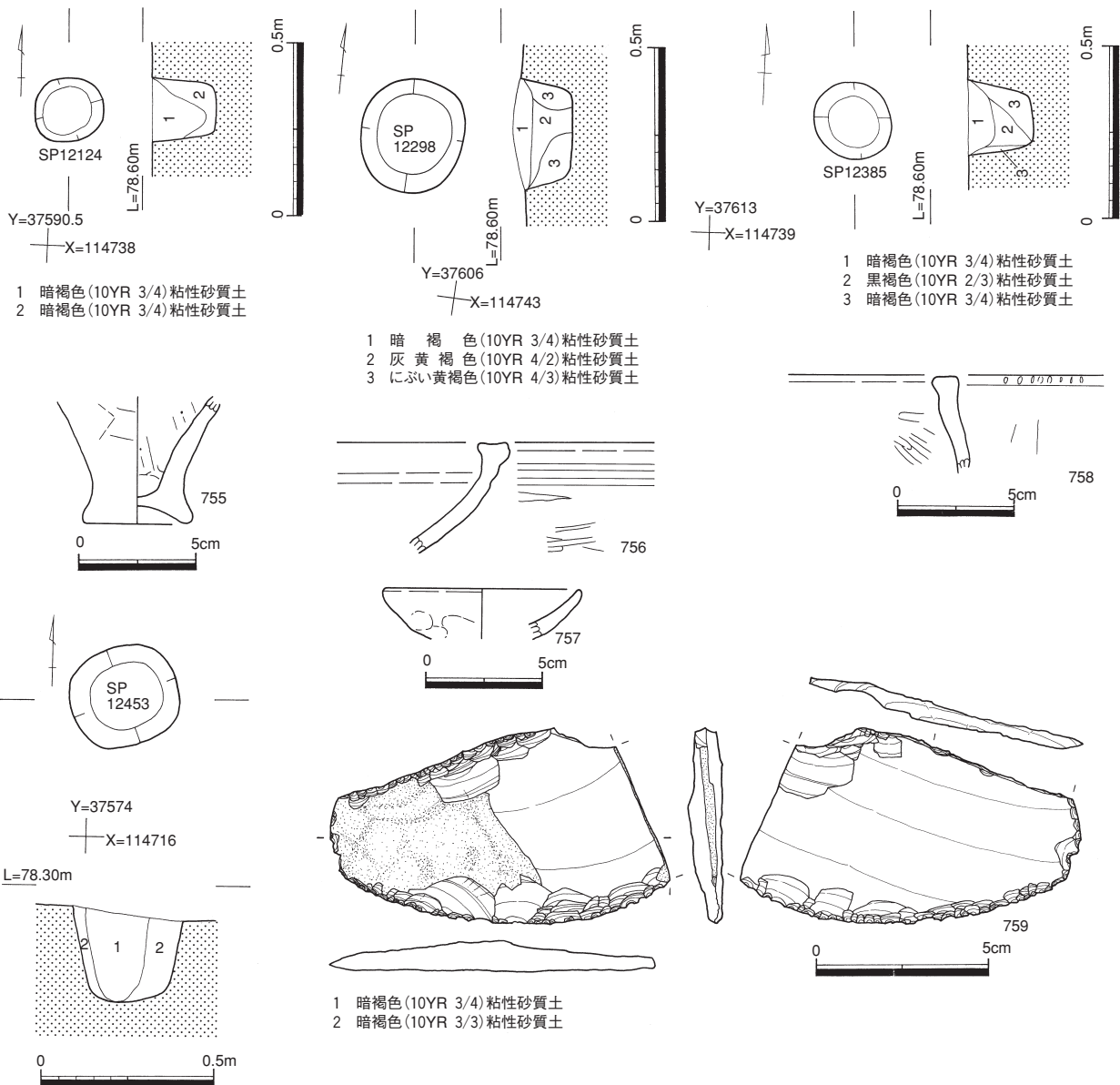
5-B区 β-III H-3で確認された柱穴。平面形態・底面形態ともに円形、断面形態は逆台形を呈し、直径0.22m前後、最大深度0.19mを測る。覆土は3層に分層でき、1層は暗褐色粘性砂質土、2層は黒褐色粘性砂質土で炭化物を含む。3層は暗褐色粘性砂質土で、しまりが強い。遺物は無頸壺と思われる口縁部1点(758)、体部片5点が出土した。758は胎土に角閃石・金雲母を含むことから、讃岐からの搬入品と考えられる。所属時期は、弥生時代中期中葉か。

柱穴2453号 (SP12453) (第146図)

5-B区 β-II D・E-15・16で検出されたSX1004内で確認された柱穴。SP12454とSK1281を切った状態で検出した。平面形態・底面形態ともにやや不整な円形、断面形態は逆台形を呈し、直径0.32m前後、最大深度0.26mを測る。覆土は暗褐色を呈し、土質および含有物から2層に分層できる。1層は柱痕部にあたり、炭化物を若干含む。遺物は弥生土器片1点、サヌカイト製削器1点が出土し、図化できたのは凸刃・単刃をもつ削器(759)のみである。

柱穴2466号 (SP12466) (第147図)

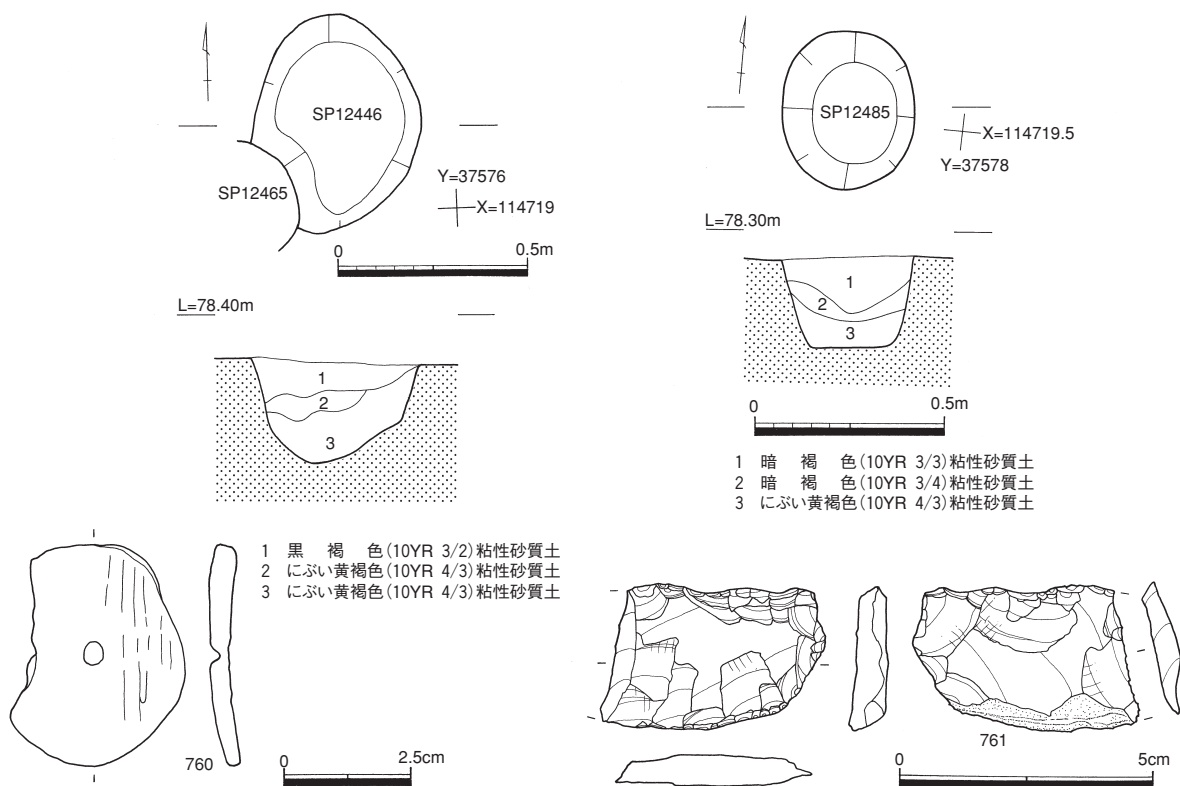
5-B区 β-II D・E-15・16で検出されたSX1004内で確認された柱穴。SP12465とSK1279と切り合い関係にあり、SP12465に切られた状態で検出した。平面形態・底面形態ともにやや不整な楕円形、断面形態は不整なU字形を呈し、長軸0.58m、短軸0.44m、最大深度0.27mを測る。覆土は土質および含有物から3層に分層できるものの、大きく2層に分けることができる。上層(1層)は暗褐色粘性砂質土で、黒褐色土ブロックを混入する。下層(2・3層)はにぶい黄褐色粘性砂質土で、2層は3層と比較して砂質が強い。遺物は弥生土器片12点、体部片を転用した土製紡錘車1点が出土し、図化できたのは未穿孔の紡錘車(760)のみである。



第146図 SP遺構図・出土遺物(7)

柱穴2485号 (SP12485) (第147図)

5-B区 β-II D・E-15・16で検出されたSX1004内で確認された柱穴。平面形態・底面形態ともに楕円形、断面形態は逆台形を呈し、長軸0.42m、短軸0.35m、最大深度0.24mを測る。覆土は土質および含有物から3層に分層できるものの、大きく2層に分けることができる。上層(1・2層)は暗褐色粘性砂質土で、1層の方が炭化物をやや多く含む。下層(3層)はにぶい黄褐色粘性砂質土で、やや砂質が強い。出土遺物は、サヌカイト製楔形石器(761)1点のみである。



第147図 SP遺構図・出土遺物(8)

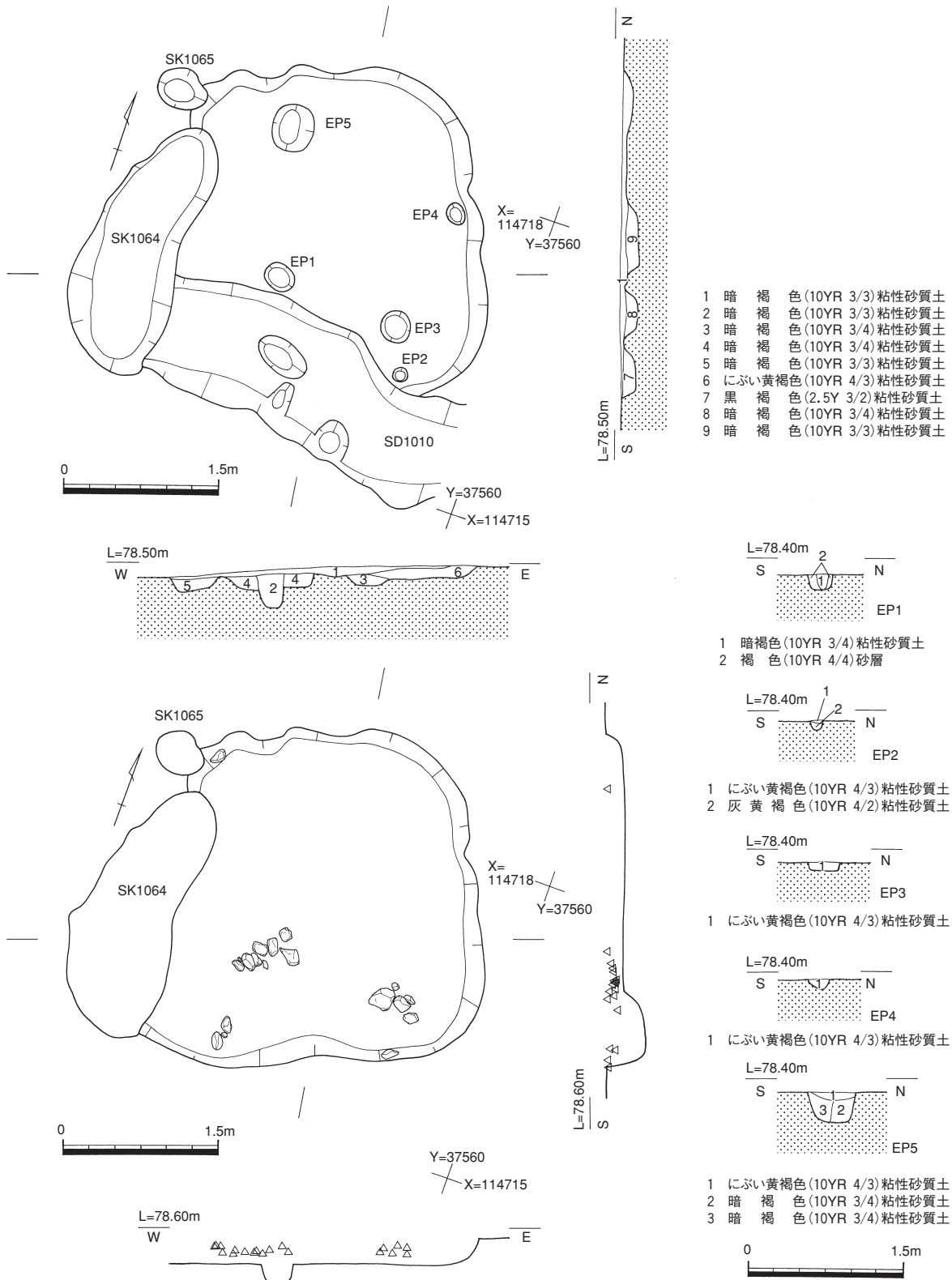
不明遺構

出土遺物から、弥生時代に属する性格不明遺構を6基確認した。そのうちの4基は、調査時において竪穴住居として調査されたものである。これらの4基について検討した結果、炉跡が確認されなかったものなど住居として報告するのに不適切な遺構は、不明遺構として報告することにした。

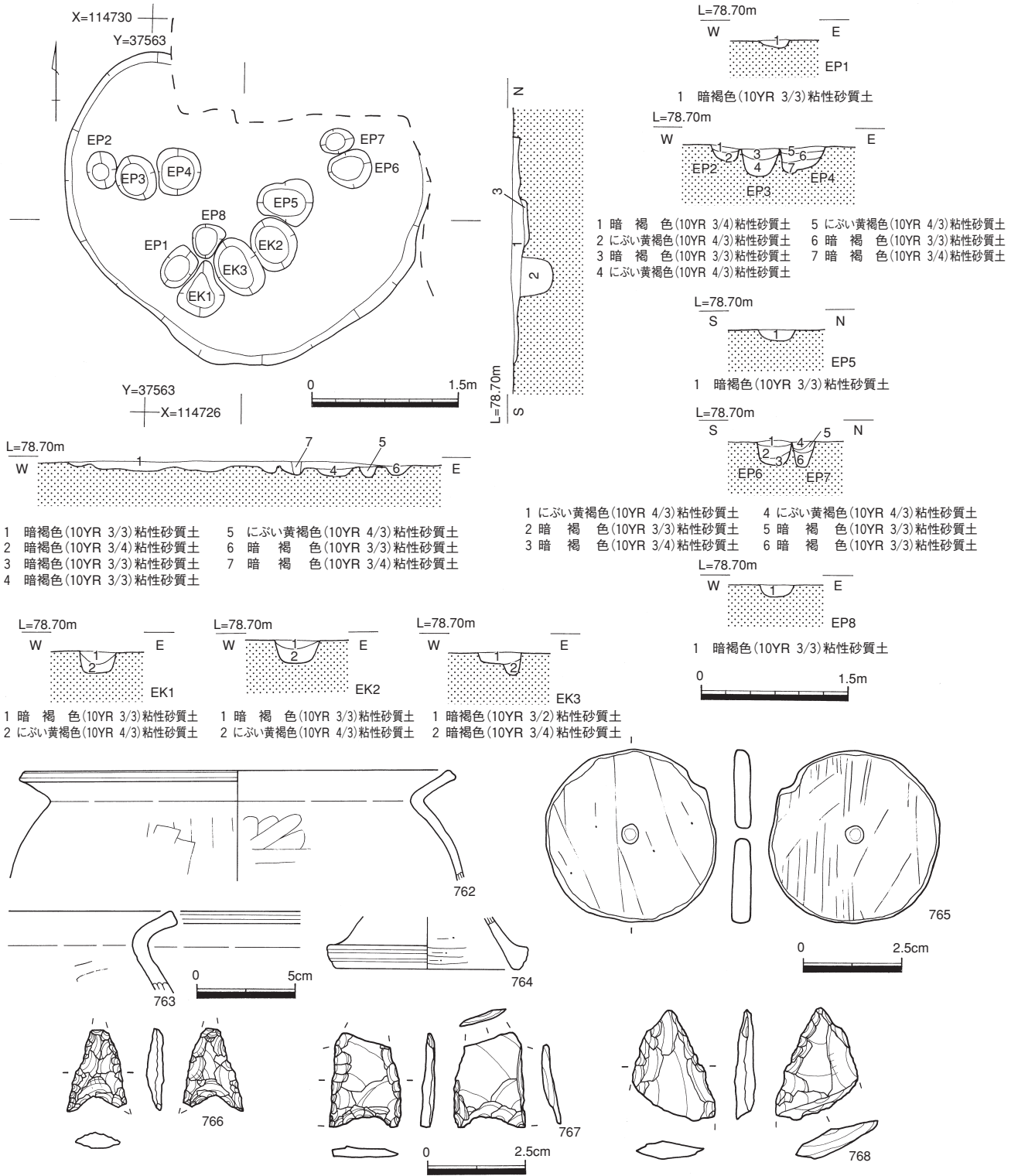
不明遺構1号 (SX1001) (第148図)

4-B区 β-II D-12でSD1010、SK1064・1065と切り合い関係にある状態で検出された不明遺構。遺構の新旧は、SD1010→SX1001→SK1064となる。平面形態・底面形態ともに不整な方形、断面形態は逆台形を呈し、長軸4.04m、短軸3.27m、最大深度0.17mを測る。覆土は土色および含有物から9層に分層でき、暗褐色を主体とする。土器片は1・4・8層で認められ、炭化物は全般的に若干含まれる。

覆土除去後、床面に柱穴5基を検出した。これらの柱穴がSX1001に伴うかどうかは不明だが、併せて報告する。各柱穴の覆土は土色および含有物からそれぞれ分層されるものの、概ねにぶい暗褐色を主体とする。規模は直径0.16~0.47mの円形で、深さ0.08~0.29mを測る。またEP1・5で、柱痕を確認した。出土遺物は、壺形土器口縁部・底部各1点、甕形土器1点、体部片35点、サヌカイト剥片9点である。壺は、口縁部内面に斜格子文が施される。図化できる遺物は、認められなかった。



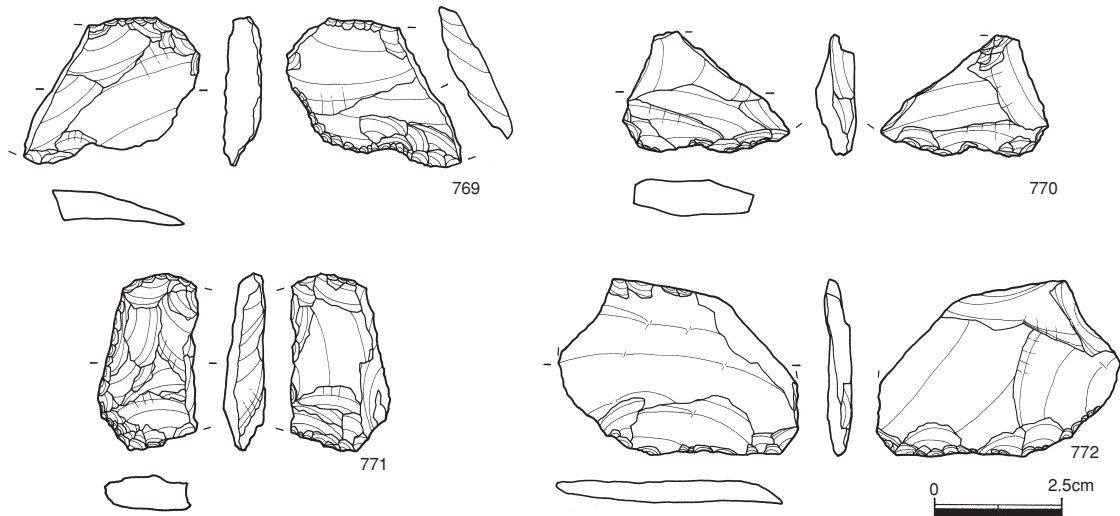
第148図 SX1001遺構図



第149図 SX1002遺構図・出土遺物

不明遺構 2号 (SX1002) (第149・150図)

4-B区 β-II D-12で攪乱に遺構の約1/4を切られた状態で検出された不明遺構。平面形態・底面形態ともに円形、断面形態は不整形を呈し、長軸3.67m、短軸2.48m、最大深度0.18mを測る。覆



第150図 SX1002出土遺物

土は土質および含有物から7層に分層できるものの、概ね暗褐色を主体とする。1・3・4層で炭化物を多く含むことから、全般的に炭化物が認められることになる。

覆土除去後、床面に柱穴8基、土坑3基を検出した。これらの柱穴および土坑がSX1002に伴うかどうかは不明だが、併せて報告する。各柱穴・土坑の覆土は、土色および含有物からそれぞれ分層されるものの、概ね暗褐色を主体とする。EK3の1層は、炭化物を多く含む。柱穴の規模は直径・長軸0.35～0.58mの円形および楕円形で、最大深度0.09～0.27mを測る。柱痕は確認できなかった。土坑3基は長軸0.54～0.62m、短軸0.45～0.47m、最大深度0.21～0.24mを測る。

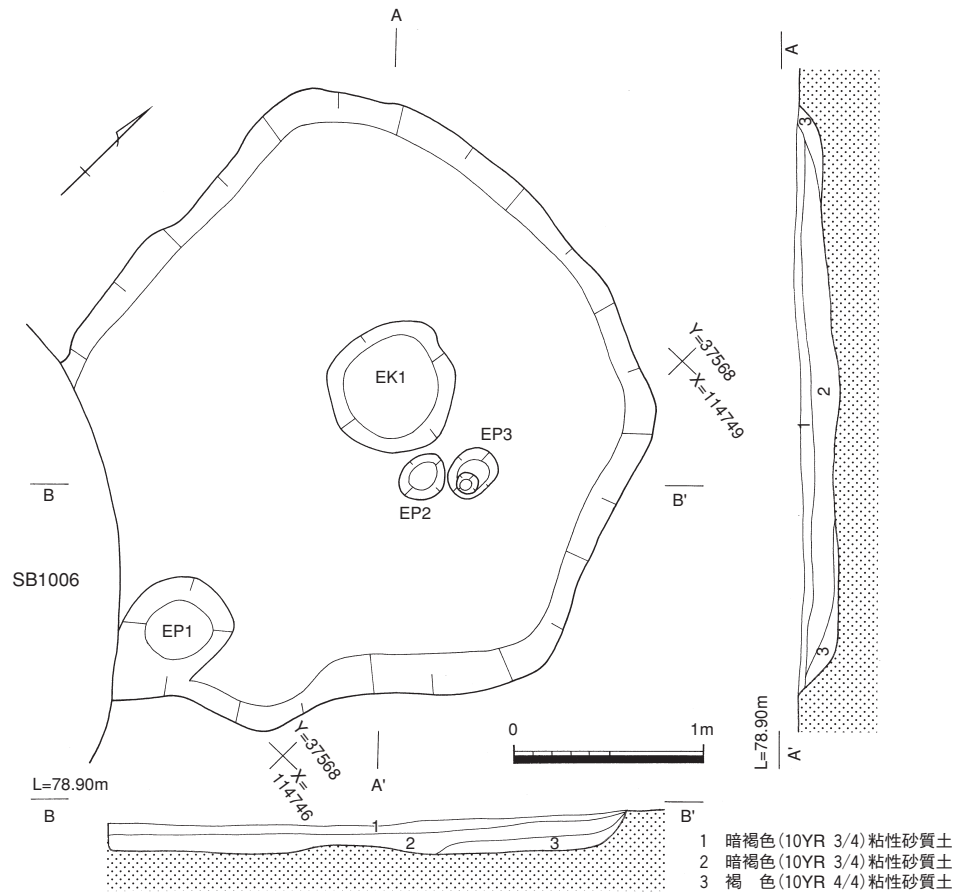
出土遺物は、壺形土器口縁部6点・底部1点、甕形土器口縁部2点・底部3点、高坏形土器脚部1点、体部片114点、土製紡錘車1点、サヌカイト製石鏃1点・楔形石器3点・削器1点・剥片72点、結晶片岩剥片1点である。そのうち図化できたのは、甕(762・763)、高坏脚部(764)、土製紡錘車(765)、サヌカイト製石鏃(764～768)・楔形石器(769～771)・削器(772)である。図化できなかった壺の中に、口縁部端面に凹線を施し、内面に斜格子文を施す個体がある。762は、口縁端部に炭化物が多く付着する。石鏃3点のうち766・767は凹基式、768は欠損するが平基三角と思われる。出土遺物から弥生時代中期中葉～後期初頭の年代が与えられるが、主体となる時期は後期初頭と思われる。

不明遺構3号 (SX1003) (第151～154図)

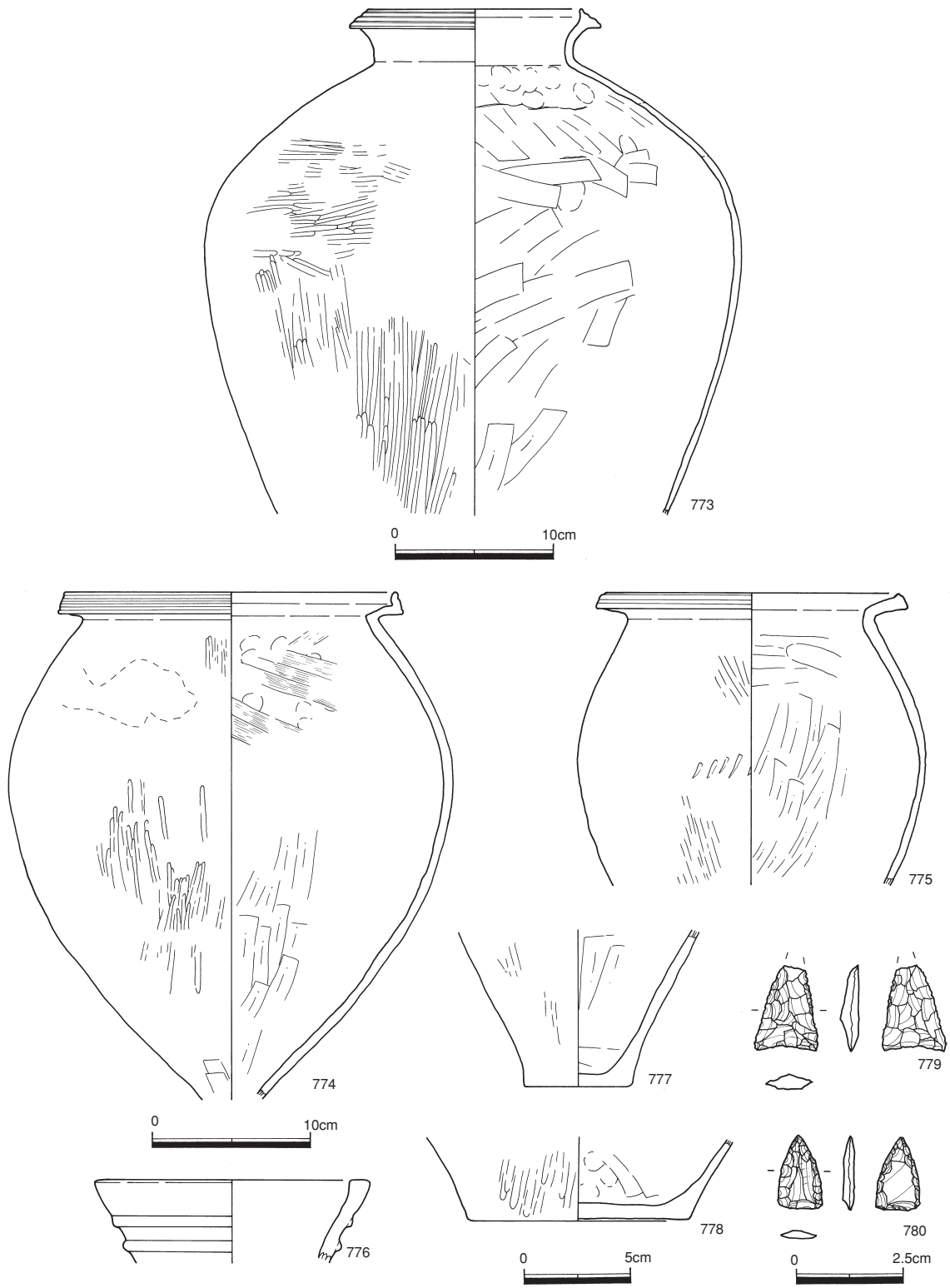
5-A区 β-II J-14でSB1006に切られた状態で検出された不明遺構。平面形態・底面形態ともに不整形、断面形態は舟底形を呈し、長軸3.29m、短軸2.99m、最大深度0.39mを測る。覆土は土質および含有物から3層に分層でき、概ね暗褐色を主体とする。1・3層でにぶい黄褐色土ブロックを若干混入する。土器および直径10～30cm大の礫は、1層と2層上層から出土した。

覆土除去後、床面に柱穴3基、土坑1基を検出した。これらの柱穴および土坑がSX1003に伴うかどうか不明だが、併せて報告する。柱穴の規模は、直径・長軸0.27～0.51mの円形および楕円形で、最大深度0.11～0.33mを測る。EK1は長軸0.71m、短軸0.67m、最大深度0.15mを測るやや不整形な円形である。遺物は、EP1・EK1から弥生土器片がそれぞれ出土した。

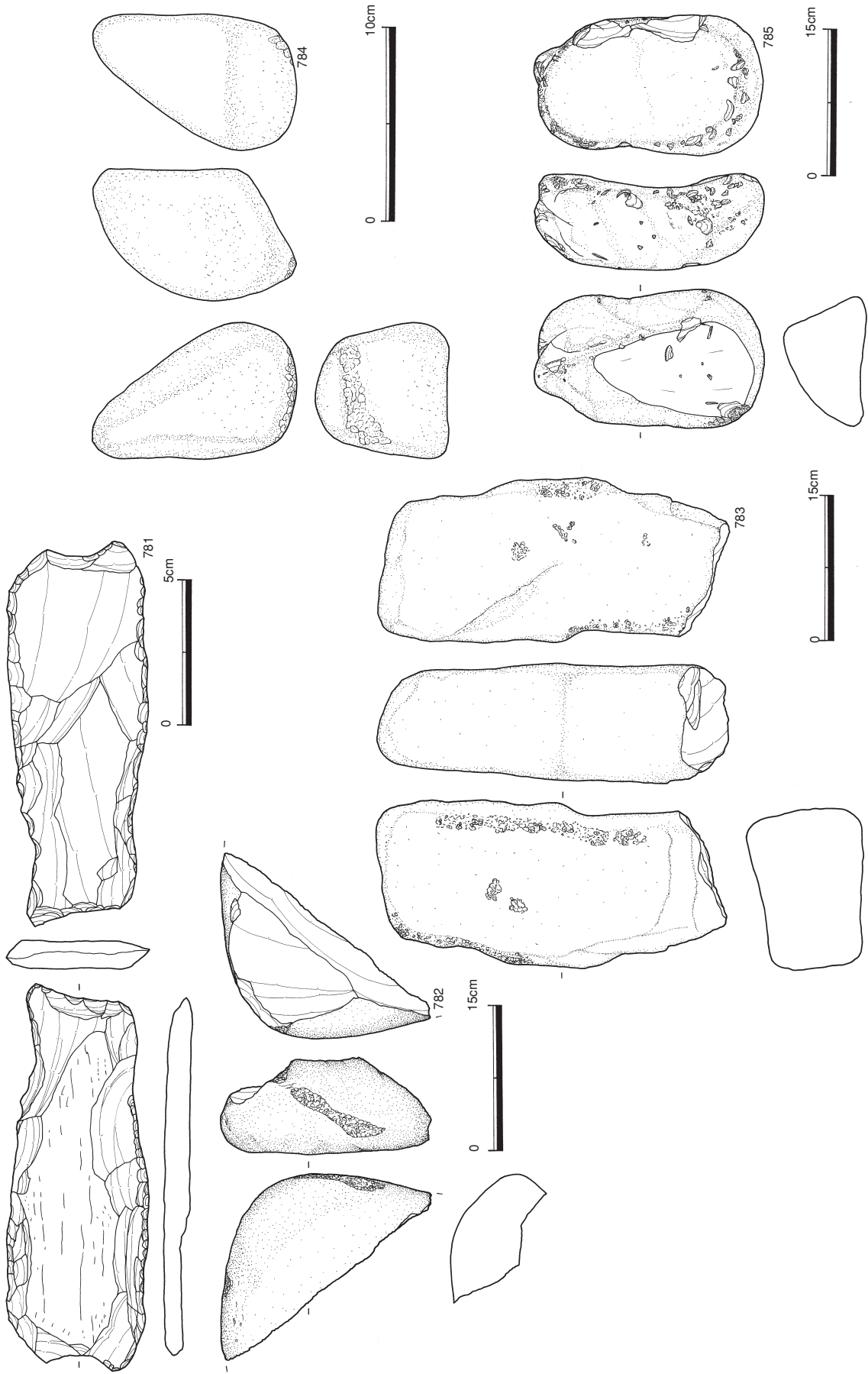
遺物は、壺形土器4点、甕形土器16点、鉢形土器2点、サヌカイト製石鏃2点・剥片11点、打製石庖丁・結晶片岩剥片各1点、砂岩製敲石1点、台石2点、砥石3点が出土した。その中で図化できたのは、



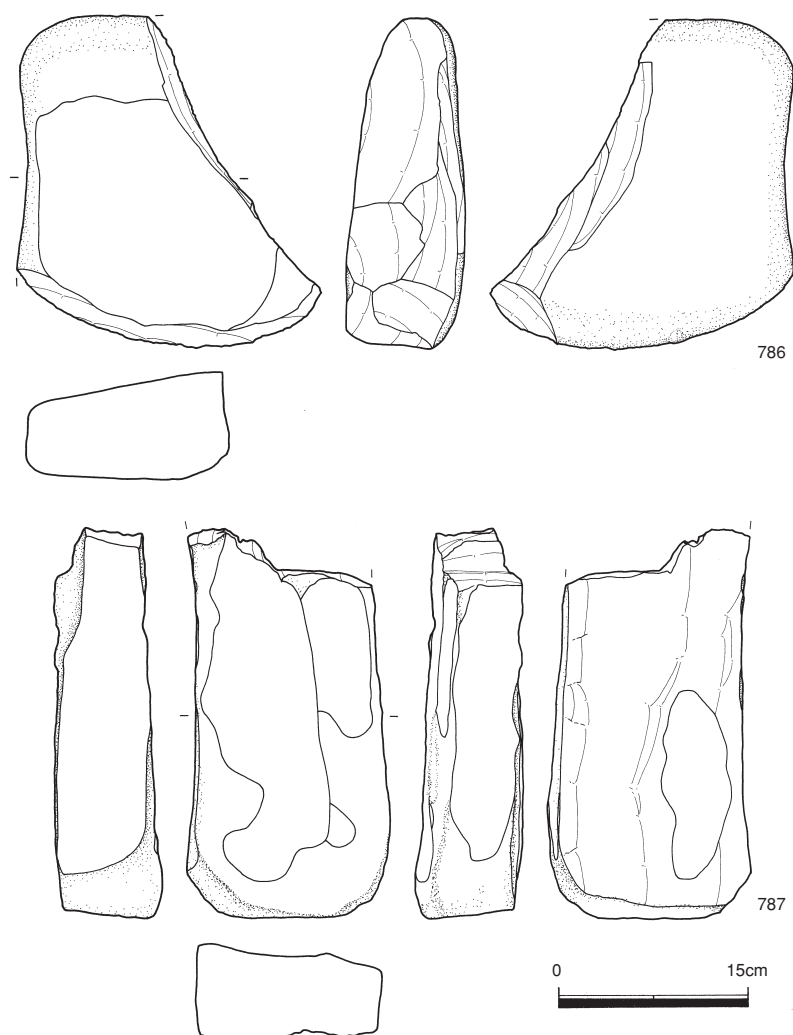
第151図 SX1003遺構図



第152図 SX1003出土遺物(1)



第153図 SX1003出土遺物(2)

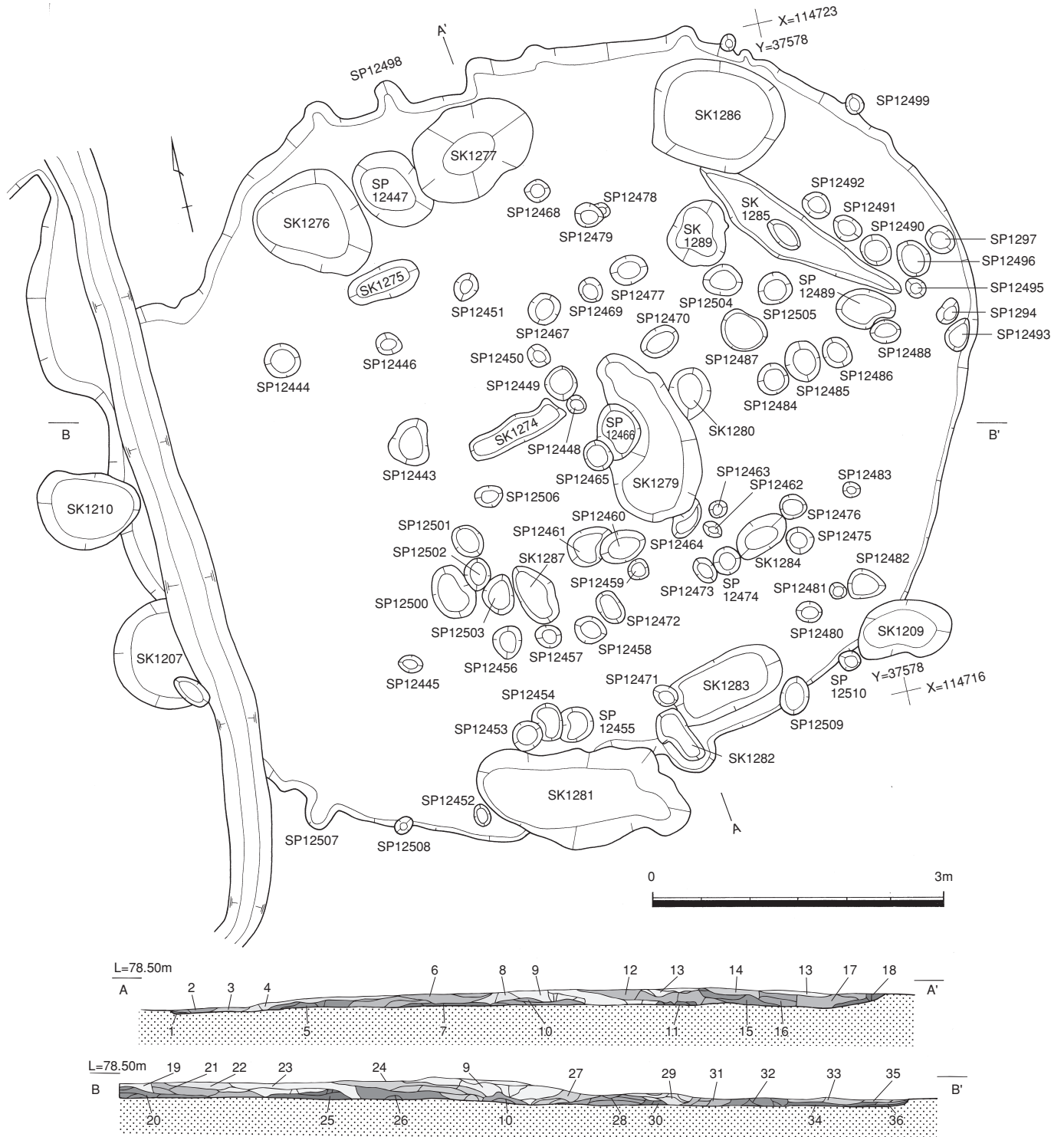


第154図 SX1003出土遺物(3)

壺 (773・776・778)、甕 (774・775・777)、石鏃 (779・780)、砂質片岩を用いた石庖丁 (781)、台石 (782・783)、敲石 (784)、砥石 (785～787) である。782の石材は閃緑岩、783は砂岩を用いる。773は、口縁部から体部上位にかけて内外面ともに炭化物の付着が多く認められる。774では外面は体部中位に、内面は体部下位に炭化物の付着が認められる。特に内面の付着量が多い。775では、体部中位を中心に器表面の荒れが認められる。内面頸部では、粘土紐積み上げ時のユビオサエによるものと思われる右上方向に並ぶ爪痕が認められる。779は凹基式、780は平基三角の石鏃である。781は平刃・単刃をもつ。784は、下側面に敲打痕が認められる。782は右側面に1個所、783は表裏面にそれぞれ4個所に敲打痕が認められる。785・786は表面1個所に、787は左右側面・表裏面の4個所に磨面が認められる。出土遺物から、遺構の所属時期は弥生時代中期中葉～後葉と思われる。

不明遺構 4号 (SX1004) (第155～160図)

5-B区 β-II D・E-15・16でSK1209・1281、SP7基に切られた状態で検出された不明遺構。平面形態・底面形態ともに不整な円形、断面形態は舟底形を呈し、長軸9.23m、短軸7.84m、最大深度0.26

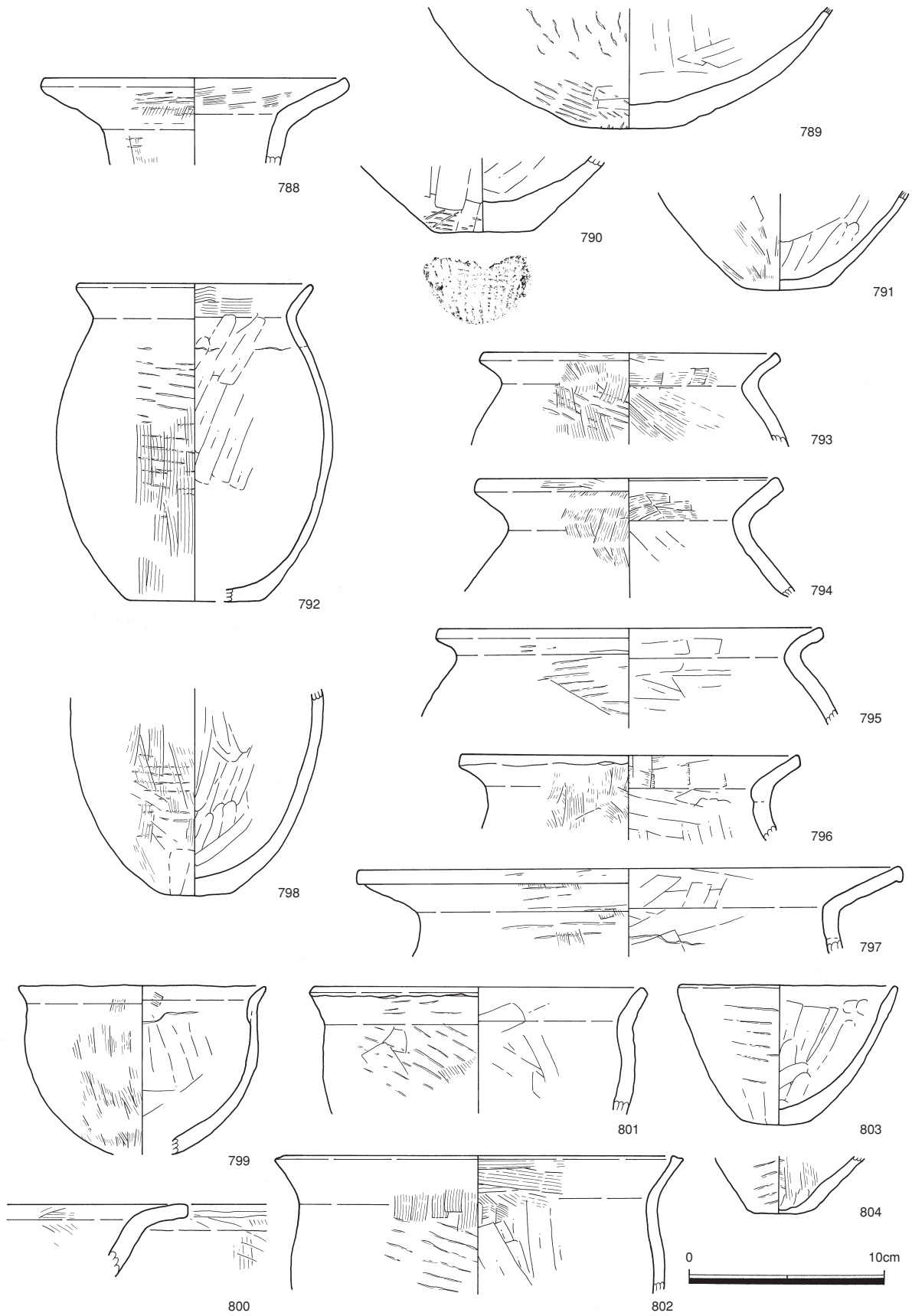


- | | | | |
|-------------------------|--------------------------|--------------------------|--------------------------|
| 1 褐色(10YR 4/4)粘性砂質土 | 10 黄褐色(10YR 5/6)粘性砂質土 | 19 にぶい黄褐色(10YR 4/3)粘性砂質土 | 28 褐色(10YR 4/4)粘性砂質土 |
| 2 にぶい黄褐色(10YR 4/3)粘性砂質土 | 11 にぶい黄褐色(10YR 4/3)粘性砂質土 | 20 暗褐色(10YR 3/4)粘性砂質土 | 29 暗褐色(10YR 3/3)粘性砂質土 |
| 3 暗褐色(10YR 3/4)粘性砂質土 | 12 黒褐色(10YR 2/3)粘性砂質土 | 21 暗褐色(10YR 3/3)粘性砂質土 | 30 にぶい黄褐色(10YR 4/3)粘性砂質土 |
| 4 にぶい黄褐色(10YR 4/3)粘性砂質土 | 13 暗褐色(10YR 3/4)粘性砂質土 | 22 にぶい黄褐色(10YR 4/3)粘性砂質土 | 31 褐色(10YR 4/4)砂質土 |
| 5 暗褐色(10YR 3/3)粘性砂質土 | 14 にぶい黄褐色(10YR 4/3)粘性砂質土 | 23 暗褐色(10YR 3/4)粘性砂質土 | 32 褐色(10YR 3/3)粘性砂質土 |
| 6 暗褐色(10YR 3/4)粘性砂質土 | 15 黒褐色(10YR 3/2)粘性砂質土 | 24 黒褐色(10YR 2/3)粘性砂質土 | 33 褐色(10YR 4/4)粘性砂質土 |
| 7 褐色(10YR 4/6)粘性砂質土 | 16 黒褐色(10YR 3/2)粘性砂質土 | 25 にぶい黄褐色(10YR 4/3)粘性砂質土 | 34 暗褐色(10YR 3/4)粘性砂質土 |
| 8 褐色(10YR 4/6)粘性砂質土 | 17 暗褐色(10YR 3/3)粘性砂質土 | 26 黄褐色(10YR 5/6)粘性砂質土 | 35 褐色(10YR 4/4)粘性砂質土 |
| 9 暗褐色(10YR 3/3)粘性砂質土 | 18 暗褐色(10YR 3/4)粘性砂質土 | 27 暗褐色(10YR 3/3)粘性砂質土 | 36 暗褐色(10YR 3/3)粘性砂質土 |

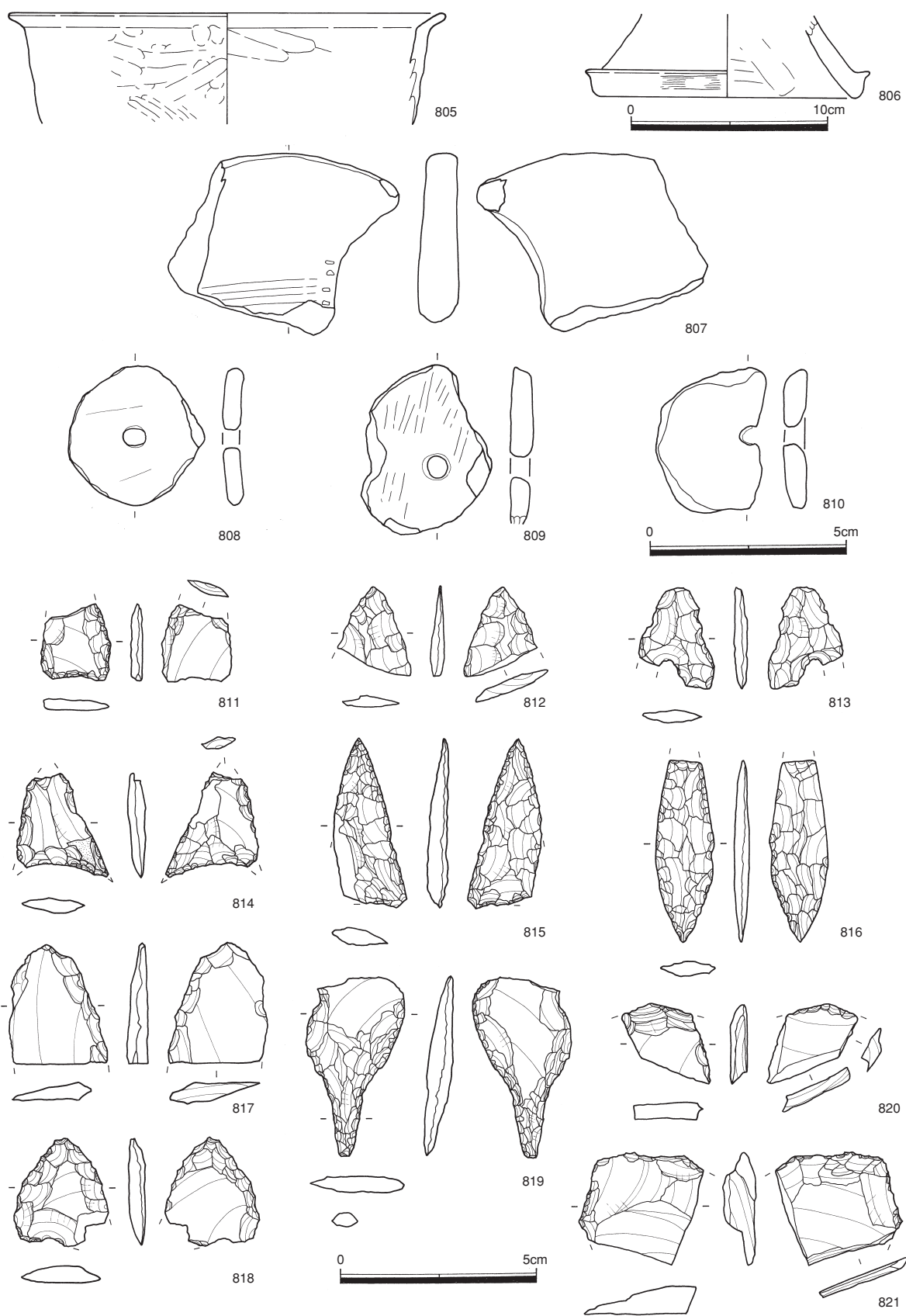
第155図 SX1004遺構図(1)



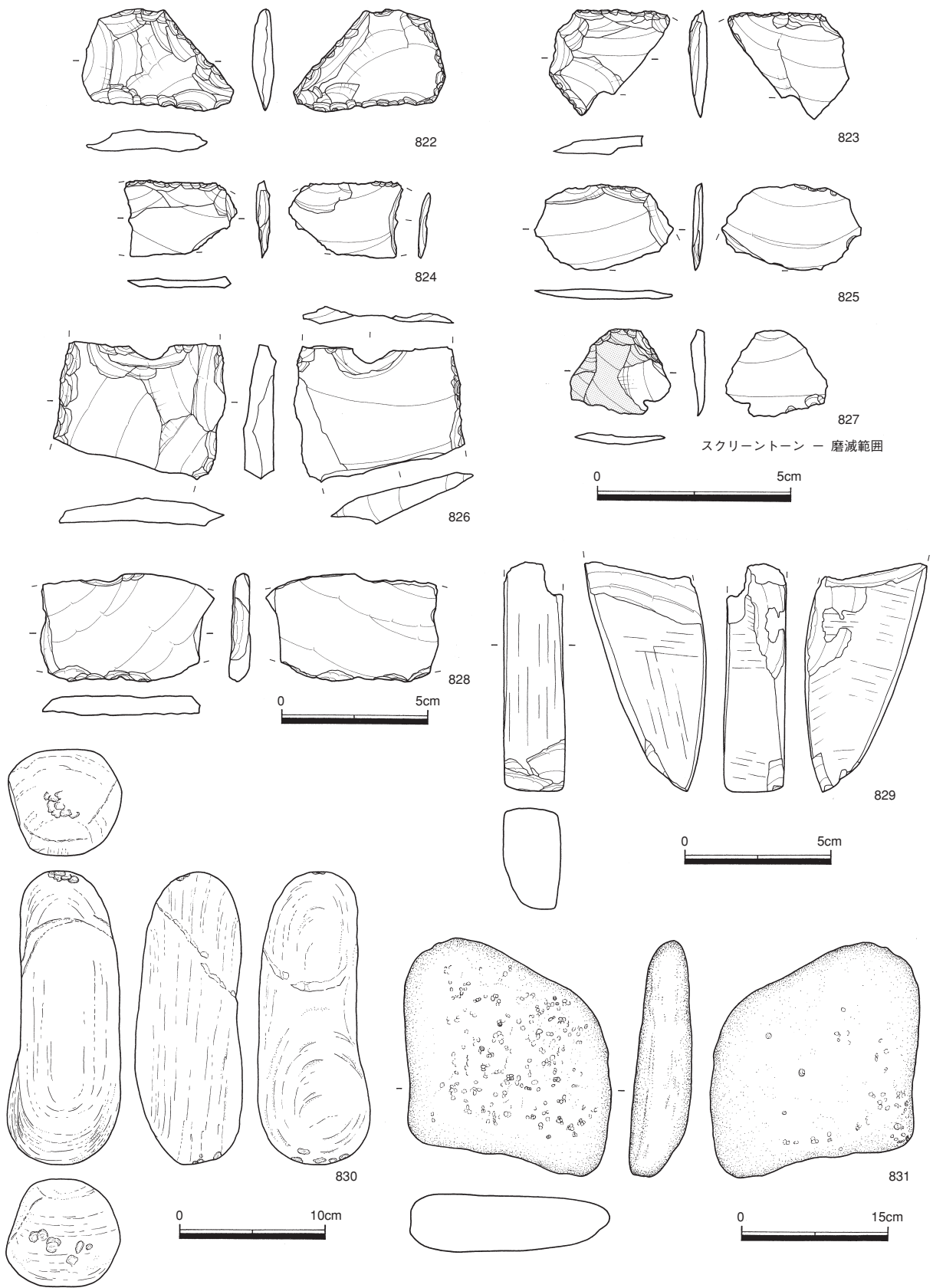
第156図 SX1004遺構図(2)



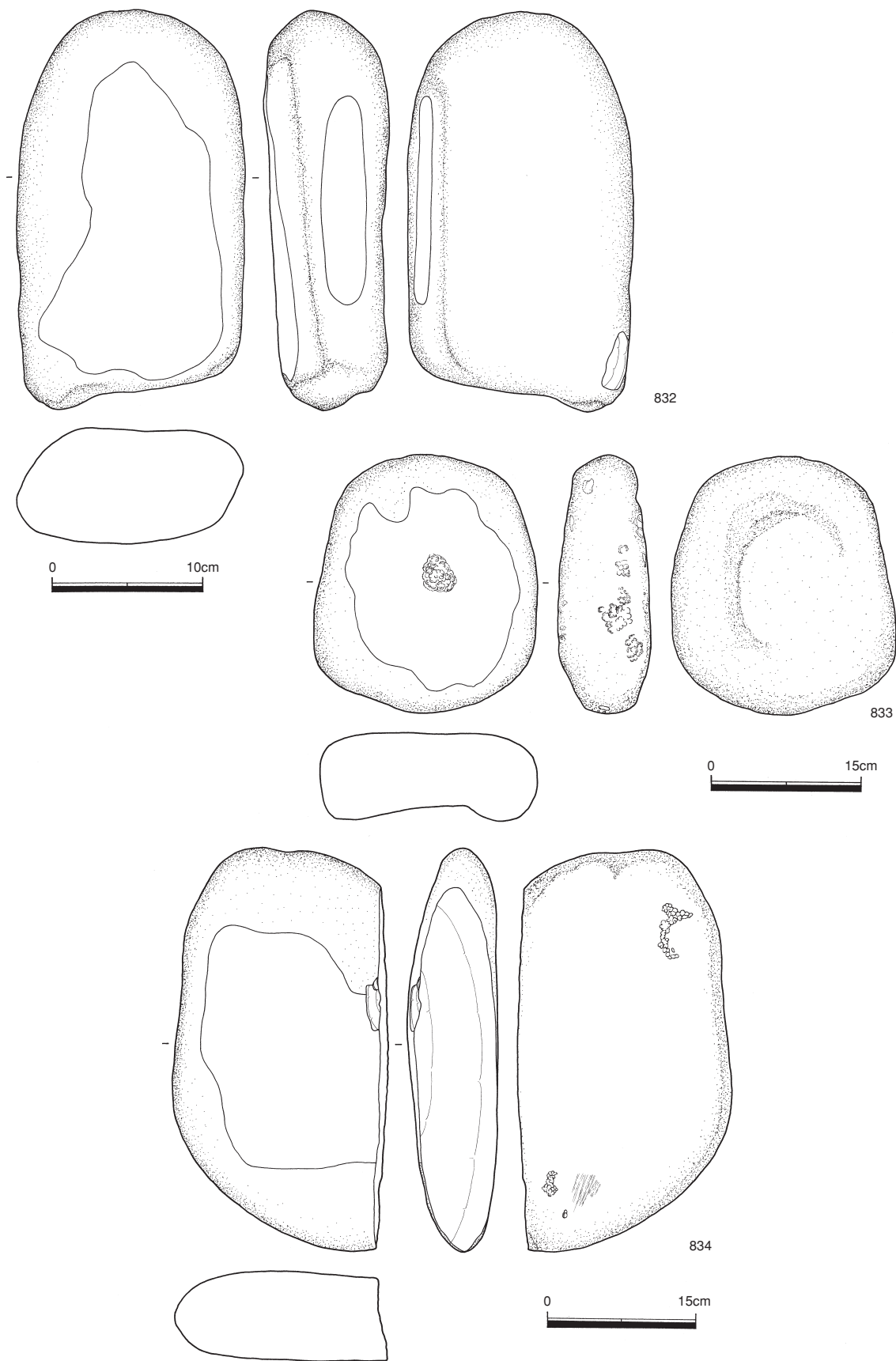
第157图 SX1004出土遺物(1)



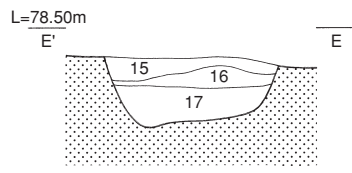
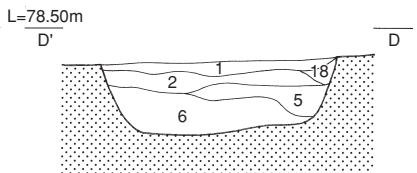
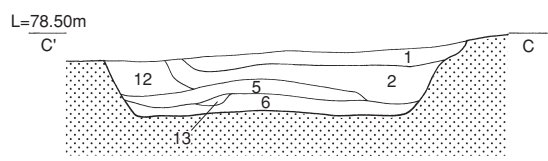
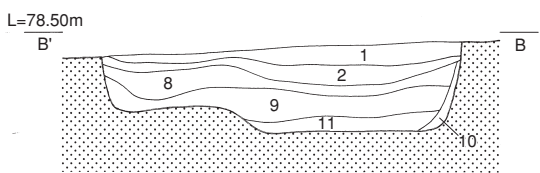
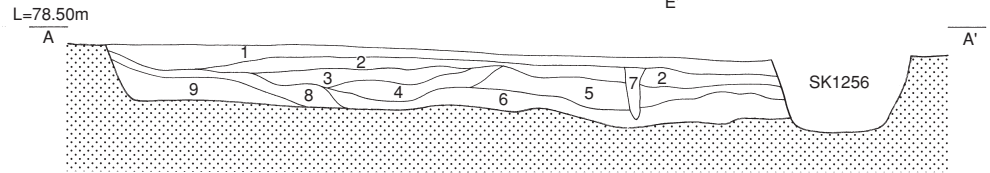
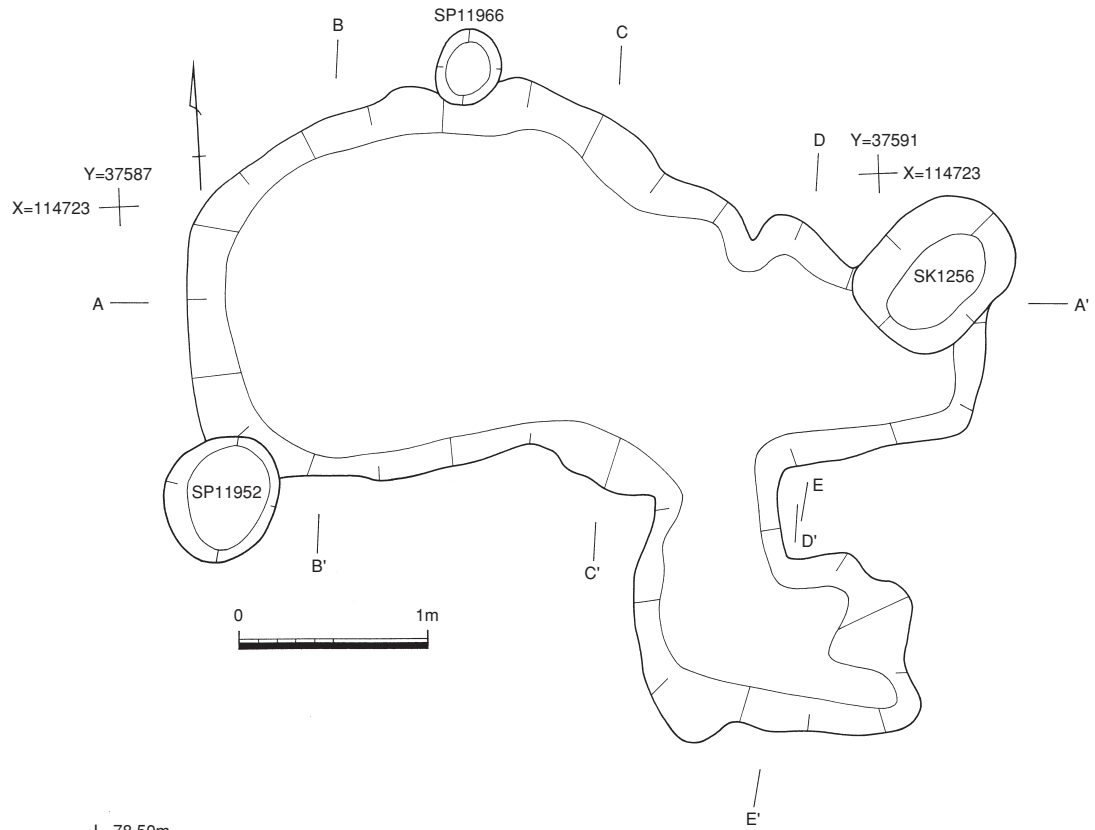
第158图 SX1004出土遺物(2)



第159図 SX1004出土遺物(3)

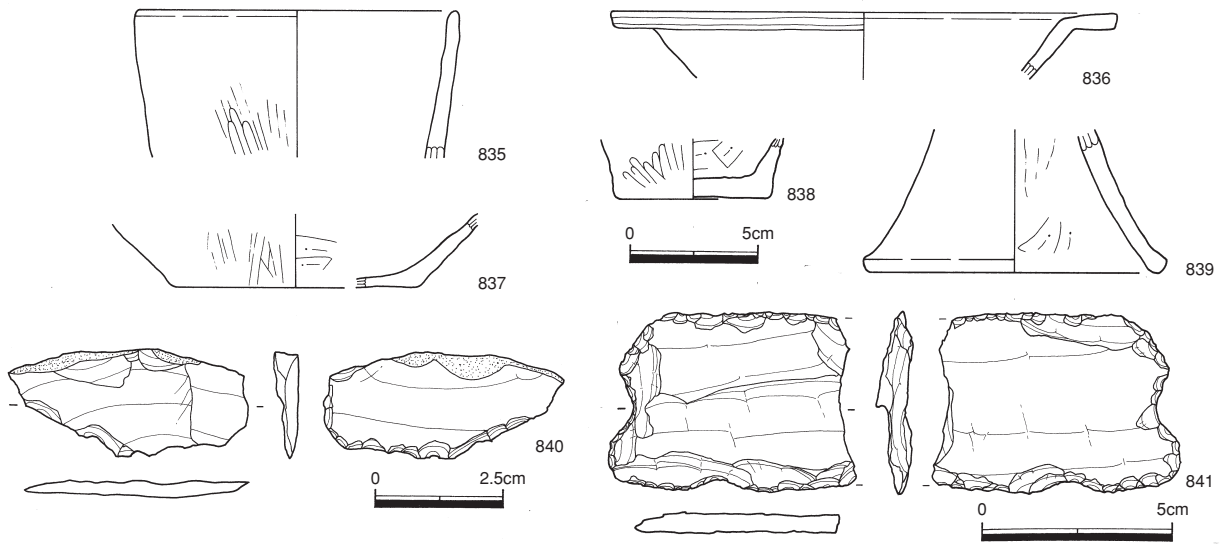


第160图 SX1004出土遺物(4)



- | | | |
|------------------------------------|------------------------------------|-------------------------------------|
| 1 暗 褐 色 (10YR 3/4) 粘性砂質土 | 7 暗 褐 色 (10YR 3/4) 粘性砂質土 | 13 に ぶ い 黄 褐 色 (10YR 4/3) 粘 性 砂 質 土 |
| 2 に ぶ い 黄 褐 色 (10YR 4/3) 粘 性 砂 質 土 | 8 に ぶ い 黄 褐 色 (10YR 4/3) 粘 性 砂 質 土 | 14 暗 褐 色 (10YR 3/4) 粘 性 砂 質 土 |
| 3 暗 褐 色 (10YR 3/4) 粘 性 砂 質 土 | 9 に ぶ い 黄 褐 色 (10YR 4/3) 粘 性 砂 質 土 | 15 暗 褐 色 (10YR 3/4) 粘 性 砂 質 土 |
| 4 暗 褐 色 (10YR 3/4) 粘 性 砂 質 土 | 10 褐 色 (10YR 4/4) 粘 性 砂 質 土 | 16 に ぶ い 黄 褐 色 (10YR 4/3) 粘 性 砂 質 土 |
| 5 に ぶ い 黄 褐 色 (10YR 4/3) 粘 性 砂 質 土 | 11 暗 褐 色 (10YR 3/4) 粘 性 砂 質 土 | 17 暗 褐 色 (10YR 3/4) 粘 性 砂 質 土 |
| 6 暗 褐 色 (10YR 3/4) 粘 性 砂 質 土 | 12 暗 褐 色 (10YR 3/4) 粘 性 砂 質 土 | 18 暗 褐 色 (10YR 3/4) 粘 性 砂 質 土 |

第161図 SX1005遺構図



第162図 SX1005出土遺物

mを測る。覆土は、調査時の所見では71層に分層される。これは層中に含まれるブロック土を一つの層として捉え、このように細分化したと思われる。堆積状況を検討した結果、大きく36層に分けることができ、本報告においてはこの検討結果に基づく。

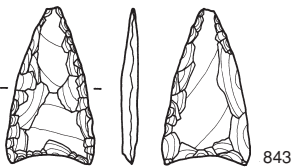
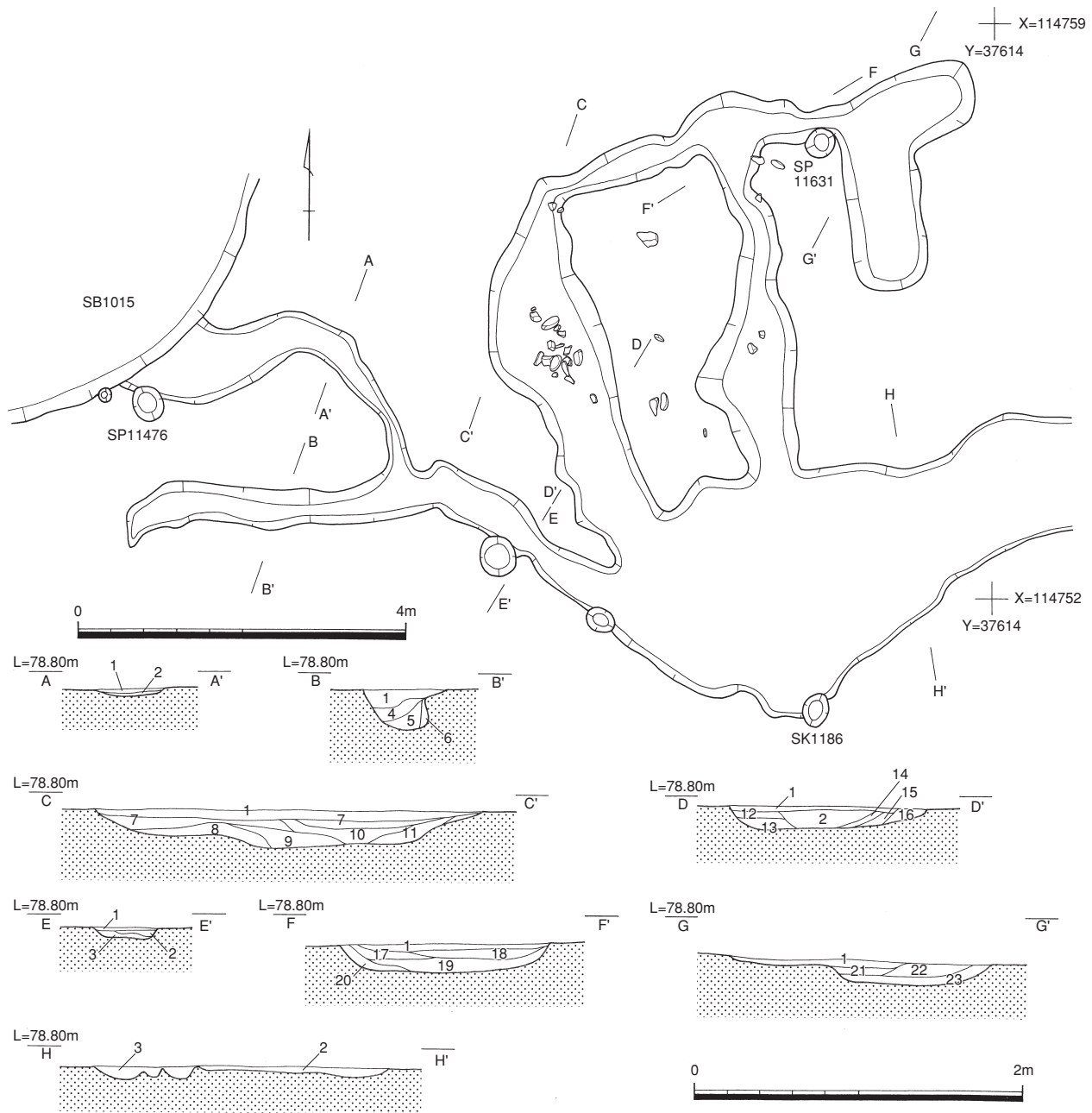
また覆土除去後、床面に柱穴61基、土坑14基を検出した。多数の柱穴・土坑を遺構内で検出しているが確実に伴うものを判断できず、積極的に住居跡と判断する根拠がないために不明遺構とした。これらの柱穴・土坑は、別遺構として報告している。

覆土は土色および含有物から、36層に分層できる。8・9・13・15・16・18・20・23・24・28・32層で、それぞれ褐色土・にぶい黄褐色土ブロックを混入する。炭化物の含有量は全般的に少なく、13層のみに含まれる。遺物は上層に多く認められ、散在した状態での出土である。

遺物は壺形土器62点、甕形土器58点、鉢形土器8点、高坏形土器口縁部1点・脚部2点、体部片1049点、土製紡錘車3点、分銅形土製品1点、サヌカイト製石鏃・石錐・楔形石器13点・剥片77点、結晶片岩製打製石庖丁・石斧・敲石計12点、砂岩製台石・砥石計5点の総数1291点が出土した。そのうち図化できたのは壺(788~791)、甕(792~798・802)、鉢(799~801・803~805)、高坏(806)、分銅形土製品(807)、土製紡錘車(808~810)、石鏃(811~818)、石錐(819)、楔形石器(820~822)、剥片(823~827)、打製石庖丁(828)、柱状片刃石斧(829)、敲石(830)、台石(831)、砥石(832~834)の計47点である。

出土した土器の大半が、タタキ成形による。788・795・801のように、口縁端部近くまでタタキが及ぶ個体も認められる。790の底面では、タタキが格子目状に施される。792は、外面体部下位に炭化物が多く付着する。798は内外面に炭化物が付着し、特に内面の付着量が多い。出土した鉢のうちボール形は803のみで、口縁部を折り曲げるものが主体となる。803の内面の調整はケズリの後ユビナデを施すが、体部下位と比較して上位の調整が粗い。807は欠損しているものの、ハケメと棒状工具による刺突文が施されているのがわかる。

石鏃は811・812は平基三角、813~815は凹基式、816は有茎式、817・818は未製品である。819は、摘みを有する。楔形石器のうち、822では右側縁部の一部でつぶれ痕が、827では部分的に磨減痕が認められる。828は、平刃・単刃をもつ。使用石材として828・829は砂質片岩を、830は緑泥片岩を用いる。砥



- | | |
|--------------------------|--------------------------|
| 1 にぶい黄褐色(10YR 4/3)粘性砂質土 | 13 暗褐色(10YR 3/4)粘質土 |
| 2 灰黄褐色(10YR 4/2)粘性砂質土 | 14 暗褐色(10YR 3/4)粘質土 |
| 3 にぶい黄褐色(10YR 4/3)粘性砂質土 | 15 オリーブ褐色(2.5Y 4/4)粘性砂質土 |
| 4 暗褐色(10YR 3/4)粘性砂質土 | 16 にぶい黄褐色(10YR 4/3)粘性砂質土 |
| 5 暗褐色(10YR 3/4)粘性砂質土 | 17 暗灰褐色(2.5Y 5/2)粘性砂質土 |
| 6 暗褐色(10YR 3/4)粘質土 | 18 灰黄褐色(10YR 5/2)粘性砂質土 |
| 7 暗褐色(10YR 3/4)粘性砂質土 | 19 褐色(10YR 4/4)粘質土 |
| 8 暗褐色(10YR 3/4)粘性砂質土 | 20 にぶい黄褐色(10YR 4/3)粘性砂質土 |
| 9 暗褐色(10YR 3/4)粘質土 | 21 灰黄褐色(10YR 4/2)粘性砂質土 |
| 10 暗褐色(10YR 3/4)粘性砂質土 | 22 にぶい黄褐色(10YR 4/3)粘性砂質土 |
| 11 暗褐色(10YR 3/4)粘質土 | 23 暗褐色(10YR 3/4)粘質土 |
| 12 にぶい黄褐色(10YR 4/3)粘性砂質土 | |

163図 SX1006遺構図・出土遺物

石のうち、834の裏面では敲打痕と線条痕が認められる。出土遺物から、弥生時代後期中葉～終末期の年代が与えられる。799のように丸底も認められるが平底が主体である。よって終末期前半を主体とする。

また切り合い関係を持つSK1283・1286の出土遺物から、SK1286出土遺物がSX1004出土遺物より若干後出する可能性がある。SK1283では大きな差異は認められず、併行する可能性がある。

不明遺構 5号 (SX1005) (第161・162図)

5-B区 β-II E-18・19でSK1256、SP11952・11966に切られた状態で検出された不明遺構。平面形態・底面形態ともに不整形、断面形態は逆台形を呈し、長軸4.27m、短軸1.92m、最大深度0.53mを測る。平面形態から複数の遺構の切りあい関係を想定したが、土層堆積状況からそれを裏付けることはできなかった。しかし後述するように、時代の異なる遺物の出土から複数の遺構の存在を想定できる。覆土は土色および含有物から18層に分層できるものの、暗褐色粘性砂質土とにぶい黄褐色粘性砂質土との互層である。2・3層では、直径5～20cm大の礫が多く認められる。

遺物は、壺形土器9点、甕形土器9点、高坏形土器2点、体部片232点、サヌカイト剥片10点、打製石庖丁5点、砂岩2点、土師質土器杯・須恵質土器片・白磁各1点、肥前系陶器片・陶器製灯明皿各1点が出土した。その中で図化できたものは、壺(835・837)、甕(838)、高坏(836・839)、サヌカイト剥片(840)、紅簾片岩を用いた石庖丁(841)である。836のように水平口縁を持つ高坏の出土は、この1点のみである。また841は、平刃・単刃を持つ。中近世遺物は、検出できなかった遺構から出土したものであると思われる。

不明遺構 6号 (SX1006) (第163図)

5-A区 β-III K・L-1～3でSB1015、SK1186、SP4基に切られた状態で検出された不明遺構。平面形態・底面形態ともに不整形、断面形態は緩やかな舟底形を呈し、最大長12.53m、最大幅1.90m、最大深度0.22mを測る。平面形態から自然流路を想定したものの、検出できなかった複数の遺構が想定でき、また遺物の出土量が多いことから不明遺構とした。覆土は、土色および含有物から23層に分層できる。

遺物は口縁端部に凹線が認められる壺形土器12点、甕形土器8点、高坏形土器2点、体部片573点、サヌカイト製石鏃1点・剥片2点が出土した。図化できた遺物は、底部に穿孔が認められる甕(842)と凹基式の石鏃(843)のみである。

(2) 鎌倉・室町時代

弥生時代の遺構が5区を中心域として検出されたのに対して、鎌倉・室町時代の遺構はそれより西よりの4区を中心に検出された。この時代の遺構は、東側ではその遺構密度が希薄となる。弥生時代の集落域が吉野川に面する段丘端部まで広がりをもせたことと推測されるのに対し、鎌倉・室町時代では現在の集落がある調査区の北側に集落の中心域を移した可能性もある。

この時期の遺構として検出したのは、掘立柱建物10棟、土坑32基、集石遺構1基、溝4条である。これらの遺構から出土した遺物は、12世紀後半～16世紀と時期幅がある。

掘立柱建物

掘立柱建物1号 (SA1001) (第164図)

4-A区 β-II F・G-2・3で確認された9基の柱穴で構成される掘立柱建物。EP2はSK1028と、EP9はSP1221とそれぞれ切り合い関係をもつ。また南側に、SA1002が隣接する。

建物の規模は梁間2間(3.4m)、桁行2間(3.79m)、床面積12.87m²を測り、平面形態は若干いびつな方形を呈する。柱間寸法は梁間1.40～2.00m、桁行1.62～2.08mを測る。棟方向はN-7°-Wに向く。柱穴掘り方は不整な円形もしくは楕円形を呈し、径は23～58cm、深度12～56cmを測る。柱痕はEP1、EP6～EP8で確認できた。またEP3内で、根石と考えられる直径20cm大の石を確認した。

遺物は、EP1の柱穴掘り方内部から土師質土器片・土師質土器鍋片・焼土塊が、EP2から土師質土器片・土師質土器羽釜片・焼土塊が、EP3・EP5・EP9から土師質土器片が、EP6から土師質土器杯(844)が、EP7から土師質土器杯が、EP8から土師質土器杯・土師質土器片・陶器片が出土した。本遺構の所属時期は、出土遺物から15～16世紀後半と推測される。

掘立柱建物2号 (SA1002) (第165図)

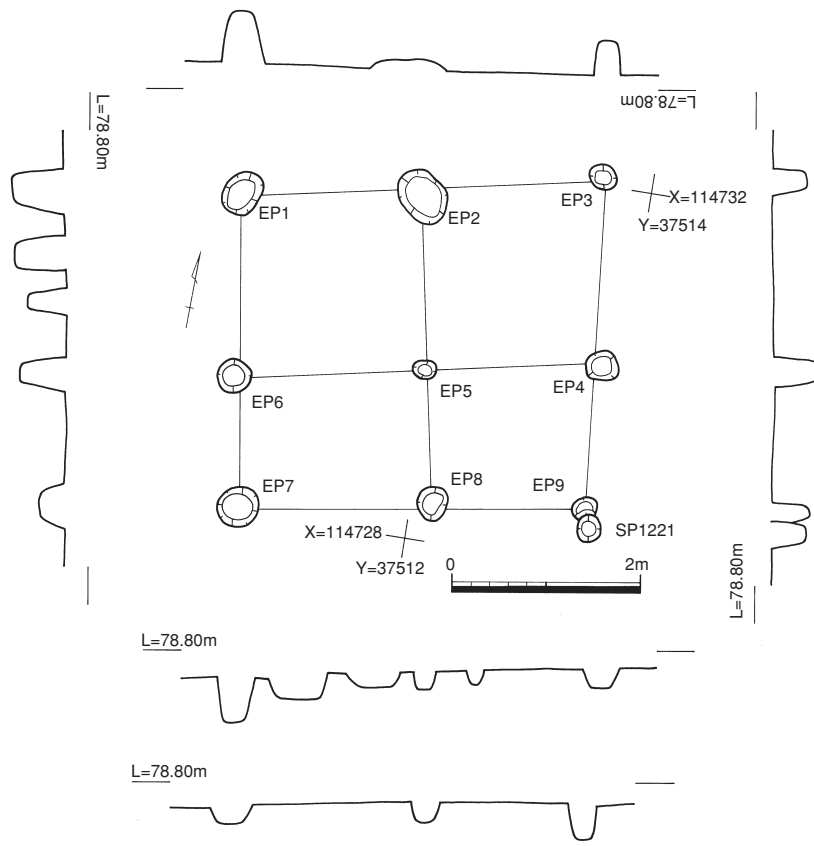
4-A区 β-II E・F-2～4で確認された8基の柱穴で構成される掘立柱建物。EP3はSP1212・1213と、EP5はSK1021と、EP7はSP1200とそれぞれ切り合い関係をもつ。またSA1002はSA1001と北側で隣接し、SA1003と南側で重複する。

建物の規模は梁間1間(2.42m)、桁行3間(6.87m)、床面積16.05m²を測り、平面形態は長方形を呈する。柱間寸法は梁間2.24～2.56m、桁行1.83～2.94mを測る。棟方向はN-5.5°-Wに向く。柱穴掘り方は不整な円形もしくは楕円形を呈し、径は52～63cm、深度30～55cmを測る。柱痕は、EP1・EP2・EP7・EP8で確認できた。またEP5・EP6で、根石と考えられる直径10～30cm大の石を柱穴内で確認した。EP1・EP8の柱穴掘り方内部から土師質土器片、EP2から土師質土器片・鉄片、EP4から鉄片、EP5から土師質土器鍋・溶解炉壁・砥石が出土したものの、小片のために図化できるものはなかった。本遺構の所属時期は、出土遺物から15～16世紀と推測される。

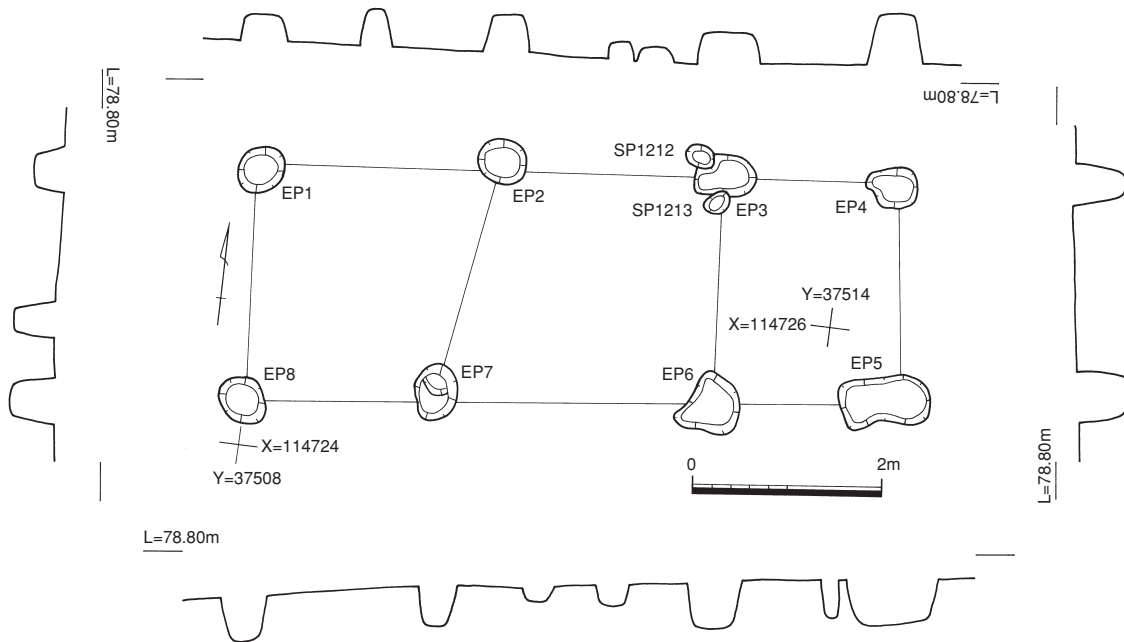
掘立柱建物3号 (SA1003) (第166図)

4-A区 β-II E・F-2・3で確認された6基の柱穴で構成される掘立柱建物。北側でSA1002と重複する。またEP3は、SO1007と切り合い関係にある。

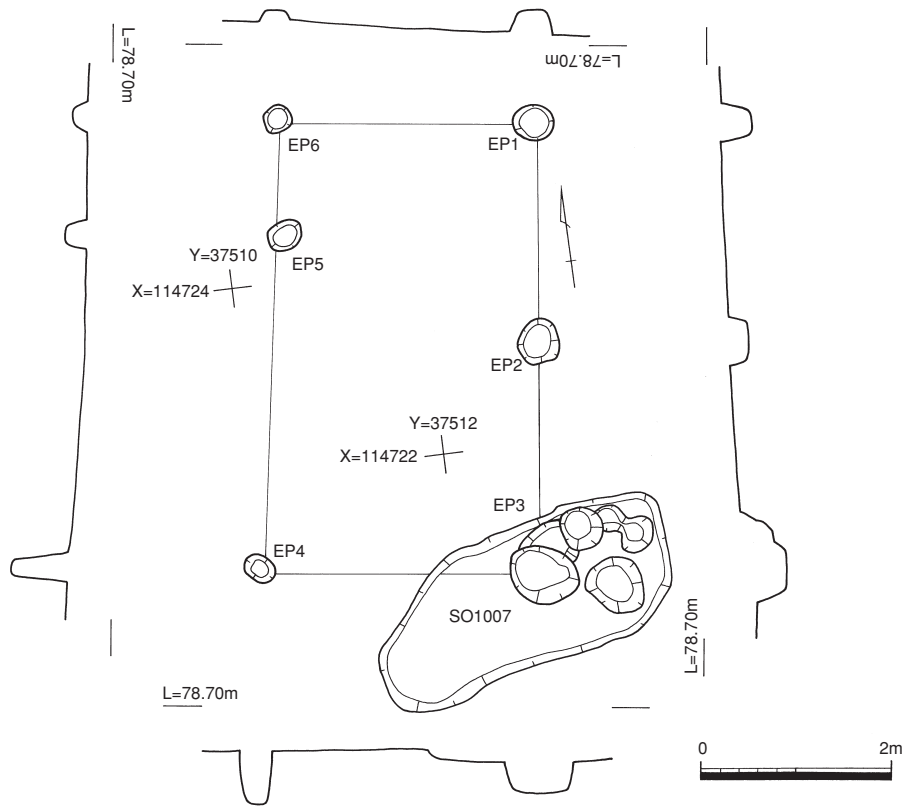
建物の規模は梁間2間(4.75m)、桁行1間(2.86m)、床面積13.62m²を測り、平面形態は若干いび



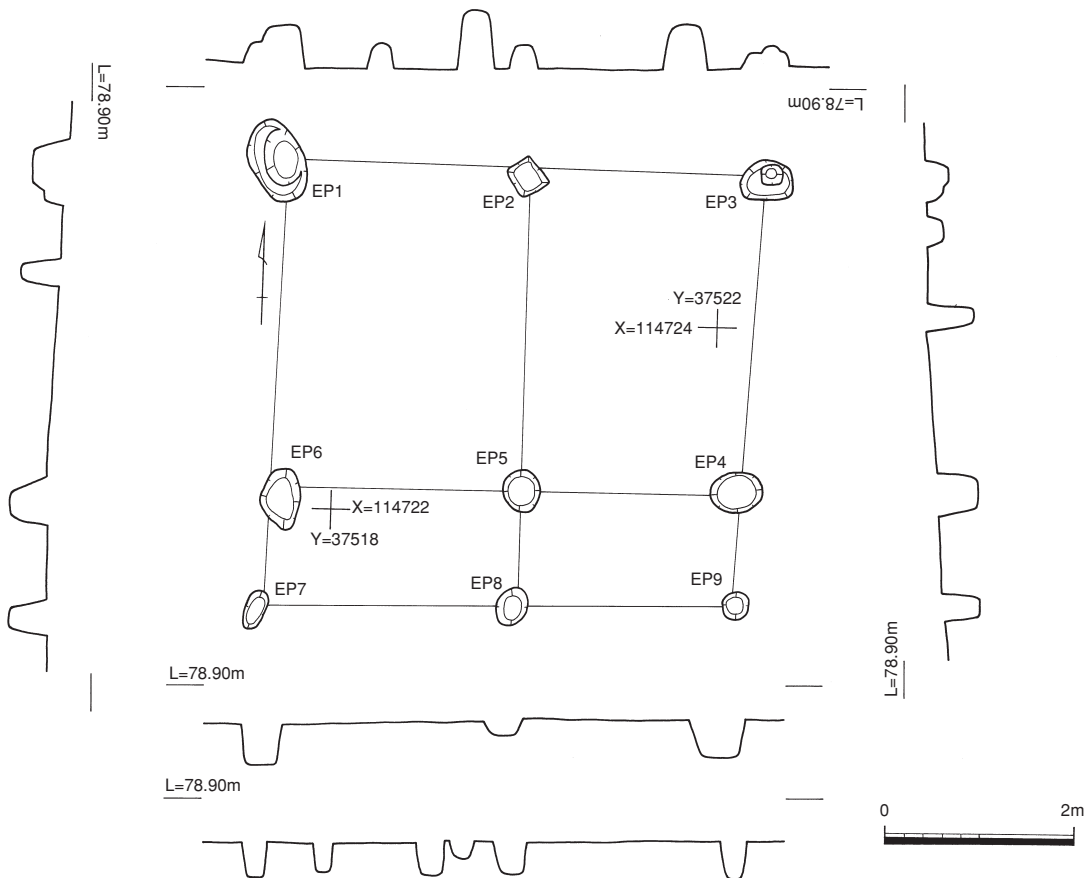
第164図 SA1001遺構図・出土遺物



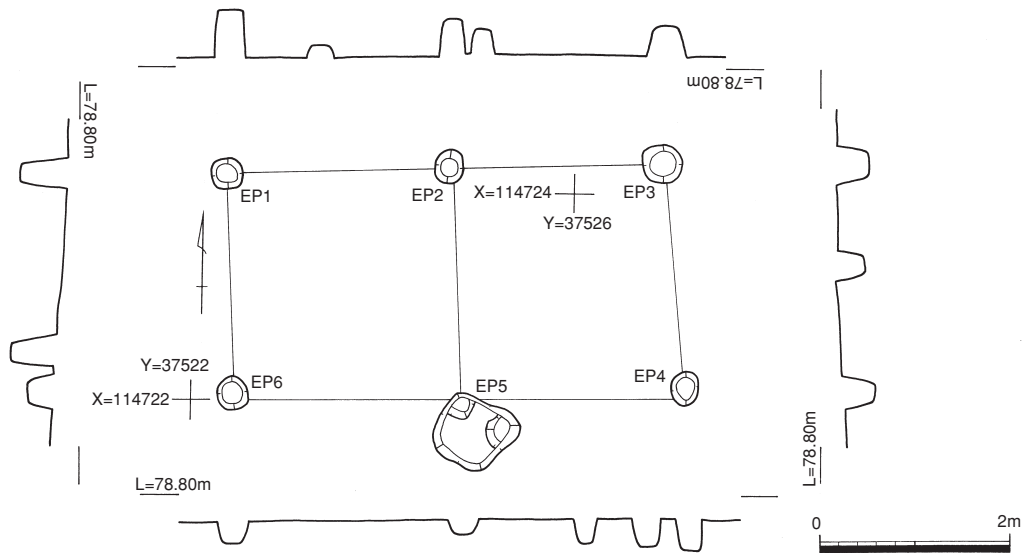
第165図 SA1002遺構図



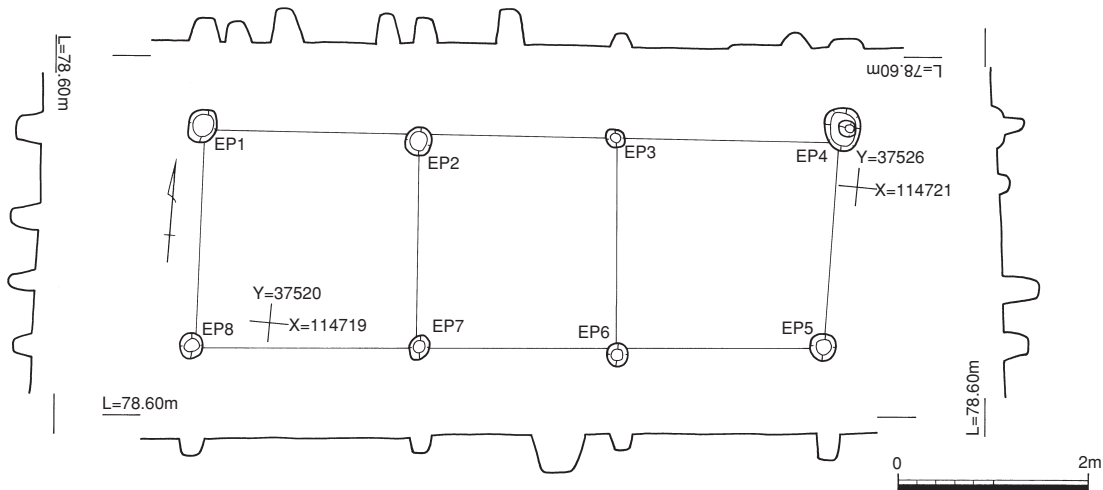
第166図 SA1003遺構図



第167図 SA1004遺構図



第168図 SA1005遺構図



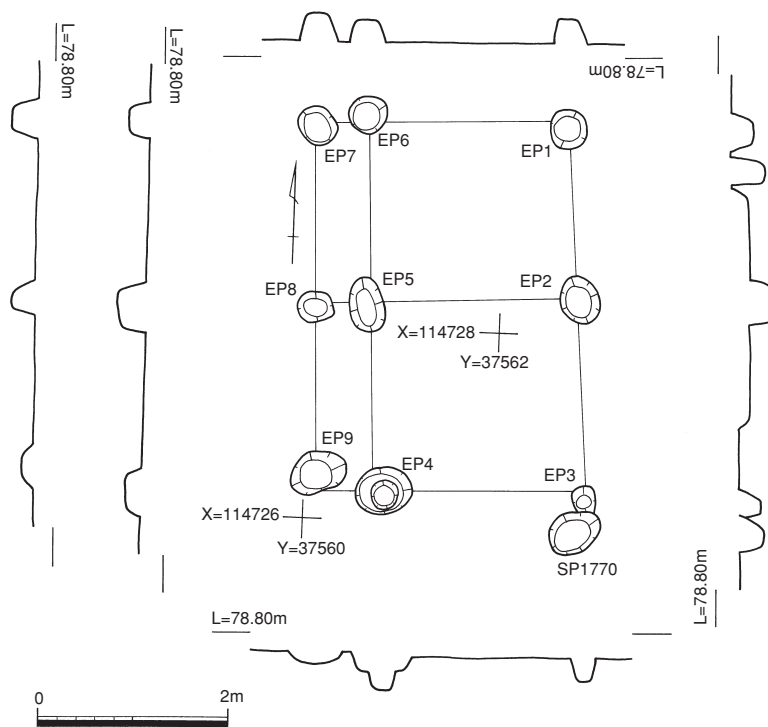
第169図 SA1006遺構図

つな長方形を呈する。柱間寸法は梁間2.3~2.44m、桁行2.72~3.00mで、棟方向はN-8°-Eに向く。柱穴掘り方は不整な円形もしくは楕円形を呈し、径は32~74cm、深度16~56cmを測る。柱痕は、EP4で確認できた。またEP1~EP3・EP6で、根石と考えられる直径20~30cm大の石を確認した。EP1・EP6の柱穴掘り方内部から土師質土器片が出土しているものの、小片のために図化できなかった。本遺構の所属時期は、出土遺物から中世と推測される。

掘立柱建物4号 (SA1004) (第167図)

4-A区 β-II E・F-4・5で確認された9基の柱穴で構成される庇付き掘立柱建物。庇は、南側に構築される。また東側でSA1005と、南側で1006と重複する。

建物の規模は梁間1間(3.38m)、桁行3間(4.98m)、床面積23.86m²を測り、平面形態は若干いび



第170図 SA1007遺構図

つな方形を呈する。柱間寸法は梁間3.28~3.55m、桁行2.5~2.66mで、棟方向はN-1°-Eに向く。柱穴掘り方は不整な円形もしくは楕円形を呈し、径は30~88cm、深度16~49cmを測る。柱痕はEP1・EP6・EP8で、またEP4・EP5では根石と考えられる直径20~30cm大の石を確認した。小片のために図化出来なかったものの、EP1の柱穴掘り方内部から土師質土器杯・小皿・甕が、EP4から須恵質土器碗が出土した。本遺構の所属時期は、出土遺物から13世紀以降と推測される。

掘立柱建物 5号 (SA1005) (第168図)

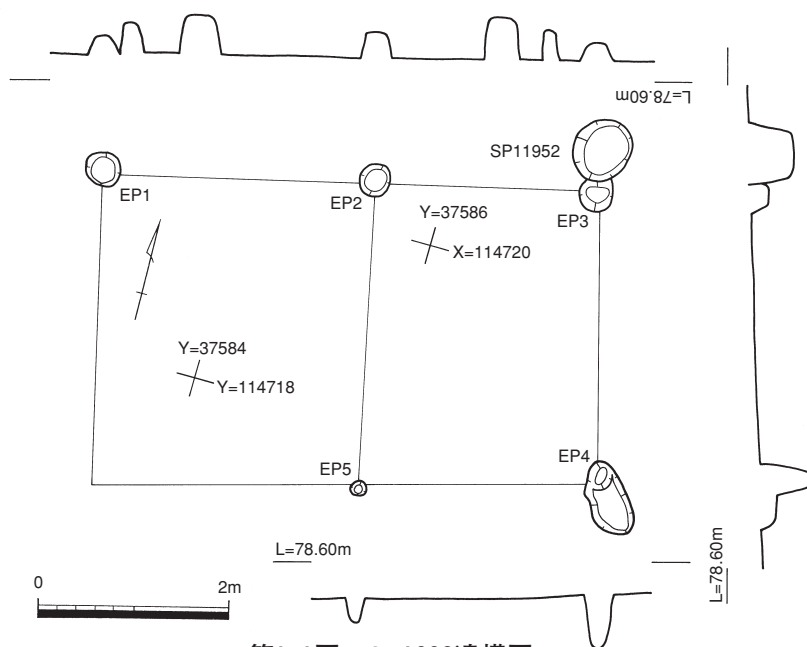
4-A区 β-II E-5・6で確認された6基の柱穴で構成される掘立柱建物。西側でSA1004と、南側でSA1006と重複する。

建物の規模は梁間1間(2.42m)、桁行2間(4.7m)、床面積11.16m²を測り、平面形態は長方形を呈する。柱間寸法は梁間2.33~2.50m、桁行2.28~2.42mで、棟方向はN-4°-Wに向く。柱穴掘り方は不整な円形もしくは楕円形を呈し、径は32~42cm、深度16~50cmを測る。柱痕は、EP1・EP3・EP4で確認できた。小片のために図化出来なかったものの、EP6の柱穴掘り方内部から鉄片が出土した。本遺構の所属時期は、出土遺物から中世と推測される。

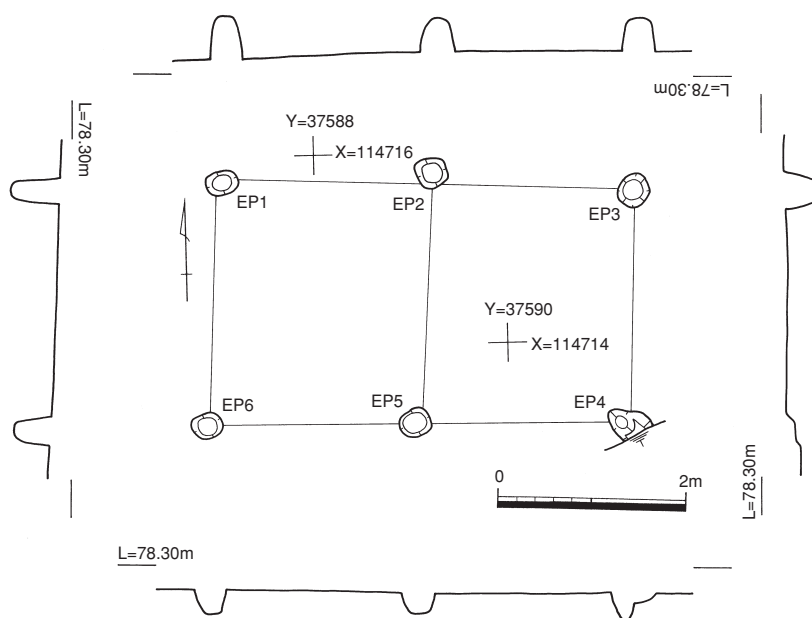
掘立柱建物 6号 (SA1006) (第169図)

4-A区 β-II D・E-4~6で確認された8基の柱穴で構成される掘立柱建物。EP3はSK1039と切り合い関係にある。また北側でSA1004・1005と重複する。

建物の規模は梁間1間(2.28m)、桁行3間(6.7m)、床面積15.45m²を測り、平面形態は長方形を呈する。柱間寸法は梁間2.16~2.34m、桁行2.06~2.40mで、棟方向はN-1°-Wに向く。柱穴掘り方は不整な円形もしくは楕円形を呈し、径は22~44cm、深度10~28cmを測る。柱痕は、EP2・EP4・EP6・EP7で確認できた。小片のために図化出来なかったものの、EP1の柱穴掘り方内部から土師質土器杯が、EP7・EP8から土師質土器片が出土した。本遺構の所属時期は、出土遺物から中世と推測される。



第171図 SA1009遺構図



第172図 SA1010遺構図

掘立柱建物 7号

(SA1007) (第170図)

4-B区 β-II F・G-13で確認された9基の柱穴で構成される底付き掘立柱建物。底は、西側に構築される。EP3はSP1770と、EP8はSP1781とそれぞれ切り合い関係をもつ。

建物の規模は梁間1間(3.93m)、桁行3間(2.18m)、床面積10.34m²を測り、平面形態は長方形を呈する。柱間寸法は梁間1.84~2.10m、桁行2.14~2.25mで、棟方向はN-4.5°-Wに向く。柱穴掘り方は不整な円形もしくは楕円形を呈し、径は25~62cm、深度12~38cmを測る。柱痕は、EP5・EP7で確認できた。小片のために図化出来なかったものの、EP2の柱穴掘り方内部から弥生土器片が、EP4から須恵質土器椀が、EP5から土師質土器片が、EP6・EP7・EP9から土師質土器杯が出土した。本遺構の所属時期は、出土遺物から13世紀以降と推測される。

掘立柱建物 9号 (SA1009) (第171図)

5-B区 β-II D・E-17・18で確認された5基の柱穴で構成される掘立柱建物。EP3はSP11952と切り合い関係をもつ。

建物の規模は梁間1間(3.12m)、桁行2間(5.24m)、平面形態は長方形と推測される。柱間寸法は梁間2.98~3.26m、桁行2.15~2.20mである。柱穴掘り方は不整な円形もしくは楕円形を呈し、径は18~38cm、深度20~56cmを測る。柱痕は確認できなかった。小片のために図化出来なかったものの、EP

3・EP4の柱穴掘り方内部から弥生土器片が出土した。本遺構の所属時期は、弥生土器片が出土しているものの中世と推測される。

掘立柱建物10号 (SA1010) (第172図)

5-B区 β-II C・D-18・19で確認された6基の柱穴で構成される掘立柱建物。当遺跡で確認された建物の中で一番南端に位置する。

建物の規模は梁間1間(2.57m)、桁行2間(4.38m)、床面積10.96m²を測り、平面形態は長方形を呈する。柱間寸法は梁間2.44~2.66m、桁行2.15~2.21mで、棟方向はN-5°-Eに向く。柱穴掘り方は不整な円形もしくは楕円形を呈し、径は30~36cm、深度22~46cmを測る。柱痕および根石は、確認できなかった。小片のために図化出来なかったものの、EP4・EP6の柱穴掘り方内部から弥生土器片が出土した。本遺構の所属時期は、弥生土器片が出土しているものの中世と推測される。

土坑

土坑29号 (SK1029) (第173図)

4-A区 β-II G-3で確認された土坑。平面形態・底面形態ともにやや不整な楕円形、断面形態は不整な舟底形を呈し、長軸0.54m、短軸0.45m、最大深度0.16mを測る。覆土は土質および含有物から4層に分層できるものの、大きく2層に分けることができる。上層(1層)はにぶい黄褐色粘性砂質土で、炭化物を大量に含む。下層(2~4層)は灰黄褐色粘性砂質土で、3・4層は粘性がやや強く褐色土ブロックを混入する。4層がしまりが強い。

遺物は土師質土器杯3点、体部片6点、土師質土器羽釜体部片1点が出土した。その中で図化できたものは、強い回転ナデ調整により外面の凹凸が著しい杯口縁部(845)1点のみである。

土坑43号 (SK1043) (第173図)

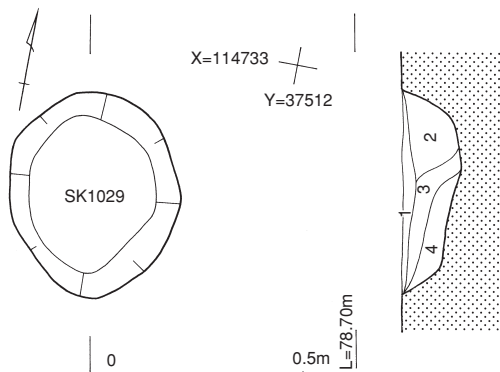
4-A区 β-II F-5で確認された土坑。平面形態・底面形態ともに楕円形、断面形態は逆台形を呈する。長軸0.86m、短軸0.69m、最大深度0.18mを測る。覆土は2層に分層でき、1層は灰黄褐色粘性砂質土で炭化物を若干含む。2層はにぶい黄褐色粘性砂質土で、しまりがやや強い。

遺物は、土師質土器羽釜口縁部(846)1点とその体部片4点が出土した。羽釜の鏝部は貼付成形され、断面三角形の短い鏝がやや上向きに付く。煤状の炭化物の付着が、内外面ともに認められる。

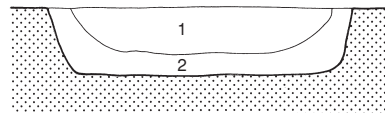
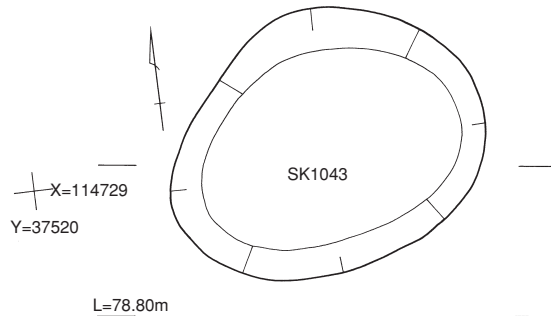
土坑68号 (SK1068) (第173図)

4-B区 β-II D-12で確認された土坑。平面形態は不整な楕円形、底面形態は楕円形、断面形態はやや不整な逆台形を呈する。長軸0.86m、短軸0.70m、最大深度0.24mを測る。覆土は2層に分層でき、1層はにぶい黄褐色粘性砂質土、2層は黒褐色粘性砂質土で炭化物をやや多く含む。

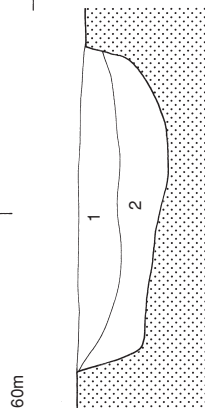
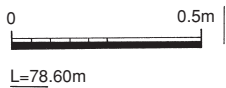
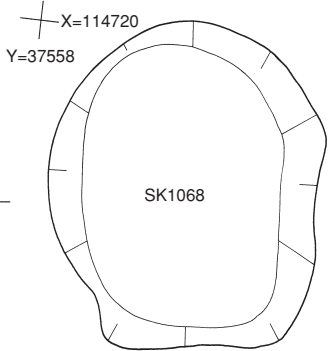
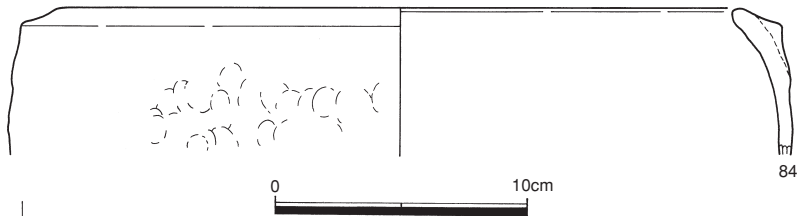
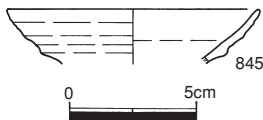
遺物は土師質土器杯3点・体部片33点、土師質土器鍋口縁部1点、土師質土器壺底部1点、サヌカイト剥片1点が出土した。出土した杯は小片のために図化できず、図化できたのは鍋(847)1点のみである。847の内面口縁部、および外面口縁部~体部にかけて煤状の炭化物がやや多く付着する。また胎土に角閃石・金雲母を含むことから、讃岐からの搬入品と考えられる。



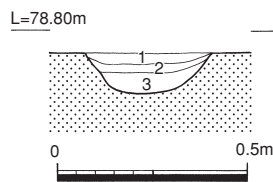
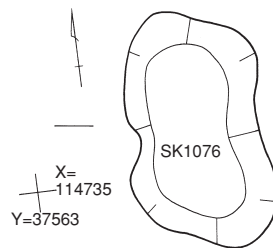
- 1 にぶい黄褐色(10YR 4/3)粘性砂質土
- 2 灰黄褐色(10YR 4/2)粘性砂質土
- 3 灰黄褐色(10YR 4/2)粘性砂質土
- 4 にぶい黄褐色(10YR 4/2)粘性砂質土



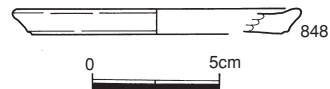
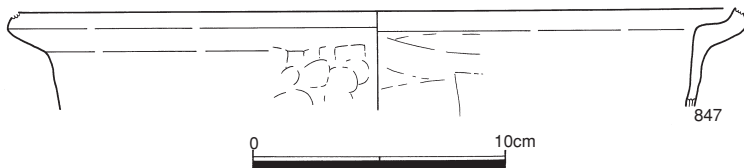
- 1 灰黄褐色(10YR 4/2)粘性砂質土
- 2 にぶい黄褐色(10YR 4/3)粘性砂質土



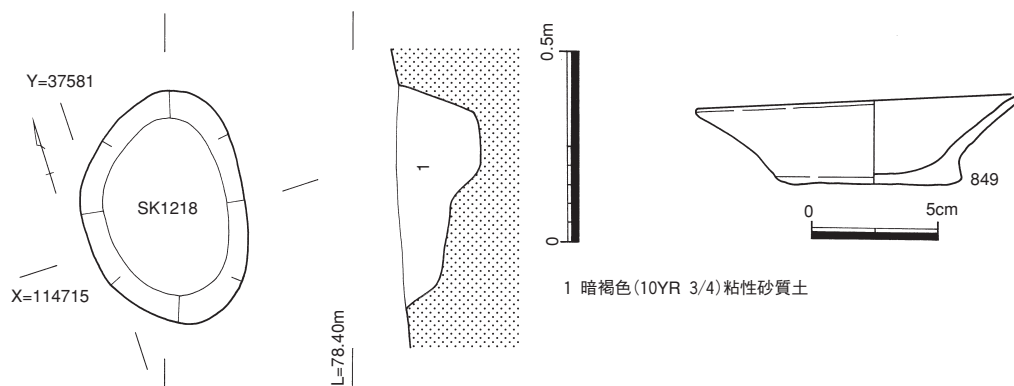
- 1 にぶい黄褐色(10YR 4/3)粘性砂質土
- 2 黒褐色(10YR 3/4)粘性砂質土



- 1 暗褐色(10YR 3/4)粘性砂質土
- 2 暗褐色(10YR 3/3)粘性砂質土
- 3 暗褐色(10YR 3/4)粘性砂質土



第173図 SK遺構図・出土遺物(19)



第174図 SK1218遺構図・出土遺物

土坑76号 (SK1076) (第173図)

4-B区 β-II G-13で確認された土坑。平面形態・底面形態ともに不整な楕円形、断面形態は不整な舟底形を呈し、長軸1.32m、短軸0.73m、最大深度0.24mを測る。覆土は暗褐色粘性砂質土で、含有物から3層に分層できる。1層は砂質が強く、炭化物を若干含む。2層は土器片を含み、3層はしまりがやや強く炭化物を若干含む。

遺物は土師質土器杯5点・体部片4点、土師質土器小皿1点、土師質土器羽釜体部片2点、弥生土器片2点、サヌカイト剥片1点が出土した。出土した杯・小皿の底部には回転ヘラ切りが認められ、図化できたのは小皿(848)のみである。

土坑218号 (SK1218) (第174図)

5-B区 β-II C-D-17で確認された土坑。平面形態・底面形態ともに楕円形、断面形態は不整形を呈する。断面南側は緩やかに傾斜していったん段を形成するものの、北側は急な立ち上がりをみせる。長軸0.62m、短軸0.43m、最大深度0.22mを測る。覆土は暗褐色粘性砂質土1層で、しまりがやや弱い。遺物は、底部回転ヘラ切りを施す土師質土器杯(849)1点のみである。

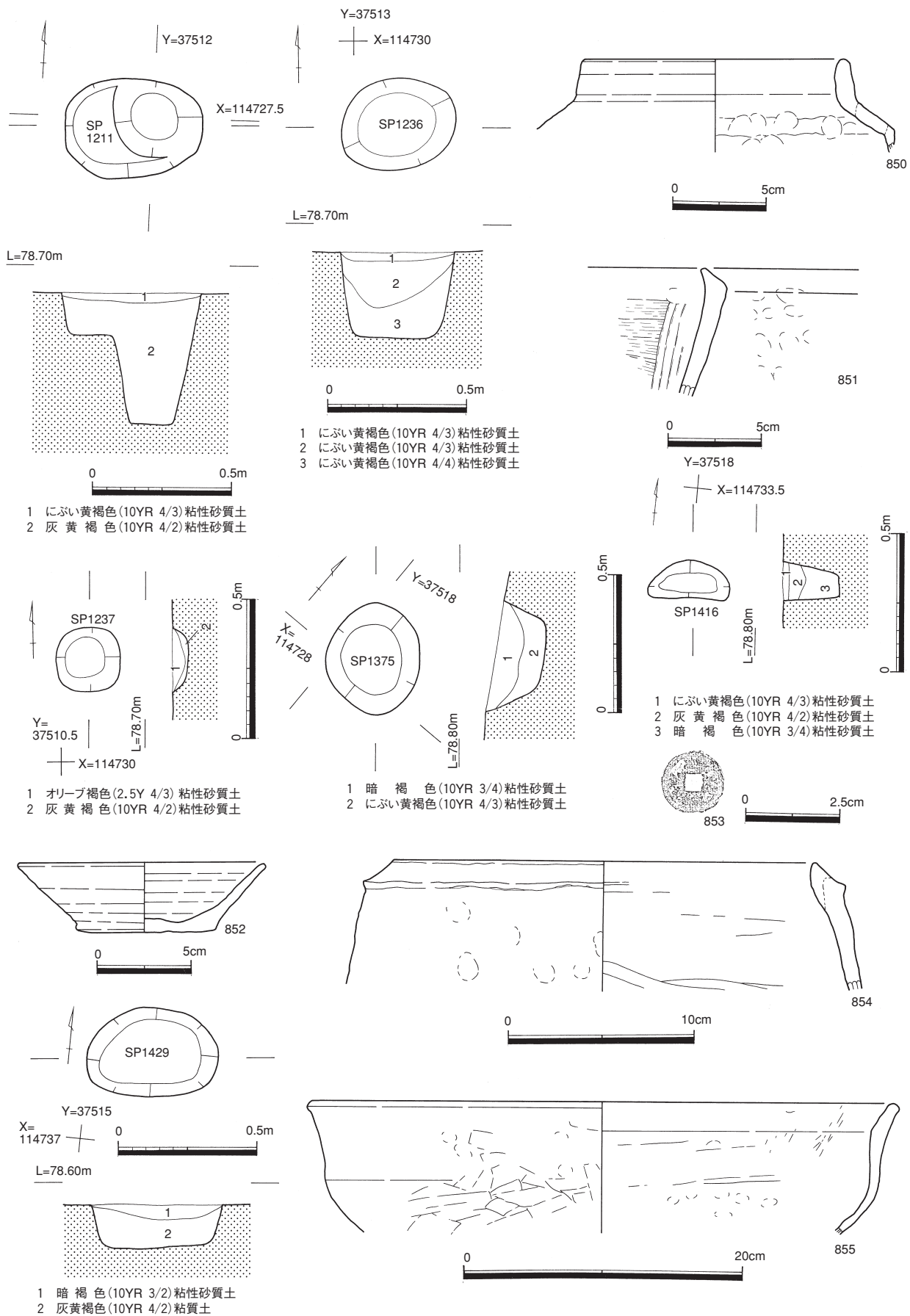
柱穴内出土遺物

ここでは、掘立柱建物を構成するに至らなかった柱穴の内、遺物の出土状況および出土遺物が資料化可能なものについて述べることとする。

柱穴

柱穴211号 (SP1211) (第175図)

4-A区 β-II C-5で確認された柱穴。平面形態・底面形態ともに楕円形、断面形態は不整形を呈する。断面西側の壁面は緩やかに傾斜して一旦段を形成し、そこから急傾斜に落ちる。長軸0.50m、短軸0.36m、最大深度0.48mを測る。覆土は2層に分層でき、1層はにぶい黄褐色粘性砂質土で暗オレンジ褐色土をブロック状に混入する。また、炭化物を多く含む。2層は灰黄褐色粘性砂質土で、しまり



第175図 SP遺構図・出土遺物(9)

が弱い。

遺物は土師質土器片 2 点、須恵質土器片 1 点、土師質土器壺口縁部・底部各 1 点、銭貨が出土し、図化できたのは壺口縁部 (850) のみである。この壺は、13m 程東側に位置する SP1467 から出土した土器片と接合した。

柱穴236号 (SP1236) (第175図)

4-A区 β-II C-5 で確認された柱穴。平面形態・底面形態ともにやや楕円形、断面形態は逆台形を呈し、長軸0.43m、短軸0.33m、最大深度0.31mを測る。覆土はにぶい黄褐色粘性砂質土だが、含有物の違いから 3 層に分層できる。1 層は暗オリーブ褐色土をブロック状に混入し、炭化物を多く含む。3 層は灰黄褐色土・褐色土をブロック状に混入する。

遺物は土師質土器片 7 点、土師質土器播鉢口縁部 1 点が出土し、図化できたのは播鉢 (851) のみである。

柱穴237号 (SP1237) (第175図)

4-A区 β-II G-3 でSK1026を切った状態で確認された柱穴。平面形態・底面形態ともにほぼ円形、断面形態は舟底形を呈し、直径約0.23m前後、最大深度0.06mを測る。覆土は 2 層に分層でき、1 層はオリーブ褐色粘性砂質土で褐色土をブロック状に混入する。2 層は灰黄褐色粘性砂質土で、褐色土をブロック状に混入する。

出土遺物は、底部回転ヘラ切りを施す土師質土器杯 1 点 (852) のみである。

柱穴375号 (SP1375) (第175図)

4-A区 β-II F-4 で確認された柱穴。平面形態・底面形態ともに不整形な円形、断面形態は逆台形を呈し、直径約0.40m前後、最大深度0.21mを測る。覆土は 2 層に分層でき、1 層はオリーブ褐色粘性砂質土で褐色土をブロック状に混入する。2 層は灰黄褐色粘性砂質土で、褐色土をブロック状に混入する。

出土遺物は、口縁部折り曲げ成形の土師質土器羽釜 1 点 (854) のみである。854は、鏝部から体部下位にかけて煤状の炭化物がやや多く付着する。

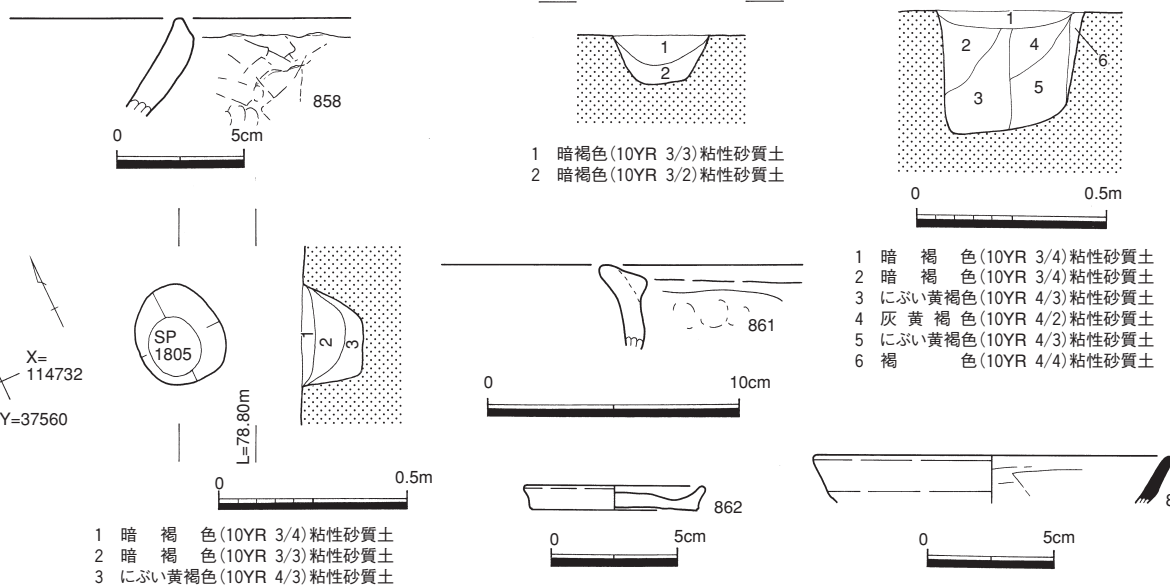
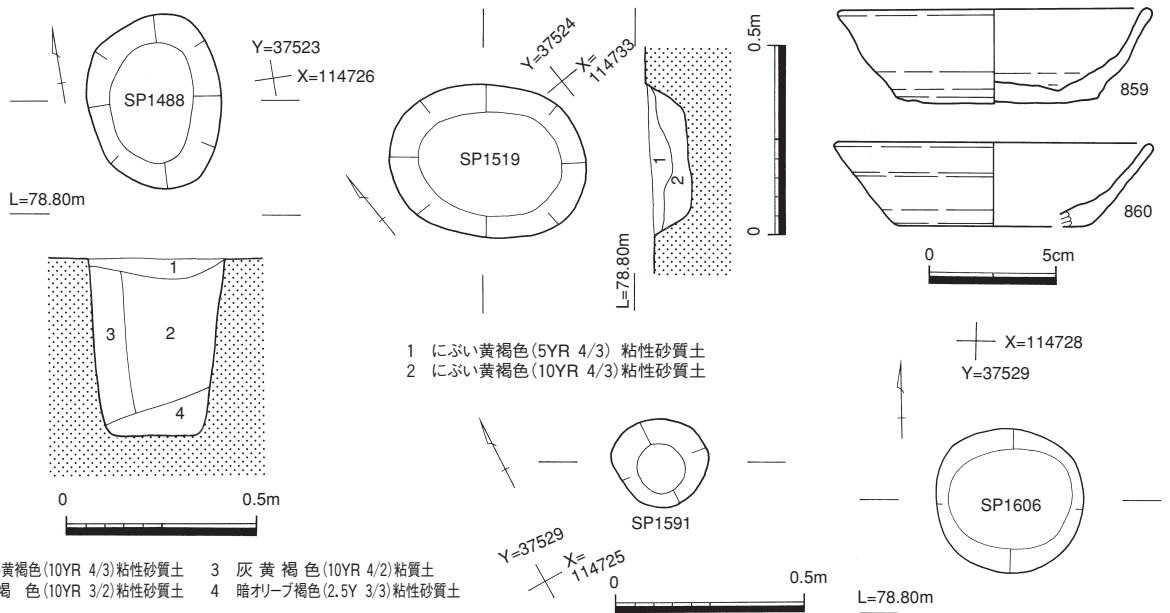
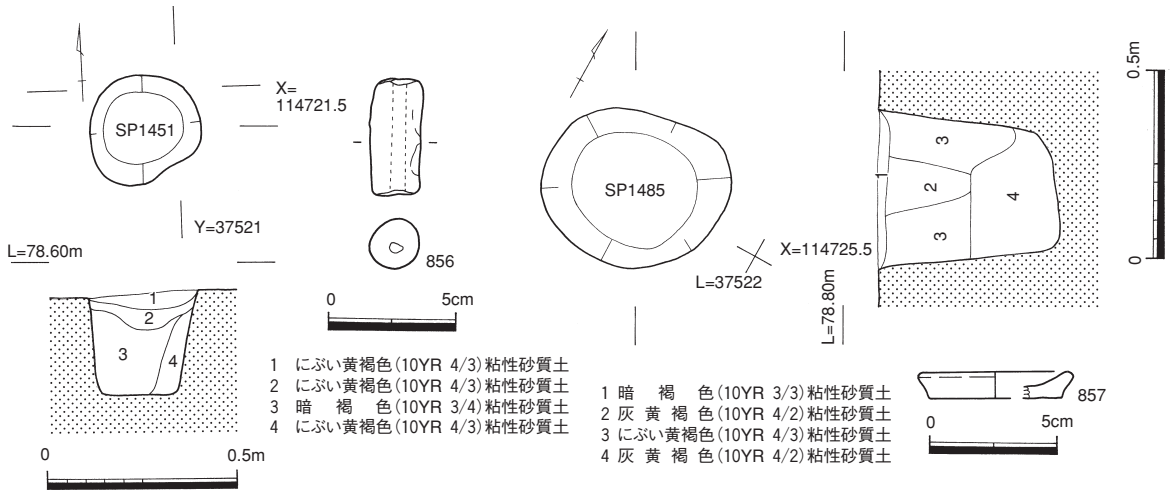
柱穴416号 (SP1416) (第175図)

4-A区 β-II G-4 で確認された柱穴。平面形態・底面形態ともに不整な楕円形、断面形態は逆台形を呈し、長軸0.30m、短軸0.13m、最大深度0.20mを測る。覆土は 3 層に分層でき、1 層はにぶい黄褐色粘性砂質土で、炭化物を含む。2 層は灰黄褐色粘性砂質土、3 層は暗褐色粘性砂質土で褐色土ブロックを混入する。

遺物は土師質土器片 1 点、銭貨 (853) 1 点が出土した。銭貨は鏽により文字が判読できないものの、北宋銭と思われる。

柱穴429号 (SP1429) (第175図)

4-A区 β-II H-4 で確認された柱穴。平面形態・底面形態ともにやや楕円形、断面形態は逆台



第176図 SP遺構図・出土遺物(10)

形を呈し、長軸0.47m、短軸0.32m、最大深度0.16mを測る。覆土は2層に分層でき、1層は暗褐色粘性砂質土で粘性が強く、褐色土ブロックを混入する。2層は灰黄褐色粘質土で、暗褐色土ブロックを混入する。

出土遺物は、外面体部上位に多量の炭化物が付着する土師質土器鍋口縁部（855）と体部各1点である。

柱穴451号 (SP1451) (第176図)

4-A区 β-II E-5で確認された柱穴。平面形態・底面形態ともにやや不整な円形、断面形態は逆台形を呈し、直径0.29m前後、最大深度0.28mを測る。覆土は土質および含有物から4層に分層できるものの、大きく2層に分けることができる。また柱痕を明瞭にとどめる。上層（1・2層）はにぶい黄褐色粘性砂質土で、2層は褐色土ブロックを混入する。下層（3・4層）のうち、3層は暗褐色粘性砂質土で柱痕部にあたる。4層は褐色土ブロックを混入する。

遺物は土師質土器片5点、土師質土器脚部片1点が出土し、図化できたのは表面に煤状の炭化物の付着が認められる脚部（856）のみである。

柱穴485号 (SP1485) (第176図)

4-A区 β-II F-5で確認された柱穴。平面形態・底面形態ともにやや不整な楕円形、断面形態は逆台形を呈し、長軸0.50m、短軸0.41m、最大深度0.48mを測る。覆土は土質および含有物から4層に分層でき、また柱痕を明瞭にとどめる。1層は暗褐色粘性砂質土で、灰黄褐色土ブロックを混入する。2層は灰黄褐色粘性砂質土で、柱痕部にあたる。3層はにぶい黄褐色粘性砂質土で、炭化物を若干含む。4層は灰黄褐色粘性砂質土である。

遺物は土師質土器杯2点、土師質土器小皿1点、陶器製挿鉢1点が出土し、図化できたのは土師質土器小皿（857）のみである。

柱穴488号 (SP1488) (第176図)

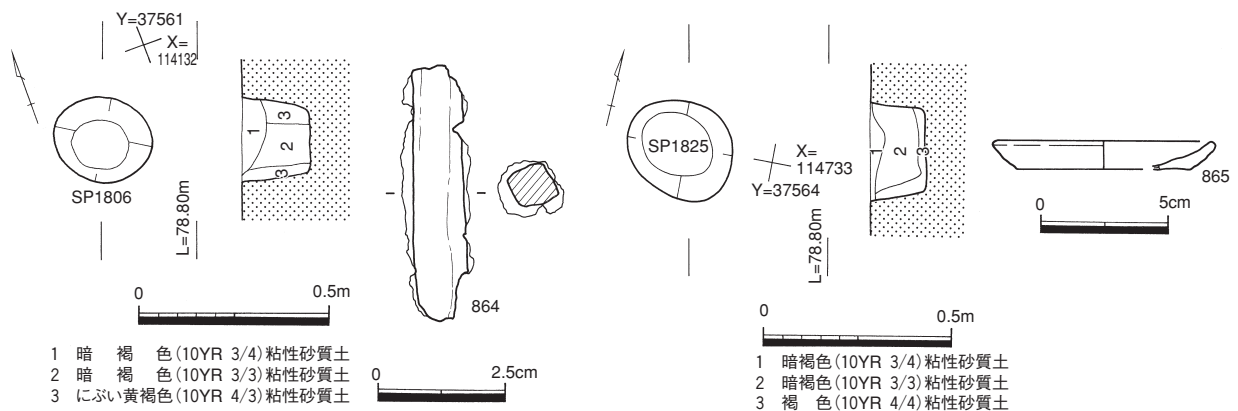
4-A区 β-II F-5で確認された柱穴。平面形態・底面形態ともに楕円形、断面形態は逆台形を呈し、長軸0.46m、短軸0.35m、最大深度0.47mを測る。覆土は4層に分層でき、柱痕を明瞭にとどめる。1層はにぶい黄褐色粘性砂質土で、灰黄褐色土をブロック状に混入する。2層は黒褐色粘性砂質土で柱痕部にあたり、炭化物を多く含む。3層は灰黄褐色粘性砂質土で、暗褐色土をブロック状に混入する。4層はオリーブ褐色粘性砂質土で、灰黄褐色土をブロック状に混入する。

遺物は土師質土器鍋体部片1点、土師質土器こね鉢1点出土し、図化できたのはこね鉢（858）のみである。

柱穴519号 (SP1519) (第176図)

4-A区 β-II G-5で確認された柱穴。平面形態・底面形態ともに楕円形、断面形態は逆台形を呈し、長軸0.52m、短軸0.40m、最大深度0.10mを測る。覆土は2層に分層でき、1層はにぶい赤褐色粘性砂質土、2層はにぶい黄褐色粘性砂質土でしまりが強く、褐色土ブロックを混入する。

出土遺物は、内外面に多量の炭化物が付着する土師質土器杯（859・860）2点のみである。



第177図 SP遺構図・出土遺物(11)

柱穴591号 (SP1591) (第176図)

4-A区 β-II E-6で弥生時代の土坑であるSK1052を切る形で確認された柱穴。平面形態はやや不整な円形、底面形態は円形、断面形態は逆台形を呈し、直径0.25m前後、最大深度0.13mを測る。覆土は暗褐色を呈するが、土質および含有物の違いから2層に分層できる。1層は炭化物を含み、2層は褐色土ブロックを混入する。

遺物は、土師質土器羽釜口縁部(861)1点のみの出土である。

柱穴606号 (SP1606) (第176図)

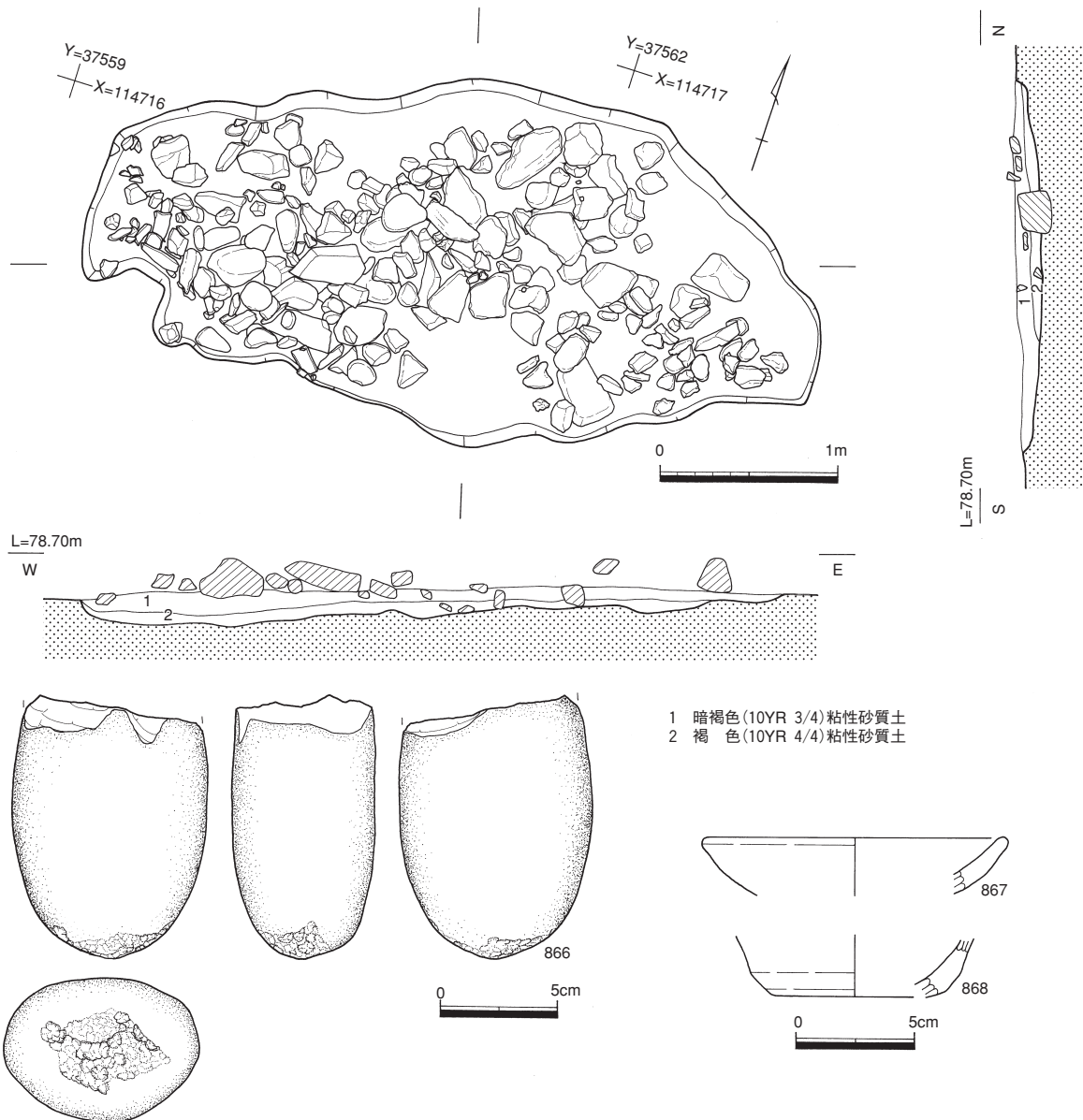
4-A区 β-II F-6で確認された柱穴。平面形態・底面形態ともに円形、断面形態は逆台形を呈し、直径0.38m前後、最大深度0.33mを測る。覆土は、土質および含有物の違いから6層に分層できる。1・2層は暗褐色粘性砂質土で、1層はにぶい黄褐色土ブロック状を混入する。3層はにぶい黄褐色粘性砂質土で、粘性がやや強い。4層は灰黄褐色粘性砂質土で、灰黄褐色土・褐色土をブロック状に混入する。5層はにぶい黄褐色粘性砂質土で、褐色土ブロックを混入する。6層は褐色粘性砂質土で、砂質がやや強い。

遺物は、口縁部内外面に火襷が認められる須恵質土器椀(863)1点のみである。

柱穴805号 (SP1805) (第176図)

4-B区 β-II G-13で確認された柱穴。平面形態・底面形態ともにやや不整な円形、断面形態は逆台形を呈し、直径0.23m前後、最大深度0.16mを測る。覆土は土質および含有物から3層に分層できるものの、大きく2つに分けることができる。上層(1・2層)は暗褐色粘性砂質土で、1層の方が粘性が強い。下層(3層)はにぶい黄褐色粘性砂質土で、褐色土をブロック状に混入する。

遺物は土師質土器小皿2点出土し、そのうちの1点(862)が図化できた。



第178図 SU1001遺構図・出土遺物

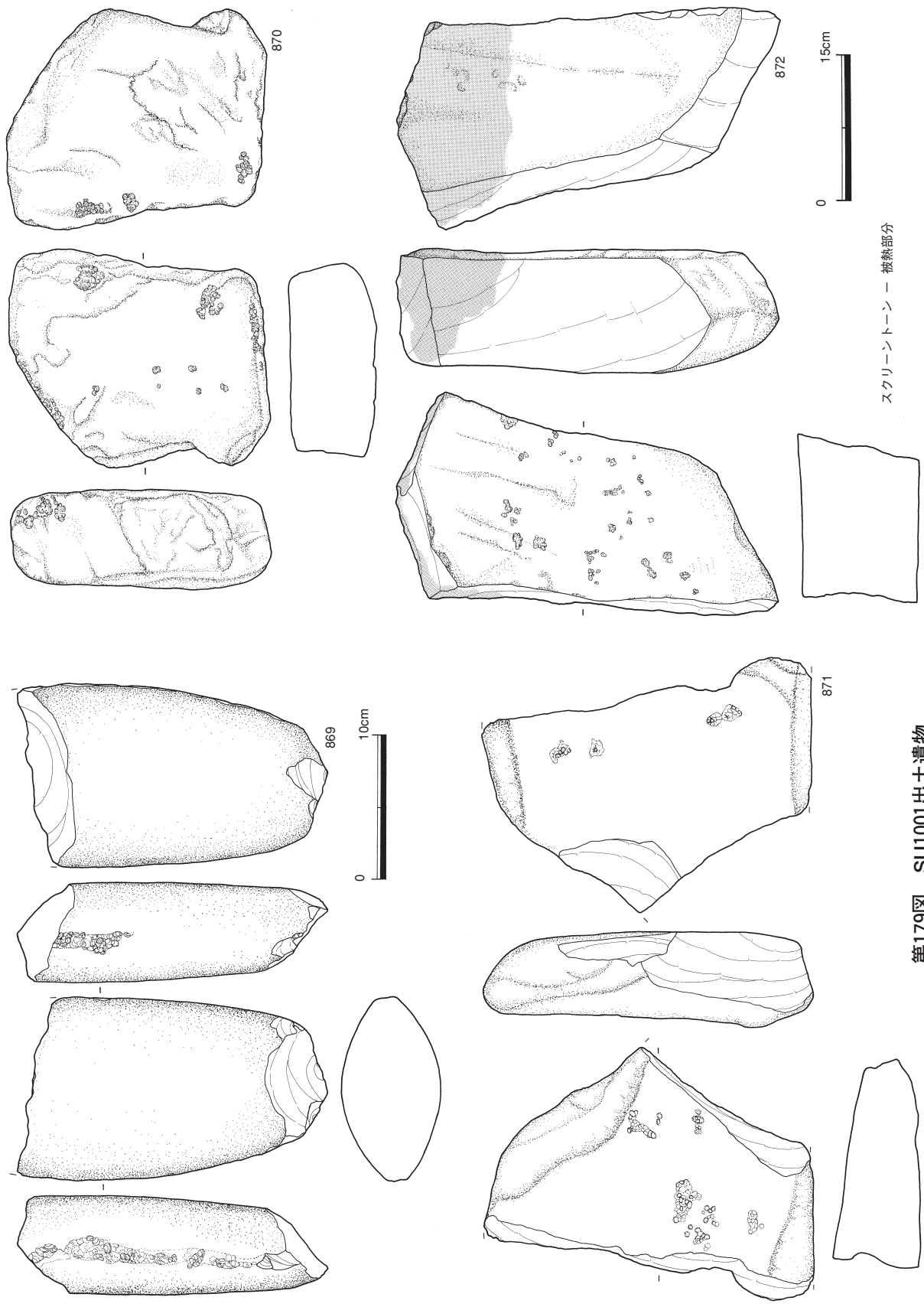
柱穴806号 (SP1806) (第177図)

4-B区 β-II G-13でSP1807を切る形で確認された柱穴。平面形態・底面形態ともにやや不整な円形、断面形態は逆台形を呈し、直径0.22m前後、最大深度0.18mを測る。覆土は土質および含有物から3層に分層でき、柱痕を明瞭にとどめる。1・2層は暗褐色粘性砂質土で、2層は柱痕部にあたり粘性が強い。3層はにぶい黄褐色粘性砂質土で、褐色土をブロック状に混入する。

遺物は遺存状態が悪いものの、断面方形をなす鉄釘(864)1点のみである。

柱穴825号 (SP1825) (第177図)

4-B区 β-II G-13で確認された柱穴。平面形態・底面形態ともにやや不整な円形、断面形態は逆台形を呈し、直径0.25m前後、最大深度0.15mを測る。覆土は概ね暗褐色粘性砂質土で、土質および含有物から2層に分層できる。2層は粘性がやや弱く、砂質が強い。



第179図 SU1001出土遺物

遺物は、底部回転ヘラ切りを施す土師質土器小皿（865）1点のみである。

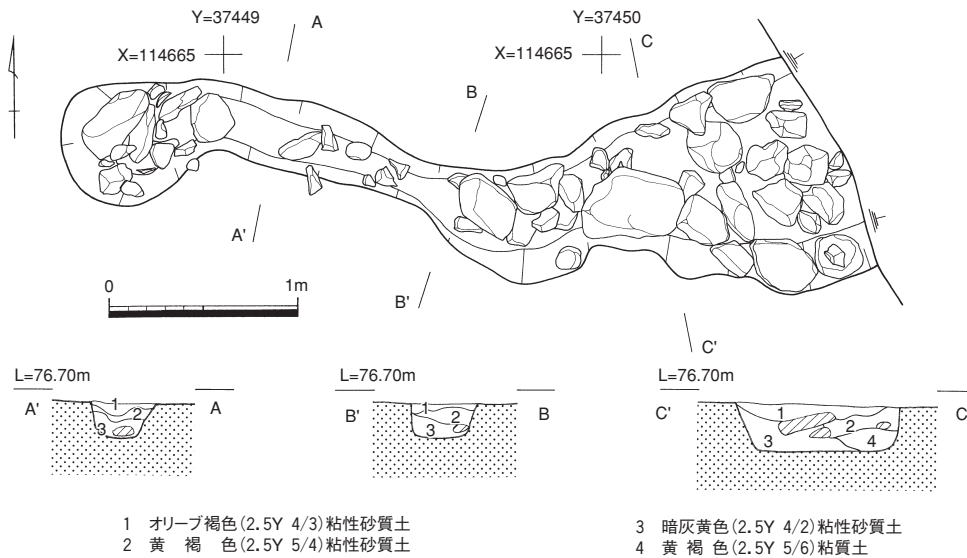
集石遺構

集石遺構1号 (SU1001) (第178・179図)

4-B区 α-I L-10でSD1010を切った状態で確認された集石遺構。平面形態・底面形態ともに不整な楕円形、断面形態は浅い舟底形を呈する。長軸4.20m、短軸2.06m、最大深度0.18mを測る。覆土は土質および含有物から2層に分層でき、1層は暗褐色粘性砂質土で灰黄褐色土・褐色土ブロックを混入する。また1層の上層ないし層中に、直径10～50cm大の結晶片岩や砂岩を用いた集石が認められる。2層は褐色粘性砂質土で、黄褐色土・暗褐色土ブロックをやや多く混入する。また炭化物・土器片を含む。

遺物は土師質土器杯2点・体部片17点、須恵質土器碗1点、土師質土器羽釜片1点、弥生土器広口壺1点・体部片24点、サヌカイト剥片3点、砂岩製敲石2点・台石3点が出土した。そのうち図化できたのは、土師質土器杯（867・868）、砂岩製敲石（866・869）、砂岩製台石（870～872）のみである。

集石は、構築面を揃えたり区画を行う等の規則性は全く認められず、乱雑に土坑内を充填するのみである。また集石を取り除いた後、その下に下部構造は認められなかった。遺物は弥生時代と中世の二時期のものが出土し、また弥生時代の溝であるSD1010を切っていることから、1383・1382をのぞく遺物は混入物と考えられる。遺構の所属時期は、出土遺物から12世紀以降と考えられる。



第180図 SD1001遺構図

(3) 江戸時代

江戸時代の遺構は、鎌倉・室町時代の遺構と同様に4区を中心に検出された。本来この時代の遺構は、調査区内においてももう少し拡がりをもせたと推測されるが、攪乱扱いにより調査途中で放棄された遺構が多数存在したと思われる。

この時期の遺構として検出したのは、溝1条、土坑7基、柱穴18基、不明遺構1基である。これらの遺構から出土した遺物は、時期幅がある。

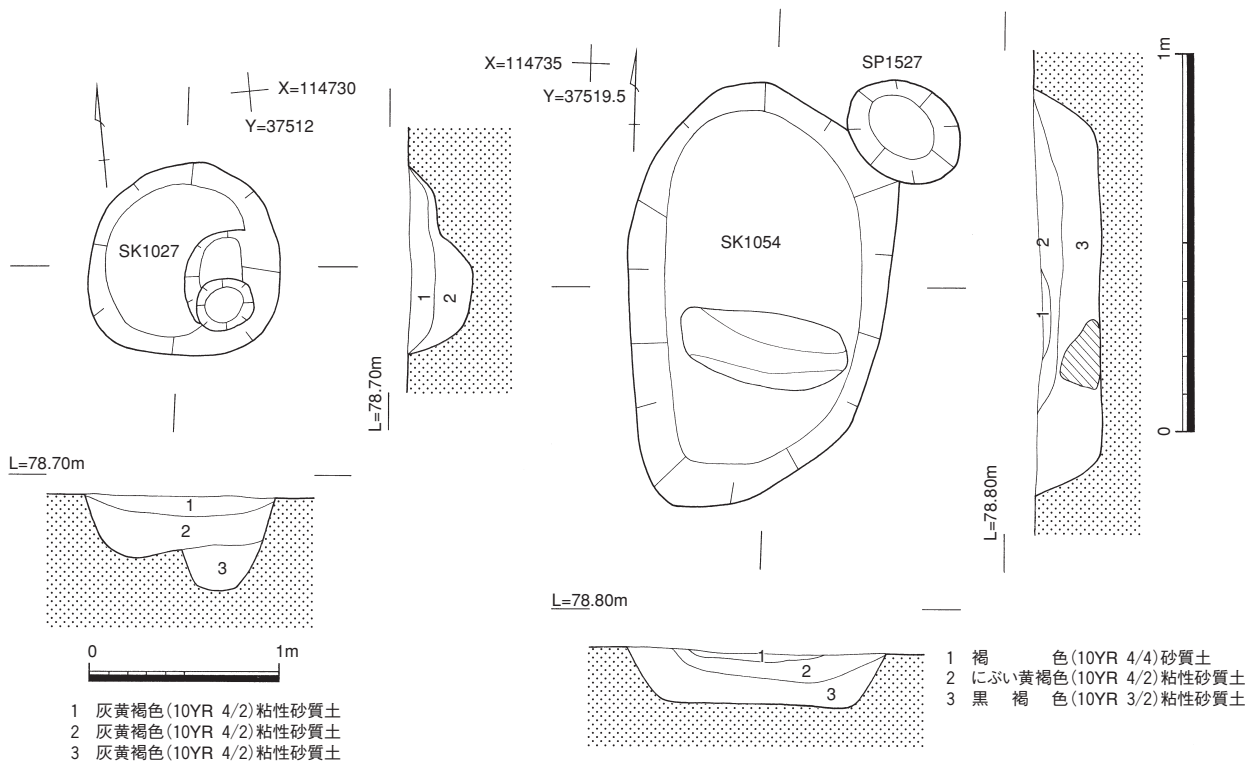
溝

溝1号 (SD1001) (第180図)

1区 α-I M-10・11で確認された溝。1区と東隣にある2区は土地改変が著しく、特に1区では部分的に段々畑を形成している。SD1001が検出された地点はこの段々畑の最下段にあたり、調査区の中で一番低い。また溝は一段低い箇所であり、調査区側溝によって切られてはいるものの東側の調査区外にさらに伸びると推測される。

調査区内での全長4.2m、最大幅1.22m、最大深度0.24mを測り、断面形態は逆台形か。覆土は概ね3層に分層できるものの、場所によっては4層となる。1層はオリーブ褐色粘性砂質土で、炭化物を若干含む。2層は黄褐色粘性砂質土でしまりが強く、マンガン粒の沈着が認められる。3層は暗灰黄色粘性砂質土で、直径10～50cm前後の砂岩および結晶片岩を含む。またこの層の直上で、磁器片が出土した。4層は黄褐色粘質土で、この層からも磁器片が出土している。

出土遺物が小片のために図化できなかったものの、近世と思われる磁器片が出土していることから江戸時代以降の溝と推測される。直径10～50cm前後の石の出土から、暗渠の可能性が考えられる。



第181図 SK遺構図・出土遺物 (20)

土坑

土坑27号 (SK1027) (第181図)

4-A区 β-II F-3で確認された土坑。平面形態・底面形態ともにほぼ円形、断面形態は不整形を呈する。直径1.00m前後、最大深度0.50mを測る。覆土は灰黄褐色粘性砂質土で、含有物から3層に分層できる。1層は暗オリーブ褐色土をブロック状に多く混入し、炭化物を多く含む。2層はしまりがやや弱く、3層は褐色土をブロック状に混入する。

遺物は、瀬戸美濃系と思われる磁器猪口1点、煮沸具の体部片1点、土師質土器焙烙2点、土師質土器椀1点、土師質土器片4点、弥生土器片2点が出土した。そのうち図化できたのは、胎土に角閃石・金雲母を含む土師質土器焙烙(873)のみである。その形態・胎土から岡本系焙烙と考えられ、讃岐からの搬入品と考えられる。

土坑54号 (SK1054) (第181図)

4-A区 β-II G-4・5でSP1527に切られた状態で確認された土坑。平面形態・底面形態ともに

やや不整な楕円形、断面形態は逆台形を呈する。長軸1.07m、短軸0.68m、最大深度0.17mを測る。覆土は3層に分層でき、1層は褐色砂質土でしまりが弱い。2層はにぶい黄褐色粘性砂質土で、褐色土ブロックを混入する。3層は黒褐色粘性砂質土で、炭化物を若干含む。

遺物は、肥前系磁器瓶（874）1点と土師質土器播鉢1点が出土した。

窯・灰原

窯・灰原は1区・4-A区で検出され、1区での検出が大半を占める。ただ1区はこれまでに述べたように土地改変に伴う削平が著しく、遺構の遺存状態は悪い。調査当時の所見で灰原としていた遺構のなかで、壁および床面に被熱痕跡が認められるものに関しては窯として報告することにし、遺構番号の振り替えを行った。

灰原1号 (SQ1001) (第182図)

1区 α -I L-10で確認された炭溜まり遺構。平面形態・底面形態ともに不整形、断面形態は逆台形を呈する。長軸1.44m、短軸1.25m、最大深度0.10mを測る。覆土は、土質および含有物から11層に分層できるものの、大きく6層に分けることができる。1層（1層）は黄褐色粘性砂質土で、炭化物を若干含む。2層（2・3層）は暗灰黄色粘性砂質土で両層ともに炭化物を含むが、2層の方がブロック状に多く混入する。3層（6～10層）は概ね黄褐色を呈し、暗オリーブ褐色土・黒褐色土ブロックを混入する。各層とも炭化物の混入が若干認められるものの、9層では多量に含まれる。4層（4層）は黄褐色粘性砂質土で、灰・炭化物および焼土を含む。5層（5層）はオリーブ褐色粘性砂質土で、炭化物・焼土を若干含む。6層（11層）は暗灰黄色粘性砂質土で、炭化物を全体的に多量に含む。

土層堆積中に焼土塊が含まれるものの、床面ないし壁面において被熱痕跡は認められなかった。遺物の出土は認められなかったものの、近接した別窯の出土遺物から中世～近世に属する可能性がある。

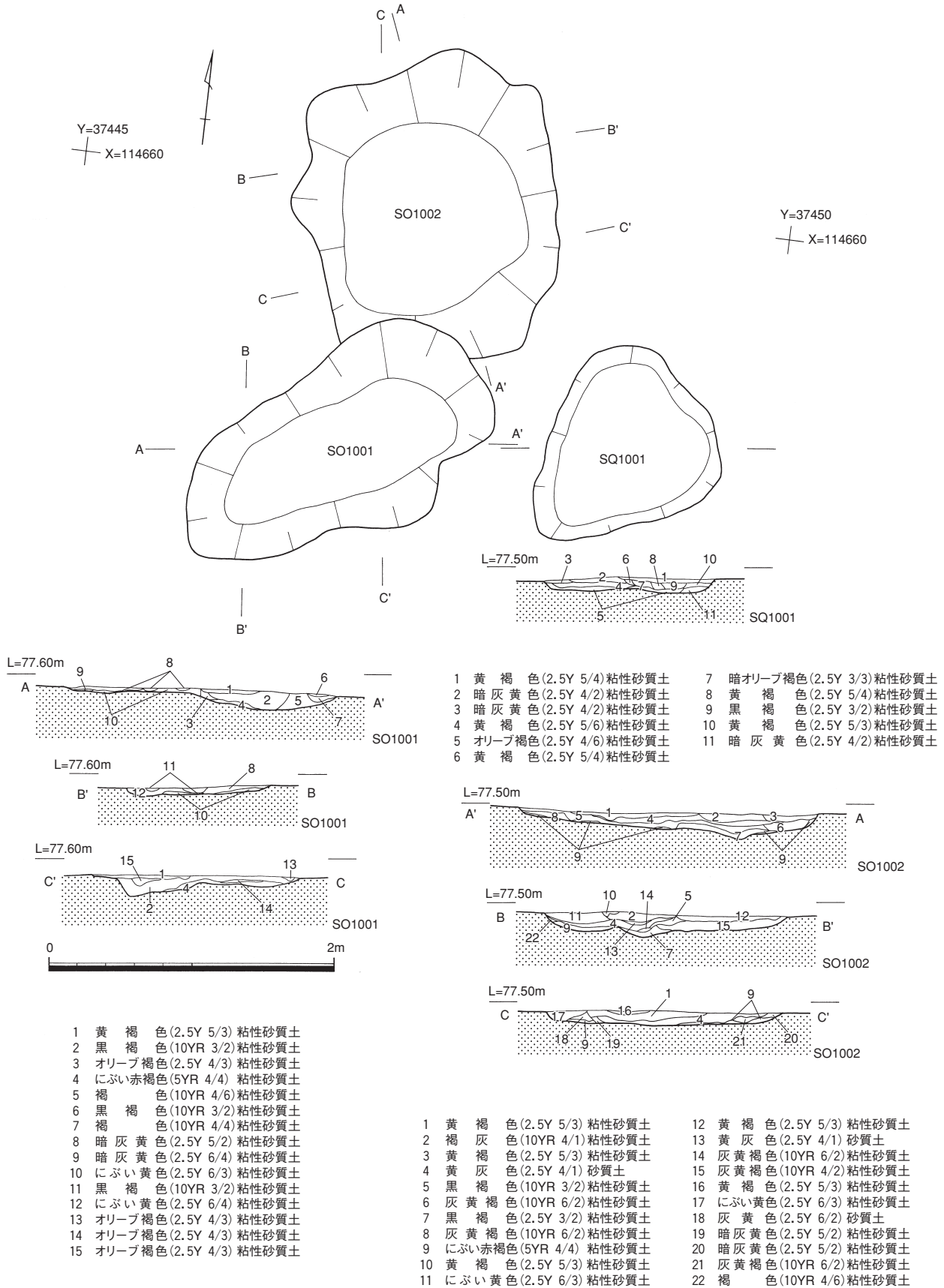
窯1号 (S01001) (第182図)

1区 α -I L-10で確認された窯。平面形態・底面形態ともに不整な楕円形、断面形態は不整形を呈する。長軸2.37m、短軸1.31m、最大深度0.15mを測る。覆土は、土質および含有物から15層に分層できる。1層は黄褐色粘性砂質土で、炭化物を若干含む。2・6・11層は黒褐色粘性砂質土で、炭化物を多く含む。3・13・14・15層はオリーブ褐色粘性砂質土で、暗オリーブ褐色土をブロック状に多く混入し、炭化物を多く含む。5・7層は褐色砂層、4層はにぶい赤褐色粘性砂質土で、部分的に炭化物やオリーブ褐色土を混入する。8・9層は暗灰黄色粘性砂質土で、炭化物を多く混入する。10・12層はにぶい黄色粘性砂質土で、炭化物を若干混入する。

床面に被熱痕跡と考えられる焼土面が認められたものの、付随遺構は確認できなかった。遺物は、小片のために図化できなかったものの瀬戸美濃系と思われる磁器碗1点、土師質土器片1点が出土した。遺構の所属時期は、出土遺物から中世～近世に属すると思われる。

窯2号 (S01002) (第182図)

1区 α -I L・M-10で確認された窯。平面形態は不整形、底面形態はやや不整な円形、断面形態



第182図 SO1001・1002、SQ1001遺構図

は舟底形を呈する。長軸2.11m、短軸1.88m、最大深度0.17mを測る。覆土は、土質および含有物から22層に分層できる。1・3・10・12・16層は黄褐色粘性砂質土で、炭化物を若干含む。2層は褐灰色粘性砂質土で、炭化物を多く混入する。4・13層は黄灰色砂質土で炭化物を多く含み、焼土を若干混入する。5層は黒褐色粘性砂質土で、炭化物を多く含む。6・8・14・21層は灰黄褐色粘性砂質土で、炭化物・焼土を混入する。炭化物の混入率が多い。7層は黒褐色粘性砂質土で、炭化物・焼土ブロックを多く混入する。9層はにぶい赤褐色粘性砂質土で、焼土面である。部分的に炭化物を混入する個所がある。11・17層はにぶい黄色粘性砂質土で、炭化物を多く含む。15層は灰黄褐色粘性砂質土で炭化物を大量に含み、黄褐色土ブロックを混入する。18層は灰黄色砂質土で、炭化物・焼土ブロックを混入する。19・20層は暗灰黄色粘性砂質土で、炭化物を多く含む。22層は褐色砂層で、自然堆積層である。

付随遺構は確認できず、遺物の出土も認められなかったものの、近接した別窯の出土遺物から中世～近世に属する可能性がある。

窯3号 (S01003) (第183図)

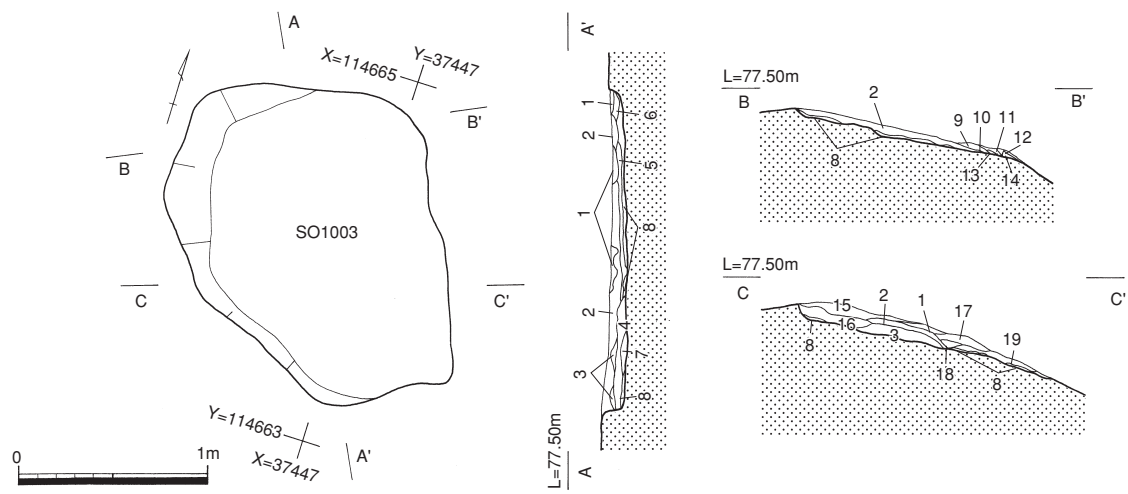
1区 α-I M-10で確認された窯。遺構の東側は土地改変に伴う削平を受け、平面形態・底面形態ともに不整形、断面形態は不整な舟底形を呈すると思われる。長軸1.70m、短軸1.40m、最大深度0.12mを測る。覆土は土質および含有物から19層に分層できる。1層は黄褐色砂質土で、炭化物を若干含む。2・12・15・18層は褐灰色粘性砂質土で、炭化物を多く含む。黄褐色土ブロックを混入する。3・6・11層は褐灰色粘性砂質土で炭化物を多く含み、黄褐色土ブロックを混入する。4・5・10・16・19層は黒色粘性砂質土で、炭化物が大半を占める。また黄褐色土・褐灰色土・焼土ブロックを部分的に若干混入する。7・13・14・17層は黒褐色粘性砂質土で、黄褐色土・褐灰色・にぶい赤褐色土ブロックを混入する。8層はにぶい赤褐色粘性砂質土で、焼土面である。部分的に、炭化物・褐灰色・黒色土ブロックを混入する個所もある。9層は、黄褐色砂質土である。

床面および壁面の立ち上がりにおいて、被熱痕跡が認められた。また付随遺構の確認はできなかったものの、直径10～15cm程の砂岩および結晶片岩数点が床面からやや浮いた状態で出土した。出土遺物は認められなかったものの、近接した別窯の出土遺物から中世～近世に属する可能性がある。

灰原3号 (SQ1003) (第184図)

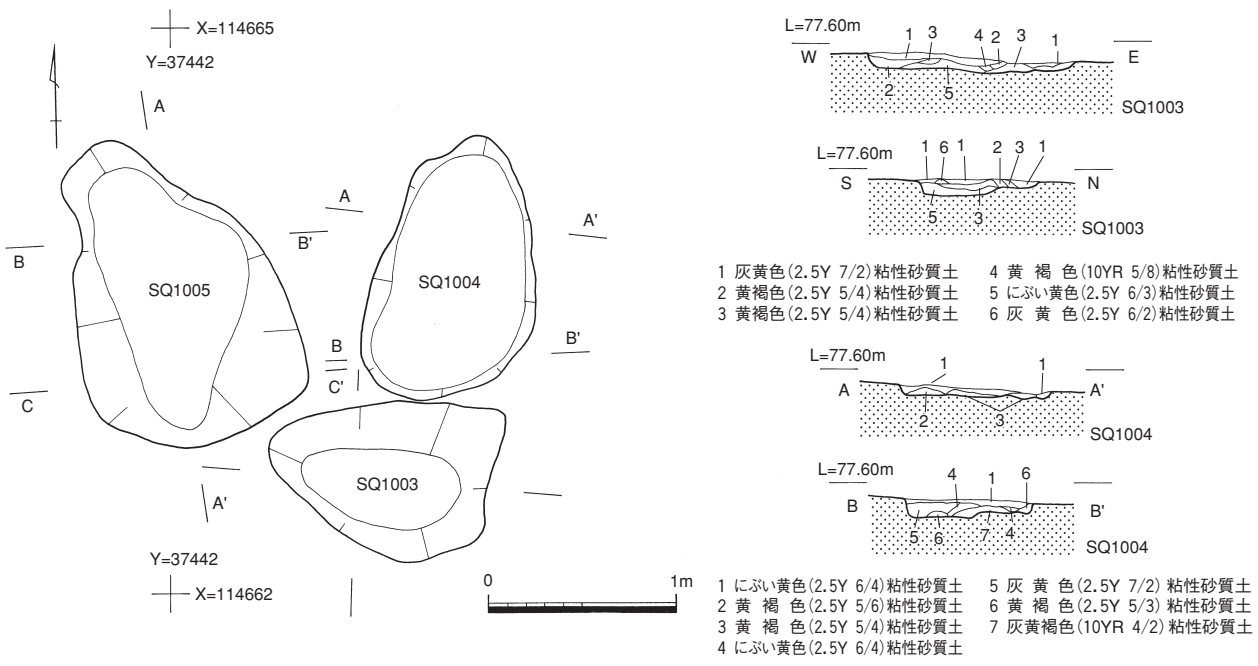
1区 α-I M-9で確認された炭溜まり遺構。平面形態は不整形、底面形態は楕円形、断面形態は不整な舟底形を呈する。長軸1.17m、短軸0.85m、最大深度0.09mを測る。覆土は土質および含有物から6層に分層できるものの、大きく2層に分けることができる。上層(1・6層)は灰黄色粘性砂質土で、炭化物をブロック状に多く混入する。また、灰および焼土も若干認められる。下層(2～5層)は概ね黄褐色を呈する。2層は砂層であり、部分的に炭化物を多く含むところがある。3層は黄褐色砂層ブロックを若干、炭化物ブロックを多く混入し、4層はしまりが強い。5層はにぶい黄色粘性砂質土で、炭化物および焼土をブロック状に混入する。

遺物の出土は認められなかったものの、近接した別窯の出土遺物から中世～近世に属する可能性がある。

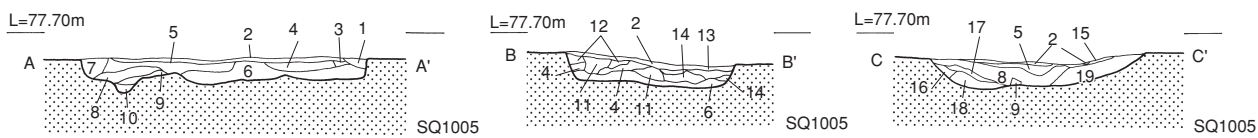


- | | | |
|-----------------------|-------------------------|------------------------|
| 1 黄褐色(2.5Y 5/3) 砂質土 | 8 にぶい赤褐色(5YR 4/4) 粘性砂質土 | 15 褐灰色(7.5Y 4/1) 粘性砂質土 |
| 2 褐灰色(7.5Y 4/1) 粘性砂質土 | 9 黄褐色(2.5Y 5/4) 砂質土 | 16 黒色(N2/) 粘性砂質土 |
| 3 褐灰色(10YR 4/1) 粘性砂質土 | 10 黒色(N2/) 粘性砂質土 | 17 黒褐色(2.5Y 3/2) 粘性砂質土 |
| 4 黒色(N2/) 粘性砂質土 | 11 褐灰色(10YR 4/1) 粘性砂質土 | 18 褐灰色(7.5Y 4/1) 粘性砂質土 |
| 5 黒色(N2/) 粘性砂質土 | 12 褐灰色(7.5Y 4/1) 粘性砂質土 | 19 黒色(N2/) 粘性砂質土 |
| 6 褐灰色(10YR 4/1) 粘性砂質土 | 13 黒褐色(2.5Y 3/2) 粘性砂質土 | |
| 7 黒褐色(2.5Y 3/2) 粘性砂質土 | 14 黒褐色(2.5Y 3/2) 粘性砂質土 | |

第183図 SO1003遺構図

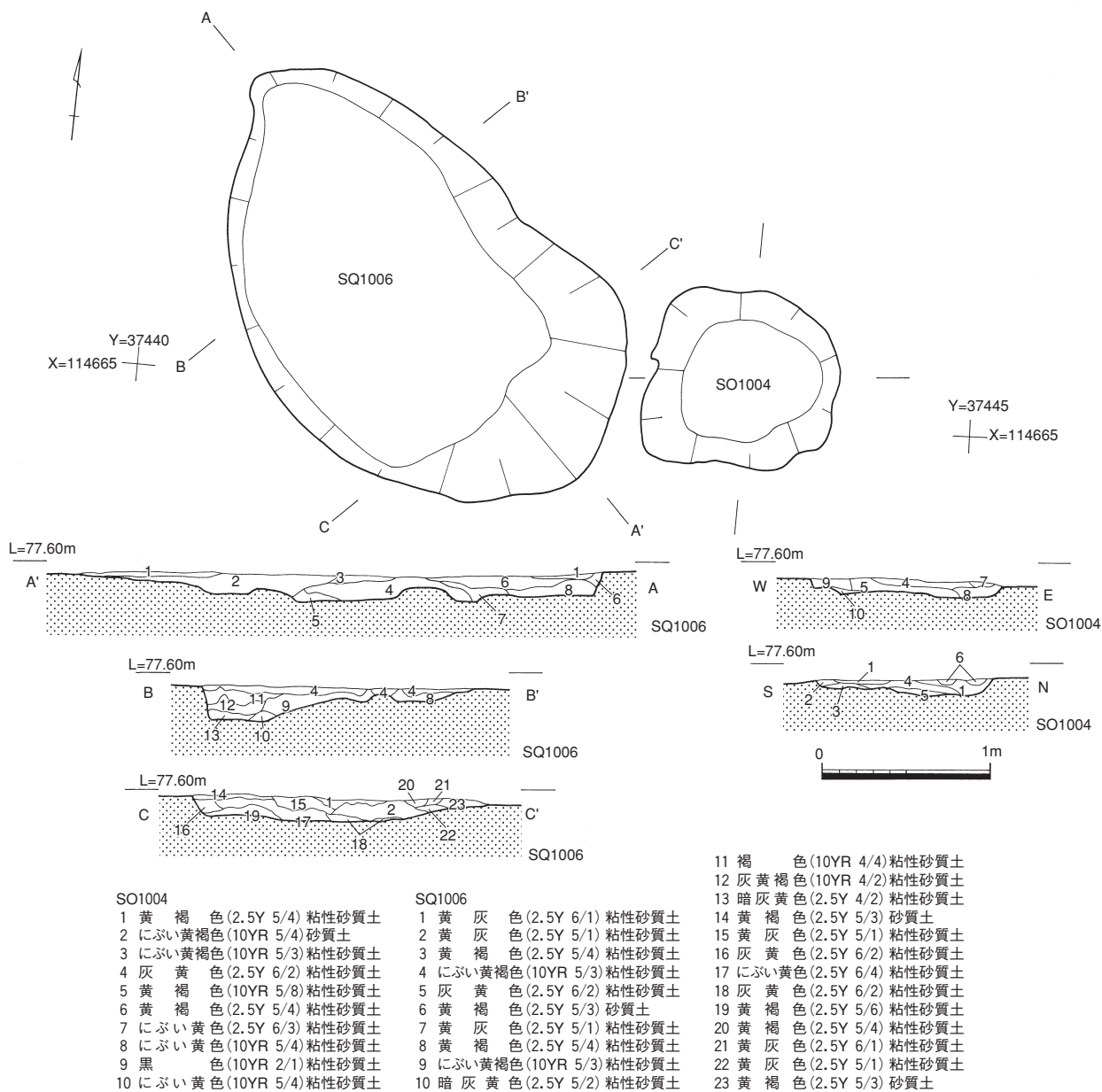


- | | |
|-------------------------|-------------------------|
| 1 灰黄色(2.5Y 7/2) 粘性砂質土 | 4 黄褐色(10YR 5/8) 粘性砂質土 |
| 2 黄褐色(2.5Y 5/4) 粘性砂質土 | 5 にぶい黄色(2.5Y 6/3) 粘性砂質土 |
| 3 黄褐色(2.5Y 5/4) 粘性砂質土 | 6 灰黄色(2.5Y 6/2) 粘性砂質土 |
| 1 にぶい黄色(2.5Y 6/4) 粘性砂質土 | 5 灰黄色(2.5Y 7/2) 粘性砂質土 |
| 2 黄褐色(2.5Y 5/6) 粘性砂質土 | 6 黄褐色(2.5Y 5/3) 粘性砂質土 |
| 3 黄褐色(2.5Y 5/4) 粘性砂質土 | 7 灰黄褐色(10YR 4/2) 粘性砂質土 |
| 4 にぶい黄色(2.5Y 6/4) 粘性砂質土 | |



- | | | |
|-------------------------|--------------------------|--------------------------|
| 1 にぶい黄色(2.5Y 6/4) 粘性砂質土 | 8 黒色(10YR 2/1) 粘性砂質土 | 15 にぶい黄色(2.5Y 6/3) 粘性砂質土 |
| 2 灰白色(10YR 8/2) 粘性砂質土 | 9 黄褐色(10YR 5/8) 粘性砂質土 | 16 にぶい黄色(2.5Y 6/4) 粘性砂質土 |
| 3 黄灰色(2.5Y 5/1) 粘性砂質土 | 10 黄褐色(10YR 5/8) 粘性砂質土 | 17 灰黄色(2.5Y 7/2) 粘性砂質土 |
| 4 灰黄色(2.5Y 7/2) 粘性砂質土 | 11 黄褐色(2.5Y 5/4) 粘性砂質土 | 18 灰黄色(10YR 6/2) 粘性砂質土 |
| 5 灰黄色(2.5Y 7/2) 粘性砂質土 | 12 にぶい黄色(2.5Y 6/4) 粘性砂質土 | 19 黄褐色(2.5Y 5/6) 粘性砂質土 |
| 6 黄褐色(2.5Y 5/3) 粘性砂質土 | 13 黄褐色(10YR 5/6) 粘性砂質土 | |
| 7 にぶい黄色(2.5Y 6/4) 粘性砂質土 | 14 暗灰黄色(2.5Y 5/2) 粘性砂質土 | |

第184図 SQ1003~1005遺構図



第185図 SO1004・SQ1006遺構図

灰原4号 (SQ1004) (第184図)

1区 α-I M-9で確認された炭溜まり遺構。平面形態・底面形態ともに楕円形、断面形態は逆台形を呈する。長軸1.45m、短軸0.88m、最大深度0.10mを測る。覆土は土質および含有物から7層に分層できるものの、大きく3層に分けることができる。上層(1層)はにぶい黄色粘性砂質土で、部分的に多量の炭化物を含む。中層(4・5・7層)のうち4層はにぶい黄色粘性砂質土、5層は灰黄色粘性砂質土で炭化物ブロックをやや多く混入する。7層は灰黄褐色粘性砂質土で、層全体に炭化物・灰を多量に含む。下層(2・3・6層)は黄褐色を呈し、2層は炭化物を部分的に多く含む。3層は砂層で、炭化物を部分的に含む。6層は炭化物・灰を部分的にブロック状に若干混入する。

遺物の出土は認められなかったものの、近接した別窯の出土遺物から中世～近世に属する可能性がある。

灰原 5号 (SQ1005) (第184図)

1区 α -I M-9で確認された炭溜まり遺構。平面形態・底面形態ともに不整形、断面形態は不整な逆台形を呈する。長軸1.74m、短軸1.17m、最大深度0.29mを測る。覆土は、土質および含有物から19層に分層できる。1層はにぶい黄色粘性砂質土、2層は灰白色砂質土で、炭化物を大量に混入する。3層は黄灰色粘性砂質土、4・5層は灰黄色粘性砂質土で、4層は炭化物を若干含む。6層は黄褐色砂粘性砂質土で、炭化物ブロックを混入する。7層はにぶい黄色粘性砂質土、8層は黒色粘性砂質土で層の大半を炭化物が占める。また灰および焼土を若干混入する。9～11層は黄褐色粘性砂質土で、9層は上層に焼土を多く含み、11層は炭化物ブロックを大量に混入する。12層はにぶい黄色粘性砂質土、13層は黄褐色粘性砂質土、14層は暗灰黄色粘性砂質土でそれぞれに炭化物を若干含む。15・16層はにぶい黄色を呈し、16層は炭化物を含む。17層は灰黄色粘性砂質土で、炭化物ブロックを大量に混入する。18層は灰黄褐色粘性砂質土で、炭化物ブロックを若干混入する。19層は黄褐色砂層でしまりがやや強く、灰黄色土ブロックを混入する。また炭化物・灰・焼土を全体的に含む。

出土遺物は認められなかったものの、近接した別窯の出土遺物から中世～近世に属する可能性がある。

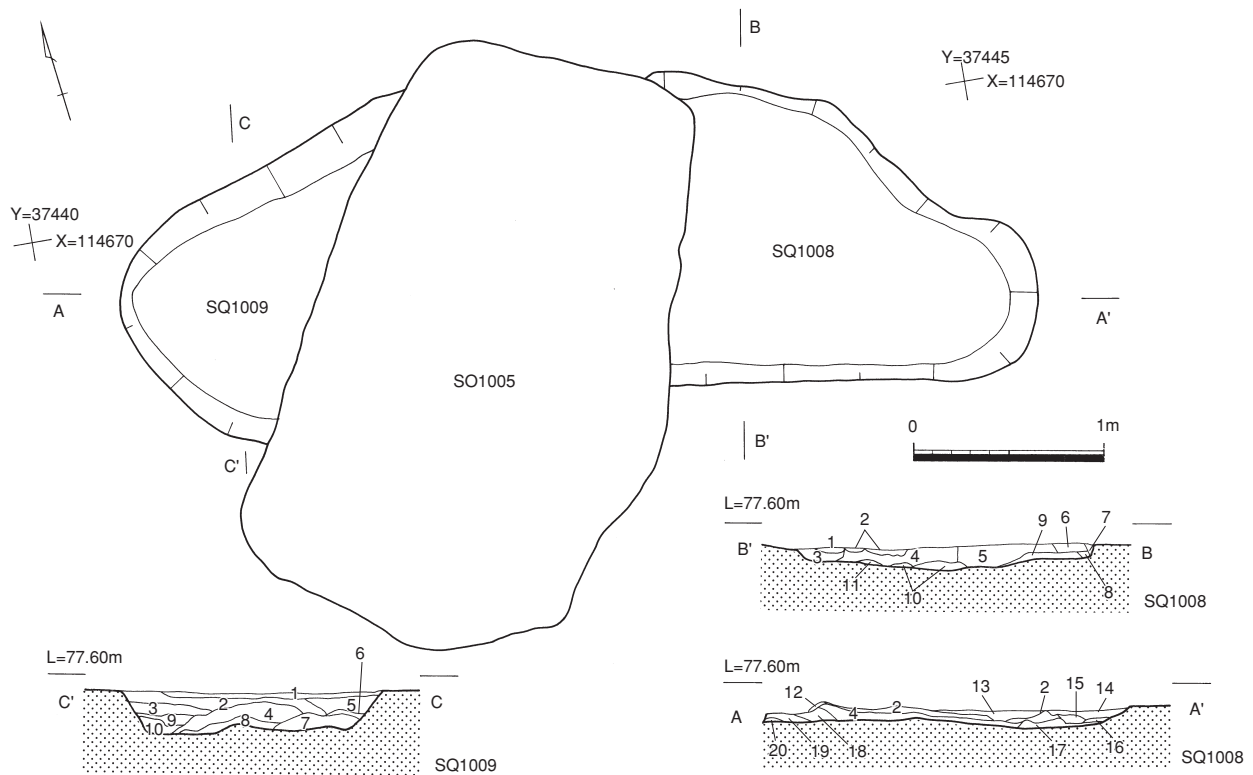
窯 4号 (S01004) (第185図)

1区 α -I M・N-9で確認された窯。平面形態・底面形態ともに不整形、断面形態は不整な舟底形を呈す。長軸1.29m、短軸1.20m、最大深度0.10mを測る。覆土は、土質および含有物から10層に分けることができる。1層は黄褐色粘性砂質土で、炭化物・灰を含む。2層はにぶい黄褐色砂質土で、やや砂質が強い。3層はにぶい黄褐色砂層で、焼土を若干混入する。4層は灰黄色粘性砂質土で、炭化物ブロックを混入する。5層は黄褐色粘性砂質土で、炭化物・焼土を若干含む。6層はにぶい黄色粘性砂質土で、炭化物・灰・焼土をやや多く含む。7層はにぶい黄色粘性砂質土で、炭化物・灰・焼土ブロックを部分的に混入する。8層は黄褐色粘性砂質土で、部分的に炭化物を含む。9層はにぶい黄色粘性砂質土で、炭化物・灰・焼土をブロック状に部分的に混入する。10層は黒色粘性砂質土で、粘性が強い。上層はにぶい黄色土を混入する。

出土遺物は認められなかったものの、近接した別窯の出土遺物から中世～近世に属する可能性がある。

灰原 6号 (SQ1006) (第185図)

1区 α -I M・N-9で確認された炭溜まり遺構。平面形態・底面形態ともに不整な楕円形、断面形態は不整形を呈する。長軸3.06m、短軸1.80m、最大深度0.20mを測る。覆土は、土質および含有物から23層に分層できる。1層は黄灰色粘性砂質土で、炭化物はわずかだが灰を多く含む。2層は黄灰色粘性砂質土で、炭化物・灰を多く含む。また黄褐色土ブロックを混入する。3層は黄褐色粘性砂質土で、炭化物・灰を多く混入する。4層はにぶい黄褐色粘性砂質土で、焼土を多く混入する。5層は灰黄色粘性砂質土、6層は黄褐色砂質土で炭化物ブロックを多く混入する。7層は黄灰色粘性砂質土で炭化物・



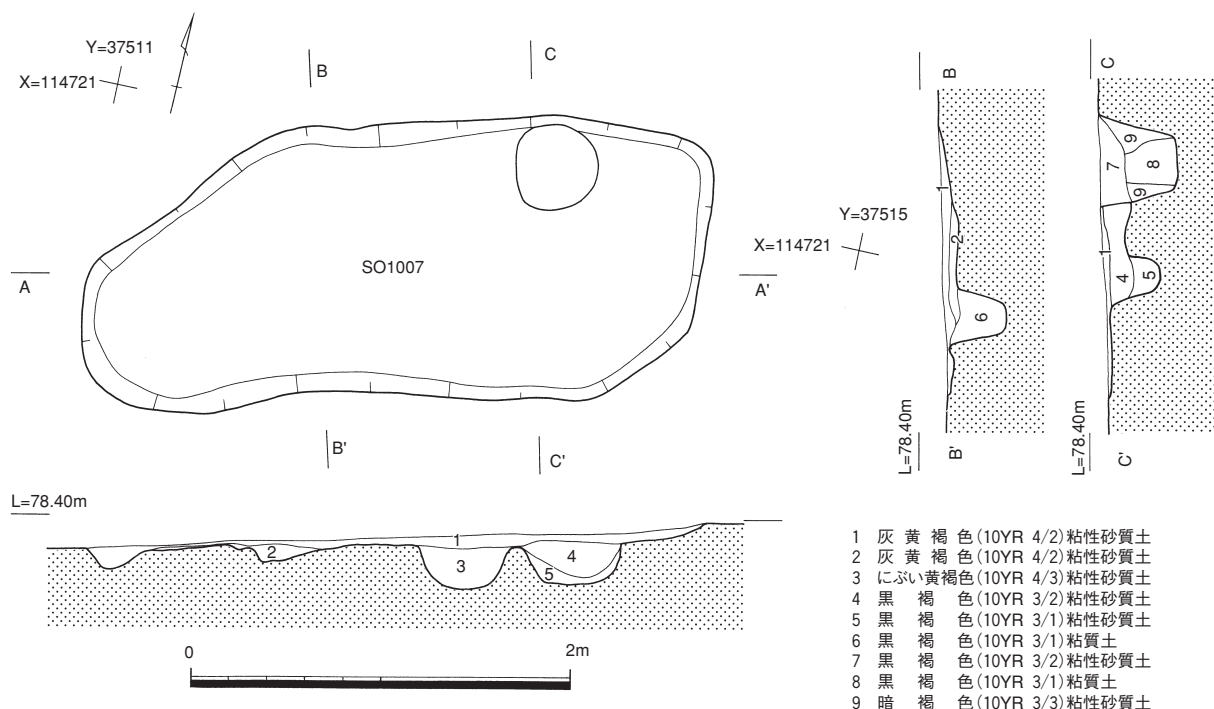
- 1 灰黄色(2.5Y 7/2)粘性砂質土
- 2 褐灰色(10YR 5/1)粘性砂質土
- 3 褐灰色(10YR 5/1)粘性砂質土
- 4 にぶい黄色(2.5Y 6/3)粘性砂質土
- 5 灰黄色(2.5Y 6/2)粘性砂質土
- 6 褐色(10YR 4/6)粘性砂質土
- 7 灰黄褐色(10YR 5/2)粘性砂質土
- 8 褐色(10YR 4/6)粘性砂質土
- 9 灰黄褐色(10YR 5/2)粘性砂質土
- 10 灰黄褐色(10YR 4/2)粘性砂質土

- | | |
|--------------------------|--------------------------|
| 1 黄褐色(2.5Y 5/3)粘性砂質土 | 11 明黄褐色(2.5Y 6/6)粘性砂質土 |
| 2 黄灰色(2.5Y 6/1)粘性砂質土 | 12 黄褐色(2.5Y 5/3)粘性砂質土 |
| 3 灰黄色(2.5Y 7/2)砂質土 | 13 褐灰色(10YR 6/1)粘性砂質土 |
| 4 明黄褐色(2.5Y 6/6)粘性砂質土 | 14 黒(2.5Y 2/1)粘性砂質土 |
| 5 黄褐色(2.5Y 5/4)粘性砂質土 | 15 黄褐色(2.5Y 5/3)粘性砂質土 |
| 6 灰黄色(2.5Y 6/2)粘性砂質土 | 16 黄褐色(2.5Y 5/6)粘性砂質土 |
| 7 黄褐色(2.5Y 5/4)粘性砂質土 | 17 にぶい黄褐色(10YR 4/3)粘性砂質土 |
| 8 褐色(10YR 4/6)粘性砂質土 | 18 にぶい黄褐色(10YR 4/3)粘性砂質土 |
| 9 にぶい黄色(2.5Y 6/4)粘性砂質土 | 19 褐灰色(10YR 6/1)粘性砂質土 |
| 10 にぶい黄褐色(10YR 4/3)粘性砂質土 | 20 黄褐色(2.5Y 5/6)粘性砂質土 |

第186図 SQ1008・1009遺構図

灰を多く含み、黄褐色土ブロックを混入する。8層は黄褐色粘性砂質土で、炭化物・灰を多く含む。9層はにぶい黄褐色粘性砂質土で、わずかな炭化物と多くの焼土を混入する。10層は暗灰黄色粘性砂質土で、上層に焼土が認められる。11層は褐色粘性砂質土で、焼土ブロックを多く混入する。12層は灰黄褐粘性砂質土、13層は暗灰黄色粘性砂質土で共に炭化物・焼土を多く含む。14層は黄褐色砂質土で、炭化物をブロック状に多く混入する。15層は黄灰色粘性砂質土で、炭化物・灰を多く含む。16・18層は灰黄色粘性砂質土、17層はにぶい黄色粘性砂質土である。19層は黄褐色砂層で、灰などを多く含む。20層は黄褐色粘性砂質土で、炭化物・灰・焼土を多く混入する。21層は黄灰色粘性砂質土で、炭化物はわずかだが灰を多く含む。22層は黄灰色粘性砂質土で炭化物・灰を多く含み、黄褐色土ブロックを混入する。23層は黄褐色砂質土で、炭化物をブロック状に多く混入する。

遺物は土師質土器片と弥生土器片が出土したが、小片のために図化できなかった。近接した別窯が出土遺物から中世～近世に属すると考えられ、弥生土器片は混入物と思われる。本窯の所属時期もこの時期の可能性が高いと推測される。



第187図 SO1007遺構図

灰原 8号 (SQ1008) (第186図)

1区 α-I N・O-9・10でSO1005・SQ1009と切り合い関係の状態を確認された炭溜まり遺構。SO1005に切られているのは确实だが、SQ1009との前後関係は不明である。平面形態・底面形態ともに不整な楕円形、断面形態は不整な舟底形を呈する。長軸最大長1.92m、短軸1.56m、最大深度0.20mを測る。覆土は土質および含有物から20層に分層できる。各層共にマンガング粒・鉄分の沈着が認められるものの含有物は少ない。1・12・15層は黄褐色粘性砂質土、2層は黄灰色粘性砂質土、3層は灰黄色砂質土、4層は明黄褐色粘性砂質土で、褐色土ブロックを多量に混入する。5層は黄褐色粘性砂質土で、にぶい黄色土ブロックを若干混入する。6層は灰黄色粘性砂質土で炭化物をブロック状に混入する。7層は黄褐色粘性砂質土、8層は褐色粘性砂質土で、炭化物を若干含む。9層はにぶい黄色粘性砂質土で、炭化物を若干含む。10・17・18層はにぶい黄褐色粘性砂質土、11層は明黄褐色粘性砂質土、13・19層は褐色粘性砂質土で炭化物を若干含む。14層は黒色粘性砂質土で、炭化物が層中の大半を占め、かつ焼土ブロックも若干混入する。16・20層は黄褐色粘性砂質土である。

出土遺物は認められなかったものの、近接した別窯の出土遺物から中世～近世に属する可能性がある。

灰原 9号 (SQ1009) (第186図)

1区 α-I N・O-9でSO1005・SQ1008と切り合い関係の状態を確認された窯。SO1005に切られているのは确实だが、SQ1008との前後関係は不明である。推定の平面形態・底面形態は、ともにやや不整な長方形、断面形態は不整な逆台形を呈する。短軸1.36m、最大深度0.21mを測る。覆土は土質および含有物から10層に分層できる。1層は灰黄色粘性砂質土で、炭化物を部分的に多く含む。2層は褐

灰色粘性砂質土で、灰黄色土ブロックを多く混入する。また炭化物・灰・焼土を混入する。3層は褐色粘性砂質土で、炭化物・灰のブロックを多く混入する。4層はにぶい黄色粘性砂質土で、炭化物・灰を若干含む。また灰黄色土・灰黄褐色土ブロックを大量に混入する。5層は灰黄色粘性砂質土で、灰を多く含む。6層は褐色砂層でしまりが弱い。7層は灰黄褐色粘性砂質土で、炭化物・灰を部分的に混入する。8層は褐色砂層で、6層と同じくしまりが弱い。9・10層は灰黄色粘性砂質土で、炭化物・灰を若干混入する。

遺物は瀬戸美濃系と思われる陶器碗が出土したが、小片のために図化できなかった。近接した別窯の出土遺物から中世～近世に属すると考えられ、本窯の所属時期もこの時期の可能性が高いと推定される。

窯7号 (S01007) (第187図)

4-A区 β-II D・E-3で確認された窯。遺構検出時において確認できなかったものの、柱穴1基と切り合い関係を持つ事がわかった。また埋土掘削後、床面において5基の柱穴を確認した。そのうちの2基はS01007に付随する遺構の可能性はある。

平面形態・底面形態ともに不整な楕円形、断面形態は舟底形を呈する。長軸3.35m、短軸1.42m、最大深度0.12mを測る。覆土は、土質および含有物から9層に分層できるものの、7～9層は切り合い関係にある柱穴の覆土である。1層は灰黄褐色粘性砂質土で、炭化物・灰を大量に含む。また焼土を若干含む。2層は灰黄褐色粘性砂質土で、にぶい黄褐色土ブロックを若干混入する。3層はにぶい黄褐色粘性砂質土で、褐色土ブロックを若干混入する。4層は黒褐色粘性砂質土で炭化物をやや多く含み、焼土を若干含む。5層は黒褐色粘性砂質土で、炭化物を多く含む。6層は黒褐色粘質土である。

遺物は土師質土器杯・土師質土器羽釜、弥生土器片、結晶片岩製叩石が出土したものの、小片のために図化できるものはなかった。本窯の所属時期は、中世と推定される。

柱穴内出土遺物

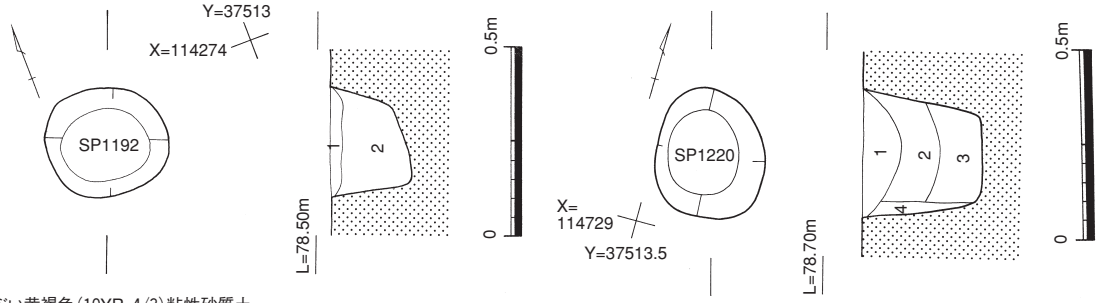
ここでは、掘立柱建物を構成するに至らなかった柱穴の内、遺物の出土状況および出土遺物が資料化可能なものについて述べることにする。

柱穴

柱穴192号 (SP1192) (第188図)

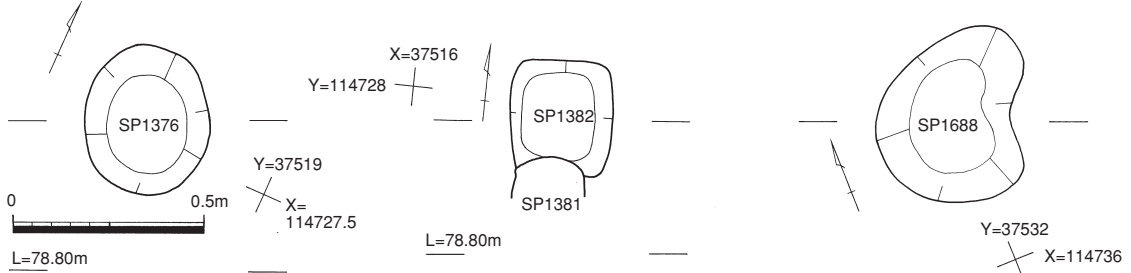
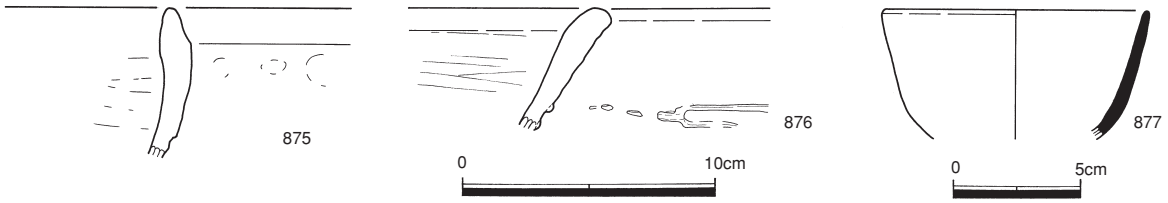
4-A区 β-II E-3で確認された柱穴。平面形態・底面形態ともにやや不整な円形、断面形態は不整な逆台形を呈し、直径0.30m前後、最大深度0.22mを測る。覆土は2層に分層でき、1層はにぶい黄褐色粘性砂質土で、灰黄褐色土をブロック状に混入する。また炭化物を多く含む。2層は灰黄褐色粘性砂質土で、しまりがやや強い。

遺物は混入物と考えられる土師質土器こね鉢(875)1点と、土師質土器焙烙(876)1点が出土した。焙烙は胎土に角閃石・金雲母を含み、またその形態から岡本系焙烙と考えられる。讃岐からの搬入品と考えられる。



- 1 にぶい黄褐色(10YR 4/3)粘性砂質土
- 2 灰黄褐色(10YR 4/2)粘性砂質土

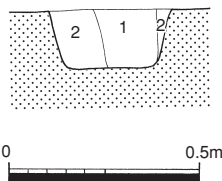
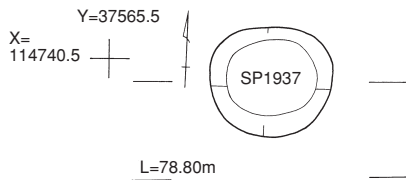
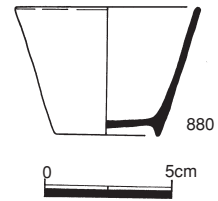
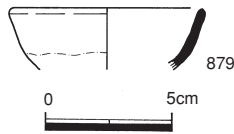
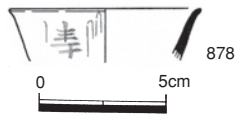
- 1 にぶい黄褐色(10YR 4/3)粘性砂質土
- 2 灰黄褐色(10YR 4/2)粘性砂質土
- 3 灰黄褐色(10YR 4/2)粘性砂質土
- 4 褐色(10YR 4/4)粘性砂質土



- 1 灰黄褐色(10YR 4/2)粘性砂質土
- 2 にぶい黄褐色(10YR 4/3)粘性砂質土
- 3 褐色(10YR 4/4)粘性砂質土

- 1 暗褐色(10YR 3/4)粘性砂質土
- 2 灰黄褐色(10YR 4/2)粘性砂質土
- 3 灰黄褐色(10YR 4/2)粘性砂質土

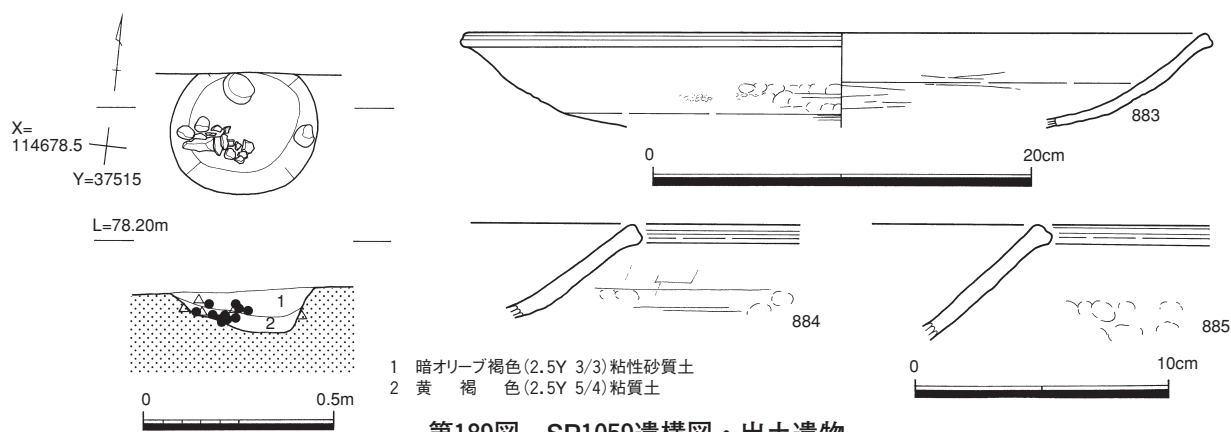
- 1 にぶい黄褐色(10YR 4/3)粘性砂質土
- 2 暗褐色(10YR 3/3)粘性砂質土
- 3 灰黄褐色(10YR 4/2)粘性砂質土



- 1 暗褐色(10YR 3/4)粘性砂質土
- 2 褐色(10YR 4/4)粘性砂質土



第188図 SP遺構図・出土遺物 (12)



第189図 SP1059遺構図・出土遺物

柱穴220号 (SP1220) (第188図)

4-A区 β-II F-3で確認された柱穴。平面形態・底面形態ともにやや不整な円形、断面形態は逆台形を呈し、直径0.30m前後、最大深度0.31mを測る。覆土は4層に分層できるものの、大きく2層にわけることができる。上層(1層)はにぶい黄褐色粘性砂質土で、暗オリーブ褐色土をブロック状に混入する。下層(2~4層)のうち2・3層は灰黄褐色粘性砂質土、4層は褐色粘性砂質土で、2層はにぶい黄褐色土ブロックを混入する。また3層では、褐色土ブロックを混入する。

遺物は瀬戸美濃系陶器碗1点、混入物と考えられる土師質土器片3点が出土し、図化できたのは陶器碗(877)のみである。

柱穴376号 (SP1376) (第188図)

4-A区 β-II F-4で確認された柱穴。平面形態・底面形態ともにやや不整な円形、断面形態は逆台形を呈し、直径0.35m前後、最大深度0.27mを測る。覆土は3層に分層でき、柱痕を明瞭にとどめる。1層は灰黄褐色粘性砂質土で、比較的炭化物を多く含む。2層は柱痕部にあたり、にぶい黄褐色粘性砂質土で炭化物を若干含む。3層は褐色粘性砂質土で、砂質がやや強い。

出土遺物は、肥前系と思われる磁器小杯(878)1点のみである。

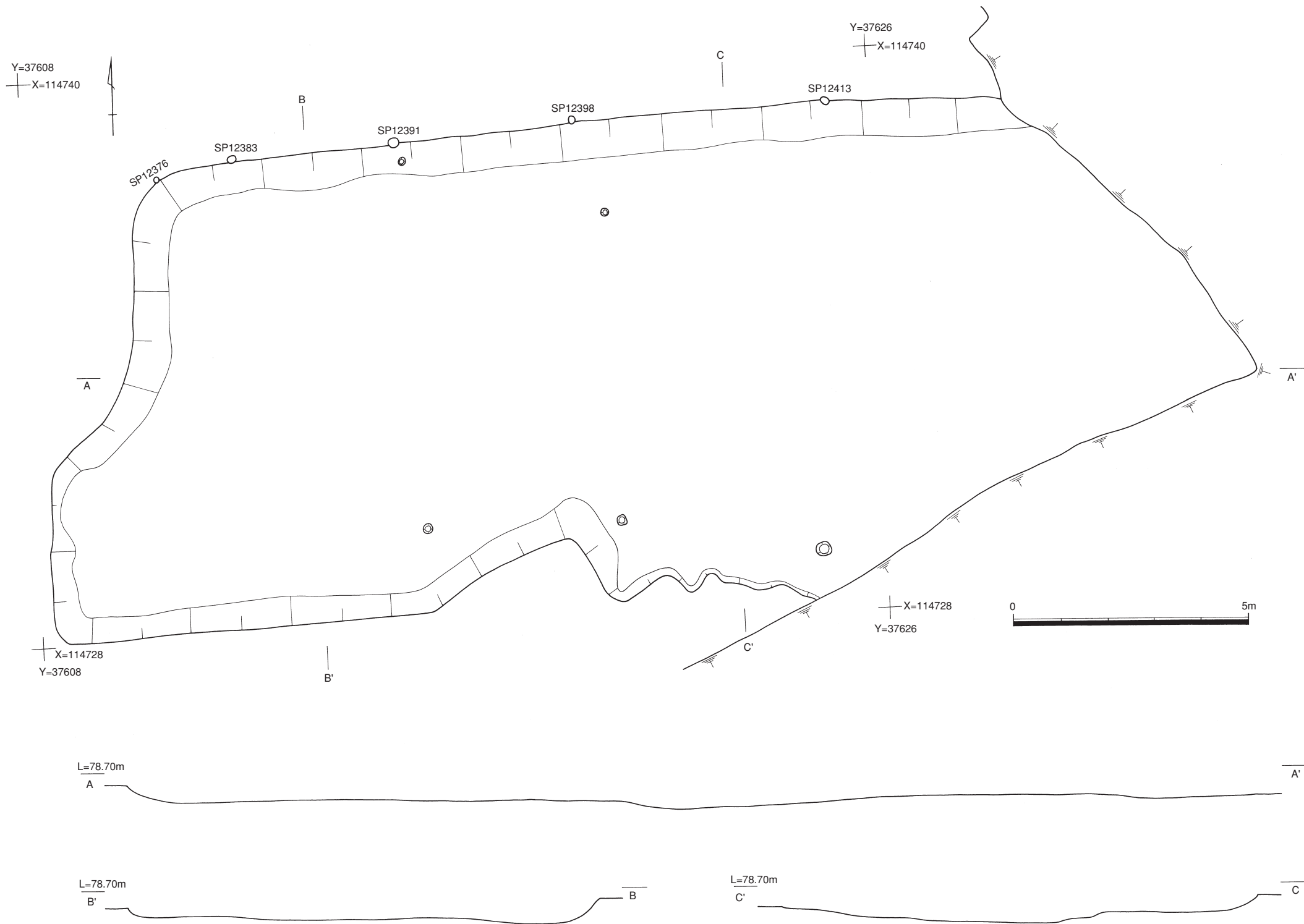
柱穴382号 (SP1382) (第188図)

4-A区 β-II F-4でSP1381に切られた状態で確認された柱穴。平面形態・底面形態ともにやや方形、断面形態は逆台形を呈し、一辺0.27m前後、最大深度0.33mを測る。覆土は3層に分層でき、柱痕を明瞭にとどめる。1層は暗褐色粘性砂質土で、炭化物をやや多く含む。2層は柱痕部にあたり、灰黄褐色粘性砂質土で褐色土ブロックを混入する。3層は灰黄褐色粘性砂質土で、しまりがやや強い。

遺物は瀬戸美濃系陶器小碗1点、土師質土器片2点が出土し、図化できたのは小碗(879)のみである。

柱穴688号 (SP1688) (第188図)

4-A区 β-II H-7で確認された柱穴。平面形態・底面形態ともに不整形、断面形態は逆台形を



第190図 SX1007 遺構図

呈し、長軸0.48m、短軸0.42m、最大深度0.24mを測る。覆土は3層に分層でき、1層はにぶい黄褐色粘性砂質土で、灰黄褐色土をブロック状に混入する。2層は暗褐色粘性砂質土で、炭化物を若干含む。3層は灰黄褐色粘性砂質土で、しまりがやや強い。

遺物は、磁器小杯（880）1点のみの出土である。

柱穴937号 (SP1937) (第188図)

4-B区 β-II H-14で確認された柱穴。平面形態・底面形態ともにやや不整な円形、断面形態は逆台形を呈し、直径0.30m前後、最大深度0.16mを測る。覆土は2層に分層でき、柱痕を明瞭にとどめる。1層は暗褐色粘性砂質土で、にぶい黄褐色土ブロックをやや多く混入する。また柱痕部にあたり、炭化物を多く含む。2層は褐色粘性砂質土で、やや砂質が強い。

出土遺物は、備前産と考えられる陶器灯明皿2点（881・882）のみである。881は灯芯油痕が2箇所認められ、内面および外面口縁部のみ施釉されている。それに対し、882は内面のみの施釉である。

柱穴59号 (SP1059) (第189図)

6-B区 β-II A-2で遺構の一部を攪乱によって切られた状態で確認された柱穴。平面形態・底面形態ともに楕円形、断面形態は逆台形を呈し、長軸0.46m、短軸0.35m、最大深度0.47mを測る。覆土は2層に分層でき、1層は暗オリーブ褐色粘性砂質土、2層は黄褐色粘質土である。両層共に炭化物・土器片を含むが、2層の方がやや多く認められる。

遺物は土師質土器焙烙口縁部3点・体部片7点、磁器片1点が出土し、図化できたのは焙烙（883～885）のみである。口縁部の形態、および胎土に角閃石・金雲母を含むことから、これらの焙烙は岡本系焙烙で、讃岐からの搬入品と思われる。

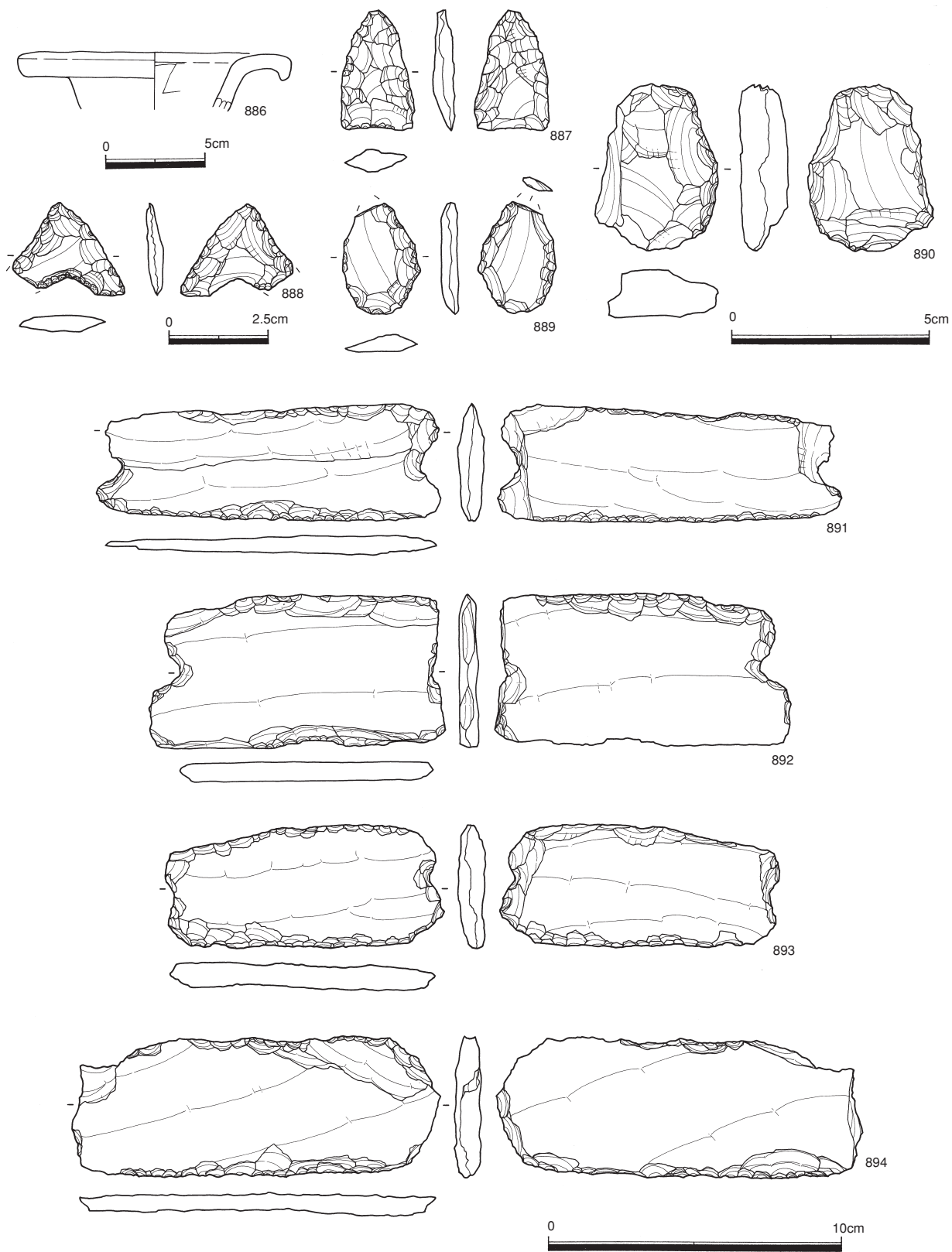
不明遺構

調査時において、弥生時代の水田として検出された遺構である。遺物は弥生時代のものだけでなく、中近世遺物も出土している。覆土の最下層で部分的に暗灰黄色粘質土が認められるが、周辺の遺構検出状況から水田遺構として積極的に裏付けることができないために、不明遺構として報告することとした。

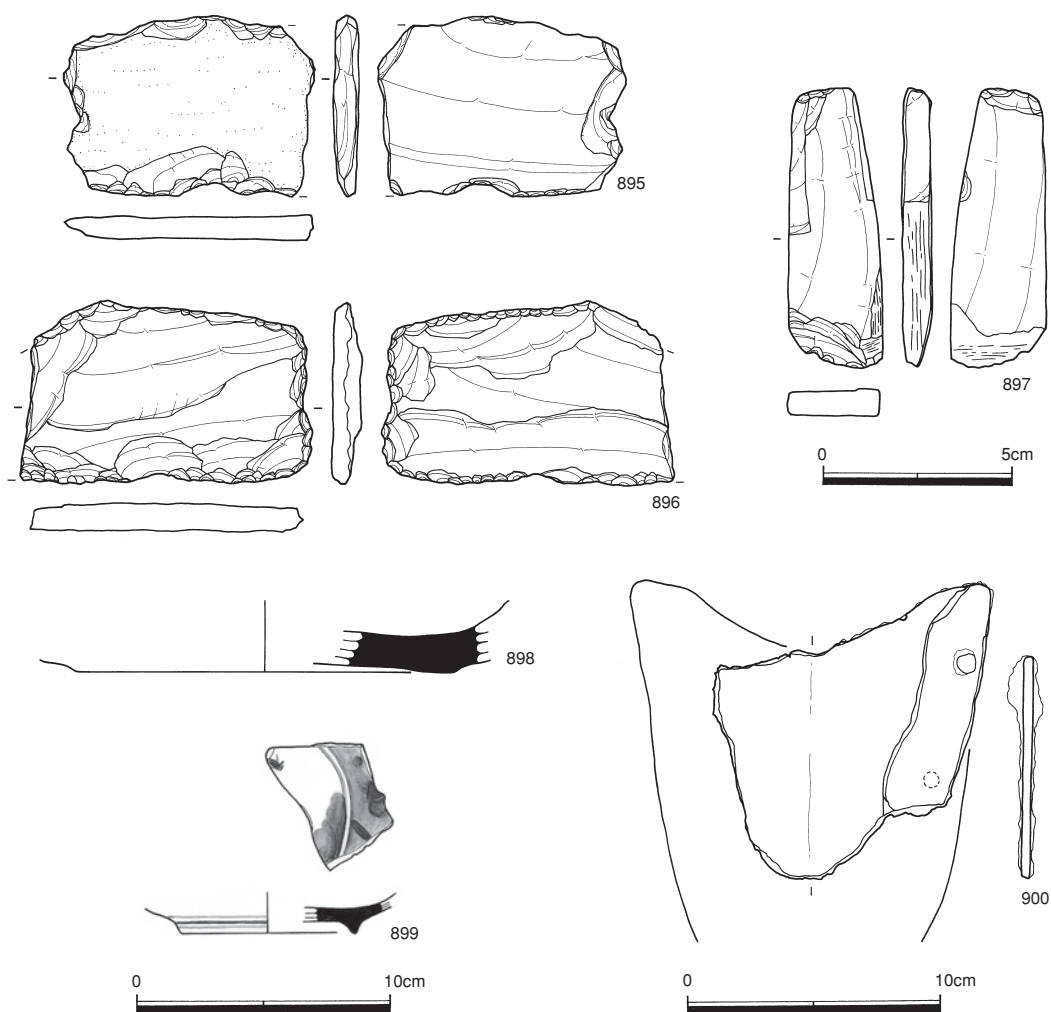
不明遺構7号 (SX1007) (第190～192図)

5-B区 β-III F~H-2~7でSP7基に切られた状態で検出された不明遺構。平面形態・底面形態ともに不整な方形、断面形態は舟底形を呈し、長軸24.22m、短軸10.09m、最大深度0.84mを測る。調査時では畦畔とおぼしきものを検出し、水田一筆ごとに土層堆積を記録しているが、写真で見ると堆積状況は一筆ごとにまとまらず、隣接する水田につながる。地点によって異なるが、覆土は大きく2層に分けることができ、ブロック土を混入する層の下に暗灰黄色粘質土が認められる。堆積状況は、部分的な記録のみで全容は不明である。また覆土除去後、床面に柱穴5基を検出した。これらの柱穴から、出土遺物は認められなかった。

出土遺物は、壺形土器口縁部・底部各7点、甕形土器口縁部3点・底部7点、高坏形土器3点、鉢形



第191图 SX1007出土遺物(1)



第192図 SX1007出土遺物(2)

土器 1 点、体部片832点、サヌカイト製石鎌 3 点・剥片18点、結晶片岩製打製石庖丁15点・石斧 1 点・砥石 2 点・剥片 8 点、須恵質土器椀 3 点、土師質土器椀 2 点、土師質土器片 8 点、土師質土器羽釜脚部 3 点、土師質土器こね鉢 1 点、土師質土器鍋 3 点、須恵器甕片 1 点、青磁片 2 点、肥前系磁器皿 1 点、瀬戸美濃系磁器碗 1 点・陶器碗 3 点、土師質土器焙烙片 1 点、鉄片 2 点、瓦 1 点である。その中で図化できたのは、壺 (886)、石鎌 (887~889)、楔形石器 (890)、打製石庖丁 (891~896)、石斧 (897)、須恵器甕 (898)、磁器皿 (899)、鉄片 (900) である。899は、自然堆積層直上からの出土である。

出土遺物のレベルが不明だが、ブロック土から中近世遺物が、暗灰黄色粘質土から弥生時代の遺物が出土したと仮定するならば、弥生時代、この遺構はある時期帯水した状態にあった可能性を想定することができる。

(5) 包含層

包含層出土遺物は、土器314点、石器288点、鉄器3点を図化した。掘り下げ深度の誤認により、包含層出土ではあるものの完形に近い個体もある。弥生土器は4-B区・5-A・B区で、中近世の遺物は4-A・B区を中心にその出土量が多く認められ、遺構検出状況に比例した状態といえる。出土遺物の量は圧倒的に弥生時代のものが多く、後期以降の遺物が大半を占める。

この章では、それぞれ器種別にまとめて述べていくことにする。

壺形土器 (第193～196図)

壺形土器(901～962)は、計62点図化できた。短頸広口壺(901・902・905・906・927・932・934・935)・細頸広口壺(924～926)、広口壺(903・904・907～923・939～943)、長頸壺(928・944・945)、直口壺(936・946・947)、無頸壺(937・938)、二重口縁壺(929～931)、体部(948)、底部(949～962)である。937は鉢か？

壺は遺構からの出土量が少く、包含層出土遺物でその様相の一端をうかがうことができる。広口壺は口縁部の外反の度合いや口縁端部の成形によって大きく分けることができ、口縁部が緩やかに屈曲して外上方に広がるもの、それがさらに大きく広がるもの、直線的に開くもの、緩やかに立ち上がりそのまま口縁端部をおさめるものがある。口縁端部はそのまま丸く収めるもの、端面を形成するもの、端部が上方あるいは下方、もしくはその両方に拡張し端面を形成するものがある。また口縁部端面には、凹線や刻目、鋸歯文・斜格子文が施される。底部は平底が主体であり、960・961のみ丸みを帯びた平底である。丸底は認められなかった。

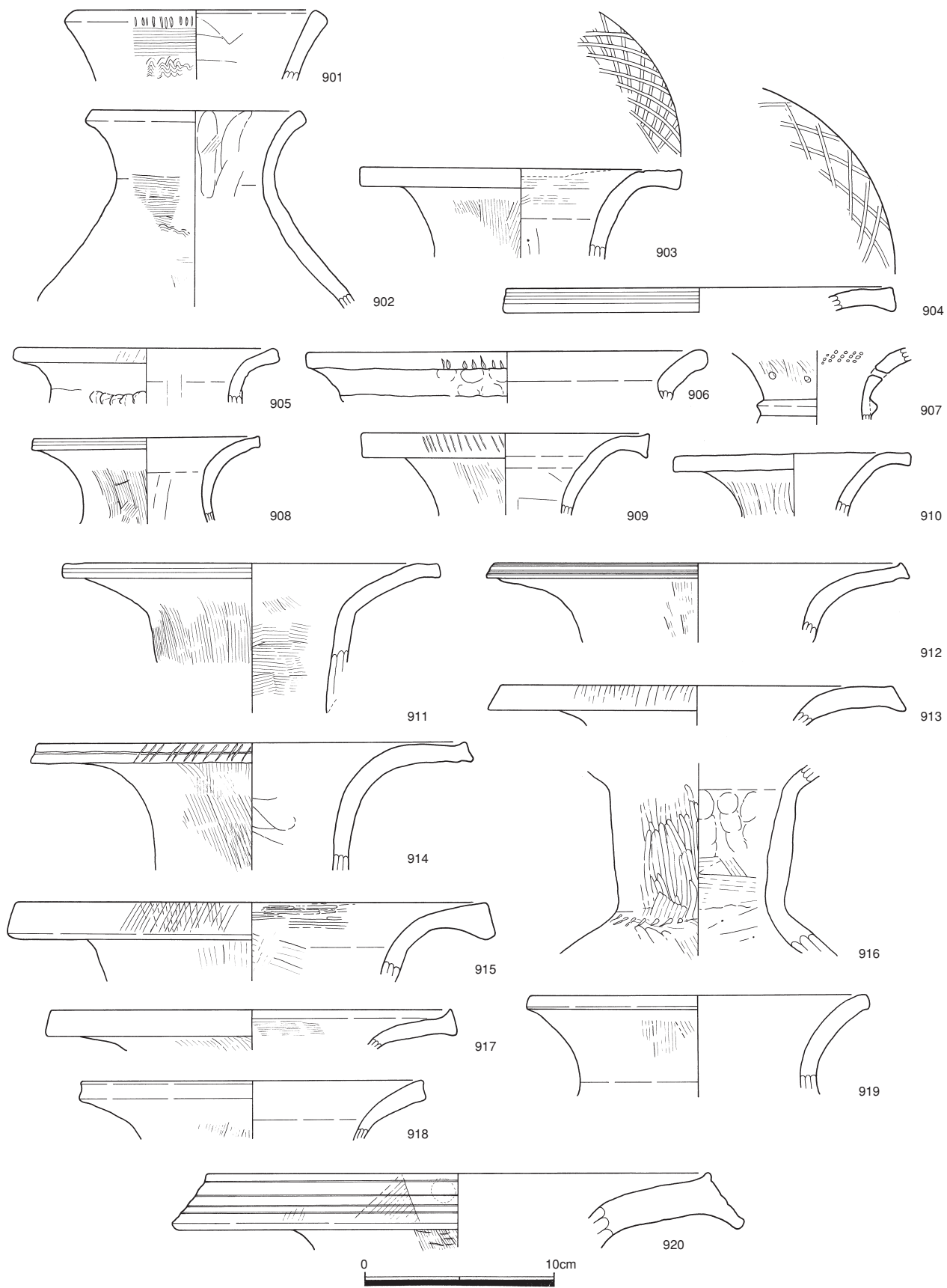
920・930・931は、口縁部端面に鋸歯文を施す。920は明瞭な鋸歯文だが、930・931に認められる鋸歯文は稚拙あるいは雑な描き方をしている。また剥離痕跡から、920・922は口縁部端面に円形浮文を貼り付けていたことがわかる。948は口縁部から頸部が欠損して無いものの、器高50cm以上を測る大型の壺である。961の胎土は砂質が強く、他の出土遺物と異なる。吉野川を挟んだ南岸の井川町に所在する井上遺跡出土の弥生土器の胎土に類似する。また929・961は、胎土にチャートを含む。956は底部に木の葉の圧痕が顕著に認められる。

甕形土器 (第197～202図)

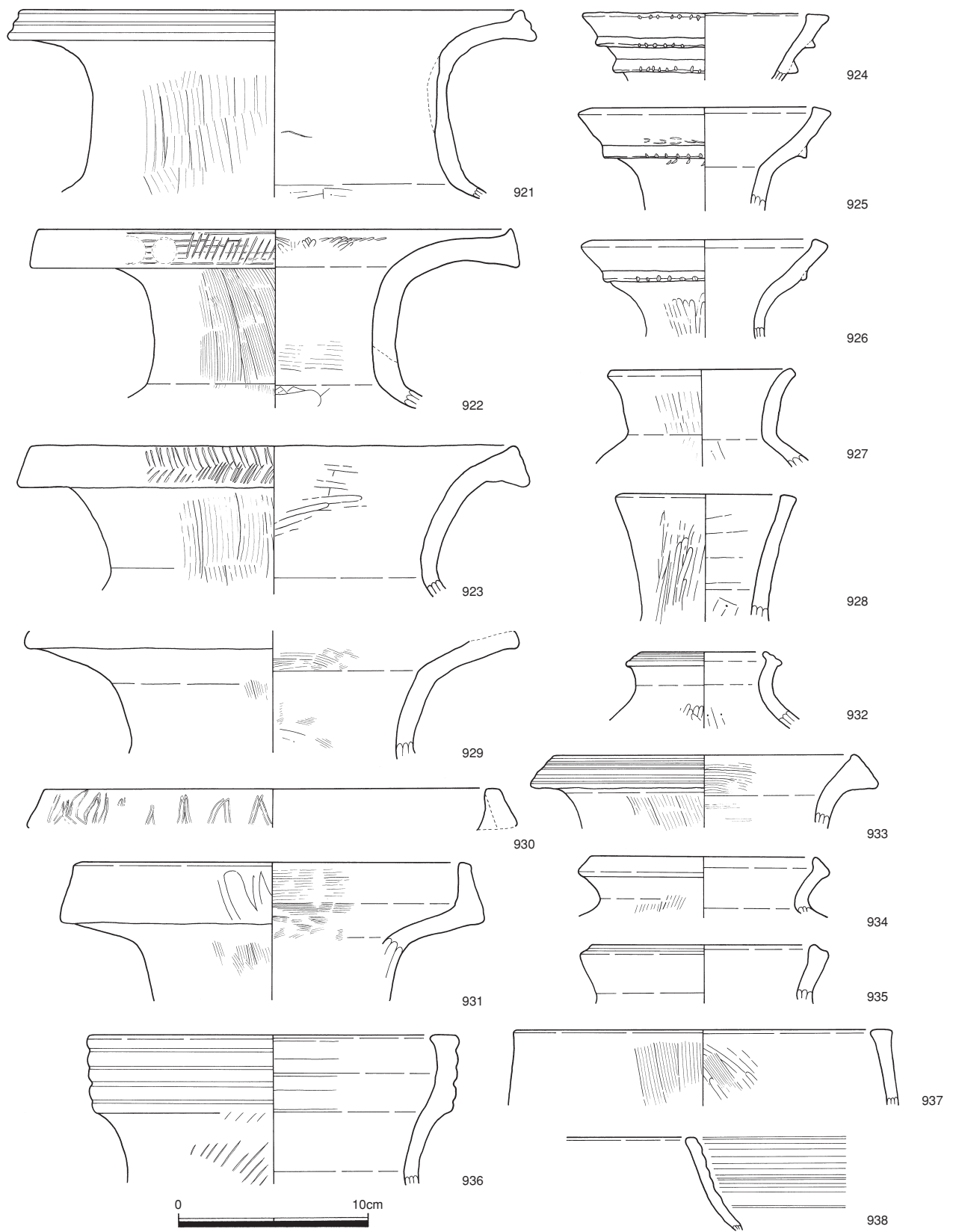
甕形土器(963～1082)は、計121点図化できた。そのうち逆L字形口縁を持つもの3点(963～965)、折り曲げ口縁を持つもの5点(966～970)、くの字口縁を持つもの74点(971～1044)で、出土した口縁部の9割をくの字口縁が占める。

逆L字形口縁の3点は遺存状態が悪いものの、櫛描直線文やミガキが認められる。折り曲げ口縁の5点の外面は、口縁端部に刻目(966・970)、体部上位に櫛描直線文やハケメ・刺突文、体部下位にミガキが施される(966・968・970)。また、全面ミガキが施されるものもある(967・969)。内面は、板ナデもしくはミガキを施す。

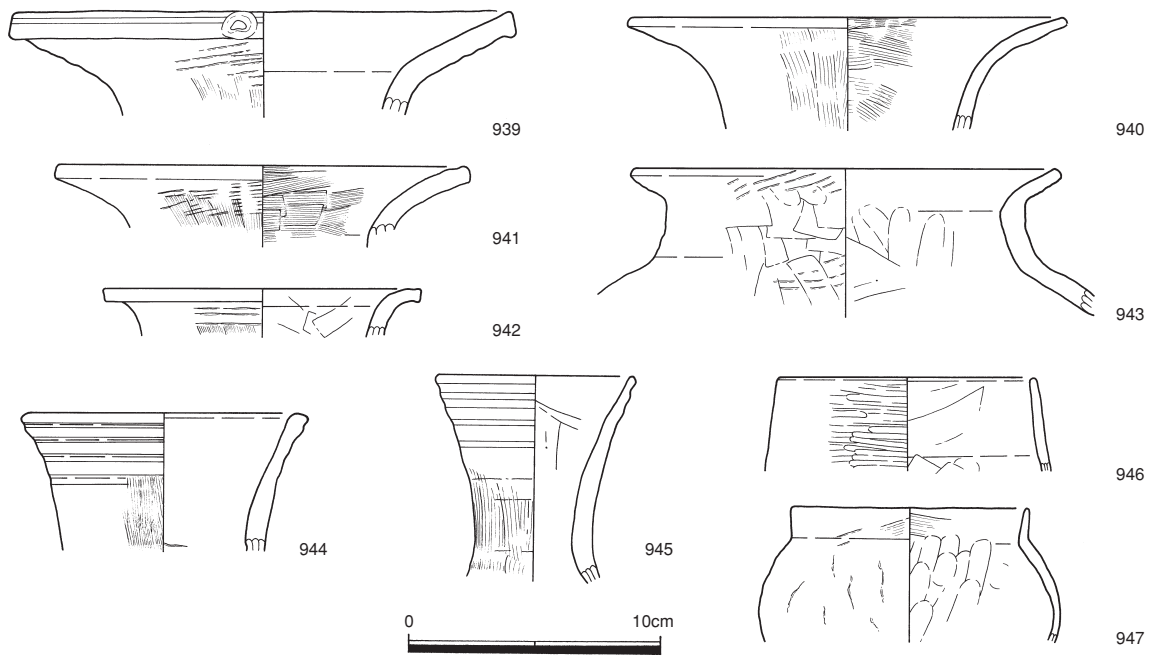
くの字口縁を持つ甕のうち、口縁端部を丸く、もしくは方形に収めるもの、また上方に拡張するもの、上下方に拡張するもの、肥厚させるものがある。口縁端部を上方もしくは上下方向に拡張する個体のなか、端面に凹線を施すものが認められる。中には988のように、口縁部端面に凹線と刻目を施すものもある。



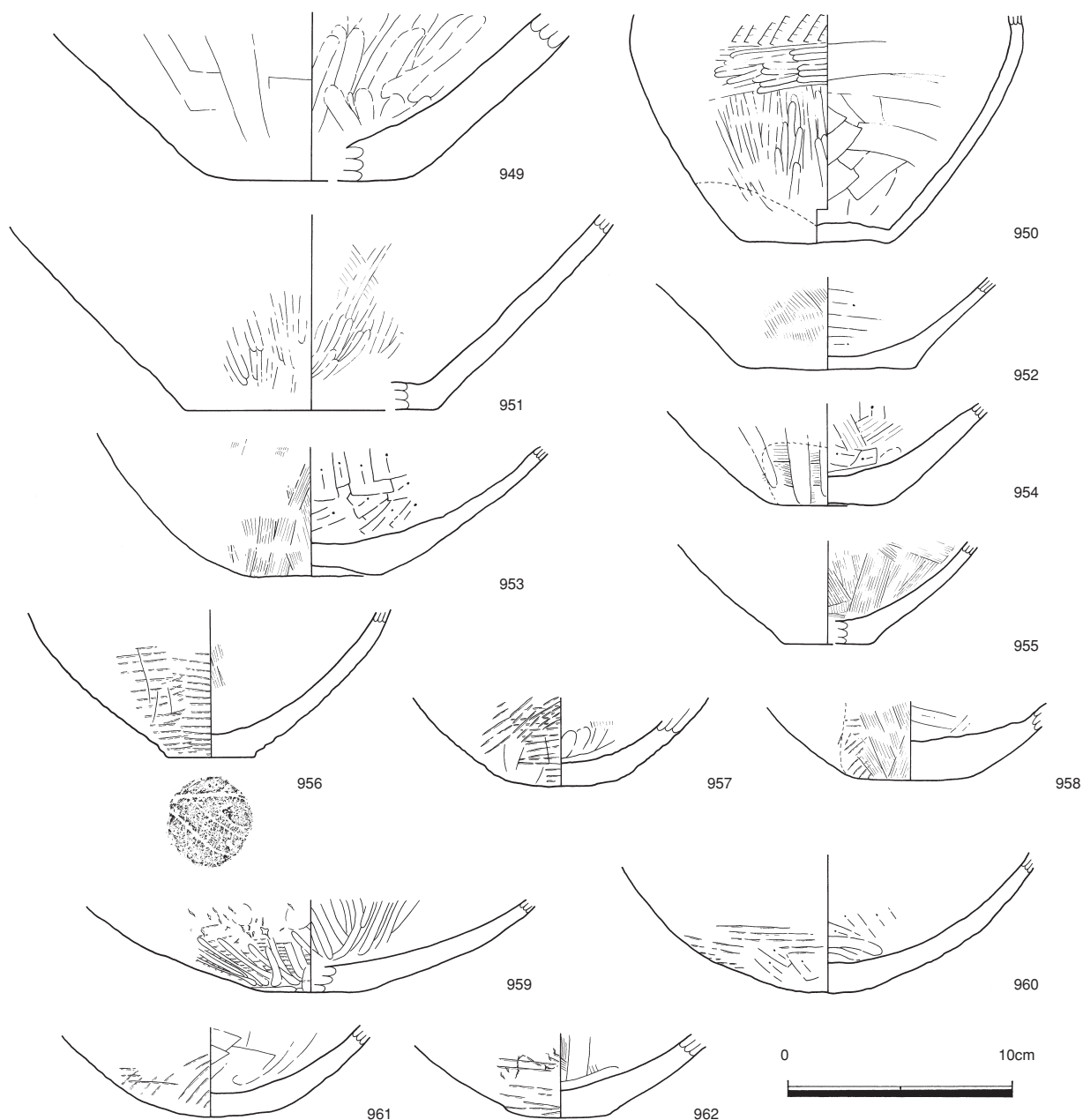
第193图 包含層出土土器(1)



第194图 包含層出土土器(2)

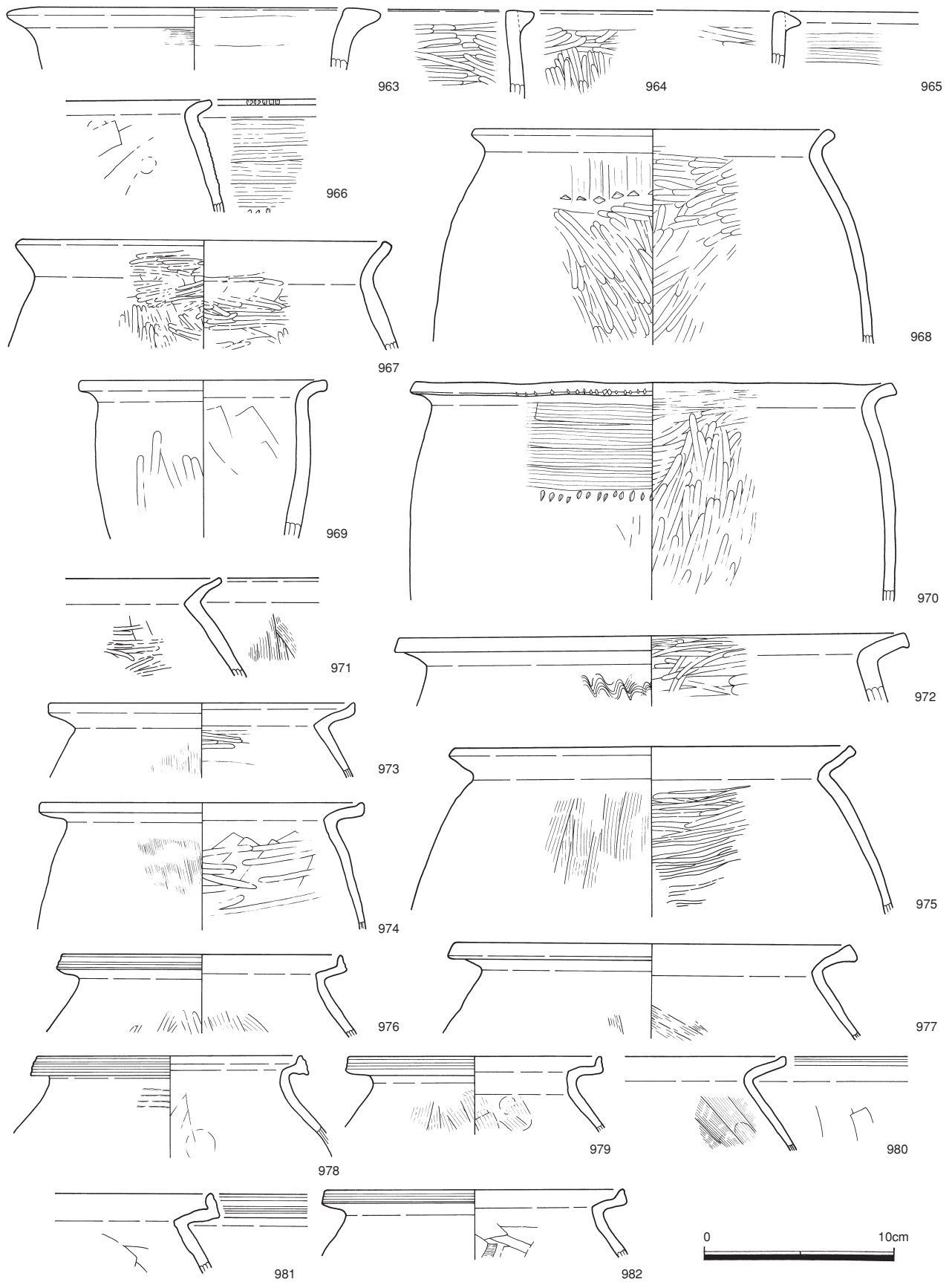


第195図 包含層出土土器(3)

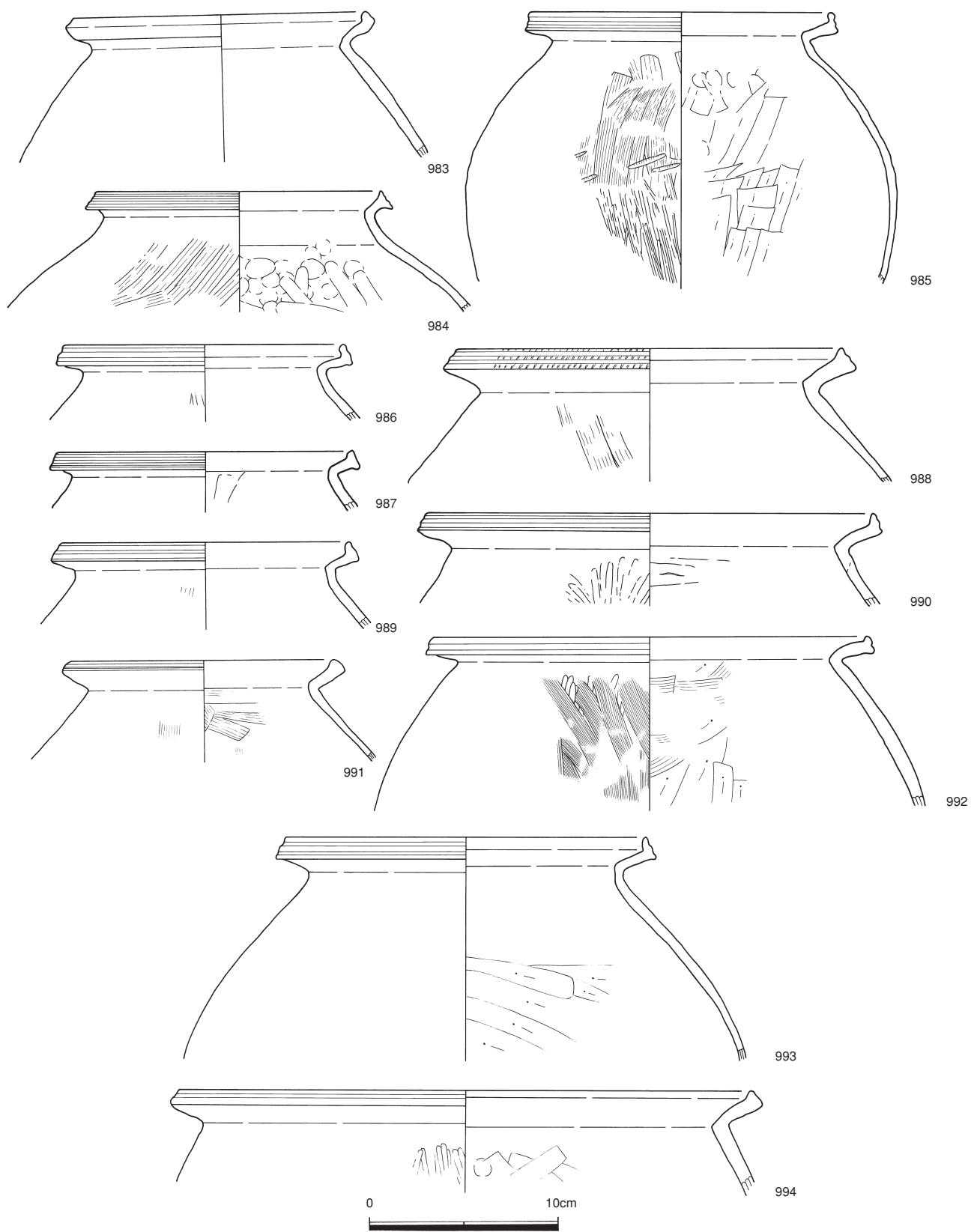


第196図 包含層出土土器(4)

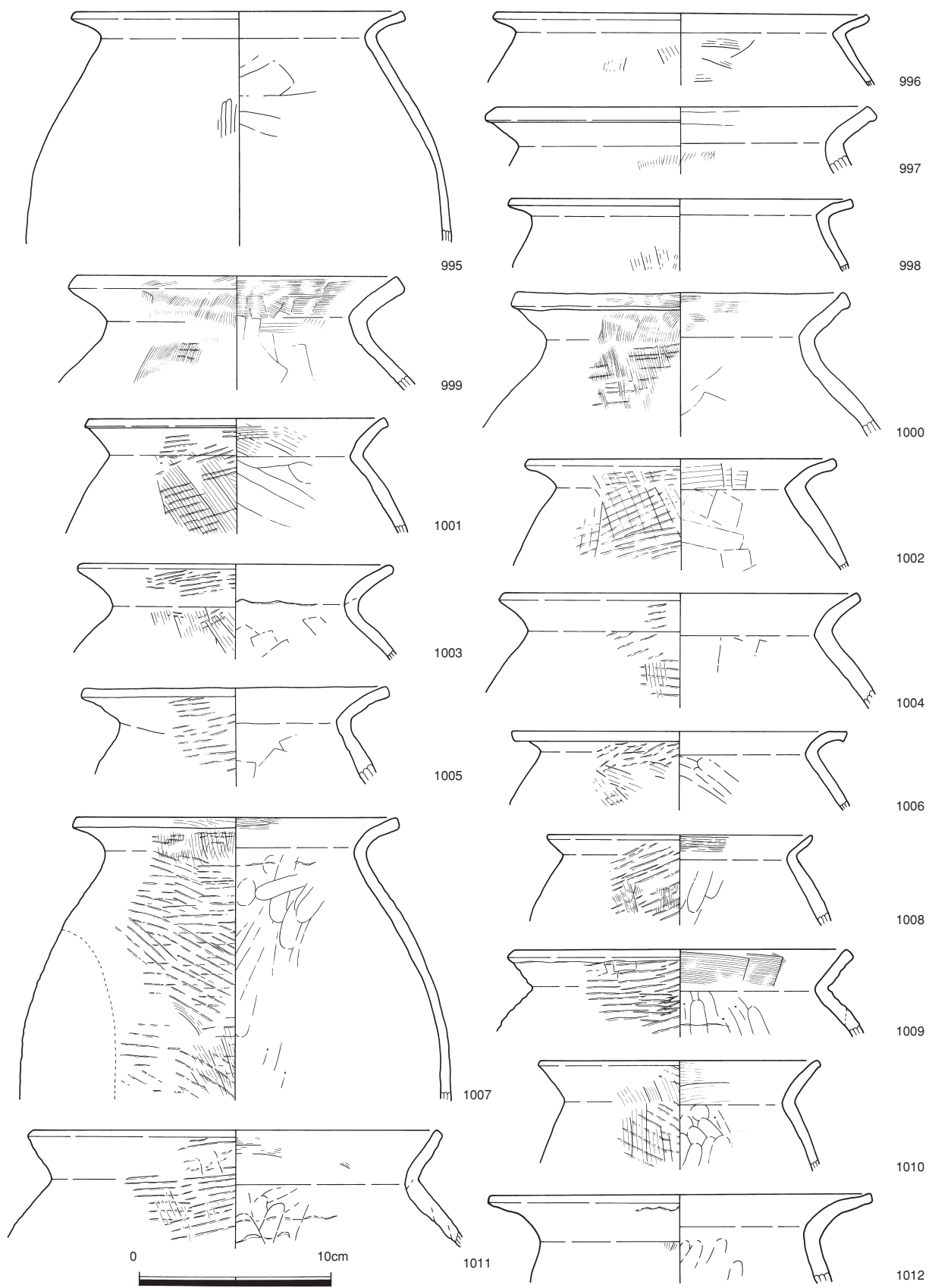
999～1044は、タタキ成形の甕である。タタキ成形の甕は、口縁端部付近までタタキが施され、口縁部を折り曲げて成形する折り曲げ口縁が確認される。外面の調整は、タタキを施した後ハケメを口縁端部付近まで丁寧に施すもの、体部下半部を中心に施すもの、頸部と体部下半部に施すものがある。ハケメは、目の粗いあるいは細かなものを使用する。内面の調整は、口縁部から頸部はヨコナデもしくはハケメが多い。体部はケズリ、あるいはケズリののちに頸部付近でハケメ・ナデ・ユビナデの調整を施す。頸部近くまでケズリを施す個体が大半を占めるが、1007のように体部中位までのものもある。ハケメ・ユビナデ・ナデの調整は縦方向のケズリの後に行われるのが大半を占めるものの、1024のようにユビナデで頸部付近をある程度整形してから、横方向にケズリを施すものも認められる。



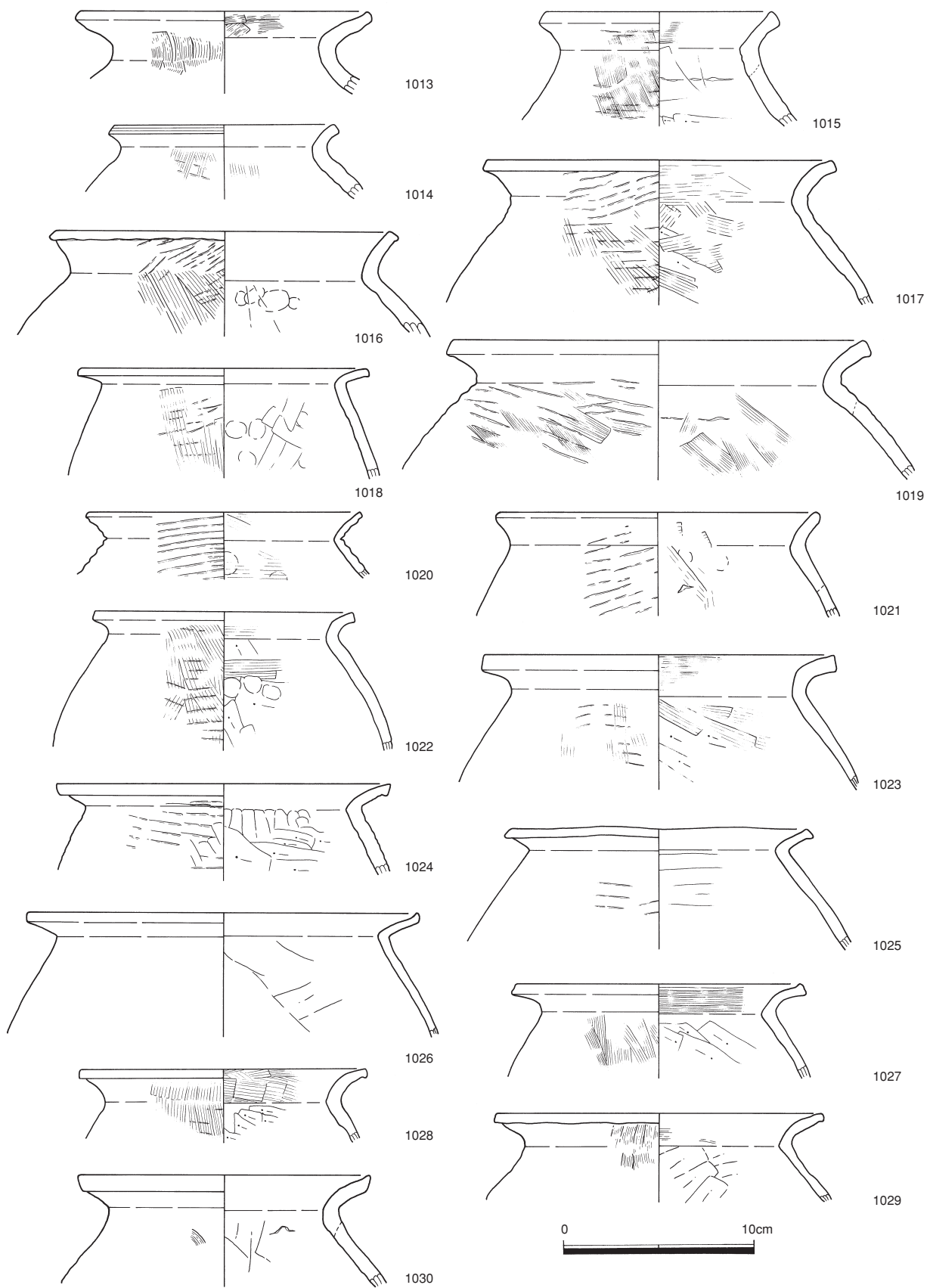
第197图 包含層出土土器(5)



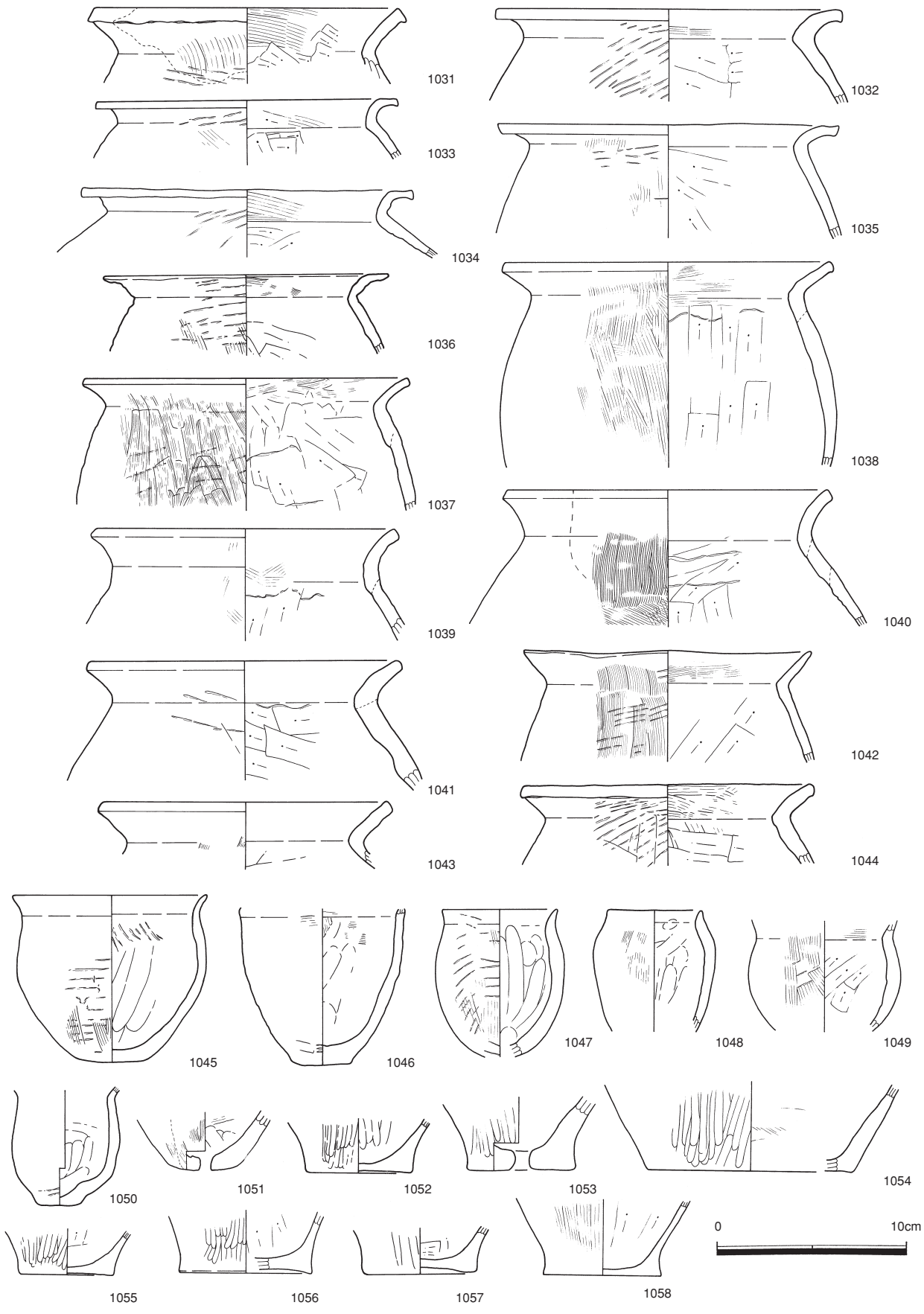
第198图 包含層出土土器(6)



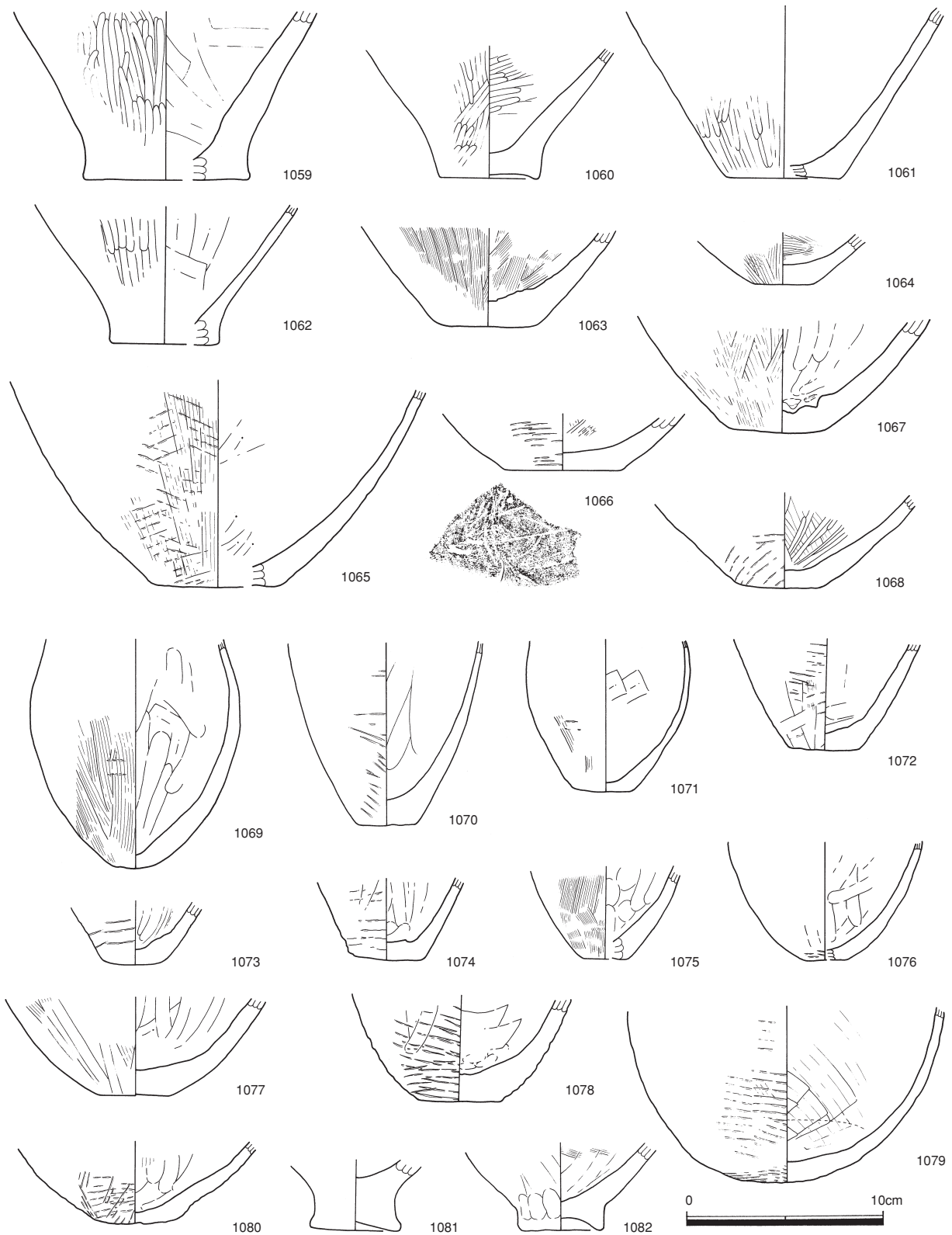
第199图 包含層出土土器(7)



第200图 包含層出土土器(8)



第201图 包含層出土土器(9)



第202図 包含層出土土器(10)

口縁端部はそのまま丸く収めるもの、方形に収めるもの、方形に収めて明瞭な端面を形成するものがある。これらは、頸部からの厚みをほぼ保ったまま端部を収める。口縁先端部をやや尖り気味に厚みを薄く収めるものは、1008・1036・1042の3個体のみである。

1045～1050は分類を甕としたものの、鉢の可能性もある。外面の調整は、1048を除きタタキが施された痕跡が認められる。内面では、1049を除いた5個体はユビナデ調整、1049のみケズリのままである。また1050では、内面見込みに棒状圧痕が顕著に認められる。

底部は、壺と同じく平底が主体である。1052・1055～1057・1060・1081・1082の7個体は、上げ底である。32個体図化できたなかで、1079のみ丸みを帯びる。1058は同時期の他の遺物と比較して器壁が非常に薄く、丁寧な仕上げが施される。また1066では、底部に木の葉の圧痕が明瞭に認められる。

搬入品と考えられる個体は、967・974・984・985・994・1057の6個体である。胎土に金雲母を含む967・974・994・1057は讃岐に、形態から984は吉野川下流域に故地を求めることができる。985は、吉野川下流域からの搬入品の可能性がある。

鉢形土器（第203～204図）

鉢形土器（1083～1126）は、計44点図化できた。そのうちボウル形のもの20点（1083～1102）、口縁部を折り曲げるやや大型のもの7点（1103～1109）、底部17点（1110～1126）で、底部17点のうち6点（1121～1126）が有孔鉢である。

ボウル形の鉢の大半は、内彎しながら斜め上方へ立ち上がるが、1087のみ外上方へ直線的に立ち上がる。タタキ成形が主で、1089のみ底部付近にタタキが認められるものの手捏ね成形によるものと思われる。外面の調整は、タタキの後に体部下半にハケメを施すもの（1083・1097・1099・1101）、また体部下半にハケメ、上半部に板ナデを施すもの（1085）、部分的に板ナデを施すもの（1091・1092・1094・1096・1098・1102）、体部下半にケズリを施すもの（1086・1088）、調整を施さないもの（1084・1090・1100）がある。また1093のように、内外面にミガキを施す個体も存在する。内面の調整は、ハケメが主である。ハケメを施した後、内面見込み部を中心にユビナデを施すもの（1083・1085・1090・1094・1095・1097）、板ナデを施すもの（1086）、板ナデを施した後に内面見込みを中心にケズリを施すもの（1100）、ミガキを施すもの（1093・1101）がある。1089は、ユビオサエのちユビナデを施す。

口縁部を折り曲げる鉢は、タタキ成形が主である。口縁端部付近までタタキを施し、口縁部～頸部、ないしは体部上位にハケメを施す。内面は、口縁部から頸部ではハケメあるいはヨコナデ、体部はユビナデ・ケズリ・ハケメ・ナデ・ミガキが施される。

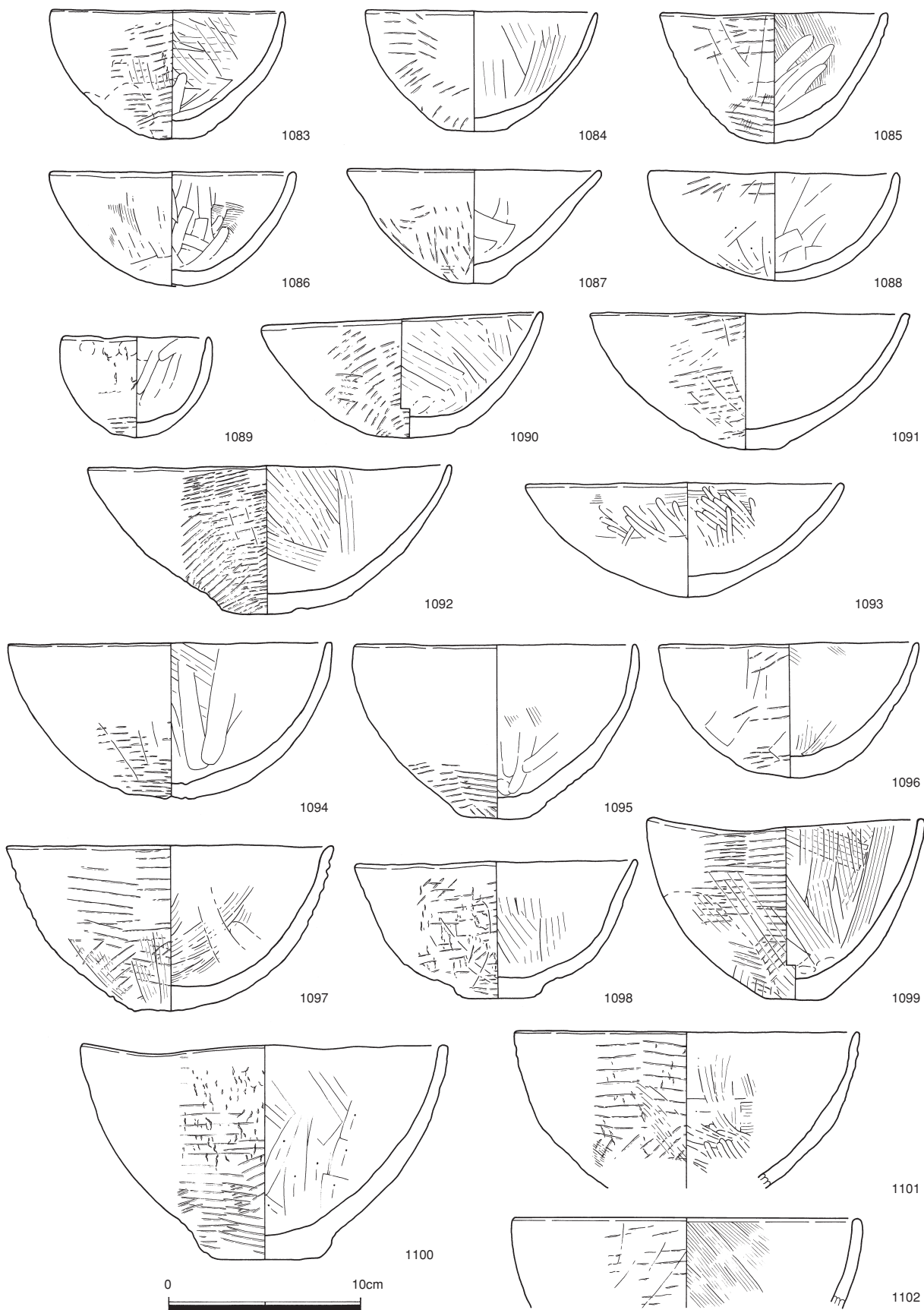
底部は、壺・甕と比較して丸底がやや多く認められる。有孔鉢を除き、底部のみの遺存状態のものも含めて図化できた29個体のうち、16個体が平底である。丸底および尖底は4個体で、残りの9個体は平底から丸底への移行状態のものといえる。

1086では、外面体部上位に網目状の圧痕が認められる。1098・1126は、胎土にチャートを含む。

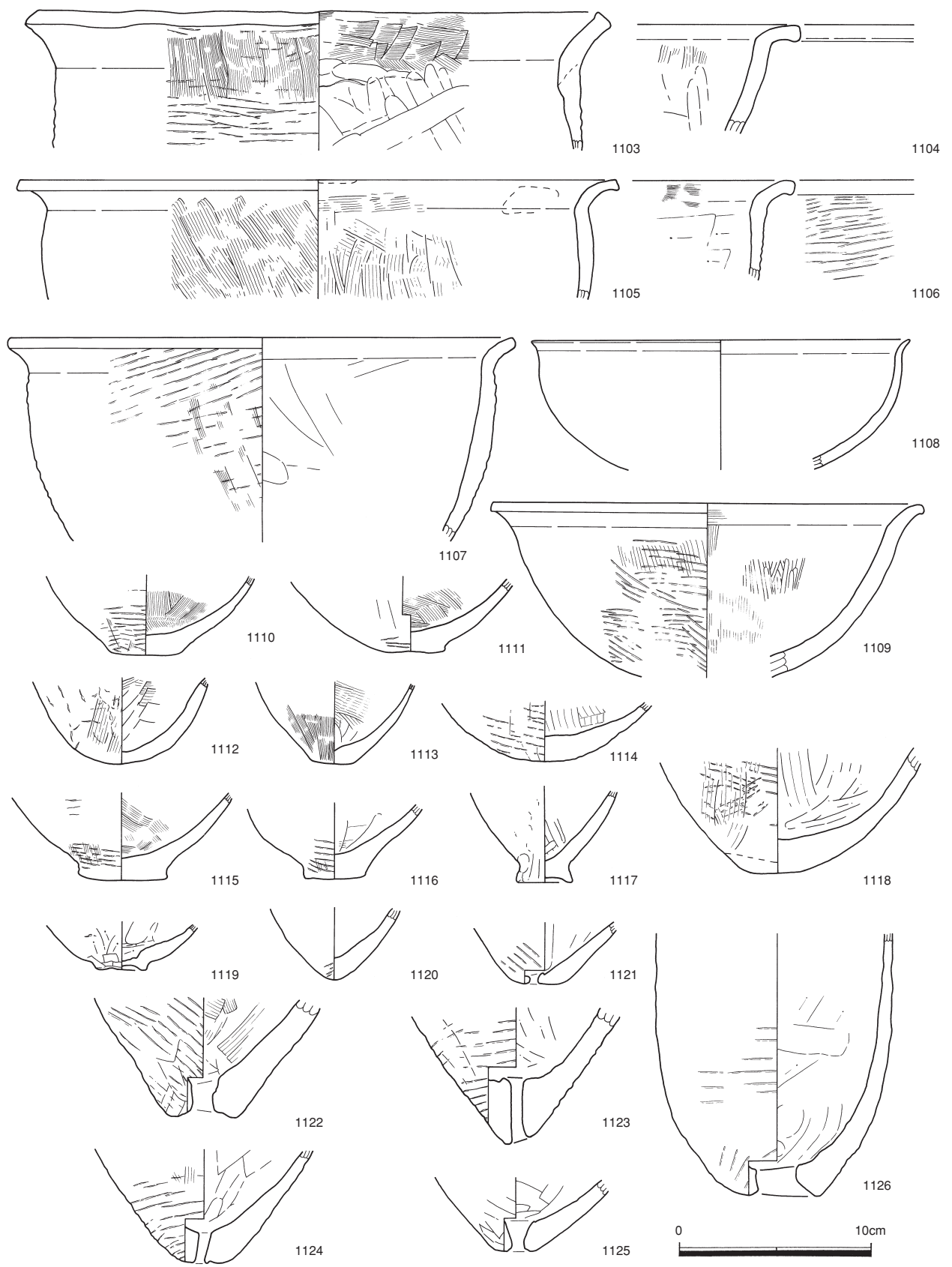
高坏形土器（第205～206図）

高坏形土器（1127～1162）は、計36点図化できた。そのうちの13点が坏部、21点が脚部である。坏部と脚部が接合した状態での出土は、遺構出土遺物を含めても1134の1点のみである。

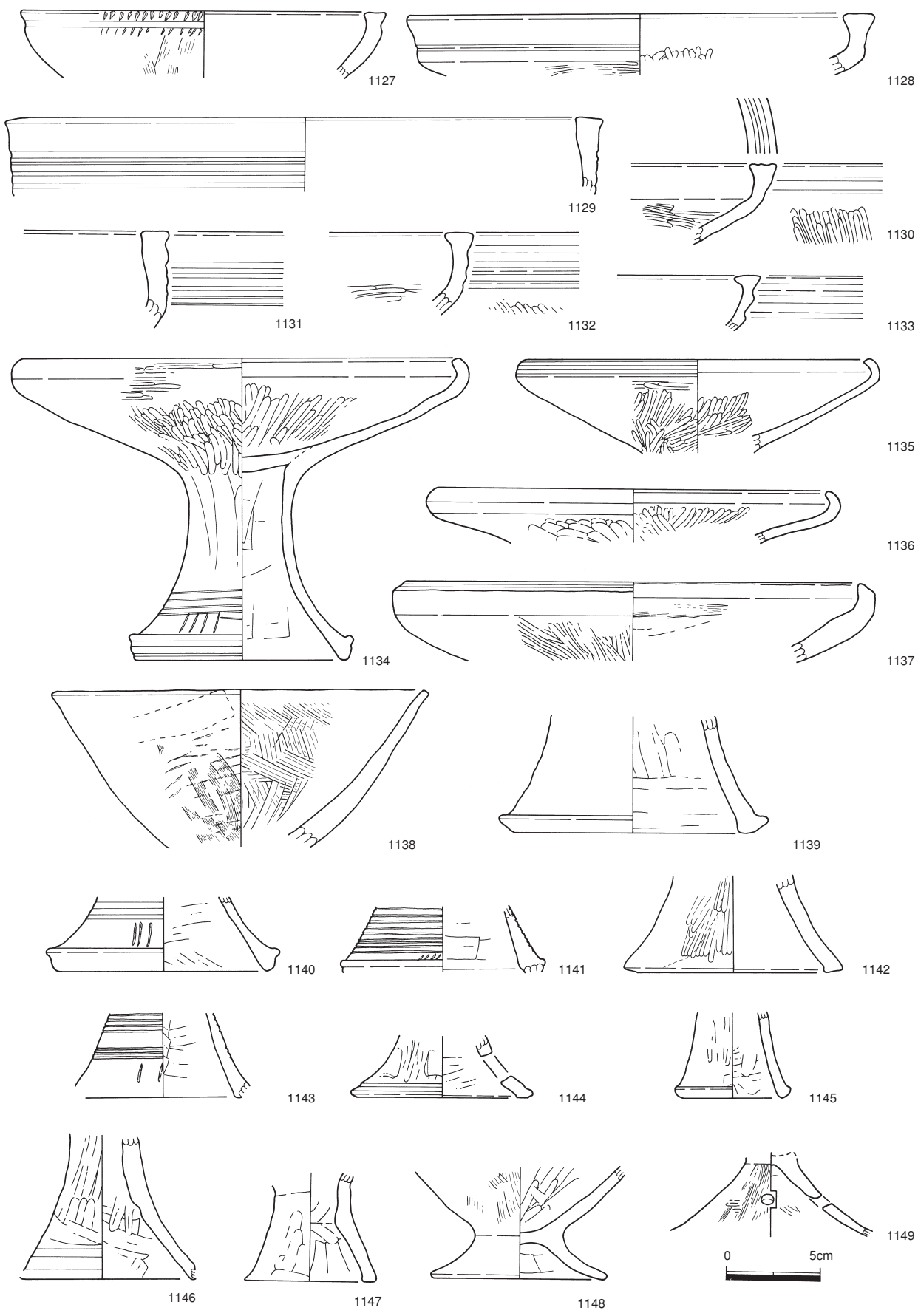
坏部のうち、1127～1133は口縁部が直立する。この坏の口縁端部は、内外面（1127・1128・1130・1132・



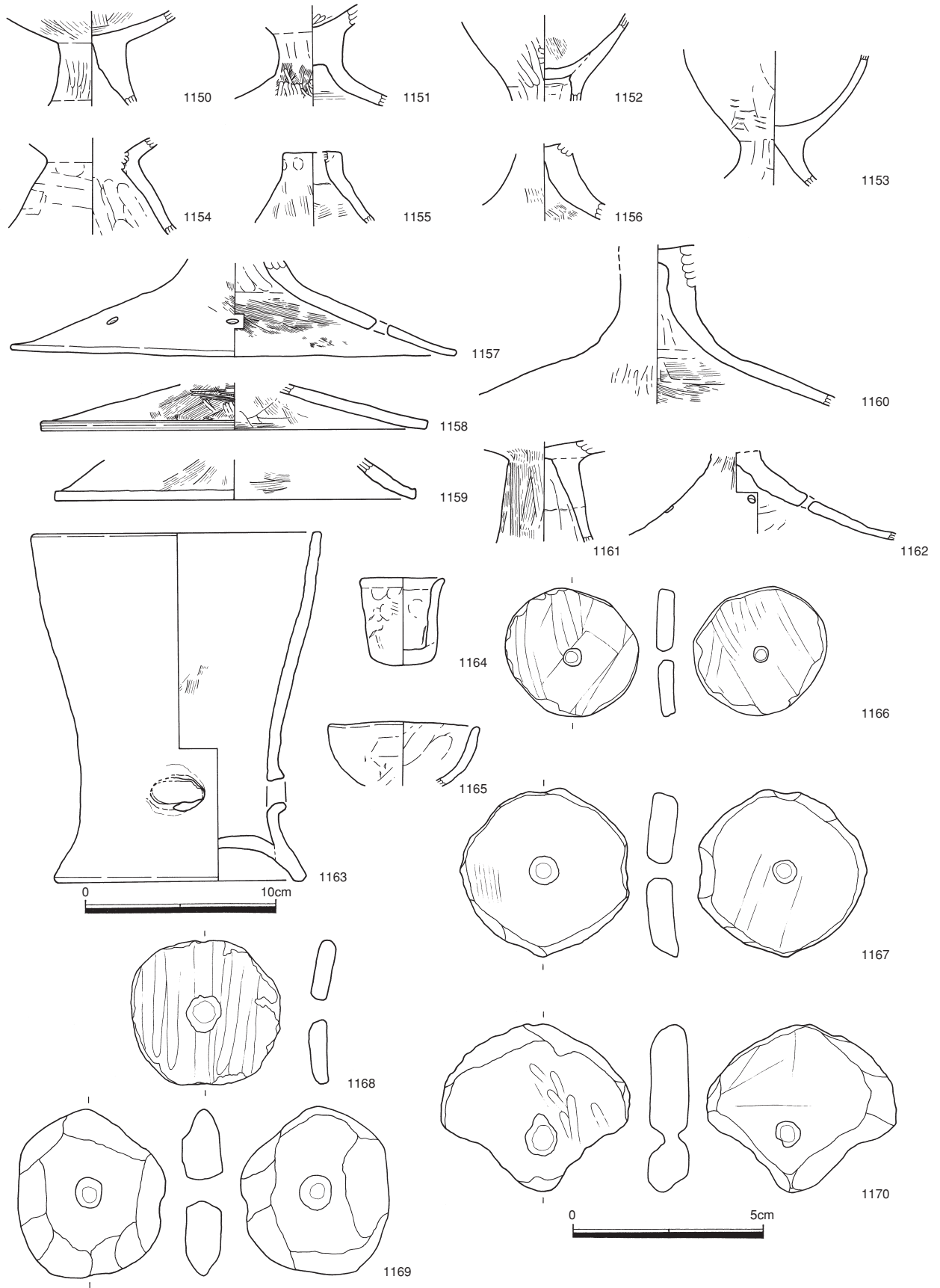
第203図 包含層出土土器(11)



第204图 包含層出土土器(12)



第205图 包含層出土土器(13)



第206图 包含層出土土器(14)

1133)、あるいは外面のみ(1129・1131)肥厚させる。また口縁端部上面に凹線を施すものもある(1130)。外面は凹線ないしは擬凹線を1～5条施す。1134～1137は口縁部を内傾させ、内外面ともにミガキを施す。口縁端部に凹線を施すものもある(1135・1137)。1138は、体部が直線的に立ち上がり口縁端部をそのまま収める。タタキ成形で、内外面ともにハケメ調整を施す。

脚部は端部を拡張させるもの(1139～1141)、丸く収めるもの(1148)、また脚柱部から脚端部に向かって大きく広がるもの(1157～1160・1162)がある。脚部の透孔は、円形が3個体(1149・1157・1162)、方形が1個体(1144)認められる。

その他の土器・土製品(第206図)

1163は、いわゆるバケツ形土器と呼ばれるものに似ている。しかし、台付および体部下半に穿孔が認められるところが異なる。胎土に金雲母・角閃石を含むことから、讃岐からの搬入品と考えられる。1164は、手捏ね成形の鉢か。1165は手捏ね皿で、外面下半部はケズリが施され、内面はユビナデで仕上げる。

1166～1170は、土器片を転用した土製紡錘車である。この5点のうち1166～1168の3点は、ほぼ完形での出土である。1170は穿孔部が貫通しておらず、未製品である。

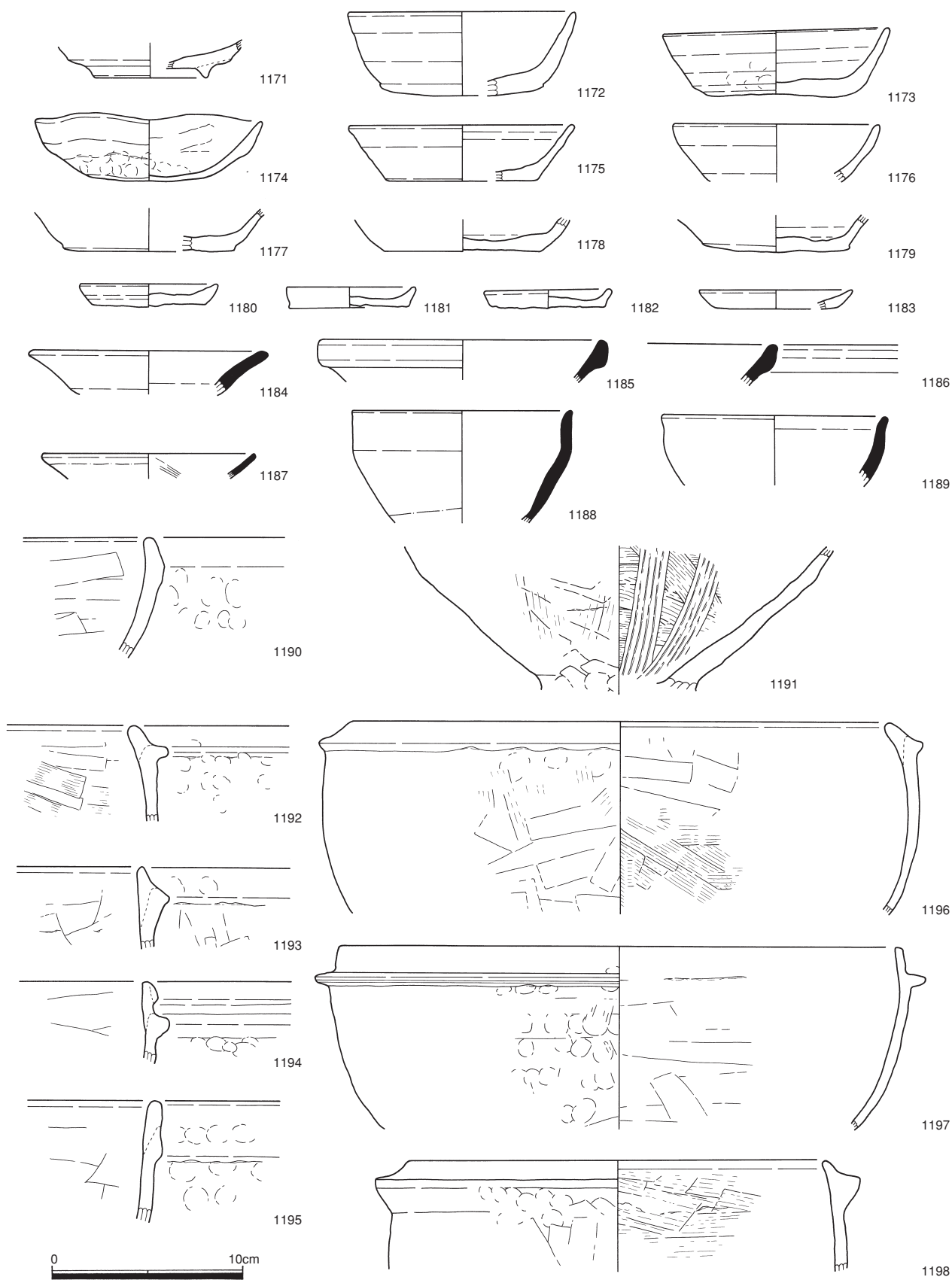
中世遺物(第207～208図)

中世遺物(1171～1202)は、土師質土器碗(1171)・杯(1172～1179)・小皿(1180～1183)・鍋(1190・1201)・播鉢(1191)・羽釜(1192～1200)・土錘(1202)、青磁皿(1184)、白磁碗(1185～1187)、天目茶碗(1188・1189)の計32点が図化できた。

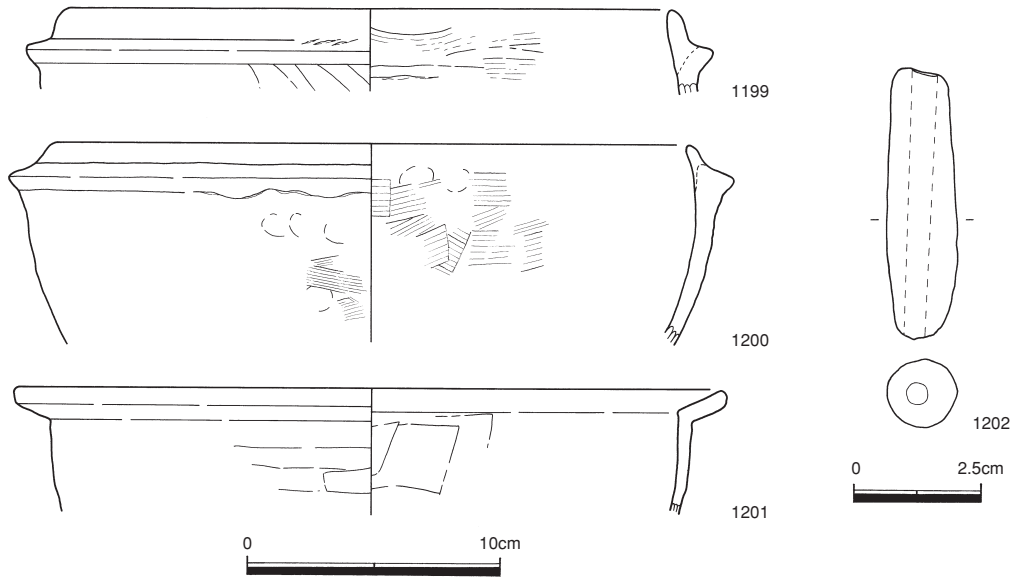
供膳具のうち土師質土器碗の出土量は少なく、断面三角形を呈し、ハの字に開く高台を持つ1171のみである。8点図化できた杯のうち、1172以外の杯は体部が外上方に開きながら立ち上がり、器高が3cm前後におさまる。その形態から、1172より後出するものと考えられる。また1174は、内外面の口縁部はヨコナデ、体部下位から底部にかけて顕著に認められるユビオサエから、三好町円通寺遺跡分類の杯Aに相当する。また1172は、体部下位に多量の炭化物が付着する。小皿は体部が外上方に開き、口縁端部を丸くあるいはやや尖りぎみに収める。1185・1186はいわゆる玉縁口縁と呼ばれる口縁部を持つ白磁碗で、森田・横田編年の碗Ⅳ類にあたる。1187は白磁皿で、内面に櫛描文、外面口縁部と内面にのみ施釉する。森田・横田編年の皿Ⅶ類か。1188・1189は天目茶碗で、1188の体部は直線的に、1189はやや丸みを帯びて立ち上がる。1188の口縁部はほぼ直立し、中央部がわずかに凹む。1189の口縁部は体部との境で屈曲し、短く外反する。14～15世紀のものと思われる。

調理具である播鉢は、欠損のため口縁部の形態が不明な1191のみである。内面は炭化物が多く付着しているものの、ハケメを施したあとに6条の播目が確認できる。胎土に金雲母・角閃石を含むことから、讃岐からの搬入品と思われる。

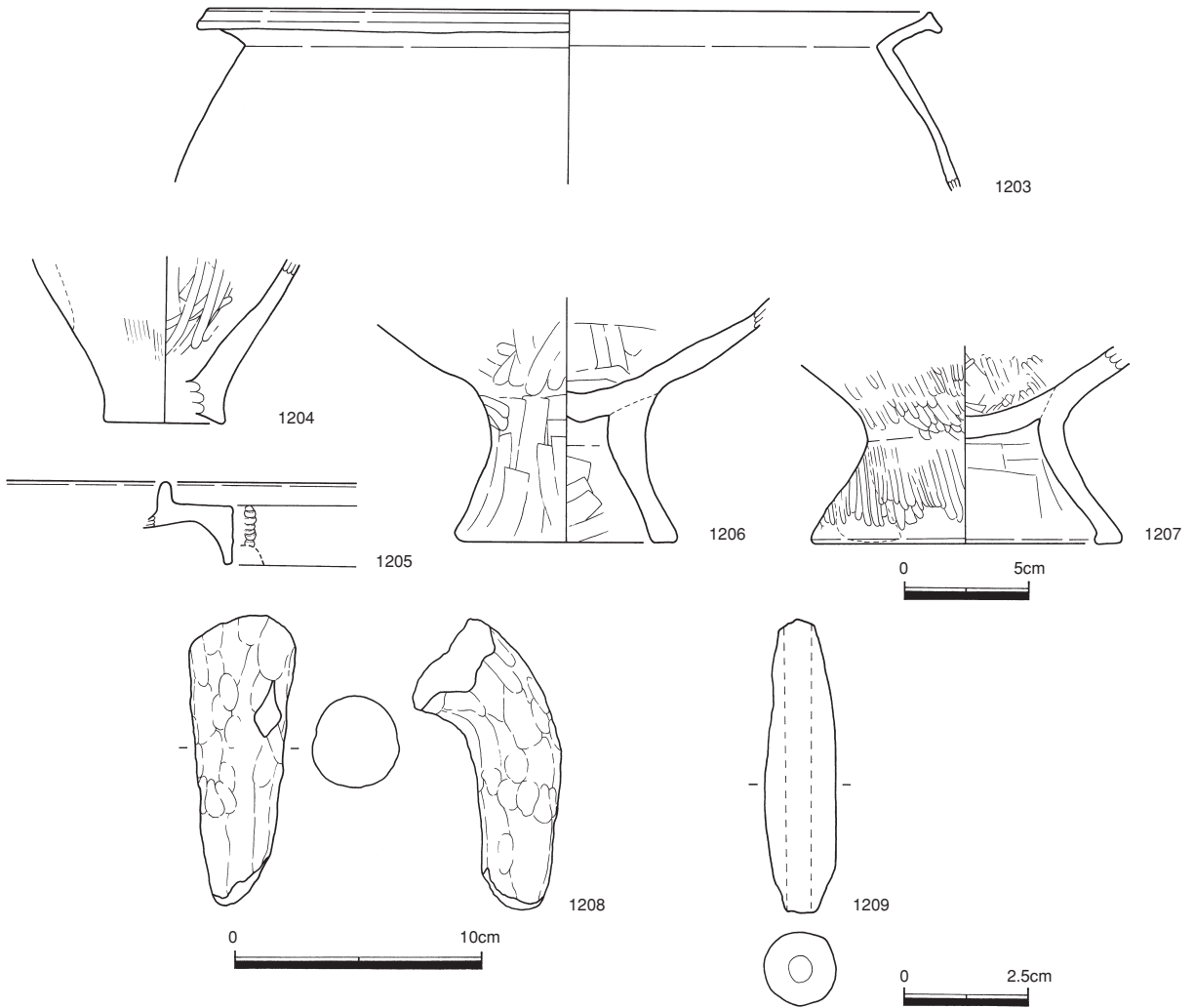
煮沸具のうち、羽釜は9点図化できた。鏝部は水平に向くものが主体だが、下向き(1195)・上向き(1198)もある。1195は円通寺遺跡釜C類にあたり、脇町に所在する田上遺跡ⅢのSK2033から類似する鏝部を持つ羽釜が出土している。1194の口縁端部は、土をそのまま折り曲げて隆帯状に成形している。1199を除いた8点は、鏝部から下位の体部に多量の炭化物が付着しており使用痕跡が認められる。また1199の胎土にチャートが認められる。鍋は2点図化できた。1190は炭化物が外面体部に大量に、1201では内面の頸部に付着する。土錘は、ほぼ完形での出土である。



第207図 包含層出土土器(15)



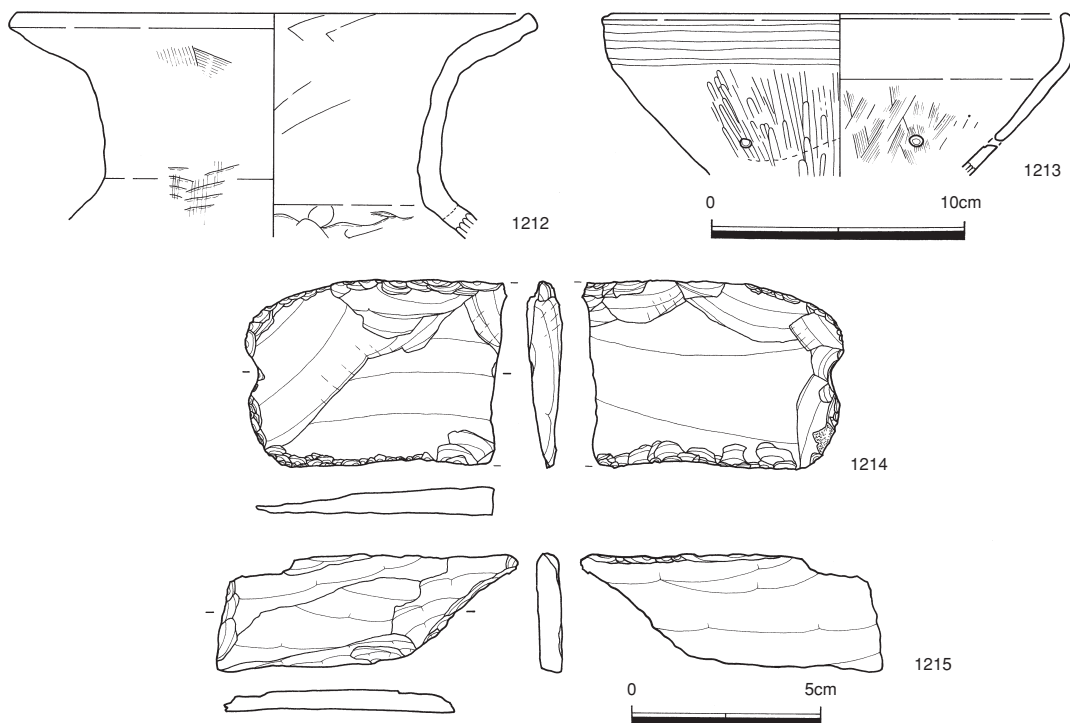
第208図 包含層出土土器(16)



第209図 側溝・機械掘削出土土器



第210図 包含層出土縄文土器



第211図 攪乱出土遺物

機械掘削・側溝出土土器（第209図）

甕形土器（1203・1204）、高坏形土器（1205～1207）、土師質土器羽釜脚部（1208）、土錘（1209）が図化できた。1203は口径約30cm弱を測る。胎土に角閃石を含むことから、讃岐からの搬入品と考えられる。1204は断面に被熱痕跡が認められることから、破損してから熱を受けたものと思われる。1205は垂下口縁を持つ高坏で、この形態の高坏は遺構内からの出土は認められず、この1点のみである。

縄文土器（第210図）

1210・1211ともに、5-B区から出土した浅鉢である。1210は福田KⅡに比定か。1211は無文の浅鉢であり、ともに縄文時代後期と思われる。

攪乱出土遺物（第211図）

掲載した遺物は、SXとして調査が行われていたものの調査途中で攪乱扱いとなった遺構から出土したものである。5-B区に所在する。壺形土器1点、凹線が口縁部端面に施される甕形土器2点・底部1点、高坏形土器1点、体部片148点、サヌカイト製石庖丁1点・剥片10点、結晶片岩製砥石・剥片各

1点が出土し、そのうち図化できたのは壺(1212)、高坏(1213)、打製石庖丁(1214)、砂質片岩の剥片(1215)である。図面等の資料がないものの、弥生時代の遺構が近現代の攪乱に切られていたものと推測できる。

石鏃(第212～214図)

石鏃(1216～1294)は、計79点図化できた。石鏃を基部の形状で分類すると、1216～1218・1220～1231・1241は平基三角、1219・1232～1240・1242～1263は凹基式、1264～1269は平基五角、1270・1271は凸基式、1272～1277は有茎式となる。1278～1294は未製品で、1286は凹基式、1289は有茎式である。図化できた石鏃の中で、最大長を測るのは1233の4.3cm、最小は1231の1.7cmである。

石錐(第215図)

石錐(1295～1303)は、計9点図化できた。このうち、1295・1301のみ完形品である。1297・1301・1302は、摘みをもたない。1303は、未製品である。

楔形石器(第215～219図)

楔形石器(1304～1357)は、計54点図化できた。大多数がサヌカイトを使用石材に用いるのに対し、1356は粘板岩、1357は砂質片岩を使用する。1310・1315・1323・1332の4点につぶれ痕が認められ、その位置は1310・1315は上下側縁部に、1323は下側縁部の一部に、1332は上側縁部の一部である。1307・1333・1345の3点は、折れた後に打面を加えているのが観察できる。1307は左側縁部に、1333は上部側縁部、1345は右上部側縁に認められる。また1345の左側縁部は、風化の進んでいる剥離面である。

石剣(第219図)

石剣(1358～1360)は3点図化できたものの、欠損している。使用石材として、1358・1359はサヌカイトを、1360は砂質片岩を用いる。1358・1359では、表面の一部に擦痕が認められる。

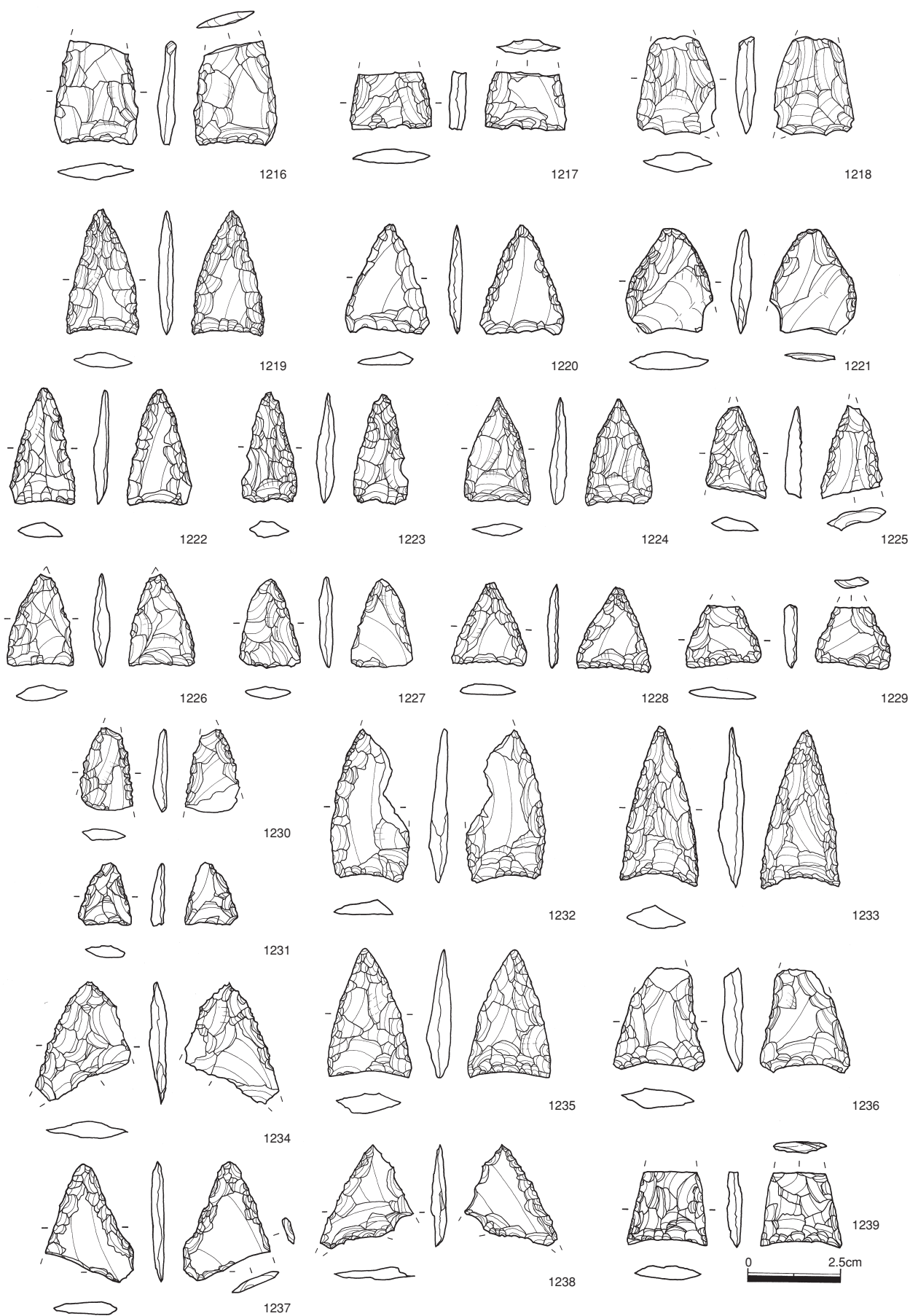
打製石庖丁(第219～223図)

包含層から出土した石庖丁のなかに、磨製のものとは認められなかった。打製石庖丁(1361～1407)は、47点図化できた。そのうちの4点(1361～1364)は、サヌカイトを使用石材として用いる。後の43点は結晶片岩を用い、詳細は砂質片岩37点(1365～1369・1371・1372・1374～1377・1380～1386・1388～1393・1395～1407)・紅簾片岩4点(1370・1378・1379・1387)・泥質片岩2点(1373・1394)となり、砂質片岩が圧倒的に多い。

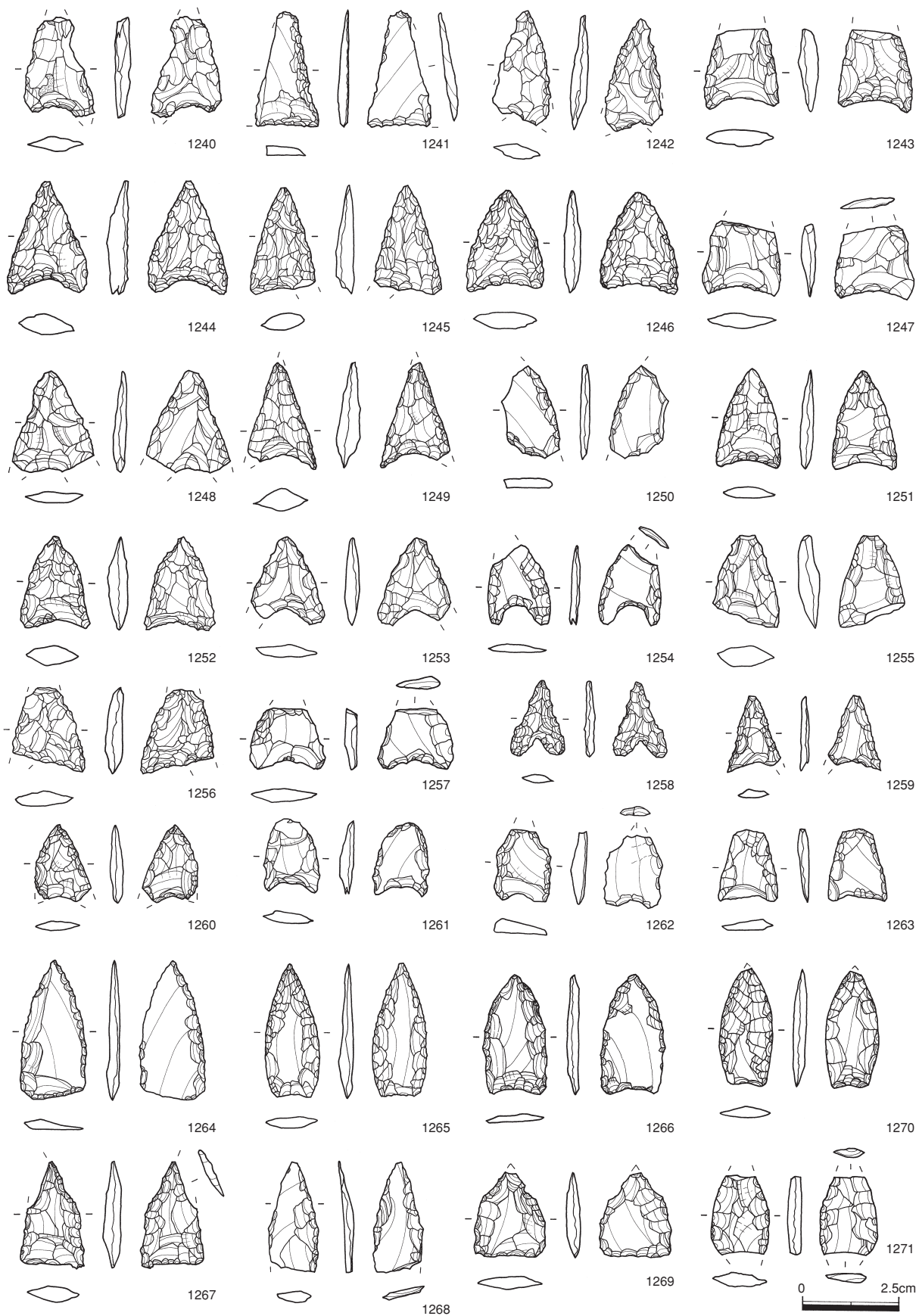
刃部形態で凸刃を持つものは14点(1361・1363・1364・1367・1373・1376・1385・1391・1393・1394・1397・1401・1402・1405)、凹刃を持つものは2点(1366・1390)、平刃を持つものは30点である。また1369は、凸刃・平刃を持つ。刃部数で複刃を持つものは、5点(1369・1370・1377・1380・1382)である。

削器(第223～226図)

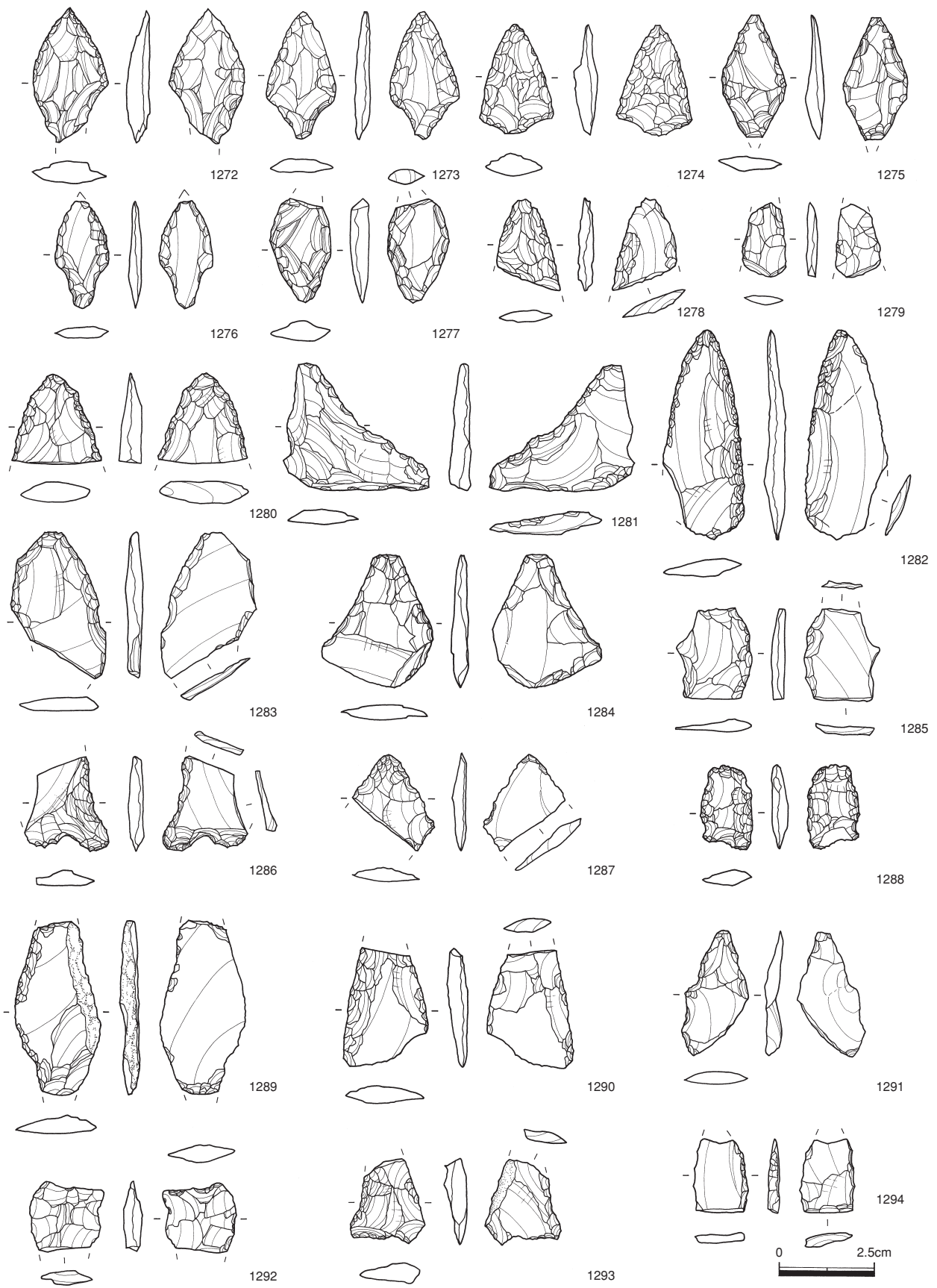
削器(1408～1456)は、49点図化できた。そのうちの27点(1408～1434)は、サヌカイトを使用石材



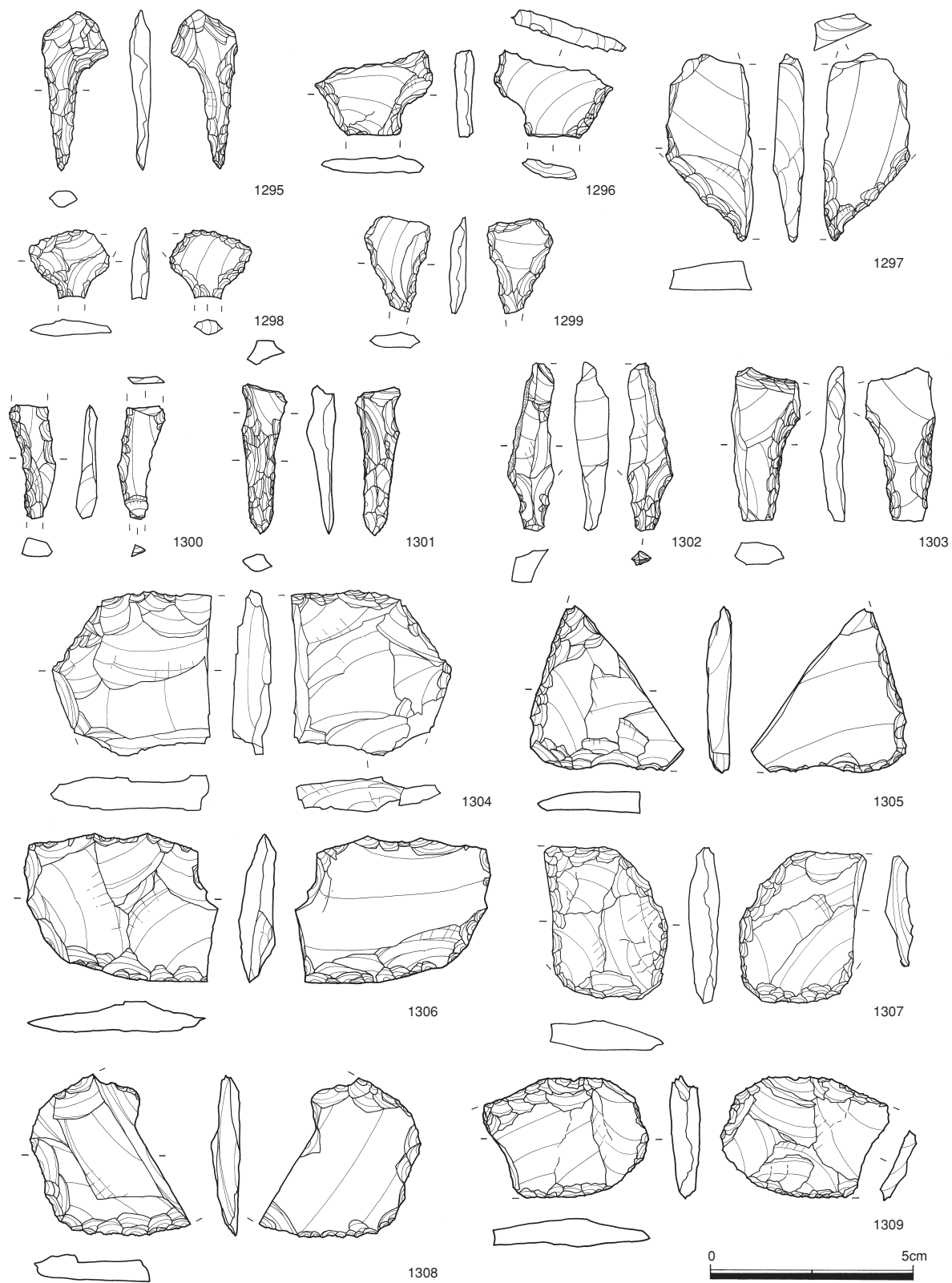
第212图 包含层出土石器(1)



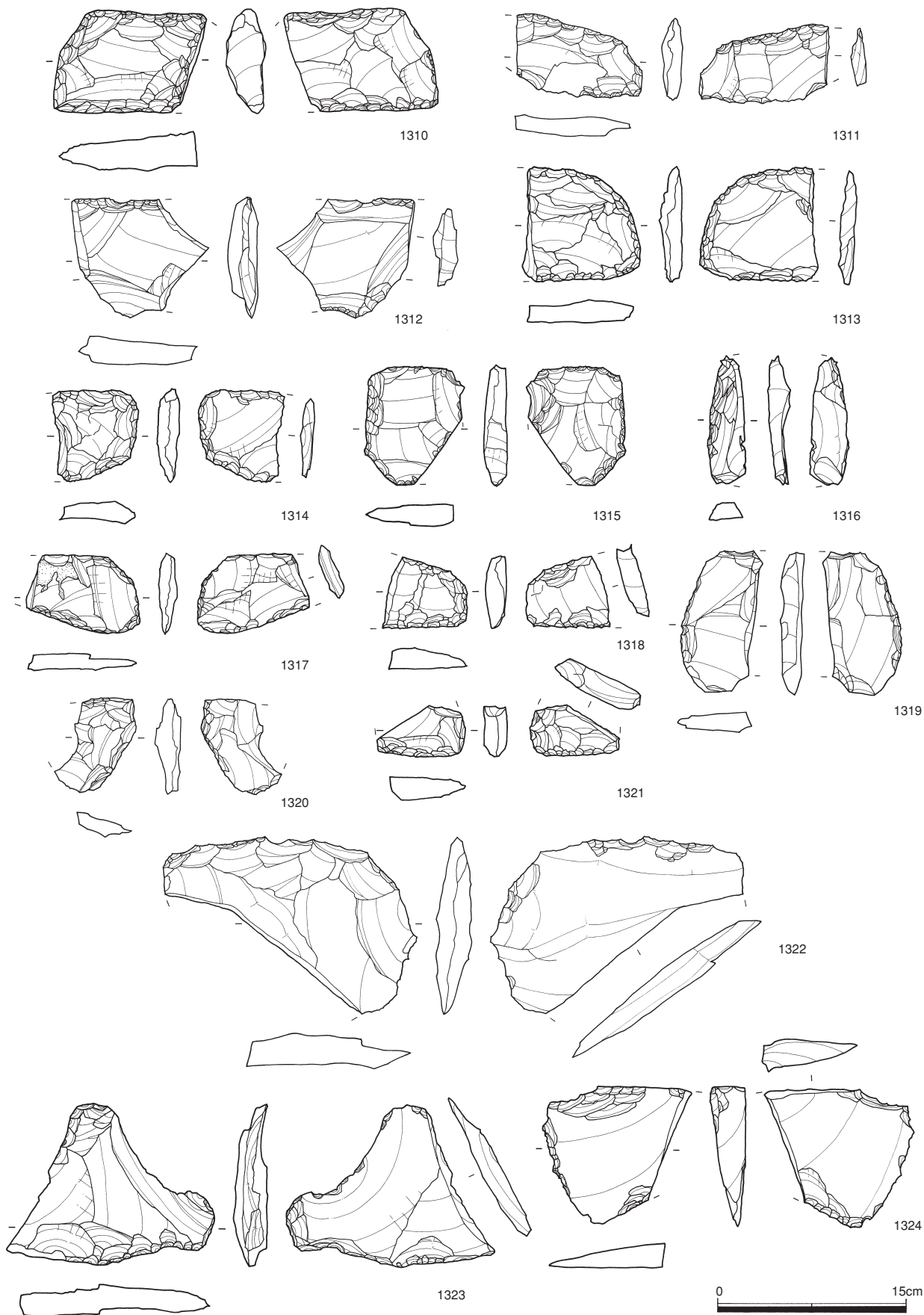
第213图 包含层出土石器(2)



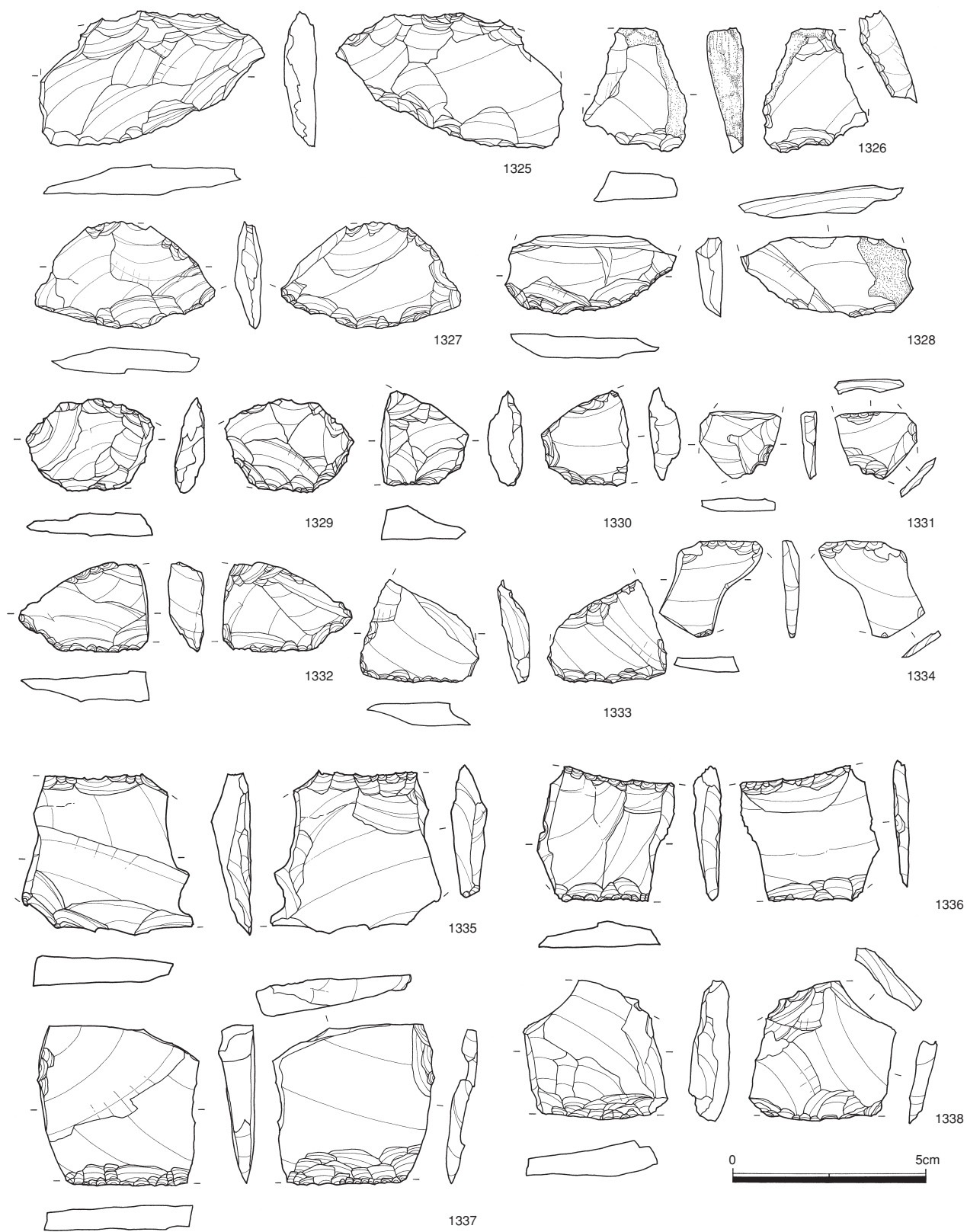
第214图 包含層出土石器(3)



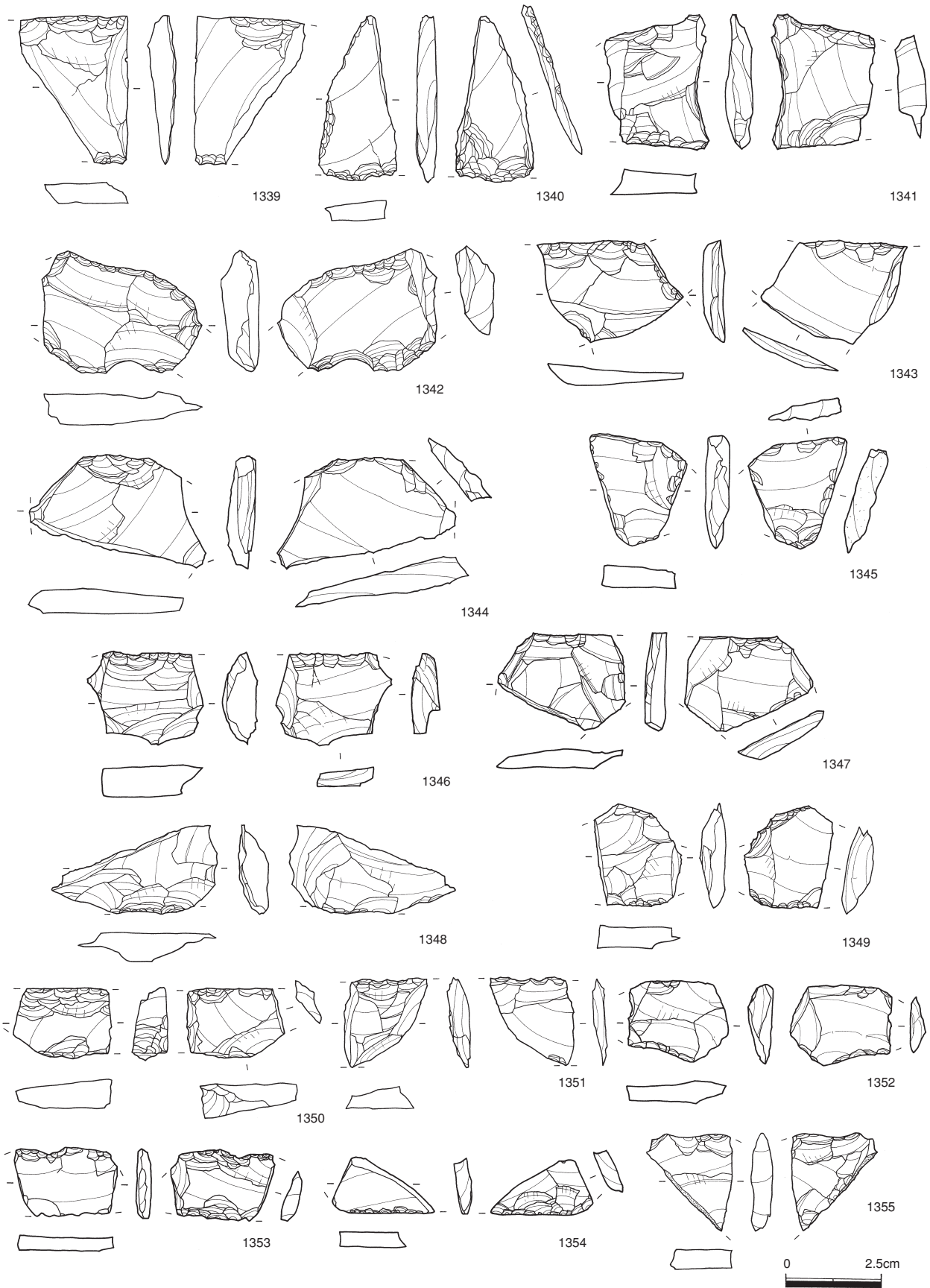
第215图 包含層出土石器(4)



第216图 包含層出土石器(5)



第217图 包含層出土石器(6)

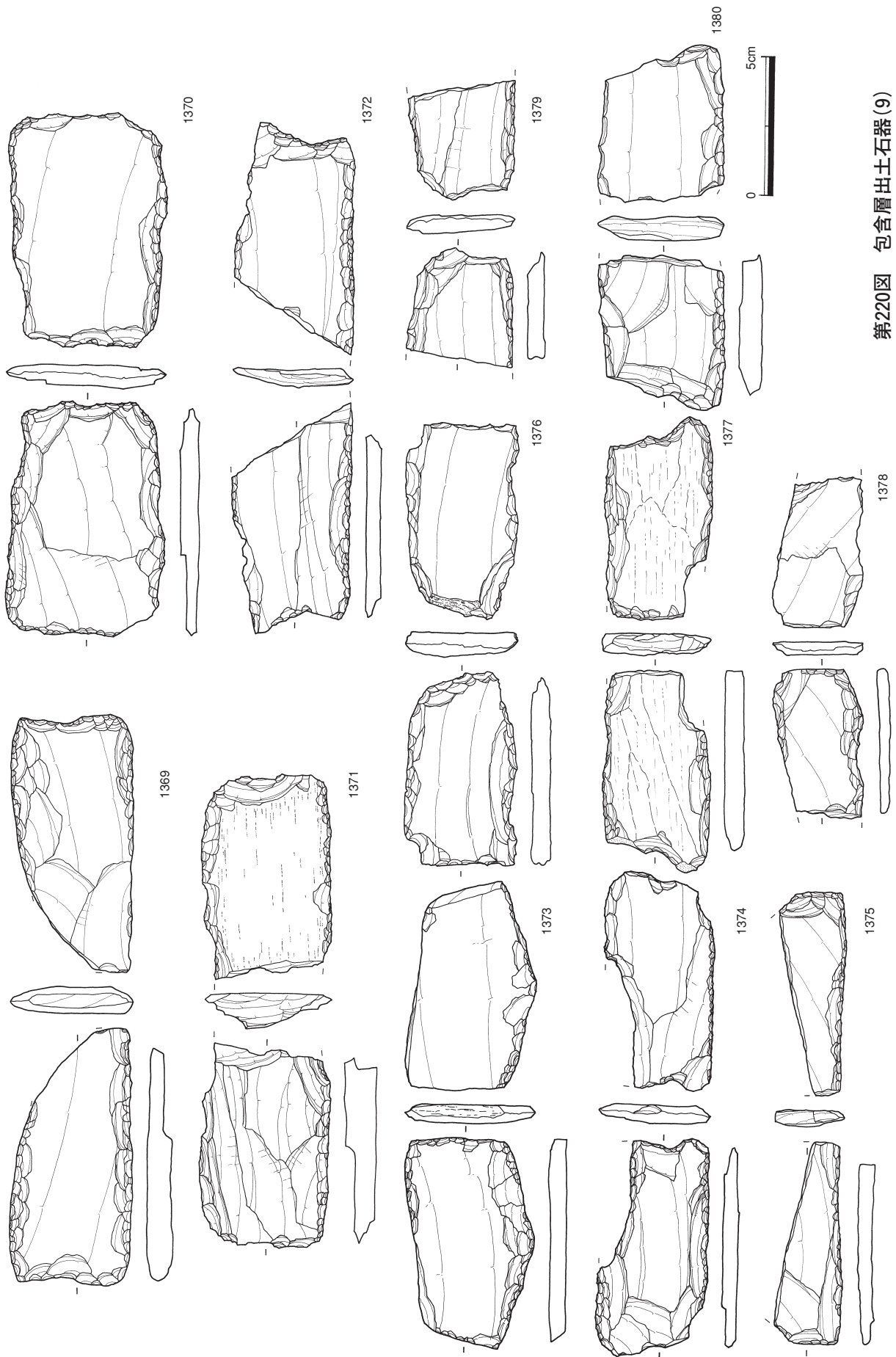


第218图 包含層出土石器(7)

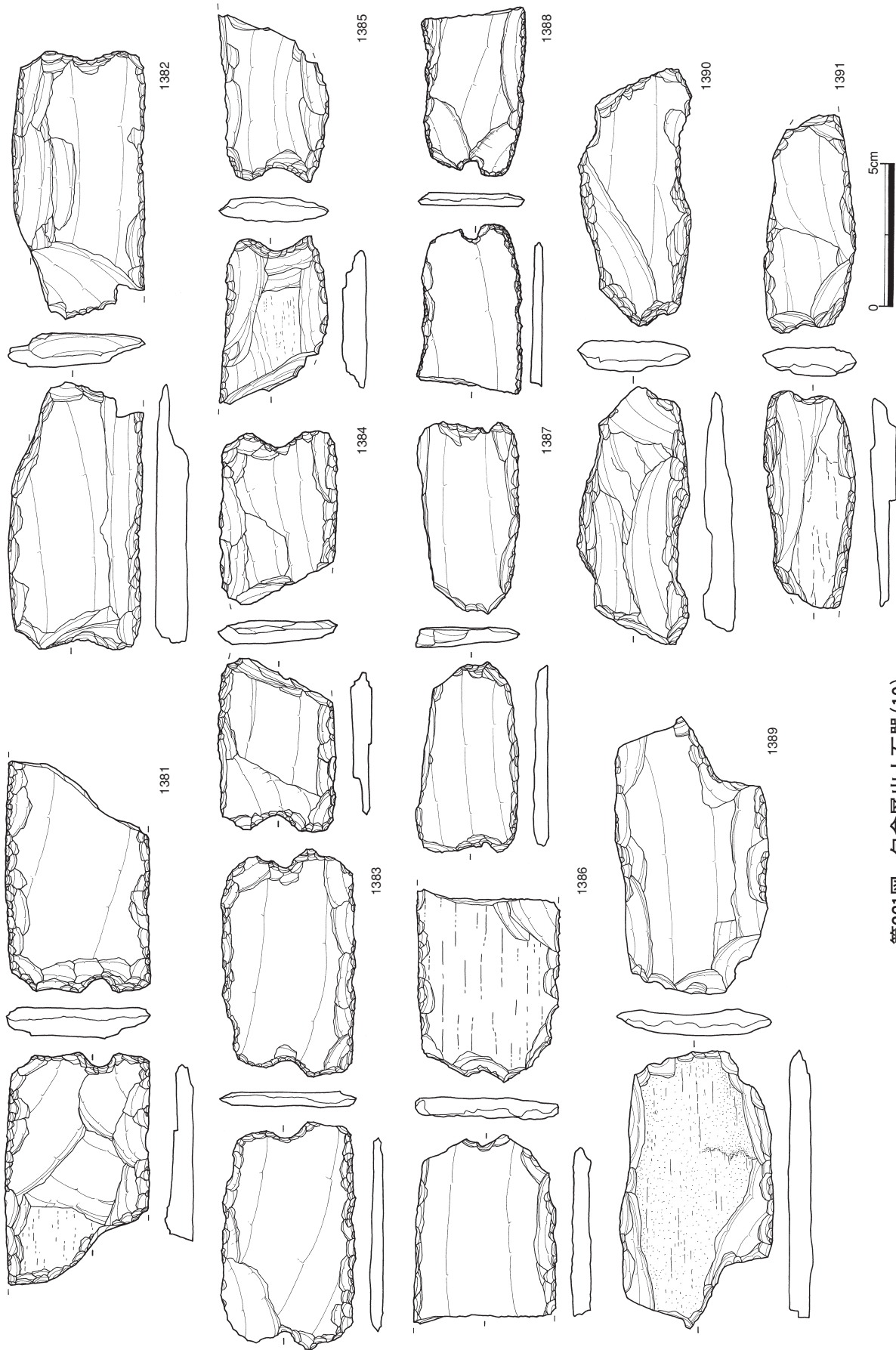


第219図 包含層出土石器(8)

1358・1359 — スクリートーンは擦痕



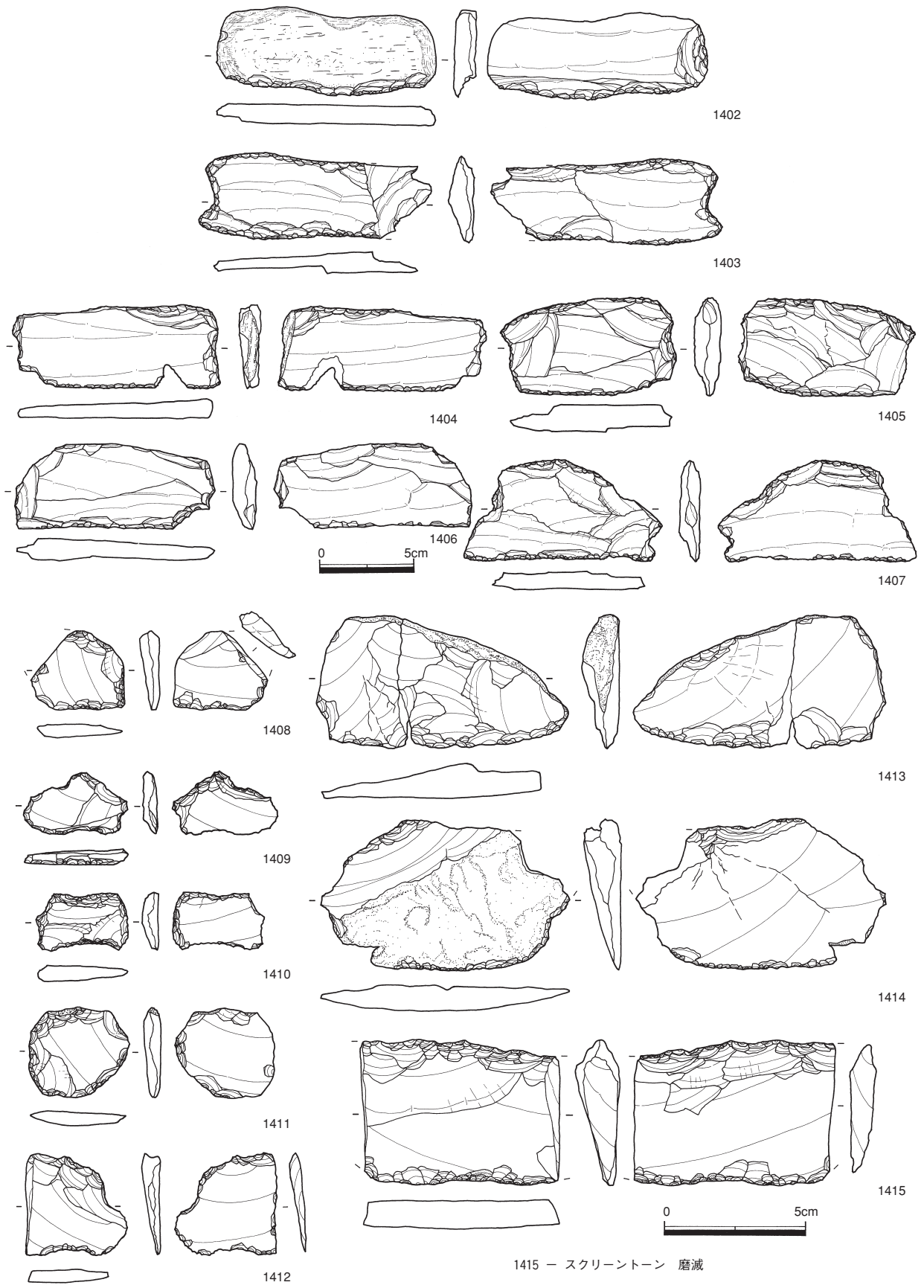
第220図 包含層出土石器(9)



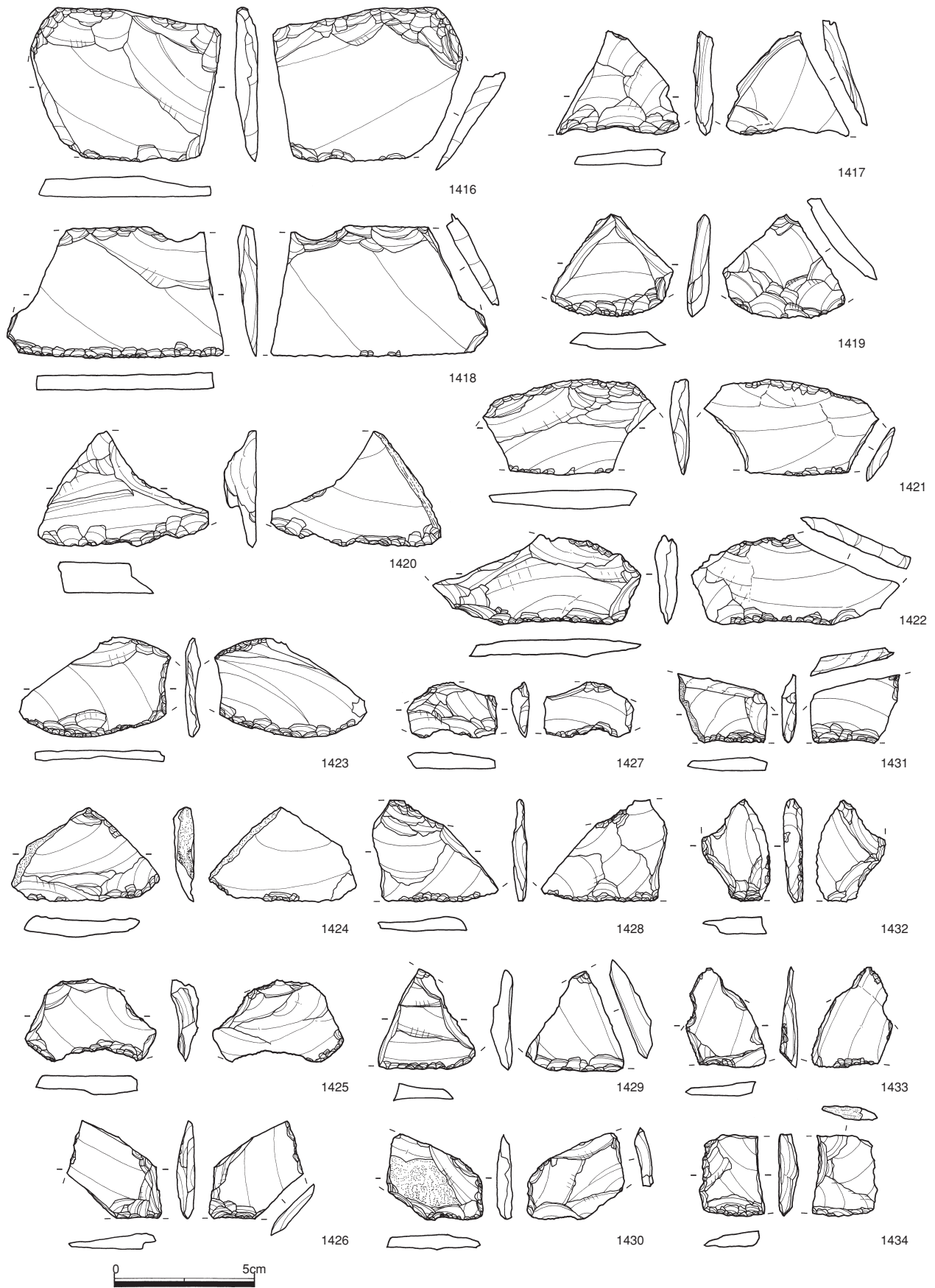
第221图 包含层出土石器(10)



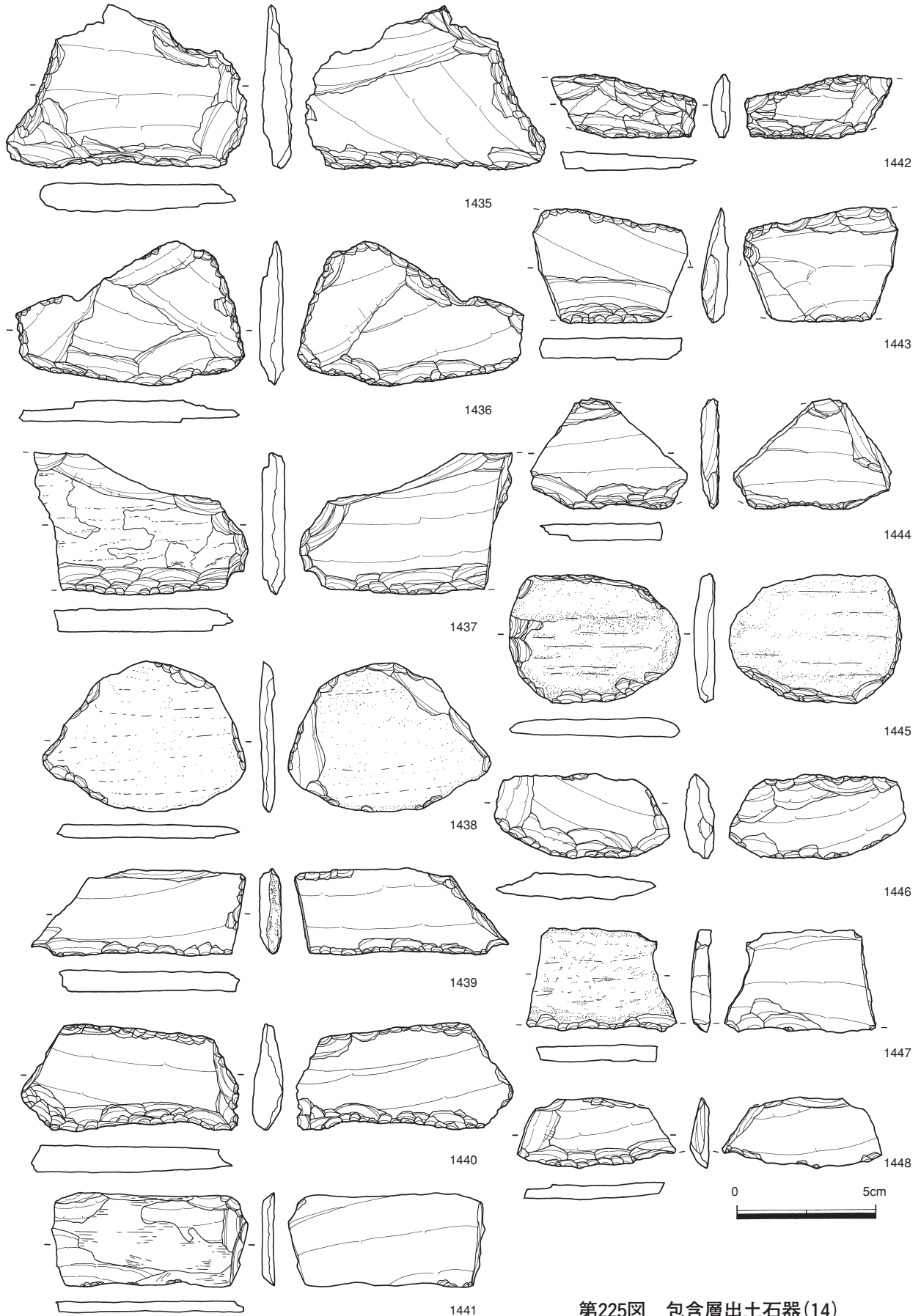
第222図 包含層出土石器(11)



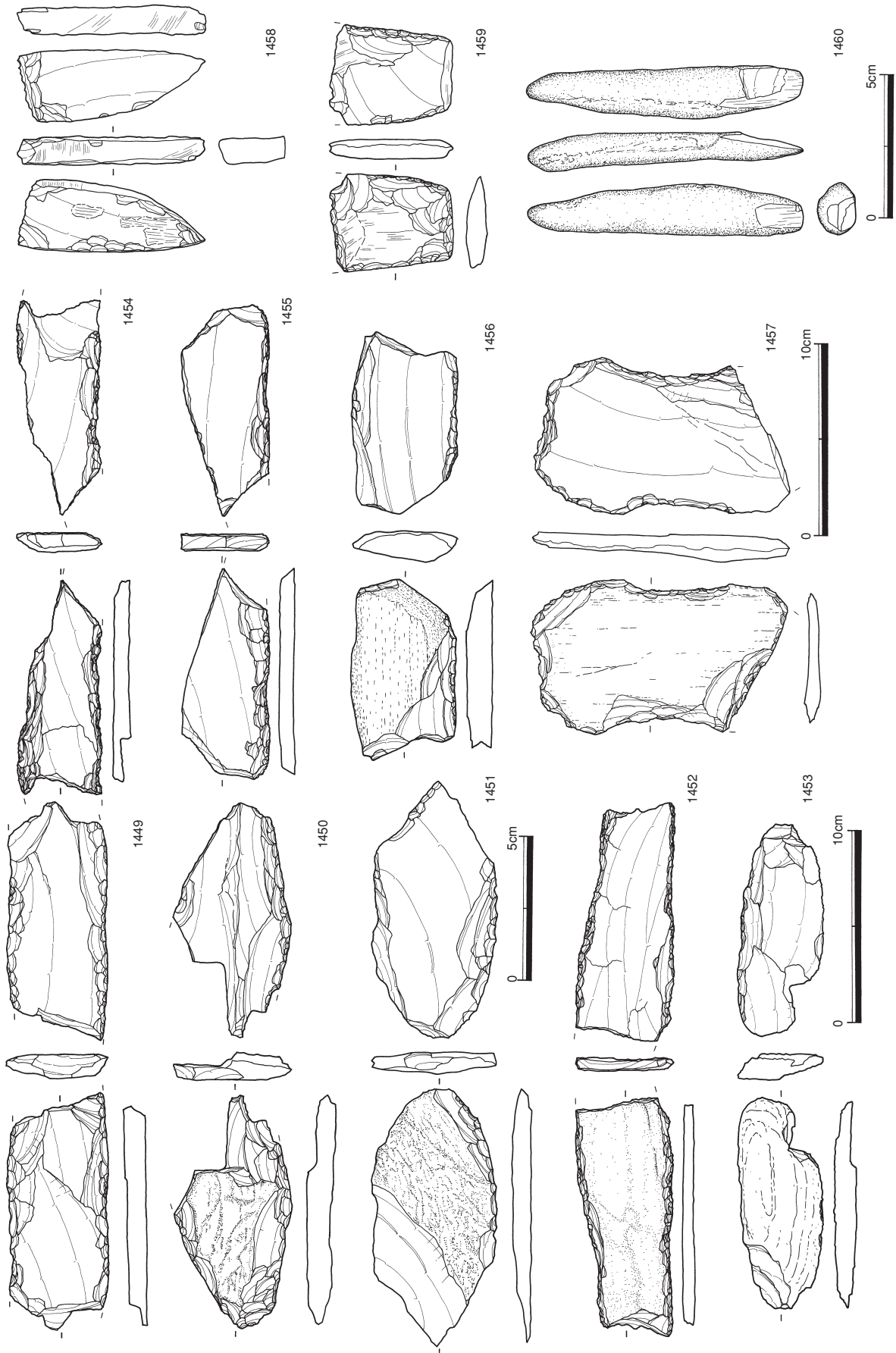
第223図 包含層出土石器(12)



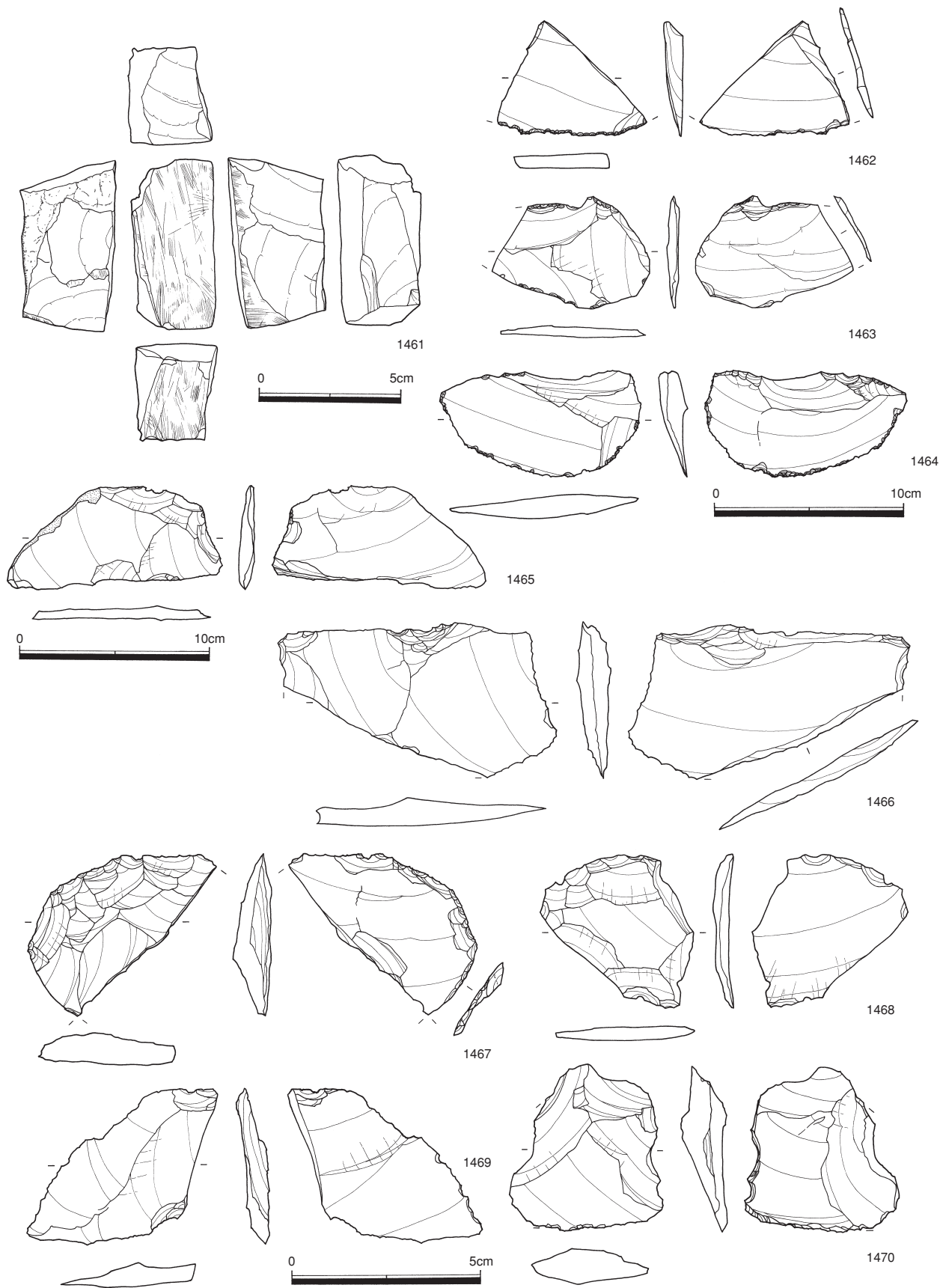
第224图 包含层出土石器(13)



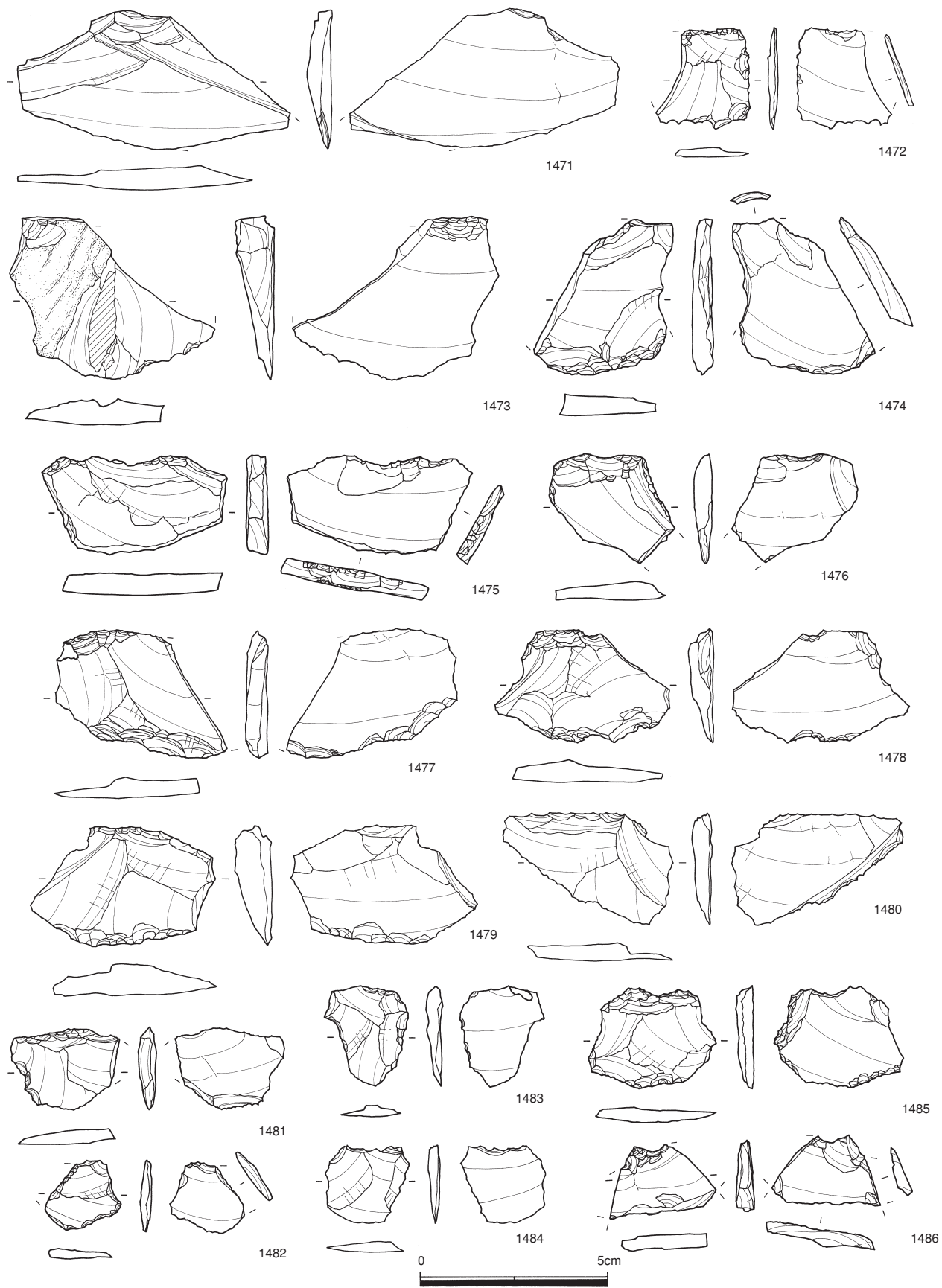
第225图 包含層出土石器(14)



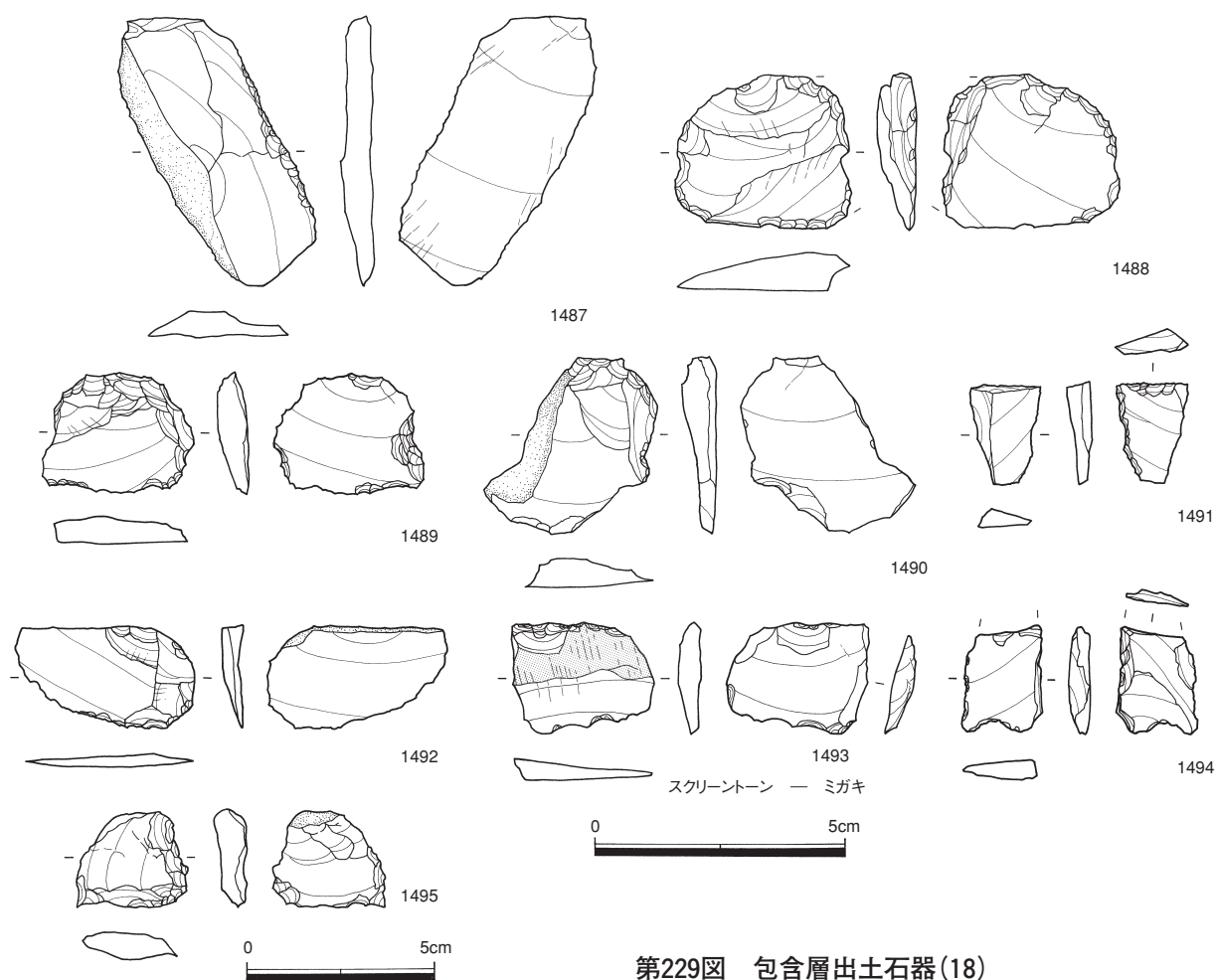
第226图 包含层出土石器(15)



第227图 包含層出土石器(16)



第228图 包含層出土石器(17)



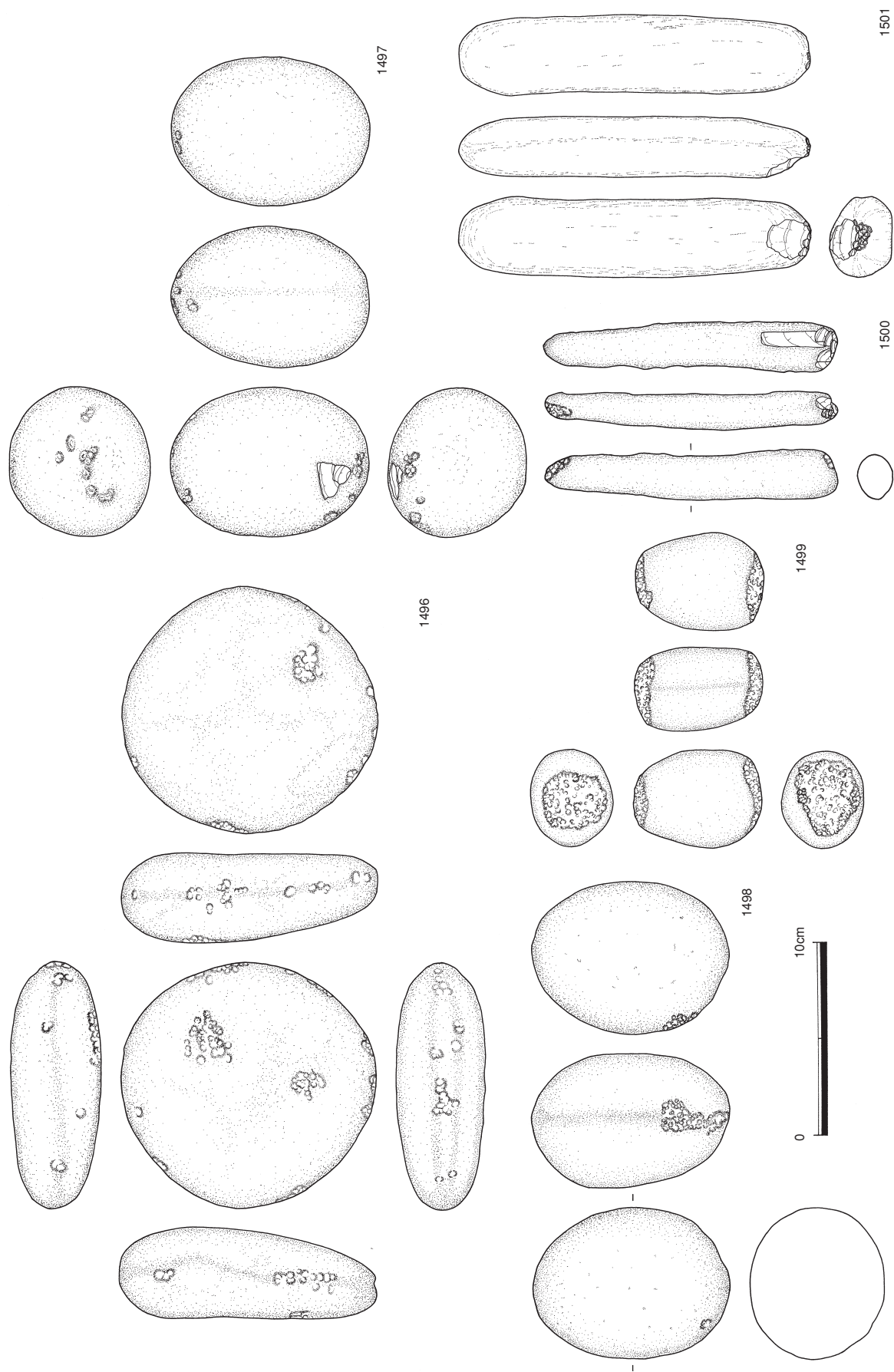
第229図 包含層出土石器(18)

として用いる。残り22点は結晶片岩を用い、詳細は砂質片岩17点（1435～1440・1442・1444～1451・1453・1456）・紅簾片岩2点（1443・1454）・泥質片岩3点（1441・1452・1455）となり、砂質片岩が圧倒的に多い。

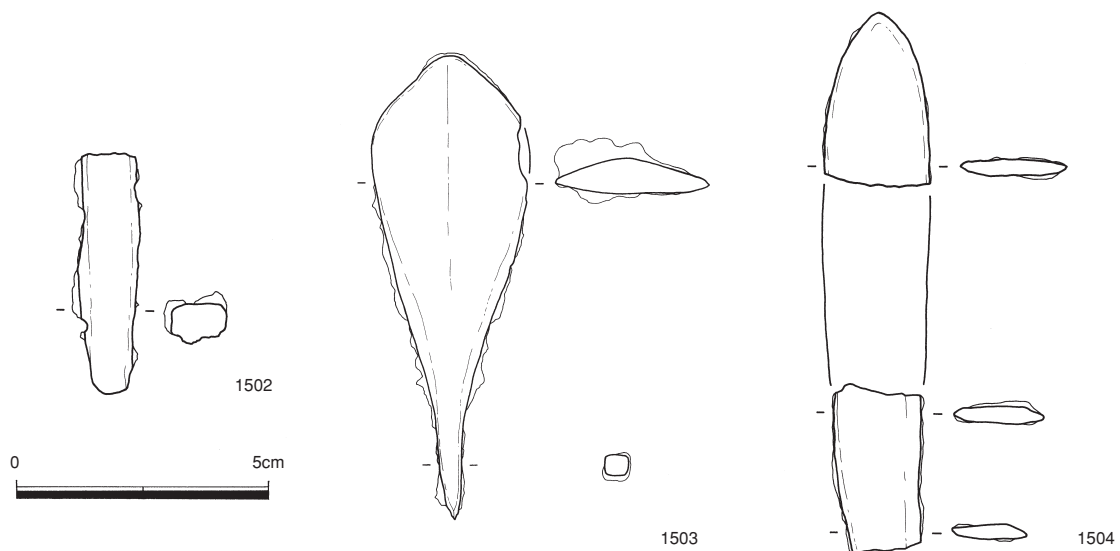
使用石材として、1416・1422・1438・1441は縦長剥片を、1445は砂質片岩の礫を用いる。残りの44点は、横長剥片である。刃部形態で凸刃を持つものは11点（1411・1413・1414・1419・1423・1429・1442・1446・1448・1450・1451）、凹刃を持つものは6点（1409・1410・1412・1425・1427・1439）、平刃を持つものは30点である。また1436は平刃・凸刃を、1440は平刃・凹刃をもつ。刃部数で複刃を持つものは、10点（1410・1411・1423・1430・1436・1438・1440・1442・1449・1452）である。1415は、翼状剥片を用いる。1441は、柱状片刃石斧を転用して削器にしている。

石鍬（第226図）

包含層から出土した石鍬は、1457だけである。泥質片岩を使用する。調査区内で出土した石鍬は、SA1004から出土した砂質片岩を用いる石鍬を含めて2点のみである。



第230图 包舍层出土石器(19)



第231図 包含層出土鉄製品

石斧（第226図）

石斧（1458～1460）は、3点図化できた。1458は、砂質片岩を用いる柱状片刃石斧である。1459は、泥質片岩を用いる扁平片刃石斧である。1460は、緑泥片岩を用いる円柱状石斧で完形である。

砥石（第227図）

砥石は、1461のみ図化できた。頁岩を用い、遺存状態は悪いものの表面・下部・右側縁部の3個所に磨面が認められる。

剥片（第227～229図）

剥片（1462～1495）は、34点図化できた。1495のみチャートで、他はすべてサヌカイトである。1462・1488・1489・1491・1495の5点は、R剥片である。1473では節理面が、1493では表面にミガキ痕が認められる。

敲石（第230図）

敲石（1496～1501）は、6点図化できた。1496・1497・1499は閃緑岩を、1498はハンレイ岩、1500は緑泥片岩、1501は砂質片岩を用いる。1496は下側縁部と表裏面に、1497は上側縁部と表面に、1498は右側縁部に、1499は上下側縁部に、1500は裏面と上下側縁部に、1501は下側縁部に敲打痕が認められる。

鉄製品（第231図）

鉄製品は、3点（1502～1504）図化できた。1502は遺存状態が悪いものの、断面方形を呈する鉄釘である。1503はほぼ完形の鉄鎌で、排土からの表採である。1504は、鉄製の小剣ないしは槍と思われる。推定長は、10.7cmを測る。

Ⅳ ま と め

今回の調査では、吉野川に面した平坦な低位段丘面上で縄文時代・弥生時代・鎌倉時代・室町時代・江戸時代の遺構および遺物を確認した。縄文時代の遺構は土坑1基のみの検出で、調査対象地内で住居跡が検出され、集落が形成されるようになるのは、弥生時代中期中葉以降となる。また調査地の西側で削平を受けながらも中近世に属する炭窯が検出されており、住居跡だけでなく生産遺構も確認した。

前述したように、遺構は時代ごとに確認された地点が微妙に異なる。弥生時代では調査対象地の東側で、鎌倉～江戸時代では西側で遺構の検出率が高い。この章では、調査対象範囲で認められる各時代の概要を述べて本報告のまとめとしたい。

縄文時代

縄文時代の遺構・遺物として、3区で検出した土坑SK1005と包含層から出土した土器片、および翡翠製大珠をあげることができる。ただ大珠は弥生時代後期後葉～終末期の住居跡から出土しており、出土状況が不明なことから、混入物あるいは転用されて装飾品等に使用されたのか判断することができなかった。包含層から出土した土器片は浅鉢で、形態・文様の特徴などから縄文時代後期の福田KⅡ式に比定できる。またSK1005からD字の凸帯を持つ深鉢とサヌカイト剥片、欠損した結晶片岩製石棒が出土し、縄文時代晩期に比定できる。

調査区内では確認された縄文時代の遺構は土坑1基のみだが、2km程離れた西側の沖積地上では縄文時代晩期の遺構・遺物が確認された大柿遺跡が、また吉野川を挟んだ対岸の三加茂町では晩期の稲持遺跡・毛田遺跡が所在する。硬玉製大珠を出土する遺跡はまれであり、集落の規模としてはほぼ例外なく環状の住居配置を持ついわゆる拠点集落から1遺跡1点程度の出土といわれていることから⁽¹⁾、調査区近隣に縄文時代の拠点集落が存在する可能性がある。

弥生時代

1 土器について

本遺跡出土の弥生土器は、中期の土器も認められるが大半が後期後葉～終末期に属する。中期の土器は中葉～後葉が主体を占めるが、前葉の土器も包含層からわずかに出土している。

資料数の希薄さから、弥生時代後期～終末期の土器をこれまで論じることができなかった吉野川上流域だが、昨今の調査件数を反映して、資料数の増加が認められる。最近の吉野川上流域の土器の研究では、田川憲の大柿遺跡での検討がある(田川2001)。竪穴住居から出土した土器を中心に4様相に分類を行い、その結果、これらの土器は弥生時代後期、終末期～古墳時代前期初頭の布留0式段階に比定でき、終末期後半段階と古墳時代前期初頭の間には、体部の球形化とそれに伴う底部の丸底化を一つの画期として捉えることができ、またその新要素をもつ土器と、前段階で認められる平底で体部が長胴化する土器が共伴することを指摘している。

また菅原康夫は、既出の資料を用いて上流域の後期～終末期の土器様相を素描し、後期前半段階までは中流域と同一様相を示すものの、後半以降は上流域独自の変化を遂げ、その同一土器様相を示す領域として、三野・三加茂町以西～池田町域を推測している(菅原2002)。そして土器様相を、次のように分類した。田川が様相2としてまとめた終末期前半は、鋸歯文を施した二重口縁壺が出現・定着し、

厚甕が盛行する。甕はタタキ技法が顕在化し、口縁部が肥厚して断面方形なのが、細く薄くなり、先を尖らせるように変化する。様相3としてまとめた終末期後半は、すべての器種にタタキ目が顕在し、体部が球形、底部が丸底化になるとする。両者とも、この編年試案については検討の余地ありとしており、現時点での過渡的なものとしている。両氏の土器様相に関する認識は大概で一致をみるが、体部が球形化し、底部丸底に変化する時期の認識は異なり、菅原はそれを終末期後半に、田川は古墳時代前期初頭として捉えている。二人の見解の異なる点に関しては、筆者は田川と同じ捉え方をしているので、体部球形化・底部丸底の傾向が認められない器種は終末期とした。

本遺跡から出土した器種は、壺・甕・鉢・高坏・手捏ね皿等である。包含層出土をあわせて、その出土量は甕(44%)・壺(26%)・鉢(17%)・高坏(13%)の順となる。また完形品は、壺・甕では出土はほとんどなく、鉢にやや多く認められる程度である。時期区分を行う際の指標として甕を選んだ場合、出土量が最多ではあるものの全体の器形が不明瞭であり、かつ田川の指摘にもあるように新旧の要素が混在し、分類は難しいといえる。よって、本遺跡の後期後葉～終末期の土器を分類するに際し、次の2点に留意した。まず、1点目は鋸歯文を施す二重口縁壺や小型丸底鉢など、その時期に出現する器種の抽出を行う。2点目は、完形品の割合が多い鉢を対象とする。また鉢は、底部の形状、特に壺・甕と比較して底部の丸底化が早い傾向が看取できるため⁽²⁾、同一遺構から出土した鉢のすべてが丸底を呈していた場合のみ、終末期後半とした。

両氏の編年試案と吉野川下流域の土器編年案を参照し、本遺跡の各遺構の所属時期をそれぞれ想定した。そして出土遺物から、竪穴住居を時期別に変遷したのが第2表である。

また本遺跡に搬入された土器は、胎土からその可能性のあるものを含めて16点あげることができ、出土した弥生土器の総数のうち1.7%の比率を占める。搬入土器の内訳は、壺4点(1・657・693・746)、甕13点(13・71・74・85・259・652・705・745・967・974・985・994・1057)、鉢1点(758)、高坏1点(714)である。搬入先は吉野川下流域・讃岐・土佐の3地域からで、吉野川下流域から広口壺2点、甕・高坏各1点、讃岐から壺1点・甕12点・鉢1点、土佐から壺1点が西原遺跡に持ち込まれたといえる。点数の上では、讃岐からの搬入品が大半を占める。SB1001出土の広口壺(1)・SK1286出土の広口壺(693)は東阿波型土器、SB1009出土の二重口縁壺(193)・SK1274出土の甕(681)の2点については、東阿波型土器の模倣品と考えられる。

2 石器について

西原遺跡で出土した石器のうち図化できたものは、総数570点を数え、総重量は約173.6kgを量る。使用石材は、吉野川を挟んだ南側を走る三波川帯の結晶片岩および蛇紋岩、またその北側を走る和泉帯の砂岩、および讃岐で産出されるサヌカイトなどが主体である。サヌカイト・ハンレイ岩以外は、遺跡の近隣で手に入れやすい石材である。

西原遺跡に持ち込まれたサヌカイトは、各遺構および包含層出土を併せて総重量5kgを量る。調査対象地内では、サヌカイト製石核の出土は認められず、製品・未製品・剥片のみである。図化できた石器は総数418点を数え、内訳として石鏃201点、楔形石器96点、削器34点、打製石庖丁7点、石錐13点、剥片63点、石剣3点、石鏃が圧倒的に多い。出土した石鏃のうち9割が製品で、未製品も含めて型式分類を行うと、凹基式89点、平基三角49点、有茎式20点、平基五角7点、凸基式7点、型式不明26点となり、凹基式が全体の44%、平基三角を含めると全体のほぼ7割を占める。西原遺跡とほぼ同時期の徳

第2表 竪穴住居一覧表

遺構	時期					出土遺物					住居構造					備考
	中期中葉	中期中葉	後期中葉	後期中葉	終末期後半	土器	輸入品	特記事項	石器	平面形態	長軸(m)	床面積	主柱穴	炉	備考	
SB1007	...								石鏃(凹)・砥石	円形	3.78	9.67	8 (多角形)	不整形 (伴2基)	EKの出土 遺物	
SB1010a	...					斜格子文・貼 付突帯壺		管玉、サスカイ ト出土量No.1	石鏃(平・凹・有)・楔・削 器・石苞丁・石斧・砥石	円形	6.21	17.96	5 (多角形)	なし		
SB1010b	...								石鏃(平・凹)	円形	3.17	7.41	なし	楕円形 (伴1基?)		
SB1011	...								石鏃(平・凹・五)・剥 片・石斧	円形	6.53	27.3	7 (多角形?)	楕円形2基・不 整形1基		
SB1005					凹線			石鏃(平)・剥片・石 鏃・柱状片刃	円形	4.49	13.81	4 (四柱穴?)	不整形		
SB1008								石鏃(平・凹)・石鏃・ 石苞丁	円形	7.6	36.66	19 (多角形)	楕円形 (伴2基)		
SB1014						凹線?			石鏃(凹・平)・楔・石 鏃・石苞丁・剥片	隅丸方形	4.87	15.06	4 (四柱穴?)	不整形		
SB1002									石鏃(凹)・砥石	円形	6.57	13.34	7(多角形+ 四柱穴?)	検出できず		
SB1003						手握ね皿			石鏃(凹・有・五)・石 苞丁	円形	5.57	21.13	4 (四柱穴?)	不整形		
SB1004						小型丸底鉢 (VI-2)			石鏃(平)・楔・剥・石 苞丁・石鏃・砥石・砥 石・石椀・石鏃	隅丸方形	7.34	29.73	多角形?	不整形 (伴2基?)		
SB1006									石鏃(凹・平・五)・楔・ 石苞丁・削器・剥片・ 砥石・砥石	円形	5.29	20.17	2?もしく は無し?	楕円形 (伴2基?)		
SB1009			手握ね皿	東阿波型土器 の模倣品あり	サスカイト出土 量No.2、 鉄製棒状工具	石鏃(平・凹・有・凸)・ 楔・石鏃・剥片・石苞 丁・砥石	円形(張 り出し)	8.93	55.92	6(5?) (多角形)	楕円形 (伴2基)		
SB1015						椀? (高坏)			石鏃(平・凹)・楔・石鏃・ 剥・石苞丁・削器・砥石・ 柱状片刃・砥石・台石	円形	5.72 (6.58)	33.04	6 (多角形)	不整形 (伴2基)		
SB1001					...	手握ね皿・小 型丸底鉢 (VI -3)	東阿波型土器 讃岐から輸入 土器	管玉	石鏃	円形	7.38	35.83	6 (多角形)	楕円形 (伴2基?)		
SB1012						鋸歯文			石鏃(平・五)・楔・剥 片	円形	5.55	19.71	4 (多角形)	不整形 (伴1基?)		
SB1013						細頸壺・小型 甕・椀? (高 坏)		管玉出土・翡翠 製大珠・土玉・ 鉄製品(穂積貝・ ノミ状工具)	石鏃(平・凹・有)・楔・ 剥・石苞丁・削器・扁 片片刃石斧・砥石・石 核(虎文岩)	円形(張 り出し)	8.94	58.86	17 (多角形)	不整形 (伴2基)		
SB1016						出土遺物無し				円形?	—	—	6 (多角形)	楕円形		
甲川 (大井)						椀相4 (布留0)										
菅原 (上流)						椀相3	椀相2	椀相1								
下流域	III	IV	V-1	V-2	V-3	V-4~ VI-1	V-5~ VI-1-2	V-1-2								

主体となる時期

島市矢野遺跡では、報告書に掲載されている石鏃の出土量は11点と少ないものの、出土比率から西原遺跡と同じように平基三角式・凹基式が主体の可能性はある。矢野遺跡の石鏃の少なさは、鉄器化への移行を反映している。西原遺跡では時期的な混入物の可能性があるため一概に対比できないが、鉄製品の出土量の少なさも考慮に入れると、矢野遺跡など吉野川下流域の集落と比較して鉄器化への移行は遅く、石器の使用比率が大きかったものと推測できる。

打製石庖丁は遺構および包含層併せて108点出土し、磨製石庖丁の出土は認められなかった。石庖丁を石材別に見るとサヌカイト製が7点、結晶片岩製が101点となり、9割を結晶片岩が占める。また結晶片岩をさらに詳しく分類すると、砂質片岩84点・紅簾片岩12点・泥質片岩4点・緑泥片岩1点となる。これらの結晶片岩は、西原遺跡のすぐ南側を走る吉野川の川原で採集できる。

削器は、遺構および包含層併せて63点出土した。石材別に見ると、サヌカイト製が35点、結晶片岩製が28点となり、ややサヌカイトの使用が多いといえる。サヌカイトは片岩より鋭利であり、削器の道具としての機能を考えると、打製石庖丁よりサヌカイト使用量が多いのは妥当と思われる。結晶片岩をさらに分類すると、砂質片岩22点・紅簾片岩3点・泥質片岩3点となり、打製石庖丁と似た傾向を示す。

石斧は、遺構および包含層併せて15点の出土である。このうち、共伴遺物より中期中葉～後葉に比定できる遺構から、自然礫に敲打痕・研磨痕が認められる未製品の石斧が、後期以降では柱状片刃および扁平片刃石斧が出土した。完形品の出土は、柱状片刃および扁平片刃石斧では認められず、包含層から出土した円柱状片刃石斧のみである。石斧は石材に閃緑岩・ハンレイ岩を、柱状片刃および扁平片刃石斧は主に砂質片岩を用いる。

3 竪穴住居の様相

調査対象地内で検出した竪穴住居16軒のうち、弥生時代中期中葉に比定できる住居は3軒（SB1007・1010ab・1011）、中期後葉は1軒（SB1005）、後期前葉は2軒（SB1008・1014）、後期後葉～終末期前半は6軒（SB1002～1004・1006・1009・1015）、終末期後半は3軒（SB1001・1012・1013）を数える。これは、出土遺物の下限から想定して主体とした時期を表す。時期別に見ると、中期中葉～後期前葉と後期後葉～終末期の二つに大別することができ、本遺跡では終末期に住居数の増加が認められ、一つの画期として捉えることができる。

竪穴住居の平面には二形態あり、円形13軒、隅丸方形2軒を数え、円形住居が主体といえる。出土遺物から、隅丸方形2軒のうちSB1014は後期前葉に、SB1004は終末期前半に比定でき、同時期に円形住居も存在する。調査区内では、終末期後半に属する方形住居は未検出である。

住居の規模から差異を求めると、床面積では20m²未満の住居が6軒、20～40m²未満が7軒、40m²以上が2軒を数える。しかし、調査範囲の制限や攪乱などによって調査に制限があり、床面積で規模の大きさをより反映させるには難しいといえる。よって長軸で検討すると、5m未満が2軒（SB1005・1014）、5m以上～7m未満が7軒（SB1002・1003・1006・1010a・b～1012・1015）、7m以上が5軒（SB1001・1004・1008・1009・1013）を数える。7m以上の住居のうち、9m近くあるのがSB1009・1013の2軒である。これを時期別にみると、中期中葉に比定できる住居3軒のうち、SB1007の規模は不明瞭だが、5m以上～7m未満が主体と思われる。出土遺物では、SB1010a・bはサヌカイトの出土量が一番多く、管玉も保有する。中期後葉～後期前葉に比定できる住居3軒のうち、隅丸方形であるSB1014とSB1005は長軸5m以下、SB1008は長軸7m以上となる。後期後葉～終末期前半に比定できる住居6

軒のうち、SB1002・1003・1006・1015の4軒が5～7m未満、SB1004・1009の2軒が7m以上を測り、なかでもSB1009は8mを越える。7m以上を測る2軒は、他の住居と平面形態に異なる点が認められる。SB1007は隅丸方形、SB1009は南東部に張出部をもつ。また出土遺物にも差が認められ、SB1009はサヌカイト保有量がSB1010abに次ぎ二番目であり、同時期では最多の出土量となる。また鉄製棒状工具・東阿波形土器の模倣品と思われる土器が出土している。終末期後半に比定できる住居3軒のうち、SB1012以外の2軒は7m以上を測り、SB1013は9m近い。またSB1009ほど明確ではないが、SB1013は南西部に張出部と考えられる突出部を持つ。この7m以上を測る住居2軒は出土遺物にも差が認められ、SB1001は管玉を保有し、東阿波型土器・讃岐からの搬入土器が認められた。また、SB1013では管玉・土玉・翡翠製大珠の装飾品、蛇文岩の石核、および穂積具・ノミ状工具と思われる鉄製品が出土している。矢野遺跡では、後期後半以降、住居の規模によって鉄器が偏在する傾向があり、また床面積が40m²以上の住居では鉄の保有率が高くなる傾向が認められている⁽³⁾。本遺跡でも、規模によって鉄器が偏在する可能性がある。

住居の内部構造では、ほぼすべてに主柱穴および炉を確認した。しかし周壁溝・ベッド状遺構は確認できず、貼床はSB1014で該当すると思われる層を確認したに過ぎない。主柱穴は明瞭なものとは推定困難なものがあり、概ね多角形が主体と想定できる。明らかに四本柱構造と想定できるのが、平面が隅丸方形をなすSB1014のみである。炉の平面形態は楕円形あるいは不整形を呈し、主柱穴間および住居の平面から見ると、ほぼ中央あるいは若干ずれて位置する。住居の大半が、炉を1基伴うのに対し、SB1011のみ3基据え付けていた可能性がある。

西原遺跡では、平面形態が円形を呈する住居のなかで、時期が下るにつれて大型化、あるいは大型住居の占める比率が増加する傾向が看取できる。この傾向は、同時期の矢野遺跡でも認められる。また包含層出土を併せても鉄器の出土量は少なく、鉄器化への移行は遅かったと思われる。搬入土器では、讃岐の土器は弥生時代中期中葉～終末期に、東阿波型土器を含む吉野川下流域の土器は、模倣品を含めて後期後葉～終末期の遺構からその出土が認められる。

徳島では、住居の平面形態に関する最近の研究として、岡山真知子（岡山2000）の鮎喰遺跡での検討がある。それまでに報告された吉野川流域の弥生時代後期後半～古墳時代初頭までの竪穴住居について集成を行い、次のようにまとめた。徳島では、円形から方形へ住居の平面形態が転換する時期は地域によって多少差が認められ、吉野川下流域の黒谷川郡頭遺跡が現段階で最も早く中期中葉に、吉野川上流域が最も遅く後期以降に方形住居が認められるとした。また鮎喰川流域では、中期後葉に画期を求めるものの、集落単位で異なると予想している。そして古墳時代初頭には平面形態が方形に統一され、4本柱構造となり、規模も縮小化を辿る、としている。また住居の規模では、小型化への傾向、あるいは大型住居の減少傾向が認められ、特に中期後半に多く認められた80m²近い住居は、吉野川上流域を除いて認められない、とした。

また住居に附設する張出部は後期初頭前後に出現し、終末期に盛行するが、古墳時代初頭まで残るとする。存続時期は地域によって差異があり、上流域は後期後葉までの可能性が高いとしている。張出部の機能については、当初は住居の一部を拡張しただけで機能的側面を持たない例があるとしつつも、ベッド状遺構の出現により入口的機能に集約されたとする。そして、張出部を持つ住居には、匂玉製作遺構や水銀朱精製関連遺構など特殊な性格の住居に多く認められるとしている。

西原遺跡では、2軒の住居にこの張出部と考えられる突出部が附設される。この2軒の住居は、規模

および出土遺物に他の住居と差異が認められる。特殊な性格を持つとは考えがたいものの、他の住居とは異なった性格を持つ可能性はある。

4 集落構成について

調査区内では、竪穴住居16軒、掘立柱建物3軒、土坑・柱穴・溝等で構成される。時期別にみると、中期中葉～後期前葉と後期後葉～終末期の二段階に大別することができる。

掘立柱建物3棟は、出土遺物が小片のために所属時期を確定できなかった。しかしSA1011に関しては、切り合い関係にあるSK1253の出土遺物からある程度推測できる。SK1253では、図化できていないものの口縁端部を外上方へ拡張させ、口縁部が直立する高坏の小片が出土している。吉野川上流域の編年案が確立されていないために時期が前後する可能性もあるが、この形状の高坏の存続期間を現状では後期中葉までとしており、SA1011の所属時期をこれ以前としたい。

第一段階の中期中葉～後期前葉では、竪穴住居は調査対象地の北側、SD1016が位置する5-A区に構築され、同時期にはほぼ住居2～3軒が存在したと推定できる。そしてこれらの住居の南側、5-B区ではSA1011が構築され、土坑や柱穴が点在する空間域が広がる。

第二段階の後期後葉～終末期では住居数の増加が認められ、空間域であった5-B区に住居が構築されるようになる。調査区内において、この段階に比定できるような掘立柱建物は確認できていない。またこの段階を、二つに分けることができる。後期前葉～終末期前半の6軒の住居配置は、SB1002・1003が近接するもののほぼ15～20m間隔で5軒の住居が位置する。また、出土遺物からこの時期に比定できるSX1004は、炉が確認できなかったために竪穴住居から不明遺構に変更した遺構だが、このSX1004も含めるとこれら住居群の中心に土坑や柱穴の点在する空間域が広がる。終末期後半では、前段階に住居が認められなかった空間域にも住居が構築されるようになる。またこの住居配置は、後期後葉～終末期の土器の編年案が確立し、時期がより細分化されれば、異なる可能性はある。

これまでの徳島県内の事例で、後期前葉までは居住区の中に倉庫群もしくは貯蔵施設が設置されていたことが確認されている⁽⁴⁾。本遺跡で確認された居住域の範囲を確定することはできないが、中期中葉～後期前葉の集落構成を見る限り、上記に該当する可能性はある。

5 西原遺跡と足代東原遺跡の積石墓群

足代東原遺跡は、昭和56年度（1981年）に吉野川北岸農業水利事業の幹線水路埋設工事に伴い調査が行われた。遺跡は、黒原谷川に形成された扇状地の標高83m前後の扇中央部に位置し、西原遺跡の北東約500mに所在する。前方後円形をした積石墓と36基以上の円形の積石墓が検出され、弥生時代後期後半～庄内式併行段階の集団墓地であることが確認された。そしてこれらの積石墓群は後期中葉に出現し、前方後円形の積石墓は終末期前半に築かれた、と想定している（菅原2002）。墓域は調査範囲の制約で南北の拡がりを確認できないものの、東西約180mの範囲に形成される。墓群のほぼ中央に、突出部が未発達な形態を示す前方後円形状の積石墓（1号墓）が構築され、その周囲を36基以上の円形積石墓が取り巻く。調査が行われていないものの、前方後円形状の積石墓の埋葬施設は、緑泥片岩板石の存在から組合式箱式石棺の可能性が考えられている。また、葬送儀礼に関与したと考えられる土器溜まりがいくつか確認され、そのうちの一つから、造形的特徴が縄文時代後・晩期に出土するものと共通する猪型土製品と、猿型土製品が出土した。また積石墓の中に副葬遺物として石鍬・石庖丁・打製石斧が認めら

れることから、この積石墓群を形成した集団の生業基盤に畑作の可能性を挙げている（菅原1982・1988）。

足代東原遺跡の出土土器のうち、公表されている資料の底部はすべて平底である。しかし体部の傾きから丸底に推定できるものがあり、また体部が球形化している壺もしくは甕が存在する。西原遺跡出土の土器のうち、球形化する体部を持つのはSB1013出土の甕のみで、平底を呈する。出土遺物から両遺跡の時期的な並存を確認できたが、足代東原遺跡出土土器のなかに西原遺跡出土土器より後出する要素を持つものがある。新要素を持つ土器の比率および出土遺構、そして積石墓群の主要な時期など、今後の詳細な報告を待ちたい。

6 まとめ

本遺跡では、弥生時代中期中葉～終末期の竪穴住居や土坑を確認した。調査対象地に住居を構築し始めたのは弥生時代中期中葉以降で、後期半ばにはそれが一端途切れるものの、後期後葉～終末期前半には増大して再度築かれる。後期後葉～終末期において、住居数が増加する傾向は矢野遺跡でも認められる。またこの時期、西原遺跡では鉄製品、東阿波形土器・吉野川下流域からの搬入品が認められるようになる。これまでの調査において、吉野川上流域に位置する遺跡で鉄製品の出土が認められるのは8遺跡を数え、最古は中期に比定できる土取遺跡・丸山遺跡である。他の6遺跡は、西原と同様に後期後葉～終末期を中心とする。⁽⁵⁾

これまでの住居規模に関する研究で、吉野川上流域を除いた地域では、時期が下るにつれて大型住居の減少傾向が認められるとした（岡山2000）。一方で、後期以降では60～80m²にかかる大型住居の増加が認められるとし、また吉野川上流域ではおしなべて住居規模が大きい、とした論もある（菅原2002）。しかし、平面形態が円形から方形への転換時には規模の縮小が認められる、とした点は両者ともに一致する。今回の報告では、住居の遺存状態にも反映されるが、西原遺跡の円形住居は時期が下るにつれて大型化、あるいは大型住居の占める割合が増加する傾向が看取できる。またこの傾向は、同時期の吉野川下流域に位置する矢野遺跡でも認められる。また西原遺跡では隅丸方形の住居を2軒確認しているが、そのうちの1軒は後期前葉、もう1軒は後期後葉～終末期前半に比定している。調査対象地内では隅丸方形住居の出現後、方形住居の増加は認められず、円形住居の大型化が認められるようになる。

徳島県全域の住居の集成を行っていないので、雑駁な見解となるが、円形住居に関しては時期が下るにつれて（後期後葉～終末期をピークに）大型化し、それは吉野川上流域だけの傾向ではない可能性がある。これについては、機会を改めて論じてみたい。また、西原遺跡のなかで最大規模の住居はSB1009・1013だが、上流域の他遺跡（池田町ウエノ遺跡・三好町大柿遺跡など）では直径10m前後を測る住居が存在する。また住居数の増加および出土遺物から、弥生時代後期後葉～終末期前半に一つの画期を求めることができる。現段階では、足代東原遺跡の積石墓群は後期中葉に出現し、前方後円形の積石墓は終末期前半に築かれたとされ、この画期が前方後円形の積石墓の構築に直接結びついたかどうかは不明だが、その可能性は示唆しておきたい。しかし、SB1009・1013は遺物組成および住居の規模が調査区内の他の住居とは異なっているものの、規模では他の上流域に分布する住居の中で際だって大きいとはいえない。集落内での住居の位置づけ、性格など検討課題は存在するものの、西原遺跡の住人をこの積石墓群を築いた母集団の一部として捉えたい。また足代東原遺跡では後出する要素を持つ土器が出土しており、西原遺跡ではその要素を持つ土器の出土は非常に少ない。また東へ500m程離れた吉野川沿いに

東原遺跡が所在し、弥生時代の遺構・遺物数は少ないものの、包含層から体部球形化・底部丸底を呈する壺が出土している。よって、調査区外にその時期の遺構の拡がりを想定したい。

鎌倉・室町時代

鎌倉・室町時代の遺構として、掘立柱建物10棟、土坑32基、柱穴136基・集石遺構1基を確認した。これらの遺構は4-A・B区を中心に検出され、掘立柱建物は4-A区で多く認められる。上記以上に掘立柱建物跡を復元することはできなかったが、柱穴が密集して検出されたことから幾度か立て替えを行った可能性を想定できる。建物は2間×1間、ないし1間×2間が主流で、床面積は平均で12.7m²を測る。庇を付随していたと考えられる建物は、2棟復元することができた。以上のことから、調査区内では小規模な建物が数棟築かれていたことが想定される。

遺構の出土遺物は、土師質土器杯・小皿・鍋・釜・播鉢・脚部、須恵質土器碗をあげることができる。出土した杯は体部が直線的に外上方に開き、器高がやや低い。杯・小皿に認められる底部切り離し技法はすべて回転ヘラ切りで、出土遺物に回転糸切りは認められなかった。羽釜は口縁部が内傾し、鏝部が短く形骸化している。播鉢は口縁端部が内傾し、円通寺遺跡分類の播鉢C類にあたる。杯・羽釜の形態から、遺構の主体となる時期は15～16世紀と思われる。

江戸時代

江戸時代の遺構は、鎌倉・室町時代の遺構と同じように4-A・B区を中心に暗渠と考えられる溝1条・土坑7基・柱穴18基・窯7基・灰原9基・不明遺構1基を検出した。攪乱扱いなどにより調査対象外とされたものもあり、本来の遺構数はもう少し多いと思われる。柱穴は掘立柱建物を構築するような並びは認められなかったが、鎌倉・室町時代に引き続き集落域であったと考えられる。また調査区西側で検出した窯および灰原は遺存状態が悪く、窯の平面形態は不整形ないしは長方形を呈する。遺構検出状況から、ほぼ7基確認できた窯のうち4基に、壁面では認められなかったが床面上に被熱痕跡を確認した。被熱痕跡以外に、付随すると思われる遺構内遺構は確認できなかった。

西原遺跡の西側に位置する円通寺遺跡では、開発に伴う炭窯群が確認されており、これらの一部かと想定されたが、出土遺物から同時期の可能性はないと思われる。

(注)

- (1) 栗原義明 1994
- (2) 田川憲氏の御教授による。
- (3) 栗林誠治 2002
- (4) 菅原康夫 2002
- (5) 前掲注(3)と同じ

引用・参考文献

- 上田秀夫 「14～16世紀の青磁碗の分類」『貿易陶器研究』No.2 1982
- 岡山真知子 「V考察 1 竪穴住居の様相」『鮎喰遺跡－徳島県立城西高等学校施設新築工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告－』徳島県埋蔵文化財センター調査報告書 第26集 2000 徳島県教育委員会他
- 石尾和仁 『ウエノ遺跡－池田警察署庁舎建て替え工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書－』徳島県埋蔵文化財センター調査報告書 第22集 1998 徳島県教育委員会他
- 小泉信司 『四国縦貫自動車道建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告25 東原遺跡』 徳島県埋蔵文化財センター調査報告書 第50集 2004 徳島県教育委員会他
- 近藤 玲他 『矢野遺跡（I） 一般国道192号徳島南環状道路改築事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書』 徳島県埋蔵文化財センター調査報告書 第33集 2002 徳島県教育委員会他
- 栗林誠治他 『四国縦貫自動車道建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告18 大柿遺跡』 徳島県埋蔵文化財センター調査報告書 第37集 2000 徳島県教育委員会他
- 栗林誠治 「V・5 徳島における導入期鉄器の様相」『矢野遺跡（I） 一般国道192号徳島南環状道路改築事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書』 徳島県埋蔵文化財センター調査報告書 第33集 2002 徳島県教育委員会他
- 栗島義明 「用語編 硬玉製大珠」『縄文時代研究事典』 1994 東京堂出版
- 菅原康夫 『日本の古代遺跡37 徳島』 1988 保育社
- 菅原康夫 「41 徳島県足代東原遺跡」『日本考古学協会 年報35』 1982年度版 日本考古学協会
- 菅原康夫 「第1編 徳島の考古学－成果と展望－ 弥生時代」『論集 徳島の考古学』 2002 徳島考古学論集刊行会
- 田川 憲 「大柿遺跡出土の弥生時代後期から古墳時代初頭の土器について」『四国縦貫自動車道建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告18 大柿遺跡』 徳島県埋蔵文化財センター調査報告書 第37集 2000 徳島県教育委員会他
- 辻 佳伸他 『四国縦貫自動車道建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告15 円通寺遺跡』 徳島県埋蔵文化財センター調査報告書 第28集 2000 徳島県教育委員会他
- 森田 勉 「14～16世紀の白磁碗の分類」『貿易陶器研究』No.2 1982

報告書抄録

ふりがな	にしはらいせき							
書名	西原遺跡							
副書名	四国縦貫自動車道建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書							
巻次	26							
シリーズ名	徳島県埋蔵文化財センター調査報告書							
シリーズ番号	第51集							
編著者名	菅原康夫・大北和美							
編集機関	財団法人徳島県埋蔵文化財センター							
所在地	〒779-0108 徳島県板野郡板野町犬伏字平山86番2 TEL088-672-4545							
発行年月日	西暦2004年9月30日							
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		北緯 。' "	東経 。' "	調査期間	調査面積	調査原因
		市町村	遺跡番号					
にしはらいせき 西原遺跡	とくしまけん みよし 徳島県三好 ぐん みよしちやうおお 郡三好町大 あざあしるあざにし 字足代字西 はら ほか 原770他	36482	—	34°1'46"	133°51'57"	19960402～ 19970331 19970403～ 19970630	10,080m ²	四国縦貫自 動車道建設 に伴う発掘 調査
	種別	主な時代		主な遺構		主な遺物		特記事項
	集落	縄文時代晩期 弥生時代中期～終末期 鎌倉時代 室町時代 江戸時代		掘立柱建物・竪穴住 居・溝・土坑・不明遺 構		縄文土器、弥生土器、 土師質土器、須恵質土 器、輸入磁器、国産陶 磁器、近世土師質土 器、鉄製品、銭貨、石 器、玉類(管玉・大珠)		
	窯 その他の生 産遺跡	中近世		炭窯・炭溜まり		土師質土器、国産陶磁 器		

徳島県埋蔵文化財センター調査報告書 第51集

四国縦貫自動車道建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告 26

発行日 平成16（2004）年9月30日

編集 財団法人 徳島県埋蔵文化財センター
〒779-0108 徳島県板野郡板野町犬伏字平山86番2
TEL (088) 672-4545
FAX (088) 672-4550

発行 徳島県埋蔵文化財研究会

印刷 株式会社 松下印刷